松山市文化財調査報告書 125

市道中村桑原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

枝松遺跡

－７次・８次・９次・10次調査－

２００８

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

松山市文化財調査報告書 125

市道中村桑原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

枝 松 遺 跡

－７次･８次･９次･10 次調査－

２００８

松山市教育委員会

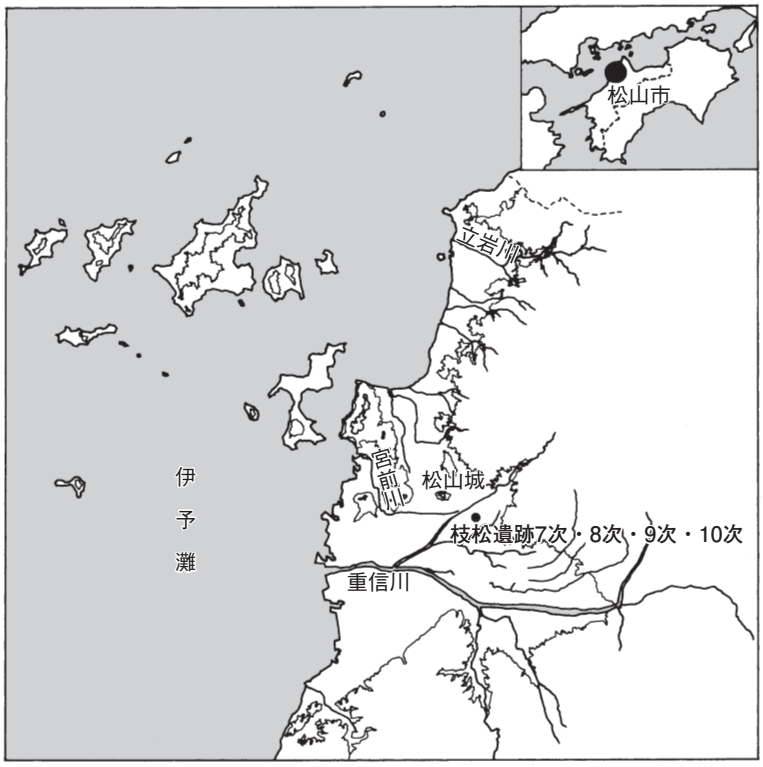
財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

市道中村桑原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

枝松（えだまつ）遺跡

－７次･８次･９次･10 次調査－



２００８

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版１　調査地遠景（航空写真、真上より）

巻頭図版２　枝松遺跡８次調査地 SB201 出土遺物

序

本書は、平成 14 年度から平成 16 年度までに、市道中村～桑原線 2 工区の道路改良工事に伴って実施した枝松遺跡 7 次調査～ 10 次調査の埋蔵文化財調査報告書です。

今回の報告書は、平成 17 年度に刊行しました 1 工区の報告書に引き続き市道中村桑原線関連遺跡としては 2 冊目となるものです。1 工区の調査では束本遺跡 6 次調査で弥生時代後期の円形と方形の竪穴住居址 2 棟が見つかり、桑原遺跡 4 次調査では弥生時代後期～古墳時代初めにかけての流路から大量の遺物が出土するなど貴重な資料を得る事ができました。

本書で報告する枝松遺跡 7 次調査～ 10 次調査からも弥生時代～中世までの遺構・遺物が発見されました。特に枝松遺跡 8 次調査の弥生時代後期の竪穴住居址からは、大量の土器が出土し、その中には松山市で類例が少ない祭祀に使われていたと思われる皮袋形土器があり、注目される資料といえます。その他、枝松遺跡 7 次調査の 1 区で見つかった溝からは、弥生時代～古墳時代初頭の土器・石製品など当時の生活が伺い知れる大量の遺物が出土しました。

本書の刊行にあたり、当遺跡の発掘調査についてご指導・ご協力を頂きました関係各位、ならびに関係機関に厚くお礼申し上げます。

本書が埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、さらには文化財保護、生涯教育の向上に寄与できることを願っております。

平成 20 年 3 月 31 日

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長　**中　村　時　広**

例　言

1．本書は、松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成 14 年 11 月～平成 16 年 12 月までに実施した松山市道中村桑原線 2 工区建設に伴う事前調査報告書である。

2．遺構の実測は、担当調査員および、國田克彦、武智洋明、峰本幸代、広田美知子、原見慶太、高橋　裕が行った。遺構の撮影は、担当調査員と大西朋子が行った。

3．遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居：SB、溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP、自然流路：SR、掘立柱建物址：掘立、倒木址：倒木である。

4．本書に関わる図面の作成は、相原浩二、武正良浩、岩本美保、村上真由美、佐伯利枝、木下奈緒美、戸川安子、堀眞也、浅井茂之が行った。

5．遺物の注記、接合および復元は青野茂子、西川千秋、松本美代子、渡部英子、大野裕子、実測・製図は村上真由美、岩本美保、木下奈緒美、戸川安子、丹生谷道代、多知川富美子、矢野久子、堀眞也が担当した。

6．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7．本書に使用した方位はすべて真北である。

8．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

9．調査及び報告書作成においては、国立大学法人愛媛大学田﨑博之先生、吉田広先生、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所松井章先生、古環境研究所早田勉先生に御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

10. 本調査における基準点測量と航空写真撮影は、㈱国際航業に業務委託した。

11. 本調査における自然科学分析は、㈱古環境研究所に業務委託した。

12. 写真図版は、遺構撮影を担当調査員と大西朋子が行い、遺物撮影と図版作成は大西が行った。

13. 本書の執筆は相原浩二、武正良浩が分担執筆した。本書の編集は相原、岩本、村上、佐伯、戸川、堀、浅井の協力を得て武正が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに ―――――――――――――――――――― [相原]
1. 調査に至る経緯 …… 1
2. 調査・刊行組織 …… 2

第２章　遺跡の概要 ―――――――――――――――――――― [相原]
1. 地理的環境 …… 3
2. 歴史的環境 …… 3

第３章　調査の概要 ―――――――――――――――――――― [相原]
1. 調査の経緯 …… 7

第４章　枝松遺跡７次調査地　１区の調査 ―――――――――― [相原]
1. 調査の経緯 …… 9
2. 層位 …… 9
3. 遺構と遺物 …… 14
4. 小結 …… 32

第５章　枝松遺跡７次調査地　２区の調査 ―――――――――― [相原]
1. 調査の経緯 …… 39
2. 層位 …… 40
3. 遺構と遺物 …… 40
4. 小結 …… 46

第６章　枝松遺跡７次調査地　３区の調査 ―――――――――― [相原]
1. 調査の経緯 …… 51
2. 層位 …… 53
3. 遺構と遺物 …… 53
4. 小結 …… 54

第 7 章　枝松遺跡 8 次調査地　1 区の調査 ―――――――― [相原]
1. 調査の経緯 …… 55
2. 層位 …… 57
3. 遺構と遺物 …… 60
4. 小結 …… 78

第 8 章　枝松遺跡 8 次調査地　2 区の調査 ―――――――― [相原]
1. 調査の経緯 …… 87
2. 層位 …… 88
3. 遺構と遺物 …… 90
4. 小結 …… 109

第 9 章　枝松遺跡 8 次調査地　3 区の調査 ―――――――― [相原]
1. 調査の経緯 …… 117
2. 層位 …… 117
3. 遺構と遺物 …… 117
4. 小結 …… 122

第 10 章　枝松遺跡 9 次調査地　1 区の調査 ―――――――― [武正]
1. 調査の経緯 …… 123
2. 層位 …… 125
3. 遺構と遺物 …… 127
4. 小結 …… 135

第 11 章　枝松遺跡 9 次調査地　2 区の調査 ―――――――― [武正]
1. 調査の経緯 …… 137
2. 層位 …… 137
3. 遺構と遺物 …… 139
4. 小結 …… 139

第 12 章　枝松遺跡 9 次調査地　3 区の調査 ―――――――― [武正]
1. 調査の経緯 …… 143
2. 層位 …… 145
3. 遺構と遺物 …… 146
4. 小結 …… 146

第 13 章　枝松遺跡 10 次調査地　1 区の調査 ―――――――― [武正]
1. 調査の経緯 …… 147
2. 層位 …… 149
3. 遺構と遺物 …… 150
4. 小結 …… 154

第 14 章　枝松遺跡 10 次調査地　2 区の調査 ―――――――― [武正]
1. 調査の経緯 …… 155
2. 層位 …… 157
3. 遺構と遺物 …… 157
4. 小結 …… 160

第 15 章　枝松遺跡 10 次調査地　3 区の調査 ―――――――― [武正]
1. 調査の経緯 …… 161
2. 層位 …… 163
3. 遺構と遺物 …… 163
4. 小結 …… 182

第 16 章　自然科学分析 …… 191

第 17 章　まとめ ―――――――――――――――――――――――― [武正] …… 198

挿　図　目　次

第 1 図　調査対象地位置図（縮尺 1：20,000）…… 1
第 2 図　調査地周辺の主要遺跡分布図（縮尺 1：25,000）…… 4
第 3 図　調査地位置図（縮尺 1：3,000）…… 7

枝松遺跡 7 次調査　－ 1 区の調査－

第 4 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000）…… 9
第 5 図　調査区位置図・区割図（縮尺 1：500）…… 10
第 6 図　南壁・西壁土層図（縮尺 1：40）…… 11
第 7 図　1 区遺構配置図（縮尺 1：150）…… 12
第 8 図　弥生時代～古墳時代の遺構配置図（縮尺 1：150）…… 13
第 9 図　SK111 測量図（縮尺 1：20）…… 14
第 10 図　SK111 出土遺物実測図（縮尺 1：4）…… 14
第 11 図　SD103・SD104 測量図（縮尺 1：60）…… 15
第 12 図　SD103 出土遺物実測図(1)（縮尺 1：4）…… 17
第 13 図　SD103 出土遺物実測図(2)（縮尺 1：4）…… 18
第 14 図　SD103 出土遺物実測図(3)（縮尺 1：4）…… 19
第 15 図　SD103 出土遺物実測図(4)（縮尺 1：4）…… 20
第 16 図　SD103 出土遺物実測図(5)（縮尺 1：4）…… 21
第 17 図　SD103 出土遺物実測図(6)（縮尺 1：4）…… 22
第 18 図　SD103 出土遺物実測図(7)（縮尺 1：4）…… 23
第 19 図　SD103 出土遺物実測図(8)（縮尺 1：4）…… 24
第 20 図　SD103 出土遺物実測図(9)（縮尺 1：4）…… 24
第 21 図　SD101 測量図（縮尺 1：100）…… 25
第 22 図　SK104 測量図（縮尺 1：20）…… 25
第 23 図　SK104 出土遺物実測図（縮尺 1：4）…… 25
第 24 図　SK107 測量図（縮尺 1：20）…… 26
第 25 図　SK107 出土遺物実測図（縮尺 1：4）…… 26
第 26 図　中世以降の遺構配置図（縮尺 1：150）…… 27
第 27 図　SK101・SK106 測量図（縮尺 1：40）…… 28
第 28 図　SK103 測量図（縮尺 1：40）…… 28
第 29 図　SK103 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 28
第 30 図　SP1005 測量図（縮尺 1：20）…… 29
第 31 図　SP1005 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 29
第 32 図　SP1038・SP1067・SP1104 測量図（縮尺 1：20）…… 29

第 33 図　SP1038・SP1067・SP1104 出土遺物実測図（縮尺 1：3） …… 29
第 34 図　SP1110・SP1116 測量図（縮尺 1：20） …… 30
第 35 図　SP1110・SP1116 出土遺物実測図（縮尺 1：3） …… 30
第 36 図　SP1073 測量図（縮尺 1：20） …… 31
第 37 図　SP1073 出土遺物実測図（縮尺 1：3） …… 31
第 38 図　SP1079 測量図（縮尺 1：20） …… 31
第 39 図　SP1079 出土遺物実測図（縮尺 1：3） …… 31
第 40 図　SD102 測量図（縮尺 1：100） …… 31

枝松遺跡 7 次調査地　－ 2 区の調査－

第 41 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000） …… 39
第 42 図　南壁土層図（縮尺 1：40） …… 41
第 43 図　2 区遺構配置図（縮尺 1：150） …… 42
第 44 図　SD201 測量図（縮尺 1：100） …… 43
第 45 図　SD201 出土遺物実測図（縮尺 1：4） …… 44
第 46 図　掘立 201 測量図（縮尺 1：40） …… 45
第 47 図　掘立 201 出土遺物実測図（縮尺 1：4） …… 45
第 48 図　SD202 測量図（縮尺 1：100） …… 46
第 49 図　SD202 出土遺物実測図（縮尺 1：4） …… 47
第 50 図　SP2025 測量図（縮尺 1：20） …… 48
第 51 図　SP2025 出土遺物実測図（縮尺 1：4） …… 48
第 52 図　倒木 201 測量図（縮尺 1：40） …… 48
第 53 図　その他出土遺物実測図（縮尺 1：4） …… 48

枝松遺跡 7 次調査地　－ 3 区の調査－

第 54 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000） …… 51
第 55 図　3 区土層図（縮尺 1：40） …… 52
第 56 図　3 区遺構配置図（縮尺 1：100） …… 52
第 57 図　SD301 測量図（縮尺 1：40） …… 53
第 58 図　SD301 出土遺物実測図（縮尺 1：4） …… 53
第 59 図　SP3002・SK301 測量図（縮尺 1：40） …… 54
第 60 図　SP3002 出土遺物実測図（縮尺 1：4） …… 54

枝松遺跡８次調査地　－１区の調査－

第 61 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000）…… 55
第 62 図　調査区位置図と遺構配置図（縮尺 1：400）…… 56
第 63 図　土層図（縮尺 1：40）…… 58
第 64 図　１区遺構配置図（縮尺 1：150）…… 59
第 65 図　SD101・102 測量図（縮尺 1：40）（縮尺 1：100）…… 60
第 66 図　SD101 出土遺物実測図⑴（縮尺 1：4）…… 62
第 67 図　SD101 出土遺物実測図⑵（縮尺 1：4）…… 63
第 68 図　SD101 出土遺物実測図⑶（縮尺 1：4）…… 64
第 69 図　SD101 出土遺物実測図⑷（縮尺 1：4）…… 65
第 70 図　SD101 出土遺物実測図⑸（縮尺 1：4）…… 66
第 71 図　SD101 出土遺物実測図⑹（縮尺 1：4）…… 67
第 72 図　SD101 出土遺物実測図⑺（縮尺 1：4）…… 68
第 73 図　SD102 出土遺物実測図⑴（縮尺 1：4）…… 69
第 74 図　SD102 出土遺物実測図⑵（縮尺 1：4）…… 70
第 75 図　SD102 出土遺物実測図⑶（縮尺 1：4）…… 71
第 76 図　SD102 出土遺物実測図⑷（縮尺 1：4）…… 72
第 77 図　SD102 出土遺物実測図⑸（縮尺 1：4）…… 73
第 78 図　SD102 出土遺物実測図⑹（縮尺 1：4）…… 74
第 79 図　SD103 測量図（縮尺 1：100）…… 75
第 80 図　SD103 出土遺物実測図（縮尺 1：4）…… 75
第 81 図　SK102 測量図（縮尺 1：20）…… 76
第 82 図　SK102 出土遺物実測図（縮尺 1：4）…… 76
第 83 図　SP101・SP105・SP111 測量図（縮尺 1：20）…… 77
第 84 図　SP101・SP105・SP111 出土遺物実測図（縮尺 1：4）…… 77
第 85 図　SP115・SP130 測量図（縮尺 1：20）…… 78
第 86 図　SP115・SP130 出土遺物実測図（縮尺 1：4）…… 78
第 87 図　表採遺物実測図（縮尺 1：3）…… 78

枝松遺跡８次調査地　－２区の調査－

第 88 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000）…… 87
第 89 図　北壁土層図（縮尺 1：40）…… 88
第 90 図　２区遺構配置図（縮尺 1：150）…… 89
第 91 図　SB201 測量図⑴（縮尺 1：40）…… 91

第 92 図 SB201 測量図(2)（縮尺 1：60） …… 92
第 93 図 SB201 炉測量図（縮尺 1：20） …… 92
第 94 図 SB201 出土遺物実測図(1)（縮尺 1：4） …… 93
第 95 図 SB201 出土遺物実測図(2)（縮尺 1：4） …… 94
第 96 図 SB201 出土遺物実測図(3)（縮尺 1：4） …… 95
第 97 図 SB201 出土遺物実測図(4)（縮尺 1：4） …… 96
第 98 図 SB201 出土遺物実測図(5)（縮尺 1：4） …… 97
第 99 図 SB201 出土遺物実測図(6)（縮尺 1：4） …… 98
第 100 図　SB201 出土遺物実測図(7)（縮尺 1：4） …… 99
第 101 図　SB201 出土遺物実測図(8)（縮尺 1：4） …… 100
第 102 図　SB201 出土遺物実測図(9)（縮尺 1：4） …… 101
第 103 図　SB201 出土遺物実測図(10)（縮尺 1：4） …… 102
第 104 図　SB202 測量図(1)（縮尺 1：40） …… 103
第 105 図　SB202 測量図(2)（縮尺 1：60） …… 104
第 106 図　SB202 炉測量図（縮尺 1：40） …… 104
第 107 図　SB202 出土遺物実測図(1)（縮尺 1：4） …… 106
第 108 図　SB202 出土遺物実測図(2)（縮尺 1：4） …… 107
第 109 図　SB202 出土遺物実測図(3)（縮尺 1：4） …… 108
第 110 図　SB202 出土遺物実測図(4)（縮尺 1：4） …… 109
第 111 図　SB202 出土遺物実測図(5)（縮尺 1：4） …… 110

枝松遺跡 8 次調査地　－ 3 区の調査－

第 112 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000） …… 117
第 113 図　南壁土層図（縮尺 1：40） …… 118
第 114 図　3 区遺構配置図（縮尺 1：150） …… 119
第 115 図　掘立 301 測量図（縮尺 1：40） …… 120
第 116 図　掘立 301 出土遺物実測図（縮尺 1：4） …… 120
第 117 図　SK301 測量図（縮尺 1：20） …… 121
第 118 図　SK301 出土遺物実測図（縮尺 1：2） …… 121
第 119 図　SK304 測量図（縮尺 1：20） …… 121
第 120 図　SK304 出土遺物実測図（縮尺 1：4） …… 121
第 121 図　SP310・SP311 測量図（縮尺 1：20） …… 122
第 122 図　SP310・SP311 出土遺物実測図（縮尺 1：4） …… 122
第 123 図　表採遺物実測図（縮尺 1：2） …… 122

枝松遺跡 9 次調査地　－ 1 区の調査－

第 124 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000）…… 123
第 125 図　1 区遺構配置図（最終遺構面）（縮尺 1：120）…… 124
　　北壁・西壁土層図（縮尺 横 1：120、縦 1：40）
第 126 図　1 区遺構配置図（第一遺構面）（縮尺 1：100）…… 126
第 127 図　1 区出土遺物実測図（1）（縮尺 1：4）…… 127
第 128 図　1 区出土遺物実測図（2）（縮尺 1：3）…… 128
第 129 図　1 区遺構配置図（第二遺構面）（縮尺 1：100）…… 129
第 130 図　掘立 101 測量図（縮尺 1：40）…… 130
第 131 図　掘立 102 測量図（縮尺 1：40）…… 131
第 132 図　掘立 102（SP 内）出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 132
第 133 図　SK102 測量図（縮尺 1：20）…… 132
第 134 図　SK107・SK104・SK106 測量図（縮尺 1：30）…… 133
第 135 図　1 区出土遺物実測図（3）（縮尺 1：3）…… 133
第 136 図　倒木 101 測量図（縮尺 1：40）…… 134
第 137 図　倒木 103 測量図（縮尺 1：40）…… 135

枝松遺跡 9 次調査地　－ 2 区の調査－

第 138 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000）…… 137
第 139 図　2 区遺構配置図（縮尺 1：120）…… 138
　　北壁・西壁土層図（縮尺 横 1：120、縦 1：40）
第 140 図　SD201 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 140
第 141 図　SD202 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 141
第 142 図　SK201 測量図（縮尺 1：20）…… 141
第 143 図　2 区出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 141

枝松遺跡 9 次調査　－ 3 区の調査－

第 144 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000）…… 143
第 145 図　3 区遺構配置図（縮尺 1：120）…… 144
　　北壁・西壁土層図（縮尺 横 1：120、縦 1：40）
第 146 図　SX301 測量図（縮尺 1：20）…… 145

枝松遺跡 10 次調査　－ 1 区の調査－

第 147 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000）…… 147
第 148 図　1 区遺構配置図（縮尺 1：120）…… 148
　　北壁・西壁土層図（縮尺 横 1：120、縦 1：40）
第 149 図　1 区遺構配置図（縮尺 1：80）…… 150
第 150 図　1 区出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 150
第 151 図　SA101 測量図（縮尺 1：40）…… 151
第 152 図　SK101 測量図（縮尺 1：20）…… 152
第 153 図　SK101 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 152
第 154 図　SK102 測量図（縮尺 1：20）…… 153
第 155 図　SK102 出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 153

枝松遺跡 10 次調査　－ 2 区の調査－

第 156 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000）…… 155
第 157 図　2 区遺構配置図（縮尺 1：120）…… 156
　　北壁・西壁土層図（縮尺 横 1：120、縦 1：40）
第 158 図　2 区遺構配置図（第一遺構面）（縮尺 1：100）…… 158
第 159 図　SK201・SK204 測量図（縮尺 1：20）…… 159
第 160 図　1 区出土遺物実測図（縮尺 1：4）（縮尺 1：3）…… 159

枝松遺跡 10 次調査　－ 3 区の調査－

第 161 図　調査区位置図（縮尺 1：1,000）…… 161
第 162 図　3 区遺構配置図（縮尺 1：200）…… 162
　　北壁・東壁土層図（縮尺 横 1：120、縦 1：40）
第 163 図　SK301 測量図（縮尺 1：20）、出土遺物実測図（縮尺 1：3）…… 164
第 164 図　SD302 測量図（縮尺 1：60）…… 165
第 165 図　SD302 出土遺物実測図（縮尺 1：4）（縮尺 1：3）（縮尺 1：2）…… 166
第 166 図　SD301 測量図（縮尺 1：60）…… 167
第 167 図　SD301 出土遺物実測図⑴（縮尺 1：4）…… 168
第 168 図　SD301 出土遺物実測図⑵（縮尺 1：3）…… 169
第 169 図　SD301 出土遺物実測図⑶（縮尺 1：4）…… 170
第 170 図　SD301 出土遺物実測図⑷（縮尺 1：4）…… 171
第 171 図　SD301 出土遺物実測図⑸（縮尺 1：4）…… 172

第 172 図　SD301 出土遺物実測図(6)（縮尺 1：2）…… 173
第 173 図　SD301 出土遺物実測図(7)（縮尺 1：4）…… 174
第 174 図　SD301 出土遺物実測図(8)（縮尺 1：4）…… 175
第 175 図　SD301 出土遺物実測図(9)（縮尺 1：4）…… 176
第 176 図　SD301 出土遺物実測図(10)（縮尺 1：4）…… 177
第 177 図　SD301 出土遺物実測図(11)（縮尺 1：4）…… 178
第 178 図　SD301 出土遺物実測図(12)（縮尺 1：4）…… 179
第 179 図　SD301 出土遺物実測図(13)（縮尺 1：4）…… 180
第 180 図　SD301 出土遺物実測図(14)（縮尺 1：4）…… 181
第 181 図　SD301 出土遺物実測図(15)（縮尺 1：4）…… 182
第 182 図　SD301 出土遺物実測図(16)（縮尺 1：2）…… 183
第 183 図　SD301 出土遺物実測図(17)（縮尺 1：4）（縮尺 1：3）…… 184

自然科学分析

第 184 図　１区西壁の土層柱状図…… 195
第 185 図　２区西壁の土層柱状図
第 186 図　２区南壁の土層柱状図
第 187 図　２区西壁の火山ガラス比ダイヤグラム…… 196
第 188 図　２区南壁の火山ガラス比ダイヤグラム
第 189 図　枝松遺跡 9 次調査２区南壁土層…… 199

表　目　次

枝松遺跡７次調査　－１区の調査－

表１　SK111　出土遺物観察表　土製品 …… 33
表２　SD103　出土遺物観察表　土製品
表３　SD103　出土遺物観察表　土製品 …… 34
表４　SD103　出土遺物観察表　土製品 …… 35
表５　SD103　出土遺物観察表　土製品 …… 36
表６　SD103　出土遺物観察表　土製品 …… 37
表７　SK104　出土遺物観察表　土製品
表８　SK107　出土遺物観察表　土製品
表９　SK103　出土遺物観察表　土製品
表 10　SP1005　出土遺物観察表　土製品 …… 38
表 11　SP1038　出土遺物観察表　土製品
表 12　SP1067　出土遺物観察表　土製品
表 13　SP1104　出土遺物観察表　土製品
表 14　SP1110　出土遺物観察表　土製品
表 15　SP1116　出土遺物観察表　土製品
表 16　SP1073　出土遺物観察表　土製品
表 17　SP1079　出土遺物観察表　土製品

枝松遺跡７次調査　－２区の調査－

表 18　SR201　出土遺物観察表　土製品 …… 49
表 19　SR201　出土遺物観察表　石製品
表 20　掘立 201　出土遺物観察表　土製品
表 21　SD204　出土遺物観察表　土製品 …… 50
表 22　SD204　出土遺物観察表　土製品
表 23　SP2025　出土遺物観察表　土製品
表 24　その他　出土遺物観察表　土製品

枝松遺跡７次調査　－３区の調査－

表 25　SD301　出土遺物観察表　土製品 …… 54
表 26　SP3002　出土遺物観察表　土製品

枝松遺跡８次調査　－１区の調査－

表 27　SD101　出土遺物観察表　土製品 …… 79
表 28　SD101　出土遺物観察表　土製品 …… 80
表 29　SD101　出土遺物観察表　土製品 …… 81
表 30　SD101　出土遺物観察表　土製品 …… 82
表 31　SD101　出土遺物観察表　石製品
表 32　SD101　出土遺物観察表　装身具
表 33　SD102　出土遺物観察表　土製品
表 34　SD102　出土遺物観察表　土製品 …… 83
表 35　SD102　出土遺物観察表　土製品 …… 84
表 36　SD102　出土遺物観察表　土製品 …… 85
表 37　SD102　出土遺物観察表　石製品
表 38　SD103　出土遺物観察表　土製品
表 39　SD103　出土遺物観察表　土製品 …… 86
表 40　SK102　出土遺物観察表　土製品
表 41　SP101　出土遺物観察表　土製品
表 42　SP105　出土遺物観察表　土製品
表 43　SP111　出土遺物観察表　土製品
表 44　SP115　出土遺物観察表　土製品
表 45　SP130　出土遺物観察表　土製品
表 46　表採　出土遺物観察表　土製品

枝松遺跡８次調査　－２区の調査－

表 47　SB201　出土遺物観察表　土製品 …… 112
表 48　SB201　出土遺物観察表　土製品 …… 113
表 49　SB201　出土遺物観察表　土製品 …… 114
表 50　SB201　出土遺物観察表　石製品
表 51　SB202　出土遺物観察表　土製品

表 52　SB202　出土遺物観察表　土製品 …… 115
表 53　SB202　出土遺物観察表　土製品 …… 116
表 54　SB202　出土遺物観察表　石製品

枝松遺跡 8 次調査　－ 3 区の調査－

表 55　掘立 301 出土遺物観察表　土製品 …… 122
表 56　SK301　出土遺物観察表　鉄製品
表 57　SK304　出土遺物観察表　土製品
表 58　SP310　出土遺物観察表　土製品
表 59　SP311　出土遺物観察表　土製品
表 60　表採　出土遺物観察表　土製品

枝松遺跡 9 次調査　－ 1 区の調査－

表 61　近世水田面出土遺物観察表　鉄製品 …… 136
表 62　出土遺物観察表　土製品

枝松遺跡 9 次調査　－ 2 区の調査－

表 63　出土遺物観察表　土製品 …… 142

枝松遺跡 10 次調査　－ 1 区の調査－

表 64　出土遺物観察表　土製品 …… 154

枝松遺跡 10 次調査　－ 2 区の調査－

表 65　出土遺物観察表　土製品 …… 160

枝松遺跡 10 次調査　－ 3 区の調査－

表 66　出土遺物観察表　土製品(1) …… 185
表 67　出土遺物観察表　鉄製品
表 68　出土遺物観察表　土製品(2)
表 69　出土遺物観察表　土製品(3) …… 186
表 70　出土遺物観察表　土製品(4) …… 187
表 71　出土遺物観察表　土製品(5) …… 188
表 72　出土遺物観察表　土製品(6) …… 189
表 73　出土遺物観察表　土製品(7) …… 190
表 74　出土遺物観察表　石製品
表 75　出土遺物観察表　土製品

枝松遺跡 9 次調査　－自然科学分析－

表 76　自然科学分析表 …… 197

図　版　目　次

枝松遺跡７次調査地

巻頭図版１　調査地遠景（航空写真、真上より）
巻頭図版２　枝松遺跡８次調査地 SB201 出土遺物

図版１　１．１区遺構検出状況（西より）
図版２　１．１区南壁土層（北西より）
　　２．SK111 遺物出土状況（西より）
　　３．SD103 遺物出土状況（南より）
図版３　１．SD103 ベルト土層（南より）
　　２．SD103 完掘状況（南より）
図版４　１．SK104 遺物出土状況（南より）
　　２．SK107 遺物出土状況（南より）
図版５　１．SK103 遺物出土状況（東より）
　　２．SB1079 遺物出土状況（南より）
　　３．１区中世遺構完掘状況（西より）
図版６　１．１区完掘状況（西より）
図版７　１．２区遺構検出状況（西より）
図版８　１．掘立 201 遺構検出状況（東より）
　　２．SD201.202 完掘状況（南西より）
図版９　１．SD204 完掘状況（南より）
　　２．２区完掘状況（西より）
図版 10　１．３南区遺構検出状況（東より）
　　２．３南区遺構完掘状況（東より）
図版 11　１．SD103 出土遺物①
図版 12　１．SD103 出土遺物②
図版 13　１．SD103 出土遺物③
図版 14　１．SK104 出土遺物
　　２．SK107 出土遺物
　　３．SK103 出土遺物
　　４．SP1073 出土遺物
　　５．SP1079 出土遺物
　　６．SD204 出土遺物

図版 15　１．１区遺構検出状況（西より）
　　２．１区南壁土層（北より）
図版 16　１．SD101 遺物出土状況（南より）
　　２．SD102 遺物出土状況（南より）
　　３．SD102 ベルト土層（南より）
図版 17　１．SD101 完掘状況（南より）
　　２．SD102 完掘状況（南より）
　　３．１区完掘状況（北西より）
図版 18　１．２区遺構検出状況（西より）
図版 19　１．SB201 遺構検出状況（北上より）
　　２．SB201 遺物出土状況（南西より）
図版 20　１．SB201 遺物出土状況（北より）
　　２．SB201 ベルト土層（東より）
　　３．SB201 ベルト土層（東より）
図版 21　１．SB201 焼土検出状況（西より）
　　２．皮袋形土製品出土状況（北より）
　　３．環状石斧出土状況（北より）
図版 22　１．SB201 ベルト撤去後の遺物出土状況（北より）
　　２．SB201 完掘状況（北西より）
図版 23　１．２区北壁土層（南より）
　　２．２区北壁土層（南より）
図版 24　１．SB202 検出状況（南東より）
　　２．SB202 遺物出土状況（北より）
図版 25　１．SB202 遺物出土状況（北より）
　　２．SB202 炉検出状況（北西より）
図版 26　１．SB202 炉完掘状況（北より）
　　２．SB202 完掘状況（北より）
図版 27　１．３区遺構検出状況（東より）
図版 28　１．３区南壁土層（北東より）
　　２．３区完掘状況（西より）
図版 29　１．SD101 出土遺物
図版 30　１．SD102 出土遺物
図版 31　１．SB201 出土遺物①
図版 32　１．SB201 出土遺物②
図版 33　１．SB201 出土遺物③

図版 34　1．SB201 出土遺物④
図版 35　1．SB201 出土遺物⑤
図版 36　1．SB201 出土遺物⑥
図版 37　1．SB201 出土遺物⑦
図版 38　1．SB201 出土遺物⑧
　　2．SB202 出土遺物

枝松遺跡 9 次調査

図版 39　1．1 区第一遺構面検出状況（東より）
　　2．墾先出土状況（南東より）
　　3．牛足跡（南西より）
図版 40　1．掘立 101・102 完掘状況（北西より）
　　2．SK102 完掘状況（北東より）
図版 41　1．SK105 完掘状況（南より）
　　2．SK108 完掘状況（西より）
　　3．倒木 103 検出状況（東より）
図版 42　1．1 区北壁土層（南西より）
　　2．1 区完掘（北東より）
図版 43　1．2 区遺構検出状況（西より）
　　2．SK201 検出状況（東より）
　　3．SK201 土層（東より）
図版 44　1．SD201 遺物出土状況（南西より）
　　2．SD201・202 完掘状況（北西より）
図版 45　1．2 区北壁土層（南西より）
　　2．2 区西壁土層（南東より）
図版 46　1．2 区完掘状況（北西より）
図版 47　1．3 区完掘状況（東より）
　　2．SX301 検出状況（南東より）
　　3．3 区北壁土層（南東より）
図版 48　1．1 区出土遺物（墾先）
　　2．2 区 SD201 出土遺物

図版 49　１．SA101 検出状況（南西より）
　　２．SK101 遺物出土状況（西より）
図版 50　１．SD101・SK101 完掘状況（南西より）
　　２．SK102 断面土層（西より）
図版 51　１．1 区北壁土層（東より）
　　２．1 区完掘状況（西より）
図版 52　１．2 区倒木痕 201（南東より）
　　２．2 区西壁土層（南東より）
　　３．2 区完掘状況（南東より）
図版 53　１．SK301 遺物出土状況（北より）
　　２．SD301・302 完掘状況（北東より）
図版 54　１．SD301・302 完掘状況（南東より）
　　２．3 区東側完掘状況（北より）
図版 55　１．3 区完掘状況（東より）
図版 56　１．1 区出土遺物
　　２．3 区出土遺物（SK301）
　　３．3 区出土遺物（SD302）
　　４．3 区出土遺物（SD301）⑴
図版 57　１．3 区出土遺物（SD301）⑵
　　２．3 区出土遺物（SD301）⑶
　　３．3 区出土遺物（SD301）⑷
　　４．3 区出土遺物（SD301）⑸
図版 58　１．3 区出土遺物（SD301）⑹
　　２．3 区出土遺物（SD301）⑺
　　３．3 区出土遺物（SD301）⑻
図版 59　１．3 区出土遺物（SD301）⑼
　　２．3 区出土遺物（SD301）⑽
図版 60　１．3 区出土遺物（SD301）⑾
　　２．3 区出土遺物（SD301）⑿
　　３．3 区出土遺物（SD301）⒀

第１章　はじめに

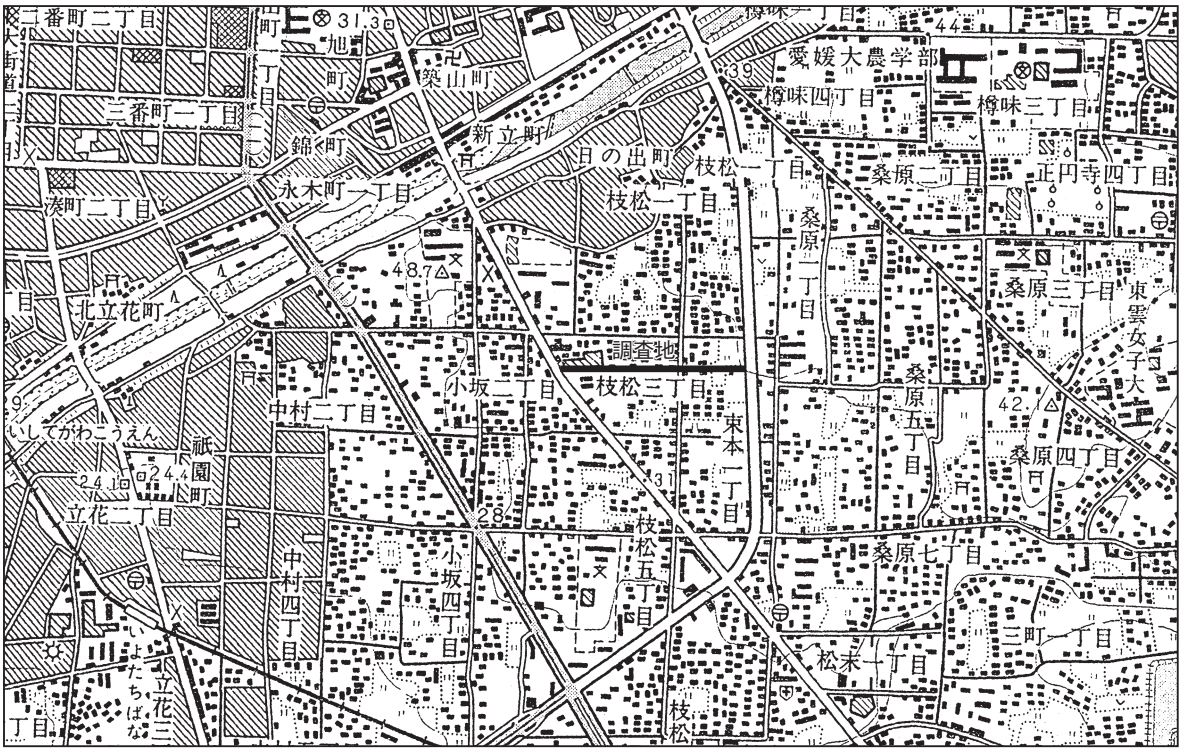
1. 調査に至る経過

2002（平成 14）年 5 月 25 日、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より松山市道中村～桑原線（松山市束本町～小坂）道路改良工事（2 工区）に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

確認願いが申請された小坂 2 丁目 96 － 3 外は、一部が包蔵地外となるが大部分は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『№ 83　枝松遺物包含地』内にあり周知の包蔵地である。申請地周辺はこれまでに数多くの調査が行われ、弥生時代～古墳時代にかけての集落関連遺構が確認されており、松山平野の主要な遺跡地帯として知られている。

文化教育課では、確認願いが申請された地点について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、試掘調査を実施する事となった。試掘調査は、建設工事の工程や既存建物の立ち退き状況によって数回に分けて実施した。2002（平成 14）年 9 月、申請地の東端にあたる小坂 2 丁目 96 － 3 外（愛媛いすず自動車工業跡地）において 1 回目の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺構・遺物が検出され、弥生時代～中世に至る集落関連の遺跡があることを確認した。

この結果を受け文化財課、㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターと道路建設課の三者は発掘調査について協議を行い、本格調査を実施する事となった。調査は、枝松遺跡 7 次調査を最初にし順次枝松遺跡 8 次調査～ 10 次調査を 2002（平成 14）年 11 月～ 2004（平成 16）年 12 月迄に実施した。



第 1 図　調査地位置図（S=1:20,000）

2. 調査・刊行組織

（平成 20 年 3 月 31 日現在）

松山市教育委員会	教　育　長	土居　貴美
事　　務　　局	局　　長	石丸　　修
	企　画　官	仙波　和典
	企　画　官	田中　郁夫
	企　画　官	田浦　雅文
文　化　財　課	課　　長	家久　則雄
	主　　幹	森川　惠克
	主　　査	栗田　正芳
財団法人松山市生涯学習振興財団	理　事　長	中村　時広
	事務局長	吉岡　一雄
埋蔵文化財センター	所　　長 兼考古館館長	丹生谷博一
	次　　長 兼教育普及担当リーダー	重松　幹雄
	次　　長 兼調査担当リーダー	田城　武志
	調 査 担 当	相原　浩二
	調 査 担 当	武正　良浩
	調 査 担 当	大西　朋子

第２章　遺跡の概要

1. 地理的環境

松山平野は県下最大の平野であり、主に重信川によって形成された扇状地である。その支流の一つである石手川は、高縄山に源を発し平野の北東部を南西方向に向け横断しながら小野川と重信川に合流し伊予灘に注ぐ河川である。この石手川は溝辺町周辺から南西に向かって大規模な扇状地を形成する。その扇状地の石手川左岸、標高 34m ～ 38m に今回の調査地は立地する。

束本遺跡、桑原遺跡が立地する扇状地面は、約 23,000 年前の姶良（AT）火山灰の降下・堆積期にはすでに段丘化していたと推定されている。しかし、この火山灰層直上に火山灰混じりの砂礫層が堆積していることから、この地で姶良火山灰の降下・堆積後に短期間の洪水のような現象が起こったと推測される。しかし、その後は小河川の流路に沿って、部分的に小規模な洪水や砂礫の堆積が起こったが、石手川本流による激しい洪水に襲われることなく、縄文時代や弥生時代の遺跡の立地については、安定した地形環境であったと推定されている〔平井 1989〕。

2. 歴史的環境

本遺跡一帯は桑原地区と称され、数多くの遺跡が存在する。古代この地区は「和名抄」による温泉郡五郷のうちの桑原郷で、後世桑原郷は桑原村、正円寺村、樽味村、松末村、三町村、東野村、畑寺村、新百姓村（現束本町）、小坂村、枝松村、中村の十一ヶ村に区分されている。

これまでの調査で弥生時代～古代にかけての竪穴式住居址・土坑・溝などの集落遺構が検出され同地区における集落の存在と規模が明確になり始めている。ここでは、近年に調査された遺跡を中心に桑原地区の遺跡の展開を概説する。

旧石器時代

当地区に限らず、松山平野全域においても、これまでに旧石器時代の明確な遺構は発見されていない。しかし、樽味遺跡・樽味四反地遺跡においてはポケット状に堆積した AT 火山灰土を確認し、束本遺跡 4 次調査地では AT 火山灰の一次堆積層を確認している〔高尾和長 1996〕。

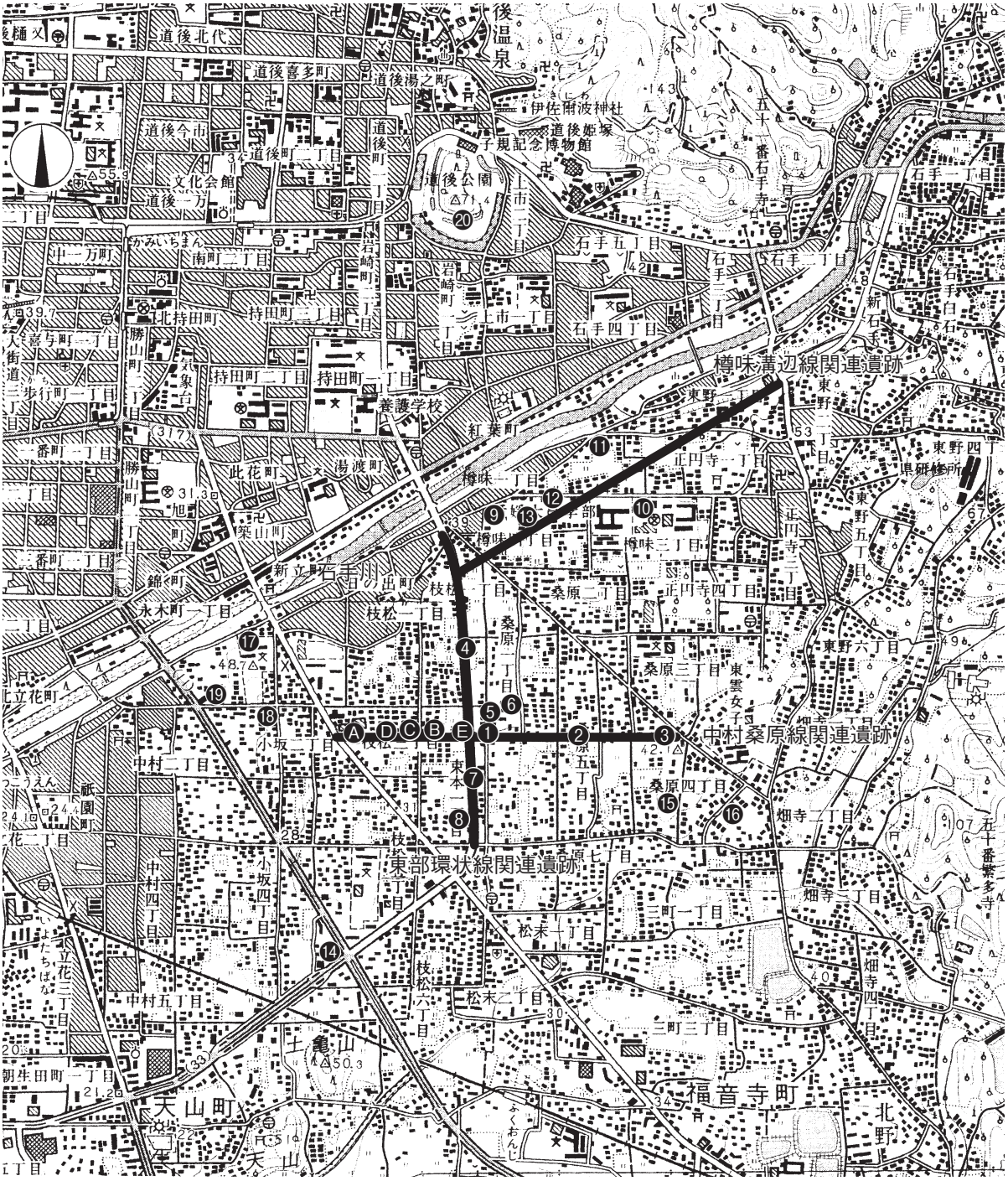
縄文時代

束本遺跡 4 次調査地では、縄文時代早期にあたる 6,300 年前のアカホヤ火山灰層が検出されている。このアカホヤ火山灰層中と下層の上面から先土器時代末から縄文時代早期以前の石器が見つかっている。また、アカホヤ火山灰降下以前の堆積層中から焼土を検出している。これらのことから同調査地では、縄文時代早期以前の遺跡が存在したことが想定されている。このほか、樽味立添遺跡・桑原田中遺跡からは刻目凸帯をもつ土器が各１点が出土している。

弥生時代

前期では、樽味遺跡より前期前半の土坑（SK5）と溝（SD4）、樽味高木遺跡からは前期後半の土器を検出し、桑原田中遺跡 2 次調査地でも土器片を検出している。

中期では、樽味高木遺跡１～３次調査地から中期後半の土器が出土している。特に 2 次調査地の SB1 と 3 次調査地の SX1 からは資料性の高い土器が出土している。樽味四反地遺跡 5 次調査地の



Ⓐ 枝松遺跡７次調査地　Ⓑ 枝松遺跡８次調査地　Ⓒ 枝松遺跡９次調査地　Ⓓ 枝松遺跡 10 次調査地　Ⓔ 東本遺跡８次調査地

❶東本遺跡６次調査地　❷桑原遺跡４次調査地　❸桑原遺跡２次調査地　❹東本遺跡４次調査地　❺東本遺跡５次・７次調査地

❻桑原稲葉遺跡　❼枝松遺跡４次調査地　❽東本遺跡　❾樽味四反地遺跡６次・７次調査地　❿樽味遺跡

⓫樽味立添遺跡　⓬樽味高木遺跡・２次・３次調査地　⓭樽味四反地遺跡４次調査地　⓮釜ノ口遺跡　⓯経石山古墳

⓰三島神社古墳　⓱素鷲小学校校内遺跡　⓲小坂七ノ坪遺跡・２次・３次調査地　⓳中村松田遺跡・２次調査地　⓴道後湯月城跡

第２図　調査地周辺の主要遺跡分布図（S=1:25,000）

SB8 からは弥生時代中期後半～後期初頭の遺物が出土している。

後期では、調査地北部の樽味高木遺跡 2 次調査地からは後期の竪穴式住居址、樽味四反地遺跡 2 ～ 5 次調査地から弥生時代後期末の竪穴式住居址を検出しており、この地域に弥生時代後期～後期末にかけて集落が広がっていたことを示すものである。遺物では樽味立添遺跡の包含層中より『貨泉』の出土がある〔梅木謙一 1989〕。また、樽味高木遺跡 3 次調査地からは「船」を描いた線刻（絵画）土器が出土している〔梅木謙一 1992〕。また、調査地の北側に隣接する東本遺跡 5 次調査地では円形竪穴式住居址 5 棟、方形竪穴式住居址 2 棟が検出されている。これら住居址は、方形竪穴式住居址 1 棟を除く全てにベッド状施設が付設されている。円形竪穴式住居址である SB5 は、炭化材や焼土の検出状況から焼失住居と考えられている〔河野史知 2001〕。

西部、南部においても集落址が検出されている。調査地の西側に隣接する、東本遺跡 4 次調査地からは大型・中型・小型の竪穴式住居址を検出している。大型住居である SB203 では周堤帯を検出し、SB302 からは破鏡が出土している〔高尾和長 1996〕。東本遺跡 2 次調査地では、竪穴式住居址 2 棟と掘立柱建物址や土坑が検出されている。枝松遺跡 3 次調査地では、貼り付けによる高床部をもつ竪穴式住居址が検出されている。桑原稲葉遺跡では、円形と方形の竪穴式住居址 1 棟を検出している。

調査地南部の桑原高井遺跡では、竪穴式住居址 5 棟のほか土坑が検出されている。住居址には円形と方形の二種類がある。このうち、2 号住居址は平面形態が六角形を思わせるような円形を呈する。柱穴は中心部に 1 本と壁体に沿って 6 本の計 7 本からなり、ベッド状施設を付設している〔森光晴 1980〕。

古墳時代

古墳時代では、樽味四反地遺跡 6 次調査地で弥生時代後期末～古墳時代初頭の区画溝と柵列を伴うと考えられる総柱構造の大型掘立柱建物址 1 棟を検出している〔小玉亜紀子 1999〕。さらに、南側に隣接する同 8 次調査地からも総柱構造の大型掘立柱建物址 1 棟が検出されている〔加島次郎 2003〕。この他に、6 次調査地からは古墳時代中期～後期初頭頃の竪穴式住居址を多数検出し、これらの住居址からは滑石製の臼玉やガラス小玉、瑪瑙製の勾玉が出土している。桑原遺跡 3 次調査地からは、弥生時代後期～古墳時代初頭の溝 1 が検出されている。樽味高木遺跡の竪穴式住居址や土坑からは 5 世紀代の須恵器・土師器などが出土している。また、桑原本郷遺跡では、5 世紀後半の方形竪穴式住居址や掘立柱建物址が検出され、さらに包含層より滑石製の臼玉 100 点余りが須恵器と共に出土している〔栗田茂敏 1987〕。樽味立添遺跡からは 10 数棟の竪穴式住居址と掘立柱建物址（古墳時代後期以降）を検出し、樽味四反地遺跡 5 次調査地では 6 棟の竪穴式住居址を検出している〔高尾和長 1998〕。桑原遺跡 5 次調査地では、溝から 6 世紀代と考えられる斎串や木錘などが出土している。

桑原地区の古墳では、前方後円墳である経石山古墳と三島神社古墳の 2 基が古くから知られる。経石山古墳は全長 48.5m を測り、5 世紀末に時期比定されている〔森光晴 1986〕。三島神社古墳は全長 45m を測り、初期畿内型の横穴式石室を内部主体にもつ。出土遺物より 6 世紀前葉に比定されている〔森光晴 1986〕。この三島神社古墳は、発掘後に削平され消滅している。

また、桑原地区の東側丘陵部には東野お茶屋台古墳群、畑寺竹ヶ谷古墳群、畑寺古墳群が存在する。東野お茶屋台古墳では周溝から 5 世紀後半の須恵器が出土している。東野お茶屋台遺跡 5 次調査地では、7 世紀初頭の横穴式石室が調査されている。畑寺竹ヶ谷古墳では、周溝内から須恵器や直刀が出土している。畑寺古墳群内にある 6 世紀中頃～後半の畑寺 6 号墳では、埴輪列を検出している〔河野史知 1997〕。

古代・中世

樽味四反地遺跡5次調査地のSR1からは7～8世紀の土器と共に須恵器の硯4個体が出土している〔高尾和長1998〕。硯は、松山平野では希少な資料であり注目される。樽味四反地遺跡では10世紀代に比定される溝SD1・SD2が検出されている。また、樽味遺跡のSD1・SD2からは14世紀後半、SD3・SK5からは15世紀代の土師器が出土している。特にSD1は集落境界の溝として位置づけられている。なお、樽味遺跡一帯は14～16世紀にかけて当地方で権力を握っていた河野氏の支配範囲に入っていたのではないかと考えられている〔宮本一夫1989b〕。

〔参考文献〕

梅木　謙一　1992「樽味立添」「樽味高木」「樽味四反地」「桑原西稲葉1･2次」「桑原田中」「経石山古墳」「枝松3次」『桑原地区の遺跡』　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

梅木　謙一　1994「樽味高木2・3次」「樽味四反地2・3・4次」「桑原田中2次」『桑原地区の遺跡Ⅱ』　松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

田﨑　博之　1993「樽味遺跡2次調査報告」『樽味遺跡Ⅱ』　愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ・愛媛大学埋蔵文化財調査室

梅木　謙一　1989「樽味四反地遺跡」「樽味立添遺跡」「樽味高木遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』　松山市教育委員会

森　　光晴　1980「束本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡」『松山市文化財調査報告書』、「東野お茶屋台古墳群」「経石山古墳」「三島神社古墳」『愛媛県史　資料編　考古』　松山市教育委員会

松村　淳　　1989「桑原田中遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会

岡田　敏彦　1990「桑原稲葉遺跡」『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田　茂敏　1987「桑原本郷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』　松山市教育委員会

平井　幸弘　1989「鷹子遺跡及び樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子・樽味遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室

平井　幸弘　1989「石手川扇状地城北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境」『愛媛大学教育学部紀要Ⅲ自然科学．9』　愛媛大学

宮本　一夫　1989a「道後平野における弥生時代開始時期の動向」

1989b「道後平野の中世土器編年－13～15世紀を中心に－」『鷹子・樽味遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室

西尾　幸則　1986「畑寺竹ヶ谷古墳群」『愛媛県史　資料編考古』　愛媛県史編纂委員会

髙尾　和長　1996『束本遺跡4次調査地・枝松遺跡4次調査地』　松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

髙尾　和長　1998「樽味四反地遺跡5次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』　松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野　史知　1997「畑寺6号墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』　松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

小玉亜紀子　1999「樽味四反地遺跡6次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報11』　松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

加島　次郎　2003「樽味四反地8次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報15』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

松山市史料集編集委員会　1980『松山市史料集第一巻　考古編Ⅰ』

松山市史料集編集委員会　1986『松山市史料集第二巻　考古編Ⅱ』

愛媛県教育委員会　1987『愛媛県中世城館跡－分布調査報告－』

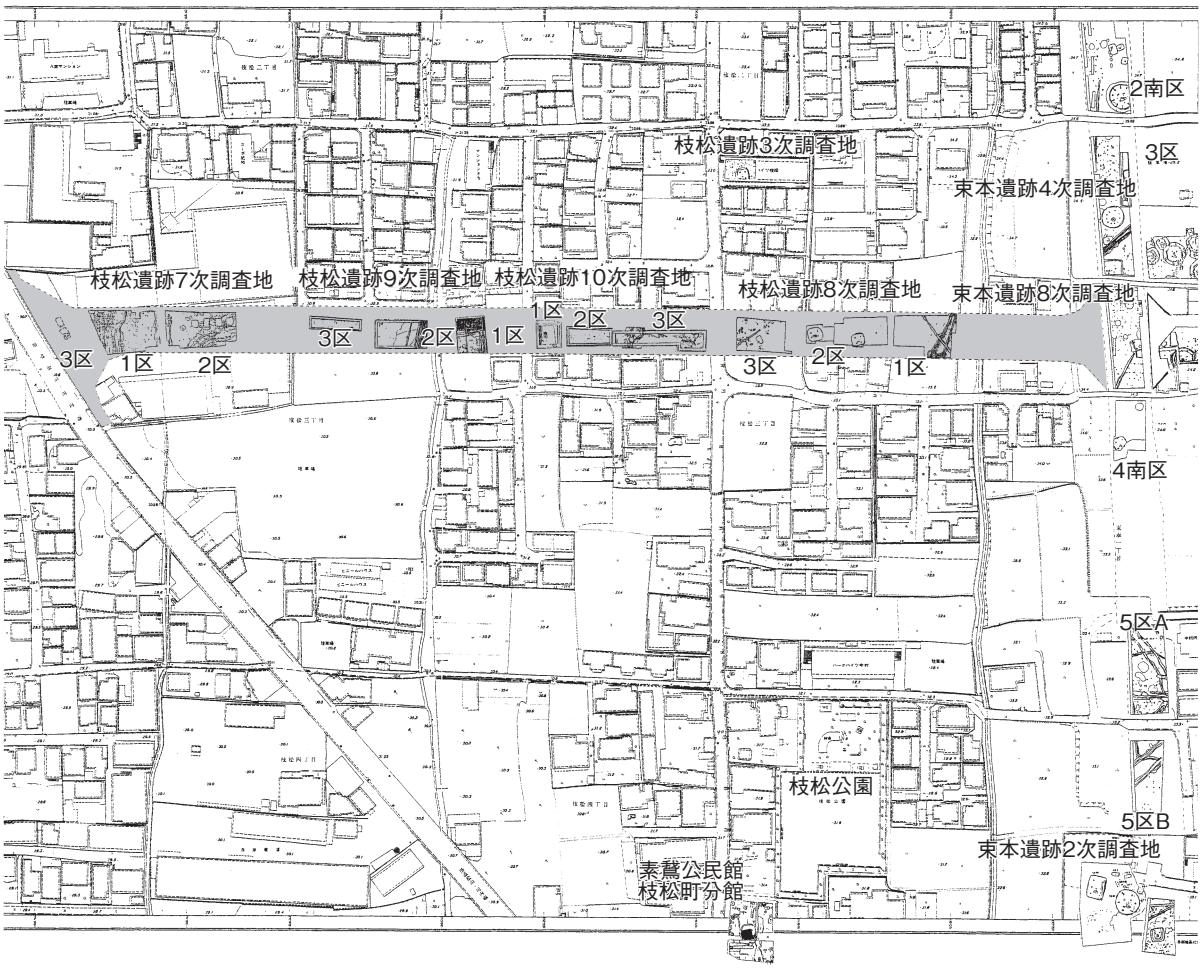
第３章　調査の概要

1.調査の経緯

今回の調査対象地は県道 334 号線（旧国道 11 号線）に接する小坂２丁目 96 － 3 から東に向かい、東部環状線の手前約 50m の枝松３丁目７－ 14　までの全長約 370m道路幅員 18m である。調査にあたっては、道路部分の土地の買収や家屋の撤去に伴って試掘調査を行い、遺構・遺物が確認された地点について順次本格調査を行なった。

遺跡名については、字名を付けないこととし、これまでに枝松町内では１次～６次の調査が行われている。したがって今回の調査地は枝松遺跡７次調査地～ 10 次調査地として調査を進めた。ただし、枝松遺跡７次調査地の１区と３区は小坂町となるが調査の都合上、枝松遺跡７次調査地とした。

各遺跡名の位置と調査地番、面積、調査期間は以下に記した。



第３図　調査地位置図（S=1:3,000）

●枝松遺跡 7 次調査地

調査地番　　1 区　小坂 2 丁目 91 － 1
　　2 区　枝松 3 丁目 327
　　3 区　小坂 2 丁目 96 － 3
調査面積　　2,100 ㎡のうち 830 ㎡（1 区 400 ㎡、2 区 400 ㎡、3 区 30 ㎡）
調査期間　　2002（平成 14）年 11 月 1 日～ 2003（平成 15）年 3 月 31 日

●枝松遺跡 8 次調査地

調査地番　　1 区　枝松 3 丁目 302 － 1
　　2 区　枝松 3 丁目 306 － 1
　　3 区　枝松 3 丁目 307 － 3
調査面積　　1688 ㎡のうち 870 ㎡（1 区 320 ㎡、2 区 300 ㎡、3 区 250 ㎡）
調査期間　　2004（平成 16）年 2 月 2 日～ 2004（平成 16）年 8 月 12 日

●枝松遺跡 9 次調査地

調査地番　　1 区　枝松 3 丁目 317 － 4
　　2 区　枝松 3 丁目 325 － 1
　　3 区　枝松 3 丁目 325 － 2、325 － 3
調査面積　　1,600 ㎡のうち 490 ㎡（1 区 160 ㎡、2 区 230 ㎡、3 区 100 ㎡）
調査期間　　2004（平成 16）年 3 月 22 日～ 2004（平成 16）年 9 月 30 日

●枝松遺跡 10 次調査地

調査地番　　1 区　枝松 3 丁目 317 － 7
　　2 区　枝松 3 丁目 316 － 1、316 － 2
　　3 区　枝松 3 丁目 315 － 7、315 － 1、315 － 8
調査面積　　1,500 ㎡のうち 475 ㎡（1 区 70 ㎡、2 区 145 ㎡、3 区 260 ㎡）
調査期間　　2004（平成 16）年 8 月 2 日～ 2004（平成 16）年 12 月 27 日

第4章　枝松遺跡7次－1区の調査－

1. 調査の経緯

1区は調査対象地の中央部にあたり、調査前は造成地である。1区の調査面積は400㎡である。以下、調査工程を略記する。

2002（平成14）年11月1日より重機により表土等の掘削を開始する。

11月 5日、遺構の検出作業を開始する。

11月 7日、測量用の仮杭を設定し調査区の測量を行う。

11月 8日、壁面の土層図作成作業を開始する。

11月13日、遺構検出作業を終了し高所作業者にて写真撮影を行う。撮影終了後、遺構配置図作成。

11月14日、中世遺構の掘り下げを開始する。順次、遺構・遺物の測量を行う。

11月28日、㈱国際航業に委託して国土座標4級基準点を設置する。

11月29日、中世遺構の掘り下げと測量作業を終了する。

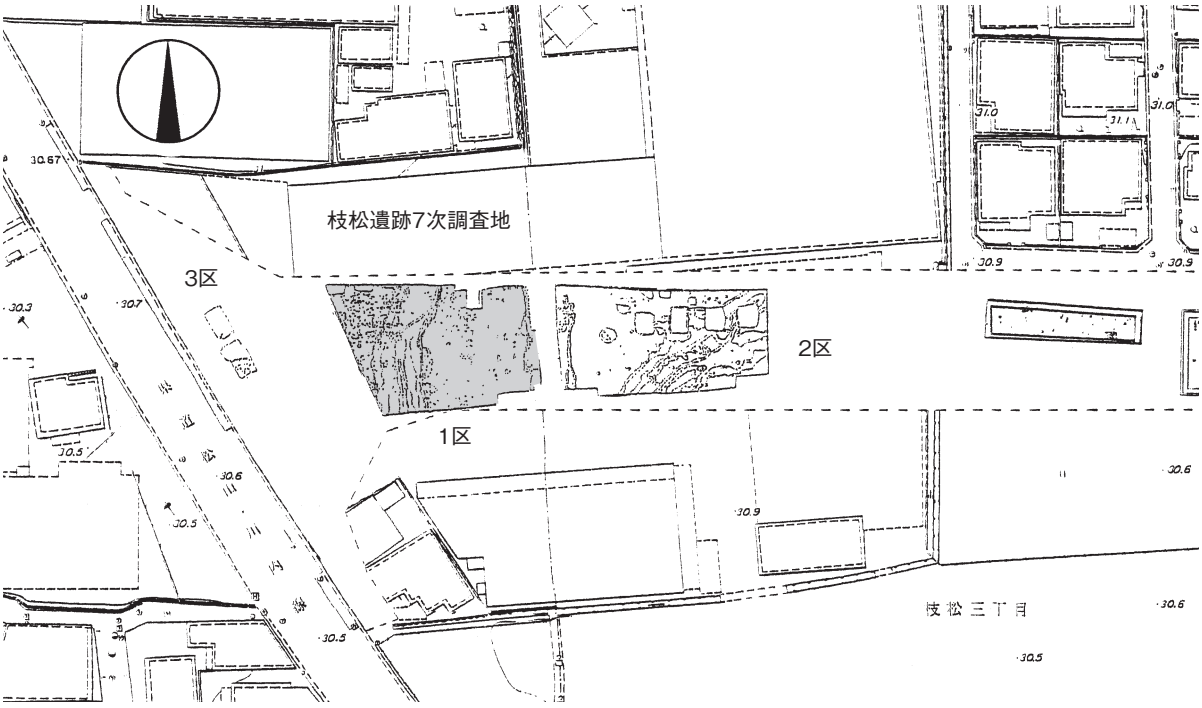
12月 2日、SD3の掘り下げを開始する。順次遺物測量作業、遺物出土状況の写真撮影を行う。

1月14日、SD3の掘り下げを完了する。

1月17日、高所作業車を利用し1区遺構完掘写真の撮影を行い現場作業を終了する。

2. 層位

1区の基本土層は、上から第Ⅰ層現代の造成土、第Ⅱ層青灰色土、第Ⅲ層赤褐色土、第Ⅳ層暗灰色土、

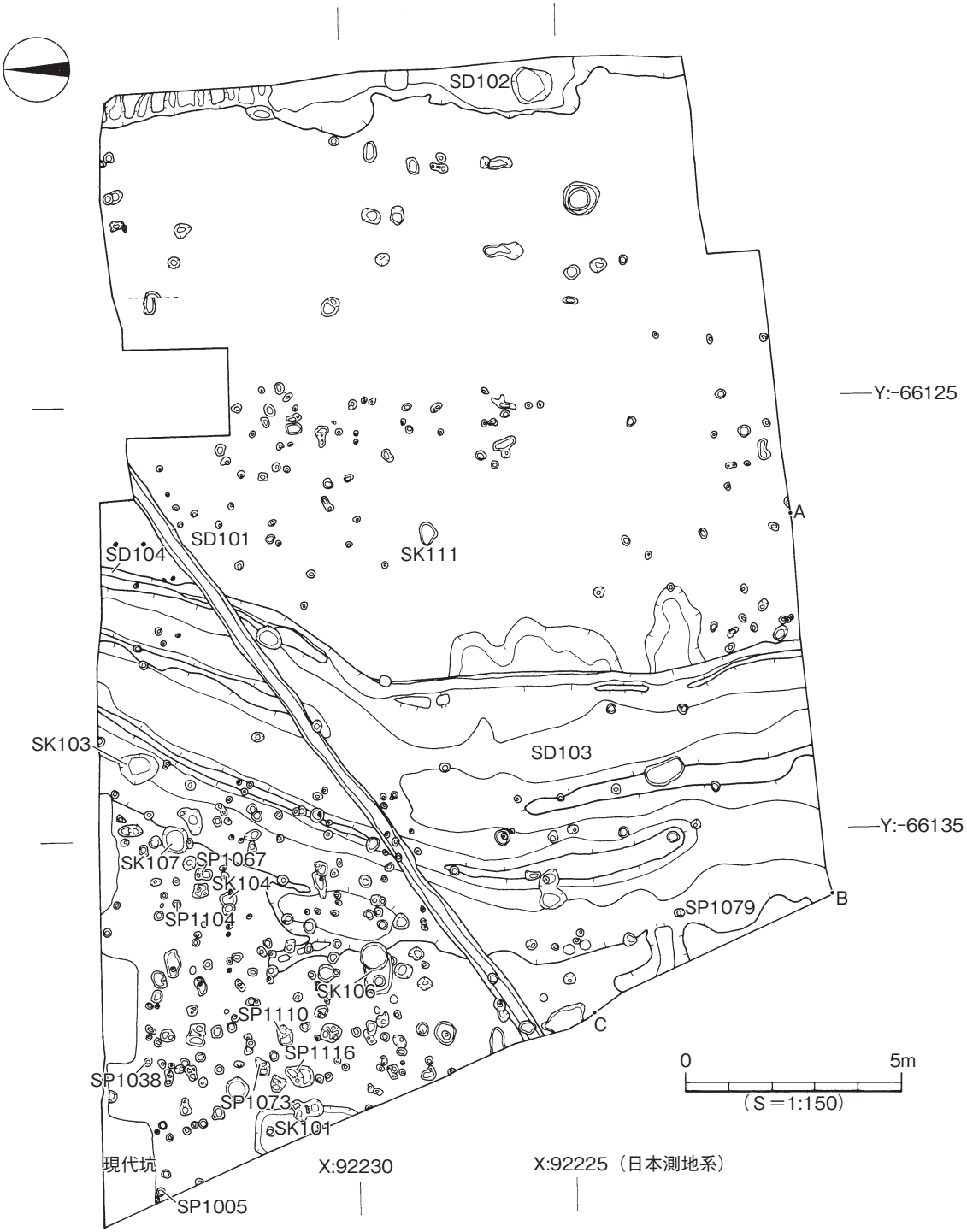


第4図　調査区位置図（S=1:1,000）

第５図　調査区位置図・区割図

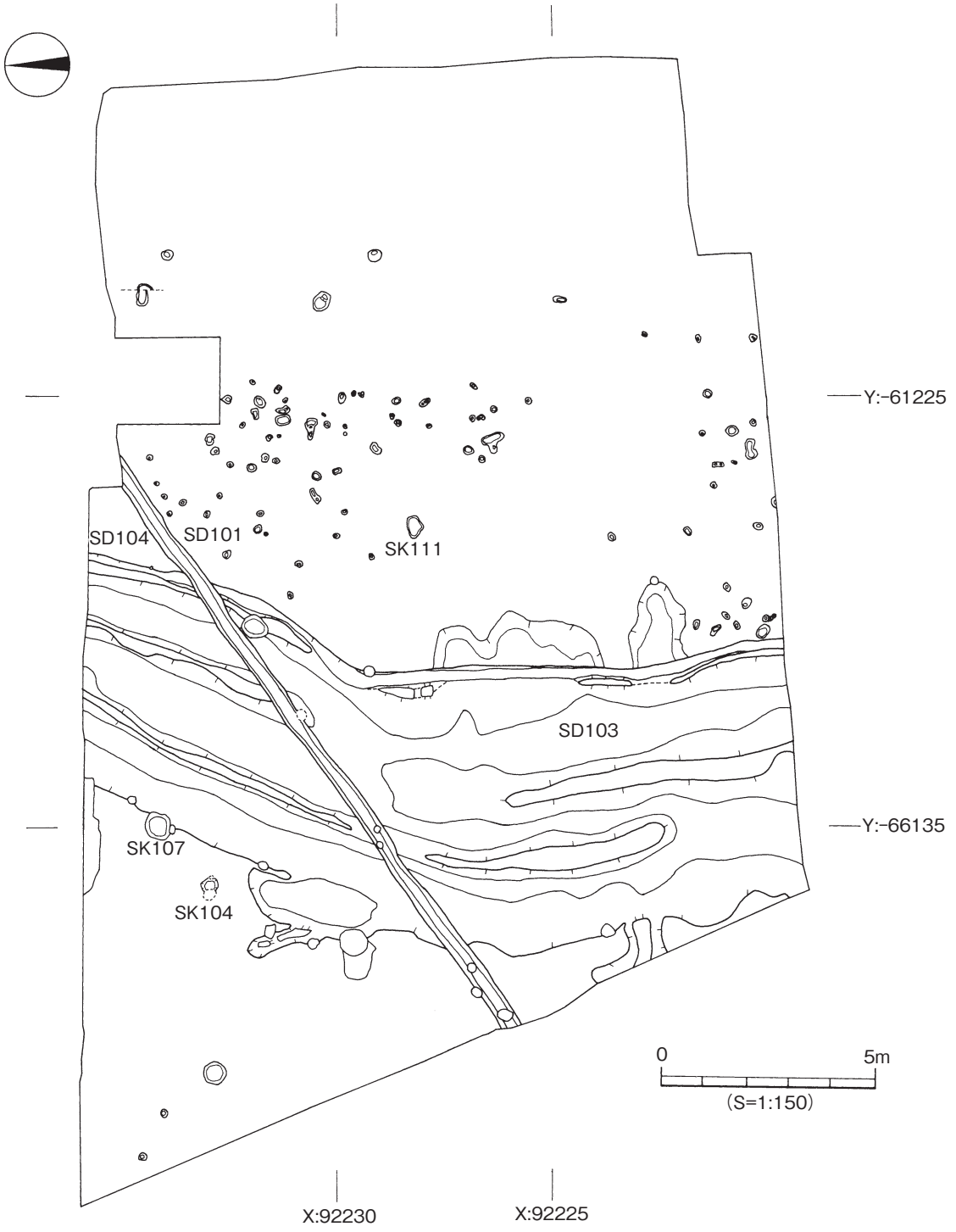
H=31.10m
A
B
西壁
撹乱
遺構
南壁
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X-1
X-2
X-3
X-4
X-5
X I
X II
H=31.10m
B
C
南壁
遺構
西壁
I 造成土（コンクリート・真砂土）
II 青灰色土（現代の耕作土）
III 赤褐色土（床土）
IV 暗灰色土
V 黄灰色土
VI 褐色粘質土
VII 黄褐色粘質土
VIII 黄灰色粘質土（小礫・粗砂混じり）
IX 黄色粘質土（粗砂混じり）
AT火山灰
X-1 黄色土
X-2 褐色土（砂混じり）
X-3 黄色土
X-4 褐色粘質土
X-5 黄白色粘質土
XI 黄褐色粘質砂
XII 黄灰色砂礫
0
1
2m
(S=1:40)

第６図　南壁・西壁土層図



第７図　１区遺構配置図

第Ⅴ層黄灰色土、第Ⅵ層褐色粘質土、第Ⅶ層黄褐色粘質土、第Ⅷ層黄灰色粘質土、第Ⅸ層黄色粘質土、第Ｘ－１層黄色土、第Ｘ－２褐色土、第Ｘ－３黄色土、第Ｘ－４褐色粘質土、第Ｘ－５黄白色粘質土、第Ⅺ層黄褐色粘質砂、第Ⅻ層黄灰色砂礫である。第Ｘ層は５層に分層した。層厚は第Ⅰ層 60 ㎝～ 70 ㎝、第Ⅱ層 10 ㎝～ 20 ㎝、第Ⅲ層２㎝～ 10 ㎝、第Ⅳ層１㎝～ 18 ㎝、第Ⅴ層 10 ㎝、第Ⅵ層 34 ㎝、第Ⅶ層 10 ㎝～ 14 ㎝、第Ⅷ層 14 ㎝、第Ⅸ層 18 ㎝～ 24 ㎝、第Ｘ層 42 ㎝～ 50 ㎝、第ＸⅠ層 23 ㎝～ 33 ㎝を測る。



第８図　弥生時代～古墳時代の遺構配置図

第Ⅱ層は現代の耕作土、第Ⅲ層は現代の床土、第Ⅴ層は中世の遺物包含層である。弥生時代～古墳時代の包含層は削平され遺存していない。第Ⅵ層以下は地山と呼ばれる層である。第Ⅹ層は、ＡＴ火山灰で１次～２次堆積層である。調査区の全域にみられるものと考えられる。

遺構の検出は、第Ⅵ層褐色粘質土上面で行い弥生時代～中世の遺構を検出した。検出した遺構は土坑 11 基、柱穴 212 基、溝４条である。以下、主な遺構・遺物について時代毎に記述する。

3. 遺構と遺物

(1) 弥生時代

土坑（SK）

SK111（第 9 図）

調査区の中央部で検出した。平面形は不整形である。検出規模は長軸 51.0 ㎝、短軸 28.0 ㎝、深さ 9.0 ㎝を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第 10 図）

壷形土器（1 ～ 2） 1 は壺の口縁部。端部は上下に拡張し外面に凹線文を施す。2 は壺の底部。器壁は薄く外面はヘラミガキが施される。1、2 は同一個体と考えられる。

時期　出土遺物より弥生時代中期末葉。

(2) 古墳時代

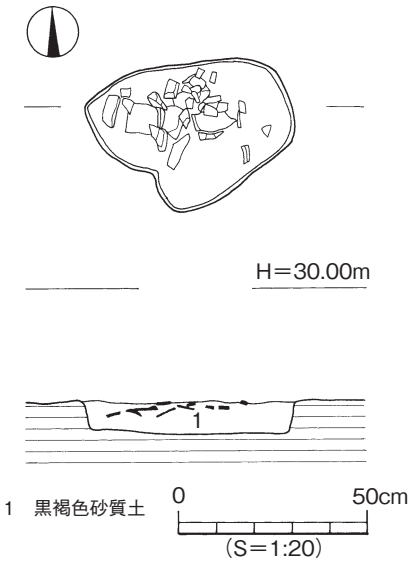
溝（SD）

SD103（第 11 図）

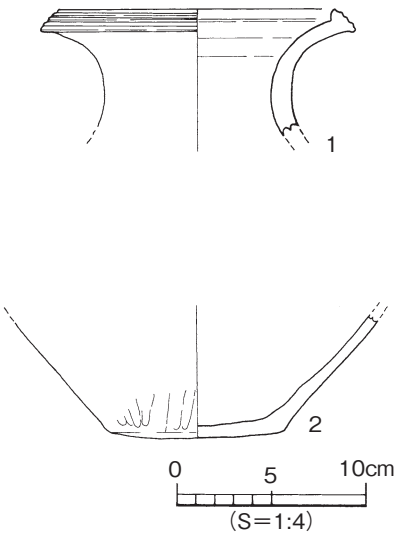
調査区の西側で検出した南北方向にのびる溝である。北側では 2 条に分岐する。溝底には 2 条から 3 条の流路痕跡がある。検出規模は長さ 17.00m、幅 5.20m ～ 6.25m、深さ 0.70m ～ 0.95m を測る。上層の埋土は黒灰色粘質土である。下層には粗砂、砂礫層が堆積する。遺物は弥生土器、土師器、石器が出土した。

出土遺物（第 12 図～第 20 図）

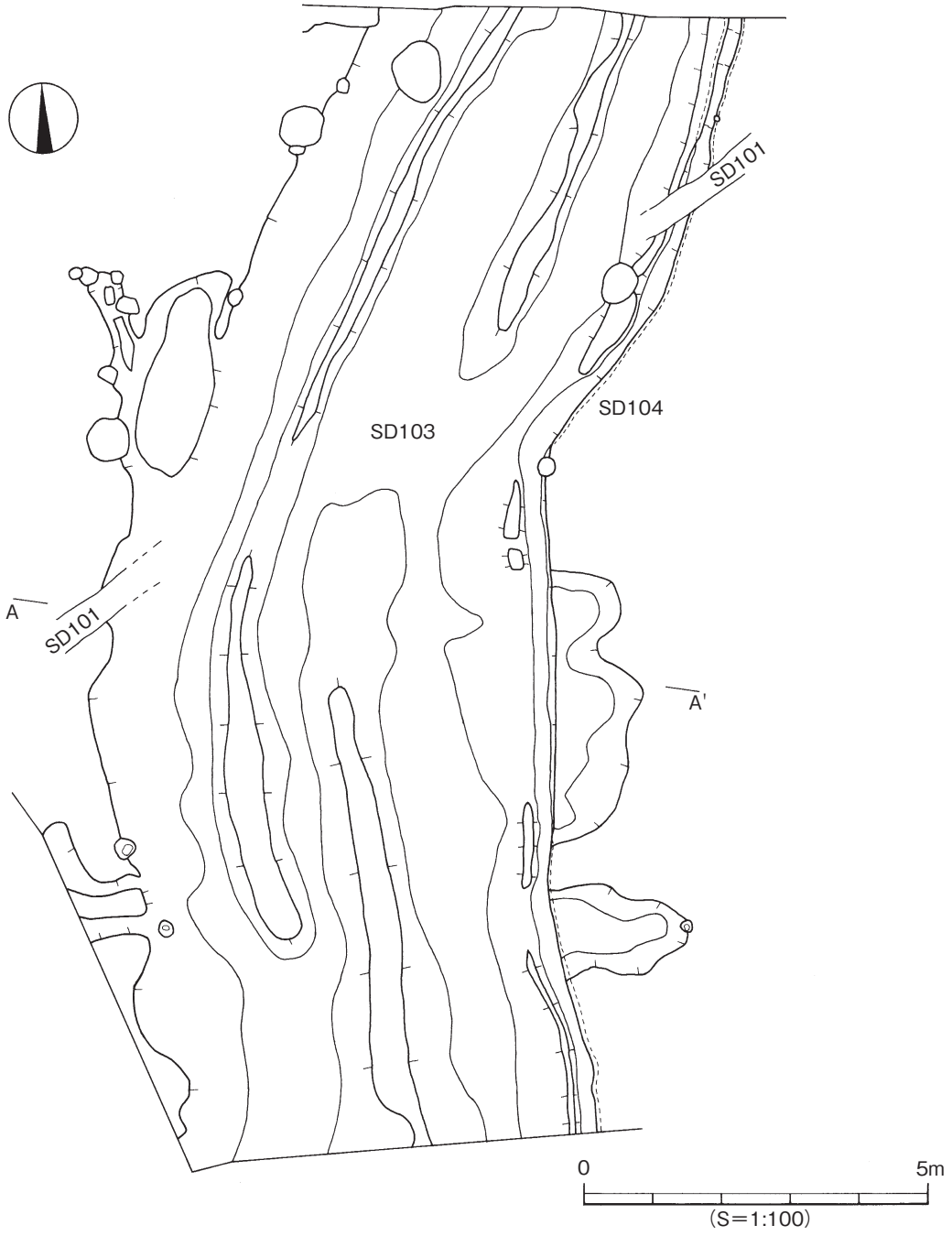
甕形土器（3 ～ 44） 3 は肩の張る胴部。口縁端部はわずかに拡張され端面は擬凹線文を施す。4 の口縁端部は肥厚する。口縁端面には擬凹線文、頸部外面に「ノ」字状文が施される。推定口径 21.2 ㎝を測る。5 は張りの弱い胴部。口縁端部は肥厚し強いナデにより凹む。推定口径 19.2 ㎝を測る。6、7 は肩部の張りが弱く、短く外反する口縁部。口縁端部は肥厚する。8 は口縁部が欠失。残高 30.7 ㎝を測る。胴部最大径を中位にもつ。胴部外面下半はヘラミガキが施される。底部はやや上げ底である。9 は平



第 9 図　SK111 測量図

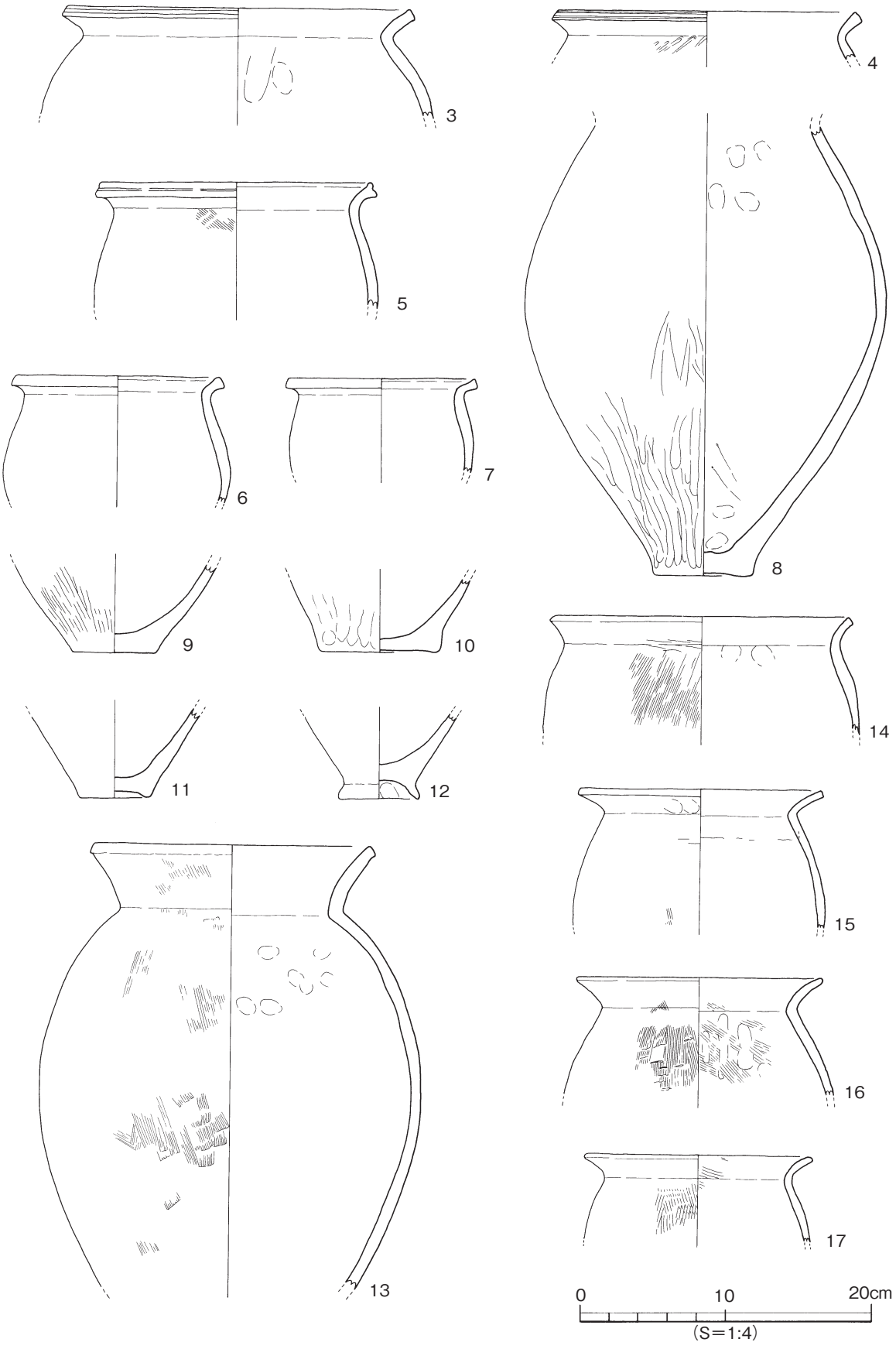


第 10 図　SK111 出土遺物実測図

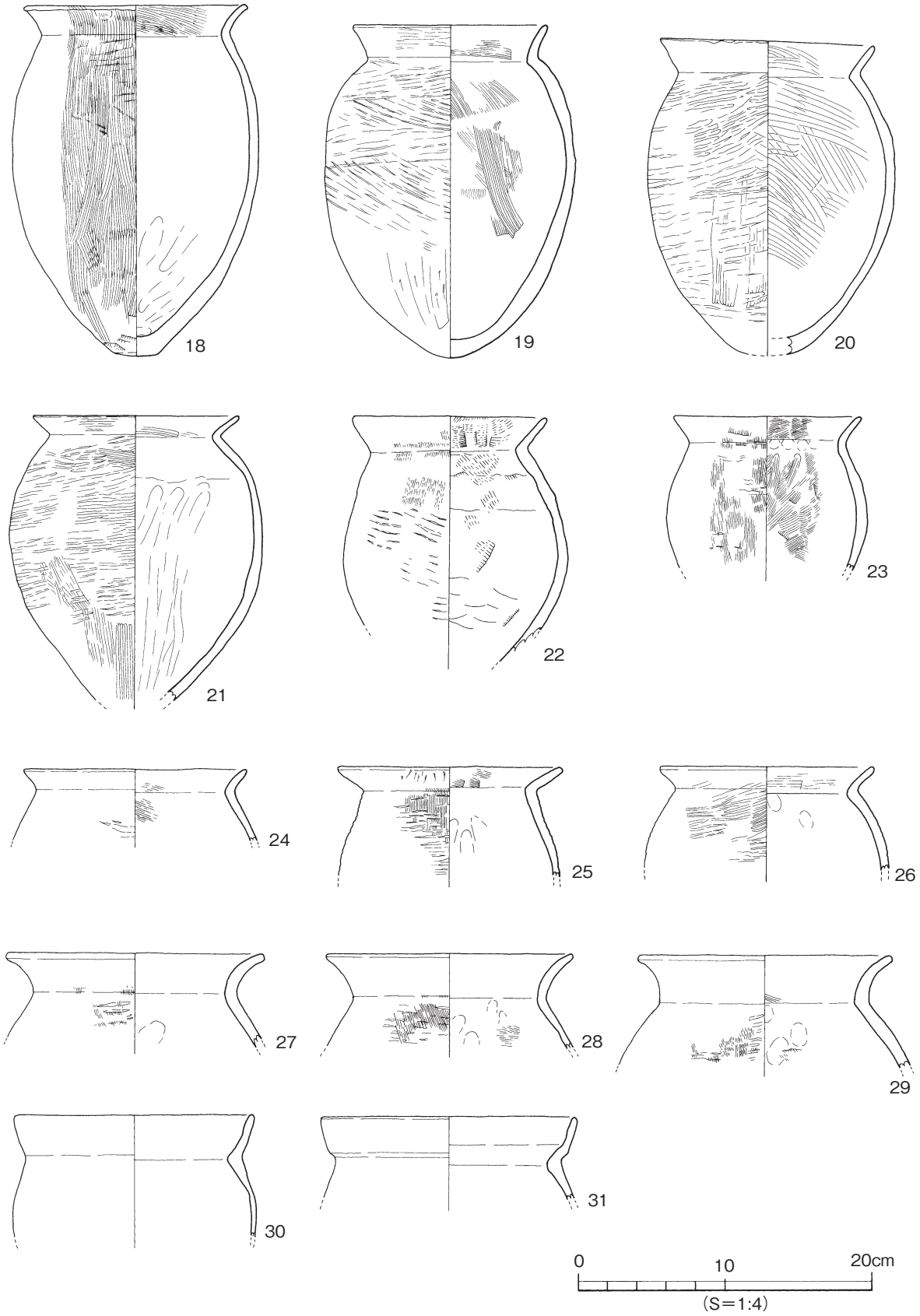


第11図　SD103・SD104 測量図

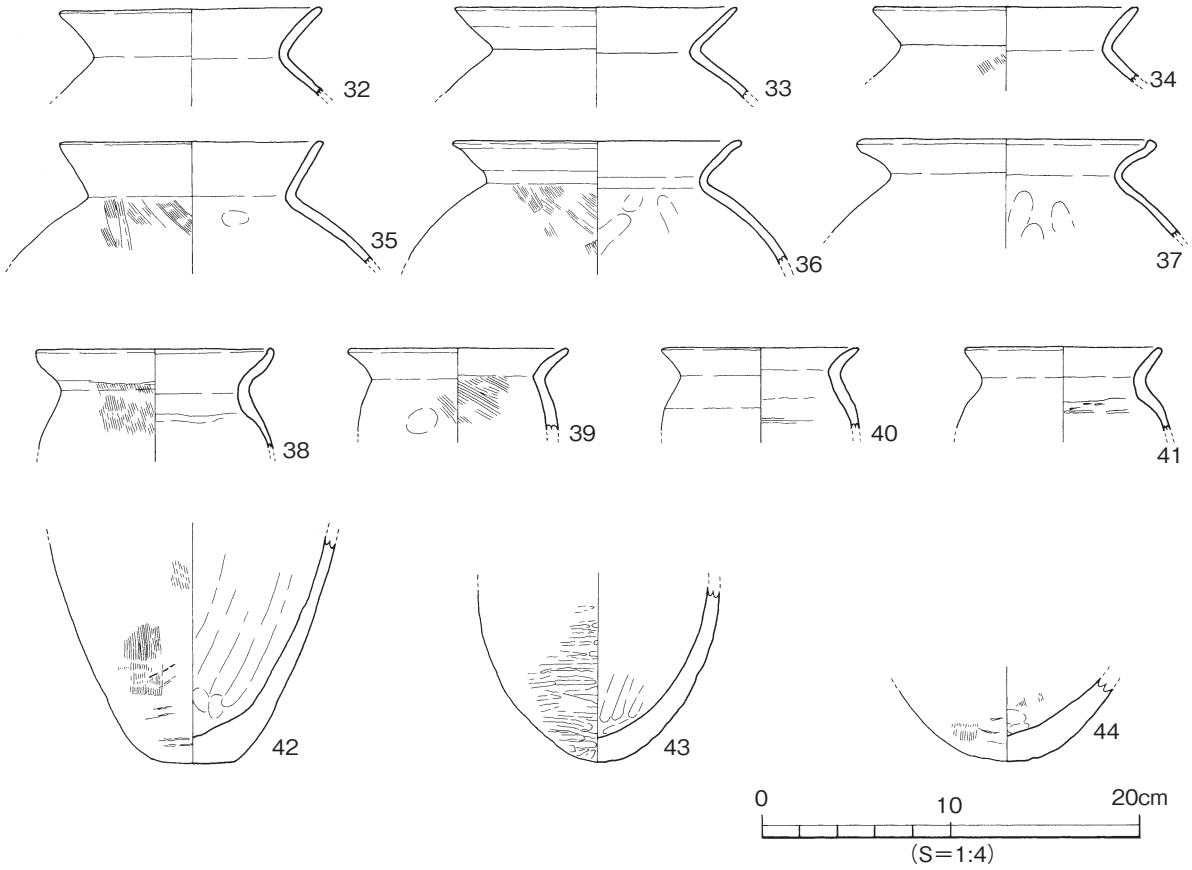
底の底部。外面はヘラミガキが施される。残高 6.1 ㎝を測る。10、11 はやや上げ底の底部。10 の外面の調整はナデ調整が施される。残高 5.0 ㎝を測る。11 の外面はナデ調整である。12 は上げ底の底部。底部外面に指頭痕を残す。残高 5.8 ㎝を測る。13 は底部が欠失する。残高 30.3 ㎝を測る。口縁部は外反し、端部は面をもつ。胴部外面はハケ目調整が施される。胴部上半の内面には指頭痕を残す。胴部外面下半には煤が付着する。14 は胴部の張りが弱く緩やかに外反する短い口縁部。口縁端部は面をもつ。頸部内面に指頭痕を残す。残高 8.1 ㎝を測る。15 ～ 17 は緩やかに外反する口縁部。15 は張りの弱い胴部。口縁端部は断面「コ」の字状を呈する面をもつ。口縁部外面に指頭痕を残す。16 の口縁端部は丸みをおびた面をもつ。外面の調整はタタキ後ハケ目調整される。17 の口縁端部はやや肥厚し丸い。外面はハケ目調整が施される。18 はやや長胴の胴部。推定口径 15.2 ㎝、器高 23.9 ㎝を測る。口縁部は外反する。口縁端部はナデにより下方にわずかに肥厚する。底部は小さい平底。外面の調整は口縁部はハケ目調整、胴部はタタキ後ハケ目調整される。胴中位に煤が付着する。19 は卵形を呈する胴部。推定口径 13.1 ㎝、器高 22.6 ㎝を測る。口縁部は外反し端部は丸い。胴部外面の調整は上部はタタキ目、下部はヘラケズリ調整される。底部は尖り底である。器壁は厚い。20 は卵形を呈する胴部である。底部は欠失する。推定口径 14.6 ㎝、残高 21.5 ㎝を測る。口縁部は外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。調整は胴部外面 2/3 はタタキ目が施され、底部付近は縦方向のハケ目調整が施される。内面は粗いハケ目調整が施される。21 は肩の張る胴部。口縁部は外上方にのびる。口縁部の器壁は薄い。残高 19.4 ㎝を測る。22 は外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。外面はタタキ、ハケ目調整である、胴部内面上半には粘土紐の巻き上げ痕を残し、下半はケズリが施される。残高は 17.8 ㎝を測る。23 は緩やかに外反する口縁部。口縁端部は丸い。調整は外面タタキとハケ目、内面はハケ目調整である。頸部内面に指頭痕を残す。24 は短く外反する口縁部。口縁端部は丸い。調整は内外面ともハケ目調整である。推定口径 15.2 ㎝を測る。25 は張りの弱い胴部から外上方に大きく開く口縁部である。口縁端部は丸くおさめる。残高 7.4 ㎝を測る。26 は張りの強い胴部。口縁部は外上方にのびる。口縁端部は丸い。残高 7.0 ㎝を測る。27 は外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。胴部内面に指頭痕を残す。残高 6.4 ㎝を測る。28 は外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。胴部内面に指頭痕を残す。29 は外傾する頸部から外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。胴部内面に指頭痕を残す。30、31 は張りの弱い胴部。頸部内面が肥厚して稜をもつ。口縁部は内湾して上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。30 は推定口径 16.3 ㎝を測る。31 は推定口径 17.5 ㎝を測る。32 は外上方にのびる口縁部。器壁は薄い。調整は磨滅のため不明である。33 の口縁部はやや内湾して上方にのびる。口縁端部は丸く器壁は薄い。推定口径 14.8 ㎝を測る。34 は外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。推定口径 14.0 ㎝を測る。35 の口縁部は外上方にのびる。口縁端部は面をもつ。36 は肩の張る胴部。口縁部は外上方にのびて端部近くで僅かに外反する。口縁端部は丸くおさめる。調整は外面ハケ目、内面はナデ調整である。器壁は薄い。37 の口縁部は外反したのち口縁端近くで内湾して上方にたちあがり、端部は内に肥厚する。胴部内面の調整はナデ調整である。器壁は薄い。38 ～ 41 は小型品。38 は張りの弱い胴部より内湾して上方にたちあがる口縁部。口縁端部は丸みをもつ。頸部内面は肥厚する。39 は緩やかに外反する口縁部。口縁端部は丸い。40 は僅かに外反する口縁部。口縁端部は丸い。推定口径 10.4 ㎝を測る。41 はやや直立する頸部から外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸みを帯びた面をもつ。頸部内面は肥厚し、器壁が厚い。調整は内外面ともナデ調整が施される。42 ～ 44 は胴部から底部にかけての破損片。42 は平底の底部から緩やかにのびる。外面はタタキ目調整が施される。残高 12.0 ㎝を測る。44 は丸底気味の底部。残高 4.4 ㎝を測る。



第12図　SD103出土遺物実測図(1)

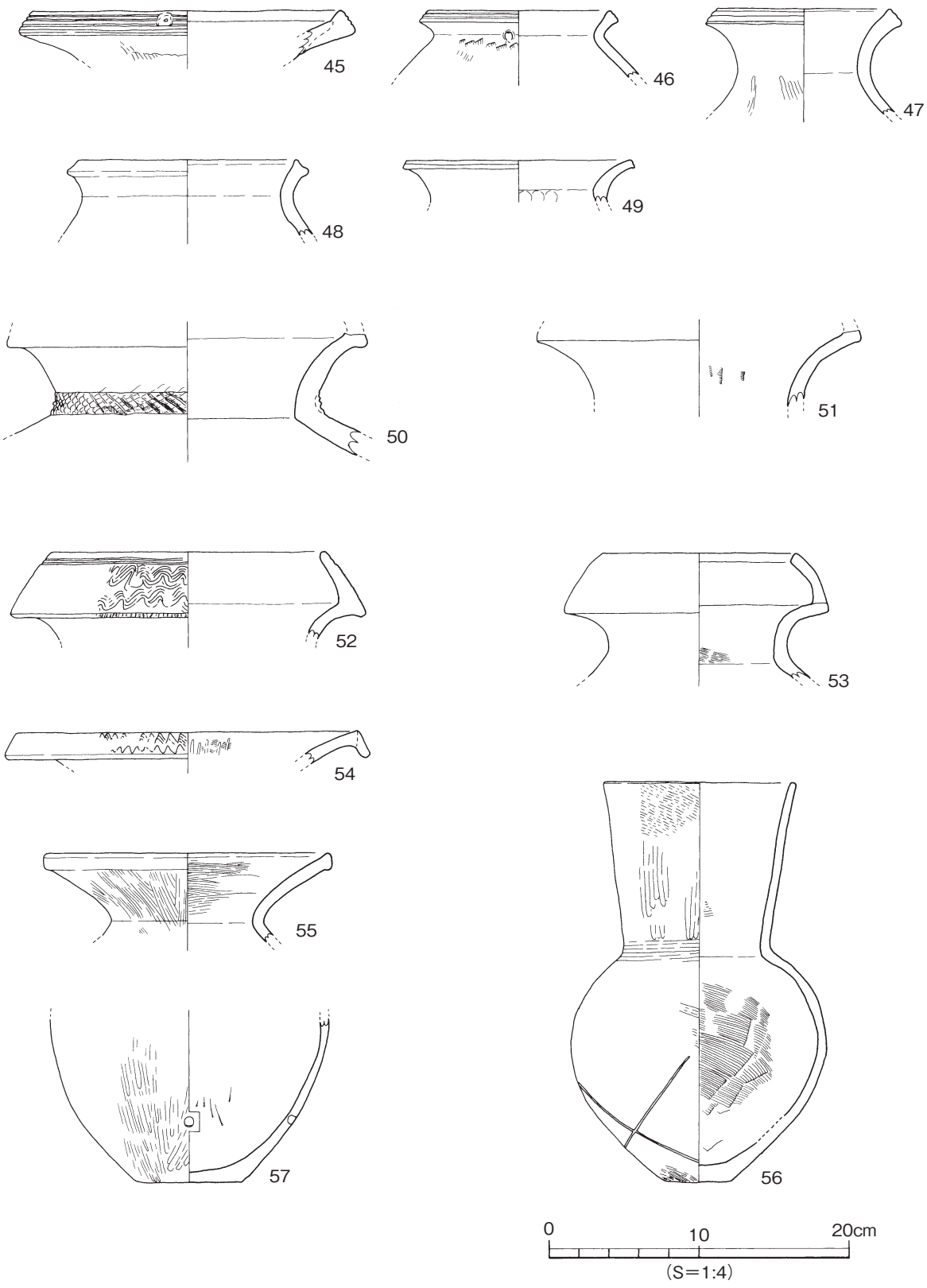


第 13 図　SD103 出土遺物実測図(2)



第14図　SD103出土遺物実測図(3)

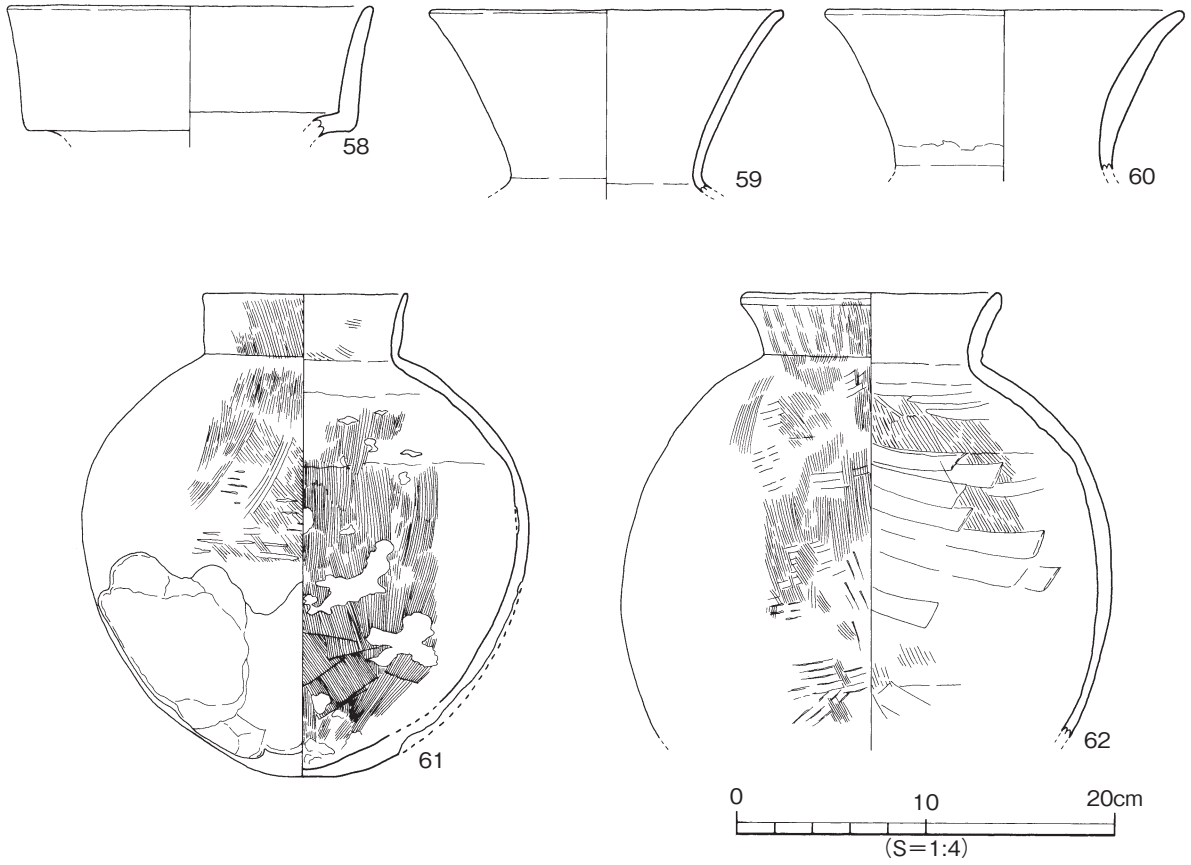
壺形土器（45 ～ 62）　45は口縁部片。口縁端部は上方に拡張される。口縁端面には凹線文と円形浮文を施す。残高3.3㎝を測る。46は短く外上方に開く口縁部。口縁端部外面に凹線文を施す。頸部に「ノ」字状の刺突文を巡らす。頸部と口縁部の境に焼成前の円孔が一カ所に穿たれる。47は外反する頸部から外に開く口縁部。口縁端部は肥厚し外面には凹線文を施す。48は短く外反する口縁部。口縁端部外面はナデによりくぼむ。49は短く外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。50 ～ 53は複合口縁壺。50は口縁部が欠失する。頸部に刻目突帯を施す。51は口縁部が欠失する。頸部は外反する。調整は外面ナデ、内面はハケ目、ナデ調整である。52は口頸部は外反し口縁部は内傾する。口縁部外面には沈線文と波状文が施され、口縁接合部外面には刻目が施される。53は大きく外反する頸部に内湾してたちあがる口縁部である。口縁端部は面をもつ。口縁部外面には文様を施さない。54は口縁端部が下方に垂下する。口縁部外面には山形文が施される。55は締まった頸部から外反して大きく開く口縁部である。口縁端部は上下にやや肥厚する。口縁部の調整は内外面ともハケ目調整、口縁端部はナデ調整である。56は胴部がほぼ完形の長頸壺である。推定口径12.8㎝、器高26.7㎝を測る。口縁部は外上方に直立し、口縁端部は丸い。胴部は丸く、底部は平底である。胴部外面に「×」状の線刻が施される。頸部外面の調整はヘラミガキ、口縁部はハケ目調整が施される。57は胴上半が欠失。平底の底部から内湾してたちあがる胴部。胴部外面には焼成前の未貫通の直径0.7㎝の孔が一カ所に穿たれる。58は推定口径19.4㎝を測る。僅かに外反して直立にのびる口縁部。口縁端部は丸い。59は締まった頸部から緩やかに外反して長くのびる口縁部。口縁端部は丸みをおびる。器壁が薄い。60の口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。器壁は厚い。61はほぼ完形品。口径10.8㎝、器高



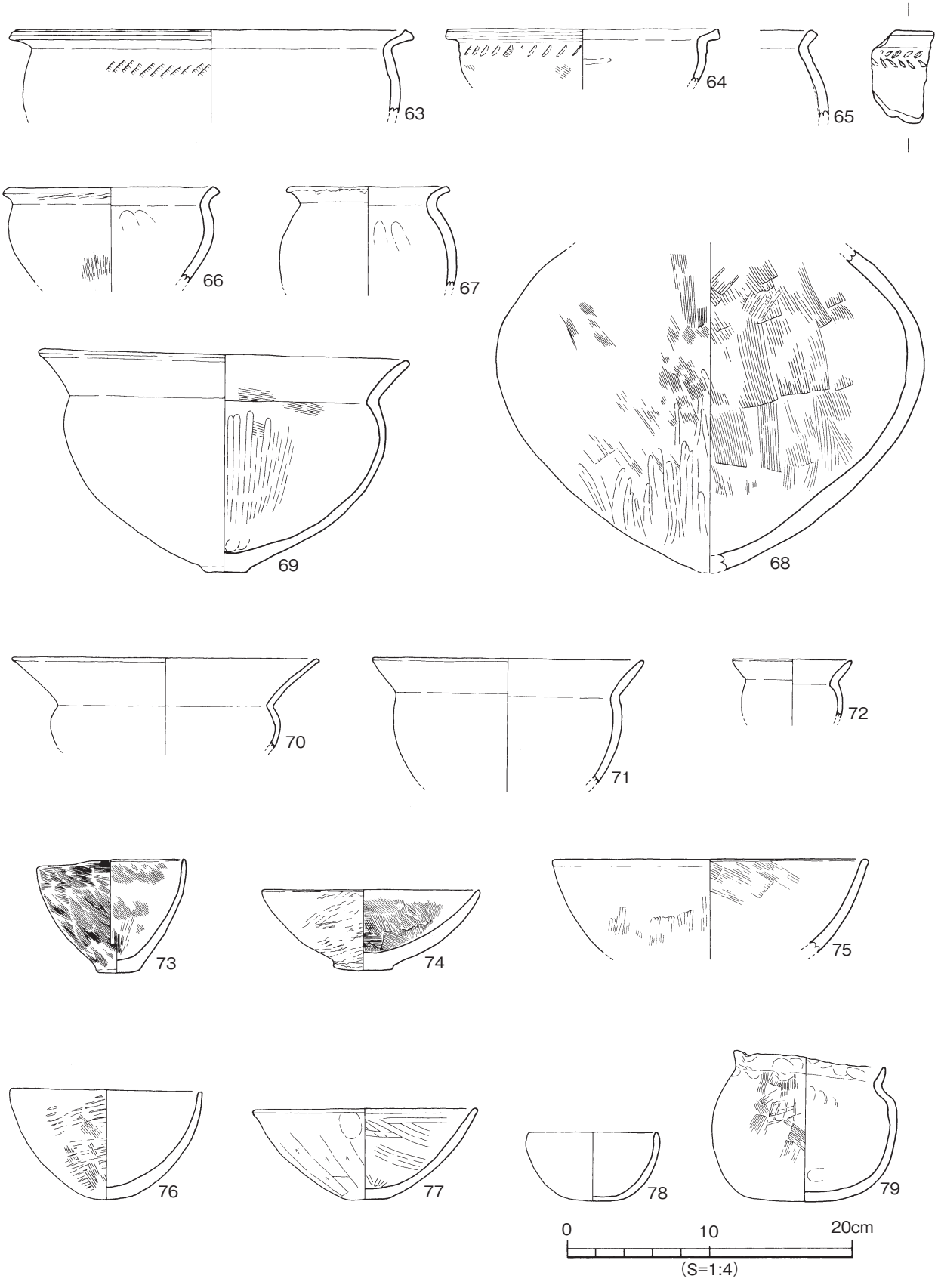
第 15 図　SD103 出土遺物実測図(4)

25.4 ㎝を測る。底部は丸底で胴部は球形を呈する。口縁部は上方に直立し、端部は丸くおさめる。胴部外面の調整は、タタキ後ハケ目調整が施される。胴部内面の調整はハケ目調整である。胴部外面下半の剥離が著しい。62 はやや肩の張る胴部。口径 13.8 ㎝、残高 23.5 ㎝を測る。やや外反する口縁部。口縁端部は丸く外に面をもつ。胴部外面の調整はタタキ後ハケ目調整、内面はハケ目調整とヘラケズリが施される。

鉢形土器（63 ～ 79） 63 は短く屈曲して水平に開く口縁部。推定口径 28.2 ㎝を測る。口縁端部はナデにより肥厚し、端面は凹む。頸部外面に「ノ」字状の刺突文が施される。64 は短く屈曲して水平に開く口縁部。口縁端部はナデにより肥厚し、端面は凹む。頸部外面に「ノ」字状の刺突文が施される。65 は小片。残高 6.1 ㎝を測る。短く外傾する口縁部。口縁端部は面をもつ。頸部外面に矢羽根状の刺突文が施される。66 は短く外反する口縁部。口縁端部はやや肥厚して面をもつ。推定口径 15.1 ㎝を測る。67 は外反して水平気味に開く口縁部。口縁端部は面をもつ。推定口径 11.5 ㎝を測る。68 は残高 22.4 ㎝を測る大型品。口縁部と底部は欠失する。扁球形の胴部。胴部外面過半の調整はヘラミガキを施す。内面の調整はハケ目調整である。69 はほぼ完形品。口径 25.9 ㎝、底径 2.9 ㎝、器高 15.6 ㎝を測る。頸部内面に稜をもち屈曲して口縁部は外反する。口縁端部は面をもつ。底部は小さな平底である。胴部内面は丁寧なヘラミガキが施される。70 は扁球形の胴部から屈曲して緩やかに外反する口縁部。推定口径 21.5 ㎝を測る。器壁は薄い。71 は外傾する口縁部。口縁端部は丸い。72 は口縁部が外傾する小型品。残高 4.0 ㎝を測る。73 ～ 78 は直立ないし外傾する口縁をもつものである。73 は完形品。口径 10.4 ㎝、底径 3.0 ㎝、器高 7.9 ㎝を測る。口縁端部は面をもつ。底部は丸みをもっ



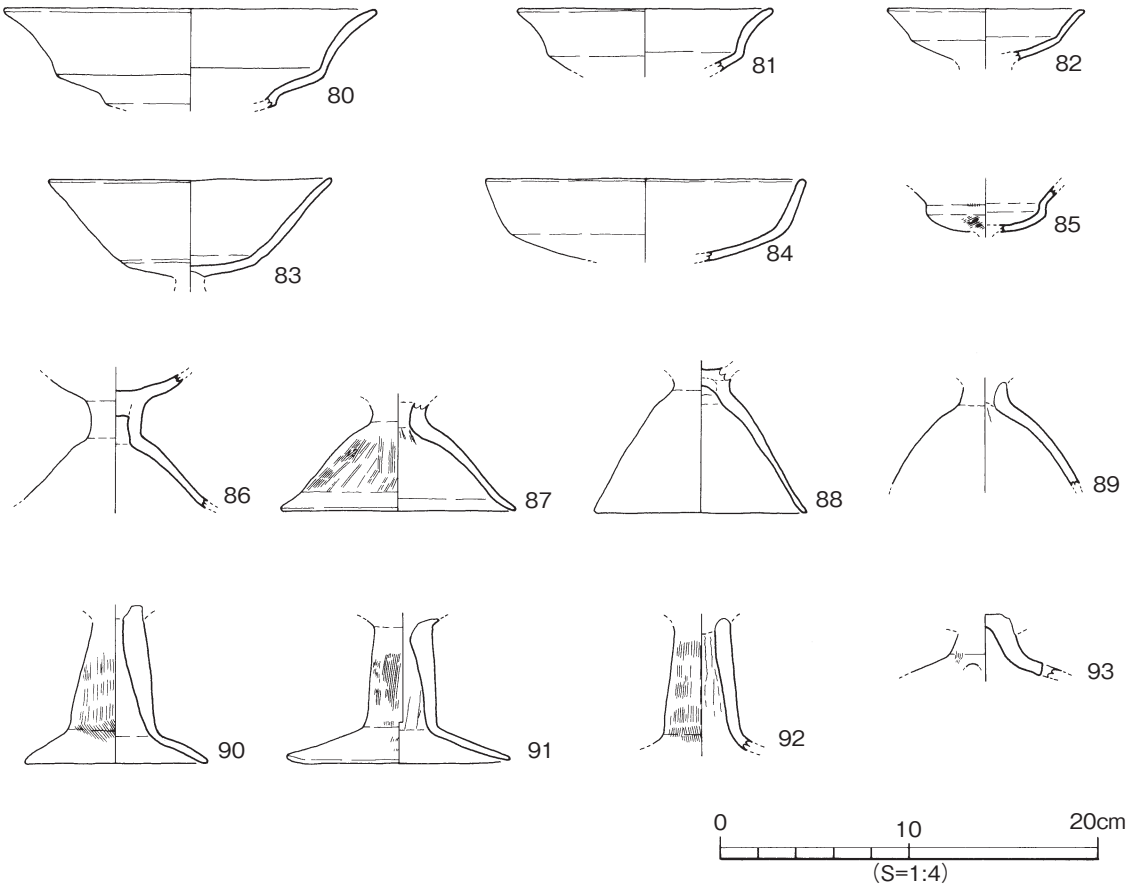
第 16 図　SD103 出土遺物実測図(5)



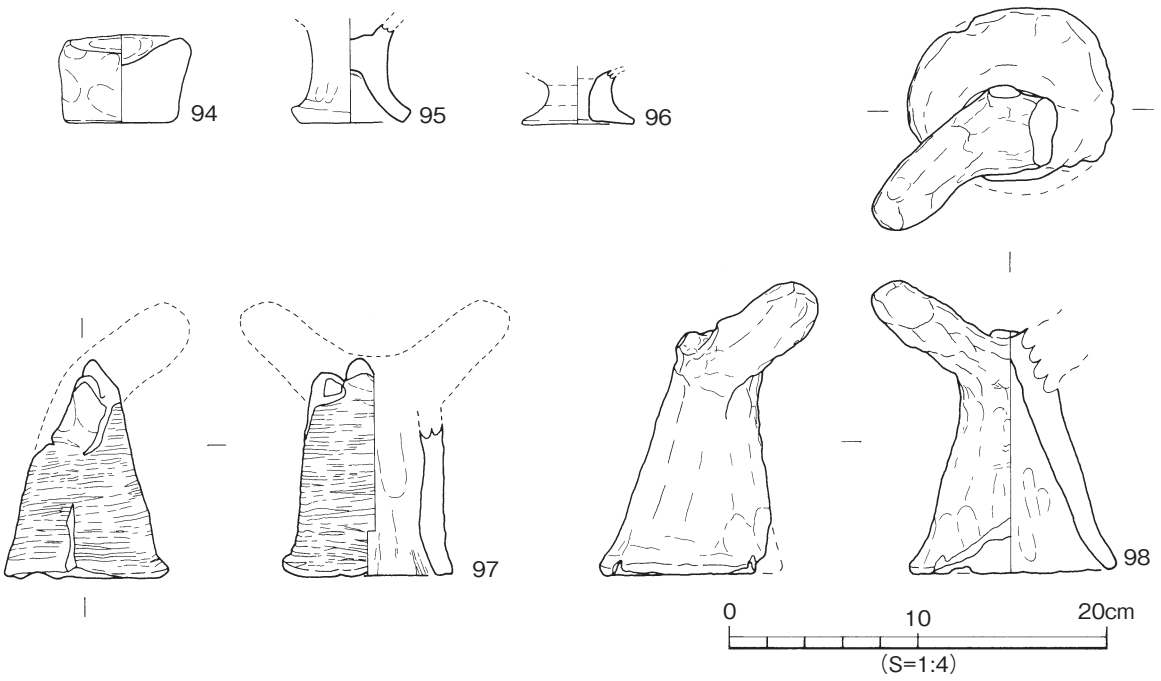
第 17 図　SD103 出土遺物実測図(6)

た平底である。内面の調整はハケ目調整である。74は器高5.7㎝を測る。口縁端部は先細り僅かな面をもつ。底部は突出した丸みをもった平底である。外面は底部から口縁部にかけて叩き目を残す。75は内湾して上方にたちあがる口縁部。76は口径13.4㎝、器高7.8㎝を測る。底部は丸底である。外面の調整はタタキ後ハケ目調整、内面はヘラ状工具によるナデが施される。77はほぼ完形品。口径15.7㎝、器高6.4㎝を測る。口縁端部は丸くおさめる。底部は丸みをもった平底。外面の調整はヘラケズリとナデ調整、内面は粗いハケ目調整が施される。78は器壁が薄い。口縁端部は尖り気味に丸い。底部は丸みをもった平底。79は器形が歪む。内傾した頸部より上方に短くたちあがる口縁部。端部は尖り気味に丸い。口縁部は指頭痕を残す。底部は平底。外面に煤が付着する。

高坏形土器（80～93）　80～85は坏部片。80は屈曲部から大きく外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。残高5.2㎝を測る。81は屈曲部から外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。残高3.3㎝を測る。82は屈曲部から短く外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。83は坏部が深い。口縁部は屈曲部から緩やかに外反してのびる。口縁端部は丸くおさめる。84は浅い坏部である。口縁部は屈曲部から上外方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。85は小型品。口縁部は欠失する。浅い坏部は上方に立ち上がったのち屈曲して口縁部に続く。86は口縁部、脚裾は欠失する。坏部との接合部はすぼまって直立する。調整は磨滅のため不明である。87は脚部。内湾気味に広がる。脚裾は外反する。裾端部は丸くおさめる。88は脚部。坏との接合部から直線的に外に開く脚裾部。89は坏部と脚裾は欠失する。86と器形が似る。脚裾は内湾気味に広がる。90～93は脚部片である。90、91



第18図　SD103出土遺物実測図(7)

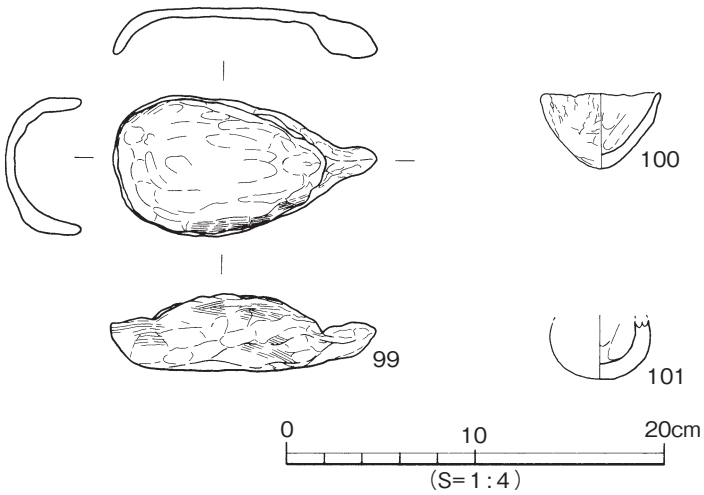


第 19 図　SD103 出土遺物実測図(8)

は屈曲して開く裾部。92 は脚裾部が欠失する。93 は低脚である。屈曲する脚裾に円孔が穿たれる。

支脚（94 ～ 98）　94 は中実で受部は傾斜をもって凹む。95 は中実で低脚をもつ。96 は中空。97、98 は中空で突起がつくものである。97 の突起部は欠失する。前面は平坦となる。外面の調整はタタキ痕を顕著に残す。98 は背面にも突起をもつ。外面の調整はナデ調整。

杓子形土器（99）　体部は楕円形を呈する。柄部は突起状となる。長さ 14.0 ㎝、幅 7.4 ㎝を測る。



第 20 図　SD103 出土遺物実測図(9)

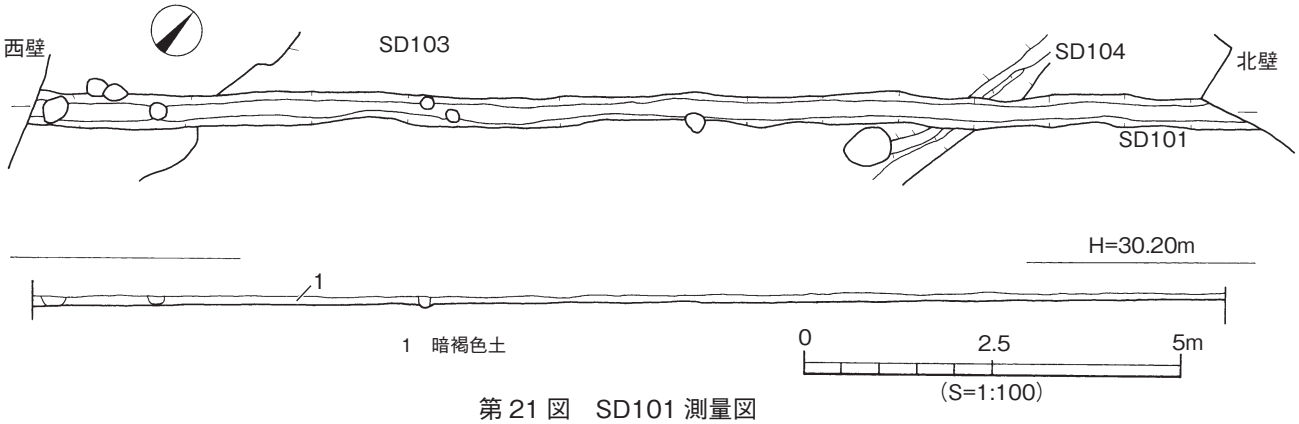
手捏土器（100、101）　100 は内面は指頭痕を顕著に残す。101 は内外面ともナデ調整である。

時期　出土遺物より古墳時代初頭には埋没したものと考えられる。

SD104（第 11 図）

SD104 は SD103 の東岸沿いを走る溝である。SD103 検出時には平面的に確認できなかった。後の土層断面の精査によって確認したものである。土層観察の結果、SD103 を切る事を確認した。検出規模は 16.20m、幅 0.50m ～ 0.70m、深さ 0.35m ～ 0.42m を測る。埋土は黒灰色粘質土である。遺物は出土していない。

時期　SD103 の埋土色に似ることから古墳時代初頭以降に埋没したものと考えられる。

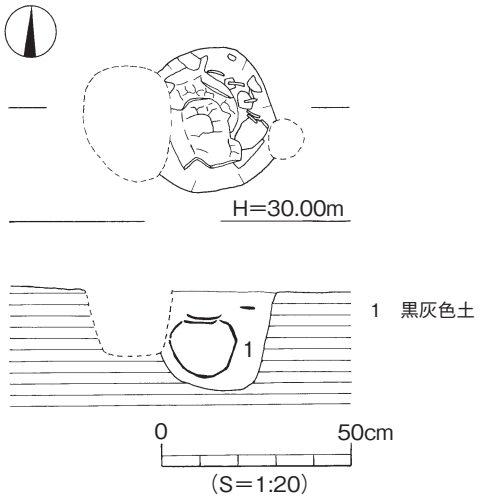


第 21 図　SD101 測量図

SD101（第 21 図）

調査区を北東方向から南西方向に横切る溝である。SD103 と SD104 を切る。検出規模は長さ 15.75m、幅 0.32m ～ 0.47m、深さ 0.09m を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は須恵器の胴部片が出土したのみで、図示できる遺物はない。

時期　出土遺物と遺構の切り合い関係により古墳時代中期以降に埋没したものと考える。



第 22 図　SK104 測量図

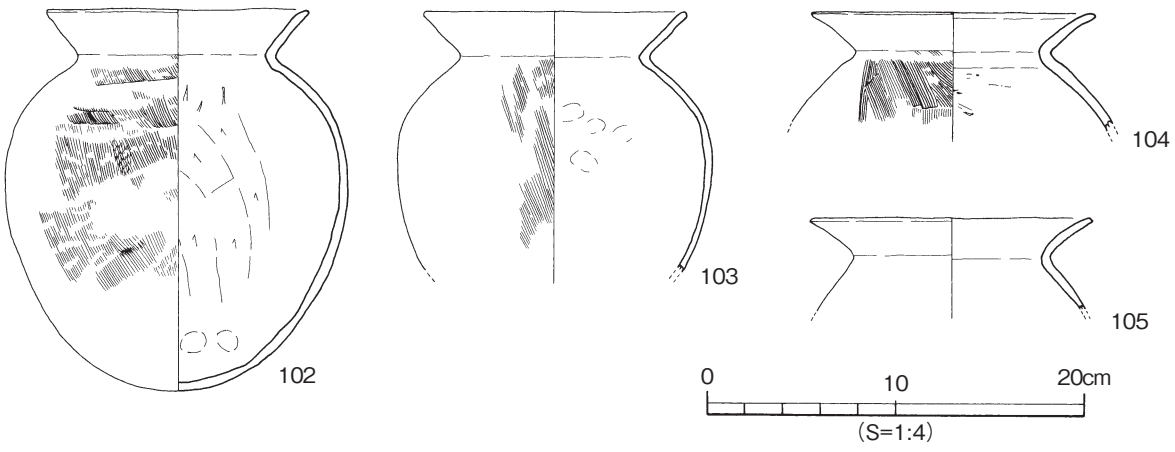
土坑（SK）

SK104（第 22 図）

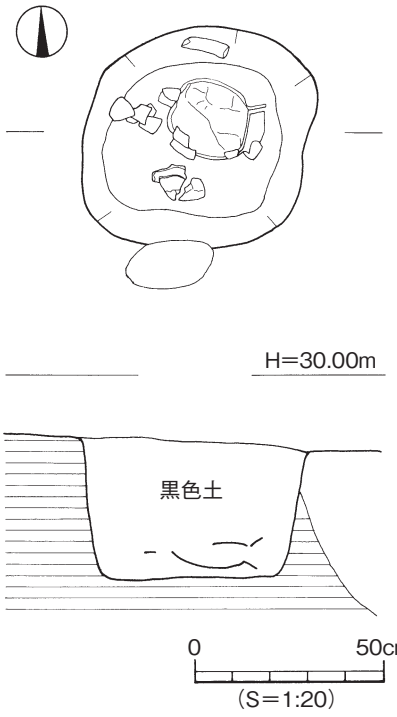
調査区の西側で検出した。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径 38.0 ㎝、深さ 26.5 ㎝を測る。埋土は黒灰色土である。西側の一部を中世の柱穴に切られる。遺物は土師器の甕が出土した。

出土遺物（第 23 図、102 ～ 105）

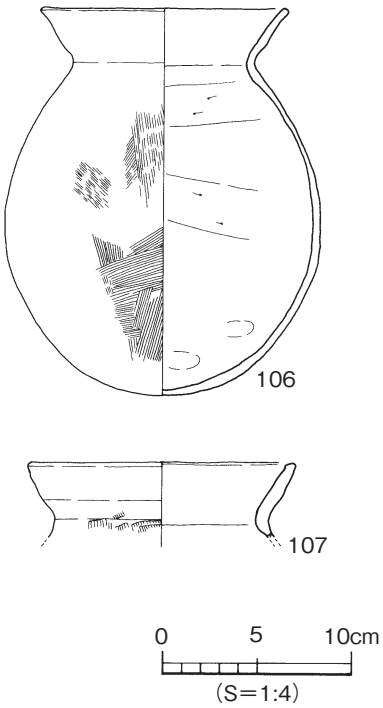
102 は口径 14.0 ㎝、器高 21.0 ㎝を測る。丸底の底部。口縁部は外上方にのびる。口縁端部は丸みを帯びる。胴部外面の調整はハケ目とナデ調整、内面はケズリが施される。底部内面に指頭痕を残す。103 は底部が欠失する。口縁部



第 23 図　SK104 出土遺物実測図



第 24 図　SK107 測量図



第 25 図　SK107 出土遺物実測図

は外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。胴部外面の調整はハケ目とナデ調整が施される。内面には指頭痕を残す。104 はやや外反気味に開く口縁部。口縁端部は丸くおさめる。胴部外面の調整はハケ目調整、内面はケズリが施される。105 はやや外反気味に外上方にのびる口縁部である。調整は内外面とも磨滅のため不明である。

時期　出土遺物より古墳時代前期とする。

SK107（第 24 図）

調査区の北西部で検出した。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径 59.0 ㎝、深さ 37.0 ㎝を測る。埋土は黒色土である。SD103 を切る。遺物は土師器の甕が出土した。

出土遺物（第 25 図、106・107）

106 は丸底の底部にやや下膨れの胴部である。口縁部は外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。外面の調整はハケ目調整が施される。107 は口縁部片。やや内湾気味にたちあがる口縁部。口縁端部は内傾する面をもつ。

(3) 中世

中世遺構としたものには時期の判別できる出土遺物があった遺構の外、出土遺物が無く灰色系の埋土を伴うものについても中世以降の遺構として第 26 図に配した。

土坑（SK）

SK101（第 27 図）

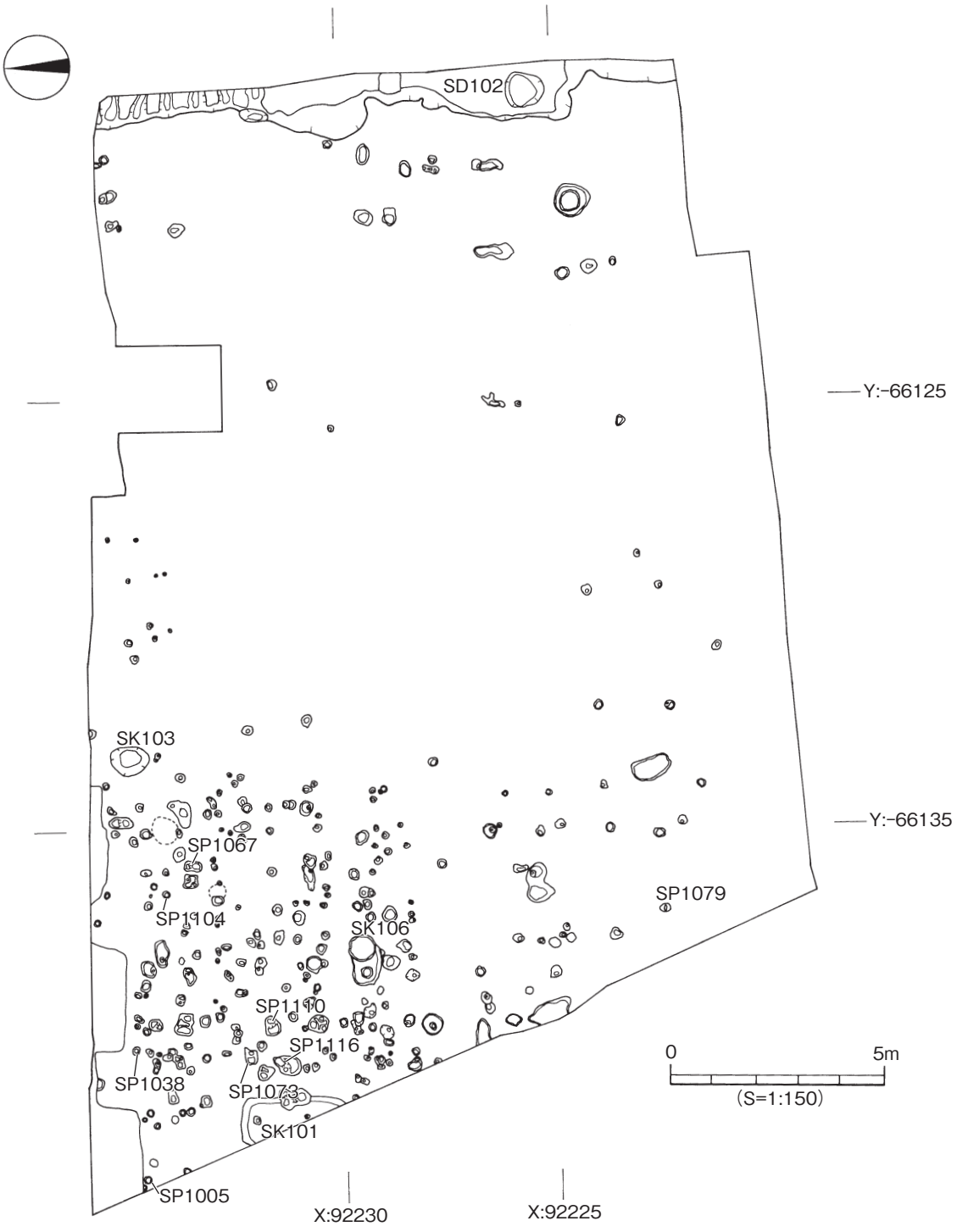
調査区の西側で検出した。西側は調査区外となり全容は不明である。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出規模は長軸 2.35m、短軸 1.05m、深さ 0.11m を測る。埋土は灰色土である。

遺物は土師器、瓦器が出土しているが細片のため図示するものはない。

時期　出土遺物より 14 世紀以降と考えられる。

SK106（第 27 図）

調査区の西側で検出した。SP1205、SP1202 に切られ全容は不明である。平面形は隅丸長方形を呈



第 26 図　中世以降の遺構配置図

するものと考えられる。検出規模は長軸 92.0 ㎝、短軸 69 ㎝、深さ 20.0 ㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は土師器、瓦器、青磁が出土しているが細片のため図示するものはない。

時期　出土遺物より 14 世紀以降と考えられる。

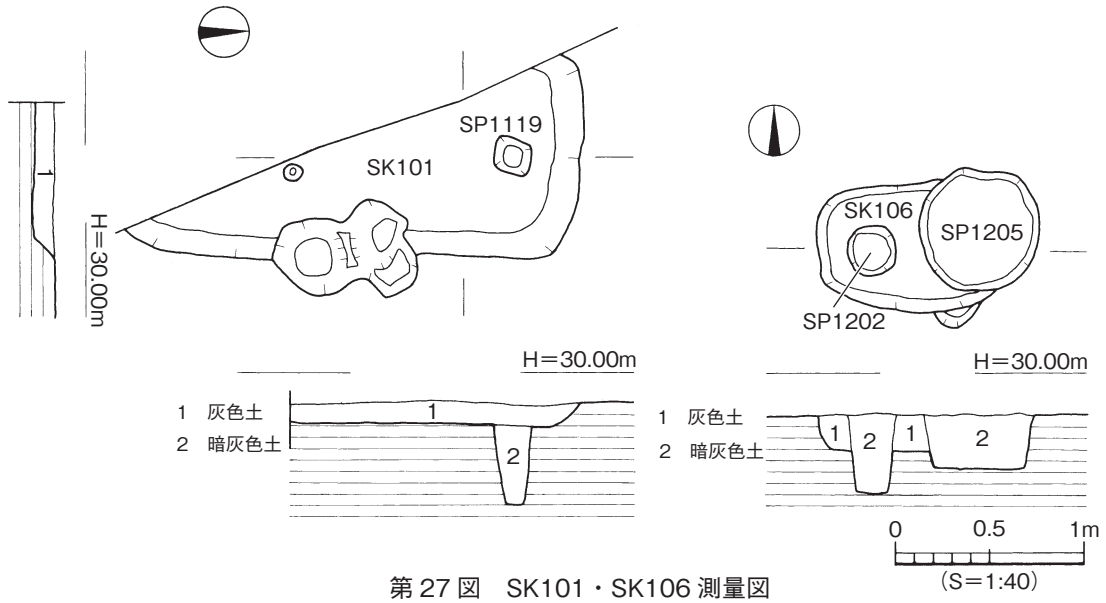
SK103（第 28 図）

調査区中央部の北側で検出した。平面形は楕円形を呈する。検出規模は長軸 94.0 ㎝、短軸 71.0 ㎝、深さ 30.0 ㎝を測る。埋土は灰色土である。SD103 を切る。遺物は土師器、置きカマドが出土した。

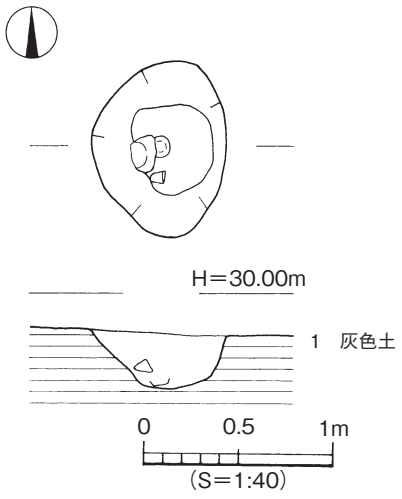
出土遺物（第 29 図、108・109）

108 は置きカマドである。焚き口部の破片と考えられる。内外面に煤が付着する。109 は土師器皿。底部の切り離しは回転糸切りである。

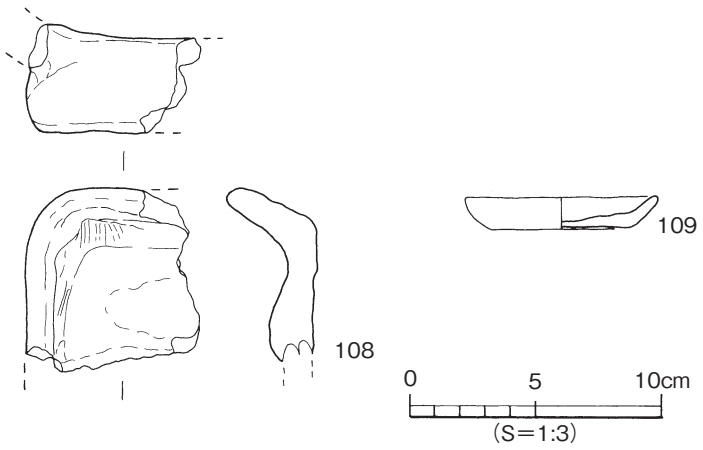
時期　出土遺物より 14 世紀と考えられる。



第 27 図　SK101・SK106 測量図



第 28 図　SK103 測量図



第 29 図　SK103 出土遺物実測図

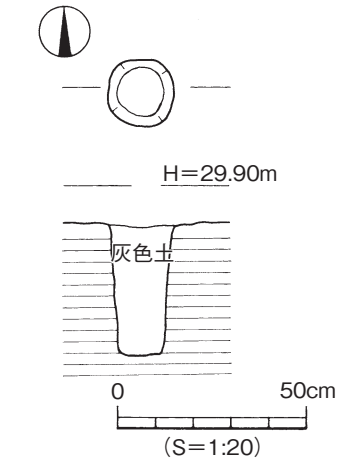
柱穴（SP）

SP1005（第 30 図）

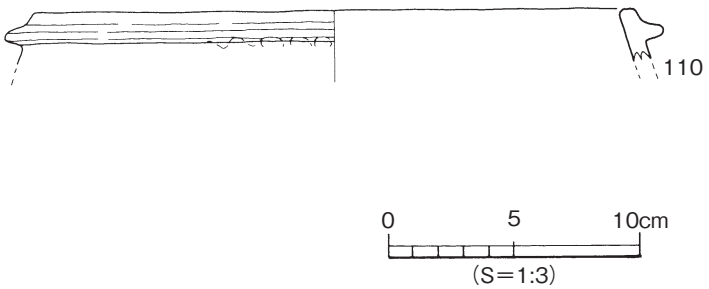
調査区の北西隅での検出である。平面形は円形を呈する。検出規模は直径 18.0 ㎝、深さ 34.0 ㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第 31 図、110） 110 は羽釜の口縁部片。

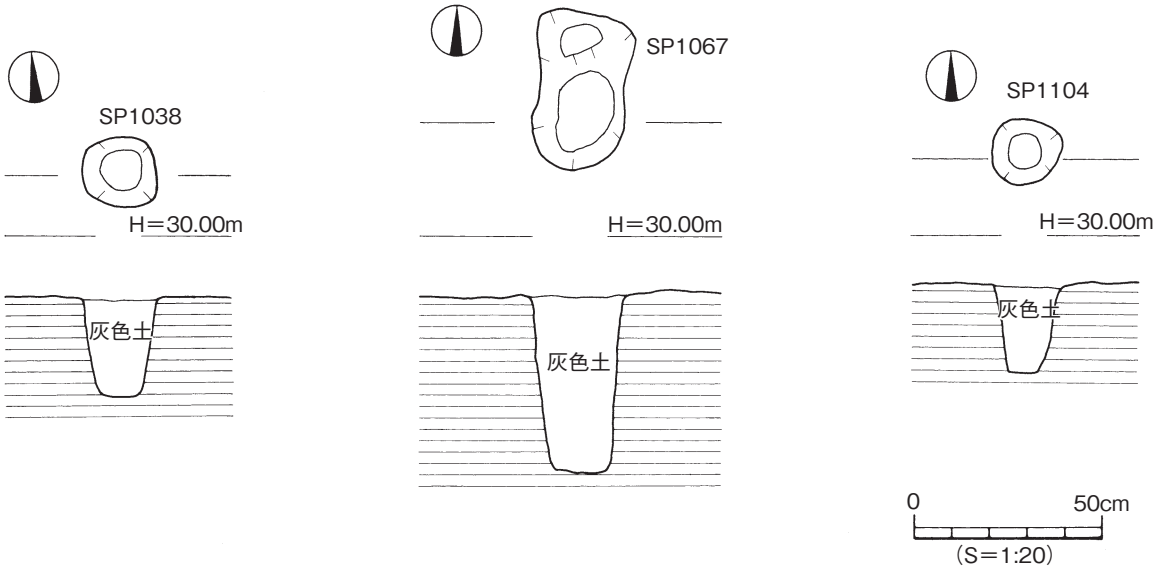
時期 出土遺物より 14 世紀と考える。



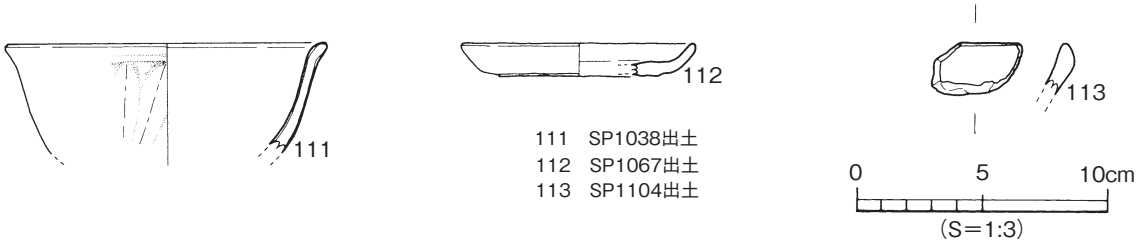
第 30 図 SP1005 測量図



第 31 図 SP1005 出土遺物実測図

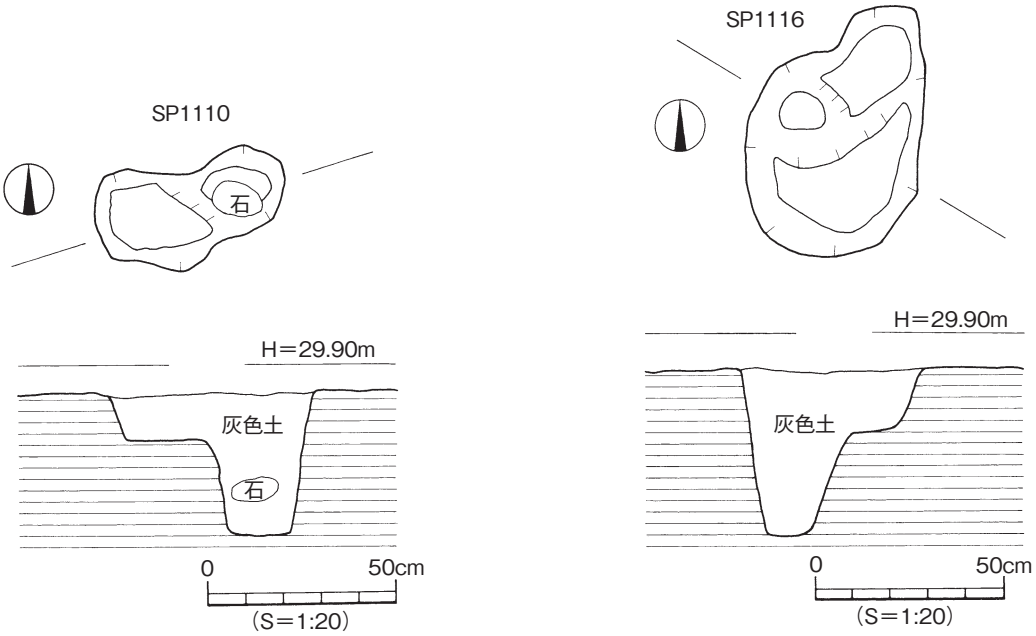


第 32 図 SP1038・SP1067・SP1104 測量図

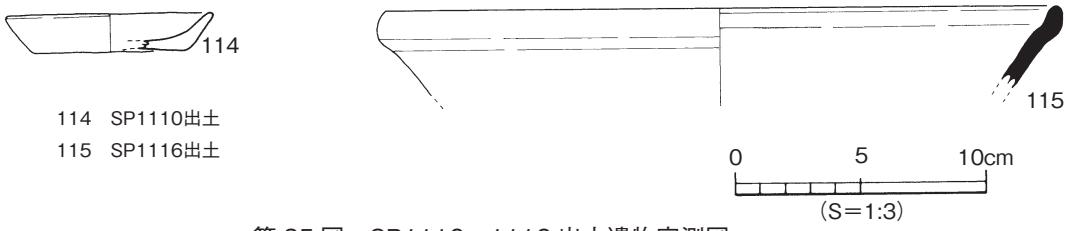


111 SP1038出土
112 SP1067出土
113 SP1104出土

第 33 図 SP1038・SP1067・SP1104 出土遺物実測図



第 34 図　SP1110・1116 測量図



114　SP1110出土
115　SP1116出土

第 35 図　SP1110・1116 出土遺物実測図

SP1038（第 32 図）

調査区北西部での検出である。平面形は円形を呈する。検出規模は直径 20.0 ㎝、深さ 26.8 ㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は青磁が出土した。

出土遺物（第 33 図、111）

111 は龍泉窯の青磁碗である。外面に鎬蓮弁文を施す。

時期　出土遺物より 14 世紀と考える。

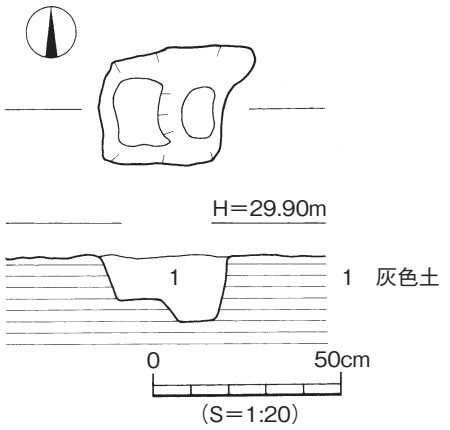
SP1067（第 32 図）

調査区北西部での検出である。平面形は不整形を呈する。検出規模は長軸 44.0 ㎝、短軸 24.0 ㎝、深さ 46.0 ㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は土師器が出土した。

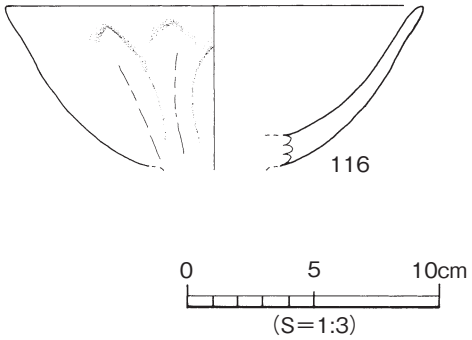
出土遺物（第 33 図、112）

112 は土師器皿。底部の切り離しは回転糸切りである。

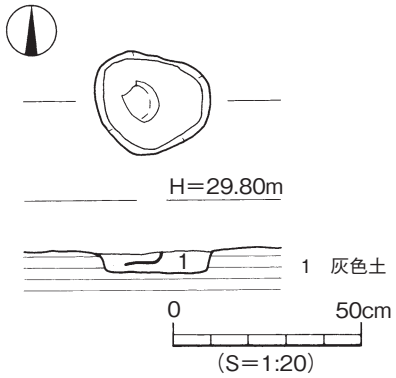
時期　出土遺物より 14 世紀以降。



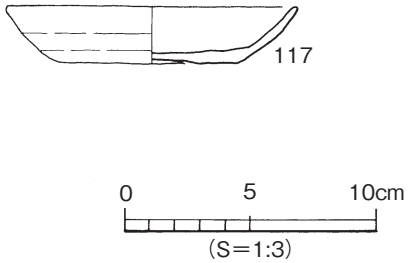
第 36 図　SP1073 測量図



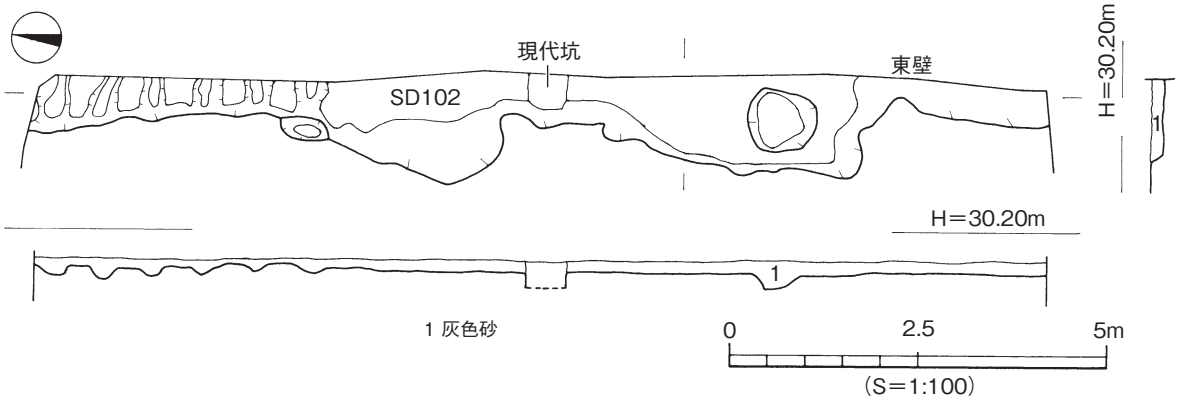
第 37 図　SP1073 出土遺物実測図



第 38 図　SP1079 測量図



第 39 図　SP1079 出土遺物実測図



第 40 図　SD102 測量図

SP1104（第 32 図）

調査区北西部での検出である。平面形は円形を呈する。検出規模は直径 18.5 ㎝、深さ 22.0 ㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は須恵器が出土した。

出土遺物（第 33 図、113）

113 は東播系須恵器こね鉢の口縁部片である。

時期　出土遺物より 14 世紀以降。

SP1110（第 34 図）

調査区北西部での検出である。平面形は不整形を呈する。堀方は段掘りとなる。検出規模は長軸 55.0 ㎝、短軸 22.0 ㎝、深さ 12.0 ㎝～ 38.0 ㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第 35 図、114）

114 は土師器皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。

時期　出土遺物より 14 世紀以降。

SP1116（第 34 図）

調査区北西部での検出である。平面形は不整形を呈する。堀方は段掘りとなる。検出規模は長軸 71.0 ㎝、短軸 45.0 ㎝、深さ 16.0 ㎝～ 43.0 ㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は須恵器が出土した。

出土遺物（第 35 図、115）

115 は東播系須恵器こね鉢の口縁部片である。

時期　出土遺物より 14 世紀以降。

SP1073（第 36 図）

調査区北西部での検出である。平面形は不整形を呈する。堀方は段掘りとなる。検出規模は長軸 40.0 ㎝、短軸 31.0 ㎝、深さ 11.0 ㎝～ 18.0 ㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は青磁が出土した。

出土遺物（第 37 図、116）

116 は龍泉窯系青磁碗。外面に鎬蓮弁文が施される。

時期　出土遺物より 14 世紀以降。

SP1079（第 38 図）

調査区北西部での検出である。平面形は楕円形を呈する。検出規模は長軸 31.0 ㎝、短軸 26.0 ㎝、深さ 7.0 ㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第 39 図、117）

117 は土師器皿。底部の切り離しは回転糸切りである。

時期　出土遺物より 14 世紀以降。

SD102（第 40 図）

調査区東側での検出である。南北方向にのびる溝である。東側は調査区外となり全容は不明である。北側は畝状を呈する。検出規模は長さ 13.40m、幅 0.64m ～ 1.46m、深さ 0.07m ～ 0.38m を測る。埋土は灰色砂である。遺物は土師器が出土しているが、小片のため図示できるものはない。

時期　埋土色より中世以降と考える。

3. 小　結

調査では弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。弥生時代では土坑 SK111 がある。SK111 からは弥生時代中期後半の壺が出土し、古墳時代初頭に埋没した考えられる SD103 からは多量の弥生時代後期の遺物が出土している。このことから調査地周辺には弥生時代中期後半～後期末に

かけての集落が営まれていた事が伺われる。

古墳時代の主な遺構には溝SD103と土坑SK107、SK104がある。SD103は古墳時代初頭には埋没し、その機能は失われているものと考えられる。前期の遺構であるSK107、SK104からは甕が出土しているが、出土状況から土坑中に据え置かれていたものと考えている。また、SK107はSD103を切っている事から、SK107から出土した甕は松山における古墳時代初頭～前期の土器形式を考えるうえで貴重な資料となるものである。

中世の遺構は土坑、柱穴がある。検出した遺構の埋土色は灰色系である。灰色系の埋土をもつ遺構からは14世紀頃の遺物が出土しており、遺物の出土が無かった遺構についても同時期と考えている。遺構の検出状況は、SD103より西側に多く集中し調査区の西側に広がる様相を呈している。調査区の西側には、中世集落が展開するものと考えられる。

遺物観察表　－凡例－

⑴以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。

遺物観察表は相原浩二、岩本美保、佐伯利枝、村上真由美が作成した。

⑵遺物観察表の各掲載について　※（P.49参照）

表1　SK111出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
1	壺	口径(16.6) 残高 6.7	外反する口縁部。口縁端部は上下に拡張し端部外面に凹線文を施す。	マメツ	マメツ [口]ナデ	にぶい橙色 にぶい橙・灰褐色	石・長(1～4) ◎		
2	壺	底径 9.4 残高 6.5	器壁の薄い平底。	マメツ [胴底]ミガキ [底]ナデ	マメツ	にぶい褐・黒色 橙色	石・長(1～3) 褐色粒 ○		

表2　SD103出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
3	甕	口径(24.1) 残高 7.4	口縁端部は短く拡張される。端面は2条の沈線が施される。	マメツ [口]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		
4	甕	口径(21.2) 残高 3.2	「く」の字状の口縁部。端部は拡張され端面には凹線文、頸部には「ノ」の字状を施す。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～3) ○		
5	甕	口径(19.2) 残高 8.6	短く外反する口縁部。端部は強いナデにより凹む。	[口]ナデ [肩]ハケ(8本/cm) →ナデ	ナデ	にぶい橙色 赤褐色	石・長(1～3) ◎		
6	甕	口径(14.5) 残高 8.6	短い口縁は端部で上下方にわずかに拡張した面をもつ。	ナデ	マメツ	橙・褐灰色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) ◎		
7	甕	口径(13.1) 残高 6.4	短くやや内湾気味に外方向へ向かう口縁部。端部は上下方にわずかに拡張した面をもつ。	[口端]ヨコナデ [口][胴]ナデ	ナデ	明赤褐色 橙・黒・にぶい黄褐色	石・長(1～3) ◎		
8	甕	底径 (6.6) 残高 30.7	わずかに上げ底気味の底部。胴部最大径を中位にもつ。	マメツ [胴下]ヘラミガキ [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙・灰褐色 浅黄橙色	石・長(1～5) ◎		11
9	甕	底径 (5.6) 残高 6.1	平底の底部。やや内湾気味に上外方向へたちあがる。	ヘラミガキ	ナデ	明赤褐色 黒色	石・長(1～3) 金 ◎		
10	甕	底径 8.4 残高 5.0	わずかにくびれをもつ底部。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ	橙・にぶい黄橙色 黒色	石・長(1～5) ◎		
11	甕	底径 4.7 残高 6.1	上げ底の底部。	ナデ(一部マメツ)	ナデ	にぶい黄橙・橙色 灰褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
12	甕	底径 5.5 残高 5.8	上げ底のくびれをもつ底部。	マメツ [底](指頭痕あり)	ナデ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石・長(1～2) ◎		
13	甕	口径(19.3) 残高 30.3	外反する口縁部。端部は面をもつ。	マメツ(一部ハケ(9本/cm)→ナデ) [口端]ナデ [口]ハケ	マメツ [胴]ナデ (指頭痕あり)	橙・褐灰色 橙・灰黄色	石・長(1～5) 褐色粒 ◎	煤付着	11

表3　SD103出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
14	甕	口径(20.6) 残高　8.1	短く外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口]ナデ [胴]ハケ(9本/cm) →ナデ(工具痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	明赤褐色 にぶい橙・ 褐灰色	石・長(1～3) ◎		
15	甕	口径(16.8) 残高　9.4	外反する口縁部。端部は面をもつ。	マメツ(一部タタキ・ハケ(8本/cm)) [口]ナデ(指頭痕あり)	ナデ	明黄褐・橙・ にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3)多 ○		
16	甕	口径(16.8) 残高　8.0	外反する口縁部。端部は丸みをおび、わずかに面をもつ。	[口上]ナデ [口下][頸]ハケ→ナデ[胴]タタキ→ハケ→ナデ	[口]ナデ ハケ→ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
17	甕	口径(15.7) 残高　5.9	短く外反する口縁部。端部は丸みをおびる。	ハケ(6本/cm)→ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 淡黄色	石・長(1～2) 金 ◎		
18	甕	口径(15.2) 底径　3.0 器高 23.9	短く外反する口縁部。端部は下方にわずかに肥厚し面をなす。底部は小さい平底。	[口端][底]ナデ [口]ハケ(7本/cm) [胴底]タタキ→ハケ(7本/cm)	[口]ハケ(7本/cm) [胴底]ナデ(押圧痕あり)	にぶい橙・ 褐灰色 灰白・褐灰色	石・長(1～6) 金 ◎	煤付着	
19	甕	口径(13.1) 底径　2.5 器高 22.6	卵形の胴部。口縁部は上方に外反する。底部は尖り底。	[口][胴上]タタキ [胴底]ヘラケズリ [底]ナデ	[口端]ナデ [口]ハケ(12本/cm) [胴上]ハケ(12本/cm)[胴下]ナデ	浅黄橙・ 褐灰色 灰黄色	石・長(1～4) 金 ◎	煤付着	11
20	甕	口径(14.6) 残高 21.5	卵形の胴部。口縁部は外上方に開く。口縁端部は丸い。	[口]ナデ [胴上]タタキ [胴中][胴下]ハケ(6本/cm)→タタキ	[口][胴上]ハケ(3～4本/cm) [胴下底]ナデ	黄橙・橙・ 褐灰色 黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎	煤付着	11
21	甕	口径(14.0) 残高 19.4	卵形の胴部。器壁は薄い。短く外上方にのびる口縁。端部は丸い。	[口端]ナデ [胴上]タタキ [胴下]ハケ(7本/cm)	[口]ハケ(6本/cm) [胴上]指ナデ [胴下]ケズリ	黄橙・赤橙・ 黒色 黄橙色	石・長(1～3) ◎	煤付着	11
22	甕	口径 13.1 ～13.5 残高 17.8	外上方にのびる口縁部。端部は丸い。器壁が厚い。	タタキ [口端]ナデ [口]ハケ(8本/cm) →ナデ	[口]ハケ(8本/cm) →ナデ [胴]ハケ(6本/cm) →ナデ	灰白・浅黄橙色 灰白・浅黄橙色	石・長(1～6) ○		
23	甕	口径(12.8) 残高 10.4	肩部からゆるやかに外反する口縁部。	[口]ハケ(10本/cm) →ナデ [胴]タタキ→ハケ	[口]ハケ(10本/cm) →ナデ[胴]タタキ→ハケ(10本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	灰黄褐色 浅黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
24	甕	口径(15.2) 残高　4.9	短く外反する口縁部。端部は丸い。	ハケ(8本/cm)→ナデ	ハケ(8本/cm)→ナデ	浅黄色 浅黄橙色	石・長(1～2) ○		
25	甕	口径(15.3) 残高　7.4	肩部から強く屈曲して外上方に開く口縁部。端部は丸い。	[口]ナデ [胴]タタキ→ハケ→ナデ	[口]ハケ→ナデ [胴]ナデ(指頭痕あり)	にぶい橙色 淡黄・褐灰色	石・長(1～4) ◎		
26	甕	口径(14.5) 残高　7.0	外上方に開く口縁部。端部は丸い。	[口端]ナデ [胴]タタキ	[口]ハケ(5本/cm) [胴]ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～3) ○		
27	甕	口径(17.6) 残高　6.4	外反する口縁部。端部は丸みをおびた面をもつ。	[口]ヨコナデ [頸][胴]ハケ(8本/cm)→タタキ	[口]ヨコナデ [胴]ナデ(指頭痕あり)	橙・浅黄橙色 橙・浅黄橙色	石・長(1～3) ◎		
28	甕	口径(16.8) 残高　6.4	外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口]ナデ [肩]タタキ→ハケ(9本/cm)→ナデ	[口]ナデ [肩]ハケ→ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
29	甕	口径(17.3) 残高　7.7	稜をなして外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口]ナデ [胴]ハケ(8～9本/cm)→タタキ	ハケ(8本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) ○		
30	甕	口径(16.3) 残高　8.3	肩部と口縁部との内面境に稜をもつ。口縁部は直立気味にたちあがる。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	橙・灰色 橙色	石・長(1～3) 金 △		
31	甕	口径(17.5) 残高　5.6	有段の口縁部。口縁部は直立気味にたちあがる。	ナデ	マメツ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
32	甕	口径(13.9) 残高　4.7	外上方に開く口縁部。端部は丸い。	マメツ	マメツ	にぶい褐・ 淡橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
33	甕	口径(14.8) 残高　4.9	わずかに内湾気味に外傾する口縁部。端部は丸い。	マメツ(一部ナデ)	ナデ	赤橙・ 淡赤橙色 赤橙色	微砂 ◎		
34	甕	口径(14.0) 残高　4.0	外上方に開く口縁部。端部は丸い。	[口]ヨコナデ [肩]ハケ(12本/cm) →ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～3) ○		
35	甕	口径(14.0) 残高　6.5	外上方に開く口縁部。端部は丸い。	[口]ナデ [肩]ハケ(9本/cm)	ナデ(指頭痕あり)	浅黄・灰白色 淡黄色	微砂 ◎		
36	甕	口径(15.3) 残高　6.5	口縁端部は丸くおさめる。肩部に張りをもつ。	[口]ヨコナデ [肩]ハケ(9本/cm)	ナデ(指頭痕あり)	橙・浅黄橙色 橙色	微砂 ◎		
37	甕	口径(15.9) 残高　5.2	口縁端部は内側に肥厚する。	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙・褐灰色 橙・灰褐色	石・長(1～3) 褐色粒 ◎		
38	甕	口径(12.5) 残高　5.3	内湾してたちあがる口縁部。肩部内面は器壁が厚い。	[口]ナデ [胴]ハケ(9本/cm) →ナデ	ナデ	灰白・褐灰色 灰白・にぶい 黄橙色	石・長(1～2) 褐色粒 ◎		

表4　SD103出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
39	甕	口径 (6.7) 残高 4.8	ゆるやかに外反する口縁部。端部は丸い。	[口]ナデ [胴]ハケ(8本/cm) →ナデ(指頭痕あり)	[口]ナデ [胴]ハケ(8本/cm) →ナデ	にぶい橙色 にぶい橙・灰色	長(1) ◎		
40	甕	口径(10.4) 残高 4.3	外反する口縁部。端部は丸い。	ナデ	[口]ナデ [胴]ハケ→ナデ	浅黄橙色 淡黄色	石・長(1～3) 金 ◎		
41	甕	口径(10.5) 残高 4.4	外上方に開く口縁部。肩部は強いナデにより凹む。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
42	甕	底径 6.0 残高 12.0	やや丸みをおびた平底の底部。	マメツ(一部タタキ →ハケ(8～9本/cm)) [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	浅黄橙・灰色 橙・明褐灰色	長(1～3) ◎		
43	甕	残高 9.3	丸底の底部。	タタキ	ナデ	浅黄橙・褐灰色 にぶい黄橙・ 褐灰色	石・長(1～5) ◎		
44	甕	残高 4.4	丸底の底部。	マメツ(一部タタキ →ハケ(8本/cm))	マメツ(一部ハケ→ ナデ(指頭痕あり))	橙・にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
45	壺	口径(20.6) 残高 3.3	口縁端部は上方に肥厚し、端面に凹線文と円形浮文を施す。	[口端]ナデ [口]ハケ→ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
46	壺	口径(13.2) 残高 4.4	口縁端部外面に凹線文、頸部に径0.6cmの円孔と刺突文が施される。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ	[口]ヨコナデ [胴]ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
47	壺	口径(11.4) 残高 13.0	口縁端部はわずかに上下方に肥厚し凹線文を施す。	[口]ヨコナデ [胴]ミガキ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
48	壺	口径(14.5) 残高 5.0	短く外傾する口縁部。端部はナデにより上下方に肥厚する。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
49	壺	口径(15.4) 残高 2.8	外反する口縁部。端部は面をもち、ナデにより1条の沈線がみられる。	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) ◎		
50	壺	残高 8.1	頸部に格子状の刻目突帯が1条巡る。	ナデ	ナデ	にぶい橙・黒色 浅黄橙・褐灰色	石・長(1～6) ◎		
51	壺	残高 5.0	拡張部を欠く複合口縁。	ナデ	ハケ(工具痕あり)→ ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		
52	壺	口径(18.3) 残高 5.9	拡張部に上から2条の沈線と波状文が施される。口縁接合部に刻目が施されている。	ナデ→施文	ナデ	橙色 灰・橙色	石・長(1～3)多 ○		
53	壺	口径(12.9) 残高 8.3	拡張部は内湾する。口縁端部は面をもつ。	マメツ	マメツ・ハクリ(一部 ハケ)	浅黄橙・灰白色 浅黄橙・灰白色	石・長(1～3) 褐色粒・金 ○		
54	壺	口径(24.3) 残高 2.2	口縁端部は面をもち大きく下方へ垂下する。端面には山形文を施す。	ナデ→施文	ハケ→ミガキ	浅黄橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
55	壺	口径(19.1) 残高 5.9	外上方に開く口縁部。端部は面をもち、上下方にわずかに肥厚する。	[口端]ヨコナデ [口上]ハケ→ナデ [口]ハケ(6本/cm)	[口端][肩]ナデ [口]ハケ(6本/cm)	橙色 橙色	石・長(1～4) 褐色粒 ◎		
56	壺	口径(12.8) 底径 4.7 器高 26.7	長頸壺。頸部は外方向に直立する。下半部に[×]状の線刻がみられる。	[口端]ナデ [口]ハケ(6～7本/ cm)→ナデ [頸]→ヘラミガキ	[口・頸]ハケ(6～7 本/cm)→ナデ [胴]ハケ(6～7本/ cm)(一部ハクリ)	橙色 橙・暗灰・にぶ い黄橙色	石・長(1～4) ◎		12
57	壺	底径 7.0 残高 10.9	平底の底部。底部に近い胴部に径0.7cmほどの焼成前につけられた未貫通の孔が1ヶ所みられる。	[胴]ミガキ→ナデ [底]ナデ	ナデ	橙・褐灰色 橙色	石・長(1～5) 褐色粒・金 ◎		
58	壺	口径(19.4) 残高 6.9	わずかに外反し上方向へたちあがる口縁部。端部は丸い。	[口上]ナデ [口下]ヨコナデ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂 ○		
59	壺	口径(18.8) 残高 9.7	やや外反気味に斜め上方に伸びる口縁部。端部は丸みをおびている。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白・灰色	石・長(1～2) 褐色粒・金 ◎		
60	壺	口径(19.0) 残高 8.4	外反して外上方に伸びる口縁部。端部は丸い。	ヨコナデ	マメツ	浅黄橙色 灰白色	石・長(1～2) 金 ◎		
61	壺	口径 10.8 底径 5.0 器高 25.4	直立する口縁部。胴部は球形を呈する。底部は丸底。	[口端][底]ナデ[口]ハケ→ナデ[胴]タタキ→ハケ(6～7本/cm)→ナデ(マメツ著しい・ハクリあり)	[口]ハケ→ナデ [胴底]ハケ(9～10 本/cm)(一部ハクリ)	浅黄橙・褐灰・ 明赤褐色 灰・黒褐・浅黄橙色	石・長(1～6) ○	黒斑	13
62	壺	口径 13.8 残高 23.5	外反する口縁部。端部は丸い。肩が張る。	[口端]ナデ [口]ハケ→ナデ タタキ→ハケ→ナデ	[口]ナデ [胴]ハケ(6本/cm) →ヘラケズリ→ナデ	にぶい橙色 にぶい褐・ 灰褐色	石・長(1～8)多 ◎		13
63	鉢	口径(28.2) 残高 5.8	口縁端部は上下方に肥厚し端面に凹線文を施す。肩上部外面に板状工具の木口による刺突文を施す。	ナデ	ナデ	褐色 褐・明褐色	石・長(1～3) 金 ◎		

表5　SD103出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
64	鉢	口径(19.0) 残高 3.7	口縁端部は上下方に肥厚し端面に凹線文を施す。口縁部直下に板状工具による刺突文を施す。	[口]ナデ [胴]ハケ(4･8本/cm)	ナデ・マメツ	明赤褐･黒褐色 橙･にぶい赤褐色	石･長(1～3) ◎		
65	鉢	残高 6.1	口縁端部は「コ」の字状を呈する。口縁部直下に刺突文を施す。	ナデ	ナデ(一部ハクリ)	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長(1～4) ◎		
66	鉢	口径(15.1) 残高 6.7	短く外反する口縁。端部は外方向に肥厚する。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ→ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙･黒褐色 橙･褐灰色	石･長(1～3) ◎		
67	鉢	口径(11.5) 残高 7.0	短く外反する口縁。端部は面をもつ。	ナデ	指ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石･長(1～2) 金 ◎		
68	鉢	残高 22.4	大型の胴部片。胴部中位で張る。底部は欠失。	[胴上]ハケ(7本/cm) [胴中]ハケ(7本/cm)→ミガキ [胴下]ミガキ [胴底]ナデ	ハケ(7本/cm) [胴底]ナデ(一部ハクリ)	橙･黒色 灰黄褐･にぶい黄橙色	石･長(1～4) 褐色粒 ◎		12
69	鉢	口径 25.9 底径 2.9 器高 15.6	ゆるやかに外反する口縁部。平底の底部。	[口][底]ナデ マメツ	[口]ハケ→ナデ [胴底]ハケ→ヘラミガキ(指頭痕あり)	橙色 にぶい橙色	石･長(1～7) 金 ◎	黒斑	12
70	鉢	口径(21.5) 残高 6.3	扁球形の胴部から外反する口縁部。	マメツ	マメツ	橙･黄褐色 橙･褐灰色	石･長(1～4)多 ○		
71	鉢	口径(19.0) 残高 8.7	外上方にのびる口縁部。端部は丸い。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい黄橙色	石･長(1～5) ◎		
72	鉢	口径 (8.4) 残高 4.0	外上方にのびる口縁部。端部は丸い。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	微砂 ◎		
73	鉢	口径 10.4 底径 3.0 器高 7.9	直口口縁。端部は内側に稜をもって面をもつ。底部は丸みをおびた平底。	[口][胴]ハケ(10本/cm) [底]ナデ	[口端]ナデ [口][胴底]ハケ(10本/cm)→ナデ	にぶい橙色 浅黄橙･黒色	石･長(1～2) 金 ◎		12
74	鉢	口径(15.3) 底径 4.2 器高 5.7	胴部よりやや突出する丸みをおびた平底の底部。口縁端部は先細りわずかに面をもつ。	[口端]ナデ [口][胴底]タタキ→ナデ	ハケ(7本/cm)	浅黄橙･黒色 暗灰･灰色	石･長(1～3) ◎		
75	鉢	口径(22.0) 残高 6.5	内湾気味にたちあがる口縁部。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(6～7本/cm)	[口]ハケ(7～8本/cm) [胴]ナデ	橙色 黒色	石･長(1～4) ◎		
76	鉢	口径 13.4 器高 7.8	丸底の底部より内湾気味に上外方向にたちあがる。口縁端部は丸い。	[胴]ハケ(7～8本/cm)→タタキ [底]タタキ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙･明褐灰色	石･長(1～3) ◎		
77	鉢	口径 15.7 底径 3.0 器高 6.4	丸みをおびた平底の底部。口縁端部はまるくおさめる。	一部ケズリ	ハケ(3本/cm)	浅黄橙色 黄橙色	石･長(1～4) ◎		12
78	鉢	口径 (9.0) 底径 3.7 器高 4.8	底部より内湾気味にたちあがる。口縁端部は尖り気味に丸い。底部はやや丸みのある平底。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 にぶい橙色	石･長(1～4) 金 ◎		13
79	鉢	口径(10.7) 底径 8.0 器高 10.5	口縁部は短く内湾気味で指頭痕が顕著に残る。端部は尖り気味に丸い。底部は平底。	[口]指ナデ(指頭痕あり) [胴]ハケ(9本/cm) [胴底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙･褐灰色 黄橙色	石･長(1～3) 褐色粒･金 ○	煤付着	12
80	高坏	口径(19.8) 残高 5.2	口縁部は大きく外反する口縁端部は丸い。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	橙色 橙色	石･長(1～2) ◎		
81	高坏	口径(13.5) 残高 3.3	口縁部は大きく外反する口縁端部は丸い。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長(1～2) ◎		
82	高坏	口径(10.4) 残高 2.8	短く外反する口縁部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	長(1) 石粒 ○		
83	高坏	口径(15.0) 残高 5.1	口縁部はゆるやかに外反気味にたちあがり端部を丸くおさめる。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 橙色	石･長(1～2) 褐色粒 ◎		
84	高坏	口径(16.9) 残高 4.3	坏底部よりなだらかに上方向にのびる口縁部。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 橙･にぶい橙色	石･長(1～2) 石粒(多) ○		
85	高坏	残高 2.4	小型品。口縁部は段をなして外方向へのびる。	ハケ→ナデ	ナデ	灰白色 浅黄橙色	微砂 ◎		
86	高坏	残高 7.0	裾部は円柱状の接合部よりややふくらみをもって広がる。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石･長(1～4) 金 ◎		13
87	高坏	底径(12.4) 残高 5.7	外方向に広がる脚裾部。	[裾]ヨコナデ [脚]ハケ(12本/cm)	ナデ(しぼり痕あり)	明黄褐色 にぶい黄橙色	長(1～3) ◎		
88	高坏	底径(11.2) 残高 7.7	直線的に外方向に広がる脚裾部。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石･長(1～3) 褐色粒 ◎		

表6　SD103出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
89	高坏	残高 5.5	内湾して広がる脚裾部。	マメツ	マメツ	浅黄橙色/浅黄橙色	石・長(1～3) △		
90	高坏	底径 9.7 残高 8.3	屈曲して広がる脚裾部。	ハケ(6本/cm)→ナデ	ナデ	にぶい橙色/にぶい橙色	石・長(1～4) ◎		13
91	高坏	底径 11.9 残高 7.7	屈曲して広がる脚裾部。	[坏底]ナデ [脚]ハケ(10本/cm)→ナデ [裾]マメツ	ナデ	橙色/橙色	長(1～2) ○		13
92	高坏	残高 7.0	脚柱はゆるやかに広がる円柱状。	ハケ(9本/cm)→ナデ	ナデ	灰白・淡黄色/淡黄色	石・長(1～3) ◎		
93	高坏	残高 3.3	円孔が穿たれる。	ナデ(一部ハケ)	ナデ	明赤褐色/黄橙色	微砂 ◎		
94	支脚	底径 5.8 器高 4.7	中実。円柱状の体部。受部は大きく凹む。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	浅黄橙色/褐灰色	石・長(1～3) ○		
95	支脚	底径 6.3 残高 5.2	中実。円柱状の体部。胴中位でくびれる。上下面は大きく凹む。裾端面は面をもつ。	マメツ	マメツ	橙・灰色/橙・にぶい褐色	石・長(1～4) 金 ○		
96	支脚	底径 (6.0) 残高 2.8	中空。短脚。	ナデ	ナデ	橙・浅黄橙色/浅黄橙色	石・長(1～3) ◎		
97	支脚	底径 8.7～9.0 残高 11.5	上部は欠損。前面に角状突起が2ヶ所。前面は平たい。	タタキ	ナデ	橙・褐灰色/にぶい橙色	石・長(1～4) ◎		
98	支脚	底径 10.7 器高 15.5	前面2ヶ所の角状突起のうち1か所を欠く。背面にも突起をもつ。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	橙・黄橙色/明赤褐色	石・長(1～10) 褐色粒・金 ◎		
99	杓子型土器	長さ 14.0 幅 7.4	体部は楕円形を呈する。柄部は短い。	[体]ハケ→ナデ(指頭痕あり) [柄]ナデ(指頭痕あり)	[体]ハケ→ナデ(指頭痕あり) [柄]ナデ(指頭痕あり)	灰白・褐灰色/灰白色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	13
100	手捏土器	口径 (6.4) 器高 4.0	内面は指圧痕が顕著にみられる。	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	灰白・黒色/灰白色	石・長(～2) ◎		
101	手捏土器	残高 3.2	丸底の底部。体は球状を呈す。器壁は厚い。	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	浅黄橙色/浅黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		

表7　SK104出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
102	甕	口径 14.0 器高 21.0	胴部は球形の丸底の底部。口縁部は外上方に開く。	[口]ヨコナデ [胴底]ハケ(10～12本/cm)→ナデ	[口]ヨコナデ [胴中]ケズリ [胴上下]ナデ(指頭・工具痕あり)	淡橙色/浅黄橙色	長(1) 微砂 ◎		14
103	甕	口径(13.9) 残高 13.7	外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。	[口]ナデ [胴]ハケ(11本/cm)→ナデ	[口]マメツ [胴]ナデ(指頭痕あり)	にぶい橙色/浅黄橙色	石・長(1～5) 金 ◎		14
104	甕	口径(15.0) 残高 6.2	口縁端部は外反する。端部は丸い。	[口]ヨコナデ [頸]ハケ→ヨコナデ [胴]ハケ(12本/cm)→ナデ	[口][頸]ヨコナデ [胴]ケズリ	淡赤橙色/にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		
105	甕	口径(15.0) 残高 4.9	外反する口縁部。端部はわずかに面をもつ。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色/浅黄色	石・長(1～2) ○		

表8　SK107出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
106	甕	口径(13.1) 器高 20.5	口縁部は外上方にのびる。下ぶくれの球形の胴部。底部は丸底。	[口][頸]ナデ [胴底]ハケ(9本/cm)	[口][頸]ナデ(工具痕・指頭痕あり)	灰褐・黒褐色/褐灰・明褐灰色	石・長(1～6) ◎		14
107	甕	口径(14.2) 残高 4.0	口縁部は内に面をもつ。	[口]ヨコナデ [頸]ハケ(7本/cm)	[口]ヨコナデ [頸]マメツ	灰黄・黒褐色/浅黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		

表9　SK103出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
108	カマド	残高 7.3	置きカマドの破片。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	明褐・暗褐色/褐・褐灰色	石・長(1～5) 金 ◎	煤付着	14
109	皿	口径 7.6 底径 5.4 器高 1.3	平底の底部。底部よりゆるやかに内湾する口縁部。	[体]ナデ [底]回転糸切り	ナデ	灰白・黒色/灰白・黒色	石(1～2) ◎		14

表10　SP1005出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
110	羽釜	口径(23.7) 残高　2.2	口縁端部は面をもつ。口縁直下に突帯を貼り付ける。	ナデ	ナデ	橙・灰褐色 橙色	石・長(1～3) ◎		

表11　SP1038出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
111	青磁碗	口径(12.7) 残高　4.3	外面に鎬蓮弁文が施される。	施釉の為不明	施釉の為不明	緑灰色 緑灰色	微砂 ◎	施釉	

表12　SP1067出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
112	Ⅲ	口径　(9.2) 底径　(7.2) 器高　1.3	口縁端部は丸い。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	微砂 ○		

表13　SP1104出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
113	こね鉢	残高　2.1	口縁部の小片。端部は肥厚し丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰白色	微砂 ◎		

表14　SP1110出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
114	Ⅲ	口径　(8.2) 底径　(6.0) 器高　1.5	口縁端部は丸くおさめる。	[体]ナデ [底]回転糸切り	マメツ	橙色 灰白色	微砂 ◎		

表15　SP1116出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
115	こね鉢	口径(27.0) 残高　3.3	口縁部は肥厚し、端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰・灰白色 灰白色	微砂 △	東播系	

表16　SP1073出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
116	青磁碗	口径(16.5) 残高　6.3	体部の外面には鎬蓮弁文が施される。	回転ナデ→施釉	回転ナデ→施釉	オリーブ灰色 オリーブ灰色	長(0.5) 微砂 ◎	施釉	14

表17　SP1079出土遺物観察表　土製品

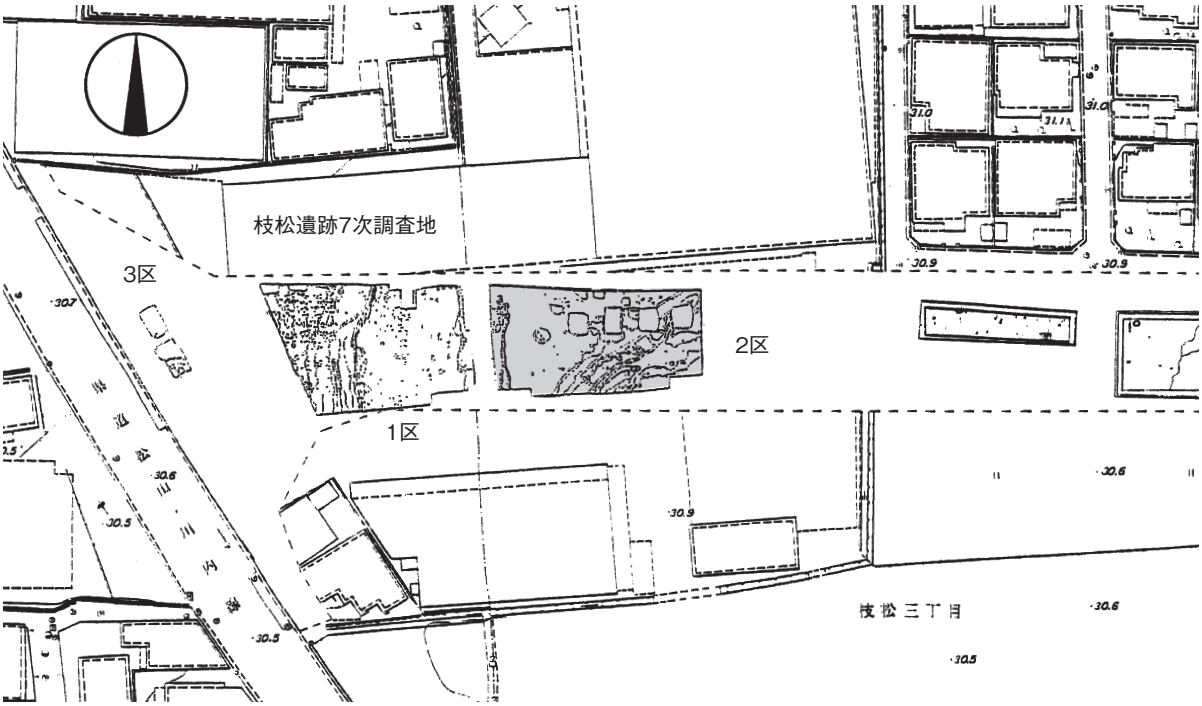
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
117	Ⅲ	口径(11.5) 底径　7.0 器高　2.3	口縁端部は丸い。底部の切り離しは回転糸切りである。	[底]回転糸切り	マメツ(工具痕あり)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) ○		14

第5章　2区の調査

1. 調査の経緯

2区は1区の東側にあたり、調査前は造成地である。1区との間には、南北方向の水路が横切る。行政的には、この水路を境として東側（2区）が枝松となり西側（1区）が小坂となる。調査面積はは400㎡である。以下、調査工程を略記する。

2003（平成15）年1月24日より掘削場所を設定し、重機により表土等の掘削を開始する。
1月30日、人力によって遺構の検出作業を開始する。
1月31日、2区の遺構検出作業を終了する。高所作業車を利用し2区遺構検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、遺構配置図作成作業を開始する。
2月 3 日、国際航業㈱に委託して国土座標4級基準点を設置する。2区の遺構配置図を作成後、遺構の掘り下げを開始する。測量杭を設定し順次、遺構・遺物の測量図の作成と写真撮影を行なってゆく。
2月 4 日、調査区壁面の土層図作成作業を開始する。
3月 4 日、検出した遺構の掘削を終了する。
3月 5 日、高所作業車を使用し遺構の完掘状況の写真撮影を行う。同月14日まで土層確認調査のため壁沿いにトレンチを掘削する。
3月17日、2区の埋め戻し作業を開始する。同月31日まで事務所内で整理作業を行う。
3月31日、現場作業を終了する。



第41図　調査区位置図（S=1:1,000）

2. 層位

２区の基本土層は、上から第Ⅰ層現代の造成土（コンクリート含む）、第Ⅱ層青灰色土、第Ⅲ層緑青色土、第Ⅳ層は灰色を呈する。土質の違いからさらに３層に分層した。第Ⅳ－１層灰色砂質土、第Ⅳ－２層灰色土、第Ⅳ－３層灰色粘質土である。第Ⅴ層は黄灰色土、第Ⅵ層褐色粘質土、第Ⅶ層褐灰色砂質土、第Ⅷ－１層黄色粘質土、第Ⅷ－２層褐色土（砂まじり）、第Ⅷ－３層黄色土、第Ⅷ－４層褐色粘質土、第Ⅷ－５層黄白色粘質土、第Ⅸ層黄褐色粘質砂、第Ⅹ層黄灰色砂礫である。

第Ⅰ層から第Ⅴ層までは現代の耕作土である。第Ⅵ層以下は地山と呼ばれる層である。第Ⅷ層はＡＴ火山灰の１次と２次堆積層と考えられたため、第Ⅷ層をさらに５層に分層した。このうち第Ⅷ－５層はＡＴ火山灰の１次堆積層と考えられる。遺物包含層は､削平のため失われており検出していない。

遺構の検出は、第Ⅵ層褐色粘質土上面で行い弥生時代～中世の遺構を検出した。検出した遺構は掘立柱建物跡（掘立）１棟、柱穴（SP）29 基、溝（SD）２条、倒木跡（倒木）３基である。遺物が出土した遺構は少ない。以下、主な遺構・遺物について時代毎に記述する。

3. 遺構と遺物

（1）古墳時代

溝（SD）

SD201（第 44 図）

調査区の北東方向から南西方向にのびる溝である。溝は２～３条の流路となり調査区内で２条の流路が合流したのち３条に分岐をする。検出規模は最長 21.20m、最大幅 9.60m、深さ 0.3m を測る。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土している。

出土遺物（第 45 図、118 ～ 127）

118、119 は弥生土器。118 は甕形土器。胴下半から底部にかけての破片。119 は鉢形土器の口縁部片である。120 は土師器甑の把手。121 ～ 125 は須恵器。121 ～ 123 は坏身片。121 のたちあがり端部は欠損。122 のたちあがりは短くのびて端部は丸くおさめる。受部は水平に伸びる。123 のたちあがり端部は欠損。受部は短く水平にのびる。124、125 は壺。口縁部は短く外反し口縁端部は外方に肥厚する。126 は砥石。127 は敲石である。

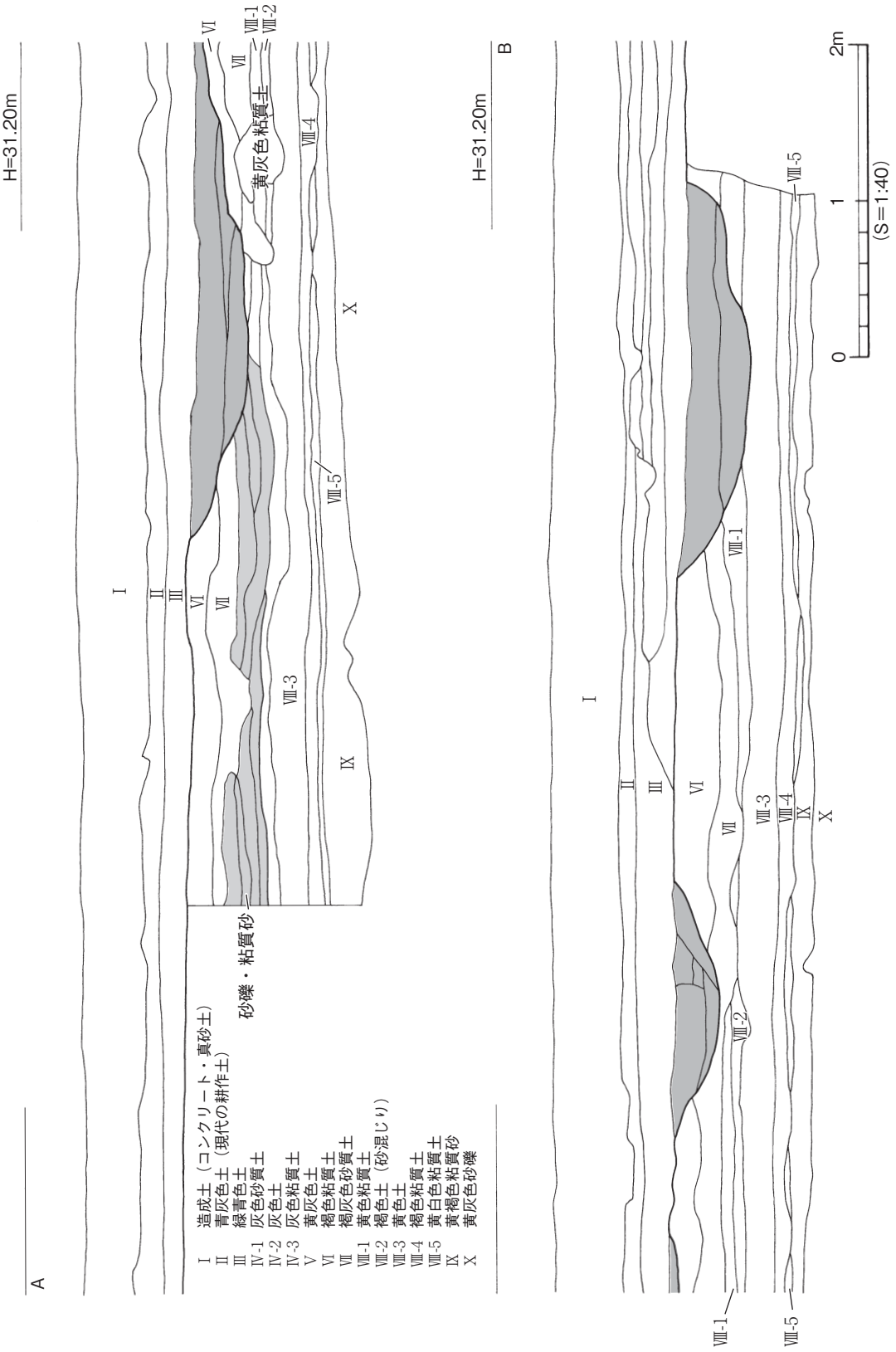
時期　出土した須恵器より７世紀前半には埋没したものと考えられる。

（2）中世

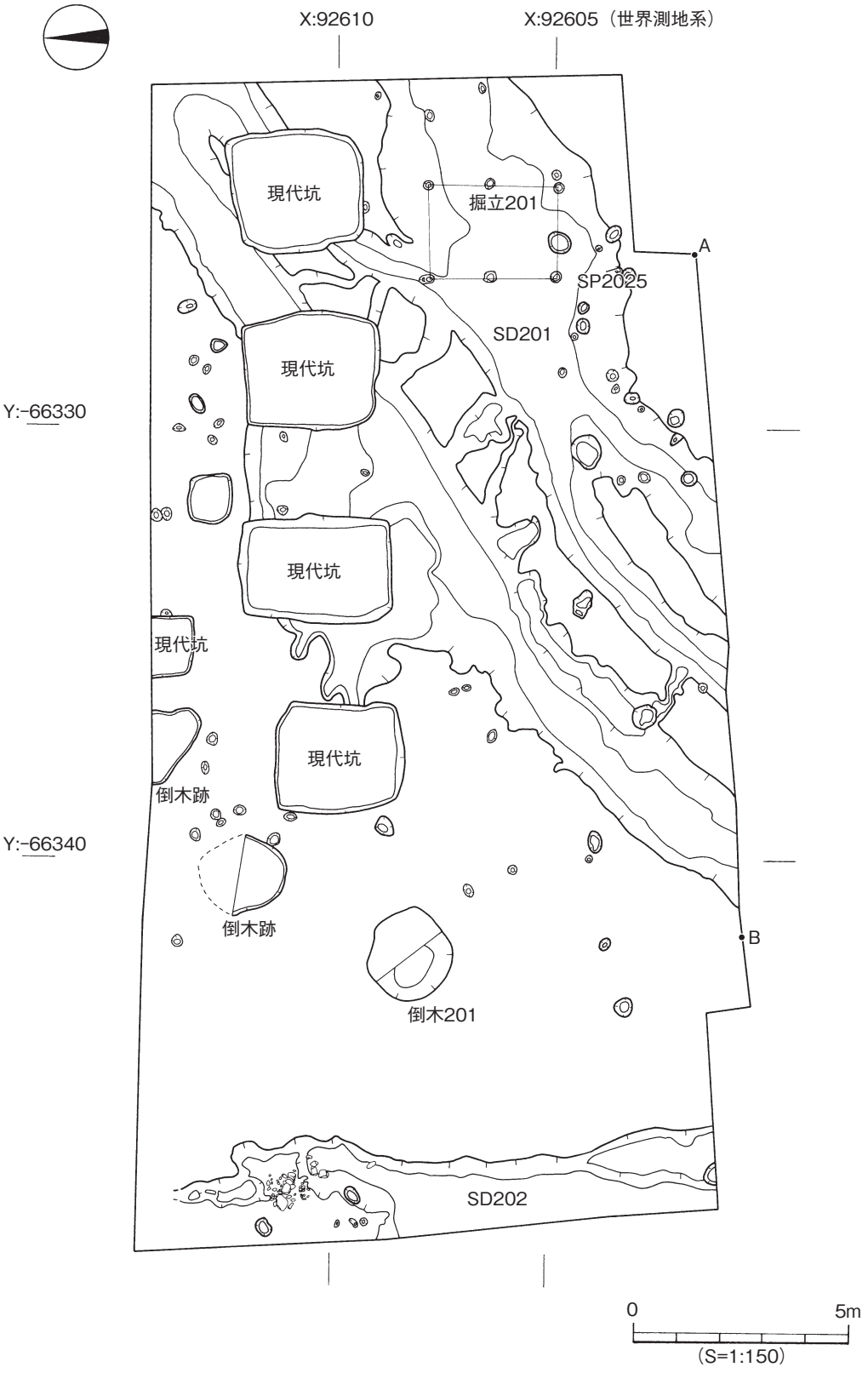
掘立柱建物跡（掘立）

掘立 201（第 46 図）

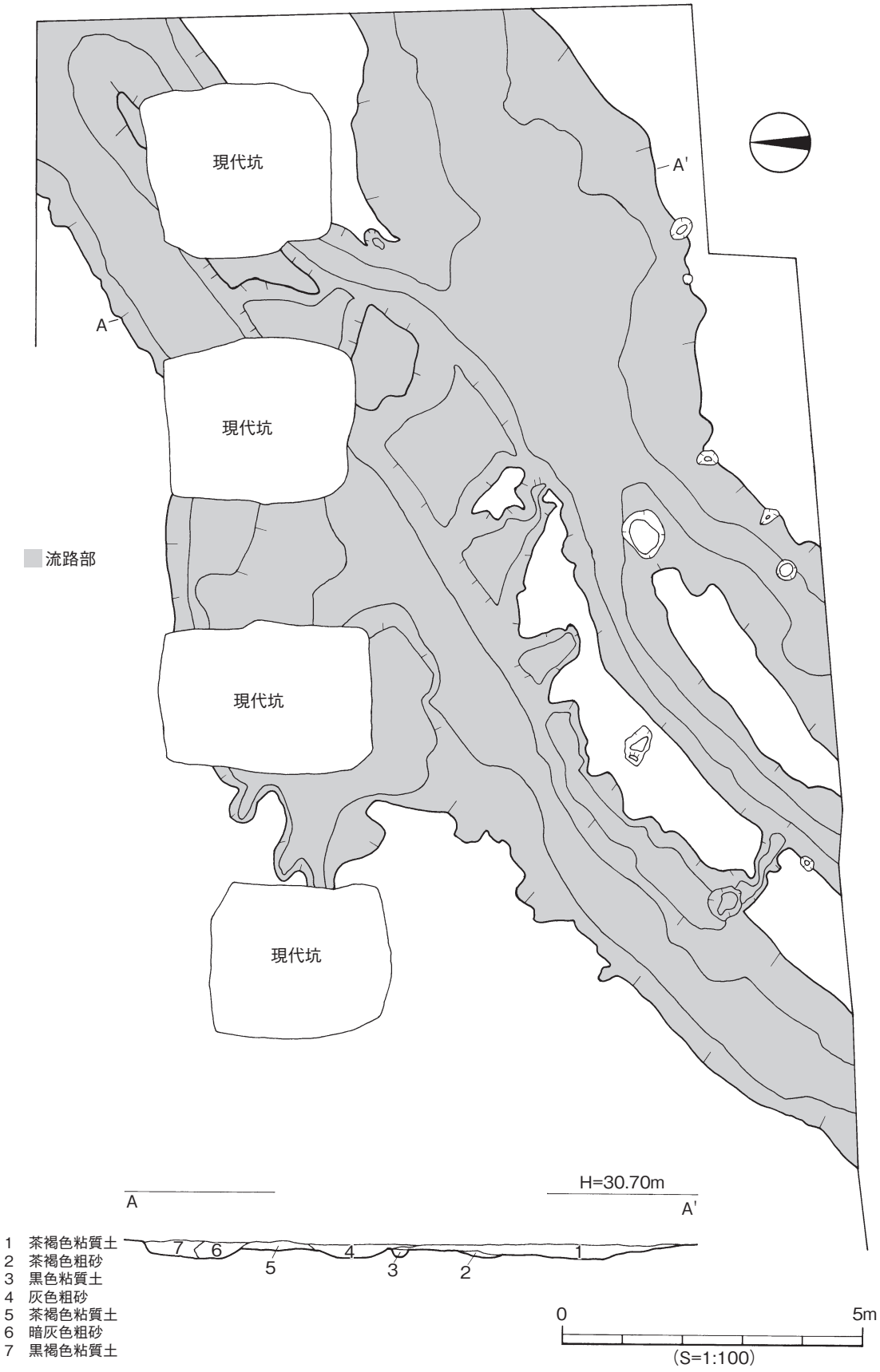
掘立 201 は調査区の東側で検出した。東西１間、南北２間の小規模な掘立柱建物跡である。柱穴の平面形態は円形ないし楕円形を呈する。柱穴規模は直径 16.0 ㎝～ 26.0 ㎝、深さ 12.0 ㎝～ 18.0 ㎝を測る。柱間は東西 2.10m ～ 2.19m、南北 1.40m ～ 1.60m を測る。P1 ～ P4 では柱痕跡を検出した。柱痕の平面形態は円形を呈する。柱痕規模は直径 10.0 ㎝～ 12.0 ㎝を測る。遺物は P5 より土師器が出土した。


A
H=31.20m
B
H=31.20m
Ⅰ 造成土（コンクリート・真砂土）
Ⅱ 青灰色土（現代の耕作土）
Ⅲ 緑青色土
Ⅳ-1 灰色砂質土
Ⅳ-2 灰色土
Ⅳ-3 灰色粘質土
Ⅴ 黄灰色土
Ⅵ 褐色粘質土
Ⅶ 褐灰色砂質土
Ⅷ-1 黄色粘質土
Ⅷ-2 褐色土（砂混じり）
Ⅷ-3 黄色土
Ⅷ-4 褐色粘質土
Ⅷ-5 黄白色粘質土
Ⅸ 黄褐色粘質砂
Ⅹ 黄灰色砂礫
砂礫・粘質砂
黄灰色粘質土
0
1
2m
(S=1:40)

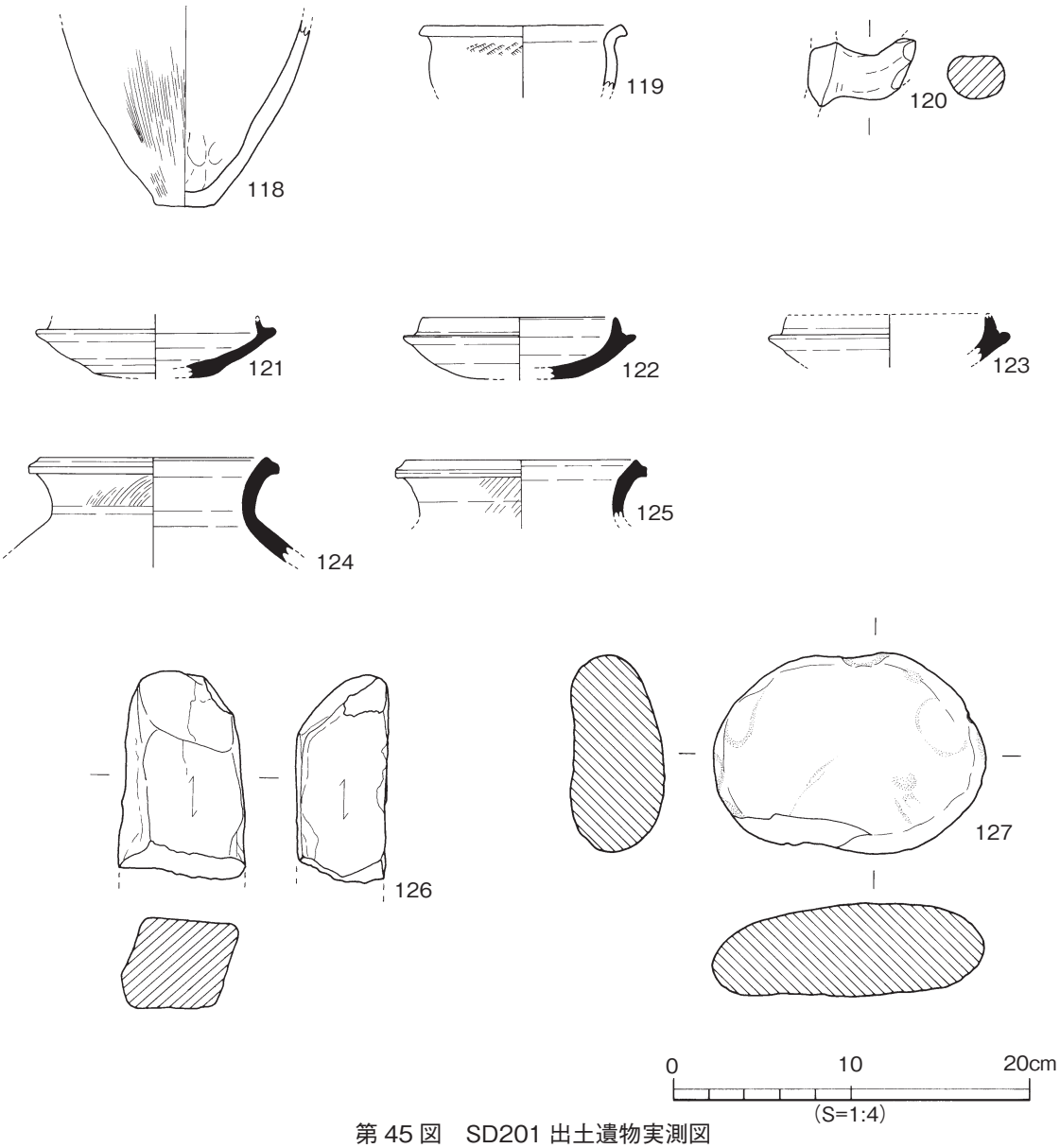
第 42 図 南壁土層図



第 43 図　２区遺構配置図



第 44 図　SD201 測量図



第 45 図　SD201 出土遺物実測図

出土遺物（第 47 図、128・129）

128 は土師器坏。口縁端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りである。129 は三足付き羽釜である。口縁部下に突帯を貼り付ける。口縁端部は丸い。

時期　出土遺物より 13 世紀後半。

溝（SD）

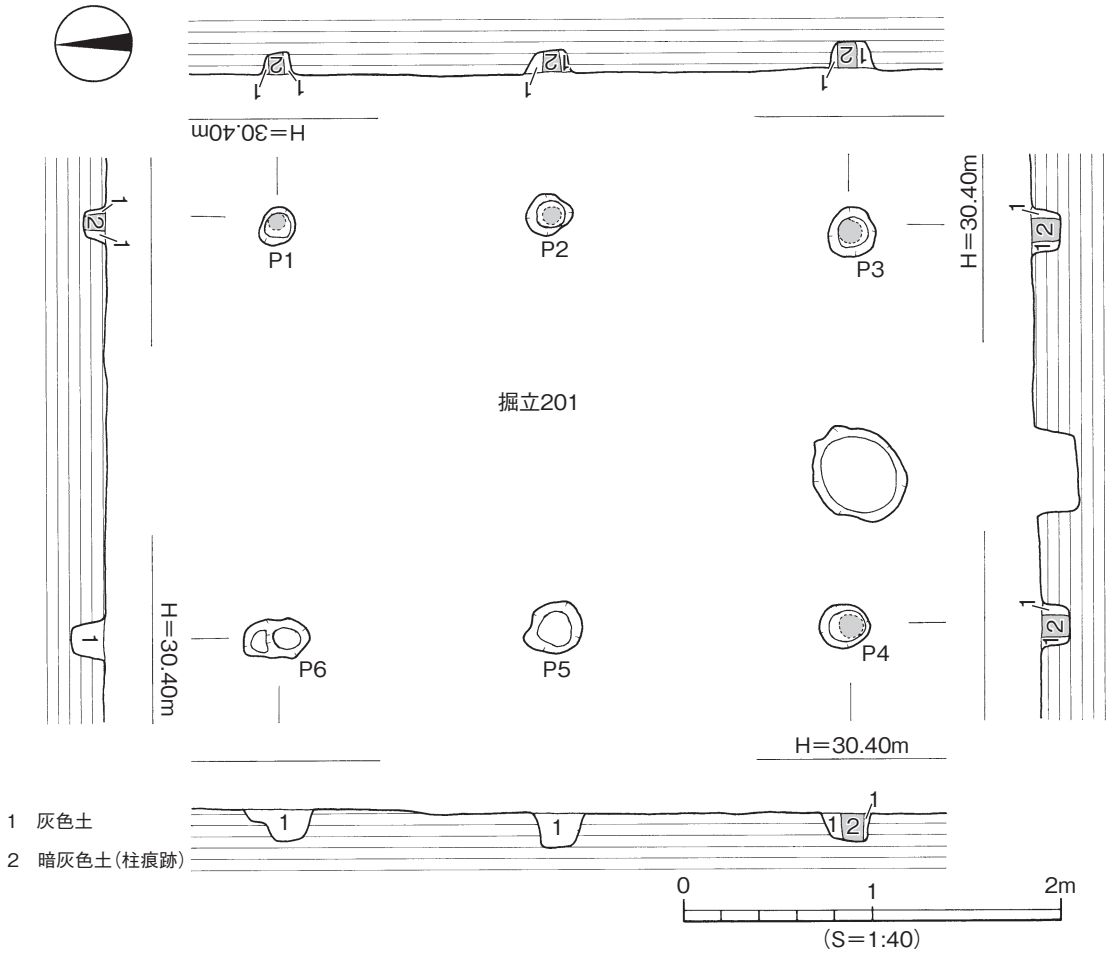
SD202（第 48 図）

SD202 は、調査区の西壁沿いに南北方向にのびる溝である。北側は幅が狭く、南に下るほど幅が広くなり調査区外へとつづく。調査区の北壁では現代の耕作土で削平されて途切れる。検出規模は長さ 12.45m、幅 0.50m ～ 1.95m、深さ 0.02m ～ 0.45m を測る。南側が深くなっている。埋土は灰色砂質土である。遺物は土師器、東播系須恵器、常滑焼き、牛の歯牙が出土している。

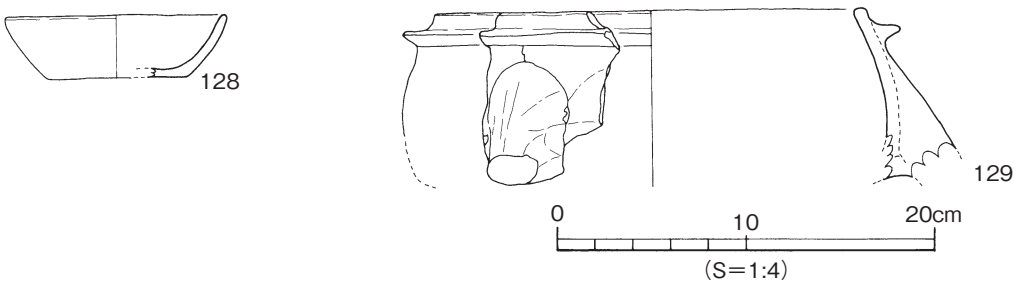
出土遺物（第49図、130～140）

130～135は三足付き羽釜。130は口縁部と脚部片である。131～133は口縁部片。口縁端部は丸くおさめる。口縁部の下に突帯を貼り付ける。134、135は脚部片である。136は土鍋の口縁部片。137～139は東播系須恵器のこね鉢である。137、138の口縁端部は外方に肥厚し、端部は内傾し短くのびる。139の口縁端部は上方にのびる。140は常滑の大甕である。推定口径29.0㎝を測る。141は土師器の高台付の坏底部片である。

時期　出土遺物より13世紀後半には埋没したもの考えられる。



第46図　掘立201測量図



第47図　掘立201出土遺物実測図

柱穴（SP）

SP2025（第 50 図）

調査区南東部での検出である。SD201 を切る。平面形は円形を呈する。検出規模は直径 16.0 ㎝、深さ 15.0 ㎝を測る。埋土は灰色土である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第 51 図、142）

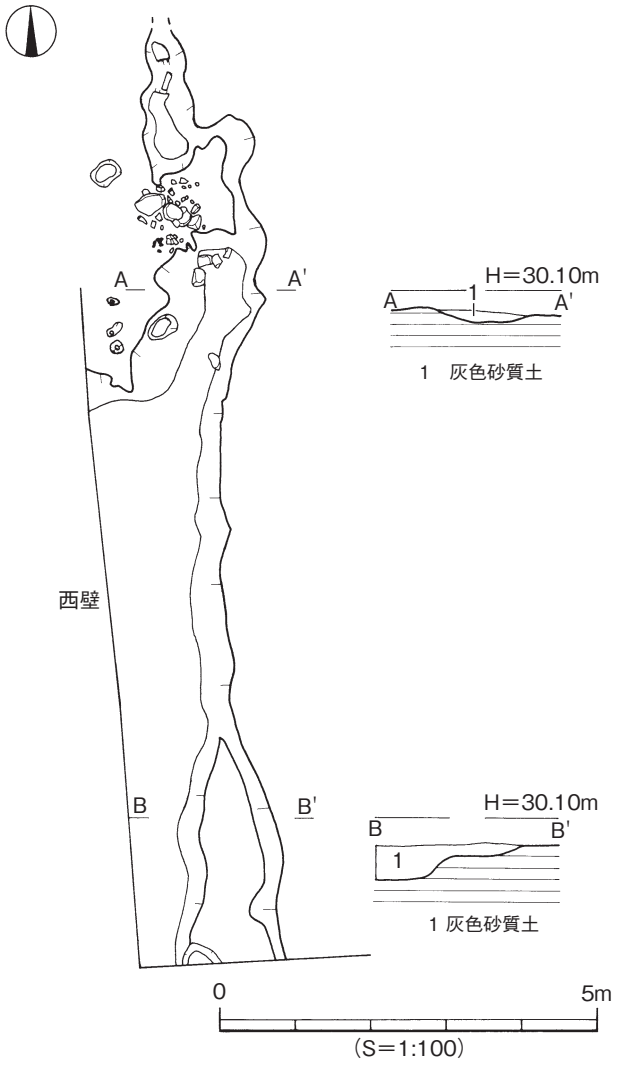
142 は土鍋である。口縁部はやや肥厚する。口縁端部は丸い。推定口径 36.4 ㎝を測る。

時期　出土遺物より 13 世紀後半。

その他の遺構・遺物

倒木 201（第 52 図）

2 区の調査では、倒木跡を 3 基検出した。そのうちの 1 基である倒木 201 の測量図を掲載した。検出規模は長軸 2.11m、短軸 1.88m、深さ 0.45m を測る。倒れた方向は、土層状況より北西方向に倒れたものと考えられる。遺物は出土していない。時期不明の倒木跡である。



第 48 図　SD202 測量図

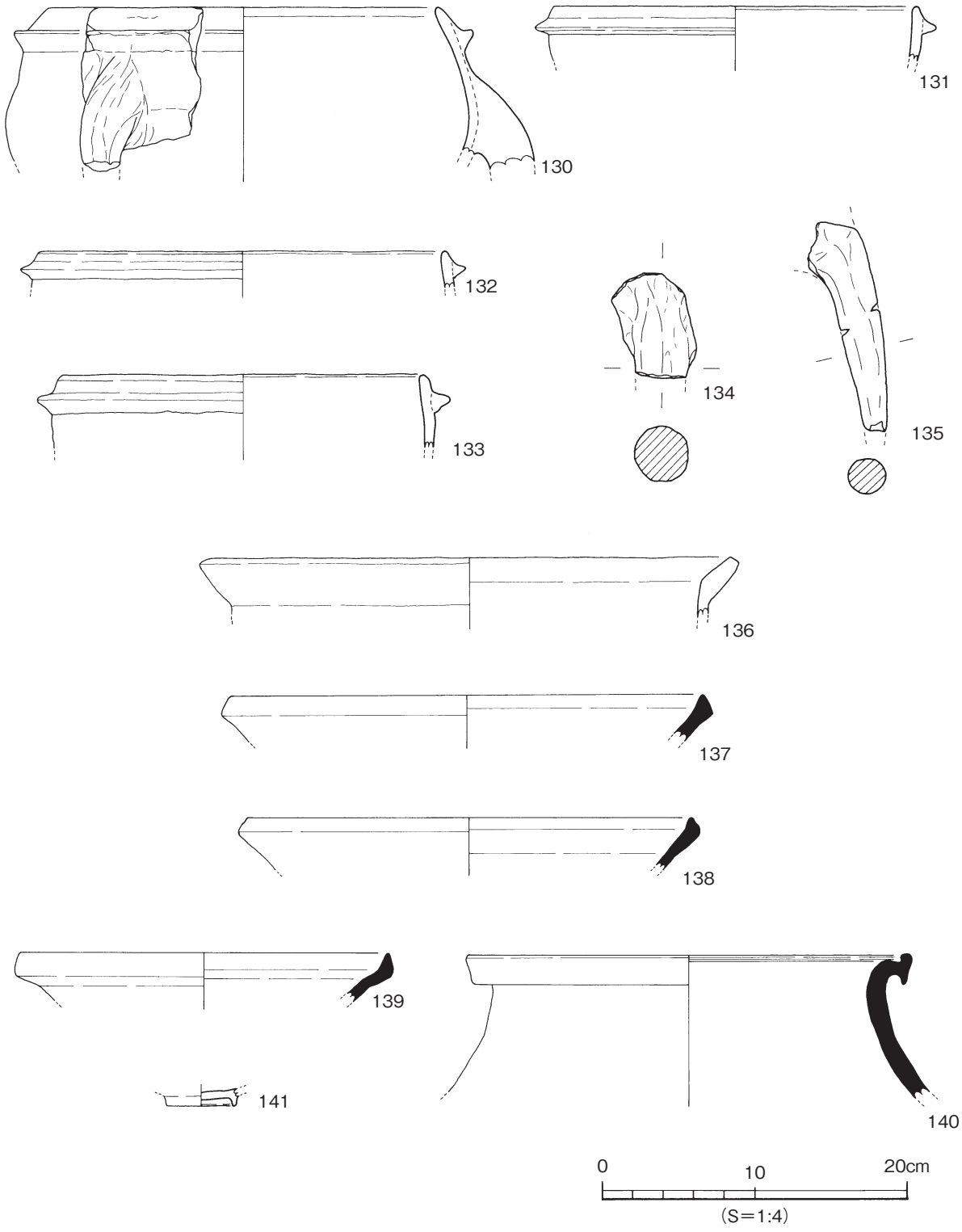
その他出土遺物（第 53 図、143 ～ 147）

表土掘削時と遺構検出時に出土した遺物である。143 ～ 146 は須恵器。143 は坏蓋の口縁部片。口縁端部は凹面。天井部と口縁部の境は沈線となる。144、145 は坏身である。145 のたちあがりは短く上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。受部は水平にのびる。146 は壺の底部片。147 は三足付き羽釜の脚部片である。

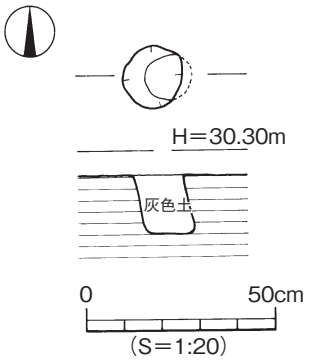
4. 小結

2 区の調査では、古墳時代後期の溝と中世の掘立柱建物跡、溝、柱穴を検出した。古墳時代後期の溝である SD201 からは 6 世紀後半の須恵器が出土した。これまで中村桑原線 2 工区の調査では、6 世紀後半の明確な遺構は検出していなかった。今回の検出は、調査区周辺に 6 世紀後半の集落が存在する可能性を示すものといえる。

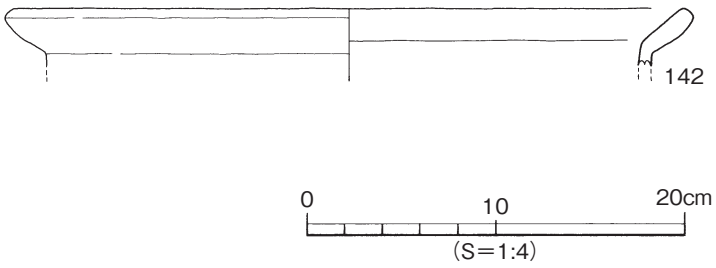
中世の遺構には、掘立 201、SD202 がある。両遺構とも 13 世紀後半に比定できる遺物が出土している。掘立 201 の柱穴である P5 からは土師器坏と三足付き羽



第49図　SD202出土遺物実測図



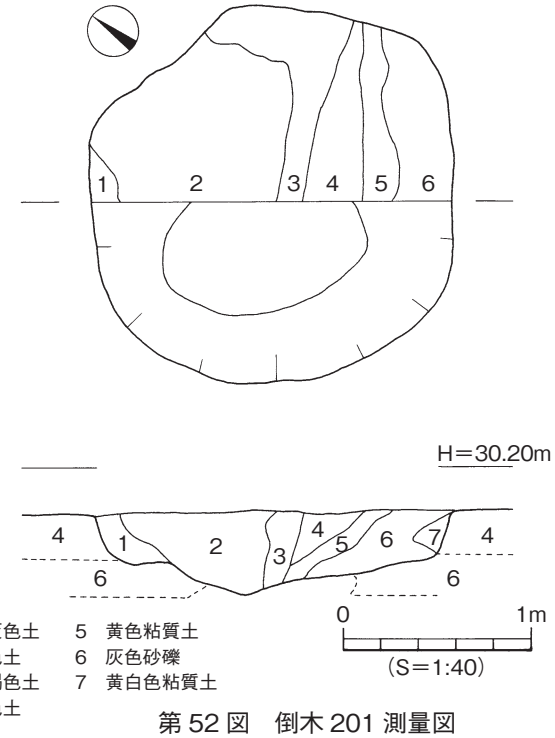
第 50 図　SP2025 測量図



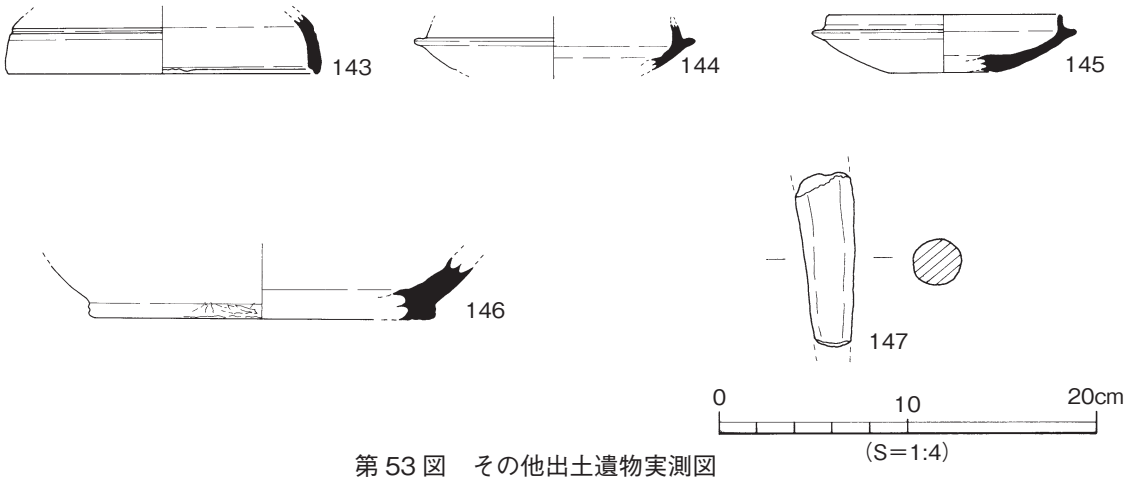
第 51 図　SP2025 出土遺物実測図

釜が出土している。ほぼ完形の土師器坏の出土状況から、住居廃絶時に柱穴内祭祀が行われた可能性が高いものと言える。

SD202 からは 13 世紀後半の東播系こね鉢、常滑焼きの大甕のほか。牛の歯牙が一点出土している。この牛の歯牙は、溝の埋土から出土したもので図示はできていない。出土歯牙は、上顎臼歯でエナメル質が未摩耗であり萌出中である事から二才半ほどの若い牛の歯牙である。この歯牙については、奈良文化財研究所の松井章氏にご教示をいただいた。



第 52 図　倒木 201 測量図



第 53 図　その他出土遺物実測図

遺物観察表　－凡例－

⑴以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。

遺物観察表は相原浩二、岩本美保、佐伯利枝、村上真由美が作成した。

⑵遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～3）→「1～3㎜の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表18　SD201出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
118	甕	底径 (3.2) 残高 10.6	平底の底部。	[胴]ハケ(7本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	灰白・黒褐・淡橙色/灰白・褐灰色	石・長(1～2) 金 ◎		
119	鉢	口径(11.6) 残高 3.5	短く外反する口縁部。口縁部直下外面に刺突文を施す。	ナデ	ナデ	橙色/橙・黒褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
120	甑	残高 3.8	甑の把手部片。体部接合部分より一旦下方へ伸びた後屈曲して上方へのびる。	ナデ	—	橙・浅黄橙色/浅黄橙色	微砂 ◎		
121	坏身	口径(11.6) 残高 3.2	たちあがりは短くやや内傾する。受部はほぼ水平。	[坏]回転ナデ [底]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰・灰オリーブ色/灰色	微砂 金 ◎		
122	坏身	口径(10.8) 残高 3.4	たちあがりは短く上方にのびる。	[坏]回転ナデ [底]回転ヘラケズリ	回転ナデ	オリーブ灰色/灰色	長(1) ◎		
123	坏身	口径(11.5) 残高 2.6	たちあがりは短く上方にのびる。受部は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色/灰色	長(0.5～3)多 ◎		
124	壺	口径(14.0) 残高 5.8	頸部は短く外反する口縁部。端部は外方向へ拡張し面をもつ。端面はナデにより凹む。	[口][頸]ハケ(5本/cm) [胴]ナデ	ナデ	灰赤色/灰色	長(～2) ◎	外面：自然釉	
125	壺	口径(14.0) 残高 3.2	外反する口縁部。端部は外方向へ拡張され面をもつ。	[口端]ヨコナデ [胴]ハケ(5本/cm)→ヨコナデ	ヨコナデ	オリーブ灰色/暗オリーブ/灰色	長(1～2) ◎	色調(断面)：灰赤色	

表19　SD201出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
126	砥石	欠損	砂岩	11.6	7.1	5.1	590		
127	敲石	完形	花崗岩	15.2	11.1	5.2	1200		

表20　掘立201出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
128	坏	口径(11.7) 底径 (7.3) 器高 3.3	底部より内湾気味にたちあがる。口縁端部は丸い。	[坏]ナデ [底]回転糸切り(板状圧痕あり)	ナデ	にぶい橙・灰褐色/にぶい橙・灰褐色	石・長(1～2) ◎		
129	三足付羽釜	口径(22.6) 残高 9.1	口縁直下に突帯が貼付される。	[口][突]ヨコナデ [脚]ナデ(指頭痕あり)	ハケ(8本/cm)→ナデ	にぶい黄橙・黒褐色/にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		

表21　SD202出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
130	三足付羽釜	口径(25.4) 残高 10.6	内傾する口縁部。口縁直下に突帯が貼付される。	ナデ	ナデ	黒色 黒色	石・長(1～5) ◎		
131	三足付羽釜	口径(23.9) 残高 3.6	内傾する口縁部。口縁直下に突帯が貼付される。	ナデ	ナデ	浅黄・灰黄色 にぶい黄色	石・長(1～3) 褐色粒 ○		
132	三足付羽釜	口径(26.5) 残高 2.4	内傾する口縁部。口縁直下に突帯が貼付される。	ヨコナデ(一部ナデ)	ヨコナデ	にぶい黄橙・黒褐色 にぶい黄橙色	長(1) 石粒(4) ◎		
133	三足付羽釜	口径(24.2) 残高 4.8	内傾する口縁部。口縁直下に突帯が貼付される。	ナデ	ナデ	灰黄褐・黒褐色 褐灰色	石・長(1～4) ◎		
134	三足付羽釜	残高 6.6	羽釜の脚部片。	ナデ(指頭痕あり)	—	褐灰・黒褐色	石・長(1～5) ◎		
135	三足付羽釜	残高 13.0	羽釜の脚部片。	ナデ	—	灰黄褐・褐灰色	石・長(1～3) ◎		

表22　SD202出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
136	鍋	口径(35.3) 残高 4.0	稜をもって外傾し外上方にのびる口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙・褐灰色 にぶい黄橙・明黄褐色	石・長(1～2) ◎		
137	こね鉢	口径(30.9) 残高 3.05	口縁端部は肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰・灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎	東播系	
138	こね鉢	口径(29.0) 残高 3.4	口縁端部は上方向につまみあげられ端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎	東播系	
139	こね鉢	口径(24.0) 残高 3.2	口縁端部は肥厚し外傾してたちあがる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○	東播系	
140	甕	口径(29.0) 残高 9.4	反り返るように曲がる口縁。端部の上部は内面方向に下部は垂下するように拡張され丸くおさめる。	回転ナデ(施釉・マメツ)	[口]回転ナデ [胴]ヨコナデ	明オリーブ灰色 オリーブ灰・紫灰色	石・長(1～4) ◎	常滑焼	14
141	坏	底径 (4.6) 残高 1.1	土師器。高台付の坏。高台端部は丸い。	ナデ	ナデ	灰白・橙色 灰白色	石・長(1～4) ◎		

表23　SP2025出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
142	鍋	口径(36.4) 残高 3.1	稜をもって外傾し外上方にのびる口縁部。	ナデ	ヨコナデ	灰黄褐・暗褐色 黒褐色	石・長(1～3) ◎		

表24　その他出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
143	坏蓋	口径(16.6) 残高 3.1	天井部と口縁部の境は沈線を施す。端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1～2) ◎		
144	坏身	残高 2.4	受部は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
145	坏身	口径(12.6) 底径 (6.0) 器高 3.0	たちあがりは上方に短くのび、受部は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		
146	壺	底径(18.3) 残高 3.3	高台状にやや突出する平底の底部。外面底端部に板状工具痕がみられる。	回転ナデ	回転ナデ	赤灰色 灰オリーブ色	石・長(1～4) ◎		
147	三足付羽釜	残高 9.2	羽釜の脚部片。	マメツ	—	にぶい黄橙色	石・長(1～4) ○	色調(断面):黒褐色	

第6章　3区の調査

1. 調査の経緯

3区は1区の西側にあたる。調査前は造成地でコンクリートに厚く覆われ、掘削できる範囲が限られた。できるだけ広範囲の掘削を試みたが、コンクリートの基礎や現代の撹乱によって掘削できない箇所が多く、結果的に調査面積が狭くなった。調査は北側を3北区、南側を3南区として行った。調査面積は30㎡である。以下、調査工程を略記する。

2003（平成15）年2月25日より掘削場所（南区､北区）を設定し､重機により表土等の掘削を開始。

2月26日、人力によって遺構の検出作業を開始する。

3月 5 日、3南区、3北区の遺構検出作業を終了する。遺構検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、遺構配置図の作成作業を開始する。

3月10日、3北区、3南区の遺構配置図を作成後、遺構の掘り下げを開始する。測量杭を設定し順次遺構・遺物の測量図の作成と写真撮影を行なってゆく。

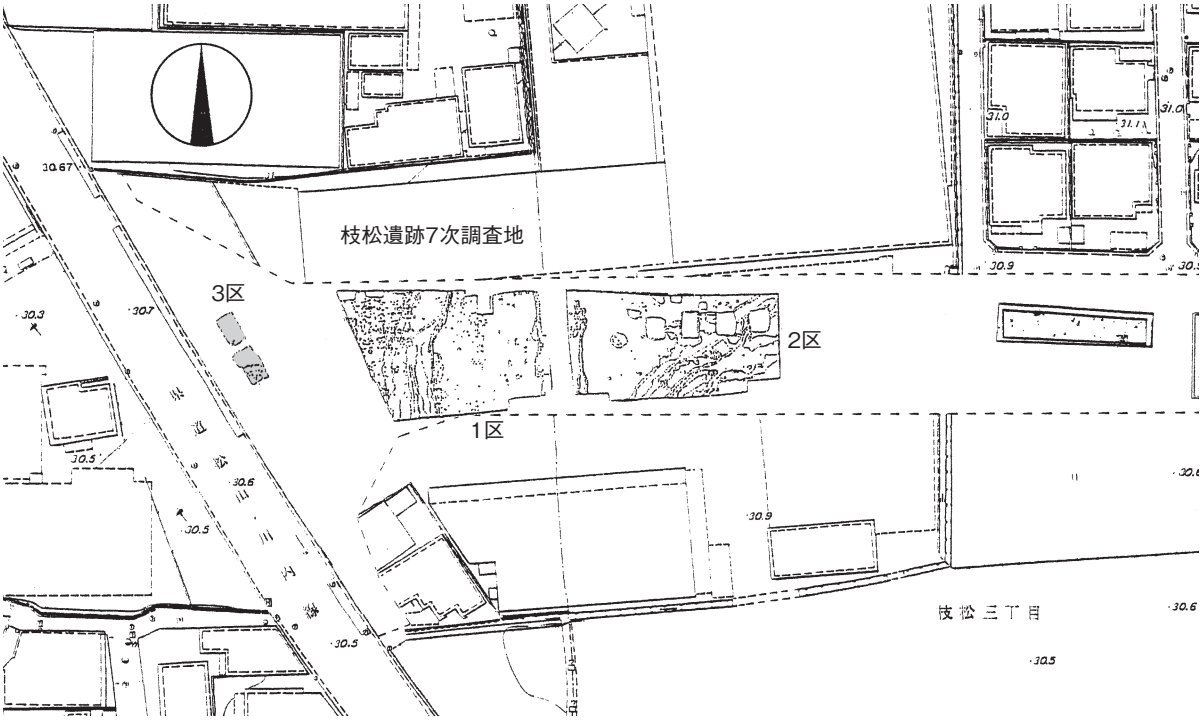
3月11日、3南区の調査区壁面の土層図作成作業を開始する。3南区の遺構の掘削を終了する。遺構完掘の写真撮影を行う。

3月13日、3南区の測量を終了する。

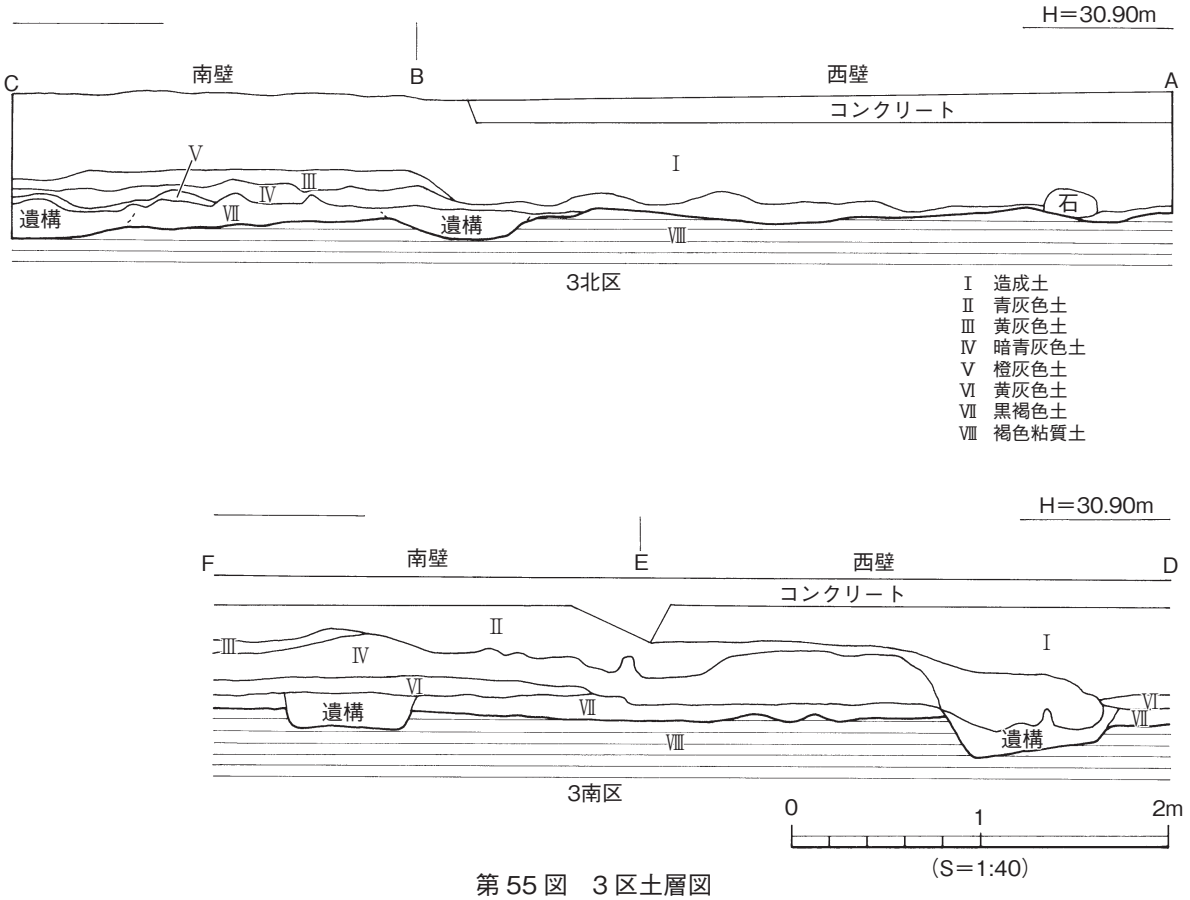
3月14日、3北区の土層図を作成する。

3月18日、3北区の遺構の掘削を終了する。遺構完掘の写真撮影を行う。

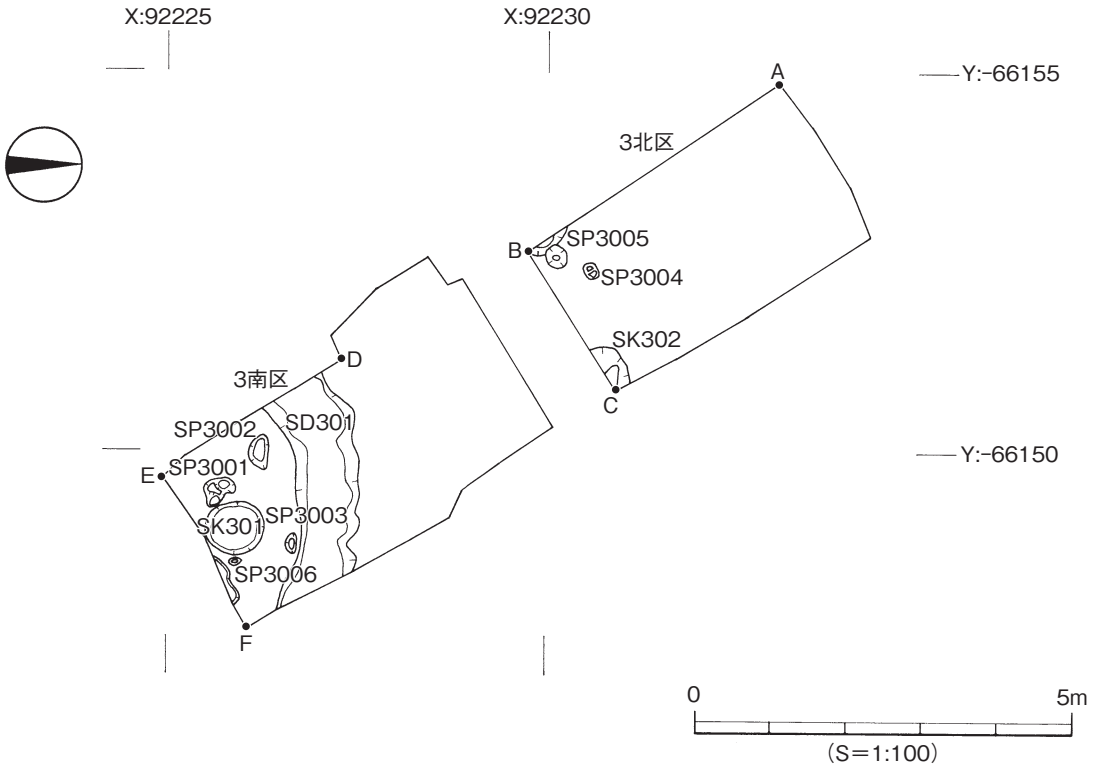
3月19日、埋め戻しを行い、3区の調査を終了する。



第54図　調査区位置図（S=1:1,000）



第 55 図　３区土層図



第 56 図　３区遺構配置図

2. 層位

3 区の基本土層は、上から第Ⅰ層現代の造成土（コンクリート含む）、第Ⅱ層青灰色土、第Ⅲ層黄灰色土、第Ⅳ層暗青灰色、第Ⅴ層橙灰色土、第Ⅵ層黄灰色土、第Ⅶ層黒褐色土、第Ⅷ層褐色粘質土である。第Ⅱ層から第Ⅴ層までは現代の耕作土・床土である。第Ⅵ層は土師器片を含む。中世以降の遺物包含層と考えられる。第Ⅷ層は地山と呼ばれる層である。遺構の検出は、第Ⅶ層黒褐色土と第Ⅷ層褐色粘質土上面で行なった。第Ⅶ層上面では土坑（SK）2 基、柱穴（SP）6 基、第Ⅷ層上面では溝（SD）1 条、柱穴 1 基、土坑 2 基を検出した。検出した遺構のうち、遺物が出土した遺構は少ない。以下、出土遺物のあった遺構について記述する。

3. 遺構と遺物

溝（SD）

SD301（第 57 図）

3 南区の第Ⅷ層上面で検出した溝である。緩やかに弧を描きながら調査区を東西に横切る。検出規模は長さ 2.75m、幅 0.60m ～ 0.95m、深さ 0.15m を測る。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物（第 58 図、148・149）

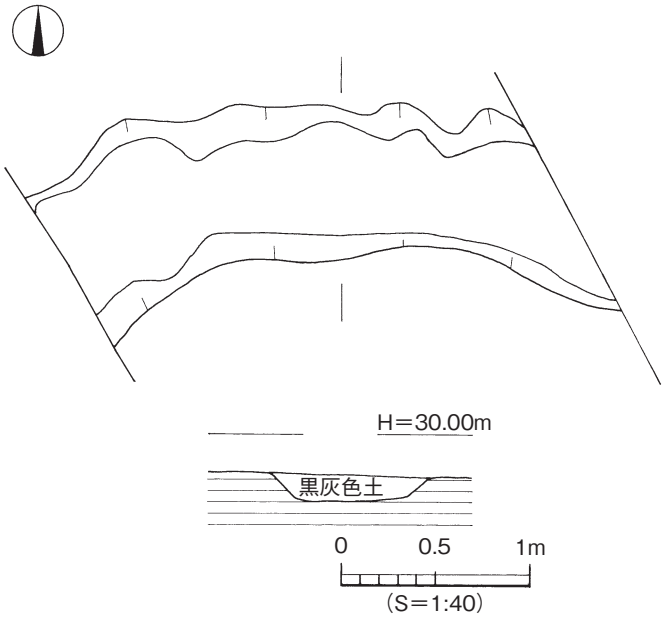
148 は甕の口縁部片。149 は支脚。中実で突起部をもつ。

時期　出土遺物より弥生時代後期後半。

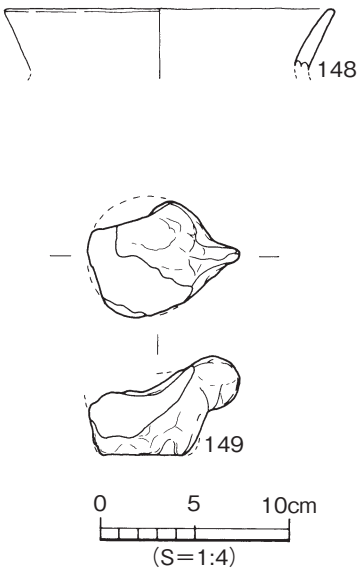
柱穴（SP）

SP3002（第 59 図）

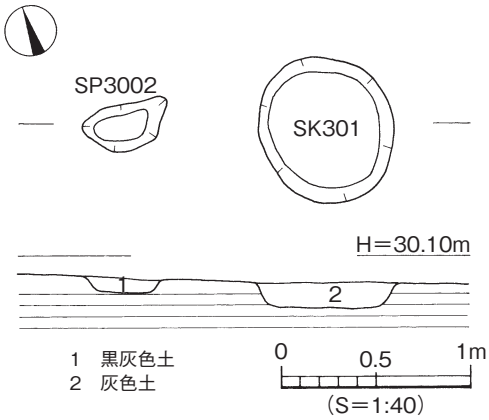
3 南区の第Ⅷ層上面で検出した柱穴である。平面形は楕円形を呈する。検出規模は長軸 0.45m、短軸 0.24m、深さ 0.09m を測る。埋土は黒灰色土である。遺物は弥生土器が出土している。



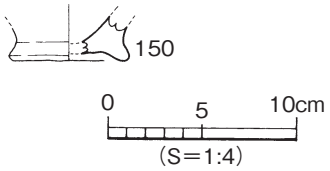
第 57 図　SD301 測量図



第 58 図　SD301 出土遺物実測図



第 59 図　SP3002・SK301 測量図



第 60 図　SP3002 出土遺物実測図

出土遺物（第 60 図、150）

150 は甕の底部片。やや上げ底である。

時期　出土遺物より弥生時代後期後半。

4. 小　結

3 区では、弥生時代の遺構と中世と考えられる遺構を検出した。時期が判別できる遺物が出土したのは溝 SD301、柱穴 SP3002 である。いずれも出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

中世の遺構と考えられる遺構は、第Ⅶ層上面で検出した遺構である。これらの遺構からは出土遺物が無かったが、遺構埋土色は 1 区で検出した 13 世紀後半の遺物が出土した遺構と同じである事から、中世以降の遺構と考えた。

遺物観察表　－凡例－

⑴以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。

遺物観察表は相原浩二、岩本美保、佐伯利枝、村上真由美が作成した。

⑵遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　　（　）: 推定復元値。

調　整　欄　　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　※ P.49 参照

表25　SD301出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
148	甕	口径(18.4) 残高　3.2	外反気味の口縁。端部は丸みをおびる。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ○		
149	支脚	器高　5.2	中実の支脚。一部欠損。	ナデ(指頭痕あり)	—	褐灰・にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		

表26　SP3002出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
150	甕	底径　(6.4) 残高　2.4	くびれの上げ底の底部。端部は丸みをおびた面をもつ。	ナデ	ナデ	暗灰黄・浅黄色 灰黄色	長(1) ○		

第7章　枝松遺跡8次－1区の調査－

1. 調査の経緯

調査にあたっては、掘削した土砂置き場の確保と調査地内を水路が横断する事などから調査地を東から1区、2区、3区と3区画に分けて調査を行った。

1区は調査区の東側にあたり、調査前は耕作地である。調査面積は320㎡である。以下、調査工程を略記する。

2004（平成16）年2月2日、仮設調査事務所を設置する。発掘用具、機材の準備を行う。調査区に縄張り等の安全対策を行う。

2月 3 日、重機により表土等の掘削を開始する。同月6日まで土砂の掘削・運搬を行う。

2月 4 日、人力によって遺構の検出作業を開始する。

2月 5 日、調査区の南壁と東壁に土層観察用のトレンチを設定する。

2月10日、国際航業㈱に委託し調査区内に国土座標4級基準点（世界測地系）を設置する。

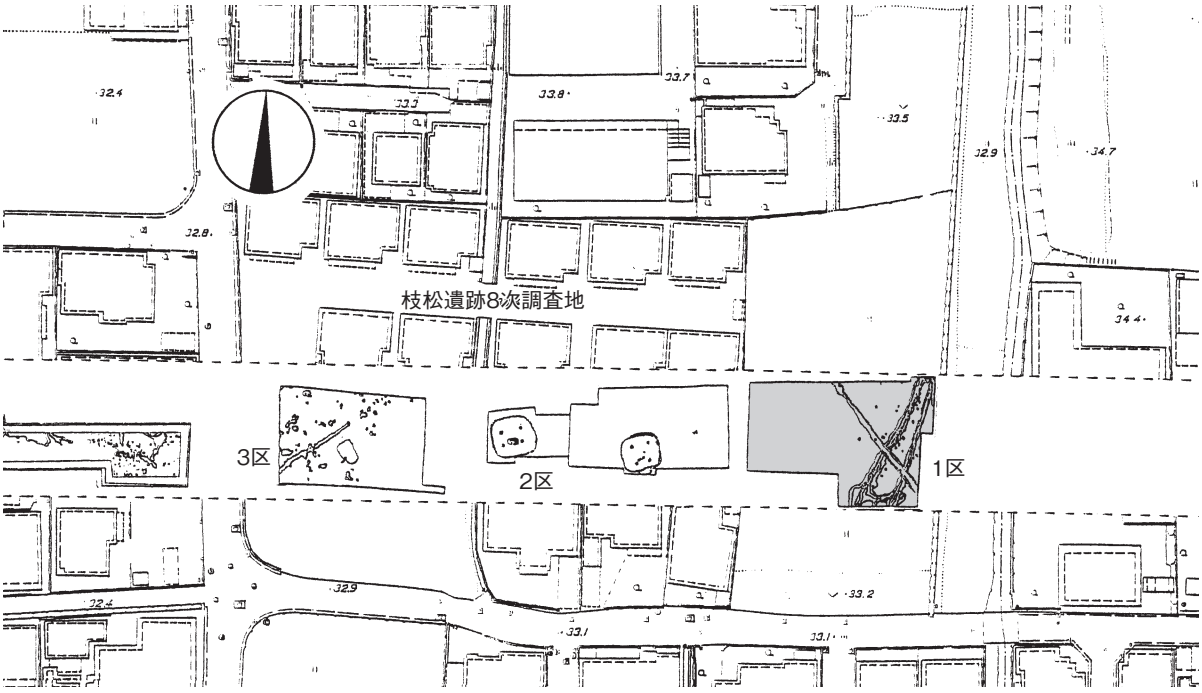
2月12日、遺構検出作業を終了する。高所作業車を利用し遺構検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、調査区測量図・遺構配置図作成作業を開始する。

2月13日、遺構の掘り下げを開始する。測量杭を設定し順次遺構・遺物の測量図の作成と写真撮影を行なう。

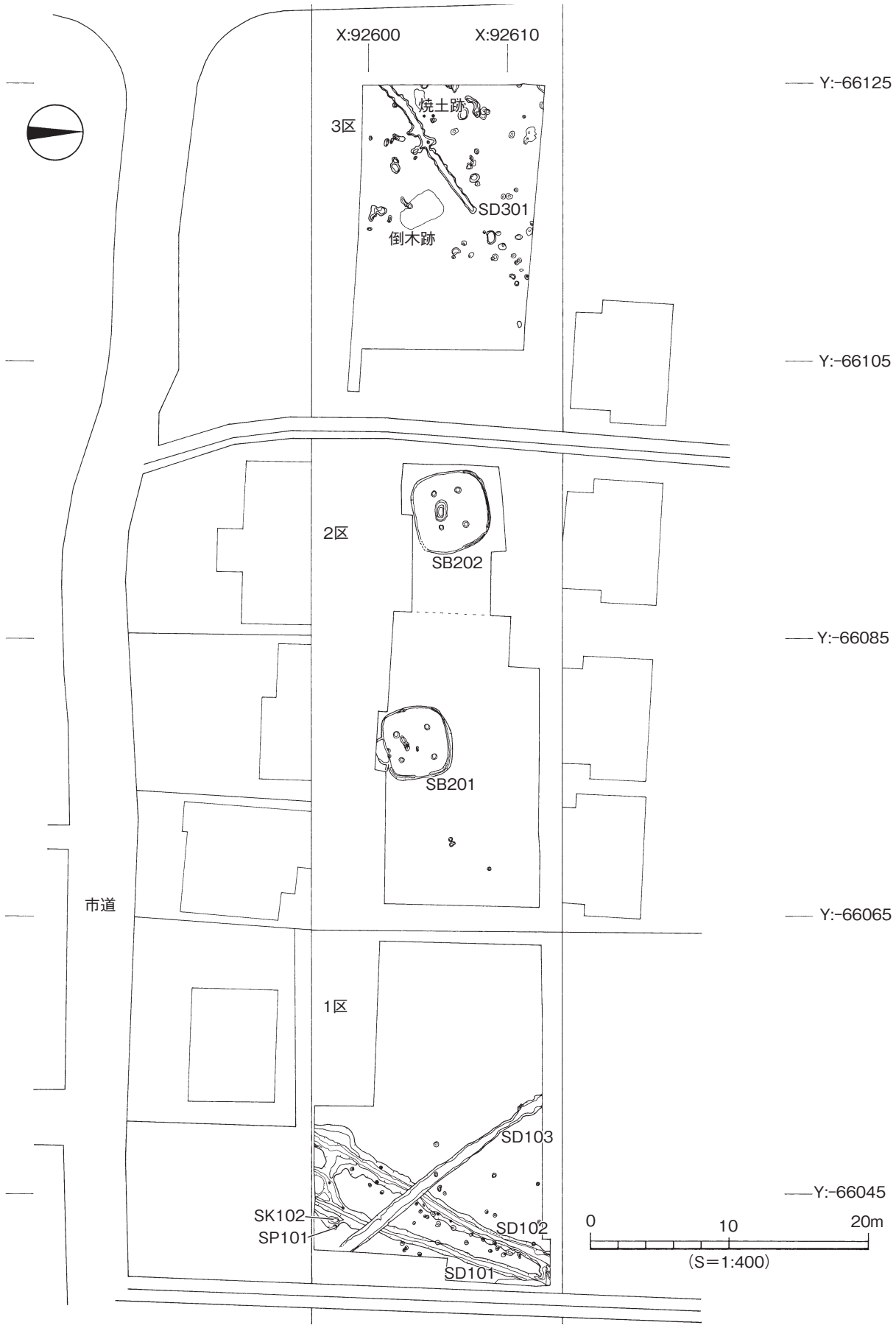
2月17日、SD102の遺物検出写真と遺物測量図を作成し、遺物取り上げ作業を行う。

2月20日、SD101の遺物検出写真と遺物測量図を作成し、遺物取り上げ作業を行う。

2月24日、SD101、102の遺構測量図を作成する。



第61図　調査区位置図（S=1:1,000）



第 62 図　調査区位置図と遺構配置図

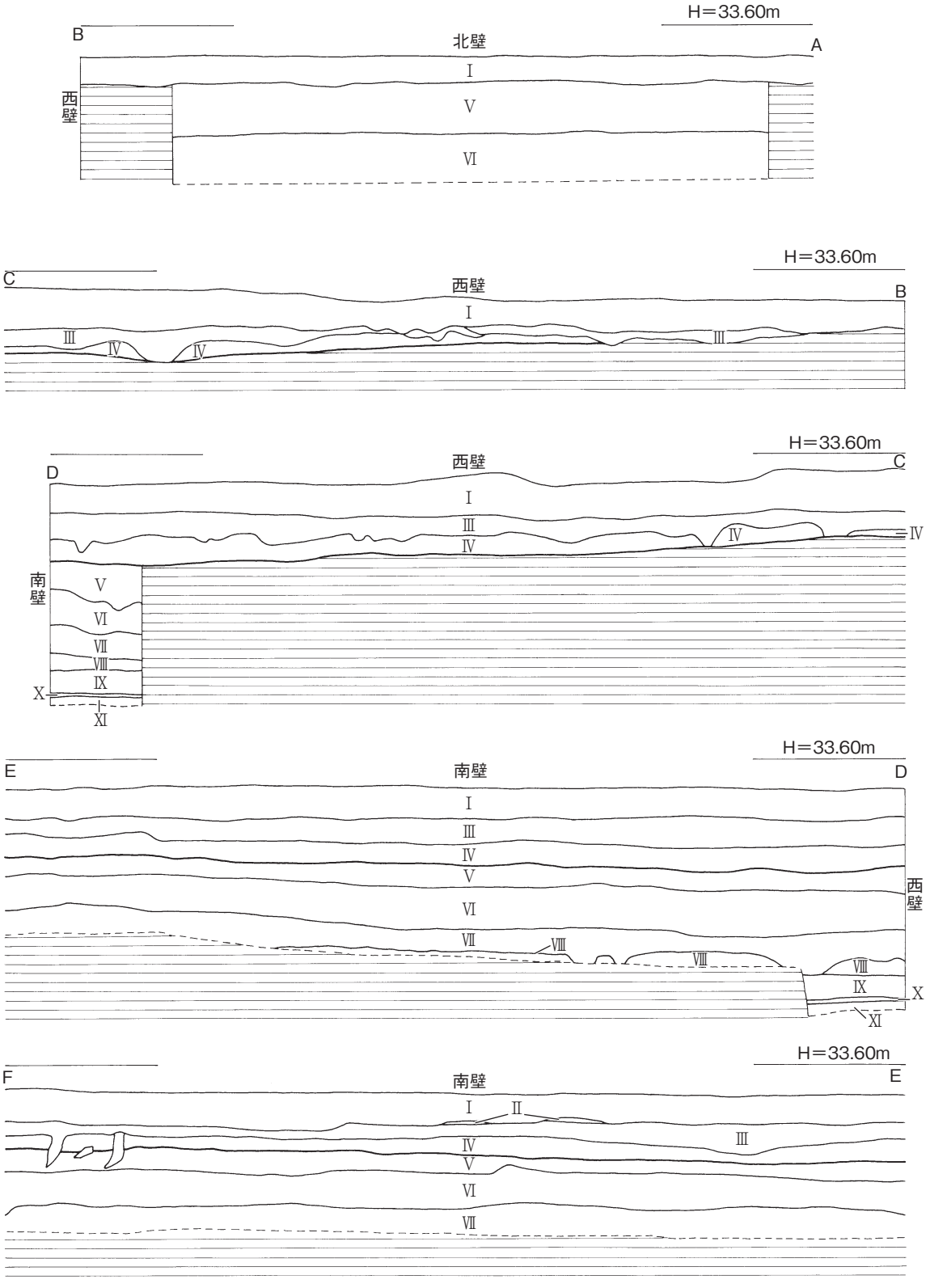
3月 1 日、南壁の土層状況の写真撮影を行う。撮影終了後、土層図を作成する。
3月 10 日、2回目の SD101、102 の遺物検出写真と遺物測量図を作成し、遺物取り上げ作業を行う。
3月 15 日、SD103 の掘り下げを終了し、土層図・平面図などの測量作業を行う。3回目の SD101、102 の遺物検出写真と遺物測量図を作成し、遺物取り上げ作業を行う。
3月 17 日、当初に検出した SD101、SD102 の掘削と測量を終了する。
3月 23 日、SD101、SD102 の北側の拡張作業を開始する。検出後、掘り下げを行う。
3月 26 日、SD101、SD102 の北側の拡張部の測量を終了する。
4月 1 日、現場作業を同月 15 日まで休止し、その間土器洗浄・注記・選別・図面整理等の整理作業を調査事務所にて行う。
4月 16 日、調査を再開し SD101、SD102 の南側の拡張作業を開始する。
4月 19 日、拡張部において SK102、SP101 を検出する。検出状況の写真撮影を行なった後、掘り下げを開始する。
4月 20 日、SD101、SD102 拡張部の遺物検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、遺物の測量を行い取り上げ作業を行う。
4月 21 日、SK102、SP101 で遺物が出土する。遺物検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、遺物の測量を行い取り上げ作業を行う。
4月 26 日、2回目の SD101、SD102 拡張部の遺物検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、遺物の測量を行い取り上げ作業を行う。SD101、SD102 合流部の平板測量を行う。
4月 28 日、調査区内の第Ⅴ層上面のコンタ図作成作業を行う。
5月 6 日、SD101、SD102 の南側の拡張部の調査を終了する。
5月 7 日、高所作業車を使用し遺構の完掘状況の写真撮影を行い1区の調査を終了する。
5月 8 日、1区の重機による埋め戻し作業を開始する。
5月 12 日、1区の埋め戻し作業を完了する。

2. 層位

本調査地は周辺は、約 22,000 年～ 25,000 年前に噴出・降下した AT 火山灰と約 6,300 年前に噴出・降下した鬼界アカホヤ火山灰が広範に確認されている地域である。本調査においてもこれらの火山灰を確認した。

1区の基本層序は、上から第Ⅰ層灰色土、第Ⅱ層赤灰色土、第Ⅲ層黒色土、第Ⅳ層黒灰色土、第Ⅴ層茶褐色土、第Ⅵ層暗褐色粘質土、第Ⅶ層黄色に茶褐色粘質土が混じる、第Ⅷ層黄茶色土、第Ⅸ層茶褐色粘質土、第Ⅹ層黄白色粘質土、第Ⅺ層灰白色砂質土である。層厚は第Ⅰ層 16 ㎝～ 28 ㎝、第Ⅱ層 1 ㎝～ 2 ㎝、第Ⅲ層 2 ㎝～ 20 ㎝、第Ⅳ層 10 ㎝～ 31 ㎝、第Ⅴ層 18 ㎝～ 31 ㎝、第Ⅵ層 14 ㎝～ 33 ㎝、第Ⅶ層 10 ㎝～ 28 ㎝、第Ⅷ層 8 ㎝～ 12 ㎝、第Ⅸ層 14 ㎝～ 16 ㎝、第Ⅹ層 2 ㎝～ 4 ㎝を測る。

第Ⅰ層は現代の耕作土、第Ⅱ層は現代の床土で部分的に遺存する。第Ⅲ層と第Ⅳ層は調査区の西側に厚く堆積し、東側では現代の耕作による削平のため失われている。第Ⅲ層は遺物包含層とも考えられ慎重に遺物の検出を試みたが、第Ⅲ層中から遺物は出土しなかった。第Ⅳ層は、アカホヤ火山灰と考えられる。第Ⅴ層以下は地山と呼ばれる層である。第Ⅴ層は、調査区内で南西方向に向かって緩やかに傾斜して下る。第Ⅶ層～第Ⅹ層までは、束本遺跡4次調査地の調査成果より AT 火山灰の堆積層



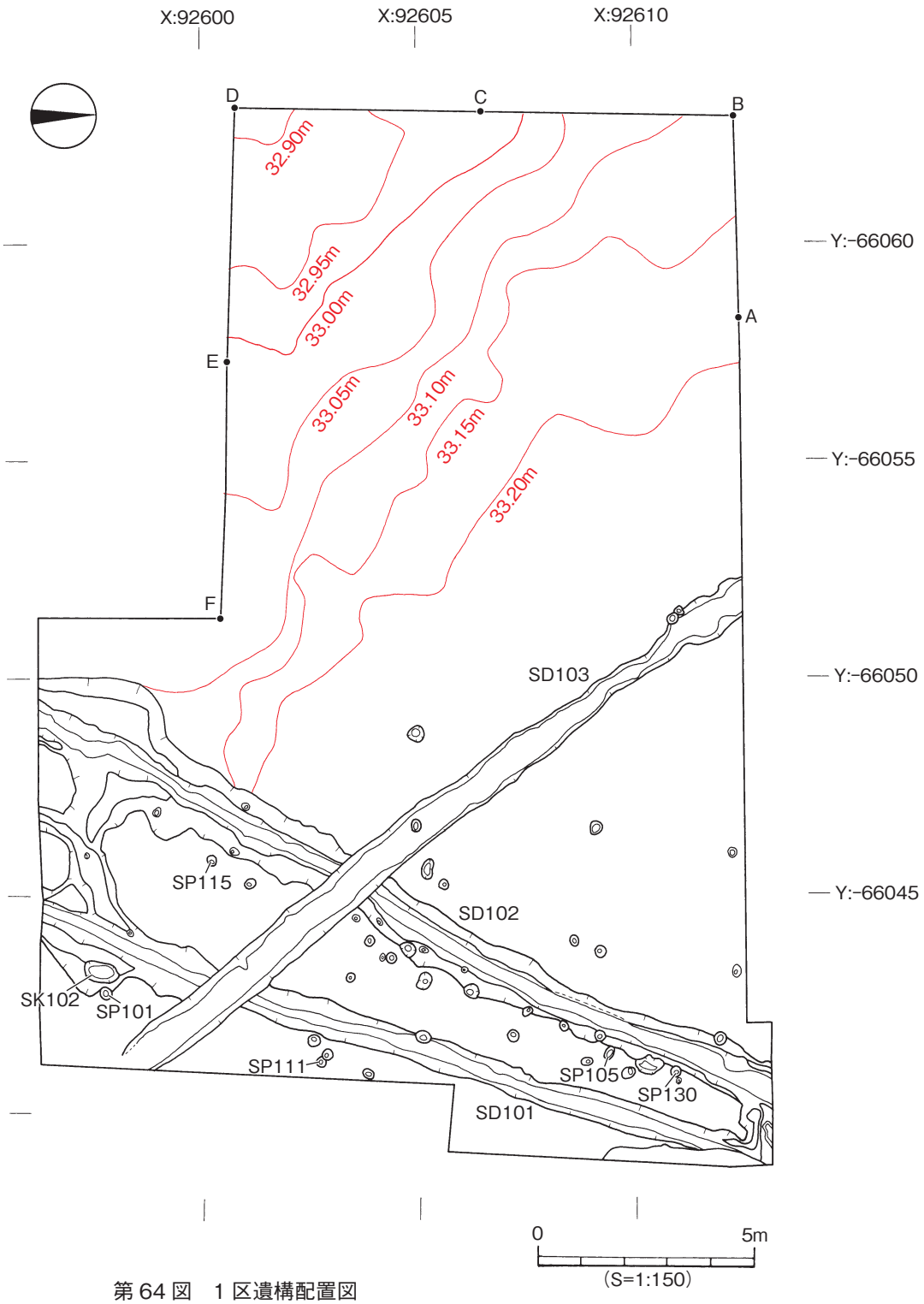
I　灰色土（現代耕作土）
II　赤灰色土（床土）
III　黒色土
IV　黒灰色土
V　茶褐色土（固くしまる）
VI　暗褐色粘質土（粘性強い）
VII　黄色に茶褐色粘質土が混じる（AT２次堆積層）
VIII　黄茶色土（砂混じる）
IX　茶褐色粘質土
X　黄白色粘質土
XI　灰白色砂質土

0　1　2m
（S＝1:40）

第 63 図　土層図

と考えられる。第Ⅵ層～第Ⅸ層は2次堆積層、第Ⅹ層が1次堆積層と考えられる。

遺構の検出は、地山と呼ばれる第Ⅴ層上面で行い、主に弥生時代の遺構・遺物を検出した。検出した遺構は溝（SD）3条、土坑（SK）2基、柱穴（SP）30基である。以下、主な遺構・遺物について記述する。



第64図　1区遺構配置図

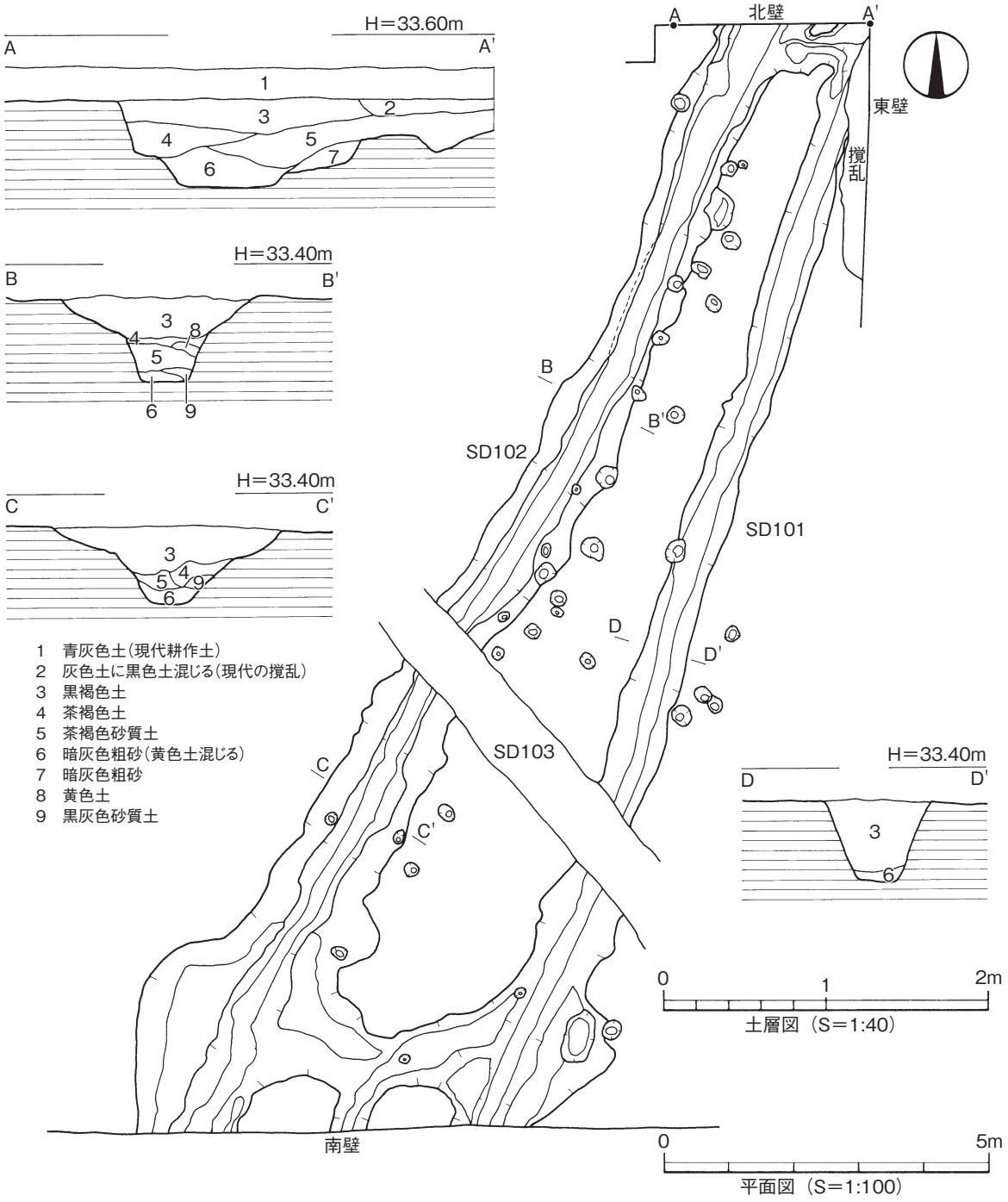
3. 遺構と遺物

(1) 弥生時代

溝（SD）

SD101・SD102（第 65 図）

調査区の東側で検出した溝である。調査区を北東方向から南西方向に横切る溝である。当初の遺



第 65 図　SD101・102 測量図

構検出段階では、2 条の溝が平行して流れているものと考えられた。このため東側を SD101、西側を SD102 として調査を行った。その後、溝の北側と南側を拡張した結果、北側と南側で合流する事が確認された。SD101 と SD102 は切り合いも認められないため、同一の溝である事が判明した。ここでは 2 条に分岐した部分について東側を SD101、西側を SD102 として記述する。

SD101 の検出規模は長さ 17.80m、幅 0.55m ～ 1.20m、深さ 0.48m ～ 0.52m を測る。調査区の北側と南側で SD102 と合流する。調査区南側の SD102 との合流部の幅は 6.00m を測る。溝底には粗砂が堆積している。遺物は弥生土器、石器、ガラス玉が出土した。

SD102 は、SD101 の西側に平行して流れる。検出規模は長さ 19.15m、幅 0.85m ～ 1.50m、深さ 0.48m ～ 0.52m を測る。調査区の北側と南側で SD101 と合流する。溝底には SD101 と同様に粗砂が積する。遺物は弥生土器、石器が出土した。出土遺物は SD101、102 とに分けて記述する。

SD101 出土遺物（第 66 図～第 72 図）

甕形土器（151 ～ 190）

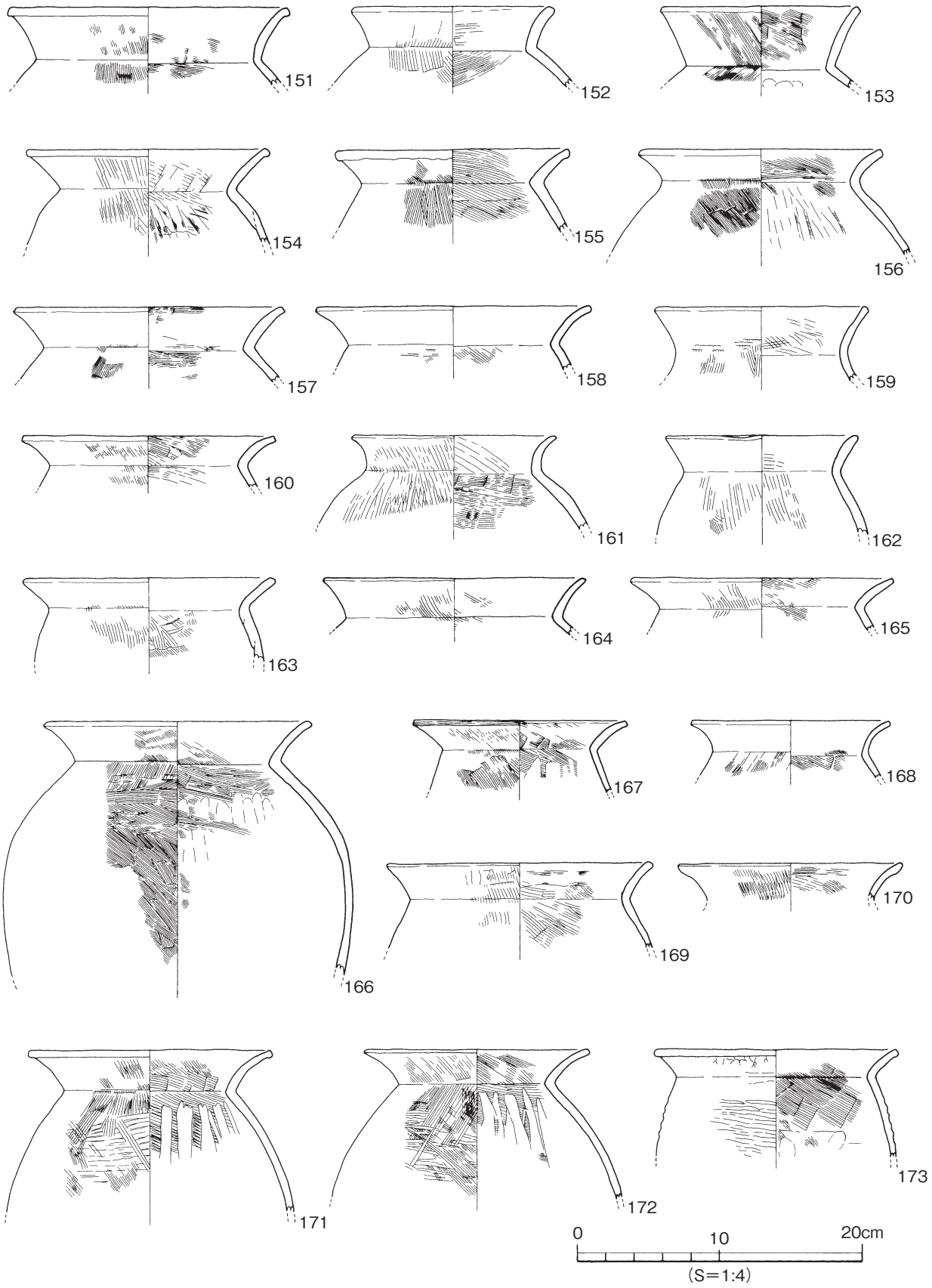
151 は外反する口縁部。口縁端部は下方がやや肥厚する。152 は外反する口縁部。器壁が厚い。153 は外上方に長くのびる口縁部。154 の口縁端部は下方に肥厚して丸い。155 の口縁端部は面をもつ。156 は肩の張る体部。157、158 は外反する口縁部。159 は頸部から緩やかに外上方にのびる口縁部。160 は外反する口縁部。161 の頸部は上方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。162 の口縁部は厚く、口縁端部は丸くおさめる。163 の口縁部は外上方にのびる。164 ～ 169 は外反する口縁部である。端部は面をもつ。170 の口縁部は外反し、端部は外に肥厚する。内外面ともハケ目調整が施される。171 は外反する口縁部。口縁端部は面をもち下方に肥厚する。胴部外面に叩きが施される。172、173 は外反する口縁部。胴部外面にタタキが施される。174 は口縁部の器壁が厚く口縁端部は丸い。175 は緩やかに外反する口縁部。頸部は内に明瞭な稜をもつ。176 の口縁部は肥厚し端部は丸くおさめる。177 ～ 190 は底部～胴部片である。177、179、180 は小さな上げ底気味の底部。178、181、182 は小さな平底である。183 は尖り底を呈する。185、187 ～ 190 は胴部にタタキ目調整が施される。底部は小さな平底である。

壺形土器（191 ～ 204）

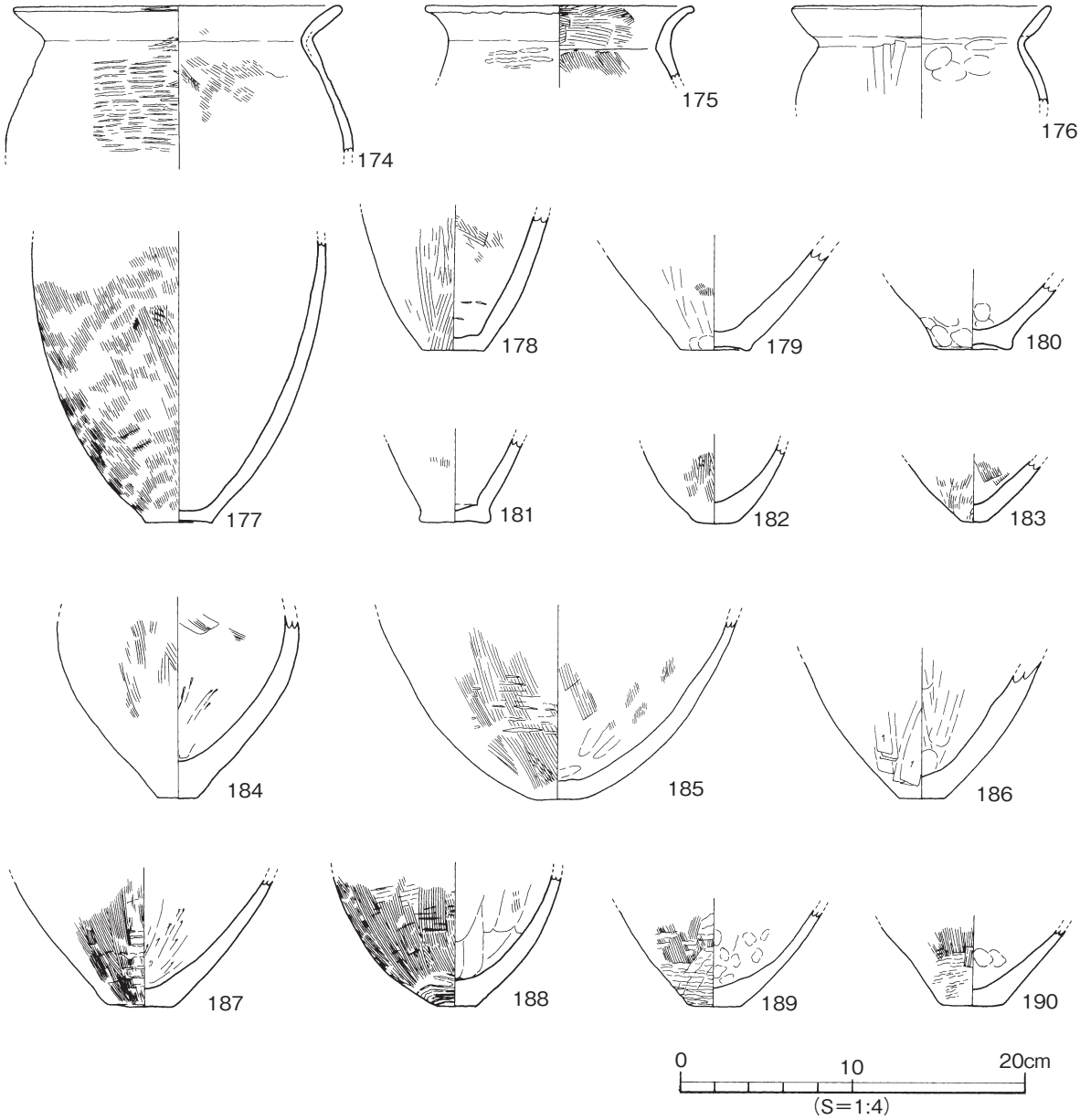
191 の口縁拡張部は内傾して内湾気味に立ち上がる。口縁端部は上方に短くのびる。拡張部との接合部外面は面をもち断面「コ」字状となる。拡張部外面には波状文が施される。192 の拡張部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。193 は拡張部が欠失する。194 は口縁部が内湾気味に直立する。口縁端部は丸い。195 は口縁端部は欠失。頸部は外上方に開く。196、197 は大きく外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。198 の直立する頸部から口縁部は外反したのち端部近くで上方に短く立ち上がる。口縁端部は丸い。胴部は球形を呈する。199 は緩やかに外反して立ち上がる口縁部。底部は小さな平底。200 の口縁部は欠失する。胴部は球形を呈する。底部はやや突出した小さな平底である。201 は丸みを帯びた平底の底部である。202、203 は平底の底部である。204 は丸みを帯びた平底の底部。器壁は厚い。

鉢形土器（205 ～ 219）

205、206 は外反する口縁部。207、208 は外上方に開く口縁部。209 は口縁部内面に顕著な指頭痕を残す。210 は小さな底部。211 の口縁端部は面をもつ。212 の内面はヘラミガキが施される。213、214 の口縁端部は丸い。215 は丸底気味の底部。内外面ともハケ目調整、216 は丸底に近い平底の底部。内面ハケ目調整、外面はタタキ目を残す。217 は丸底である。口縁部は短く外反する。外面にタタキ



第 66 図　SD101 出土遺物実測図(1)

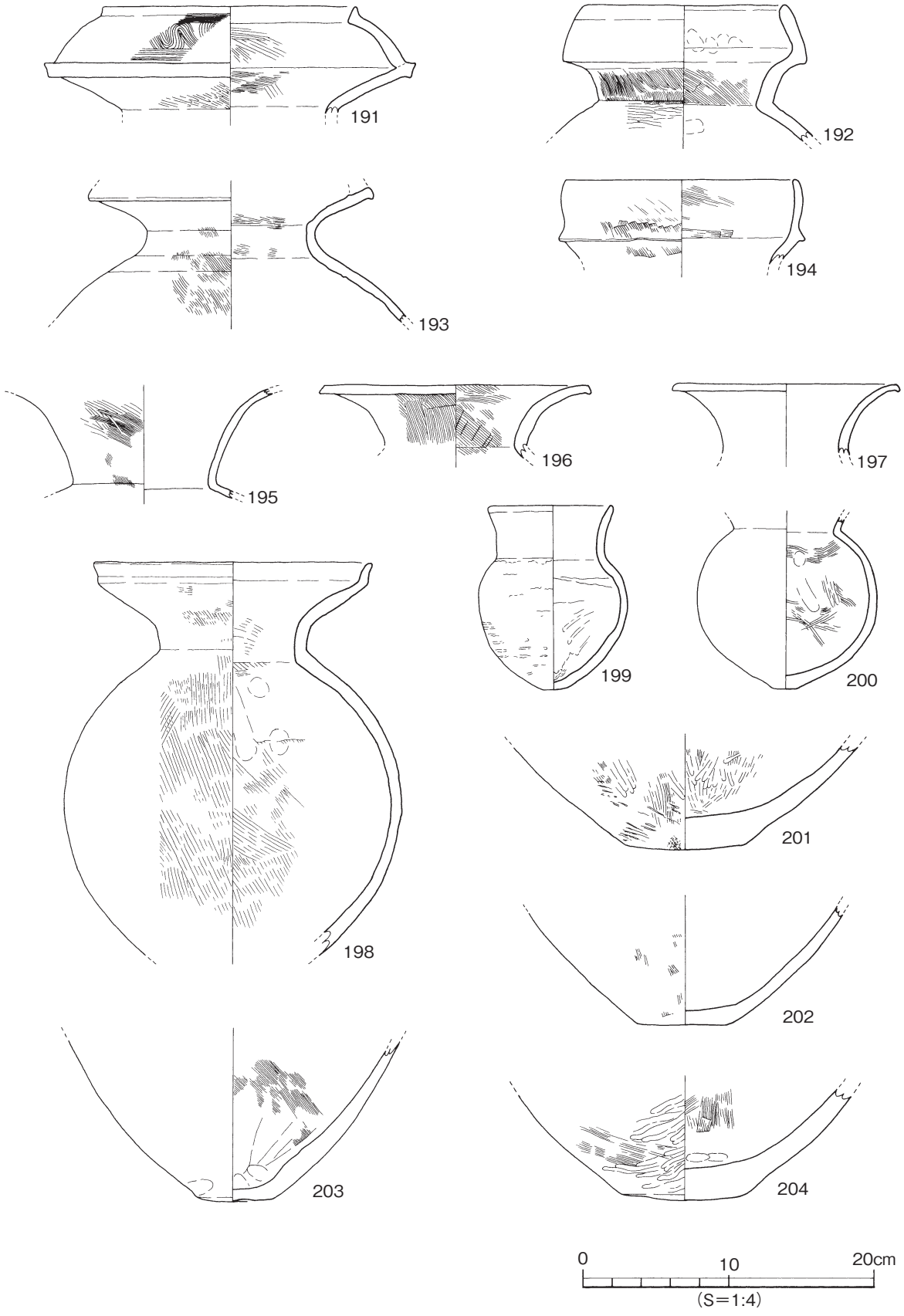


第67図　SD101出土遺物実測図(2)

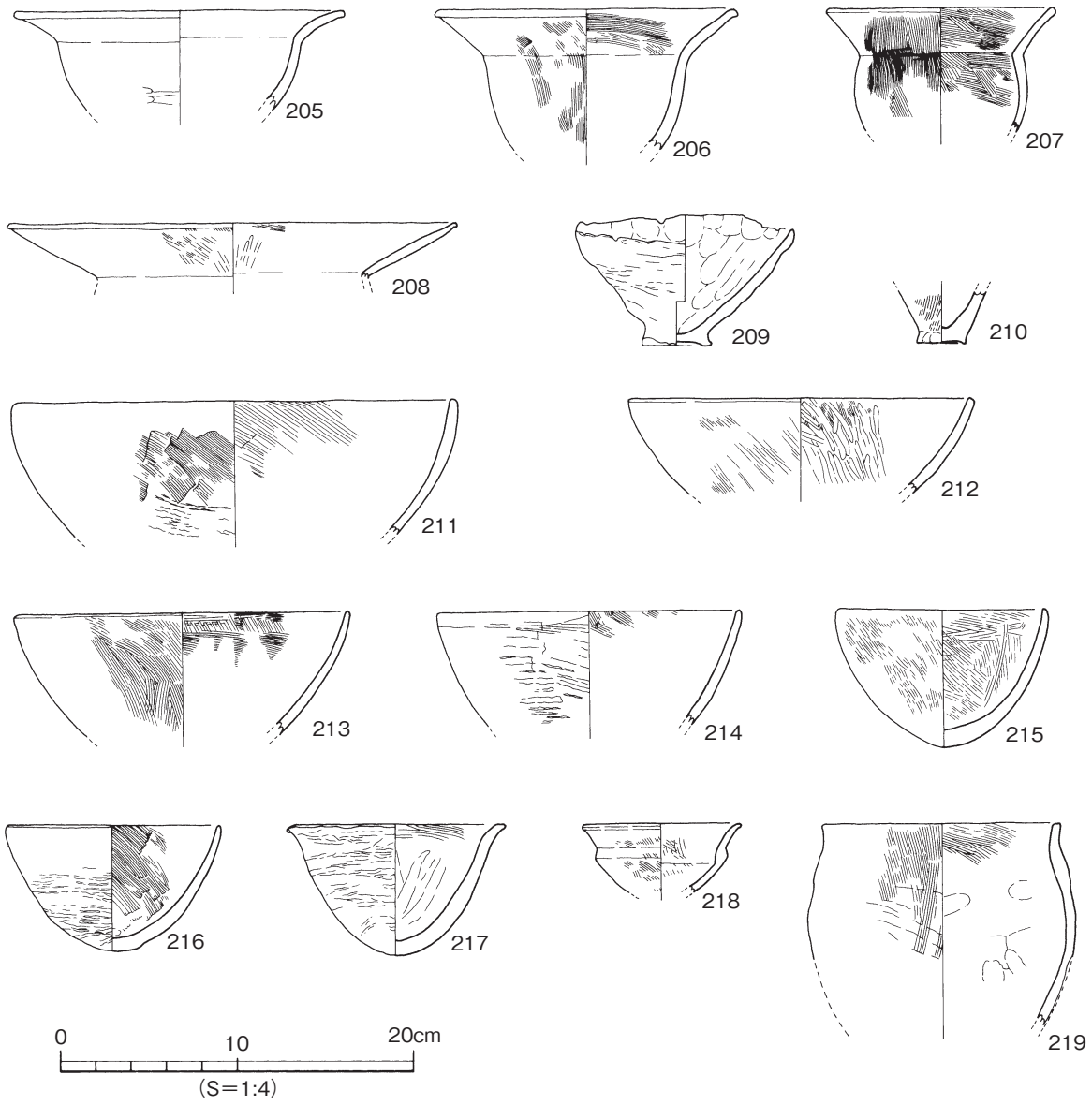
目を残す。218は頸部から緩やかに屈曲して外反する口縁部。219は内湾する胴部より短く上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は面をもつ。

高坏形土器（220～227）

220は大きく外反して開く口縁部。221は短く外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。坏部内面はヘラミガキが施される。222、223は短く外反する口縁部である。口縁端部は丸い。224は口縁部と脚柱が欠失する。225の外面はヘラミガキ調整される。226は緩やかに開く脚裾部。227は坏底部に円孔が穿たれる。



第 68 図　SD101 出土遺物実測図(3)



第69図　SD101 出土遺物実測図(4)

器台形土器（228）

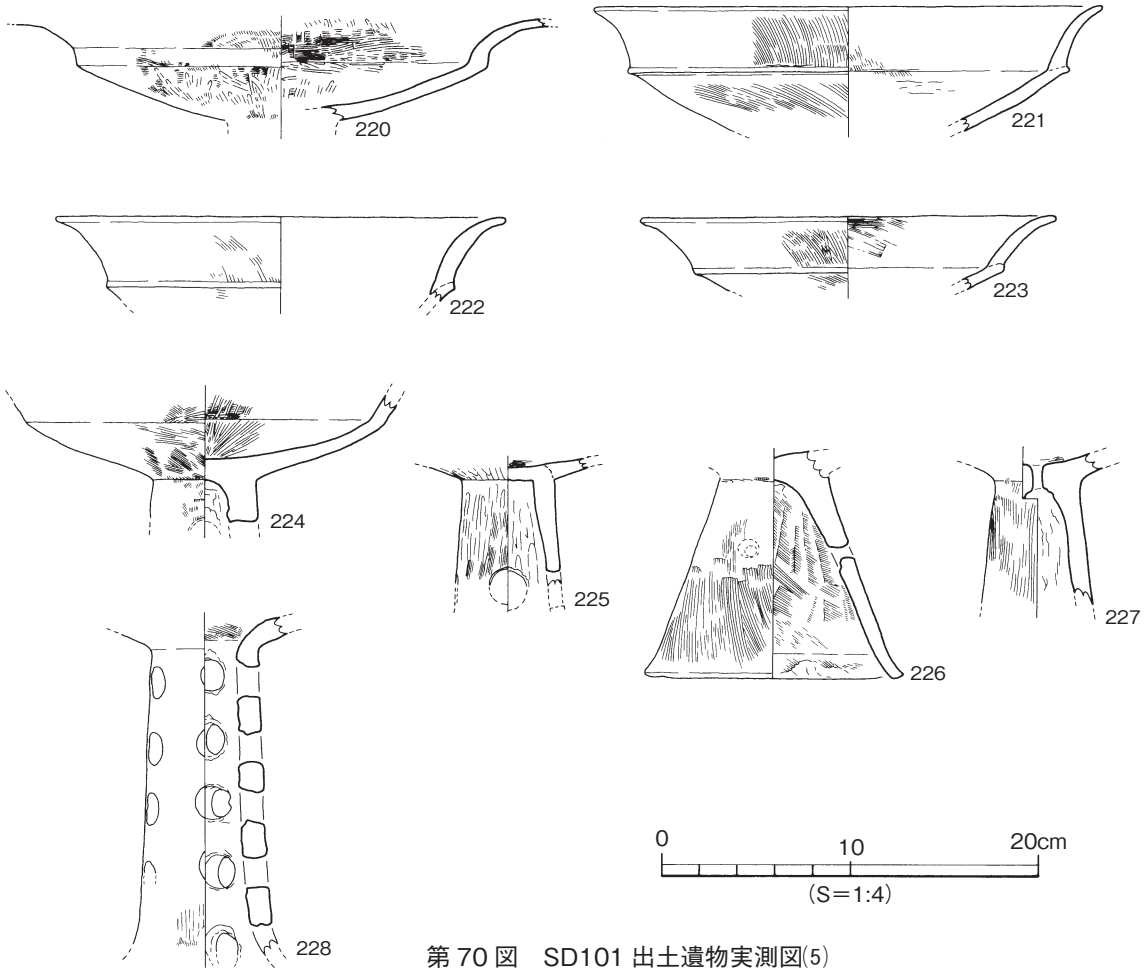
228 は脚部。5 方向に 5 段の円孔が穿たれる。

支脚形土器（229 ～ 237）

229、230 は高坏の脚柱に似たものである。裾部は緩やかに開く。受部は小さく凹み片口状となる。231 ～ 234 は指頭痕を顕著に残す。231 は中実の上げ底である。受部は傾斜する。体部に円孔が穿たれている。232 は中空である。受部は凹む。233 は中実でやや上げ底である。受部は凹み、突起部をもつ。234 は中空である。やや長い突起部をもつ。235 ～ 237 は角状の突起をもつ。235、236 はタタキ目痕を残す。背面には小さな突起が付く。237 は突起部が欠失する。外面は指頭痕を顕著に残す。

石製品（238 ～ 241）

238 ～ 240 は石包丁である。238 は直背の外湾刃である。両側に抉りが施される。239 は研ぎ直され斜めの直線刃となる。両側に抉りが施される。240 は未製品と考えられる。241 は砥石である。小



第 70 図　SD101 出土遺物実測図(5)

さな貫通孔が一孔と未完通孔が三孔認められる。

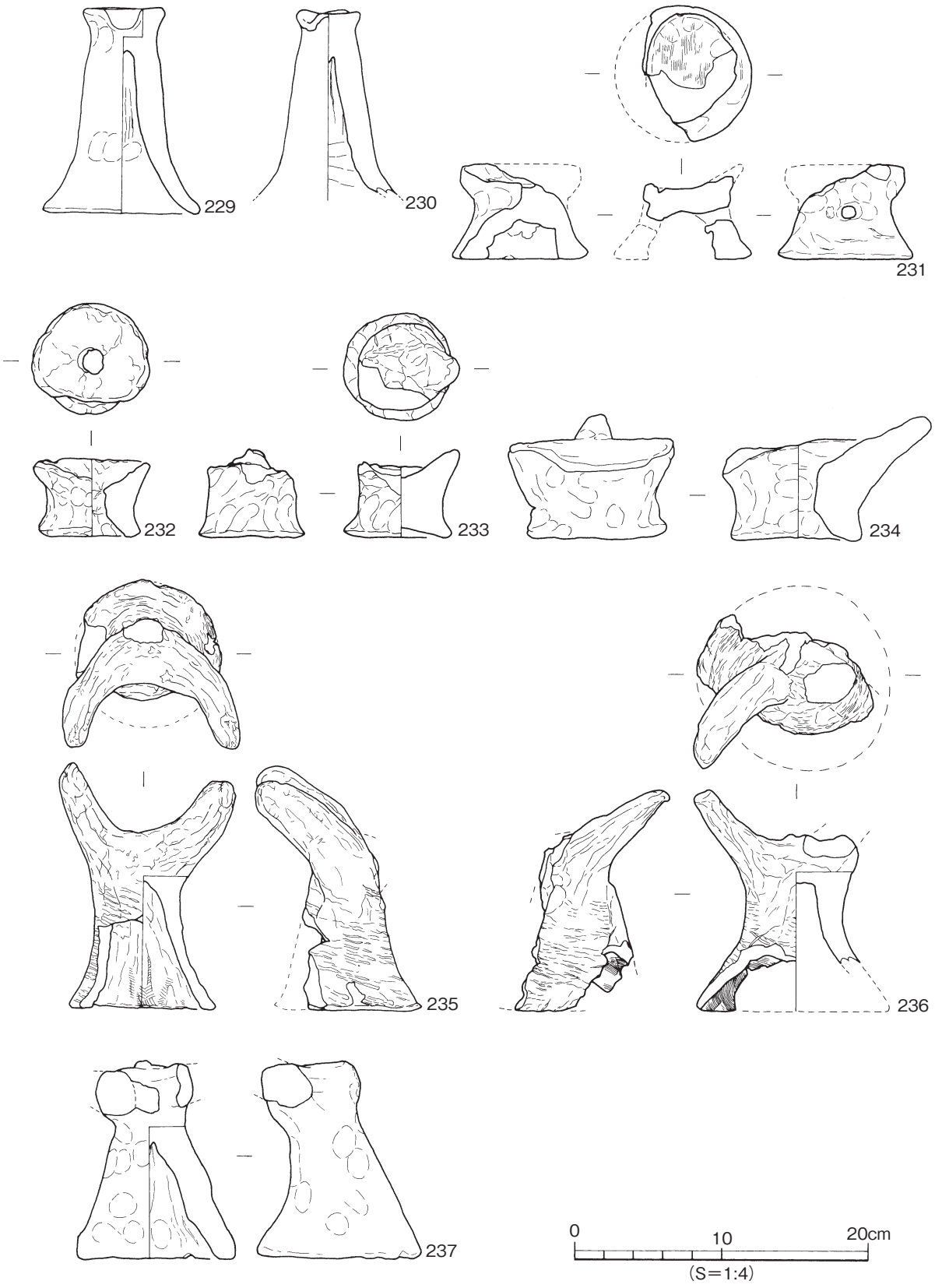
ガラス玉（242）

242 は色調が濃青色を呈する。

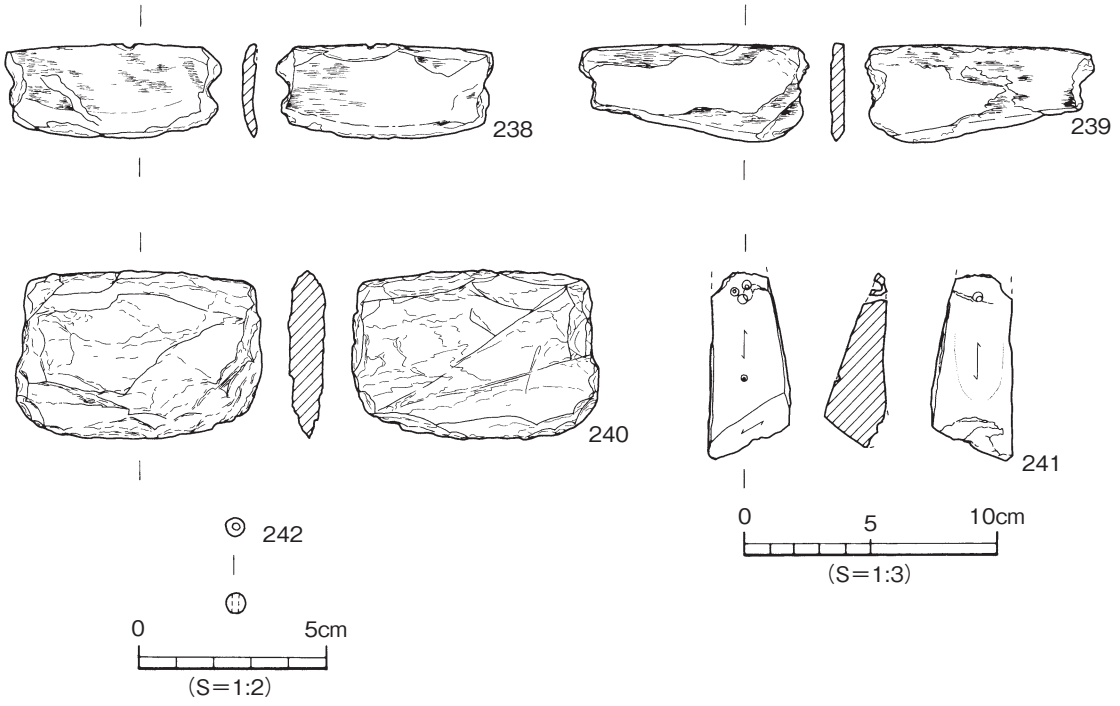
SD102 出土遺物（第 73 図～第 78 図）

甕形土器（243 ～ 279）

243 は肩の張る胴部から外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。244 は外反する口縁部。245 の口縁端部は面をもつ。246 は外上方に開く口縁部。口縁端部は先細り気味に丸い。247、248 は外反する口縁部である。249 は直立する頸部から外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。250 は緩やかに外反する口縁部。251 ～ 254 は外上方に開く口縁部である。胴部外面はタタキが施される。255、256 は緩やかに外反する口縁部である。257 は僅かに外反して短くのびる口縁部。258 の口縁端部は短く上方にのびる。口縁端部直下に 1 条の凹線が巡る。259 は大きく外反する口縁部。260 ～ 279 は胴部～底部片である。260 はくびれの上げ底である。261、263、265 は平底。262、264 はやや上げ底である。266 ～ 268 は小さく突出する底部である。269 ～ 271 は小さな平底である。272 は小さく突出する底部。外面に「×」印状の線刻が施される。273 は小さな平底。274 は突出する小さな平底。275 はやや突出する底部である。276 は丸みをもった平底である。277 は尖り底。278、279 はやや丸みをもった小さな平底である。



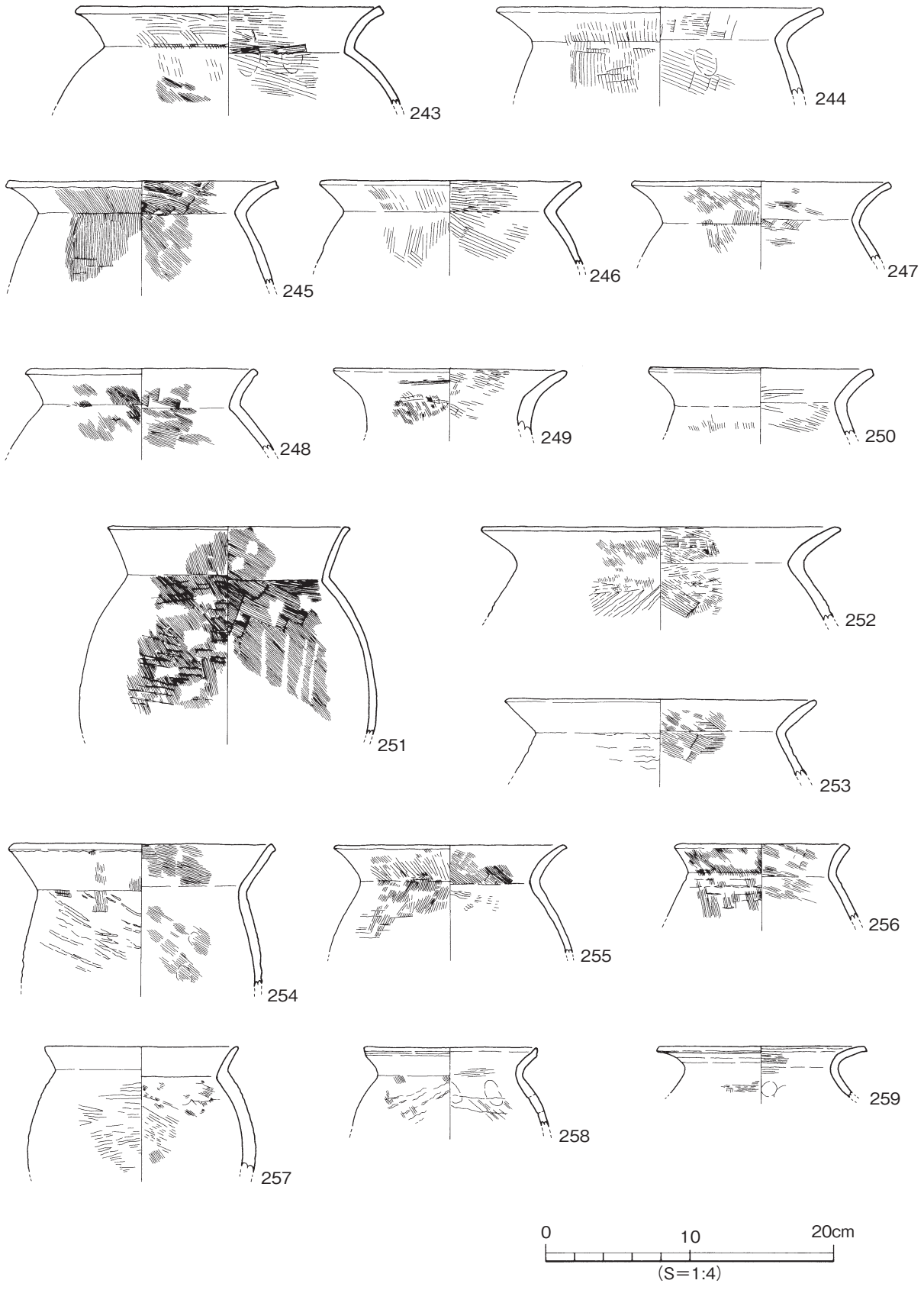
第71図　SD101出土遺物実測図(6)



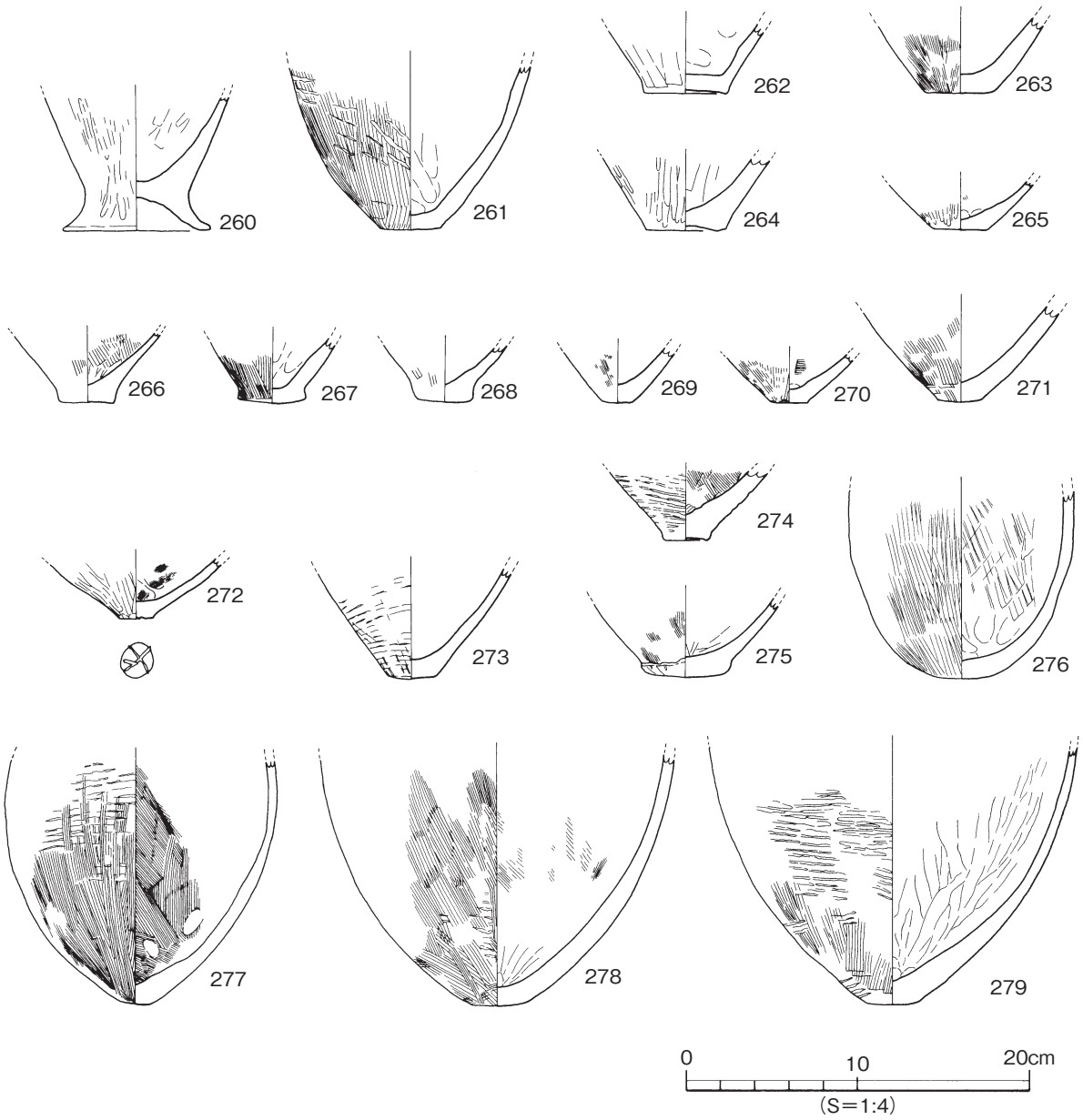
第 72 図　SD101 出土遺物実測図(7)

壺形土器（280 ～ 314）

280 ～ 306 は複合口縁壺。280 は口縁拡張部片。拡張部は内傾する。口縁端部は外に肥厚し面をもつ。拡張部に沈線文と斜格子文を施す。281 は口縁端部が上方にのびる。拡張部に波状文を施す。口縁接合部は断面「コ」字状を呈する。外面に刻目が施される。282 は拡張部に波状文が施され、頸部に刻目突帯を施す。283 の口縁拡張部は上方に立ち上がる。口縁接合部は断面「コ」字状を呈する。頸部に刻目突帯を施す。284 の拡張部は無文。頸部に刺突文の突帯を施す。285 は拡張部が欠失。頸部に刻目突帯を施す。286 は口縁接合部の外面に半裁竹管文を施す。287 の口縁部は内傾して立ち上がる。口縁接合部は断面「コ」字状を呈する。288 は頸部に刻目突帯が施される。289 は内傾して上方にのびる口縁部。拡張部には波状文が施される。口縁接合部は断面「コ」字状を呈する。290、291 は内傾して立ち上がる口縁部。292 は拡張部片。内傾して立ち上がる。293 は内傾する拡張部。口縁拡張部には 2 段の波状文が施される。294 は内傾する口縁部。拡張部には波状文が施される。295 の拡張部は無文である。296 の拡張部は内傾し、波状文と縦位の沈線が施される。297 の拡張部は大きく内に傾斜する。拡張部には波状文が施される。298 拡張部は大きく内に傾斜し短くのびる。口縁端部は先細り丸みを帯びる。拡張部は無文。299 の拡張部はやや内傾して上方に短くのびる。300 の拡張部は内湾して上方に立ち上がる。301、302 は短く内傾する口縁拡張部。303 の口縁拡張部は短く上方に立ち上がる。304 は短く内傾する口縁部である。305 はやや内傾して立ち上がる拡張部。頸部には断面三角状の突帯が施される。306 は口縁拡張部が欠失する。胴部は球形を呈し、頸部はやや外傾する。307 はほぼ完形品。口径 20.6 ㎝、器高 32.7 ㎝を測る。外反して開く口縁部。口縁端部は垂下する。口縁端面には波状文を施す。胴部は球形を呈し、底部は平底である。308 は袋状の口縁部。309 は長頸壺である。上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は細くなり丸みをもつ。310 ～ 314 は底部片である。310、311 は器壁が厚い。312、314 は平底の底部。313 は丸みをもった平底の底部。



第73図　SD102出土遺物実測図(1)



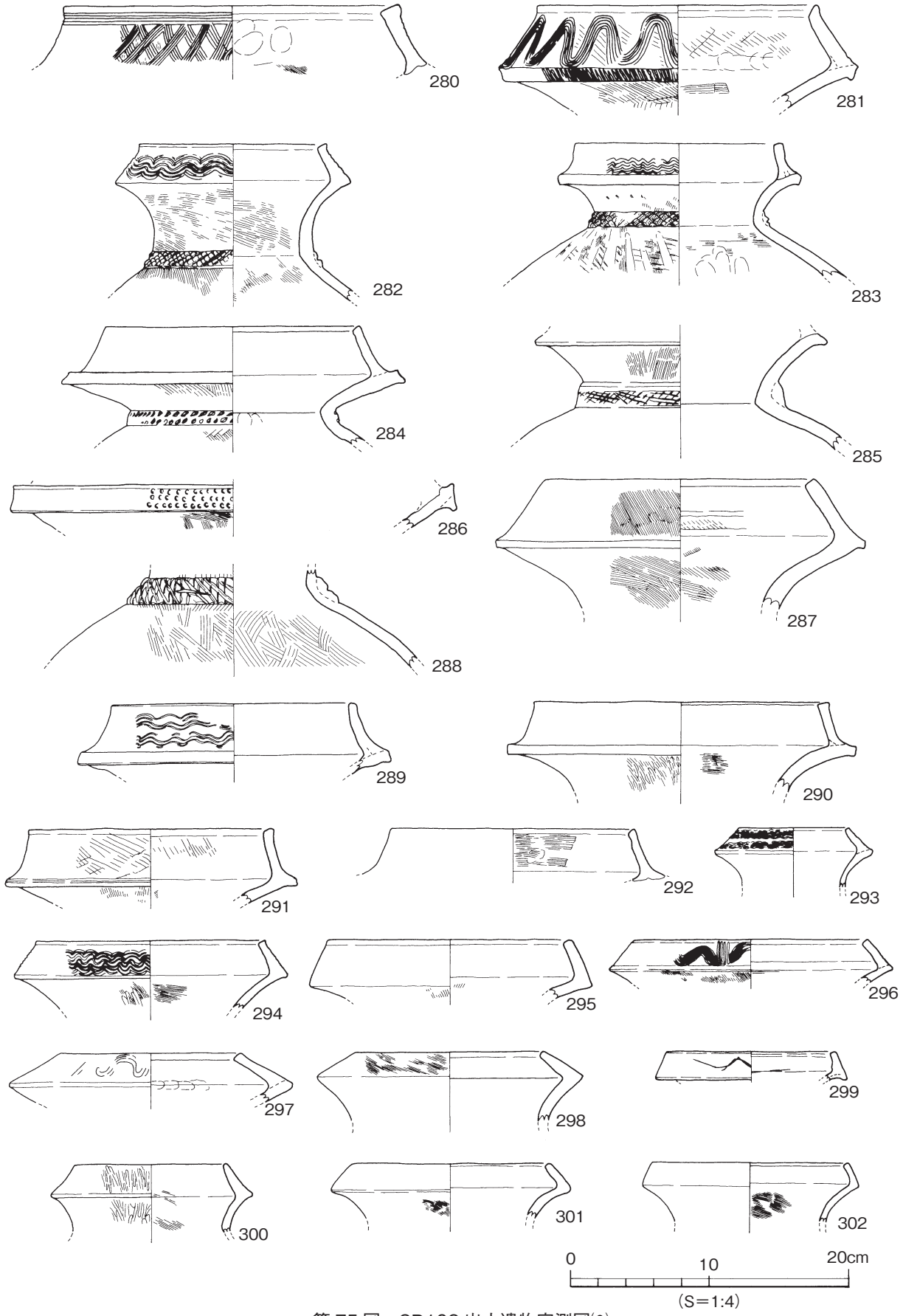
第 74 図　SD102 出土遺物実測図(2)

鉢形土器（315 ～ 320）

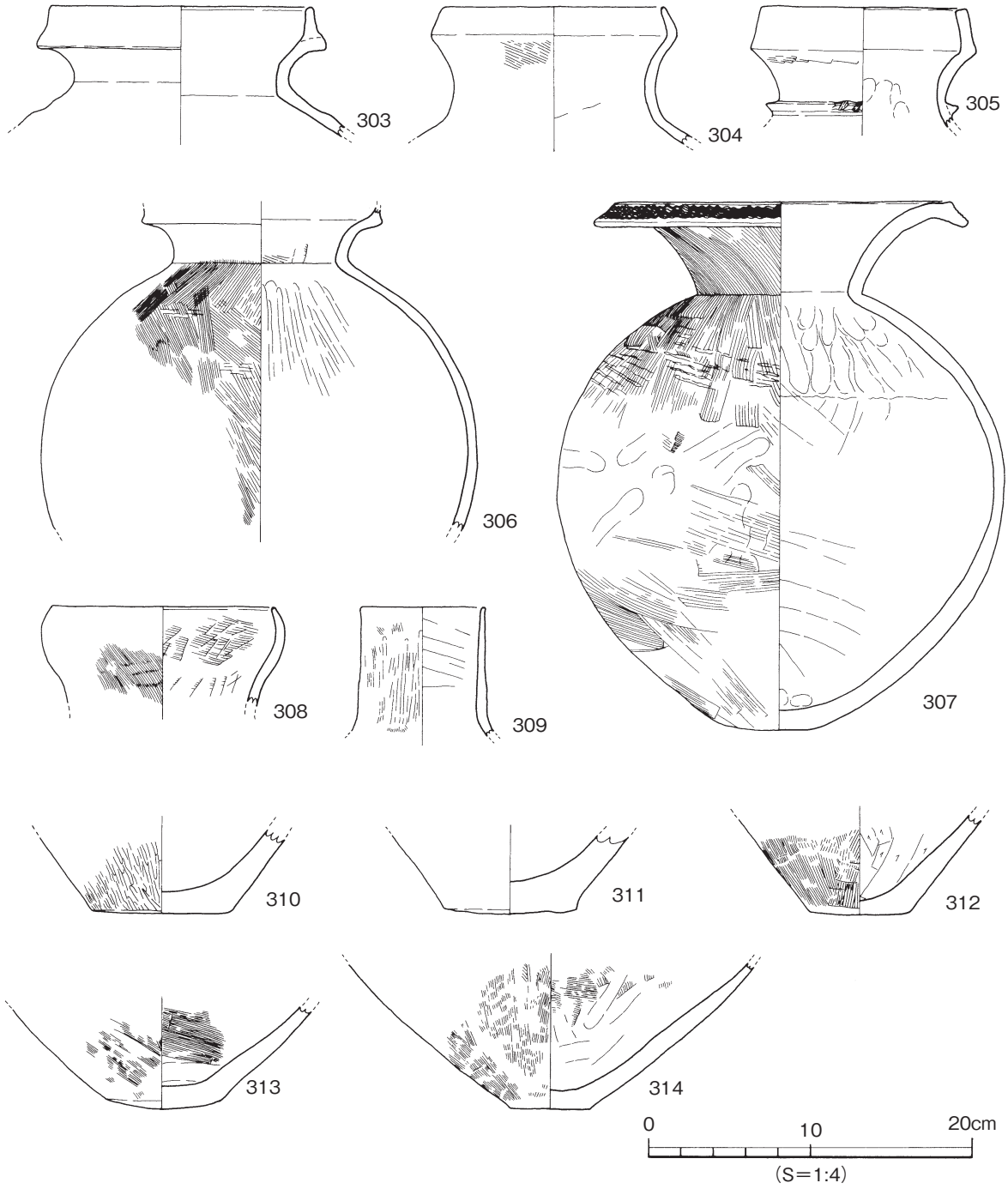
315 は大型品。口縁部は外傾して開く。口縁端部は面をもつ。316 は口縁部が外上方に開き口縁端部は短く上下方に肥厚する。317 は扁球形の胴部片。内面はハケ目調整が施される。318 はボタン状に突出した底部。底部外面に「×」状の線刻が施される。319 は脚付の鉢。脚部は欠失する。内湾して上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。320 の口縁端部はナデにより外に肥厚する面をもつ。

高坏形土器（321 ～ 324）

321 は坏部片。外反する口縁部。口縁端部は丸い。坏底部は内外面ともヘラミガキが施される。322 は口縁端部と脚裾が欠失する。口縁部は外反し、脚は大きく開いて裾部へとつづく。脚部には 3



第75図　SD102出土遺物実測図(3)



第 76 図　SD102 出土遺物実測図(4)

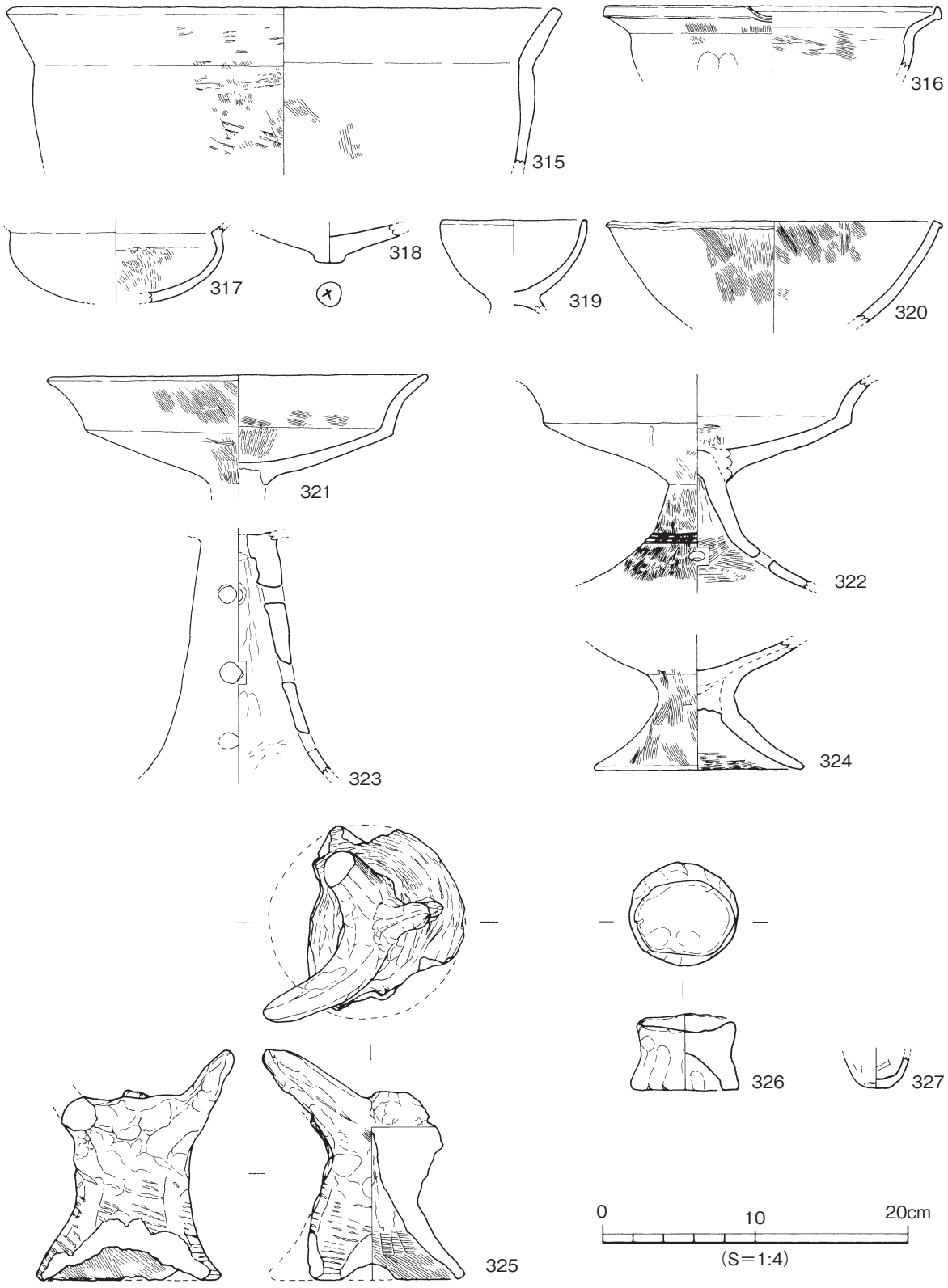
条の凹線と円孔が穿たれている。323 は脚柱片。円孔を 4 方向に 3 段穿つ。324 は低脚である。脚は外に大きく開いて裾部へとつづく。

支脚形土器（325・326）

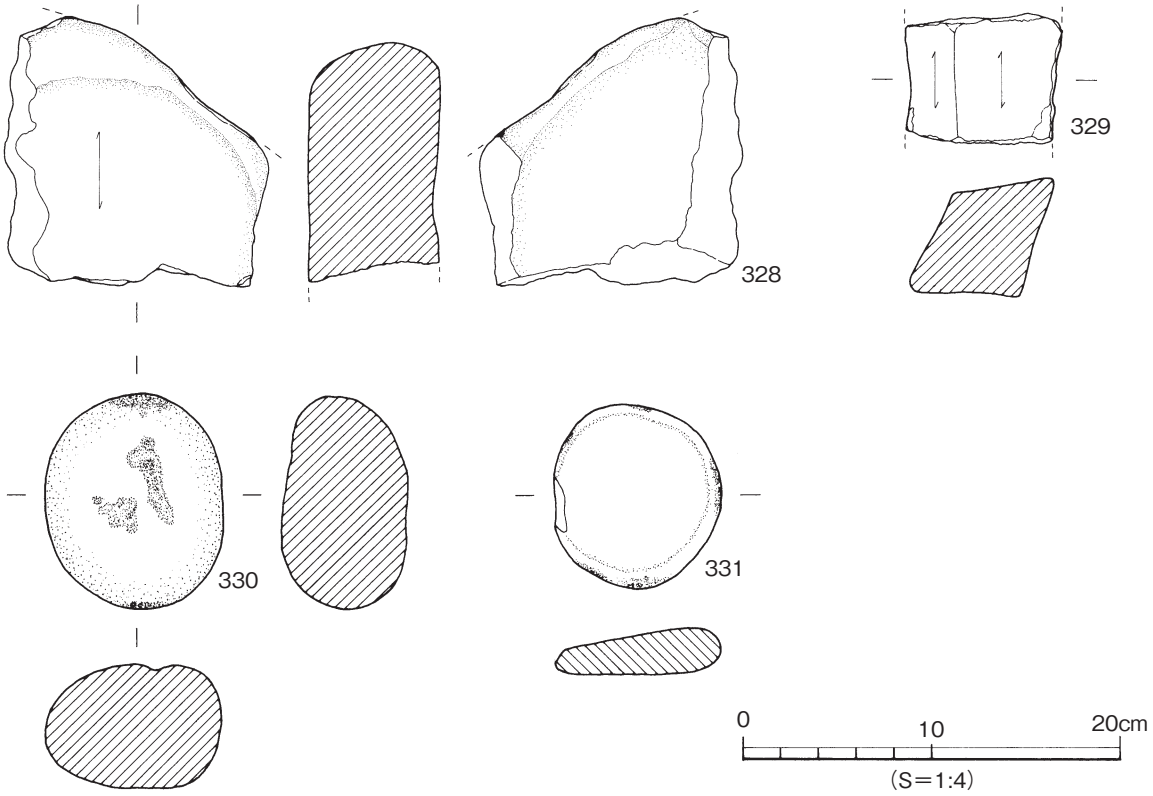
325 は角状の突起をもつ。背面には、鰭状の突起をもつ。326 は中実。受部は凹んで傾斜する。

ミニチュア土製品（327）

327 は底部片。残高 2.1 ㎝を測る。



第77図　SD102出土遺物実測図(5)



第 78 図　SD102 出土遺物実測図(6)

石製品（328 ～ 331）

328、329 は砥石の破損品。329 の色調は黄白色を呈する。330、331 は敲石。使用痕が認められる。

時期　SD101、102 とも出土遺物より弥生時代後期末には埋没したものと考えられる。

SD103（第 79 図）

SD103 は、調査区の北壁中央部から南東部にかけて検出した溝である。SD101、102 を切る。検出規模は長さ 17.65m、幅 0.45m ～ 1.05m、深さ 0.03m ～ 0.30m を測る。埋土は、黒灰色土、黒色粘質土である。溝の埋土には砂層は検出しなかった。遺物は、弥生土器が出土している。

出土遺物（第 80 図、332 ～ 336）

332 ～ 336 は甕形土器である。332 は外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。口縁部の内外面はハケ目、ナデ調整が施される。333 は小さな平底の底部である。334 は小さなくびれの上げ底の底部である。底部外面には指頭痕を顕著に残している。335 は小さな平底である。336 は尖り底の底部である。

時期　出土遺物と遺構の切り合い関係により、弥生時代後期末以降に埋没したものと考える。

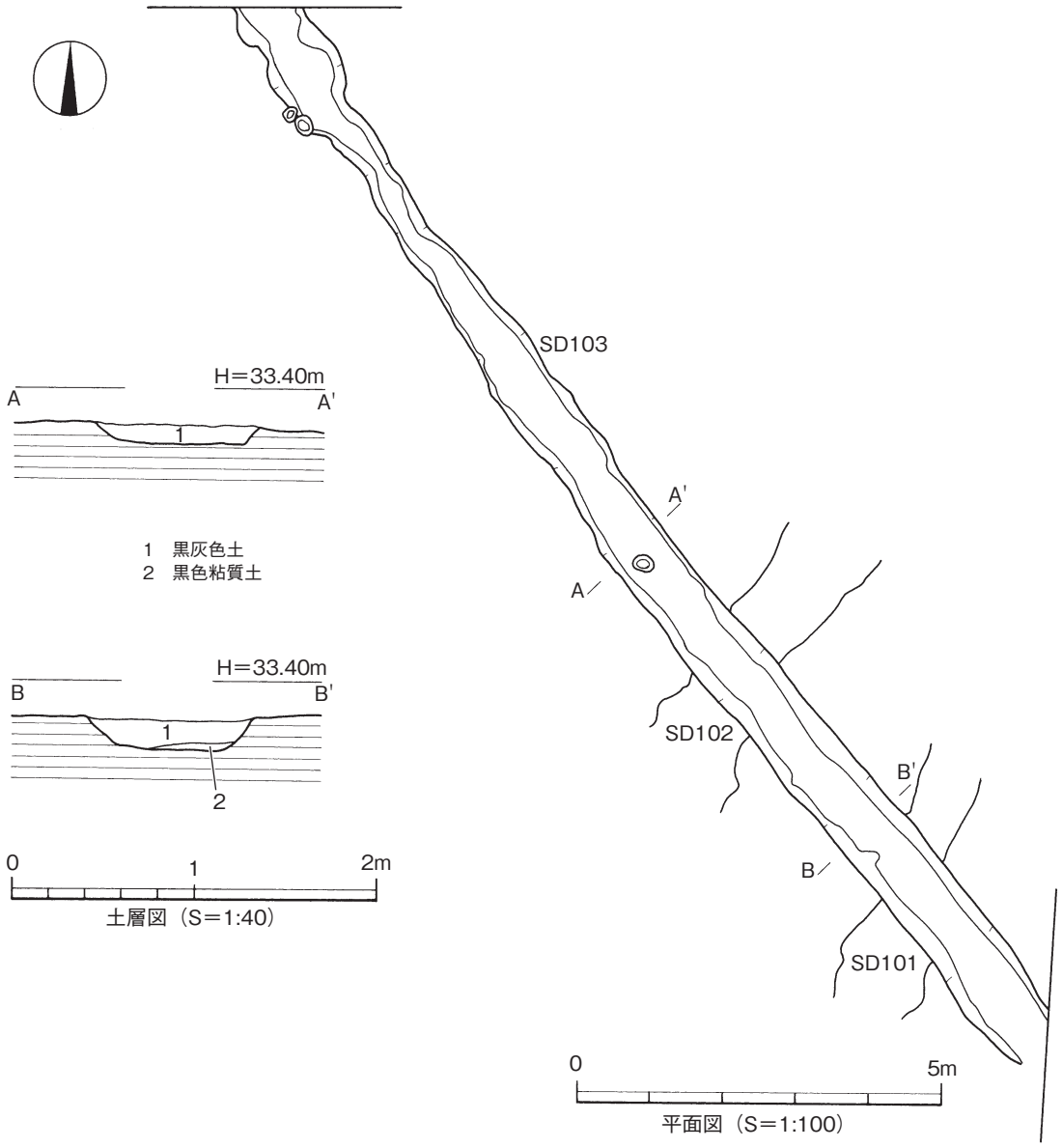
土坑（SK）

SK102（第 81 図）

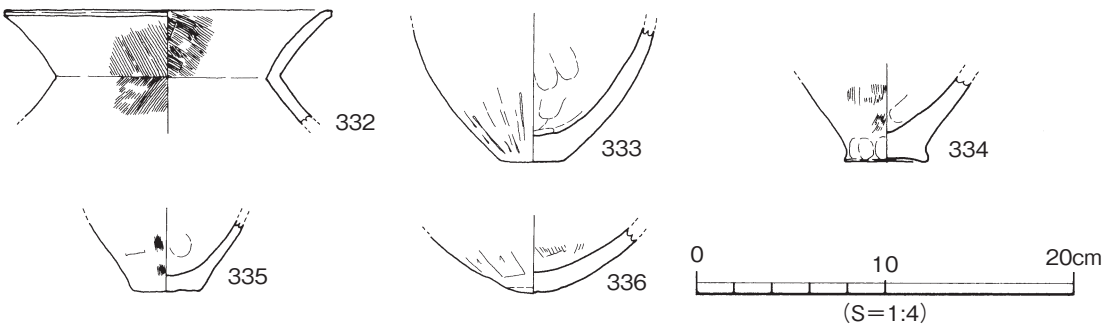
調査区の南東部で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸 0.80m、短軸 0.42m、深さ 0.28m を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第 82 図、337 ～ 345）

337、339、340 は甕形土器。337 は口縁部。339 はくびれの小さな底部。340 は丸みをもった平底の底部。



第79図　SD103測量図



第80図　SD103出土遺物実測図

338、341 は壺形土器。338 は複合口縁壺。341 は突出した平底の底部である。342 ～ 345 は鉢形土器。342 は外反する口縁部。343 は短く屈曲する口縁部。344 はボタン状に突出した底部。345 は扁球形の胴部に小さな平底である。

時期　出土した鉢の形態より弥生時代後期末。

柱穴（SP）

SP101（第 83 図）

調査区の南東部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径 0.25m、深さ 0.23m を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第 84 図、346）

346 は甕の底部片である。底部は平底である。

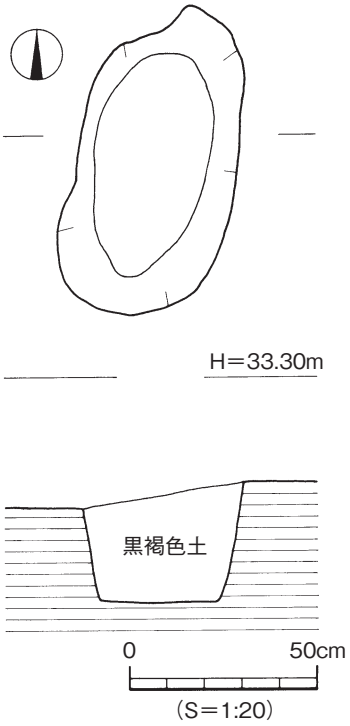
時期　出土遺物より弥生時代後期後半以降。

SP105（第 83 図）

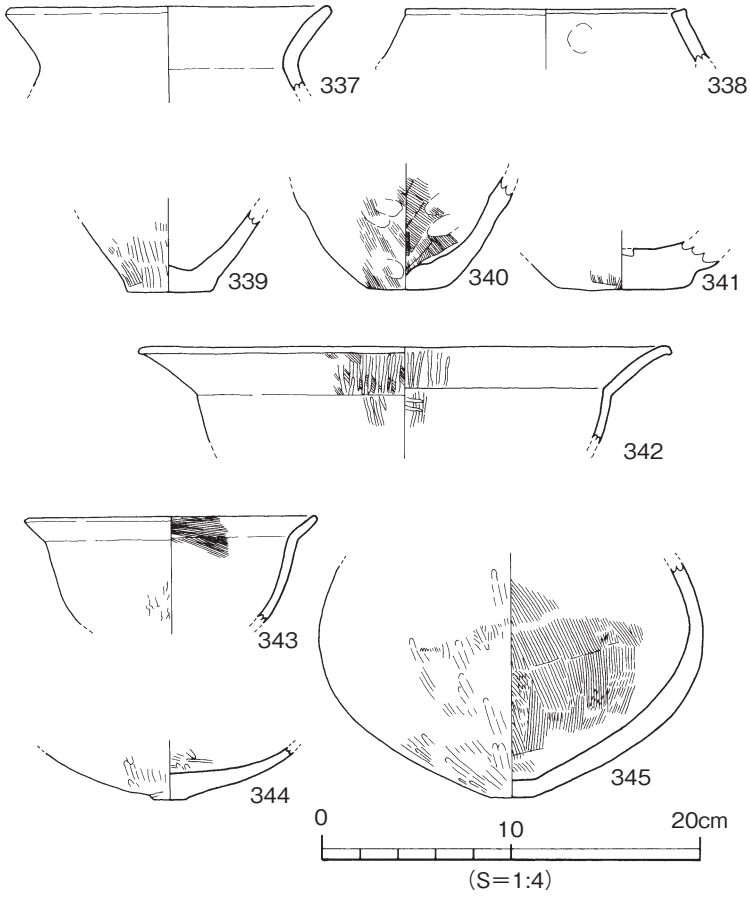
調査区の北東部で検出した。平面形は楕円形を呈する。検出規模は長軸 0.33m、短軸 0.19m、深さ 0.34m を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第 84 図、347・348）

347 は複合口縁壺。348 は甕の底部片。



第 81 図　SK102 測量図



第 82 図　SK102 出土遺物実測図

時期　出土遺物より弥生時代後期後半以降。

SP111（第83図）

調査区の東部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.23m、深さ0.34mを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第84図、349）

349は甕の口縁部。口縁端部は外にやや肥厚する。

時期　出土遺物より弥生時代後期後半以降。

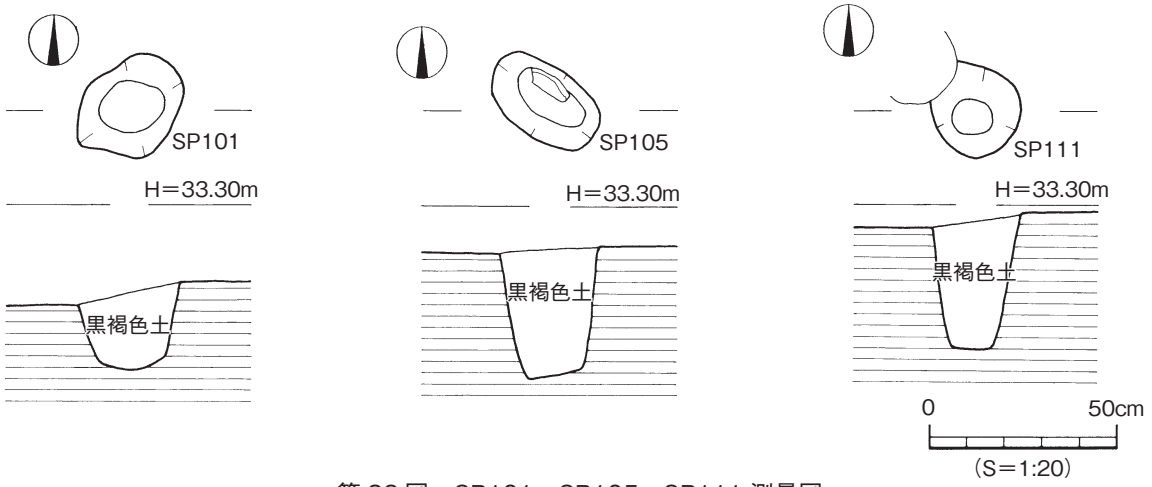
SP115（第85図）

調査区の南東部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.21m、深さ0.41mを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

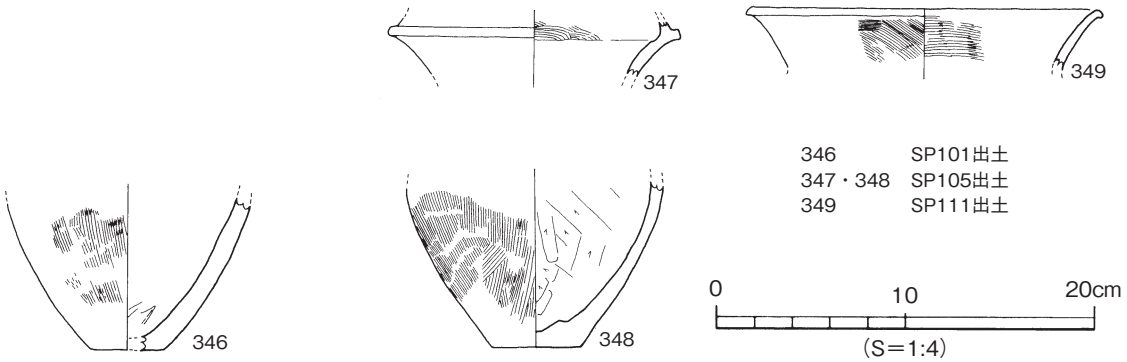
出土遺物（第86図、350）

350は甕の底部。丸みをもった平底の底部。

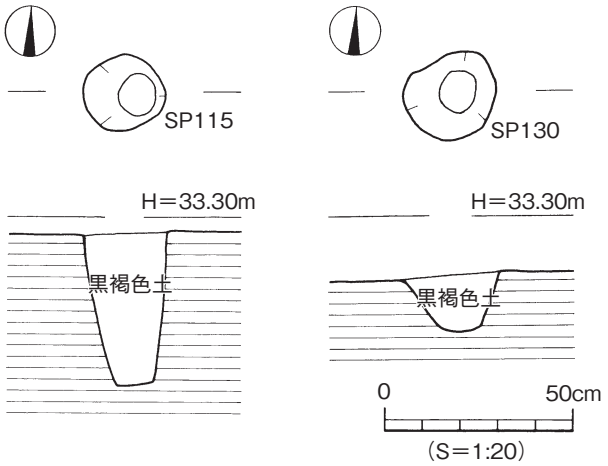
時期　出土遺物より弥生時代後期末以降。



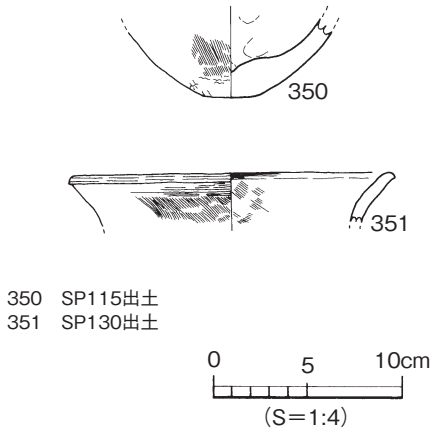
第83図　SP101・SP105・SP111 測量図



第84図　SP101・SP105・SP111 出土遺物実測図



第 85 図　SP115・SP130 測量図



第 86 図　SP115・SP130 出土遺物実測図

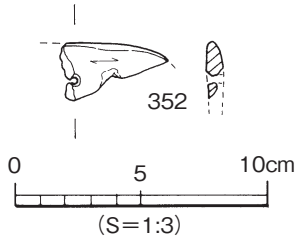
SP130（第 85 図）

調査区の北東部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径 0.24m、深さ 0.15m を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第 86 図、351）

351 は甕形土器。口縁部は外反する。

時期　出土遺物より弥生時代後期後半以降。



第 87 図　表採遺物実測図

その他の遺構・遺物

1 区では柱穴 33 基を検出している。柱穴の埋土色は大きく分けて黒褐色土と灰色土の二つのグループに大別できる。これら柱穴は、遺物が出土しないものが多く、出土しても土器の小片などで時期を明確に把握できる柱穴は少なかった。このうち黒褐色を埋土にもつ柱穴より弥生土器が出土していることから、黒褐色土を埋土にもつ柱穴は弥生時代以降考えられる。灰色土を埋土にもつ遺構は、調査区内の土層色と対比すれば中世以降と考えられる。

4. 小結

1 区の調査では、弥生時代後期後半～末の溝や土坑を検出した。溝 SD101 と SD102 は調査区の北部と南部で合流する事が判明した。溝底には、砂層の堆積がみられた。この事は水が流れていた事を示すもので、溝は排水・貯水などの機能を備えていたものと考えられる。おそらく農作物の生産にも関与していたものではなかろうか。この溝が何故に合流と分岐をする形態となるのか機能と性格の解明が今後の課題として残った。溝中の埋土からは弥生時代後期後半～末の遺物が多量に出土した。出土遺物は完形品は少なく、小片が多いことなどから廃棄されたものと考えられる。

SD103 からは弥生土器が出土しているが SD101、SD102 を切り、埋土色に違いがみられた。また砂層もみられず、水が流れていた様子も伺われなかった。溝の方位は N35° E を示す。周辺の調査地でもこの方位を示す溝やこの溝に対して直行する溝が散見される事から、この溝の時期・規模・性格等についても再考していきたい。

遺物観察表　※凡例は P.49 参照

表27　SD101出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
151	甕	口径(19.7) 残高　5.4	外反する口縁部。端部は面をもち下方に肥厚する。	[口端]ナデ [口]ハケ(8本/cm)→ヨコナデ [胴]ハケ(8本/cm)	ハケ(7本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
152	甕	口径(14.2) 残高　5.6	やや外反する口縁部。	[口端]ナデ [口]ハケ(5本/cm) [胴]ハケ(10本/cm)	[口]ハケ(7本/cm)→ナデ [胴]ハケ(9本/cm)	橙色 橙色	石・長(1～4) ◎		
153	甕	口径(14.0) 残高　5.7	外上方に長くのびる口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口][肩](ハケ(9本/cm)	[口]ハケ(9本/cm) [肩]ナデ	にぶい黄橙・褐灰色 にぶい黄橙・ にぶい黄褐色	石・長(1～2) ◎		
154	甕	口径(16.9) 残高　6.7	やや外反する口縁部。口縁端部は下方に肥厚して丸い。	[口端]ヨコナデ [口][胴]ハケ(4本/cm)→ナデ	[口端]ヨコナデ [口][頸]ハケ(4本/cm)→ナデ [胴]板状工具によるナデ	橙色 橙・褐灰色	石・長(1～3) 金 ◎		
155	甕	口径(16.3) 残高　5.9	やや外反する口縁部。端部はナデにより面をもち下方に肥厚する。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(7本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm)	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
156	甕	口径(17.1) 残高　7.4	外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(9本/cm)	[口][頸]ハケ(9本/cm)→ナデ [胴]ハケ(9本/cm)→ヘラナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
157	甕	口径(19.0) 残高　5.3	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ	[口端]ナデ [口]ヨコナデ [胴]ハケ(9本/cm)	[口]ハケ(9本/cm)→ヨコナデ [胴]ハケ(10本/cm)	灰褐・橙色 橙色	石・長(1～3) ○		
158	甕	口径(19.3) 残高　4.5	外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(7本/cm)→ナデ	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(7本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
159	甕	口径(15.0) 残高　5.2	ゆるやかに外上方へのびる口縁部。端部は面をもつ。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(6～7本/cm)→ナデ	[口端]ヨコナデ ハケ(5本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～4) ◎		
160	甕	口径(17.8) 残高　3.6	外反する口縁部。端部は「コ」の字状を呈する。	[口端]ヨコナデ [口][肩]ハケ(7～8本/cm)→ヨコナデ [頸]ヨコナデ	[口]ハケ(7本/cm)→ヨコナデ [胴]ハケ(6本/cm)	にぶい褐色 橙色	石・長(1～2) ◎		
161	甕	口径(14.4) 残高　6.6	口縁端部近くで外反する。口縁端部は丸い。	[口端]ヨコナデ [口][胴]ハケ(4本/cm)→ヨコナデ	[口]ハケ(3本/cm)→ヨコナデ [胴]ハケ(7本/cm)	橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
162	甕	口径(13.4) 残高　7.0	わずかに外反する口縁部。口縁端部は丸い。	マメツ [胴]ハケ(4本/cm)→ナデ	マメツ [胴]ハケ(4本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～5) ◎		
163	甕	口径(17.6) 残高　5.9	外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(5本/cm)→ナデ	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(5本/cm)→ナデ	淡黄色 淡黄色	長(1～3) ◎		
164	甕	口径(18.4) 残高　4.0	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部はわずかに面をもつ。	[口端]ヨコナデ ハケ(6本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm)→ヨコナデ	橙色 橙・灰白色	石・長(1～3) ◎		
165	甕	口径(18.4) 残高　3.7	外反する口縁部。端部は丸みをおびた面をもつ。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(6本/cm)	[口]ハケ(6本/cm) [胴]ハケ(11本/cm)	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
166	甕	口径(18.7) 残高 17.8	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口]ハケ(9本/cm)→ナデ [胴]タタキ→ハケ(9本/cm)	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(8～9本/cm)→ナデ	灰褐・橙色 橙・にぶい 黄橙色	石・長(1～5) ◎		
167	甕	口径(15.0) 残高　5.0	外反する口縁部。口縁端部は面をもち、わずかにナデ凹む。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(6本/cm) [胴]ハケ(8～9本/cm)→ヘラナデ	[口]ハケ(11本/cm) [胴]ハケ(10本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
168	甕	口径(14.0) 残高　4.0	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ヨコナデ [口]マメツ [胴]ハケ(10本/cm)	[口]マメツ [胴]ハケ(10本/cm)	橙色 黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
169	甕	口径(18.6) 残高　6.0	外反する口縁部。端部は丸い。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(6本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
170	甕	口径(15.8) 残高　2.6	外反する口縁部。端部はわずかに肥厚して丸い。	[口端]ナデ [口]ハケ(6本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	褐色 橙色	石・長(1～3) ◎		
171	甕	口径(17.0) 残高 11.3	外反する口縁部。端部はナデにより面をもち下方に肥厚する。	[口端]ヨコナデ [口][頸]ハケ(7本/cm)→ヨコナデ[胴]タタキ→ハケ(7本/cm)→ナデ	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(7本/cm) [胴]ハケ(7本/cm)→ヘラナデ	橙色 にぶい褐色	石・長(1～4) ◎		
172	甕	口径(15.8) 残高 10.5	外反する口縁部。	[口端]ナデ [口]ハケ(6本/cm) [胴]ハケ(6本/cm)→タタキ	[口]ハケ(6～7本/cm) [胴]ハケ(6～7本/cm)→ナデ	橙・にぶい黄橙・黒色 橙色	石・長(1) ◎		
173	甕	口径(17.1) 残高　7.6	やや外反する口縁部。端部は丸い。	[口]ナデ(粘土しぼり痕あり) [胴]タタキ	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(7本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
174	甕	口径(19.0) 残高　8.6	外上方にのびる口縁部。口縁部の器壁が厚い。口縁端部は丸い。	[口]マメツ [胴]タタキ	[口]マメツ [胴]ハケ(7本/cm)→ナデ	橙色 橙・にぶい黄 橙色	石・長(1～3) ◎		
175	甕	口径(15.6) 残高　4.3	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部はナデにより下方に肥厚する。	[口端]ヨコナデ [口]指ナデ [胴]タタキ	[口]ハケ(5本/cm) [胴]ハケ(8本/cm)	黄灰色 淡黄・褐灰色	石・長(1～3) 金 ◎		
176	甕	口径(15.0) 残高　5.7	くびれた頸部より内湾気味にたちあがる口縁部。	[口端]ナデ [口]ヨコナデ [胴]ヘラケズリ	[口]工具によるナデ [胴]ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ○		

表28　SD101出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
177	甕	底径 3.9 残高 16.3	わずかに上げ底の底部。	ハケ(8本/cm)→ナデ	ナデ(指頭痕あり)	赤橙・橙色 明赤褐色	石・長(1～4) ◎	煤付着	
178	甕	底径 (3.5) 残高 7.8	平底の底部。	[胴]ハケ(5～6本/cm)→ナデ [底]ナデ	[胴上]ハケ(7本/cm)→ナデ [胴下][底]ナデ	浅黄橙・ 褐灰色 明黄褐色	石・長(1～4) ◎		
179	甕	底径 4.0 残高 5.9	わずかな上げ底の底部。	[胴]ハケ→ナデ(指頭痕・板状工具痕あり) [底]ナデ	ナデ	褐灰・にぶい 橙色 橙・褐灰色	石・長(1～5) ◎		
180	甕	底径 4.5 残高 4.0	わずかな上げ底の底部。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	灰白・黒褐色 灰白色	微砂 ◎		
181	甕	底径 (5.2) 残高 4.85	わずかに丸みをおびた平底の底部。くびれをもってたちあがる。	[胴上]ハケ(8本/cm)→ナデ [胴下][底]ナデ	ナデ	灰褐色 褐灰色	石・長(～4) ◎		
182	甕	底径 2.3 ～2.55 残高 4.6	小さな丸みをおびた底部。	[胴上]ハケ(8～9本/cm)→ナデ [胴下][底]ナデ	ナデ	にぶい褐・ 橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
183	甕	底径 1.5 残高 3.5	小さな平底の底部。	[胴]ハケ(8本/cm)→ナデ [底]ナデ	ハケ(10本/cm)→ナデ	にぶい黄橙・ 褐灰色 褐灰色	石・長(1) ◎		
184	甕	底径 2.2 残高 10.6	小さな平底の底部。	[胴上]ハケ(7本/cm)→ナデ [胴下][底]ナデ	[胴上]ハケ(6本/cm) [胴中][底](工具による)ナデ	暗灰黄・灰黄 褐・黒色 黄褐・黒色	石・長(1～3) ◎		
185	甕	底径 (3.4) 残高 10.5	小さな平底の底部より内湾気味にたちあがる。	タタキ→ハケ(6～7本/cm)→ナデ [底]ナデ	ハケ(6～7本/cm)→ナデ	にぶい褐・ 褐灰色 黄橙・褐灰色	石・長(1～3) ◎		
186	甕	底径 (2.6) 残高 8.0	小さな平底の底部。	板状工具によるナデ(小口痕あり)	指ナデ(押圧痕あり)	にぶい褐色 橙色	石・長(1～5) ◎		
187	甕	底径 3.6 残高 7.3	平底の底部。	[胴]タタキ→ハケ(11本/cm) [底]ハケ(11本/cm)→ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～3) ◎		
188	甕	底径 1.8 ～2.4 残高 7.65	小さな平底の底部。	[胴上]タタキ→ハケ(8～9本/cm) [胴下][底]タタキ	ハケ(6本/cm)→指ナデ	淡黄・黒色 淡黄色	石・長(1) ◎		
189	甕	底径 3.2 残高 5.6	小さな平底の底部。	タタキ→ハケ(8本/cm)→ナデ	ナデ(工具による押圧痕あり)	黒褐・灰褐色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
190	甕	底径 3.5 残高 4.5	小さな平底の底部。	[胴中]タタキ→ハケ(8本/cm) [胴下]タタキ [底]タタキ→ナデ	ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙・ 灰黄褐色 浅黄橙色	石・長(1～4) ◎		
191	壺	口径(17.4) 残高 7.35	拡張部は内湾してたちあがる。拡張部に波状文を施す。	[拡端]ヨコナデ [口下]マメツ(一部ミガキ)	[口端]ヨコナデ ハケ(5本/cm)→ナデ	にぶい橙・ 灰白色 橙・浅黄橙色	石・長(1～3) ◎		
192	壺	口径(13.7) 残高 9.2	拡張部は内傾してたちあがる。口縁端部は丸味をもつ。	[拡]ヨコナデ [口下]ハケ(9本/cm)→ナデ [肩]タタキ→ナデ	[口]ヨコナデ[肩]ナデ [頸]ハケ(6～7本/cm)→ナデ	橙色 橙・浅黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎		29
193	壺	残高 9.2	口縁拡張部欠失。	[口]ヨコナデ [肩]ハケ(9～10本/cm)→ナデ	ハクリ (一部ハケ(8本/cm)→ナデ)	浅黄・灰黄色 灰黄色	石・長(1～3) 褐色粒 ◎		
194	壺	口径(15.8) 残高 5.8	口縁部は内湾気味にたちあがる。口縁端部は丸い。	[拡]ハケ(8～9本/cm)→ナデ [口下]ハケ(8～9本/cm)	[口端][口下]ナデ [拡]ハケ(9本/cm)→ヨコナデ	浅黄橙色 橙・灰白・黒色	石・長(1～2) 金 ◎		
195	壺	残高 7.5	外傾する頸部に外反する口縁部。	ハケ(6～12本/cm)→ナデ	ナデ	橙色 橙・明褐灰色	石・長(1～6) ◎		
196	壺	口径(18.5) 残高 5.0	外反する口縁は端部近くで水平気味に開く。端部は面をもち、わずかに下方に肥厚する。	[口端]ヨコナデ ハケ(7～8本/cm)→ナデ	ハケ(8本/cm)→ナデ	浅黄橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
197	壺	口径(15.5) 残高 4.9	外反する口縁部。口縁端部は面をもち、下方に肥厚する。	マメツ [口]ヨコナデ	マメツ [口]ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
198	壺	口径(19.0) 残高 26.9	口縁部は上方向に短くのびる。口縁端部は丸い。	[拡]ナデ[口下]ハケ(6本/cm)→ナデ [胴]ハケ(4～6本/cm)→ナデ	[拡]ナデ[口下]ハケ(4本/cm)→ナデ [胴]ハケ(4～5本/cm)→ナデ	にぶい橙・灰白色 にぶい橙・黄橙色	石・長(1～5) ◎		
199	壺	口径 (8.6) 底径 1.6 器高 12.6	張りの弱い肩部からゆるやかに外反してたちあがる口縁部。	ナデ [胴]タタキ→ナデ	ナデ	褐灰・にぶい橙・ 黒色 褐灰・にぶい橙色	石・長(1～5) 金・黒 ◎	黒斑	29
200	壺	底径 1.6 残高 11.8	小さな平底の底部。体は球形を呈す。	マメツ [頸]ナデ	マメツ [胴]ハケ(5～13本/cm)(指頭痕あり)	黄橙・橙色 にぶい 黄橙色・橙色	石・長(1～5) ○		
201	壺	底径 (8.6) 残高 7.1	丸みをおびた平底の底部。器壁が厚い。	タタキ→ハケ(7本/cm)→ミガキ	ハケ(7本/cm)→ミガキ	橙色 橙・淡黄色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
202	壺	底径 6.8 残高 8.2	平底の底部。	[胴]ハケ(10本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ	橙・にぶい橙・ 黒色 にぶい褐色	石・長(1～3)多 ◎		
203	壺	底径 5.2 残高 11.0	平底の底部。器壁が厚い。	マメツ 一部板状工具によるナデ(指頭痕あり)	[胴]ハケ(12本/cm)→ナデ [底]指ナデ(指頭痕あり)	橙・黒色 明黄褐・ 褐灰色	石・長(1～5) ◎		

表29　SD101出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
204	壺	底径 8.4 残高 7.2	丸みをおびた平底。底部より内湾気味にたちあがる胴部。	[胴]ハケ(6本/cm)→ミガキ [底]ナデ	[胴]ハケ(8本/cm) [底]ナデ(指頭痕あり)	橙色 褐灰色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
205	鉢	口径(18.6) 残高 5.7	外反する口縁部。端部は丸い。	[口][胴上]ナデ [胴]ヘラナデ	マメツ [口]ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～5) ◎		
206	鉢	口径(17.0) 残高 8.0	口縁部はゆるやかに外反する。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(7本/cm)→ナデ	[口]ハケ(8本/cm)→ナデ [胴]ナデ	浅黄橙色 灰白色	石・長(1～3) 金 ◎		
207	甕	口径(13.0) 残高 7.0	外上方にのびる口縁部。端部は丸みをおびた面をもつ。	[口端]ナデ ハケ(9～10本/cm)	ハケ(9～10本/cm)	橙・灰褐色 橙・にぶい橙色	石・長(1～4) ◎		
208	鉢	口径(25.3) 残高 3.2	口縁端部は「コ」の字状を呈する。	[口端面]ナデ [口端]ヨコナデ [口]ハケ(8本/cm)→ミガキ	ハケ(8本/cm)→ミガキ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
209	鉢	口径 12.1 器高 5.75～7.4	くびれの上げ底。	[体]タタキ [底]ナデ	指ナデ(指頭痕あり)	橙・浅黄橙色 黄橙色 (一部橙・黒色)	石・長(1) ◎		29
210	鉢	底径 2.8 残高 3.0	小さな底部。底端部が突出する。	[胴]ハケ(7本/cm) [底]ナデ(指頭痕あり)	ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1～2) ◎		
211	鉢	口径(25.0) 残高 7.6	直口口縁。口縁端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口]ヨコナデ [胴上]ハケ(10本/cm) [胴下]タタキ	[胴上]ハケ(6本/cm) [胴下]ナデ	浅黄色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
212	鉢	口径(19.6) 残高 5.4	直口口縁。	[口端]ナデ [胴]ハケ(10本/cm)	ハケ(10本/cm)→ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
213	鉢	口径(19.0) 残高 7.0	直口口縁。	[口端]ナデ [胴]ハケ(7本/cm)	ハケ(7～9本/cm)→ナデ	橙色 明褐色	石・長(1～2) 金 ◎	黒斑	
214	鉢	口径(17.2) 残高 6.5	直口口縁。	[口端]ナデ [胴]タタキ→ナデ	ハケ(12本/cm)→ナデ	浅黄橙色 灰黄褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
215	鉢	口径(12.0) 底径 1.0 器高 7.7	直口口縁。底部は丸底気味。	ハケ(7本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	浅黄橙・にぶい黄橙色 にぶい黄橙・橙色	石・長(1) ◎		
216	鉢	口径(12.1) 底径 2.3 器高 7.1	直口口縁。丸みをおびた平底の底部。	[口][底]ナデ [胴]タタキ	[体]ハケ(9本/cm) [底]ナデ(指頭痕あり)	橙・にぶい褐色 橙・灰色	石・長(1～2) ◎		
217	鉢	口径(12.3) 底径 7.4 器高 1.8	口縁部は端部で短く外反する。底部は丸底。	[体]タタキ→ナデ [底]ナデ	[口]ハケ(7本/cm) [胴]ナデ(指頭痕あり)	灰褐・黒色 黒色	石・長(1～4) 金 ◎		
218	鉢	口径 (9.0) 残高 3.9	内傾する頸部からゆるやかに外反する口縁部。	[口]ヨコナデ [頸]ハケ(8本/cm)→ナデ	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(5～8本/cm)→ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) 褐色粒 ◎		
219	鉢	口径(13.4) 残高 11.5	内湾する胴部より短く上方向にたちあがる口縁部。端部は面をもつ。	[口][胴上]ハケ(7本/cm)→ナデ [胴]タタキ→ハケ(9本/cm)	[口端]ナデ [頸][胴上]ハケ(7本/cm)→ナデ [胴]ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
220	高坏	残高 5.4	坏底部との境に稜をもち大きく外反する口縁部。	[坏上]ハケ(7本/cm)→ヨコナデ [坏底]ハケ(7･13本/cm)→ミガキ	ハケ(7･13本/cm)→ミガキ	にぶい橙色 橙色	石・長(1～4) ◎		
221	高坏	口径(26.8) 残高 6.6	浅く外傾してたちあがる坏底より外反する口縁部。	[口端]ナデ [坏]ハケ(7本/cm)→ナデ	マメツ ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長(1～4) ◎		
222	高坏	口径(23.7) 残高 4.45	外反する口縁部。口縁端部は丸みをおびた面をもつ。	[口端]ヨコナデ [坏]ハケ(7本/cm)	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～2) 石粒 ◎		
223	高坏	口径(22.0) 残高 3.9	坏底部との境界に明瞭な稜をもち口縁は外反しながら大きく開き端部を丸くおさめる。	[口端]ナデ [口]ハケ(7本/cm) [坏底]ハケ(6本/cm)	[口]ハケ(8本/cm) [坏底]ナデ	橙色 橙色	石・長(1～5) ◎		
224	高坏	残高 6.7	脚柱部4方向に円孔が穿たれる。	ハケ(12～13本/cm)→ナデ	[坏]ハケ(7本/cm)→ヘラミガキ [脚]ナデ	橙・にぶい褐色 橙色	石・長(1～4) 褐色粒 ◎		
225	高坏	残高 6.7	円柱状の脚柱部。脚柱部4方向に円孔を穿つ。	[坏]ヘラミガキ [脚]ハケ(13本/cm)→ヘラミガキ	[坏]ヘラミガキ [脚]ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
226	高坏	底径(13.6) 残高 12.0	脚柱の4方向に円孔が穿たれる。	ハケ(10本/cm)→ナデ(小口痕あり)	[坏底]ナデ [脚]ハケ(10本/cm)→ナデ(小口･指頭痕あり)	にぶい褐・橙・浅黄橙色 橙・にぶい黄橙色	石・長(1～5) ◎		
227	高坏	残高 8.0	坏底部中心に円孔が穿たれる。	ハケ(6本/cm)→ナデ	[坏]ハケ→ナデ [脚]ナデ(しぼり痕あり)	灰褐・橙色 灰褐色	石・長(1～5) ◎		
228	器台	残高 18.0	脚柱の5方向にそれぞれ5段の円孔が穿たれる。	[脚]ナデ [脚下]ハケ(5～12本/cm)→ミガキ	[脚]ナデ [受部]ハケ(9本/cm)→ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) 褐色粒 ◎		
229	支脚	底径(10.7) 残高 14.0	受部は小さく凹む。脚裾は外反して開く。	マメツ	[裾端]ナデ [脚]指ナデ(指頭痕あり)	橙・にぶい黄橙色 にぶい黄橙・灰黄褐色	石・長(1～5) ◎		
230	支脚	残高 12.6	受部は小さく凹む。器壁が厚い。	ナデ・ハクリ	指ナデ(しぼり痕あり)	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1～4) ◎		

表30　SD101出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
231	支脚	底径 (9.2) 残高 6.45	器高が低く円柱状の体部。2箇所外面から内面にかけて穿つ円孔をもつ。	指ナデ(指頭痕あり)・ハケ(7本/cm)	ナデ	橙・褐灰色 にぶい橙・褐灰色	石・長(1～3) ◎		
232	支脚	口径 7.9 底径 6.9 器高 5.3	円柱状の体部。胴底付近でくびれをもつ。	指ナデ(指頭痕あり)	指ナデ(指頭痕あり)	明黄褐・褐灰色 褐灰色	石・長(1～5) 金 ◎		29
233	支脚	底径 7.7 器高 5.95	上部を一部欠失した円柱状の支脚。上面に小さな角状の突起が1ヶ所みられる。底部は若干上げ底気味。	指ナデ(指頭痕あり)	—	橙・にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		29
234	支脚	底径 8.7～9.3 器高 4.6～8.5	器高が低く円柱状の体部上面に斜め外方向に伸びる角状の突起が1ヶ所みられる。	指ナデ(指頭痕あり)	指ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙・浅黄橙色	石(1～5)多 ◎	黒斑	29
235	支脚	底径(10.0) 器高 16.6	前面に2ヶ所、角状の突起がみられる。	[脚]タタキ→ナデ ナデ	[脚]ハケ(6本/cm)→ナデ [裾端]ナデ	にぶい黄橙・褐灰・にぶい橙色 にぶい黄橙・にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎		29
236	支脚	底径(13.0) 器高 15.1	角部が1方のみ完存の支脚。	タタキ→ナデ	ナデ・ハケ(10本/cm)	橙・灰褐・黒色 褐灰・黒色	石・長(1～5) ◎		
237	支脚	底径(11.5) 残高 13.4	背面に短い突起をもつ。	指ナデ(指頭痕あり)	指ナデ(指頭痕あり)	にぶい褐・褐灰色 にぶい橙・にぶい褐・明赤褐色	石・長(1～5)多 ◎		

表31　SD101出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
238	石包丁	完形	緑色片岩	8.5	3.7	0.55	29.74		29
239	石包丁	ほぼ完形	緑色片岩	9.1	3.3	0.56	34.40		29
240	石包丁	未完成	緑色片岩	9.7	6.6	1.50	155.03		29
241	砥石	ほぼ完形	堆積岩	7.3	3.1	2.30	63.54	孔1,未貫通孔3	29

表32　SD101出土遺物観察表　装身具

番号	品種	依存状態	材質・色	法量 長さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
242	ガラス小玉	完形	ガラス・濃青色	0.51	0.49	0.19	0.19		

表33　SD102出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
243	甕	口径(21.4) 残高 6.8	外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口][肩]ハケ(4~5本/cm)→ナデ [胴]ハケ(10本/cm)→ナデ	[口]ハケ(4～12本/cm)→ナデ [胴]ハケ(4～5本/cm)→ナデ	浅黄橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
244	甕	口径(22.6) 残高 6.0	外反する口縁部。端部は先細り気味に丸い。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(5本/cm)→ナデ	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(5本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	灰褐・にぶい橙色 浅黄橙・灰白色	石・長(1～3) 金 ◎		
245	甕	口径(18.9) 残高 7.1	外反する口縁部。端部はナデにより面をもつ。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(8本/cm)	[口]ハケ(8本/cm) [胴]ハケ(8本/cm)→ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
246	甕	口径(18.2) 残高 5.8	外上方に開く口縁部。口縁端部は先細り気味に丸い。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(6本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	にぶい褐色 橙色	石・長(1～3) ◎		
247	甕	口径(18.0) 残高 5.4	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(10本/cm)→ナデ	ハケ(10本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	石・長(1～3) ◎		
248	甕	口径(16.0) 残高 5.7	わずかに外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(10本/cm)→ナデ	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(10本/cm)→ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
249	甕	口径(16.2) 残高 4.5	外傾する頸部から外反する口縁部。	ハケ(11本/cm)→ナデ	ハケ(5～7本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		
250	甕	口径(15.6) 残高 4.6	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端面は凹む。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(7本/cm)→ヨコナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) 褐色粒 ◎		
251	甕	口径(16.8) 残高 14.3	外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口端]ナデ[口]ハケ(10本/cm)→ナデ [胴]タタキ→ハケ(10本/cm)→ナデ	ハケ(10本/cm)→ナデ	褐灰・橙色 にぶい橙色	石・長(1～6) ◎		
252	甕	口径(25.0) 残高 6.5	外反する口縁部。	[口]ハケ(7本/cm)→ナデ [胴]ハケ(7本/cm)→タタキ	ハケ(7本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
253	甕	口径(21.6) 残高 5.3	外反する口縁部。口縁端部は丸みをももった面をもつ。	[口端]ナデ [口]マメツ [胴]タタキ→ナデ	[口端]ナデ ハケ(7本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
254	甕	口径(18.4) 残高 9.9	外傾して外上方にのびる口縁部。端部は面をもつ。	[口端]ナデ[口]ハケ(8本/cm)→ナデ [胴]ハケ(8本/cm)→タタキ→ナデ	ハケ(8本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	浅黄橙・灰白色 灰白色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
255	甕	口径(16.1) 残高 7.5	外反する口縁部。	[口端]ヨコナデ[口]ハケ(5本/cm)→ナデ [胴]タタキ→ハケ(7本/cm)→ナデ	[口]ハケ(9本/cm)→ナデ [胴]ハケ(5本/cm)→ナデ	橙・にぶい橙色 橙・にぶい橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	

表34　SD102出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
256	甕	口径(12.1) 残高 5.3	ゆるやかに外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口]ハケ(7本/cm)→ナデ [胴]ハケ(7本/cm)→タタキ→ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ	明赤褐色 にぶい褐色	石・長(1～3) ◎		
257	甕	口径(13.3) 残高 8.7	わずかに外反して短くのびる口縁部。	[口]ナデ [胴]タタキ	[口]ナデ [胴]ハケ(6・12本/cm)	にぶい黄橙色 橙色	長(1) 褐色粒 ◎		
258	甕	口径(12.0) 残高 5.5	口縁端部は短く上方にたちあがる。口縁端部直下に1条の凹線。	[口]ナデ [胴]ハケ→タタキ→ナデ	[口]ナデ [頸][胴]ハケ→ナデ(指頭痕あり)	灰褐色 にぶい橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
259	甕	口径(14.5) 残高 3.5	大きく外反する口縁部。口縁端部はナデにより面をもつ。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(9本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm)→ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
260	甕	底径 8.5 残高 7.7	くびれのある上げ底。	[胴]ミガキ [底]工具によるナデ	工具によるナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
261	甕	底径 3.5 残高 9.5	平底の底部。内湾気味にたちあがる胴部。	[胴]タタキ→ハケ(4本/cm) [底]ナデ	指ナデ(指頭痕あり)	橙色 灰白色	石・長(1～2) 金 ◎	黒斑	
262	甕	底径 5.0 残高 4.1	やや上げ底の底部。	板状工具によるナデ	ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
263	甕	底径 4.0 残高 4.4	平底の底部。	[胴]ハケ(8本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ	にぶい橙・黒褐色 黒色	石・長(1～4) 金 ◎	煤付着	
264	甕	底径 4.4 ～4.8 残高 4.1	やや上げ底。	[胴]ヘラミガキ [底]ナデ	ナデ(工具痕あり)	にぶい橙・灰色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
265	甕	底径 3.2 残高 2.7	小さい平底。	[胴]ミガキ [底]ナデ	ハケ(9本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙・灰黄褐色 橙色	石・長(1～2) ◎		
266	甕	底径 3.3 ～3.5 残高 4.0	小さい平底。底部よりストレートにたちあがる。	[胴]ハケ(5～6本/cm) [底]ナデ	ハケ(5～6本/cm)(工具痕あり)	橙・褐灰色 明赤褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
267	甕	底径 3.3 ～4.0 残高 3.8	突出する底部。	[胴]ハケ(8本/cm) [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	灰黄褐色 褐灰色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
268	甕	底径 3.3 残高 3.3	小さい平底。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
269	甕	底径 1.8 残高 3.2	小さい平底の底部片。	ハケ(15～16本/cm)→ナデ	ナデ	黒褐色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
270	甕	底径 2.1 残高 2.9	やや突出したボタン状の底部。	[胴]ハケ(7本/cm)→ナデ [底]ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ	にぶい黄橙・褐灰色 褐灰色	石・長(1～4) 石粒(4) ◎		
271	甕	底径 2.5 残高 5.6	丸みのある小さな平底。	[胴]ハケ(6本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ	明赤褐・にぶい橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
272	甕	底径 1.9 残高 3.5	小さい平底の底部。外面に「×」印の線刻を施す。	ミガキ	ハケ(12本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
273	甕	底径 2.8 残高 6.4	やや丸みをおびた小さな平底。	[胴]タタキ→ナデ [底]ナデ	マメツ	橙色 黄灰・オリーブ黒色	石・長(1～3) ○		
274	甕	底径 2.5 残高 5.0	小さい底部。	[胴]タタキ [底]ナデ	ハケ(9本/cm)→ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) 石粒(3) ◎		
275	甕	底径 5.2 残高 4.6	突出した丸底の底部。	[胴]ハケ(8本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ(小口痕あり)	赤橙・黒褐色 明赤褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
276	甕	底径 2.9 残高 11.0	丸みのある小さな底部。内湾してたちあがる胴部。	ハケ(4本/cm)→ナデ	ハケ(3本/cm)→指ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂 金 ◎	黒斑	
277	甕	底径 1.8 残高 14.2	尖り底の底部。	[胴中]タタキ→ハケ(8～9本/cm) [胴下]ハケ(8～9本/cm) [底]ナデ	ハケ(10本/cm)(指頭痕あり)	橙色 にぶい褐色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
278	甕	底径 3.1 残高 14.6	小さな平底。	[胴]タタキ→ハケ(7本/cm)→ナデ [底]ナデ	ハケ(7本/cm)→指ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
279	甕	底径 3.2 残高 15.0	丸みのある小さな平底。底部より内湾気味にたちあがる。	[胴中]タタキ→ナデ [胴下]タタキ→ハケ(6本/cm)→ナデ [底]ナデ	指ナデ(指頭痕あり)	橙・褐灰色 にぶい橙色	石・長(1～3)多 金 ◎	黒斑	
280	壺	口径(24.3) 残高 4.9	口縁拡張部に沈線文と斜格子文を施す。	ハケ(7本/cm)→施文	[拡上]ヨコナデ(指頭痕あり) [拡下]ハケ(13～14本/cm)(工具痕あり)	明褐・褐灰色 にぶい褐色	石・長(1～3) ◎		
281	壺	口径(20.2) 残高 7.4	口縁拡張部に波状文を施す。口縁接合部外面に刻目を施す。	[拡端]ヨコナデ [拡]ハケ(3～4本/cm)→ナデ→施文[口]ハケ(3～4本/cm)→ナデ	[拡端]ヨコナデ [拡][口]ハケ(3～4本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	橙色 にぶい黄橙・橙色	石・長(1～3) ◎		
282	壺	口径(13.4) 残高11.25	複合口縁。拡張部に波状文、頸部に刻目突帯を施す。	[拡]ヨコナデ [突]ナデ→施文 [口][肩]ハケ(8～9本/cm)	[拡][口]ヨコナデ [頸][肩]ハケ(8～9本/cm)	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～4)多 ◎		30

表35　SD102出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
283	壺	口径 14.8 残高 9.7	複合口縁。口縁拡張部に波状文、頸部に刻目突帯を施す。	[拡][口]ヨコナデ→施文 [頸]ナデ [肩]タタキ→ハケ(8~10本/cm)→ミガキ	[拡][口][頸]ヨコナデ [肩]ハケ(8本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1~3) ◎		
284	壺	口径(18.2) 残高 8.5	複合口縁。無文。頸部に刺突文を2列施す。	[拡]ヨコナデ [突]ナデ→施文 [口][肩]ハケ(6本/cm)→ナデ	[拡][口]ヨコナデ [肩]ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1~5) 金 ◎		30
285	壺	口径 残高 8.3	複合口縁。頸部に刻目突帯を施す。	マメツ [口]ハケ(9本/cm)→ナデ	マメツ	赤褐色 黄橙色	石・長(1~4)多 ○		
286	壺	残高 3.1	複合口縁。接合部外面に半裁竹管文3列施す。	ナデ [擬口端]ナデ→施文 [口]ハケ(12本/cm)→ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
287	壺	口径(19.2) 残高 9.3	複合口縁。内傾してのびる口縁部。	[拡端][口端]ヨコナデ [拡]ハケ(9本/cm)→ナデ [口]ハケ(7本/cm)→ナデ	[拡上]ヨコナデ [拡下][口]ハケ(7本/cm)→ナデ	橙色 灰黄褐色	石・長(1~4) 金 ◎		
288	壺	残高 7.2	頸部に貼付突帯を施す。	[頸][肩]ハケ(4本/cm)→ナデ [突]ナデ→施文	[頸]ナデ [肩]ハケ(4本/cm)→ナデ	明褐色 橙・灰黄褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
289	壺	口径(17.6) 残高 5.1	複合口縁。拡張部に4条の波状文を2段施す。	[拡端]ナデ [拡]ナデ→施文	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		
290	壺	口径(21.0) 残高 6.4	複合口縁。口縁拡張部は内傾してたちあがる。無文。	[拡]ヨコナデ [口]ハケ→ミガキ	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(8本/cm)→ナデ	にぶい橙・ 灰褐色 橙色	石・長(1~6) ◎		
291	壺	口径(17.5) 残高 5.3	複合口縁。口縁拡張部は内傾してたちあがる。無文。	[拡]ハケ(3~4本/cm)→ヨコナデ [口端]ヨコナデ [口]ハケ(5本/cm)→ナデ	[拡端]ヨコナデ [拡]ハケ(3~4本/cm)→ヨコナデ [口]ハケ(8本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
292	壺	口径(17.3) 残高 3.8	複合口縁。内傾してたちあがる口縁部。端部は内に面をもつ。	ヨコナデ	ハケ(9本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) 褐色粒 ◎		
293	壺	口径 (8.0) 残高 4.3	複合口縁。拡張部に5条の櫛描波状文を2段施す。	[拡]ナデ→施文 [口]ヨコナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ◎		
294	壺	口径(16.5) 残高 4.9	複合口縁。拡張部に波状文を施す。	[拡]ナデ→施文 [口端]ナデ [口]ハケ(7本/cm)→ミガキ	[拡]ナデ [口]ハケ(7本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
295	壺	口径(17.3) 残高 4.3	複合口縁。無文。	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(6本/cm)→ヨコナデ	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(6本/cm)→ヨコナデ	にぶい黄橙・ 橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
296	壺	口径(16.8) 残高 3.1	内傾する拡張部。波状文と縦位の沈線文を施す。	[拡]ヨコナデ→施文 [口]ハケ(10本/cm)→ナデ	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(4本/cm)→ナデ	橙・黄灰色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
297	壺	口径(12.8) 残高 3.5	複合口縁。極端に内傾する拡張部。拡張部に波状文を施す。	[拡]ナデ→施文。 [口]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙色 にぶい橙色	石・長(1~5) 金 ◎		
298	壺	口径(13.4) 残高 5.0	複合口縁。無文。	[拡]ハケ(10本/cm)→ナデ [口]ナデ	マメツ	橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) 褐色粒 ◎		
299	壺	口径(11.9) 残高 2.0	複合口縁。口縁拡張部は短く内傾して上方にのびる。	[拡]ヨコナデ [口]ナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		
300	壺	口径(10.8) 残高 4.9	複合口縁。内湾して上方にたちあがる口縁拡張部。	ミガキ	[拡]ナデ [口]ハケ(9本/cm)→ナデ	明褐色 橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
301	壺	口径(14.0) 残高 3.9	複合口縁。無文。口縁端部は面をもつ。	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(10本/cm)→ナデ	[拡]ヨコナデ [口]ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~3) ◎		
302	壺	口径(14.0) 残高 4.3	複合口縁。無文。	ヨコナデ	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(6本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
303	壺	口径(16.3) 残高 8.0	複合口縁。拡張部は短く上方にたちあがる。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~5)多 △		
304	壺	口径(13.5) 残高 8.5	複合口縁。内傾する口縁部。	マメツ [口]ハケ(6本/cm)	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~4) ◎		
305	壺	口径(12.7) 残高 7.3	複合口縁。頸部に刻目突帯を施す。	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	にぶい赤褐色 橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
306	壺	残高 20.0	複合口縁。胴部は球状を呈す。	[口]マメツ [胴]タタキ→ハケ(8本/cm)→ナデ(一部マメツ)	[口]ハケ(6本/cm)→ナデ [胴]指ナデ	橙色 橙色	石・長(1~5) ◎		30
307	壺	口径 20.6 底径 4.5 器高 32.7	外反する口縁部。口縁端部は垂下する。端面には波状文が施される。	[口端]ナデ [肩]タタキ→ハケ(6本/cm)[頸][胴下]ハケ(6本/cm)	ナデ(指頭痕あり) [胴]指ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~7) ◎		30
308	壺	口径(13.7) 残高 6.1	口縁部は丸味をもってたちあがる。	[拡]ナデ [口]ハケ(7本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
309	壺	口径 (7.7) 残高 8.0	長頸壺。直口する口縁部。	ハケ(11本/cm)→ミガキ	[口](工具による)ナデ [頸]ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		

表36　SD102出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
310	壺	底径 8.4 残高 5.3	平底の底部。器壁が厚い。	ミガキ	ハケ→ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
311	壺	底径 8.1 残高 4.9	器壁の厚い平底。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 灰色	石・長(1～2) ◎		
312	壺	底径 6.0 残高 6.1	平底。	ハケ(10本/cm)	工具によるナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1～3) ◎		
313	壺	底径 7.2 残高 6.3	やや丸みをおびた底部。	ハケ(14本/cm)→ナデ	[胴]ハケ(14本/cm) [底]指ナデ	明赤褐色 赤褐色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
314	壺	底径 (4.8) 残高 9.1	小さな平底。	ハケ(8本/cm)→ナデ	ハケ(8本/cm)→指ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) ◎		
315	鉢	口径(36.5) 残高10.25	肩の張りは小さい。外傾する口縁の端部は面をもつ。	マメツ [口端]ナデ	マメツ [胴]ハケ(7～8本/cm)→ナデ	にぶい橙・灰白・灰色 橙色	石・長(1～4)多 ◎		
316	鉢	口径(22.0) 残高 4.3	片口部をもつ鉢。外反する口縁部。端部は上下方に肥厚する。	[口端]ナデ [頸]ハケ(8本/cm)→ナデ[胴]ナデ(指頭痕あり)	[口]ナデ [頸][胴]ハケ(10本/cm)→ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
317	鉢	残高 5.1	扁球形の胴部片。	ナデ	ミガキ	橙色 明赤褐色	長(1) ◎		
318	鉢	底径 1.6 残高 2.5	ボタン状の突出した底部。底部外面に「×」の線刻を施す。	マメツ	ナデ	浅黄橙色 灰色	石・長(1) 褐色粒・石粒・金 ◎	黒斑	
319	鉢	口径 9.6 残高 5.9	脚付鉢。底部よりやや内湾気味にたちあがる口縁部。	マメツ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1)多 褐色粒・金 ◎		30
320	鉢	口径(22.0) 残高 6.7	内湾気味にたちあがる口縁部。端部は面をもつ。	[口端]ナデ [胴]ハケ(10本/cm)→ナデ	ハケ(10本/cm)→ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
321	高坏	口径 24.9 残高 7.1	外反する口縁部。口縁端部は丸い。	[口端]ヨコナデ [坏]ハケ(10本/cm)→ヨコナデ [坏底]ヘラミガキ	[坏]ハケ(10本/cm)→ヨコナデ [坏底]ヘラミガキ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
322	高坏	残高 13.7	脚部中央に3条の凹線文を施し、その下に円孔を穿つ。	[坏]ヨコナデ [坏底]ハケ→ヘラミガキ [脚]ハケ(8本/cm)	[坏]ヨコナデ [坏底]ハケ→ヘラミガキ [脚上]ナデ [脚下]ハケ(8本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
323	高坏	残高 16.0	脚柱部。円孔を3段に4方向穿つ。	マメツ	マメツ [脚]指ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1～3) 褐色粒 ◎		
324	高坏	底径(13.7) 残高 8.3	「ハ」の字状に広がる裾部。端部は丸い。粘土接合痕が顕著に残る。	[坏底][脚]ハケ(10本/cm)→ナデ [脚裾端]ナデ	[坏底][脚上]ナデ [脚下]ハケ(10本/cm)→ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎		30
325	支脚	底径(12.0～12.7) 残高 15.1	中空。角状の突起をもつ受部。背部に鰭状の突起部をもつ。	[角]指ナデ [角裾]ハケ [脚]タタキ	[脚]指ナデ [脚裾]ハケ(7本/cm)→ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎		30
326	支脚	受部径 6.5 底径 6.85 残高 5.05	中実。円柱状の体部。底部は上げ底。受部は傾斜した凹みをもつ。	ナデ・指ナデ(指頭痕あり)	ナデ・指ナデ(指頭痕あり)	橙・にぶい黄橙色 橙・にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		30
327	ミニチュア	底径 1.8 残高 2.1	手捏ね土器。	ナデ	ハケ(5本/cm)→ナデ	灰黄褐色 橙色	石・長(1～3) ◎		

表37　SD102出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
328	砥石	不明	砂岩	14.0	13.9	7.00	2053.53		
329	砥石	不明	砂岩	6.8	6.6	5.90	504.43		
330	敲石	完形	砂岩	11.4	9.4	6.60	1019.05		
331	敲石	ほぼ完形	砂岩	9.7	8.8	2.30	284.82		

表38　SD103出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
332	甕	口径(17.2) 残高 6.1	やや外反する口縁部。	ハケ(8本/cm)→ナデ	[口]ハケ(8本/cm)→ナデ [肩]ナデ	にぶい黄橙・褐灰色 にぶい黄橙・褐灰色	石・長(1) ◎		
333	甕	底径 (3.4) 残高 7.2	平底の底部より内湾してたちあがる胴部。	[胴中][底]ナデ [胴下]ケズリ	指ナデ(指頭痕あり)	灰黄褐色 明褐・褐灰色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
334	甕	底径 4.4 残高 4.6	くびれをもつ上げ底の底部。	[胴]ハケ(11～12本/cm)→ナデ [底]ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～4) ◎		
335	甕	底径 3.7 残高 3.9	平底の底部。	ハケ→ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙色 灰色	石・長(1～3)多 金 ◎	黒斑	

表39　SD103出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
336	甕	底径 2.9 残高 3.6	尖り底の底部。	[胴](板状工具による)ナデ [底]ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	明赤褐色 橙・褐灰色	石・長(1～2) 石粒 ◎		

表40　SK102出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
337	甕	口径(17.2) 残高 4.55	やや外反する口縁部。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1) 石粒(2) ◎		
338	壺	口径(14.8) 残高 2.8	複合口縁の拡張部片。口縁端部は面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
339	甕	底径 4.1 ～4.6 残高 4.4	小さな平底。	[胴]ハケ(4本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～4) ◎		
340	甕	底径 4.0 残高 6.2	平底の底部。	[胴]ハケ(8本/cm)→ナデ(指頭痕あり) [底]ナデ	ハケ(8本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色 黒色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
341	壺	底径 6.8 残高 2.6	平底の底部。器壁が厚い。	ハケ→ナデ	ナデ(一部ハクリ)	橙色 にぶい橙色	石・長(1～4)多 金 ◎		
342	鉢	口径(28.0) 残高 5.1	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(12本/cm)→ミガキ	ミガキ	赤褐色 赤褐色	石・長(1～2) ◎		
343	鉢	口径(15.4) 残高 5.6	短く外傾する口縁部。端部は丸い。	ナデ(しぼり痕あり)	[口]ハケ(10本/cm) [胴]ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(1) ◎		
344	鉢	底径 1.6 残高 2.7	ボタン状の突出した底部。	[胴]ミガキ [底]ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 明赤褐色	石・長(1) ◎		
345	鉢	底径 2.1 残高 12.3	小さい平底。扁球体の胴部。	[胴]ハケ(4～6本/cm)→ミガキ [底]ナデ	ハケ(6本/cm)	橙色 橙色	石・長(1～5) ◎	黒斑	

表41　SP101出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
346	甕	底径 3.8 残高 7.7	小さい平底。	[胴]ハケ(8～9本/cm) [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙・黒褐色 褐灰色	石・長(1～2) ◎	黒斑	

表42　SP105出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
347	壺	残高 2.9	複合口縁。	ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	橙色 黄灰色	石・長(1～2) 金 ◎		
348	甕	底径 4.6 残高 8.8	平底の底部。	[胴]ハケ(6・10本/cm) [胴下][底]ナデ	工具によるナデ	にぶい橙色 黄灰・暗灰色	石・長(1～3) ◎		

表43　SP111出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
349	甕	口径(18.8) 残高 3.2	外反する口縁部。端部はナデにより下方に肥厚する。	[口端]ナデ [口]ハケ(7本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ	にぶい橙色 橙色	石(1～2) 金 ◎		

表44　SP115出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
350	甕	底径 (2.6) 残高 4.1	器壁の厚い小さな底部。	[胴]ハケ(9本/cm)→ナデ [胴下][底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	にぶい橙色 にぶい褐・褐灰色	石・長(1～2) ◎	黒斑	

表45　SP130出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
351	甕	口径(17.2) 残高 2.7	やや外反する口縁部。口縁端部は強いナデにより稜をもつ。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(13本/cm)	ヨコナデ	灰褐・にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎		

表46　表採出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
352	石包丁	欠損	緑色片岩	4.3	2.3	0.66	6.20		

第8章　枝松遺跡8次－2区の調査－

1. 調査の経緯

2区は調査地の中央部にあたり、調査前は造成地である。調査面積は300㎡である。試掘調査時に弥生土器や焼土が検出され、住居址の存在が想定されていた。調査は、掘削した土砂置き場の確保のため東側を2東区、西側を2西区として2回に分けて行った。以下、調査工程を略記する。

2004（平成16）年3月4日、2東区を第Ⅴ層の黒色土上面まで重機により掘削を開始する。

3月 8 日、第Ⅴ層上面では遺構の輪郭を明確に検出できなかったため、第Ⅴ層の掘り下げを行う。

3月15日、第Ⅳ層上面で竪穴式住居SB201（以下、SB201）を検出する。

3月17日、遺構検出作業を終了する。高所作業車を利用し遺構検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、調査区測量図・遺構配置図作成作業を開始する。

3月18日、SB201の掘り下げを行う。住居中央部で多量の土器、焼土を検出する。

4月21日、SB201南側の拡張作業と遺物検出作業を行う。SB201の張り出し部を確認する。

5月 7 日、SB201より皮袋形土製品、環状石斧が出土する。

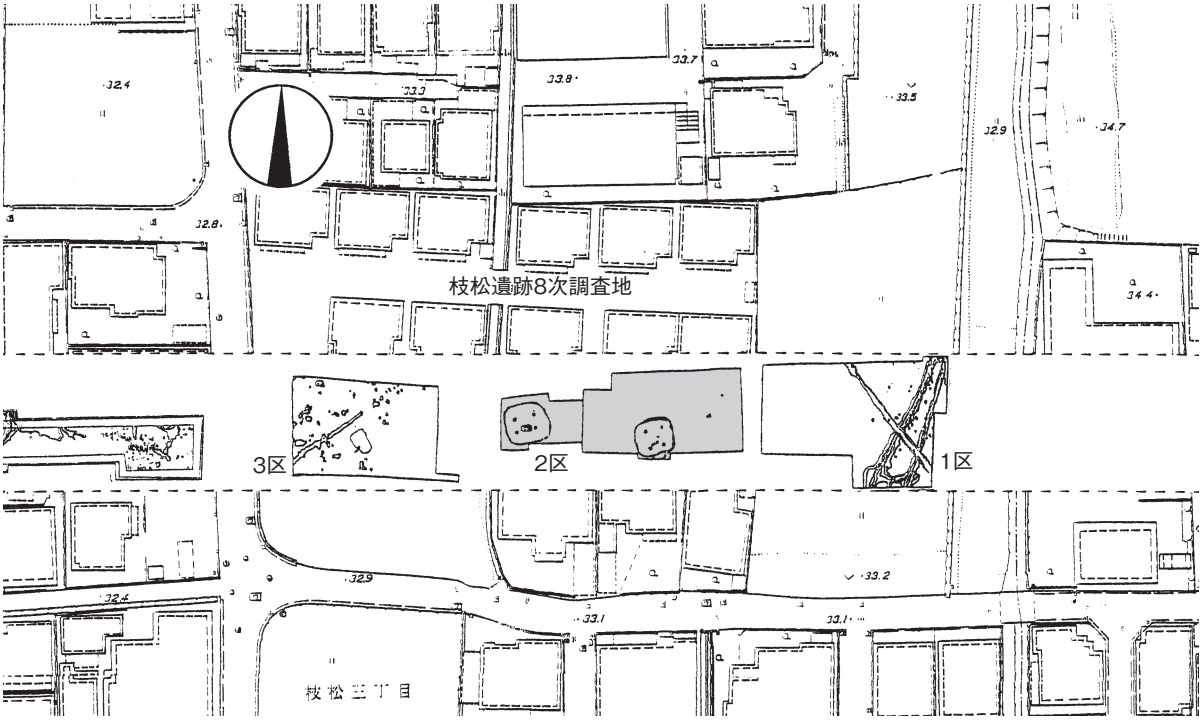
5月28日、SB201の主柱穴を4本確認する。遺構測量図を作成する。SB201の調査を終了する。

7月16日、2西区の掘削を開始する。竪穴式住居SB202（以下、SB202）を検出する。

7月26日、SB202検出写真の撮影を行う。撮影終了後、掘り下げを開始する。

8月 4 日、柱穴、炉を検出する。遺物、土層の測量を行う。

8月12日、SB202の完掘写真撮影を行う。2区の埋め戻し作業を開始し調査を終了する。

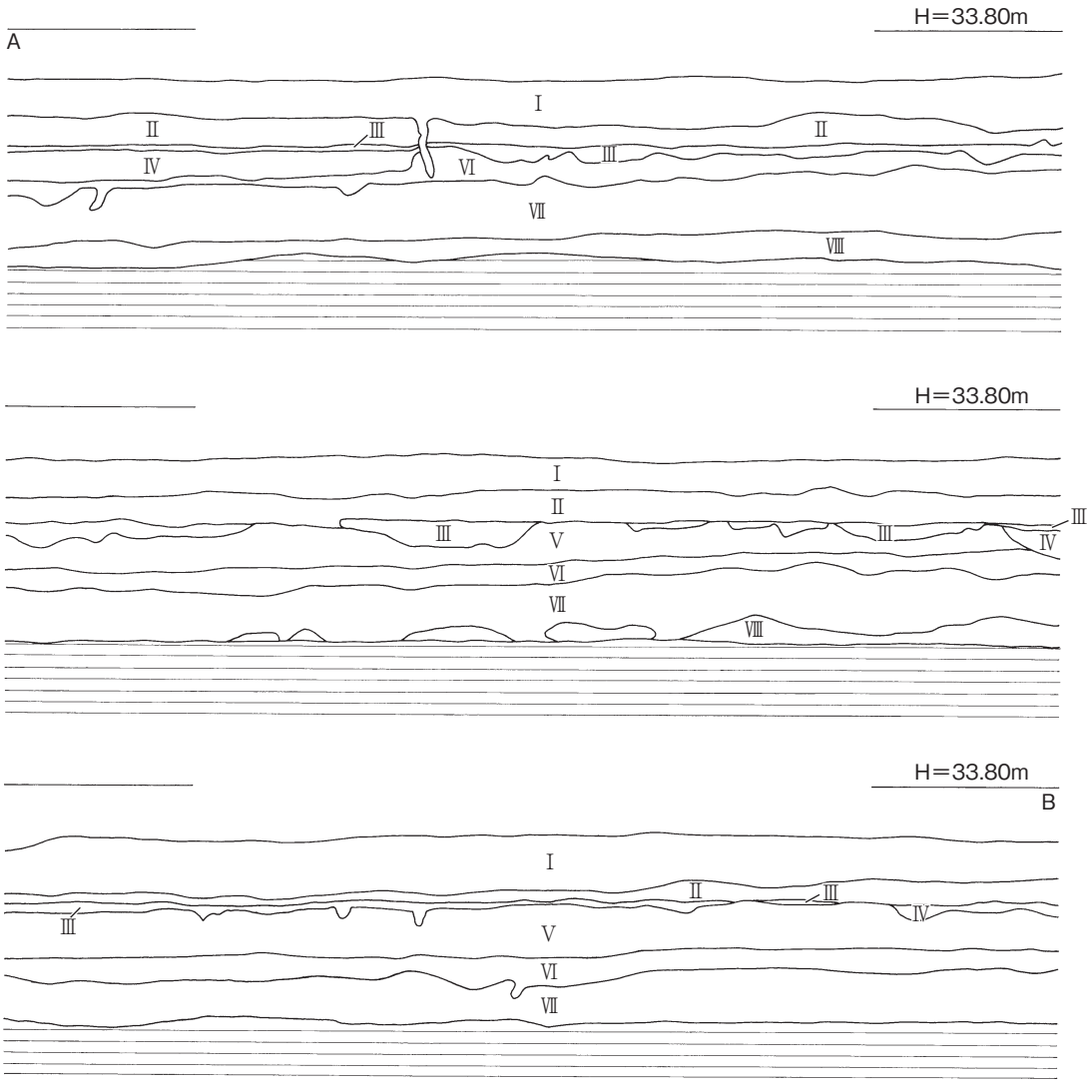


第88図　調査区位置図（S=1:1,000）

2. 層位

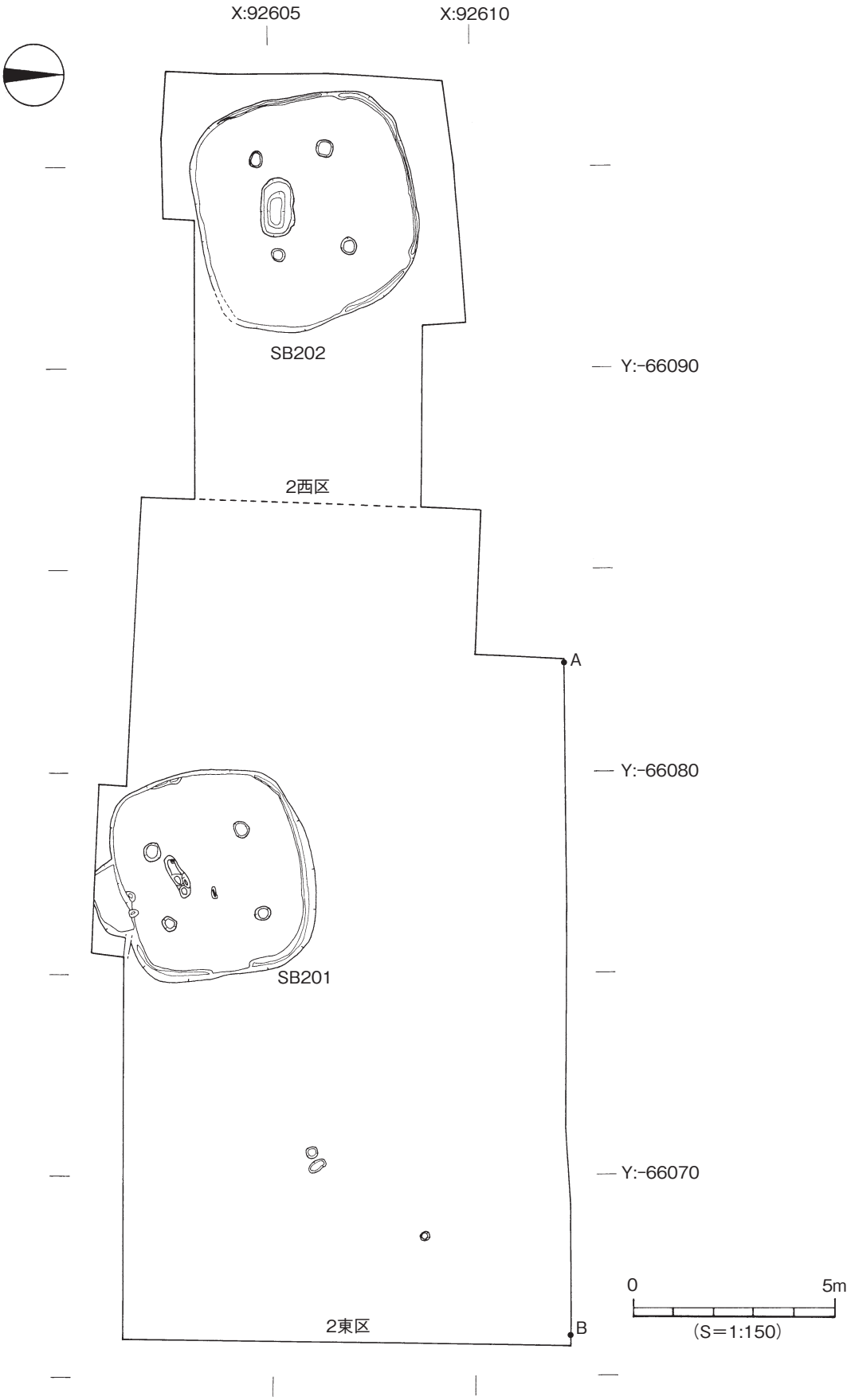
２区の基本層序は、上から第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層青灰色土、第Ⅲ層橙色土、第Ⅳ層橙灰色土、第Ⅴ層黒色土、第Ⅵ層黒灰色土、第Ⅶ層茶色土、第Ⅷ層黄色土に茶褐色粘質土が混じる。層厚は第Ⅰ層20 cm～ 40 cm、第Ⅱ層３cm～ 20 cm、第Ⅲ層２cm～ 10 cm、第Ⅳ層 16 cm～ 20 cm、第Ⅴ層 18 cm～ 31 cm、第Ⅳ層 10 cm～ 16 cm、第Ⅶ層 26 cm～ 38 cm、第Ⅷ層 14 cm以上を測る。

第Ⅰ層は現代の造成土、第Ⅱ層は現代の耕作土である。第Ⅲ層は現代の床土。第Ⅳ層は土師器片が出土する。第Ⅴ層は１区の第Ⅲ層に対応する。第Ⅵ層は１区の第Ⅳ層に対応する。アカホヤ火山灰。第Ⅶ層以下は地山と呼ばれる層である。第Ⅷ層はＡＴ火山灰の２次堆積層である。



Ⅰ　造成土（真砂土）
Ⅱ　青灰色土（現代耕作土）
Ⅲ　橙色土
Ⅳ　橙灰色土
Ⅴ　黒色土
Ⅵ　黒灰色土（遺構確認面）
Ⅶ　茶色土（固くしまる）
Ⅷ　黄色土に茶褐色粘質土が混じる（AT2次堆積層）

第 89 図　北壁土層図



第90図　2区遺構配置図

遺構は、第Ⅳ層上面で竪穴式住居址 1 棟（SB201）、第Ⅴ層上面で竪穴式住居址 1 棟（SB202）を検出し、第Ⅶ層上面で柱穴 3 基を検出した。これらの遺構は本来、第Ⅴ層以上からの掘り込みと考えられる。SB201 は試掘トレンチの土層より、第Ⅴ層以上からの掘り込みが確認できた。第Ⅴ層上面での検出を試みたが、第Ⅴ層と住居埋土の土色が似ているため平面的に検出する事が困難であった。このため第Ⅴ層を掘り下げ、第Ⅵ層の黒灰色土上面で検出したものである。以下、主な遺構・遺物について記述する。

3. 遺構・遺物

竪穴式住居址（SB）

SB201（第 91 図～第 93 図）

SB201 は、第Ⅵ層上面で検出した。平面形態は隅丸方形を呈する。検出規模は一辺 4.50m、壁高 0.30m ～ 0.38m を測る。屋内施設には主柱穴、炉址、周壁溝、貼床をもつ他、南壁中央部に張り出し部をもつ。このほか、焼土を住居内で検出した。

主柱穴は P1 ～ P4 までの 4 本を検出した。平面形は円形を呈する。規模は直径 0.34m ～ 0.43m、深さ 0.56m ～ 0.82m を測る。柱穴間は 2.15m ～ 2.30m を測る。柱痕跡は P1、P3、P4 で検出した。平面形は円形を呈する。規模は直径 0.16m ～ 0.20m を測る。

周壁溝は、西壁の一部分と住居北壁から東壁にかけて検出した。検出規模は幅 0.12m ～ 0.32m、深さ 0.02m ～ 0.05m を測る。東壁の中央部で 0.96m の間が途切れる。

貼床は、厚さ 0.02m ～ 0.10m を炉の周囲と南西部を除く住居全体にみられた。また、住居内には大きく分けて 4 カ所の焼土を検出している。そのうちの一つは、範囲が広いもので住居中央部を南北方向に長くのびる。検出規模は長軸 4.35m、短軸 0.80m、厚さ 0.02m ～ 0.12m を測る。焼土中には遺物は含まれていない。

張り出し部は、住居南壁の中央部で検出した。南西部の一部が調査区外となる。規模は幅 1.96m、奥行き 0.70m ～ 0.80m を測る。張り出し部の基底面は、住居の基底面より 0.08m ～ 0.12m 高くなる。

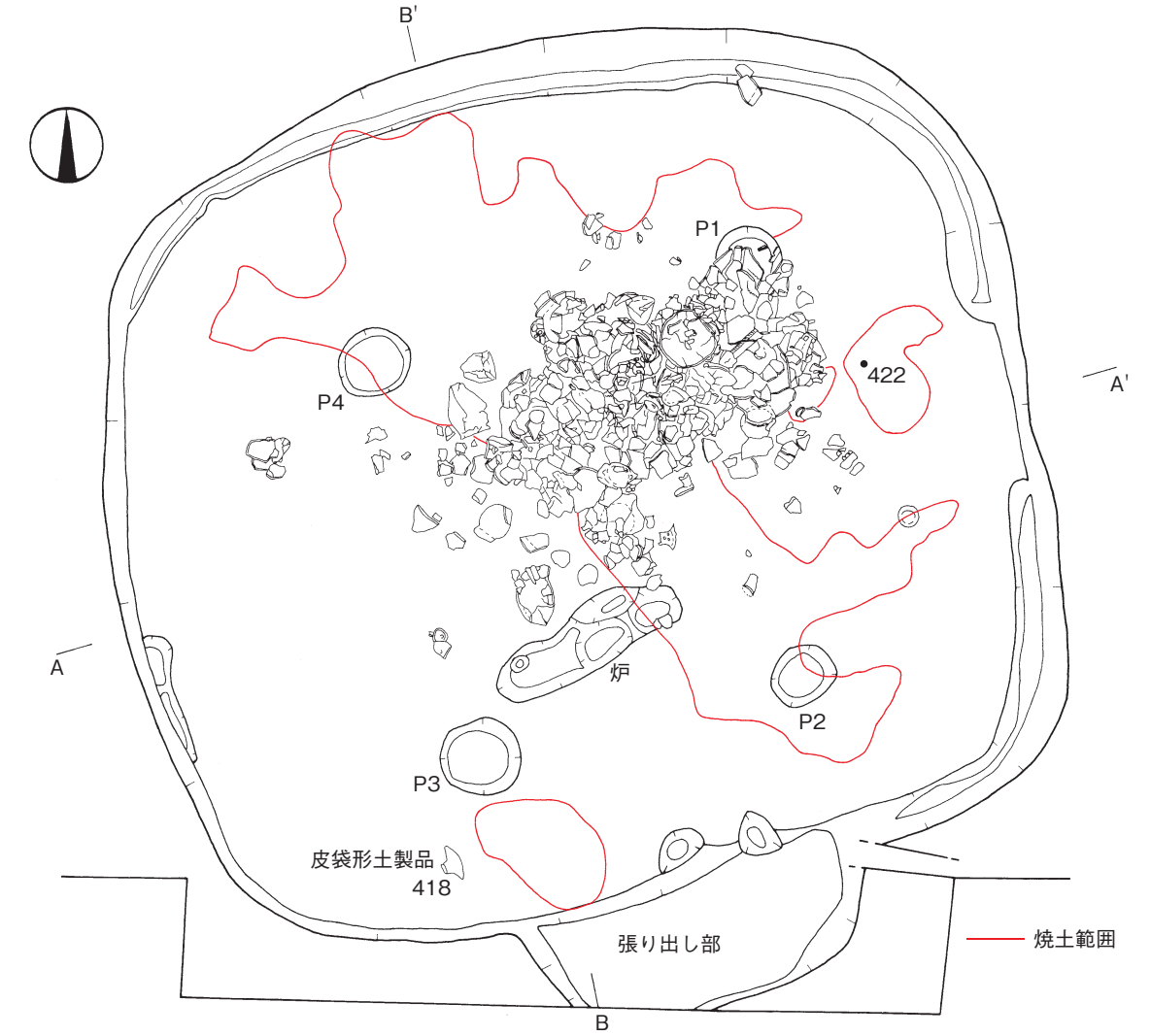
炉址（第 93 図）は、住居中央部の南側で検出した浅い土坑である。平面形は東西に細長い楕円形を呈する。基底面は凸凹がある。検出規模は長軸 1.16m、短軸 0.28m、深さ 0.04m ～ 0.16m を測る。埋土は黒褐色土で炉底近くでは焼土粒を含む。

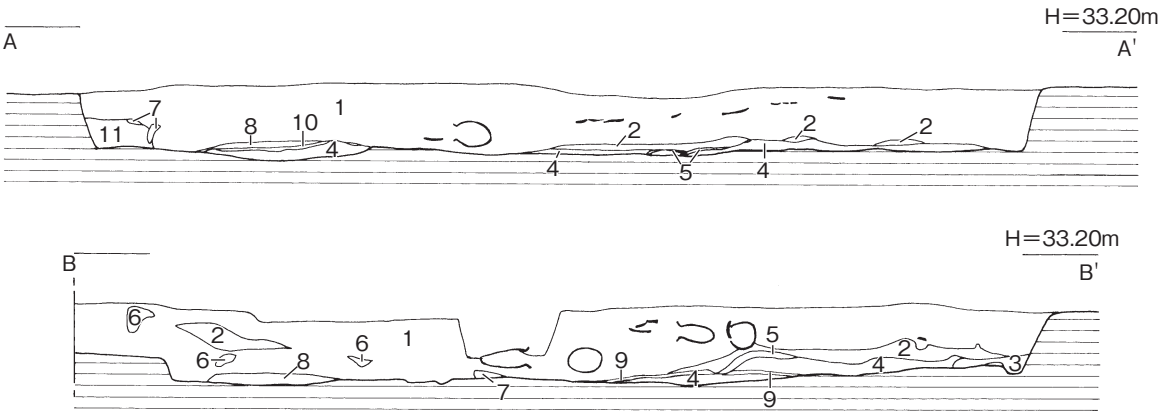
遺物は、住居中央部の焼土上で南北 1.20m、東西 2.00m の範囲において多量の土器が集中して出土した。検出した遺物のほとんどはこの部分からの出土である。

出土遺物（第 94 図～第 103 図）

甕形土器（353 ～ 383）

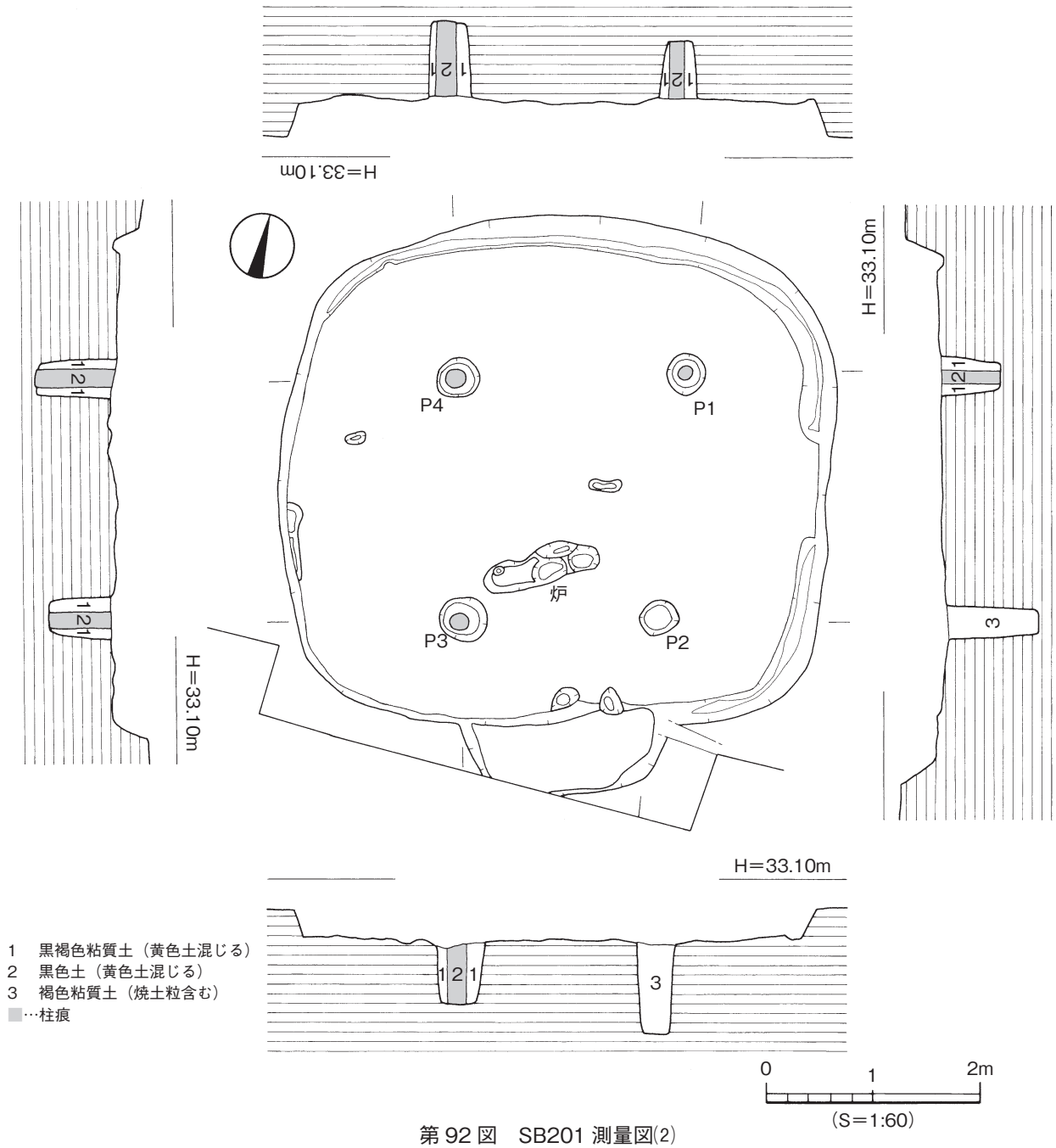
353 は肩部が張る大型品。口縁部は外反する。口縁端部はナデにより上下に肥厚し、端面はわずかに凹む。胴部外面はハケ目調整、内面はハケ目調整のちナデ調整を施す。頸部内面に指頭痕を残す。354 は外反する口縁部。端部は面をもつ。口縁部と胴部は、内外面ともハケ目調整を施す。355 は外反する口縁部。端部は丸みをもった面をもつ。356 はゆるやかに外傾する口縁部。端部は先細り丸みをもった面をもつ。底部は丸みをもった平底である。胴部は内外面ともハケ目調整を施すが、外面にはタタキ痕を残す。357 はわずかに外反する口縁部。内外面ともハケ目調整が施される。358 は外反





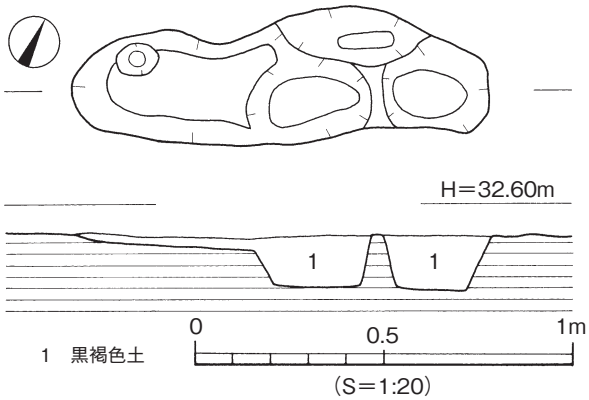
1　黒褐色土（直径1㎜前後の赤橙色粒含む）
2　黄橙色土（焼土）
3　橙褐色土
4　茶褐色粘質土（貼床）
5　炭層
6　1に赤橙色粒の密度濃い
7　茶色粘質土
8　黒色粘質土
9　黄色土
10　黄灰色粘質土
11　黒色土

第91図　SB201 測量図(1)

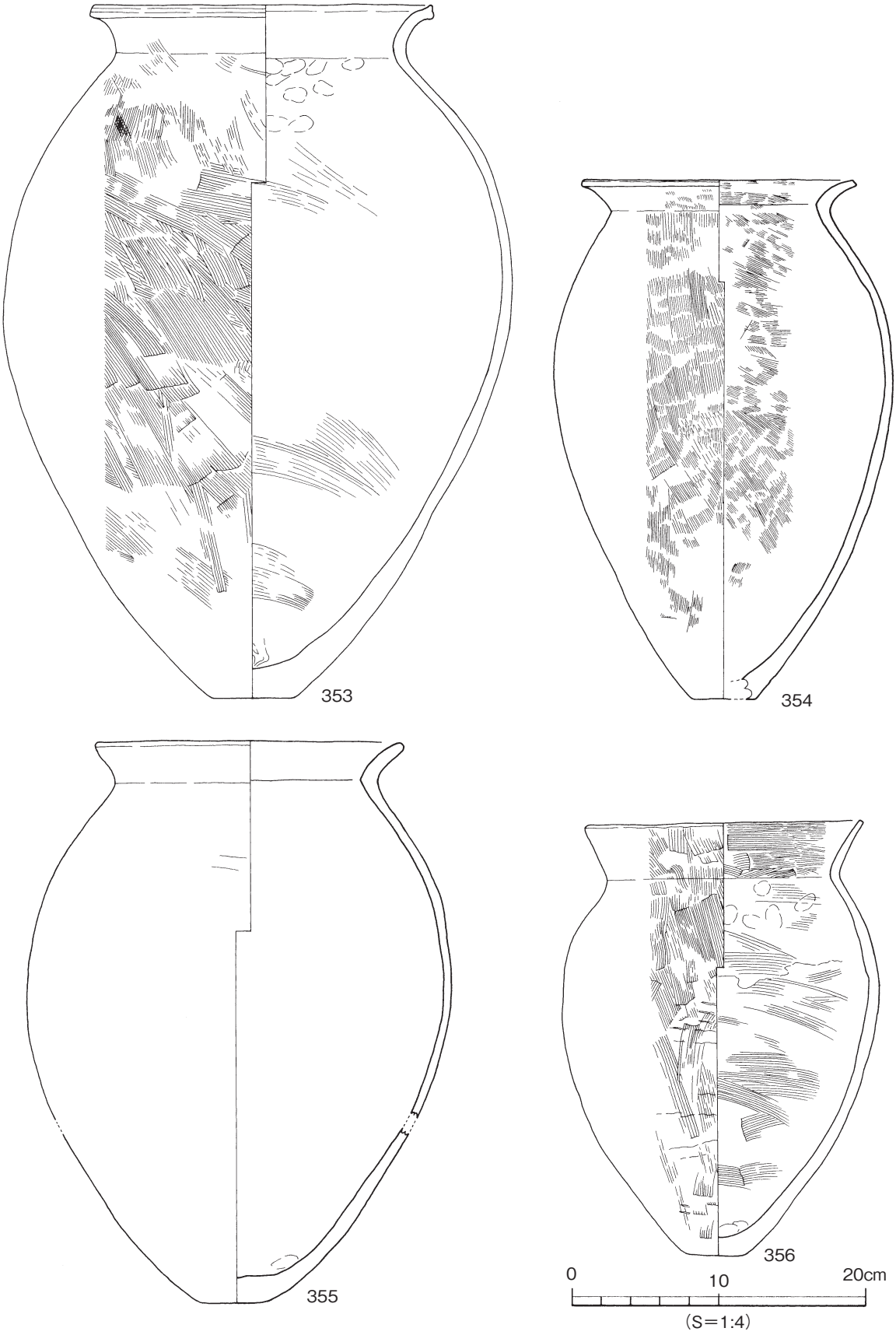


第 92 図　SB201 測量図(2)

する口縁部。端部は面をもつ。359 は外反する口縁部。底部は小さな平底である。360 は外反する口縁部。胴部は内外面ともハケ目調整が施される。外面にタタキ痕を残す。361 は外反する口縁部。端部は面をもつ。362 は外反する口縁部。端部の調整は粗く尖る。363 は歪みがある。底部は小さな平底。内外面ともハケ目調整が施される。364 はやや外反する口縁部。端部は面をもつ。365 の口縁

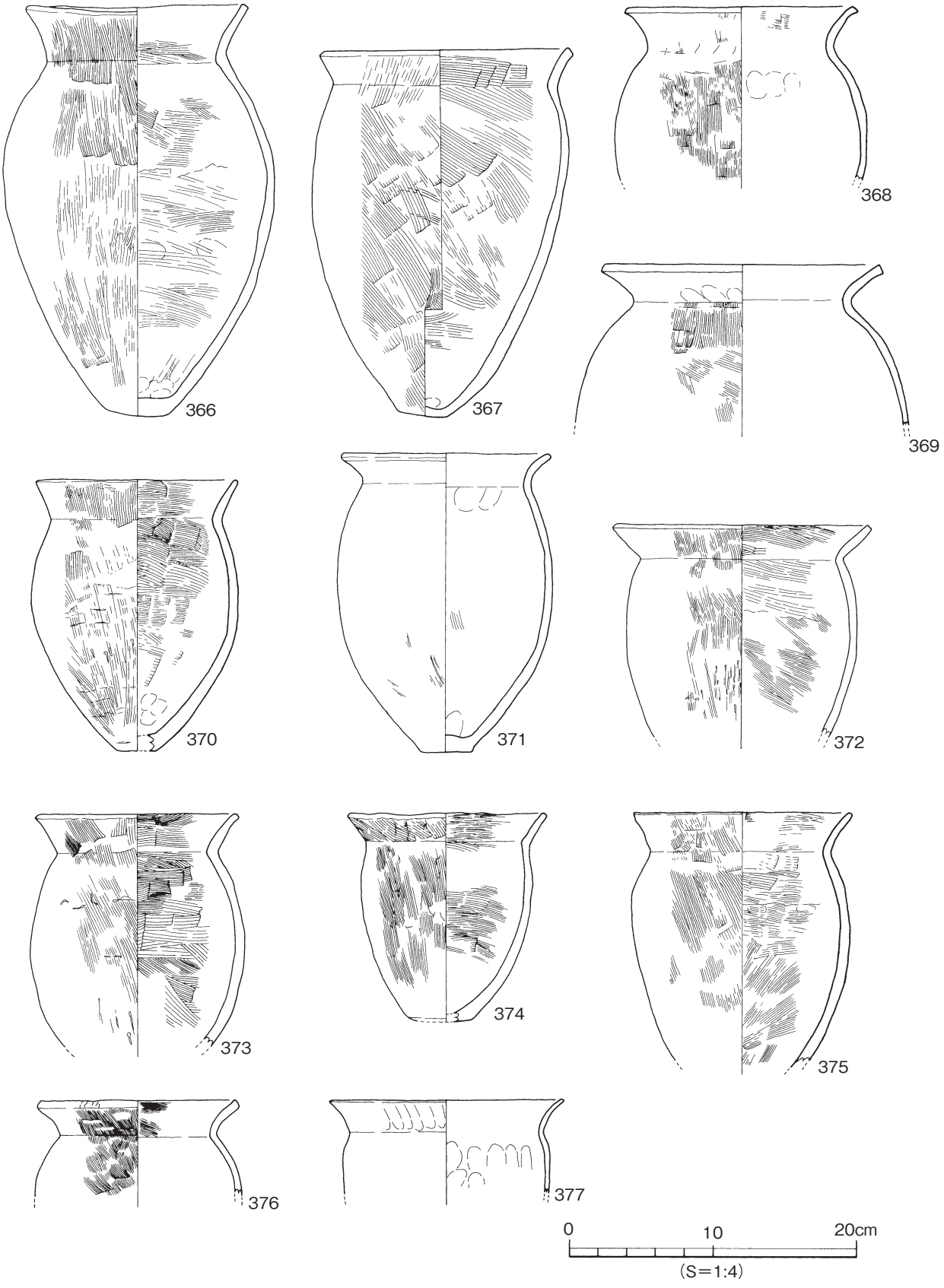


第 93 図　SB201 炉測量図

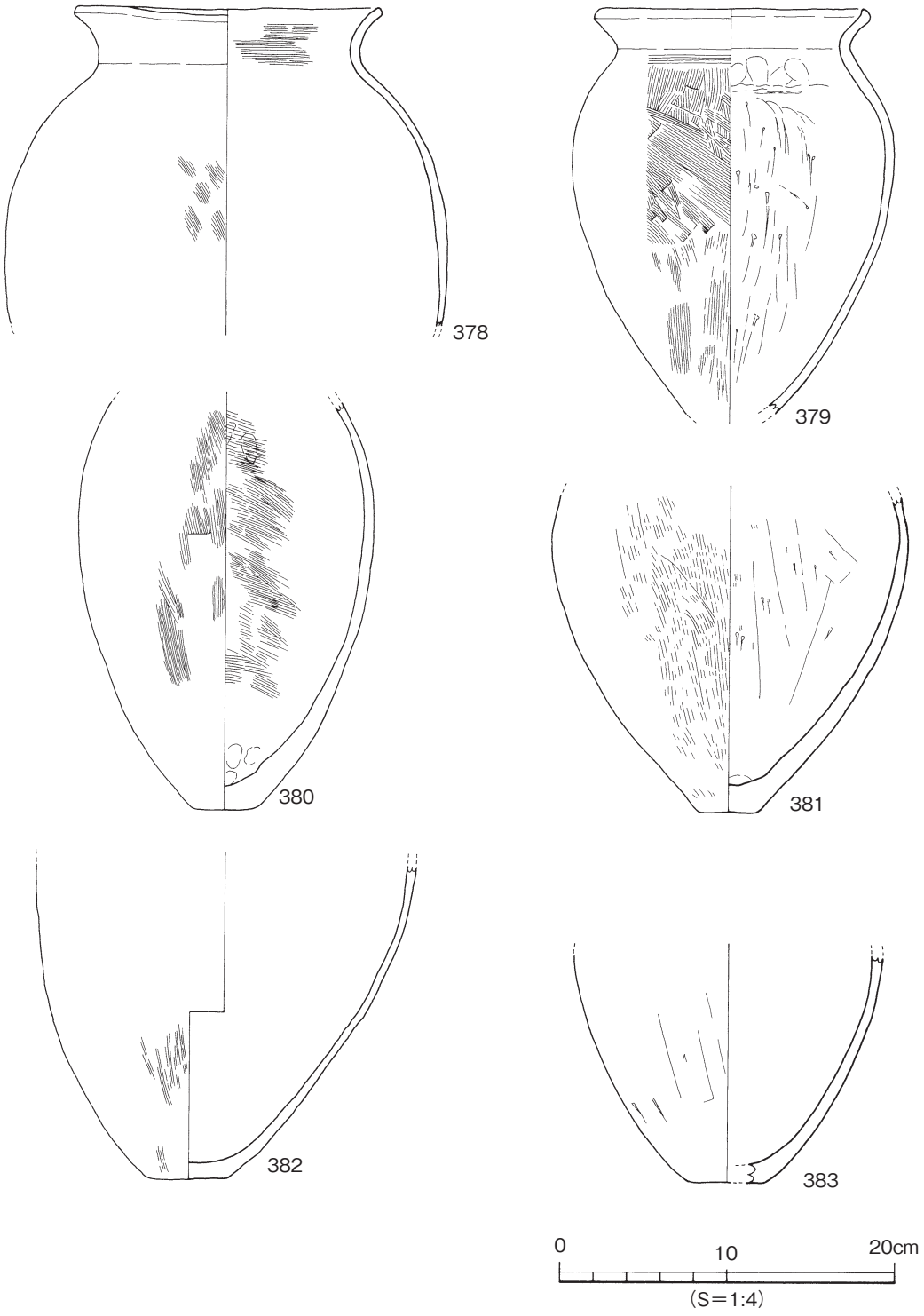


第 94 図　SB201 出土遺物実測図(1)

第 95 図　SB201 出土遺物実測図(2)

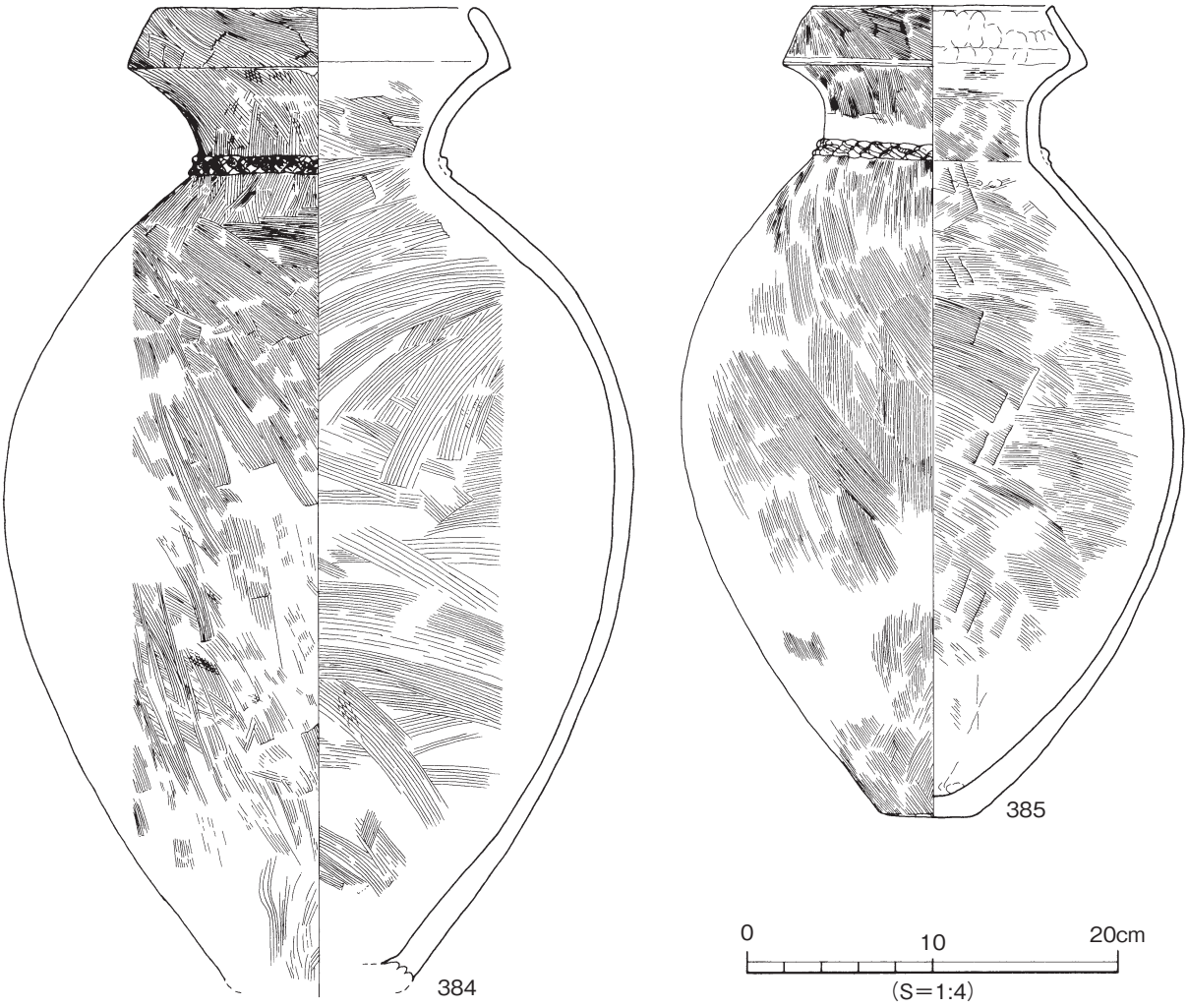


第96図　SB201 出土遺物実測図(3)



第 97 図　SB201 出土遺物実測図(4)

部は外傾して上方にのびる。366 はやや外反する口縁部。底部は丸みをもった平底。内外面ともハケ目調整を施す。367 は肩部の張りが弱い。内外面ともハケ目調整を施す。368 の口縁部は外反し、端部は面をもつ。胴部は外面ハケ目調整、内面はナデ調整である。369 は大きく外反する口縁部。端部は面をもつ。370 は胴部内外面ともハケ目調整が施される。外面にはタタキ痕を残す。371 は外反する口縁部。端部は丸く仕上げる。底部はやや突出する平底。372 の口縁部は内湾して立ち上がる。端

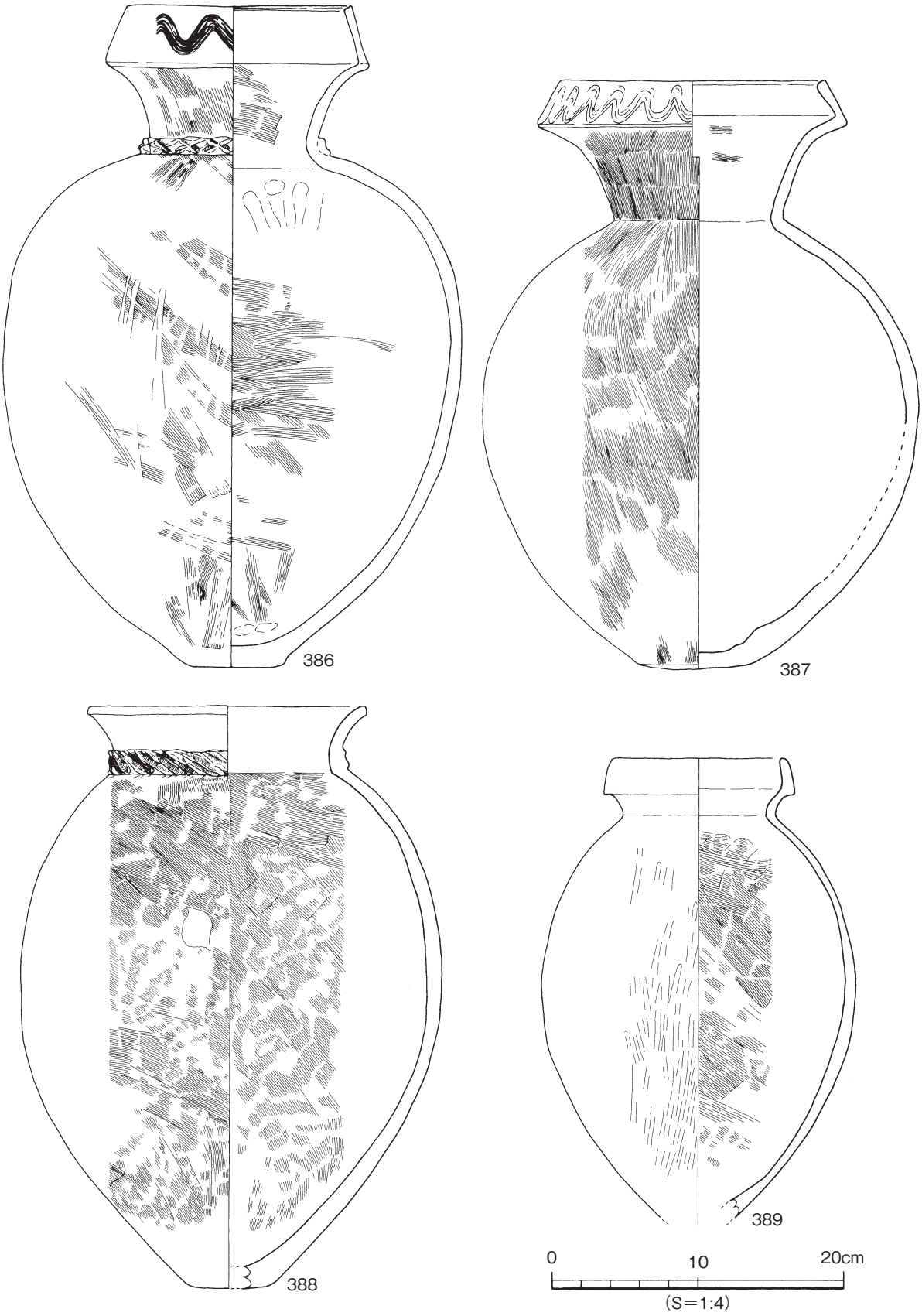


第98図　SB201出土遺物実測図(5)

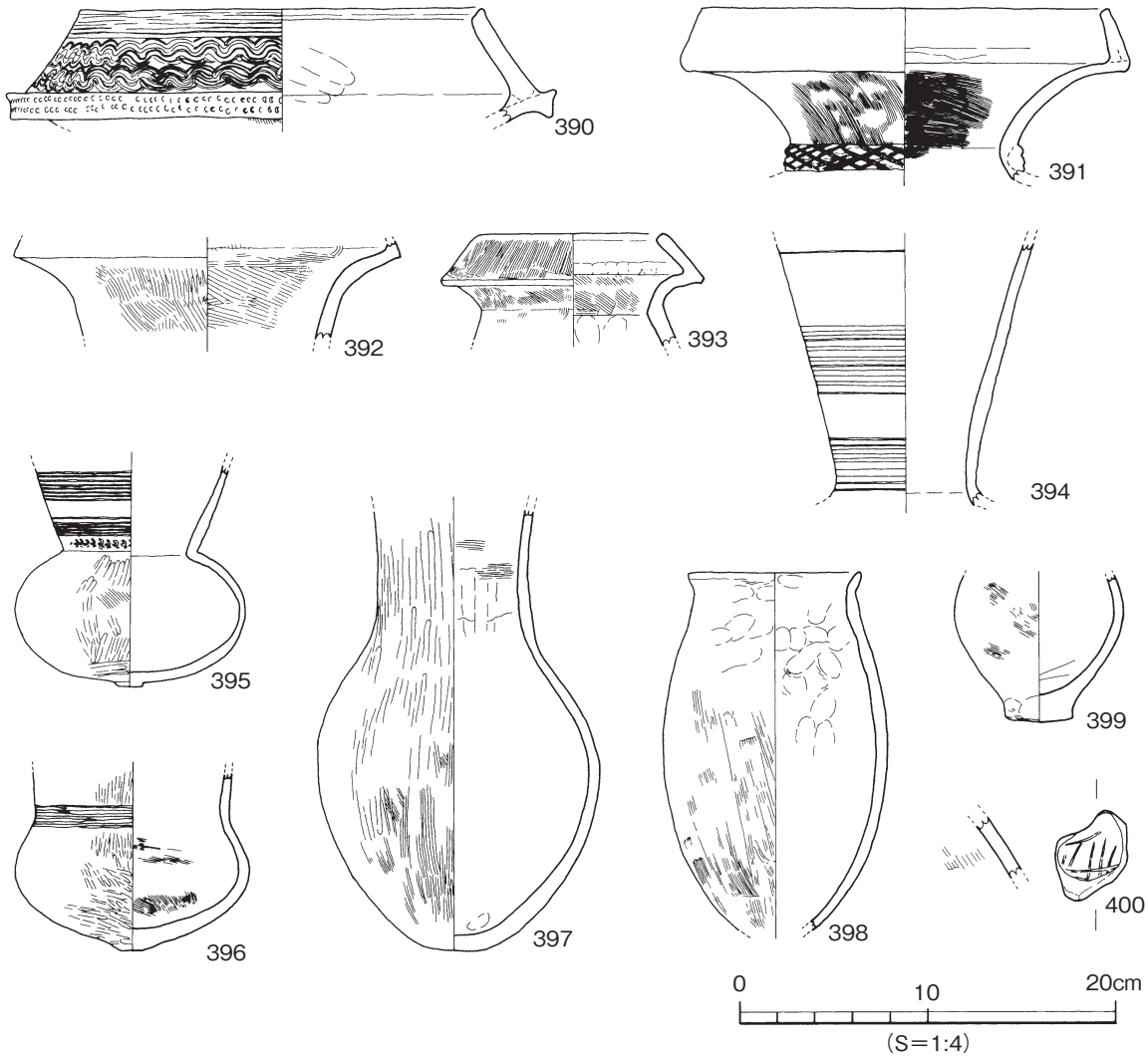
部は面をもつ。内外面ともハケ目調整が施される。胴部下半の外面はヘラケズリが施される。373は外反する口縁部。胴部下半の外面はヘラケズリが施される。胴上半にはタタキ痕を残す。374の口縁端部はナデにより面をもつ。375は外反する口縁部。376の口縁端部はやや肥厚する。377は肩部の張りが弱く、口縁部は緩やかに外反する。口縁部外面に指頭痕を顕著に残す。378は肩部が張る。口縁部は外反して短く立ち上がる。胴部の器壁が薄い。379の口縁端部は上方に肥厚する。胴部外面はハケ目調整、内面はヘラケズリが施される。380～383は胴上半から口縁部が欠失する。380の胴部は細長の長胴である。381は小さなやや突出する底部。382、383は平底の底部。

壺形土器（384～400）

384～387、389～393は複合口縁壺。384は頸部に刻目突帯が施される。頸部は外反し、口縁拡張部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸みをもった面をもつ。385は頸部に刻目突帯が施される。頸部は直立して立ち上がる。口縁拡張部内面に指頭痕を顕著に残す。386は肩の張る胴部。頸部に刻目突帯が施される。口縁拡張部には波状文が施される。底部はやや突出する小さな平底。387は胴部が球形を呈する。口縁拡張部に波状文を施す。388は肩部が張る。頸部に刻目突帯を施す。口縁部は外反し、端部は面をもつ。389は細長の胴部。口縁拡張部はやや内湾して上方に立ち上がる。390は口



第 99 図　SB201 出土遺物実測図(6)

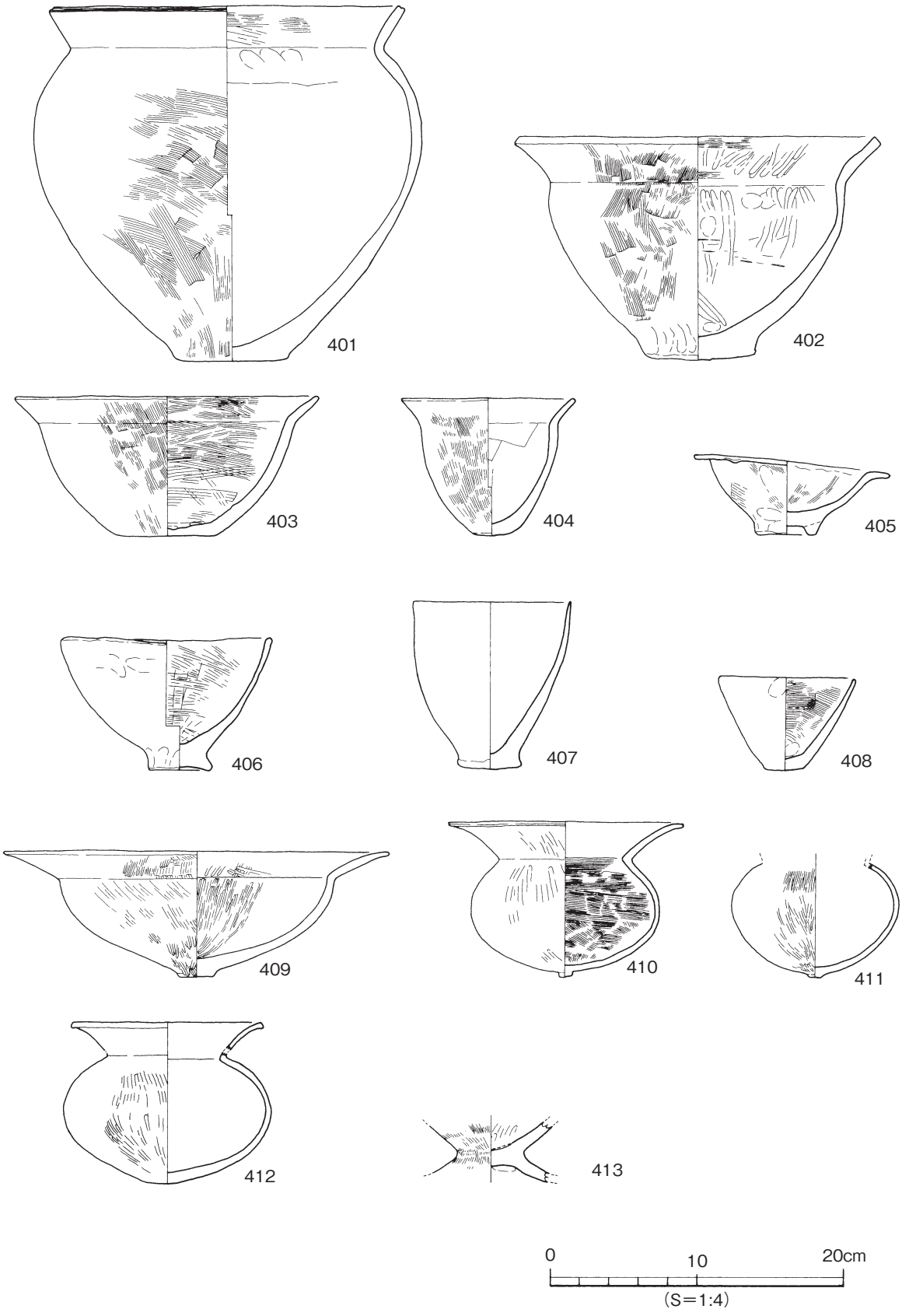


第100図　SB201出土遺物実測図(7)

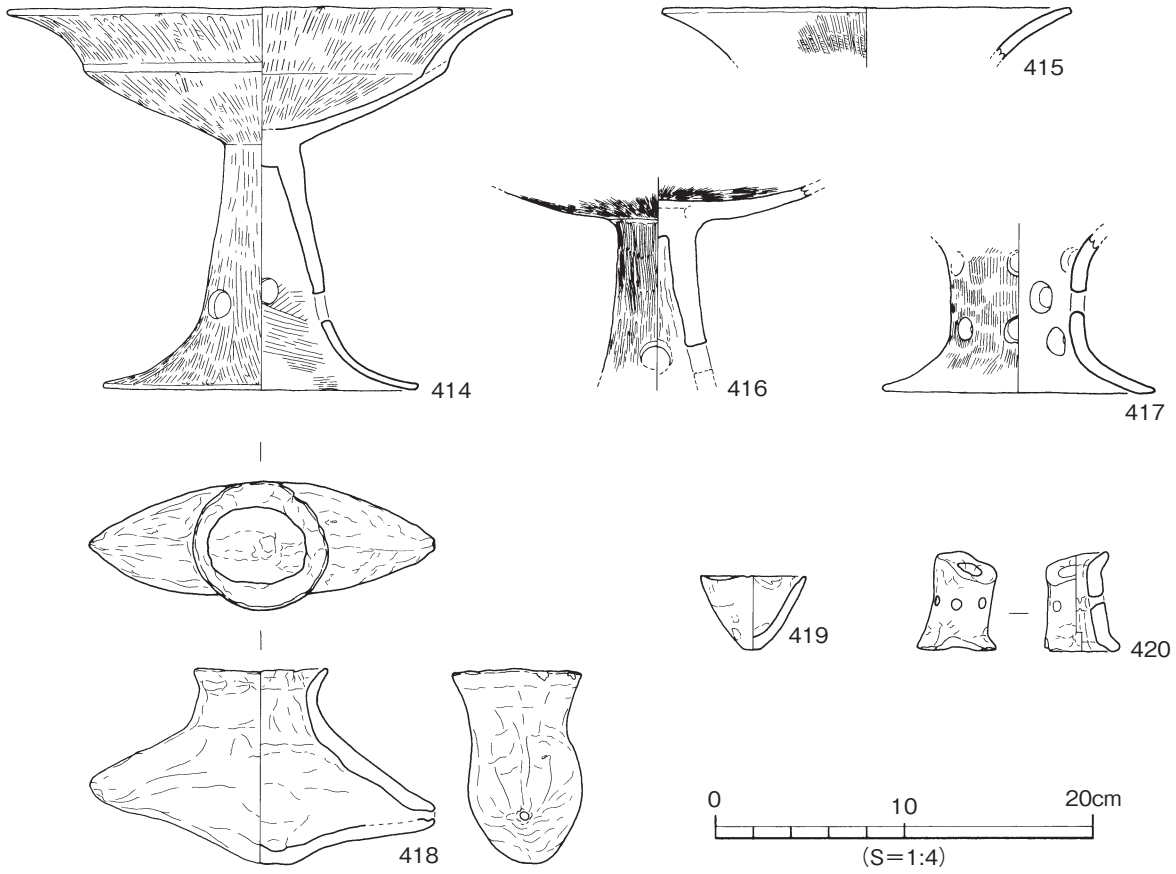
縁接合部外面に半裁竹管文を施し、拡張部に沈線と波状文を施す。391の頸部には刻目突帯が施される。392は頸部片。外反する頸部。393の頸部は内傾して外反する。口縁拡張部内面に接合痕を残す。394～397は長頸壺。394は頸部に沈線文を施す。395は扁球形の胴部。底部はボタン状に突出する。頸部には沈線文と半裁竹管文が施される。胴部外面はヘラミガキが施される。396は張りの弱い胴部。底部は小さく突出する。頸部に沈線文が施される。胴部外面はヘラミガキが施される。397は丸みをもった底部。頸部はやや外傾し立ち上がる。398はなだらかに内湾して立ち上がる胴部から短く外反する口縁部。399は小さく突出する底部。400は胴部片に線刻が施される。

鉢形土器（401～413）

401～405は口縁部が屈曲する。401は大型品。底部は平底である。肩部が張る。402は中型品。外面はハケ目調整、内面はヘラミガキが施される。底部は平底である。403は安定した平底。内外面の調整はハケ目調整が主体である。404は外傾する口縁部。底部は丸みをおびた平底。405の底部は粘土紐を巡らせて輪高台状となる。口縁部は水平に開く。406～408は直口する口縁部。406は小さく突出する底部。底部外面に指頭痕を残す。407はやや突出する底部。408の底部は平底である。調整は外面ナデ、内面ハケ目調整が施される。409の口縁部は大きく外反する。底部は小さく突出する。



第 101 図　SB201 出土遺物実測図(8)



第102図　SB201出土遺物実測図(9)

410の口縁部は大きく外反する。410、411の底部はボタン状に突出する。412の底部は不安定な小さな平底である。413は台付鉢の脚部片。

高坏形土器（414～416）

414の口縁部は大きく外反する。脚裾は大きく外に開く。脚柱には3カ所に円孔を穿つ。坏部は内外面ともヘラミガキが施される。415は口縁部片。外面はヘラミガキが施される。416は脚柱～坏底にかけての破片である。内外面ともヘラミガキが施される。

器台（417）

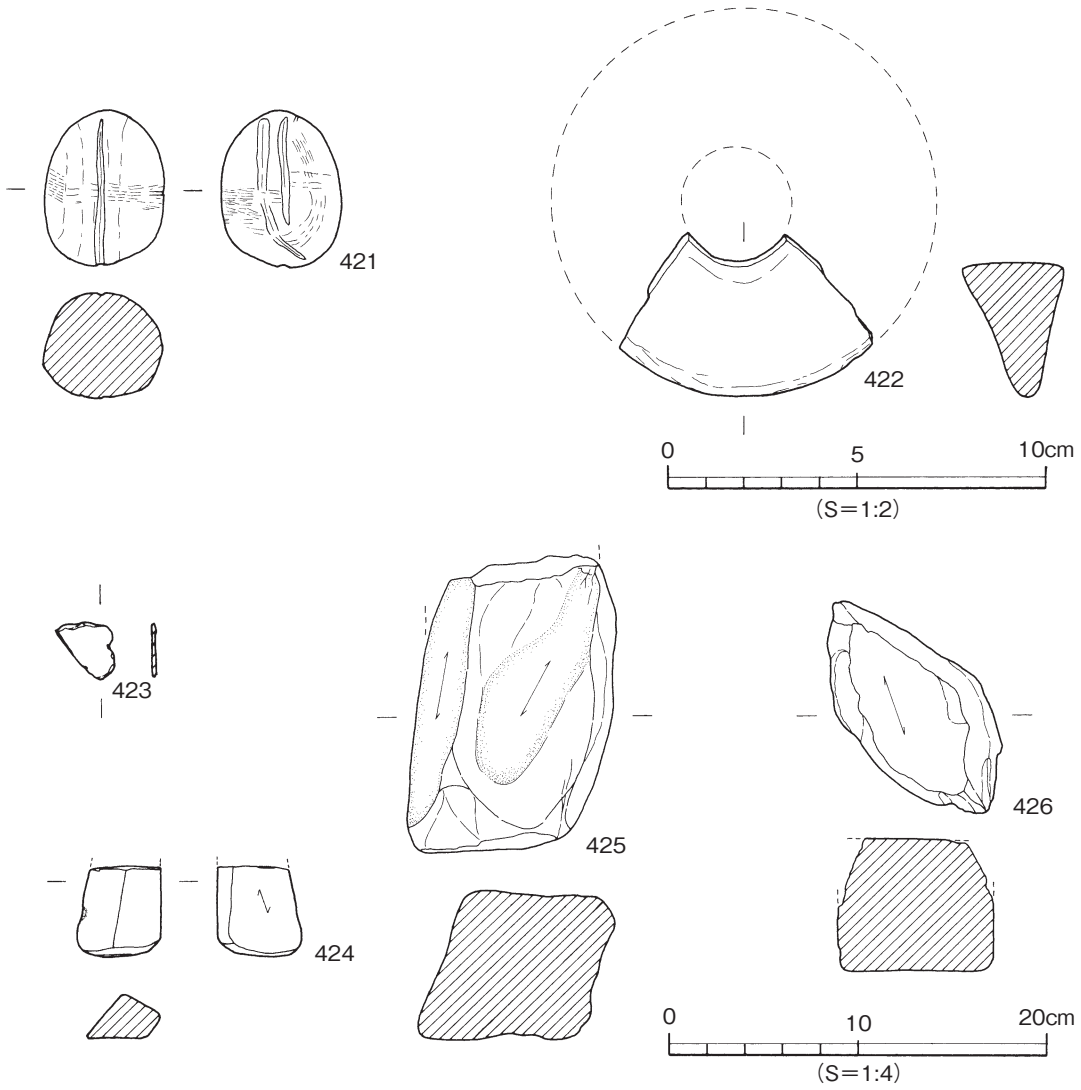
417の脚裾は外に大きく開く。脚柱には円孔が施される。外面の調整はハケ目調整である。内面はナデ調整である。

皮袋形土製品（418）

418は中央部の土器群とは離れた、住居南西部の貼床上面で検出した。突出した両側の片方に円孔が穿たれる。底部は丸みをもってやや突出する。不安定な底部である。

ミニチュア土製品（419・420）

419は鉢形を呈し、420は支脚形を呈する。



第 103 図　SB201 出土遺物実測図(10)

石製品（421 ～ 426）

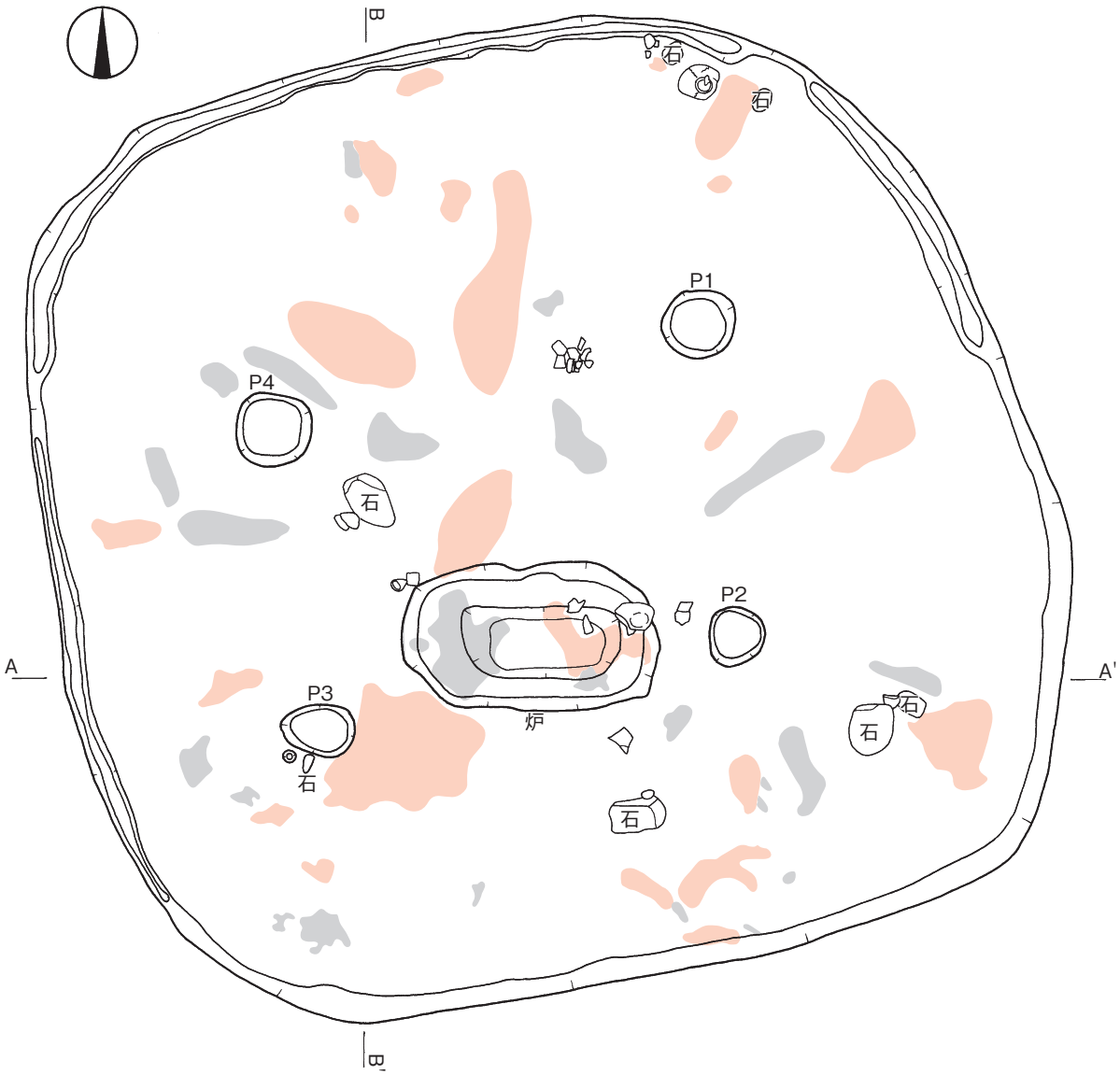
421 は石錘である。重さ 42.26g を測る。422 は環状石斧の破損品。全体が丁寧に研磨される。423 は石包丁の破損品。424 ～ 426 は砥石である。424 の色調は白色を呈する。

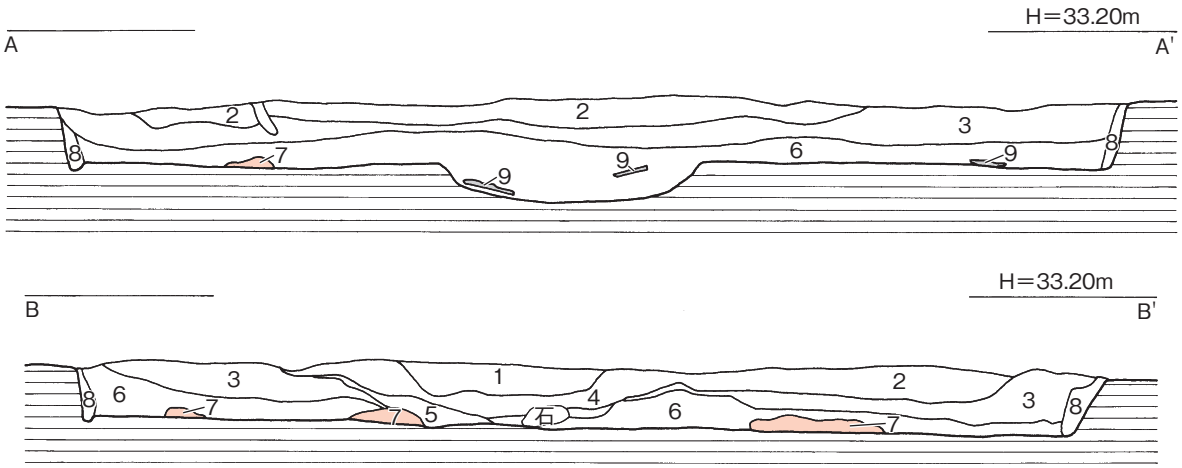
時期　出土遺物より弥生時代後期後葉。

SB202（第 104 図～第 106 図）

調査区の西側、第Ⅴ層の黒色土上面で検出した。平面形態は隅丸方形を呈する。検出規模は一辺 4.60m、壁高 0.27m ～ 0.38m を測る。屋内施設には主柱穴、炉址、周壁溝をもつ。貼り床は検出しなかった。このほか焼土、炭化物を住居の埋土中で検出した。埋土中には、拳大の自然石が SB202 の埋土と比較して多くみられた。

主柱穴は P1 ～ P4 までの 4 本を検出した。平面形は円形ないし楕円形を呈する。規模は直径 0.32m ～ 0.41m、深さ 0.45m ～ 0.60m を測る。柱穴間は 1.76m ～ 2.60m を測る。東西方向の柱間が広くなる。柱痕跡は P1 ～ P4 で検出した。平面形は円形を呈する。規模は直径 0.16m ～ 0.20m を測る。

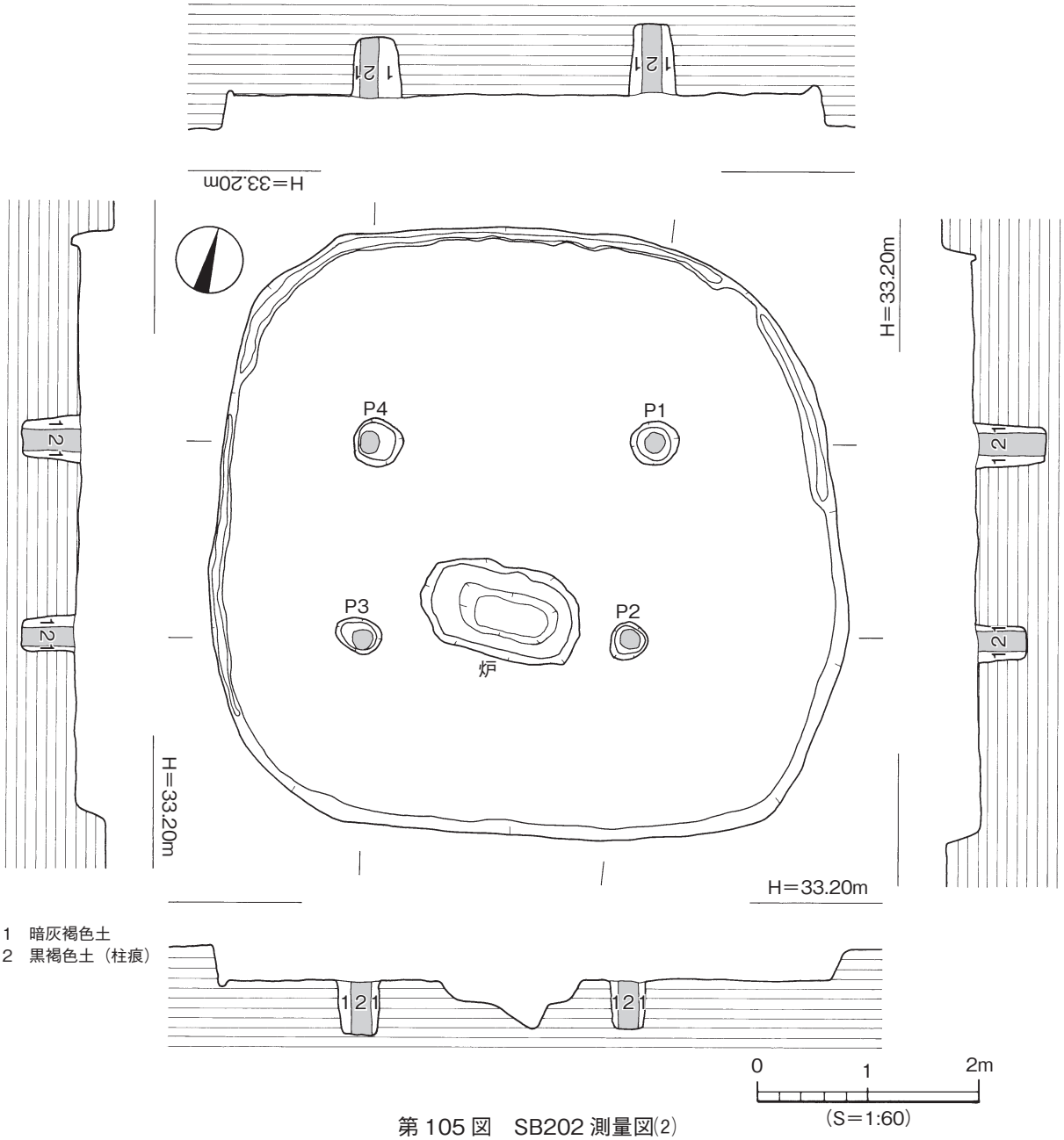




1　黒褐色土
2　黒灰色粘質土
3　灰褐色土（炭混じる）
4　暗灰褐色土（炭・焼土混じる）
5　黒色粘質土（炭・焼土混じる）
6　灰黄褐色土（炭・焼土混じる）
7　焼土
8　黒灰色土
9　炭

0　1　2m
（S＝1:40）

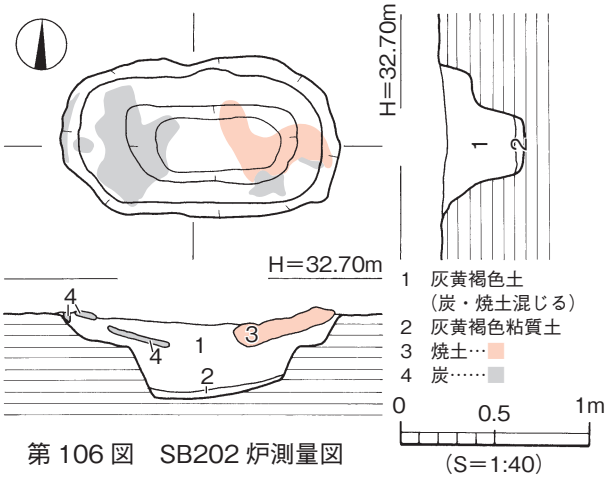
第 104 図　SB202 測量図(1)



第 105 図　SB202 測量図(2)

周壁溝は、西壁と北壁から東壁の北半部にかけて検出した。東壁の南半部と南壁にはみられない。検出規模は幅 0.08m ～ 0.20m、深さ 0.06m ～ 0.10m を測る。

炉址（第 106 図）は、住居中央部の南側で検出した。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈する。掘り方は２段掘りとなり、中央部が深くなる。検出規模は長軸 1.46m、短軸 0.80m、深さ 0.41m を測る。埋土は、炭や焼土が混じる灰黄褐色土である。



第 106 図　SB202 炉測量図

遺物は、住居検出面から基底面まで土器、石器が出土している。

出土遺物（第107図～第111図）

甕形土器（427～441）

427は外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。胴部外面はハケ目調整、内面は指頭痕を残す。428は肩部の張りが弱い。口縁部は外傾して外上方に開く。口縁端部は丸みをおびた面をもつ。胴部は内外面ともハケ目調整が施される。429、430は外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。口縁部、胴部とも内外面はハケ目調整が施される。431は肩部の張りが弱い。口縁部はやや外反する。内外面ともハケ目調整が施される。432は外反する口縁部。端部は面をもつ。内外面ともナデ調整が施される。433は外反する口縁部。端部は面をもつ。内外面ともハケ目調整が施される。434はやや外反する口縁部。端部は下方に肥厚する。内外面ともハケ目調整が施される。435の口縁部は外反して端部近くでやや内湾する。端部は面をもつ。内外面ともハケ目調整のち、ナデ調整が施される。436は緩やかに外反する口縁部。端部は面をもつ。調整は磨滅のため不明。437は外反する口縁部。口縁端部は下方に肥厚し面をもつ。外面はナデ調整、内面はハケ目調整が施される。438の口縁部は外傾し上方にのびる。端部は先細り気味に丸くなる。内外面ともハケ目調整が施される。439は丸みのある平底の底部。外面はハケ目調整が施される。440はやや丸みのある不安定な底部。441は小さな上げ底の底部。内外面ともナデ調整である。底部外面に指頭痕を残す。

蓋形土器（442）

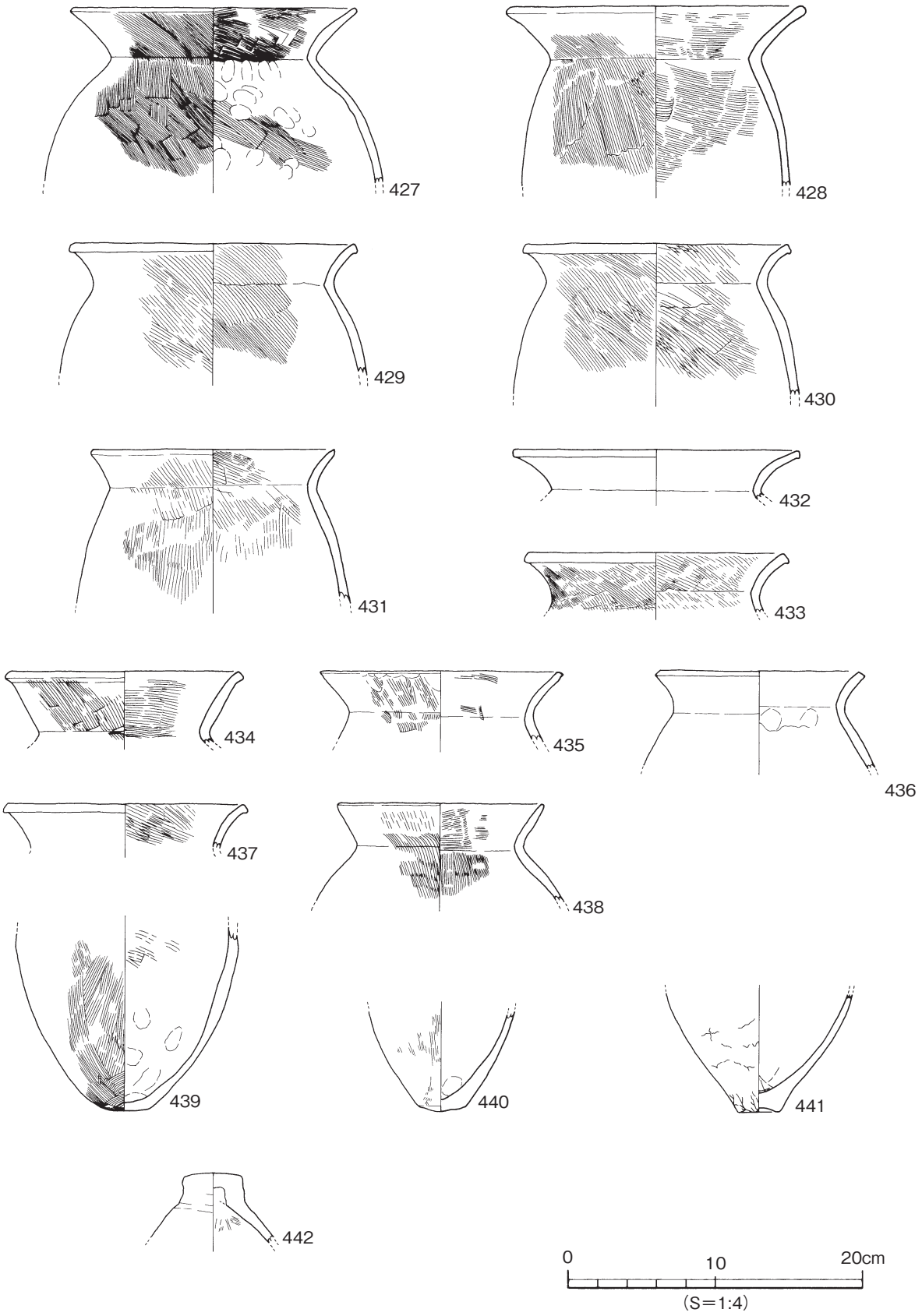
442は蓋形土器と考えられる。内面の天井部は工具痕を残して凹む。

壺形土器（443～457）

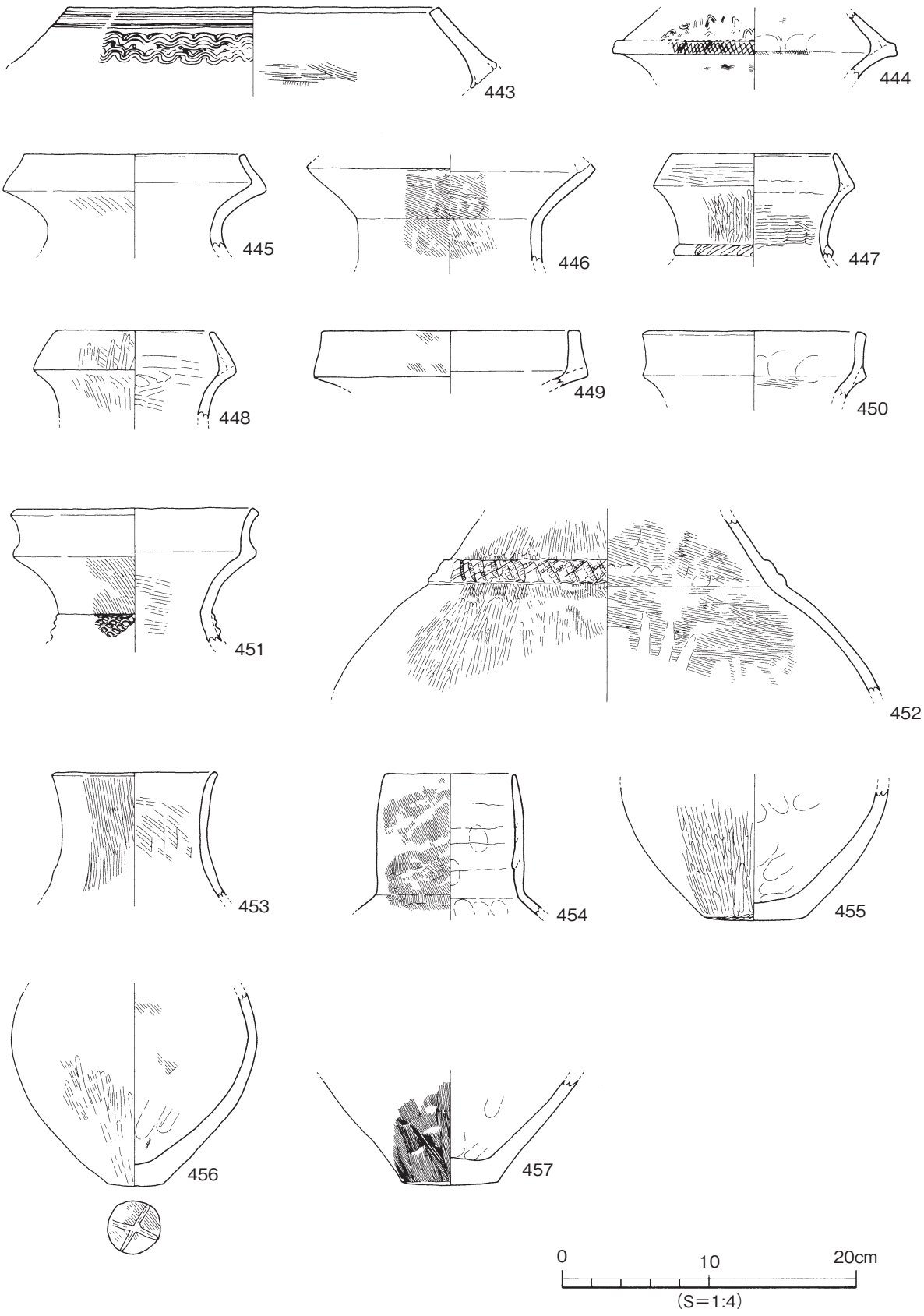
443～451は複合口縁壺である。443は口縁拡張部片。口縁端部は内傾する面をもつ。口縁端部の外面直下に7条の沈線文を巡らし、沈線文の下に波状文を施す。444は口縁接合部外面に刻目を施す。口縁部には波状文と半裁竹管文を施す。445は外反する頸部。拡張部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸い。446は頸部が直立する。内外面ともハケ目調整を施す。447は頸部に刻目突帯を施す。頸部は外反して立ち上がり、口縁拡張部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸みをおびた面をもつ。頸部外面はヘラミガキが施される。448の口縁拡張部はやや内湾して立ち上がる。口縁端部は丸みをおびた面をもつ。拡張部外面はヘラミガキが施される。449は拡張部が短く直立して立ち上がる。端部は面をもつ。450の口縁拡張部は直立する。端部は外傾する面をもつ。451の口縁拡張部は外反して短く上方に立ち上がる。口縁端部は外傾する面をもつ。頸部には刻目突帯を施す。452は大型品。頸部に刻目突帯を施す。外面の頸部から肩部にかけてヘラミガキが施される。453、454は長頸壺。453の頸部は内傾して上方に立ち上がる。口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は面をもつ。内外面ともハケ目調整が施される。454は直口して立ち上がる口縁部。端部は丸くおさめる。外面はハケ目調整、内面はナデ調整を施す。内面に粘土紐の巻き上げ痕を残す。455は平底の底部。外面はヘラミガキが施される。456は底部に「×」印がヘラ状工具によって線刻される。胴下半はヘラミガキが施される。457は平底の底部。外面はハケ目調整が施される。

鉢形土器（458～467）

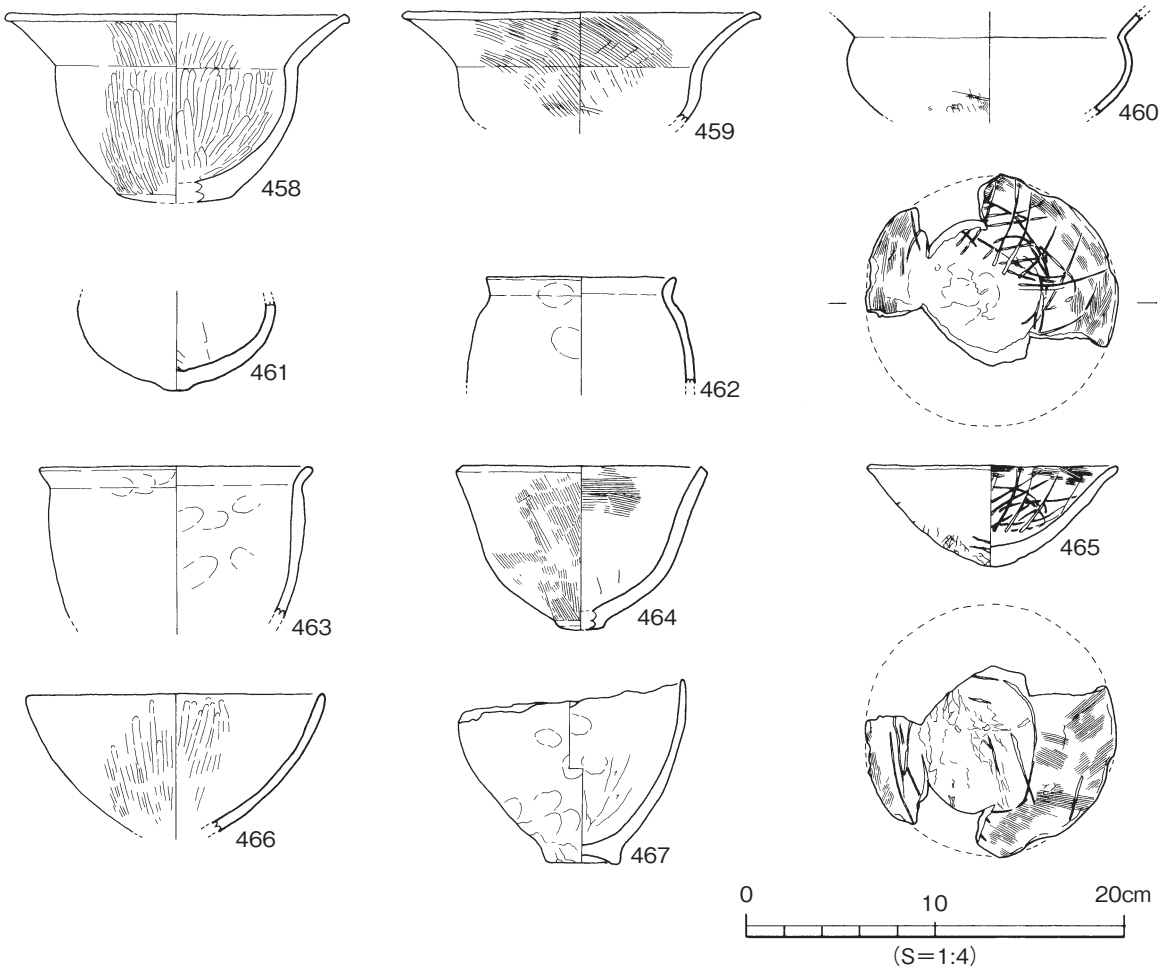
458～463は屈曲する口縁部。458は外反する口縁部。端部は面をもつ。内外面ともヘラミガキが施される。459は外反する口縁部。内外面ともハケ目調整が施される。460の口縁部は稜をもって屈曲する。461はボタン状に小さく突出する底部。462は内湾する頸部から、口縁部は外傾し短く上方に立ち上がる。内外面ともナデ調整が施される。463は短く外反する口縁部。端部は丸くおさめ



第 107 図　SB202 出土遺物実測図(1)



第108図　SB202出土遺物実測図(2)



第 109 図　SB202 出土遺物実測図(3)

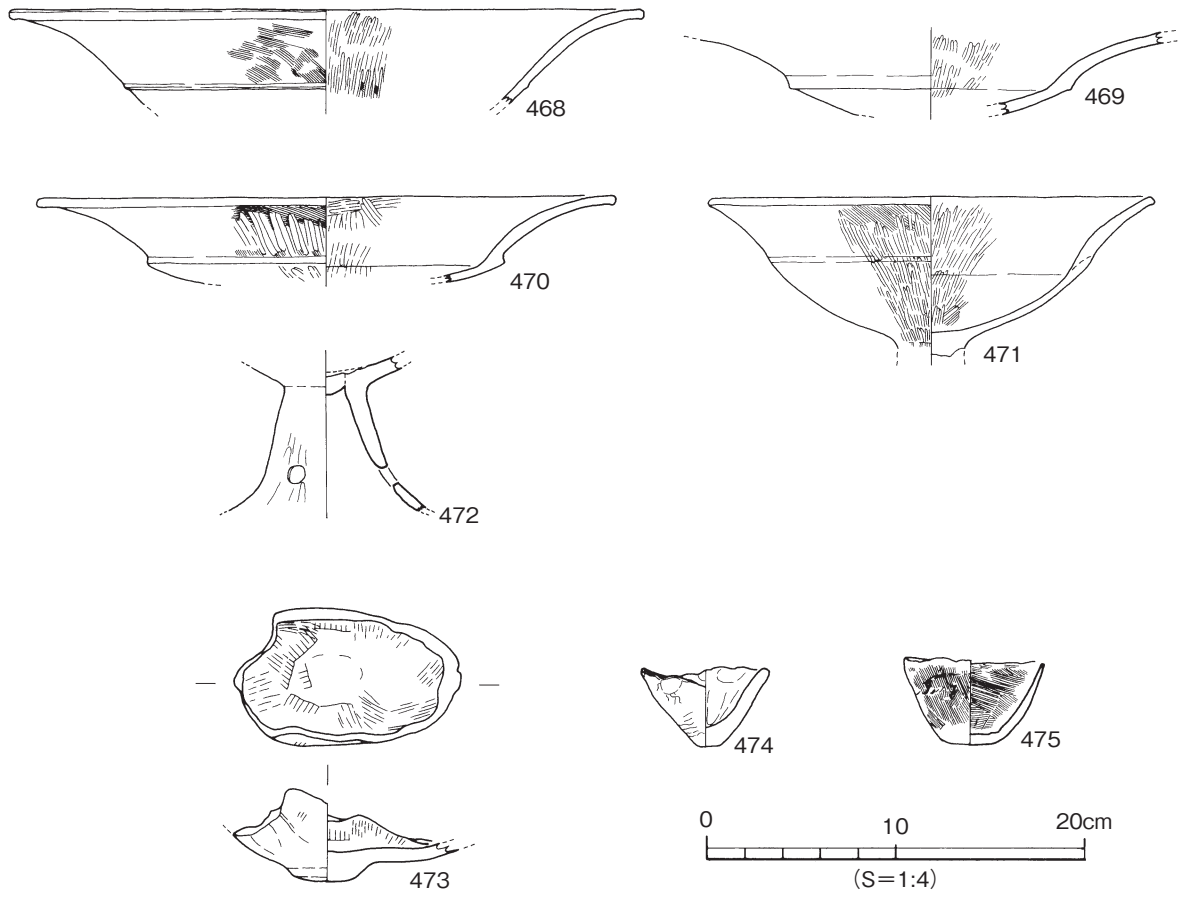
る。内外面ともナデ調整が施される。口縁部外面、胴部内面に指頭痕を残す。464 ～ 467 は直口口縁。464 の口縁端部は面をもつ。底部は小さく突出する。内外面ともハケ目調整が施される。465 の底部はやや突出した丸い底部。内面と外面にヘラ状工具により内容不明の線刻が施される。調整は内外面ともハケ目調整のちナデ調整である。466 は口縁端部を丸くおさめる。内外面はヘラミガキが施される。467 の底部は小さな上げ底となる。内外面ともナデ調整が施されるが指頭痕を残す。

高坏形土器（468 ～ 472）

468 は外反する口縁部。端部は面をもつ。外面はハケ目調整、内面はヘラミガキが施される。469 は有段部の破片。大きく開く口縁部に浅い坏部である。内面はヘラミガキが施される。470 は大きく開く口縁部。口縁端部は面をもつ。浅い坏部。内外面ともヘラミガキが施される。471 は坏部が深い。口縁接合部はなだらかな稜をもって外反する。口縁端部は面をもつ。内外面ともヘラミガキ調整が施される。472 は脚と坏の接合部片。脚柱には円孔が穿たれる。外面はヘラミガキが施される。内面はナデ調整である。

皮袋形土製品（473）

473 は皮袋形土製品の下部片である。SB201 出土の皮袋形土製品に似る。底部は、小さな突出する不安定な底部である。内面はハケ目調整が施される。



第 110 図　SB202 出土遺物実測図(4)

ミニチュア土製品（474・475）

474、475 は鉢形を呈する。474 は小さな不安定な底部である。475 は平底である。内外面ともハケ目調整が施される。

石製品（476 ～ 484）

476、477 は石包丁。476 は未製品である。材質は緑色片岩。477 の刃部は両面から研がれる。両側に抉りが施される。材質は緑色片岩。478 はサヌカイト製の石鏃。479 は砂岩製の砥石である。480 は緑色片岩の剥片である。481 ～ 483 は作業台と考えられる。いずれも花崗岩製である。484 は砂岩製の敲石である。両端に使用痕跡をもつ。

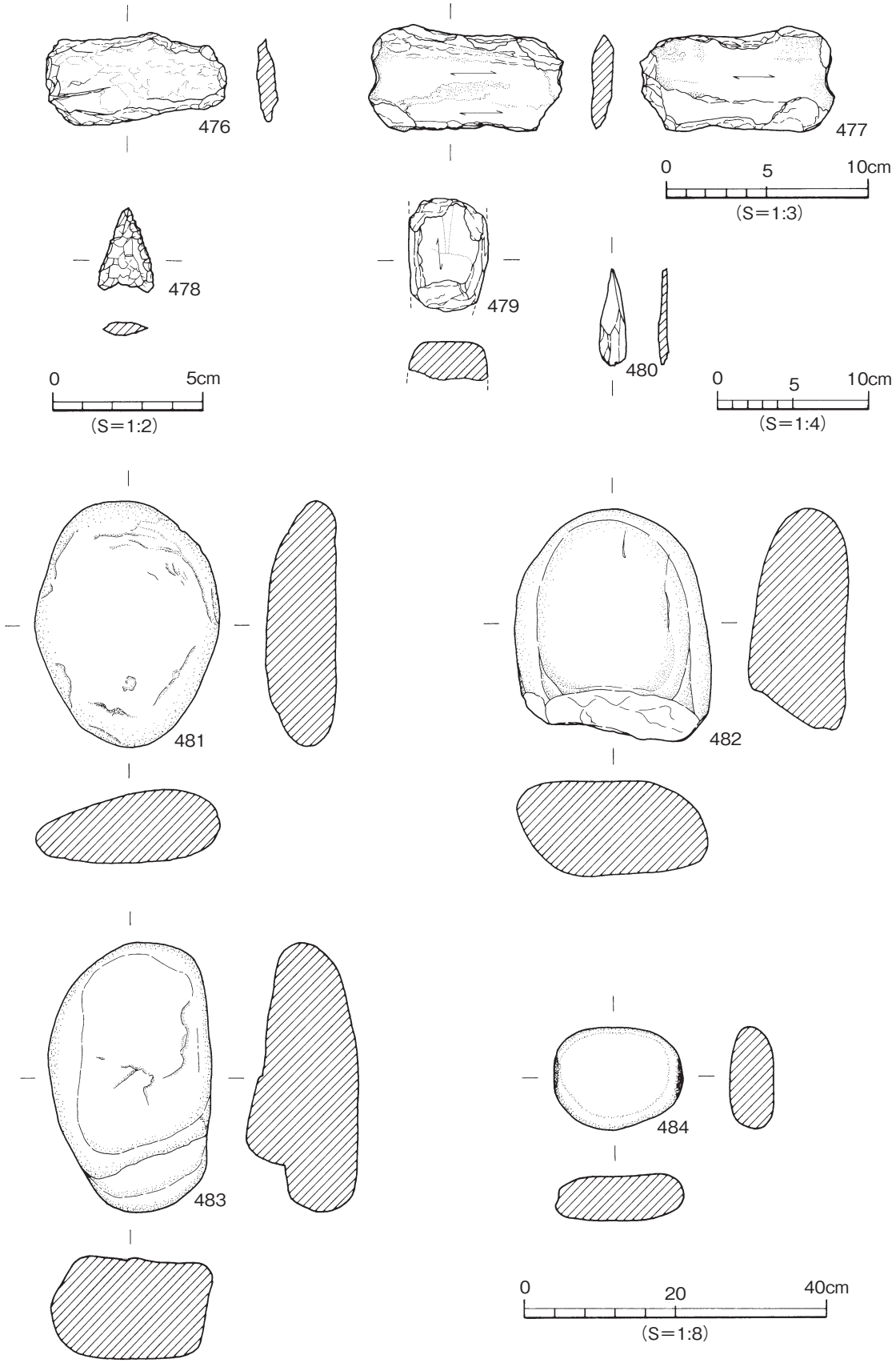
時期　出土遺物より弥生時代後期後葉。

その他の遺構・遺物

調査区の東側、第Ⅶ層上面で柱穴 3 基を検出した。埋土は黒褐色土で、SB201 の埋土色に似る。本来は第Ⅴ層以上から掘られたものである。出土遺物は無く時期は不明である。

4. 小結

2 区の調査では、弥生時代後期後葉の竪穴式住居址 2 棟を検出した。検出した竪穴式住居址は、住



第 111 図　SB202 出土遺物実測図(5)

居構造と遺物出土状況に共通点と相違点がみられた。構造上の共通点は①主柱穴が4本である。②炉が中央より南側にある。③周壁溝を伴う。④平面形が隅丸方形を呈する。⑤住居軸線が北西方向となる。相違点は① SB201は張り出し部をもつ。② SB201は貼床をもち、SB202は貼床をもたない。③炉の形態に差が認められる。遺物出土状況の共通点は①住居内には焼土と炭化材がある。②皮袋形土製品が出土している。相違点は① SB201は多量の土器が集中して出土する。② SB202の埋土には拳大の自然石が多く含まれる。③ SB202からは作業台と考えられる台石が多く出土した。などである。同時期の竪穴式住居において、構造と遺物出土状況の共通点と相違点をみいだせた。

SB201で出土した土器群は、出土器種に量的な違いがみられた。最も多く出土した器種は甕形土器であった。次いで壺形土器、鉢形土器であり、この三器種で多数をしめた。高坏形土器、器台の出土は僅かであった。支脚は、ミニチュア土製品として1点出土するのみであった。これら土器群の出土状況は住居貼床や基底面より浮いた状態での出土状況より、住居廃絶後に廃棄された可能性が高いものと考える。出土品は、ほぼ完形に復元できる個体が多かったことから、短期間もしくは一括投棄されたものと考えられる。

周辺の遺跡で同時期の住居内に土器を廃棄する例としては、調査地の西方約700mにある中村松田遺跡のSB4がある。このSB4からは多量の土器とともに鳥形土製品とも皮袋形土製品ともいわれる土製品が1点出土しており、SB201の遺物内容に類似している。

今回検出した2棟の住居は、松山平野の弥生時代後期後葉の住居形態や土器廃棄形態を研究する上で貴重な資料となるものであった。また、SB201で検出した焼土の性格の解明はできなかったが、枝松遺跡の東にある束本遺跡においても住居内から多量の焼土が検出された住居があり、これらも含めて住居内に残された焼土の性格について検討しなければならない。

遺物観察表　－凡例－

⑴以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。

遺物観察表は相原浩二、岩本美保、佐伯利枝、村上真由美が作成した。

⑵遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～3）→「1～3㎜の石粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表47　SB201出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面) (内面)			
353	甕	口径 23.0 底径 47.0 器高 5.7	口縁端部は面をもち、ナデにより凹む。底部は平底。	[口]→ナデ [胴下][底]ナデ [胴]ハケ(7本/cm)	[口]マメツ [肩]指ナデ(指頭痕あり) [胴]ハケ(7本/cm)	橙・黒褐色 にぶい橙色	石・長(1～4) 金 ◎		31
354	甕	口径 18.6 底径 (4.4) 器高 35.4	内面で稜をもって外反する口縁部。口縁端部は面をもち強いナデにより凹む。	[口端][胴底]ナデ [胴]ハケ(9本/cm)→ナデ	[口底]ハケ(9本/cm)→ナデ [胴下]ナデ	にぶい橙・褐灰色 にぶい橙・橙色	石・長(1～3) 金 ◎		31
355	甕	口径 20.5～21.2 底径 5.0 器高 (38.4)	外反する口縁部。口縁端部は丸みをおびた面をもつ。	[口]ヨコナデ (工具による)ナデ	[口][頸]ヨコナデ [胴底]ナデ [底](指頭痕あり)	橙・にぶい黄橙色 黄橙・浅黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
356	甕	口径 18.8 底径 4.0 器高 29.6	ゆるやかに外傾する口縁部。端部は若干先細りながら丸く面をもつ。底部は丸みをもった平底。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(6～8本/cm) [胴]タタキ→ハケ(6～8本/cm)	[口胴]ハケ(6～8本/cm) [底]ナデ(指頭痕あり)	橙・灰褐色 橙・灰褐色	石・長(1～4) 金 ◎		31
357	甕	口径(19.5) 底径 (3.8) 器高 28.0	わずかに外反する口縁部。端部は面をもつ。底部は小さな平底。	[口端][底]ナデ [口][胴]ハケ(9本/cm)→ナデ	ハケ(5本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	にぶい橙色 灰褐色	石・長(1～4) 金 ◎	煤付着	32
358	甕	口径 18.1 底径 (4.5) 器高 27.5	外反する口縁部。端部は面をもつ。底部は平底。	[口端][底]ナデ(指頭痕あり) ハケ(7～8本/cm)→ナデ	ハケ(6～8本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	橙色 明黄褐色	石・長(1～6) 金 ◎	黒斑	32
359	甕	口径 16.6 底径 2.8 器高 28.3	外反気味する口縁部。端部はナデにより面をもつ。底部は小さな平底。	マメツ [口端][底]ナデ [口][胴上]ハケ(7～8本/cm)→ナデ	ナデ・ハケ(6～9本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	灰褐色 にぶい橙色	石・長(1～4) 金 ◎	煤付着	31
360	甕	口径 18.2 底径 3.5 器高 25.9	外反気味にたちあがる口縁部。底部は小さな平底。	[口端][底]ナデ [口][胴]ハケ(8本/cm)→ナデ [胴下]タタキ→ハケ(8本/cm)→ナデ	ナデ・ハケ(6～8本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1～5) 金 ◎		32
361	甕	口径(17.6) 底径 (3.6) 器高 25.0	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端][底]ナデ [口胴]ハケ(6～7本/cm)→ナデ	[口][胴上]ハケ(6本/cm)→ナデ [胴下]ハケ(6本/cm)→指ナデ	橙・灰褐色 橙・褐灰色	石・長(1～5) 金 ◎		32
362	甕	口径 16.9 底径 3.0 器高 24.4	外傾する口縁部。端部の調整は粗い。	[口端]ナデ [口][胴上]ハケ(7本/cm) [胴中]ケズリ	[口]ハケ(7～8本/cm) [胴上]ハケ(7本/cm) [胴下]ナデ(指頭痕あり)	橙・褐灰色 橙・褐灰色	石・長(1～6) 金 ◎		32
363	甕	口径(16.2) 底径 2.7 器高 25.5	外反する口縁部。肩部の張りは弱い。	[口胴]ハケ(7本/cm)→ナデ [底]ナデ	ハケ(5～7本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	33
364	甕	口径(15.4) 底径 3.8 器高 28.3	やや外傾する口縁部。端部は面をもつ。平底の底部。	[口][底]ナデ [口胴]ハケ(9本/cm)→ナデ	[口]ハケ(9本/cm)→ナデ [胴上]ハケ(9本/cm)→ナデ [胴下]ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		33
365	甕	口径(17.3) 残高 21.6	外傾する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口胴]ハケ(7本/cm)	[口]ハケ(7本/cm) [胴]ハケ(6～7本/cm) [胴下]ナデ	浅黄橙・灰褐・黒色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
366	甕	口径 15.4 底径 4.6 器高 28.8	ゆるやかに外反する口縁部。端部はナデにより面をもつ。底部は不安定な平底。	[口端][底]ナデ [口胴]ハケ(8本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	黄橙色 橙色	石・長(1～3) 石粒(12)・金 ◎	煤付着	33
367	甕	口径 17.7 底径 3.6 器高 25.5	全体が歪む。口縁部はわずかに外反する。底部は平底。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(7本/cm)→ヨコナデ[胴]ハケ(7本/cm[底]ナデ	[口胴]ハケ(6～7本/cm) [胴底]ナデ(指頭痕あり)	にぶい橙・黒褐色 橙・黒褐色	石・長(1～4) ◎		33
368	甕	口径(16.2) 残高 12.0	外反する口縁部。口縁端部は面をもちやや下方に肥厚する。	[口端]ナデ [口胴]ハケ(9本/cm)→ナデ(工具痕顕著)	[口]ハケ(9本/cm)→ナデ [胴]ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～4)多 金 ○		
369	甕	口径(19.5) 残高 11.2	大きく外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ヨコナデ [口]ナデ(指頭痕あり) [胴]ハケ(8本/cm)	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ○		
370	甕	口径(14.0) 底径 (2.6) 器高 18.9	外傾してやや先細りながらたちあがる口縁部。底部は小さな平底。	[口端][底]ナデ [口][胴上]ハケ(8本/cm) [胴中][胴下]タタキ→ハケ(8本/cm)	[口底]ハケ(6～8本/cm) [胴下]ナデ(指頭痕あり)	橙・にぶい褐色 明黄褐・黒色	石・長(1～3) 金 ◎		
371	甕	口径 14.6 底径 3.5 器高20.75	外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。	[口]ヨコナデ [胴](工具による)ナデ [底]マメツ	ハケ(8本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長(1～3) 金 ◎		33
372	甕	口径(17.9) 残高 14.8	やや内湾してたちあがる口縁部。端部はナデにより面をもつ。	[口端]ナデ [口胴]ハケ(9本/cm)→ナデ [胴下]ヘラケズリ	ハケ(5～9本/cm)→ナデ	浅黄橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
373	甕	口径(14.1) 残高 16.2	外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口胴]ハケ(7～8本/cm) [胴下]ヘラケズリ	[口]ハケ(8本/cm) [胴]ハケ(5～10本/cm)	にぶい黄橙・橙色 にぶい黄褐・褐灰色	石・長(1～5) 褐色粒・金 ◎		
374	甕	口径 13.8 底径 (4.5) 器高 14.6	小型品。口縁端部はナデにより面をもつ。	[口]ナデ [胴底]ハケ(7～9本/cm)→ナデ	ハケ(7～9本/cm)→ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	33
375	甕	口径(15.1) 残高 17.8	外反する口縁部。胴部はハクリが多い。	[口端]ナデ [口胴]ハケ(7本/cm)	[口]ハケ(7本/cm) [胴]ハケ(8本/cm) (指頭痕あり)	橙・灰白・黒褐色 橙・灰黄褐色	石・長(1～4) 金 ◎		
376	甕	口径(14.0) 残高 6.7	口縁端部は上方にやや肥厚する。	[口端]ナデ [口胴]ハケ(15本/cm)→ナデ	[口]ハケ(15本/cm)→ナデ [胴]ナデ	灰黄褐・にぶい褐色 橙色	石・長(1～7) 金 ◎		
377	甕	口径(16.2) 残高 6.5	口縁部はゆるやかに外反する。端部は先細りで丸い。胴部の張りは弱い。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	橙・灰褐色 橙色	石・長(1～3) ◎		
378	甕	口径 18.4 残高 18.9	外反して短くたちあがる口縁部。端部は「コ」の字状を呈する。胴部の器壁が薄い。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(9本/cm)→ナデ	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(9本/cm)→ナデ	黄橙色 黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	

表48　SB201出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
379	甕	口径(16.4) 残高 24.1	口縁端部は上方に肥厚する。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(8本/cm)	[口][頸]ナデ(指頭痕あり) [胴]ヘラケズリ	橙・黒色 橙・灰黄褐色	石・長(1～6) 褐色粒 ◎		
380	甕	底径　4.0 残高 24.4	長胴の胴部。底部は平底。	マメツ [胴上][胴中]ハケ(7本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	明赤褐色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
381	甕	底径 (3.5) 残高 18.9	小さい平底。胴部は底部より内湾気味にたちあがる。	[胴]ハケ(5～6本/cm)→ナデ [底]ナデ	[胴](工具による)ケズリ [底]ナデ(指頭痕あり)	にぶい橙・赤橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 石粒(5) ◎		
382	甕	底径　4.8 残高 18.7	底部は平底。	[胴]ハケ(6～7本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ	褐灰色 橙色	石・長(1～5) 金 ◎		
383	甕	底径 (4.6) 残高 13.6	底部より内湾気味にたちあがる。内面はきれいにナデられている。	(工具による)ナデ [底]ナデ	ナデ	にぶい橙・褐灰色 橙・黒褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
384	壺	口径(17.3) 残高 52.2	複合口縁。口縁端部は丸みをおびた面をもつ。頸部に刻目突帯が巡る。	ハケ(8本/cm)	[拡][胴底]ナデ [口]ハケ(8本/cm) [胴]ハケ(5～8本/cm)	橙・灰褐色 にぶい褐色	石・長(1～3) 金 ◎		34
385	壺	口径 12.9 底径　5.1 器高 43.7	複合口縁。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は面をもつ。頸部外面に斜格子状の刻目突帯が巡る。	ハケ(8本/cm)→ナデ	[口端][拡]ナデ(指頭痕あり) ハケ(8本/cm)→ナデ(板状工具痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		34
386	壺	口径(15.4) 底径 45.2 器高　6.6	複合口縁。拡張部に波状文と頸部に刻目突帯が施されている。口縁端部は強いナデにより1条の沈線がある。	[拡]ハケ→施文 [口端][底]ナデ [口胴]ハケ(10本/cm)	[拡][底][肩]ナデ(指頭痕あり) [口胴]ハケ(10本/cm)	黄橙・橙・黒色 黄橙・明黄褐色	石・長(1～10) 金 ◎		34
387	壺	口径(18.0) 底径　7.8 器高 40.2	複合口縁。口縁端部は面をもつ。拡張部に波状文が巡る。	[拡]ナデ→施文 ハケ(9本/cm)→ナデ	マメツ[拡]ナデ [口]ハケ(9本/cm)→ナデ	橙色 灰色	石・長(1～4) 褐色粒 ◎	黒斑	34
388	壺	口径 19.0 底径 (5.1) 器高39.95	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。頸部に刻目突帯を施す。	[口]ヨコナデ [胴下][底]ナデ ハケ(10本/cm)→ナデ(工具痕あり)	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(10本/cm)→ナデ	橙・褐灰色 橙・にぶい橙色	石・長(1～4) ◎		35
389	壺	口径(11.7) 残高 31.5	複合口縁。口縁拡張部は内傾して上方にたちあがる。	[口]ヨコナデ [胴]ミガキ(マメツ顕著)	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(8本/cm)→ナデ	橙色 橙・褐灰色	石・長(1～4) ◎		35
390	壺	口径(21.4) 残高　6.1	口縁拡張部に沈線と波状文、接合部外面に半載竹管文を施す。	[拡]ヨコナデ→施文 [口]ハケ(7本/cm)	ヨコナデ(指頭痕あり)	にぶい橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
391	壺	口径(21.5) 残高　9.1	複合口縁。頸部に斜格子状の貼付突帯を施す。	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(15本/cm)→ナデ	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(15本/cm)→ナデ	明褐色 橙・褐灰色	石・長(1～3) 金 ◎		
392	壺	残高　5.2	複合口縁。口縁拡張部が欠損する。	[拡端]ヨコナデ [口]ハケ(4～5本/cm)	ハケ(4～5本/cm)	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
393	壺	口径　9.8 残高　6.0	複合口縁。内傾する頸部。口縁拡張部は内傾する。	[拡端]ヨコナデ [拡肩]ハケ(9本/cm)→ナデ	[拡][肩]ナデ(指頭痕あり) [口]ハケ(9本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	35
394	壺	残高 13.7	長頸壺。頸部に沈線文が施されている。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～3) ○		
395	壺	底径　1.5 残高 11.9	ボタン状の底部。頸部上段から8条の沈線、6条の沈線、半載竹管文が2列施されている。	[頸][底]ナデ [胴]ハケ(10本/cm)→ミガキ	[頸]ハケ(6～10本/cm)→ナデ [胴]ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	35
396	壺	底径　2.3 残高　9.4	突出する小さな底部。頸部に8～10条の沈線が巡る。	ミガキ	[頸]ヨコナデ [胴]ハケ(9本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	35
397	壺	底径　3.5 残高 28.5	長頸壺。頸部は外反気味にたちあがる。底部はやや丸みがある平底。	[頸][肩]ミガキ [胴上]ハケ(8本/cm)→ミガキ [胴下]ハケ(8本/cm) [底]ナデ	[頸]ハケ(9本/cm)→指ナデ [胴]ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～6) 金 ◎	黒斑	35
398	壺	口径　(9.1) 残高 19.9	無頸壺。短く外傾する口縁部。口縁端部は丸い。	[胴上]ナデ(指頭痕あり) [胴下]ハケ(9本/cm)	[胴上]ナデ(指頭痕顕著) [胴下]ナデ上げ	橙色 橙・褐灰色	石・長(1～4) 金 ◎		
399	壺	底径　3.6 残高　7.8	平底。内湾してたちあがる胴部。	[胴]ハケ(10本/cm)→ナデ [底]ナデ(指頭痕あり)	ナデ(工具痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
400	壺	残高　3.2	胴部片。外面に線刻を施す。	マメツ	ハケ(4本/cm)	褐灰色 灰黄褐色	石・長(1～2) ◎		35
401	鉢	口径(24.1) 底径　7.6 器高 24.2	外傾して外上方にのびる口縁部。口縁端部はナデ凹む。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(10本/cm)(一部マメツ) [底]ナデ	[口]ハケ(10本/cm) [胴]ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～5) ◎		36
402	鉢	口径(24.9) 底径　7.5 器高 15.2	屈曲して外上方にのびる口縁部。底部は平底。	[口端]ヨコナデ [底](工具による)ナデ ハケ(12本/cm) [口]→ナデ	[口]ハケ(10本/cm)→ミガキ(指頭痕あり) [胴]ミガキ(工具痕あり)	橙・黒色 橙・黒色	石・長(1～5) ◎		36
403	鉢	口径(20.5) 底径 (6.8) 器高　9.5	屈曲する口縁部。底部は平底。	[口端][底]ナデ [胴]ハケ(9本/cm)→ナデ	[口][胴上]ハケ(9本/cm)[胴下]ハケ(4本/cm)→ナデ[底]ナデ(指頭痕あり)	橙色 にぶい橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
404	鉢	口径 11.8 底径　2.8 器高　9.3	外傾する口縁。口縁端部は丸い。丸みをおびた平底の底部。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(7本/cm) [底]ナデ	[口]ヨコナデ [胴上](工具による)ナデ [胴下]ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎	黒斑	36

表49　SB201出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
405	鉢	口径 13.4 底径 4.2 器高 5.4	台付鉢。水平にのびる口縁部。端部は丸い。	[口][高台][底]ナデ [体](工具による)ナデ→指ナデ(指頭痕あり)	[口]ナデ [体 底]ハケ(8本/cm)→ナデ	にぶい橙・褐灰色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) ○	黒斑	36
406	鉢	口径 14.4 底径 4.4 器高 9.1	内湾気味にたちあがる直口口縁。底部は凹み不安定。	ナデ(指頭痕あり)	ハケ(6本/cm)→ナデ(板状工具痕あり)	にぶい褐色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		36
407	鉢	口径(10.7) 底径 4.4 器高 11.4	平底。やや内湾してたちあがる直口口縁。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		36
408	鉢	口径 (9.2) 底径 2.6 器高 6.3	平底の底部。底部より外傾してたちあがる。口縁端部は丸い。	ナデ(指頭痕あり)	ハケ(8本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
409	鉢	口径(26.2) 底径 2.3 器高13.55	大きく外反する口縁部。端部は丸い。底部は小さく平底。	[口端][底]ナデ [口][胴上]ハケ(8本/cm)→ミガキ [胴下]ミガキ	ミガキ	橙色 橙・黒色	石・長(1～4) 金 ◎		
410	鉢	口径(15.9) 底径 0.9 器高 10.6	外反する口縁部。突出するボタン状の底部。	[口端]ヨコナデ (工具による)ナデ→ミガキ	[口]ヨコナデ (工具による)ナデ	浅黄橙色 橙・浅黄橙・暗灰色	長(1～2) ◎		37
411	鉢	底径 1.2 残高 7.8	扁球形の胴部。突出するボタン状の底部。	[肩]ハケ(10本/cm) [胴]ミガキ [底]ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
412	鉢	口径(13.0) 底径 1.5 器高(11.0)	外反する口縁部。端部はナデにより面をもつ。底部は小さく不安定である。	マメツ [口端]ナデ [胴][底]ミガキ	[口]ナデ [胴]ナデ	浅黄橙色 明褐灰色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
413	鉢	残高 4.1	台付鉢。接合部の破片。	ハケ(9本/cm)→ナデ	[胴]ミガキ [台]ナデ(指頭痕あり)	灰白色 灰白色	石(1～2) ◎		
414	高坏	口径 26.6 底径 16.6 器高20.25	大きく外反する口縁部。端部は丸みをおびた面をもつ。脚部に円孔が3箇所穿たれる。	[口端][裾端]ナデ [体]ハケ(6本/cm)→ヘラミガキ	[坏]ヘラミガキ [脚]ナデ	橙色 橙色	石・長(1～5) ◎		37
415	高坏	口径(11.7) 残高 2.7	外反する口縁部片。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(6本/cm)→ヘラミガキ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
416	高坏	残高 9.8	脚柱に口径1.5cmの円孔が3箇所穿たれているが残存状態から4方向にあったものと思われる。	[坏][脚下]ミガキ [脚上]ハケ(9本/cm)	[坏]ミガキ [脚]ナデ(しぼり痕あり)	明褐色 橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
417	器台	底径(14.4) 残高 8.4	脚全体に14箇所の円孔が残る。	[脚]ハケ(6本/cm)→ナデ [裾端]ヨコナデ	[脚]ナデ [脚裾]ヨコナデ	橙・浅黄橙色 橙色	石・長(1～4) ◎		37
418	皮袋形土製品	口径 7.0 残高 10.4	皮袋状の左右に突出した片方の先端には1か所円孔が穿たれている。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	橙・褐灰色 にぶい黄褐・褐灰色	石・長(1～7) 金 ◎		37
419	ミニチュア	口径 (5.6) 底径 0.8 器高 3.9	鉢形のミニチュア土器。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1～2) ◎	黒斑	37
420	ミニチュア	残高 4.9 ～5.2	柱中央部に径0.5cmの円孔を6方向に穿つ。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ◎	黒斑	37

表50　SB201出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
421	石錘	完形	砂岩	4.1	3.2	2.75	42.26		38
422	環状石斧	1／4弱	花崗岩	10.2	3.0	2.70	77.69		38
423	石包丁	欠損	緑色片岩	3.1	2.8	0.20	2.65		
424	砥石	欠損	砂岩	4.8	3.9	2.30	57.31		
425	砥石	欠損	砂岩	15.0	10.4	7.80	2040		
426	砥石	欠損	砂岩	13.5	8.2	7.00	940		

表51　SB202出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
427	甕	口径(19.4) 残高 11.8	外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口胴]ハケ(10本/cm)	ハケ(10本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	にぶい橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
428	甕	口径(20.4) 残高 12.2	張りの弱い胴部に外傾する口縁部。	[口]ヨコナデ [頸 胴]ハケ(7本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
429	甕	口径(19.6) 残高 8.9	口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部は丸みのある面をもち、下方に肥厚する。	[口端]ナデ [口 胴]ハケ(6本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		
430	甕	口径(18.2) 残高 10.2	外反する口縁部。端部は丸みのある面をもつ。	[口端]ヨコナデ [口 胴]ハケ(6本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	

表52　SB202出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
431	甕	口径(16.6) 残高 10.4	やや外反する口縁部。	[口端]ナデ [口胴]ハケ(4～5本/cm)	ハケ(4～5本/cm)	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
432	甕	口径(19.3) 残高 3.3	大きく外反する口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 明褐色	石・長(1～2) 金・黒 ◎	黒斑	
433	甕	口径(18.0) 残高 4.0	内面に稜をもち外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口肩]ハケ(4～5本/cm)→ナデ	ハケ(4～5本/cm)	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～3) ◎		
434	甕	口径(16.2) 残高 4.8	外反する口縁部。端部は下方に肥厚する。	[口端]ナデ [口]ハケ(7本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
435	甕	口径(16.4) 残高 4.8	外反する口縁部。端部はナデにより面をもつ。	[口端]ナデ [口肩]ハケ(9本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	ハケ→ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) ◎		
436	甕	口径(14.2) 残高 6.5	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	マメツ	マメツ(指頭痕あり)	橙色 褐灰色	石・長(1～3) 黒 ○		
437	甕	口径(16.6) 残高 3.0	外反する口縁部。端部はナデにより面をもち、下方に肥厚する。	ヨコナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	にぶい黄橙・褐灰色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
438	甕	口径(14.0) 残高 6.6	口縁端部は先細り気味に丸い。	[口端]ナデ [口肩]ハケ(7～10本/cm)→ナデ	[口]ハケ(7本/cm)→ナデ [肩]ハケ(10本/cm)→ナデ	明褐色 橙色	石・長(1～4) ◎		
439	甕	底径 3.3 残高 12.5	やや丸みのある底部。	[胴]ハケ(8本/cm)→ナデ [底]ハケ(8本/cm)	ハケ(6本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	橙色 明黄褐・橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
440	甕	底径 2.6～3.2 残高 6.8	不安定な平底の底部。	[胴]ハケ(7本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～6) ◎		
441	甕	底径 2.9 残高 8.0	やや上げ底の小さな底部。	ナデ(指頭痕あり)	板状工具によるナデ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
442	蓋	残高 4.2	内面は工具痕により器面が凹む	ナデ	ハケ(12本/cm)→ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～2) ◎		
443	壺	口径(25.2) 残高 5.3	複合口縁の拡張部片。拡張部外面に上から7条の沈線文、波状文を施す。	ナデ→施文	[口端]ヨコナデ [拡]ハケ(7本/cm)→ヨコナデ	浅黄橙色 橙色	石・長(1～6) ◎		
444	壺	残高 4.6	拡張部に波状文を施す。その下に半截竹管文、接合部端面に斜格子文を施す。	ハケ(9～10本/cm)→ナデ	ハケ(9～10本/cm)→ナデ	明赤褐色 にぶい橙色	石・長(1～4) ◎		
445	壺	口径(14.8) 残高 6.3	複合口縁。無文。口縁端部は丸い。	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(4本/cm) [頸]ナデ	[拡]ヨコナデ ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
446	壺	残高 6.8	複合口縁。頸部より外傾してたちあがる口縁部。	[拡端]ナデ [口頸]ハケ(5～6本/cm)	ハケ(5～6本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
447	壺	口径(11.2) 残高 7.0	複合口縁。頸部に刻目の貼付突帯を施す。	[拡]ハケ(4本/cm)→ナデ [口頸]ヘラミガキ	[拡]ナデ [口]ハケ(4本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) ◎		
448	壺	口径(10.5) 残高 5.9	複合口縁。拡張部は肥厚し、端部は丸みをおびた面をもつ。	[拡]ハケ(3～4本/cm)→ヘラミガキ ハケ(3本/cm)	[拡端]ナデ [拡]工具によるナデ ハケ(3本/cm)→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		
449	壺	口径(17.5) 残高 3.8	複合口縁。口縁拡張部は上方にたちあがる。	[拡端]ヨコナデ [拡]ハケ(7本/cm)→ヨコナデ [口]ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(1～3) 金 ◎		
450	壺	口径(15.2) 残高 4.5	複合口縁。口縁拡張部は上方にたちあがる。	マメツ	[拡]ナデ(指頭痕あり) [口]ハケ(6本/cm)→ナデ	明赤褐色 灰黄褐色	石・長(1～3) ○		
451	壺	口径(16.8) 残高 9.1	複合口縁。口縁部は外反して上方にたちあがる。頸部に貼付突帯に斜格子文を施す。	[拡]ナデ [口]ハケ(6本/cm)→ナデ	[拡]ナデ [口]ハケ(5本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～4) 黒 ◎		
452	壺	残高 11.8	頸部は内傾する。頸部下に刻目突帯を施す。	[頸胴]ハケ(5～6本/cm)→ヘラミガキ [肩]ナデ→施文	[頸]ハケ(4～5本/cm)(指頭痕あり) [胴]ハケ(4～5本/cm)→ナデ	橙・灰褐色 灰褐色	石・長(1～3) 金・黒 ◎		
453	壺	口径(11.2) 残高 8.5	長頸壺。直立にたちあがりわずかに外反する口縁部。端部はナデにより面をもつ。	[口端]ナデ [口頸]ハケ(5本/cm)→ナデ	ハケ(5本/cm)→ナデ	明赤褐色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
454	壺	口径 (8.8) 残高 9.7	長頸壺。直口してたちあがる口縁。口縁付近はやや内傾する。	ハケ(7～8本/cm)→ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
455	壺	底径 (6.8) 残高 8.9	底部より内湾気味にたちあがる胴部。平底の底部。	ヘラミガキ	ナデ(指頭痕あり)	橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
456	壺	底径 3.7 残高 13.2	底部外面に「×」の線刻を施す。	[胴]ハケ(6本/cm)→ミガキ(一部マメツ) [底]ハケ(6本/cm)→施刻	ハケ(6本/cm)→ナデ	橙・にぶい黄橙色 にぶい黄橙・褐灰色	石・長(1～5) ◎	黒斑	

表53　SB202出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
457	壺	底径 6.5 残高 7.1	平底の底部。底部より直線的に上外方向へたちあがる。	[胴]ハケ(14本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	灰黄褐色 褐灰色	石・長(1～5) 金 ◎	黒斑	
458	鉢	口径(18.1) 底径 (6.2) 器高 9.9	外反する口縁部。端部はナデにより面をもつ。底部は丸みのある平底。	[口端]ナデ [口胴]ヘラミガキ [底]ナデ	ヘラミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～6) 金 ◎		
459	鉢	口径(19.0) 残高 5.8	口縁部はゆるやかに外反し、端部は面をもつ。	[口端]ヨコナデ [口胴]ハケ(６本/cm)→ナデ	[口端]ヨコナデ [口胴]ハケ(６本/cm)→ナデ	橙・褐灰色 にぶい褐・黒褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
460	鉢	残高 5.4	内面にはっきりとした稜をもって屈曲する口縁部。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1～2) ○		
461	鉢	底径 (1.1) 4.75	ボタン状の突出する底部。	マメツ	(板状工具による)ナデ	暗灰色 灰黄褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
462	鉢	口径(10.0) 残高 5.6	短く外傾する口縁部。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
463	鉢	口径(14.4) 残高 8.0	短く外反する口縁部。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	明赤褐・黒褐色 にぶい橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
464	鉢	口径(13.2) 底径 (2.4) 器高 8.7	小さく突出する底部。口縁端部は面をもつ。	ハケ(7本/cm)→ナデ [底]ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ(工具痕あり)	橙色 にぶい黄橙・褐灰色	石・長(1～5) 金 ◎		
465	鉢	口径 13.2 器高 5.4	外上方にのびる口縁部。底部は突出気味で丸みをおびる。内外面共に線刻を施す。	[口端]ナデ [胴底]ハケ(13本/cm)→ナデ→線刻	ハケ(13本/cm)→ナデ(指頭痕あり)→線刻	にぶい橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
466	鉢	口径(15.7) 残高 7.2	やや内湾気味にたちあがる口縁部。	[口端]ヨコナデ [胴]ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
467	鉢	口径 12.1 底径 3.9 器高 9.8	底部より内湾して上方向へたちあがる口縁部。口縁端部は尖りぎみに丸い。	ナデ(指頭痕あり)	指ナデ	浅黄橙色 にぶい橙・灰褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	38
468	高坏	口径(33.5) 残高 5.0	外反する口縁部。口縁端部は丸い。	[口端]ヨコナデ ハケ(14本/cm)→ナデ(一部マメツ)	ハケ→ヘラミガキ	明赤褐色 赤褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
469	高坏	残高 4.4	大きく広がる口縁部。	マメツ	ヘラミガキ	にぶい黄橙・褐灰色 明黄褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
470	高坏	口径(30.6) 残高 4.5	内外面共に稜をもって大きく外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口端]ヨコナデ ハケ(12本/cm)→ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
471	高坏	口径(23.4) 残高 8.0	外反する口縁部。端部は面をもつ。	[口端]ナデ ハケ(7本/cm)→ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤橙・褐灰色 明赤褐・灰褐色	石・長(1～2) 金 ◎	黒斑	
472	高坏	残高 8.2	脚部片。円孔(径1.1cm)が2ヶ所残る。残存から3ヶ所あったと思われる。	ヘラミガキ	ナデ(一部ハクリ)	橙色 橙色	石・長(1～4) ◎		
473	皮袋形土製品	残高 4.9	小さく突出する底部。	マメツ	ハケ(7本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～4)多 褐色粒 ◎	黒斑	38
474	ミニチュア	口径 6.7 底径 1.6 器高 4.2	鉢形のミニチュア土器。底部は不安定である。	ナデ(指頭痕・板状工具痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		38
475	ミニチュア	口径 7.3～7.8 底径 2.7～3.0 器高 4.6	平底の底部。	[口胴]ハケ(10～11本/cm) [底]ナデ	ハケ(10～11本/cm)	橙・にぶい橙・褐灰色 橙・にぶい橙色	長(1) 金 ◎		38

表54　SB202出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
476	石包丁(未製品)	欠損	緑色片岩	8.9	4.2	1.00	62.22		38
477	石包丁	欠損	緑色片岩	9.4	5.1	1.00	84.20		38
478	石鏃	完形	サヌカイト	2.8	1.8	0.40	1.78		38
479	砥石	欠損	砂岩	7.5	5.2	2.60	144.11		
480	剥片	－	緑色片岩	6.4	1.8	0.60	7.88		
481	台石	完形	花崗岩	32.5	24.2	9.30	10050		
482	台石	完形	花崗岩	29.2	25.2	12.70	15400		
483	台石	完形	花崗岩	35.5	20.6	14.80	15850		
484	敲石	完形	砂岩	17.0	13.6	6.00	2170		

第 9 章　枝松遺跡 8 次－ 3 区の調査－

1. 調査の経緯

3 区は調査地の西部にあたり、調査前は耕作地である。調査は 2004（平成 16）年 5 月 14 日、重機により掘削を開始し、同年 7 月 15 日に調査を終了した。

2. 層位

3 区の基本層序は、上から第Ⅰ青灰色土、第Ⅱ層橙色土、第Ⅲ層橙白色土、第Ⅳ層茶色土、第Ⅴ層黄色土に茶褐色粘質土が混じる、第Ⅵ層黄茶色土、第Ⅶ層黄白色粘質土、第Ⅷ層灰白色粘質土である。

遺構の検出は、第Ⅳ層上面で行い掘立柱建物跡（掘立）1 棟、土坑（SK）4 基、柱穴（SP）52 基、溝（SD）1 条、焼土跡 1 基、倒木跡 1 基を検出した。以下、主な遺構・遺物について記述する。

3. 遺構・遺物

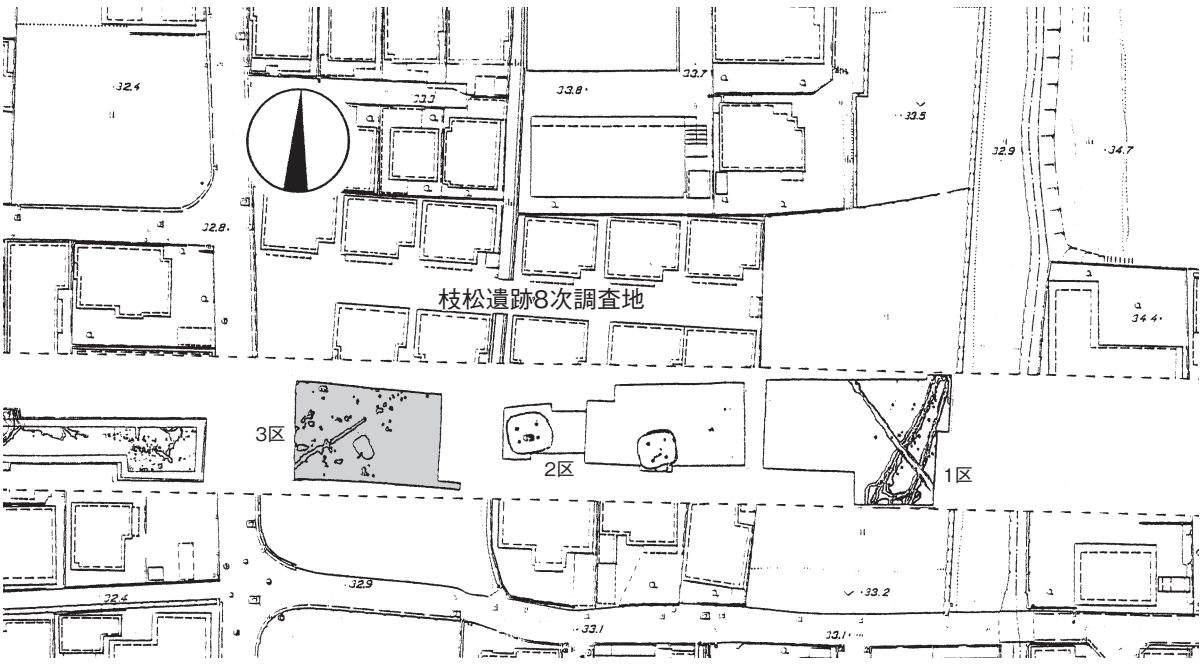
掘立柱建物跡（掘立）

掘立 301（第 115 図）

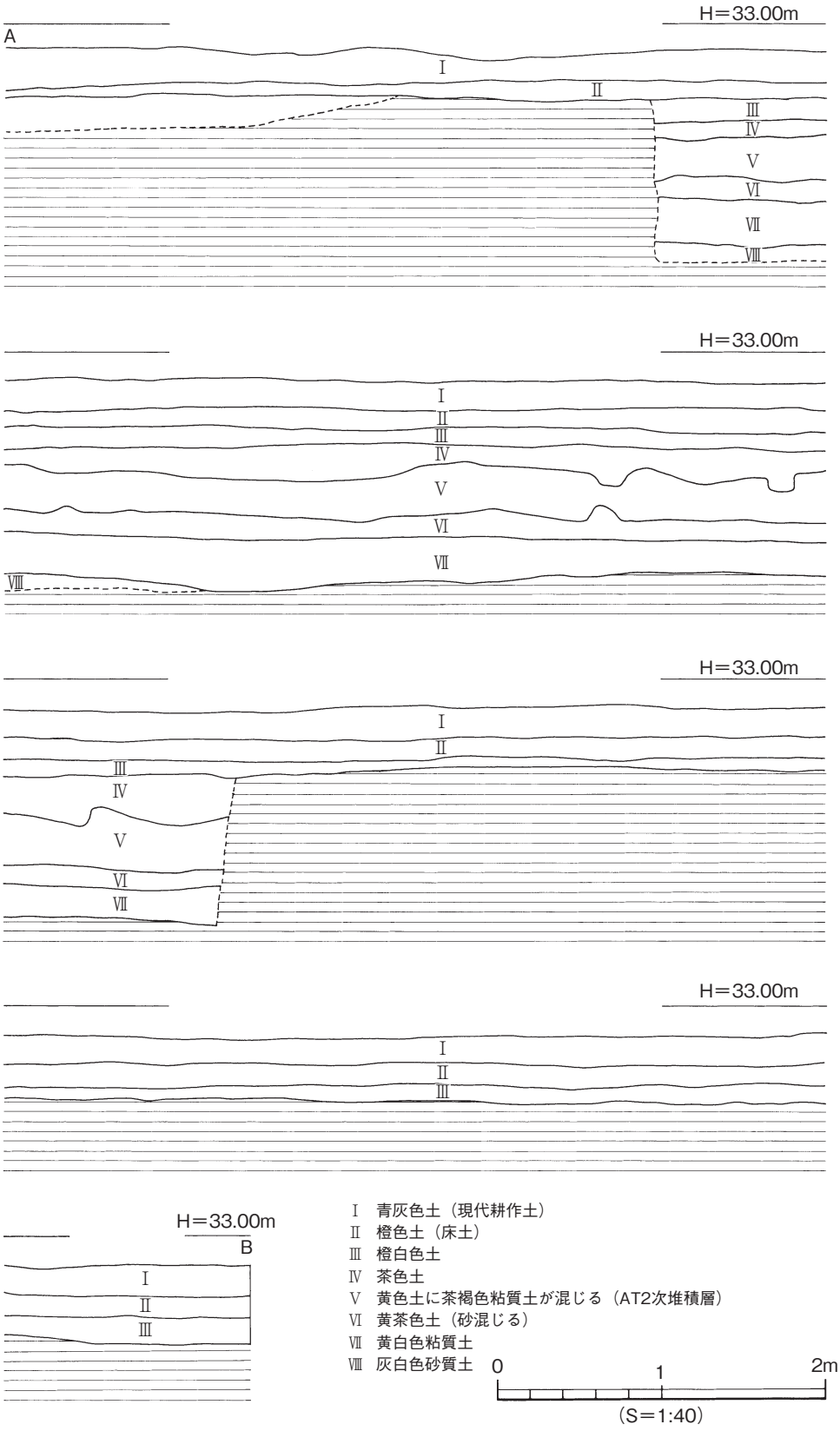
調査区の北西部で検出した。規模は 1 間 × 1 間（P1 ～ P4）で柱間は長軸方向で 2.92m、短軸方向が 2.40m を測る。柱穴は直径 0.34m ～ 0.44m を測る。深さ 0.58m ～ 0.72m を測る。

出土遺物（第 116 図、485）

485 は甕の底部片。小さな平底である。



第 112 図　調査区位置図（S=1:1,000）


H＝33.00m
A
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
H＝33.00m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
H＝33.00m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
H＝33.00m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
H＝33.00m
B
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅰ 青灰色土（現代耕作土）
Ⅱ 橙色土（床土）
Ⅲ 橙白色土
Ⅳ 茶色土
Ⅴ 黄色土に茶褐色粘質土が混じる（AT2次堆積層）
Ⅵ 黄茶色土（砂混じる）
Ⅶ 黄白色粘質土
Ⅷ 灰白色砂質土
0
1
2m
（S＝1:40）

第 113 図　南壁土層図

時期　出土遺物より弥生時代後期後半以降。

土坑（SK）

SK301（第117図）

調査区の西側で検出した。平面形は楕円形を呈する。断面形態はレンズ状を呈する。検出規模は長軸0.90m、短軸0.70m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色土である。遺物は鉄製品が出土した。

出土遺物（第118図、486）

486は釘と思われる。断面形は方形を呈する。

時期　埋土色より中世以降。

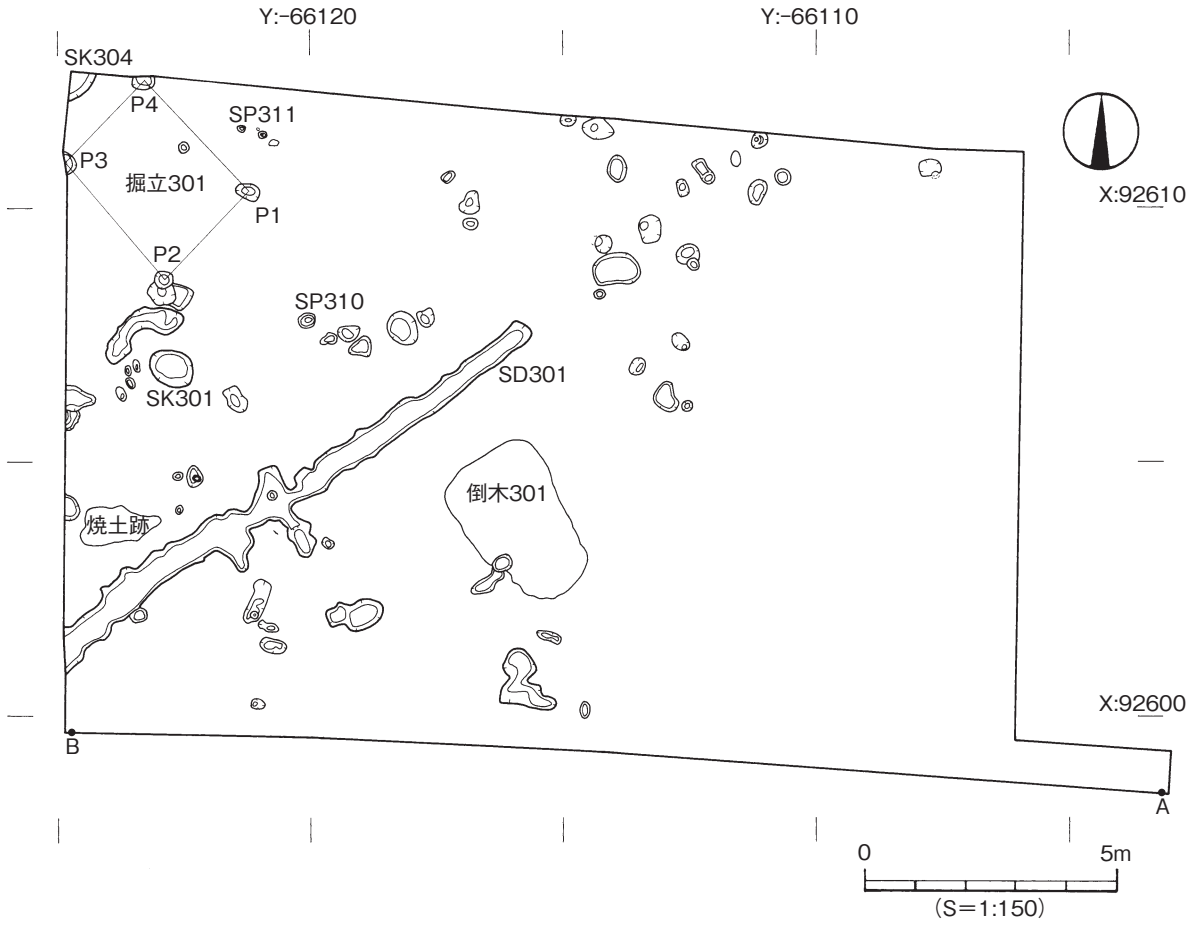
SK304（第119図）

調査区の北西隅で検出した。北西側が調査区外となるため全容は不明である。検出規模は東西54.0㎝、南北64.0㎝、深さ14.0㎝を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

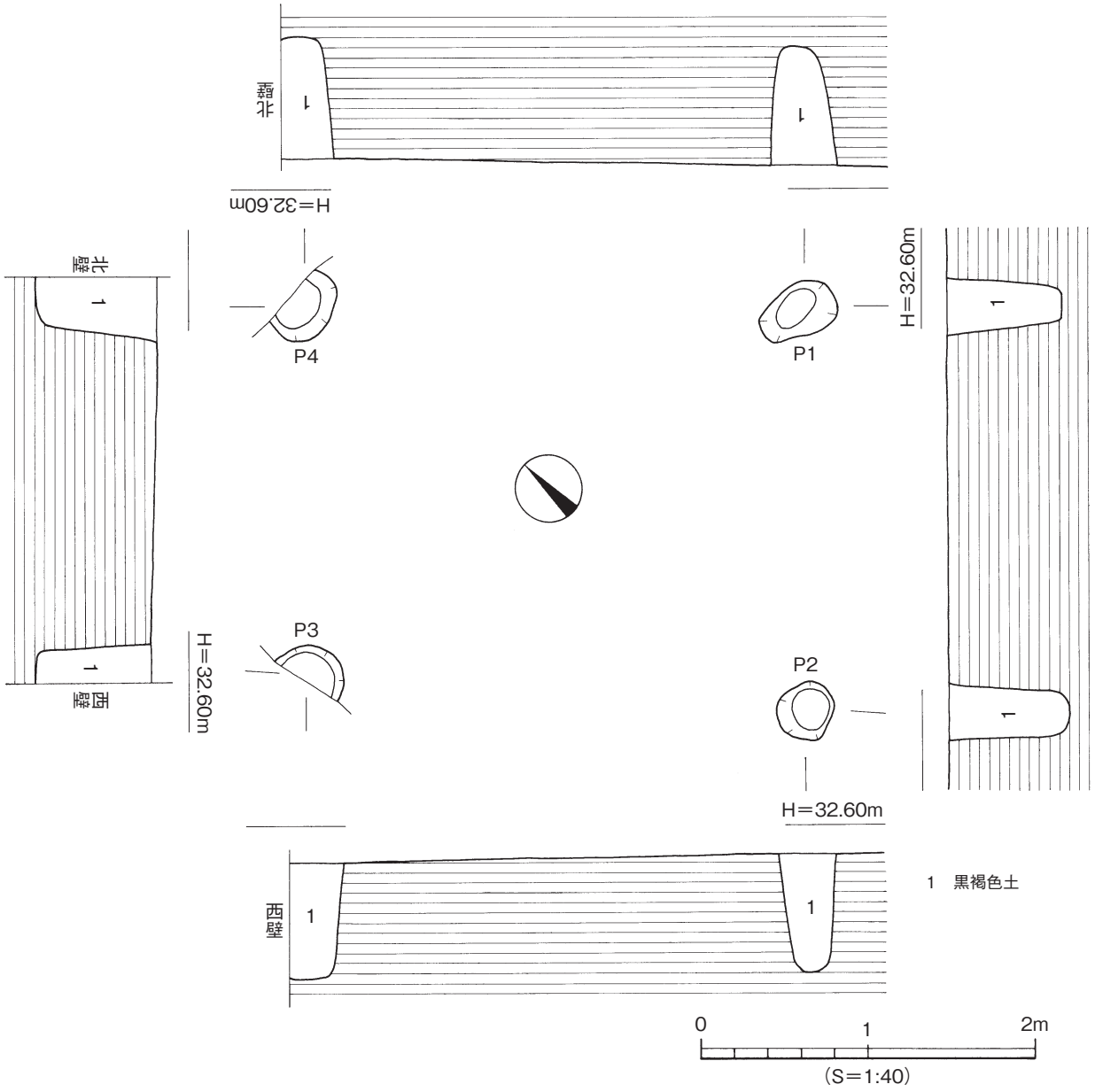
出土遺物（第120図、487）

487は高坏形土器の口縁部片。口縁端部は面をもつ。調整は内外面ともヘラミガキが施される。

時期　出土遺物より弥生時代後期後半以降。



第114図　3区遺構配置図



第 115 図　掘立 301 測量図

柱穴（SP）

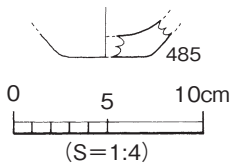
SP310（第 121 図）

調査区の北西部で検出した。平面形は楕円形を呈する。検出規模は長軸 0.34m、短軸 0.26m、深さ 0.08m を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

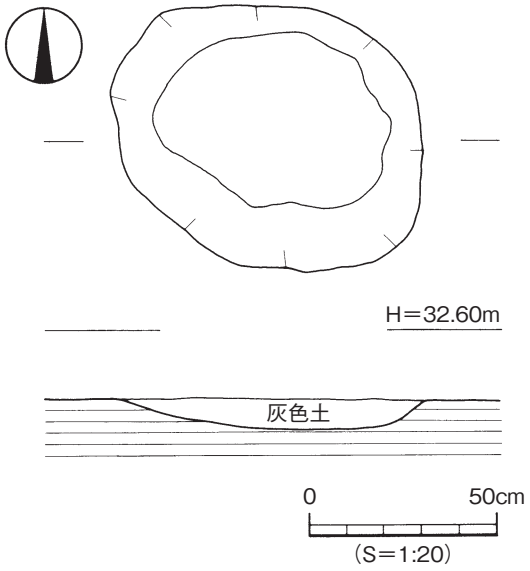
出土遺物（第 122 図、488）

488 は複合口縁壺である。口縁拡張部に山形文を施す。

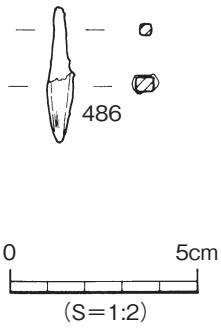
時期　出土遺物より弥生時代後期後半以降。



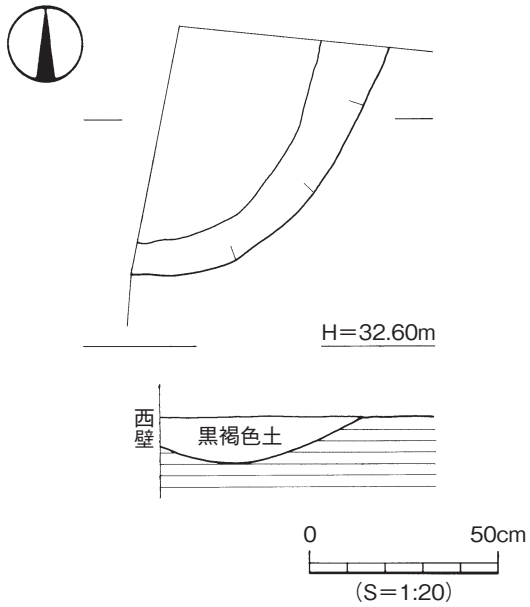
第 116 図　掘立 301 出土遺物実測図



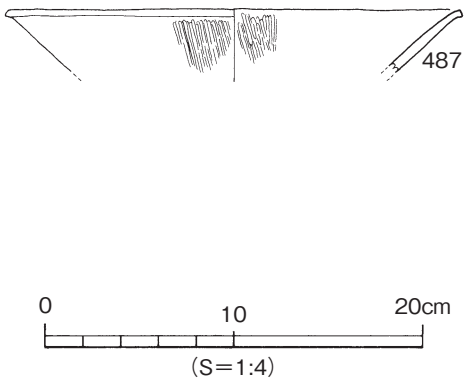
第 117 図　SK301 測量図



第 118 図　SK301 出土遺物実測図



第 119 図　SK304 測量図



第 120 図　SK304 出土遺物実測図

SP311（第 121 図）

調査区の北西部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径 0.12m、深さ 0.08m を測る。遺物は弥生土器が出土した。

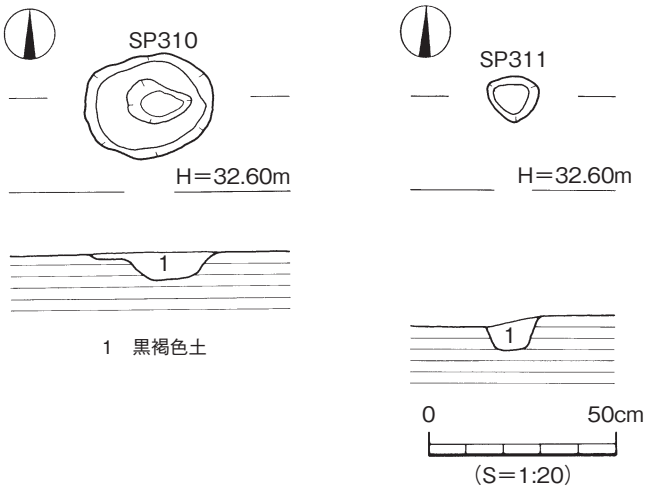
出土遺物（第 122 図、489）

489 は高坏の裾部片。有段部に半裁竹管文を施す。

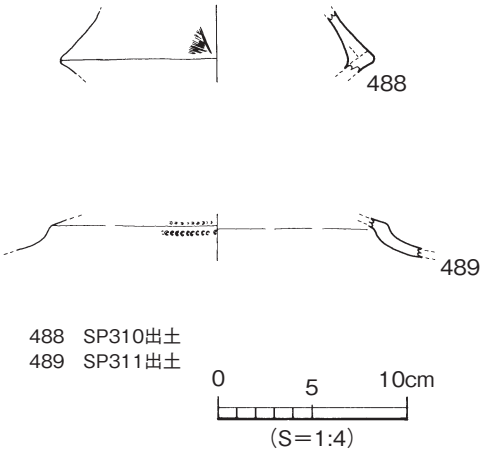
時期　出土遺物より弥生時代後期後半以降。

表採遺物（第 123 図）

490 は表土掘削中に出土したサヌカイト製の石鏃である。



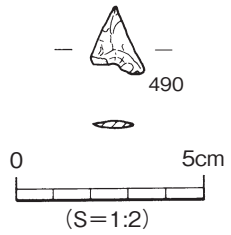
第 121 図　SP310・SP311 測量図



第 122 図　SP310・SP311 出土遺物実測図

4. 小結

３区の調査では、遺構中からの出土遺物が無く時期不明の遺構が多数をしめた。遺構埋土は、SD301 をのぞけば黒褐色土と灰色土を埋土とするものに大別でき、１区で検出した遺構埋土色と類似する。このことから今回検出した遺構の時期は、黒褐色土が弥生時代以降に、灰色土は中世以降に時期比定できると考えられる。



第 123 図　表採遺物実測図

遺物観察表　※凡例は P.49 参照

表55　掘立301出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
485	甕	底径　4.8 残高　2.0	平底の底部。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 灰白色	石・長(1～4) ◎	黒斑	

表56　SK301出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
486	釘	完形	鉄	3.6	0.3～0.75	0.3～0.55	1.47		

表57　SK304出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
487	高坏	口径(24.1) 残高　3.3	高坏の口縁部片。口縁端部は面をもち、ナデにより下方に肥厚する。	[口端]ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎		

表58　SP310出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
488	壺	残高　3.4	複合口縁。拡張部に山形文がわずかに残る。	マメツ	マメツ	褐色 にぶい褐色	石・長(1～6) 金 ◎		

表59　SP311出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
489	器台	残高　2.1	脚部片。半裁竹管文を2段施す。	ナデ→施文	マメツ	にぶい黄橙色 淡黄色	石・長(1～2) ◎		黒斑

表60　表採出土遺物観察表　土製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
490	石鏃	一部欠損	サヌカイト	1.8	1.1	0.20	0.33		

第10章　枝松遺跡9次－1区の調査－

1. 調査の経緯

本調査地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地（松山地区）「№83　枝松遺物包含地」と「№110　釜ノ口遺跡」に挟まれた指定外区域に位置する。調査にあたっては、掘削した土砂・排土置き場を得るために調査区を3つに分割し、順次作業を行った。1区は調査対象地の東側に設定した。調査前は宅地である。西側に市道桑原98号線が南北方向に延びる。1区の調査面積は160㎡である。

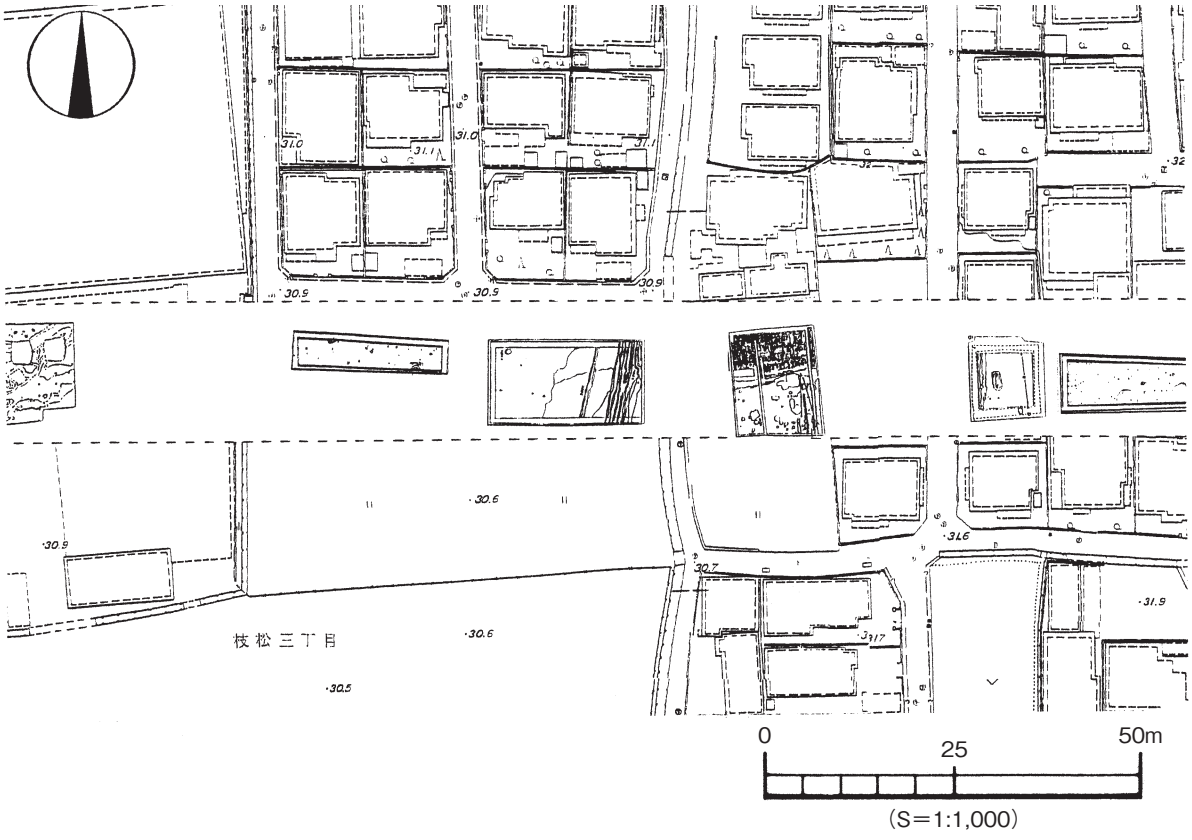
以下、調査工程を略記する。

平成15年6月16日　松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より松山市道中村桑原線の道路改良工事に伴う埋蔵文化財確認申込書が松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課）に提出される。

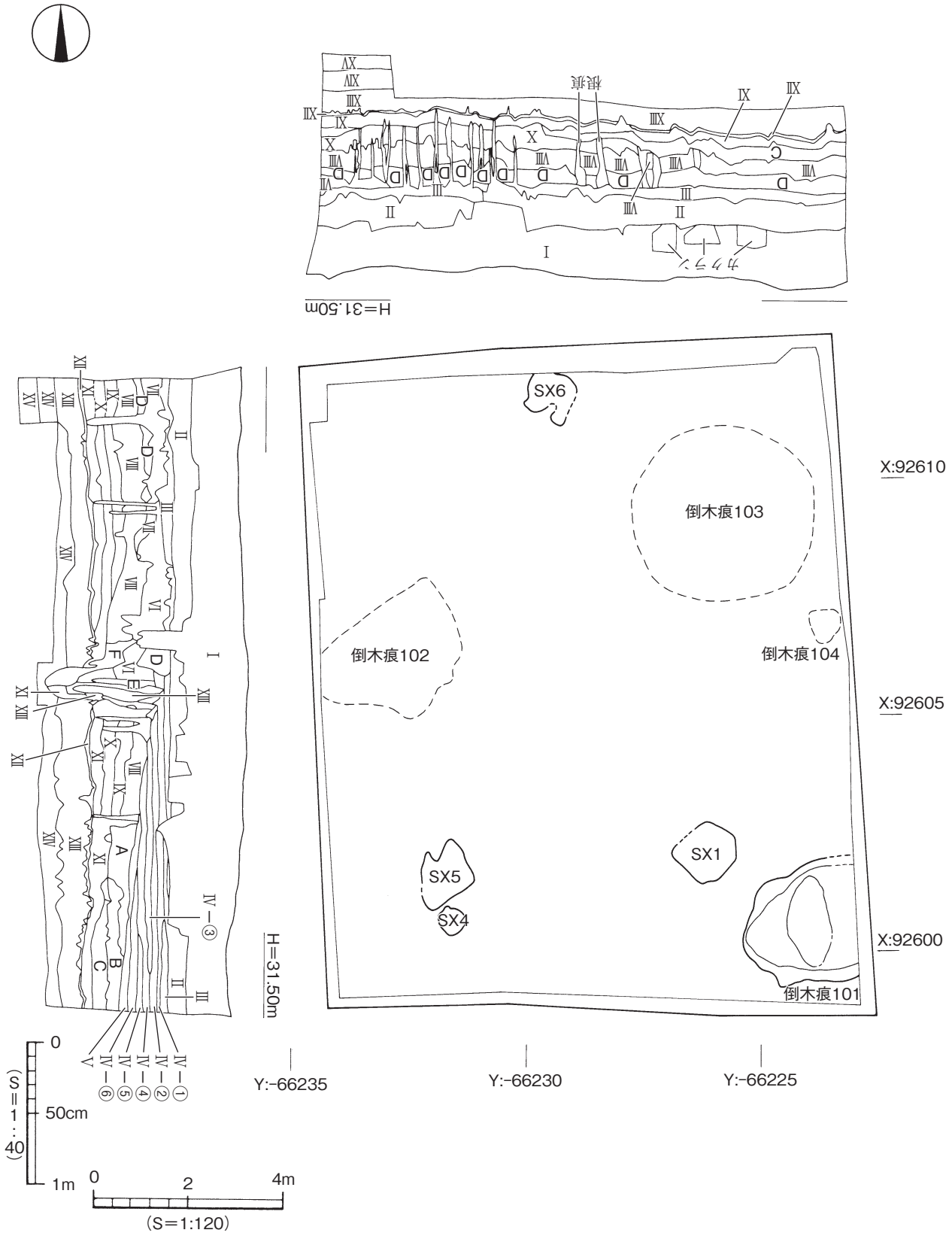
平成16年1月15日～20日　道路建設課の委託により試掘調査を実施し、埋蔵文化財が確認される。協議の結果、緊急発掘調査を行うことが決定される

平成16年3月22日～31日　発掘用具・機材の準備を行う。また安全対策として調査掘削エリアに杭を打設し、安全ロープを用いて縄張りを行う。併せて危険防止のための看板も設置する。

4月16日　作業員及び重機を投入し、1区の発掘作業を開始する。作業開始に先立ち、調査地の近接住民に遺跡発掘調査のお知らせをし、ご理解・ご協力をお願いする。



第124図　調査区位置図



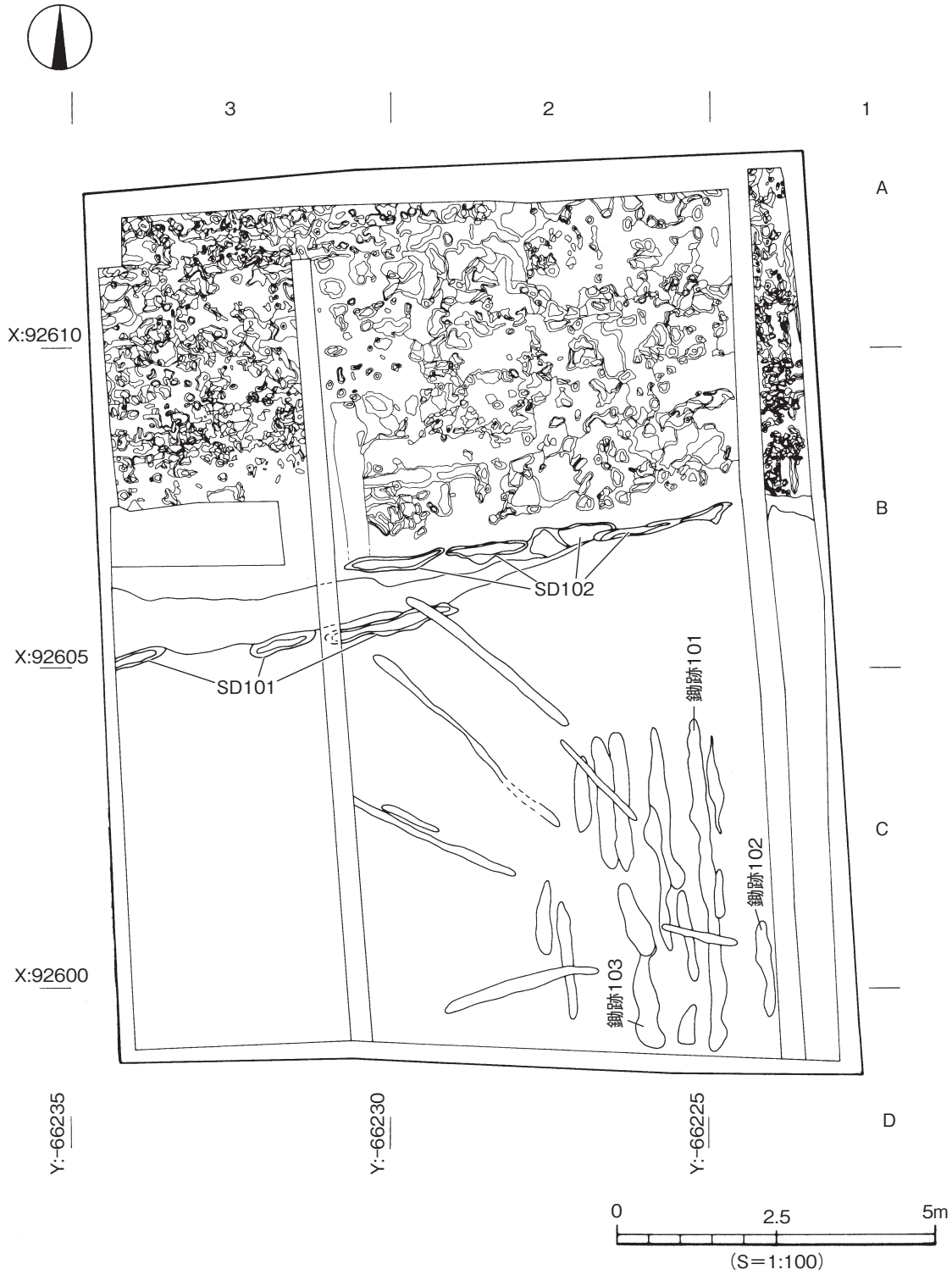
第 125 図　1 区遺構配置図（最終遺構面）・北壁、西壁土層図

同日～20日　重機による土砂（近現代の耕作土を含む）の掘削・運搬を行う。
5月14日　重機を使用して1区の排土を調査区西側へ移動する。
5月17日　仮設調査事務所、調査区防砂ネットを設置する。
6月1日　高所作業車による1区の写真撮影。
7月2日～7日　重機・運搬車を使用して1区の排土を2区西側へ移動する。
7月26日～27日　重機を使用して1区の排土を2区西側へ移動する。
8月13日～16日　現場作業お盆休み
8月19日　台風15号接近。
8月30日　台風17号接近の為、現場作業中止。
9月7日　台風18号接近の為、現場作業中止。
9月28日　高所作業車による1～3区の完掘写真撮影。重機による埋め戻しを開始。
9月29日　台風21号接近。
9月30日　重機による埋め戻し作業を完了し、野外調査を終了する。
10月1日～11月30日　当埋蔵文化財センター及び枝松遺跡10次調査事務所内にて整理作業を行う。

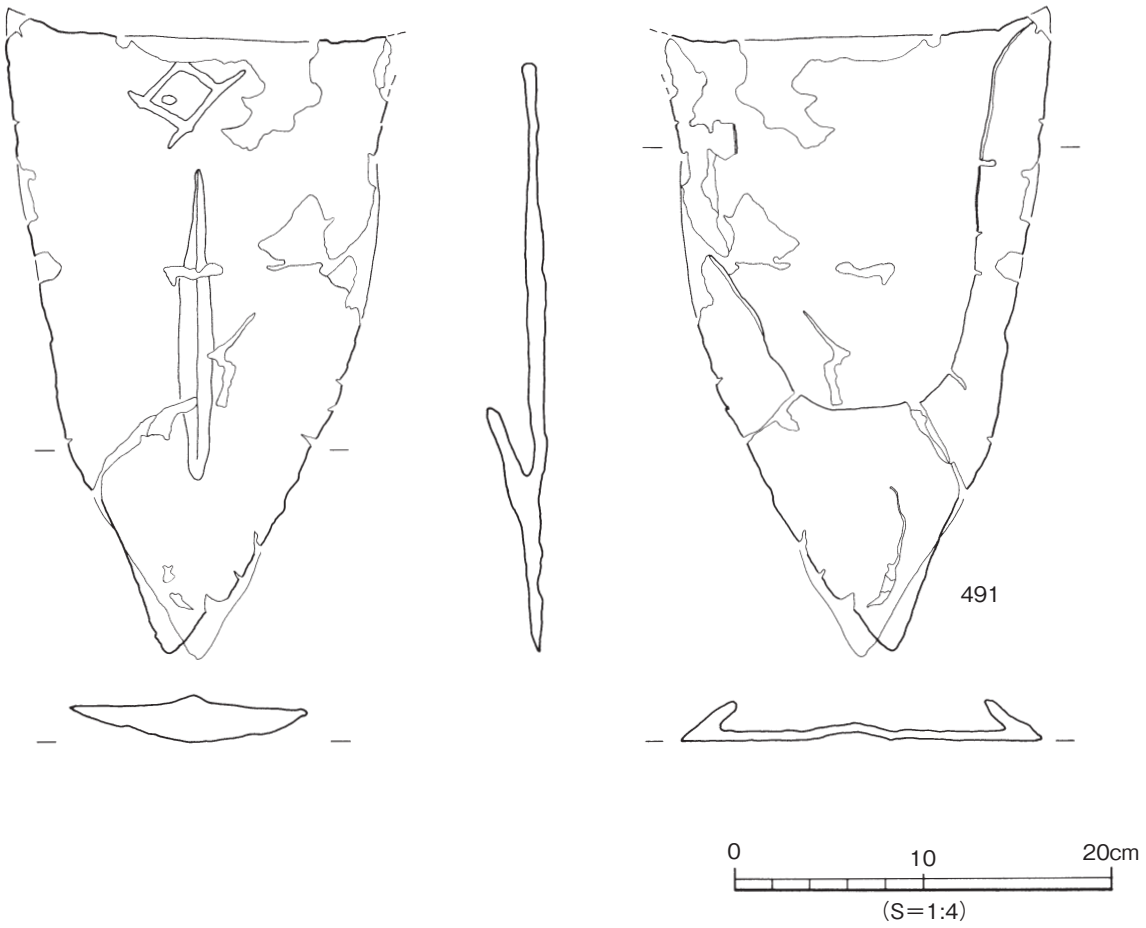
2. 層位

調査地周辺は、約25,000年～22,000年前に噴出・降下した姶良・丹沢火山灰（以下、AT火山灰）と約6,300年前に噴出・降下した鬼界アカホヤ火山灰が顕著に確認されている地域である。本調査においては、AT火山灰が検出された。

1区の層序は上から第Ⅰ層:明褐色砂質土（7.5YR 5/6）、第Ⅱ層:暗青灰色砂質土（10BG 4/1）、第Ⅲ層:にぶい褐色土（7.5YR 5/4）、第Ⅳ①層:灰オリーブ色土（7.5Y 5/2）、第Ⅳ②層:オリーブ褐色土（2.5Y 4/6）、第Ⅳ③層：黄褐色土（2.5Y 5/6）、第Ⅳ④層：灰オリーブ色土（7.5Y 4/2）、第Ⅳ⑤層：オリーブ灰色土（10Y 4/2）、第Ⅳ⑥層：オリーブ黒色土（7.5Y 3/2）、第Ⅴ層：暗緑灰色土（7.5GY 3/1）、第Ⅵ層:暗褐色粘質土（7.5YR 3/4）、第Ⅶ層:黄褐色土（2.5Y 5/6）、第Ⅷ層:明黄褐色硬質微粒層（2.5Y 6/8）、第Ⅸ層：明黄褐色微砂質層（2.5Y 6/8）、第Ⅹ層：明黄褐色粘質微砂質層（2.5Y 6/6）、第Ⅺ層：にぶい黄褐色軟質微砂層（10YR 4/3）、第Ⅻ層：黄橙色粘質微ガラス質層（10YR 7/8）、第XIII層：にぶい黄褐色硬質砂層（10YR 5/3）、第XIV層：灰黄褐色微砂質層（10YR 6/2）、第XV層：灰黄褐色砂礫層（10YR 6/2）、間層A：にぶい黄橙色粘質層（10YR 6/4）、間層B：にぶい黄褐色粘質層（10YR 5/4）、間層C:灰黄褐色軟質土層（10YR 5/2）、間層D:褐色土（10YR 4/4）、間層E:暗褐色粘質土（7.5YR 3/4）、間層F：暗褐色微砂質層（10YR 3/3）である。第Ⅰ層は造成土である。真砂土が大半を占め、部分的にグリ石・コンクリート片等が含まれる。第Ⅱ・Ⅲ層は現代の耕作土と床土（水田耕作に伴う客土）である。第Ⅳ層は中近世代の水田層である。調査区南側に遺存し、6層を確認した。近世の犂先、中世前半の土器・陶磁器片が出土した。第Ⅴ層は調査区全域でみられ、土壌化が顕著に進行する。本層中から遺物は検出されなかった。第Ⅵ層は調査区全域でみられ、1～3㎜大の砂の粒子が混入する。直上層の染み込みや植物根の生育等の影響を受け、土壌化が顕著に進行している。本層以下から遺物



第 126 図　1 区遺構配置図（第一遺構面）



第 127 図　1 区出土遺物実測図(1)

の検出はない。第Ⅷ・Ⅸ層は AT 火山灰の 2 次堆積層である。第Ⅹ・Ⅺ層は AT 火山灰の 1 次堆積層で、第Ⅻ層は成層である。遺構の検出は、第Ⅷ層上面で行った。

3. 遺構と遺物

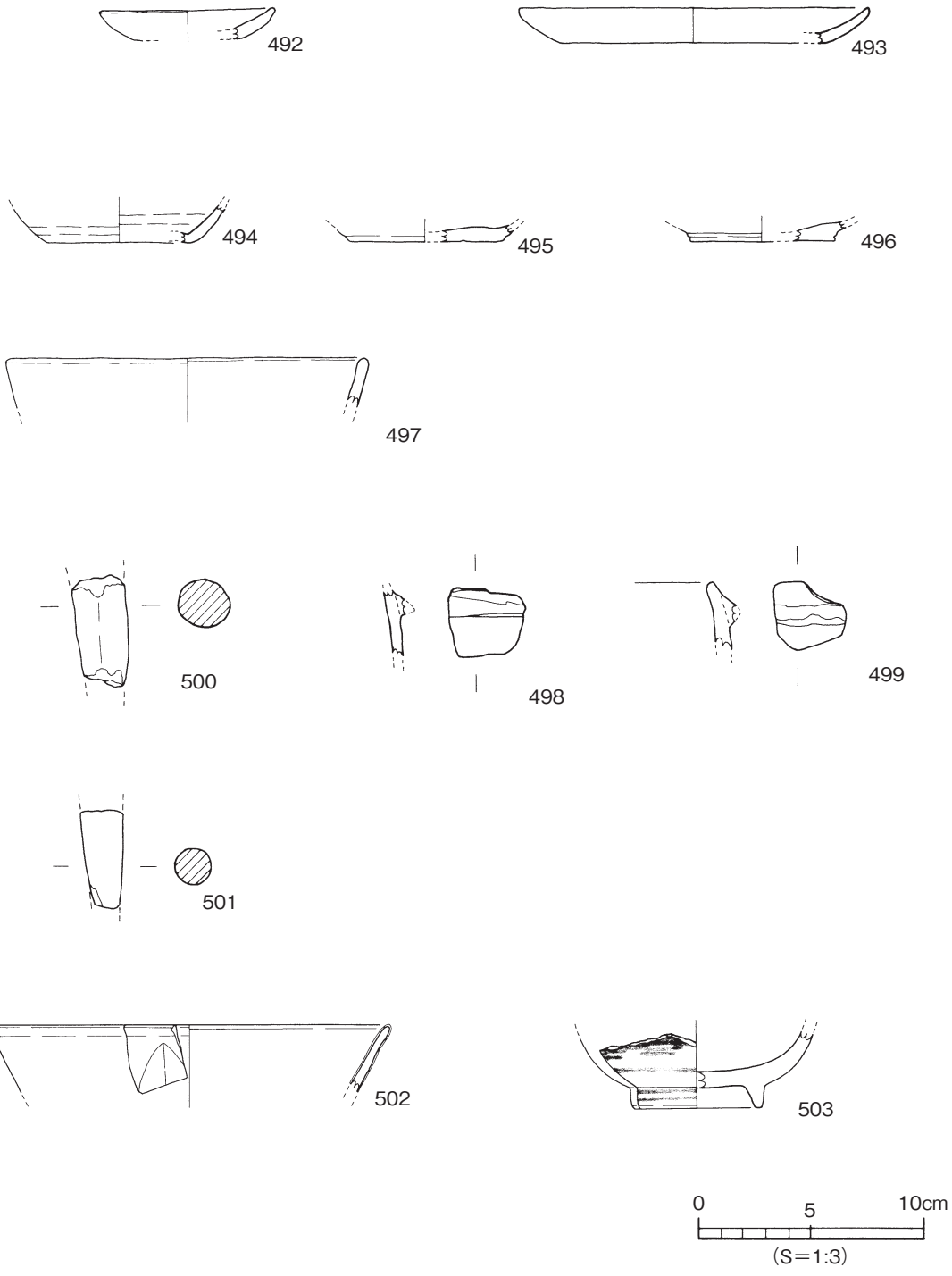
本調査で検出した主な遺構は掘立柱建物跡（掘立）2 棟、溝（SD）1 条、土坑（SK）8 基、柱穴（SP）42 基、倒木痕 3 箇所、鋤跡 15 条である。また、水田耕作に伴う人の足跡や牛の足跡が無数に検出されている。遺構と遺物について記述する。

〔1〕中近世水田層出土　鉄製品（第 127 図、図版 48-1）

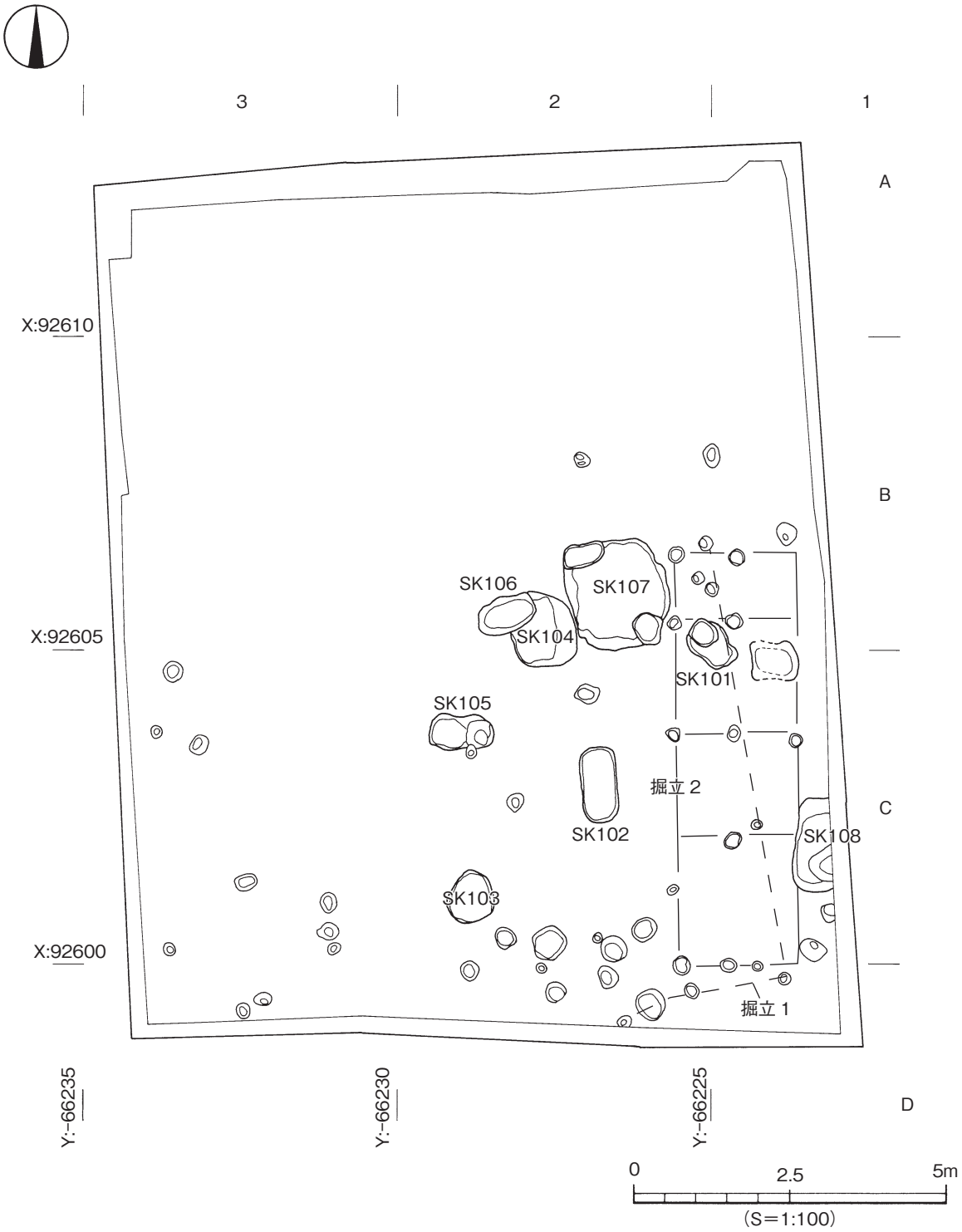
犂先（491）は牛馬に引かせて、土壌を耕起する犂の先端部である。第Ⅳ層中近世水田層上面から検出された。ほぼ完形品で長さ 33.7 ㎝、幅 20.3 ㎝、厚さ 1.0 ㎝、重さ 720g を測る。鋳造品である。表面上位に菱形状の刻印が印される。時期は近世以降。

〔2〕中近世水田層出土　土製品（第 128 図、図版 48-2）

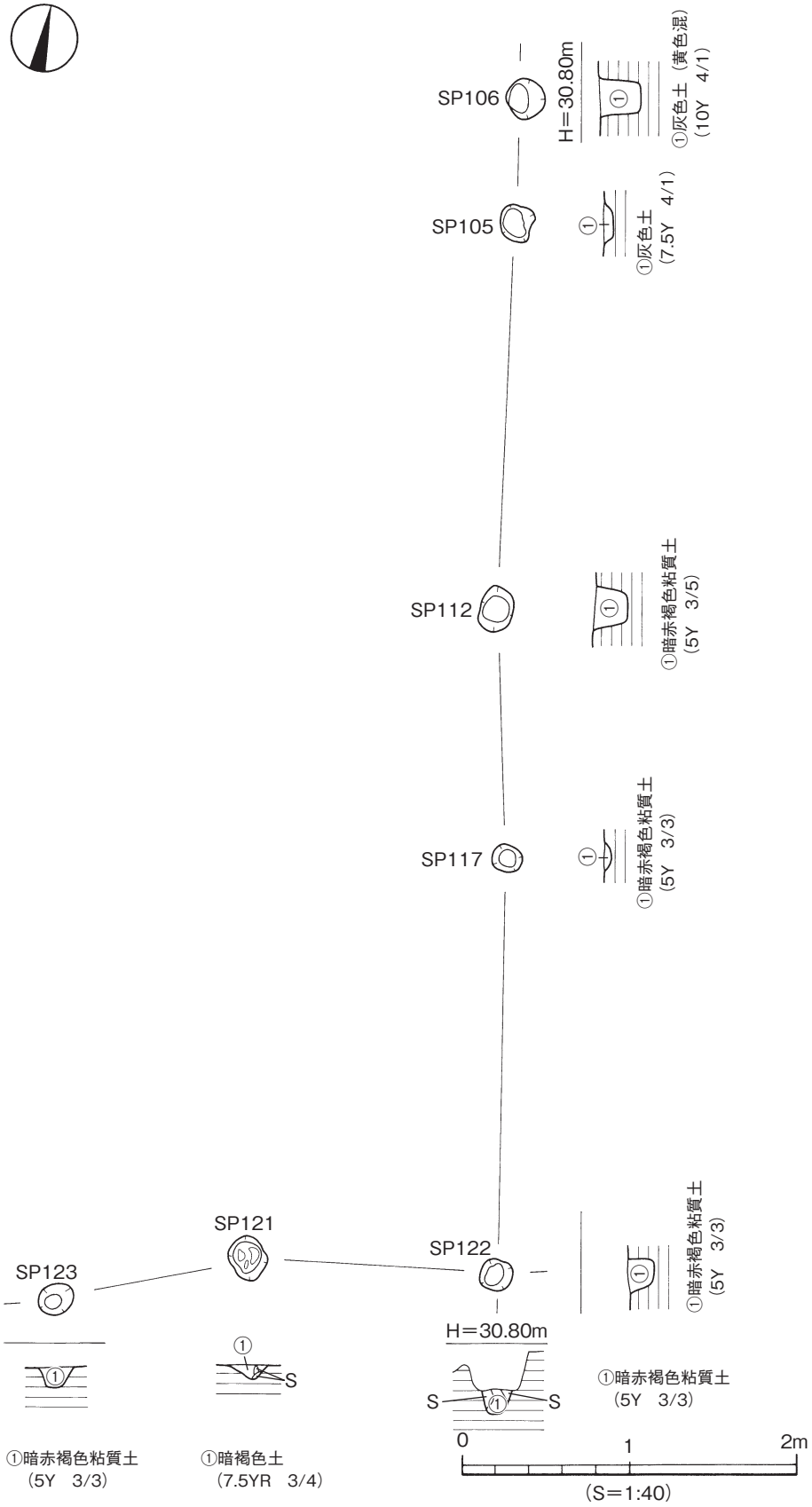
492 ～ 497、499 ～ 501 は土師質土器である。492 は小型の皿で内外面共に煤が付着する。498 は瓦質土釜の鍔部片である。502 は青磁碗。外面に鎬蓮弁文を看取。503 は肥前系の陶磁器碗。



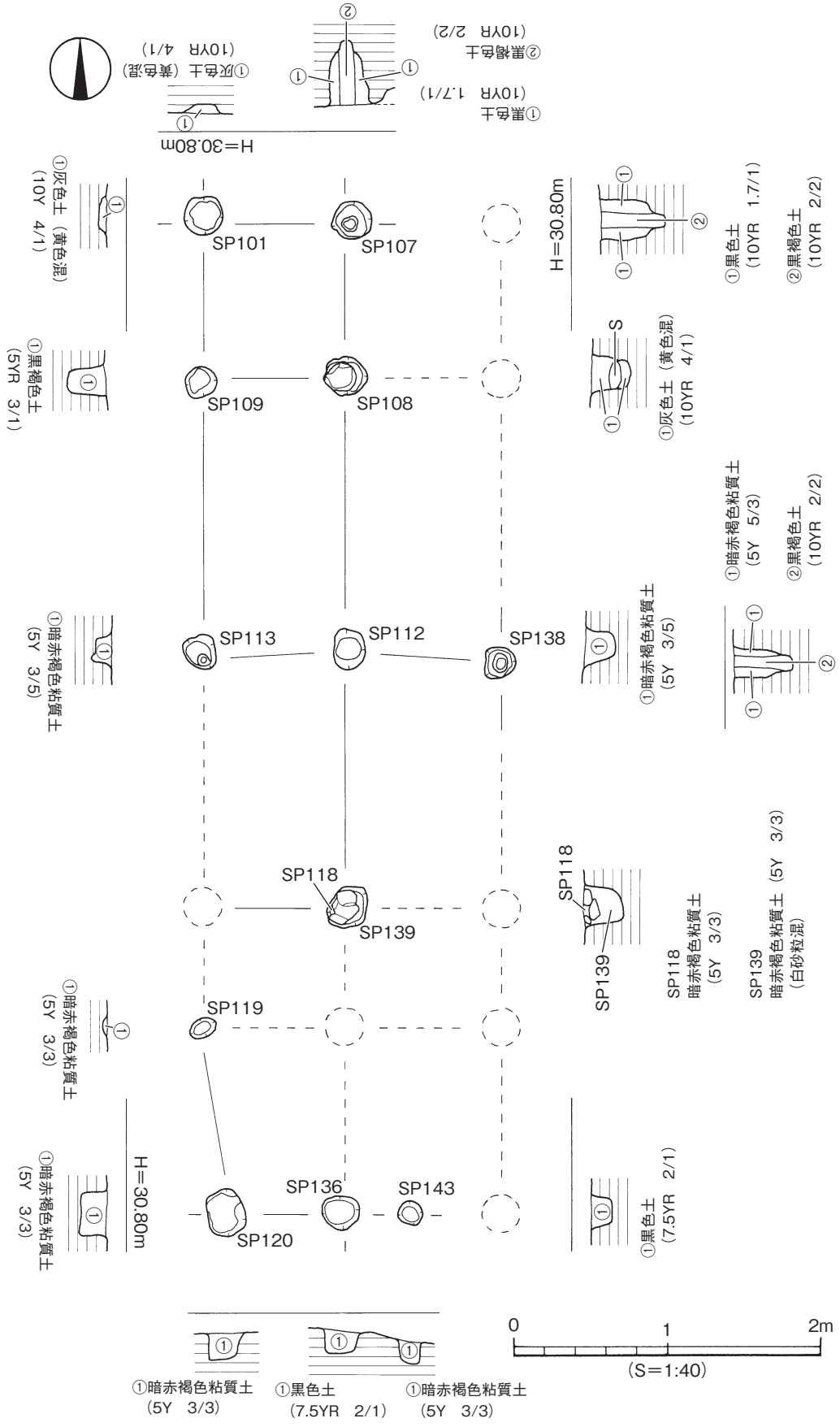
第 128 図　1 区出土遺物実測図(2)



第129図　1区遺構配置図（第二遺構面）

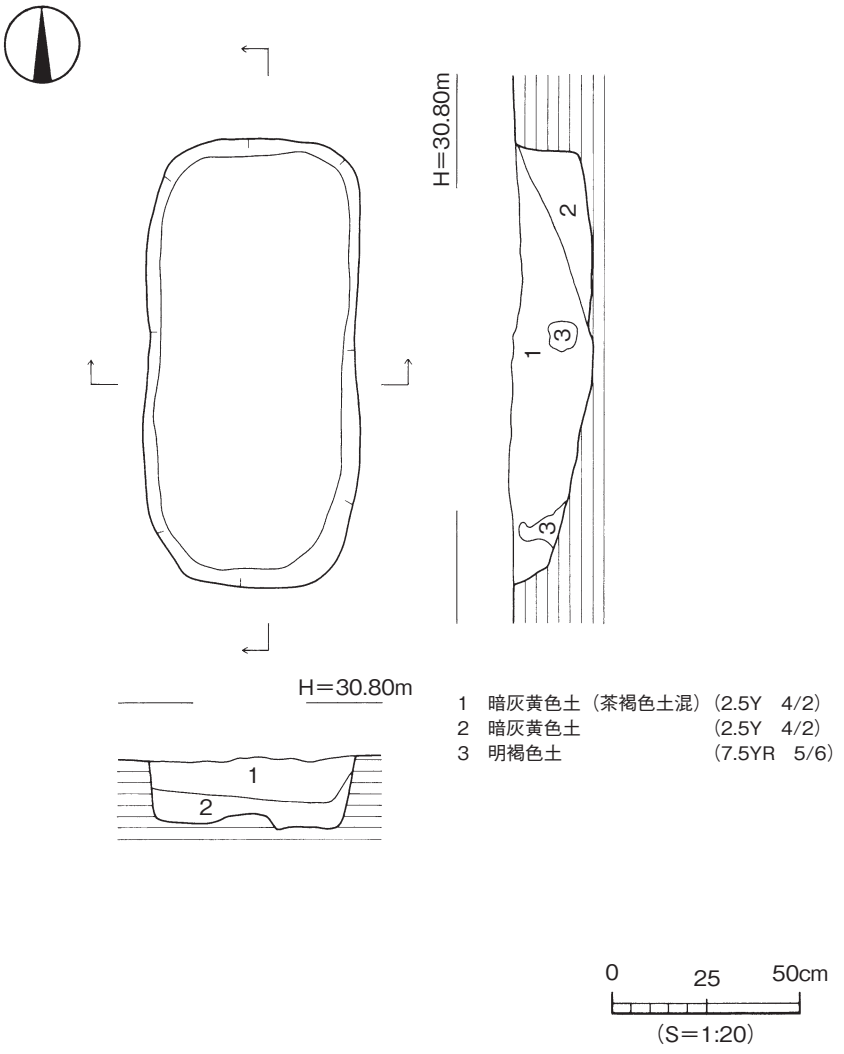


第 130 図　掘立 101 測量図

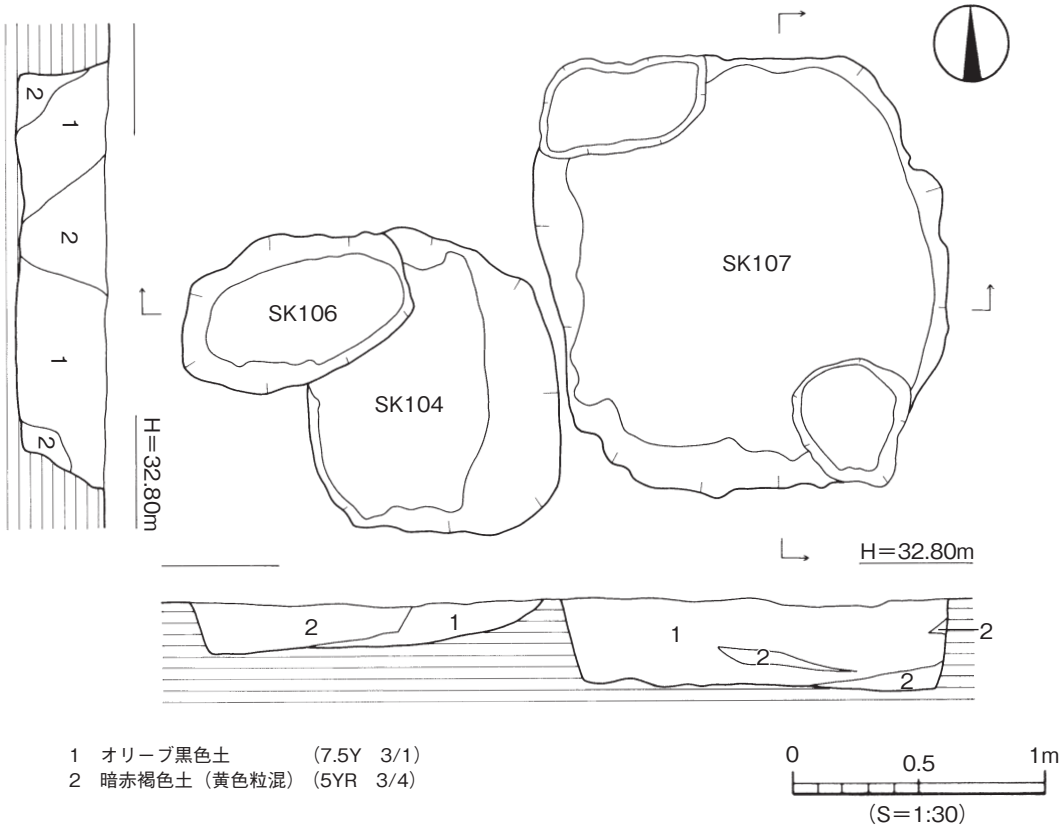


第131図　掘立102測量図

第 132 図　掘立 102（SP 内）出土遺物実測図



第 133 図　SK102 測量図

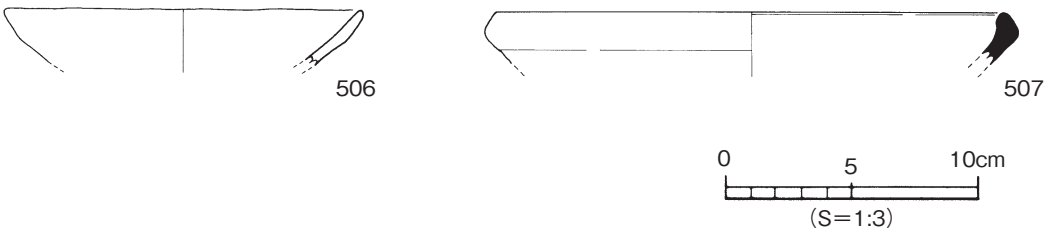


第134図　SK107・SK104・SK106測量図

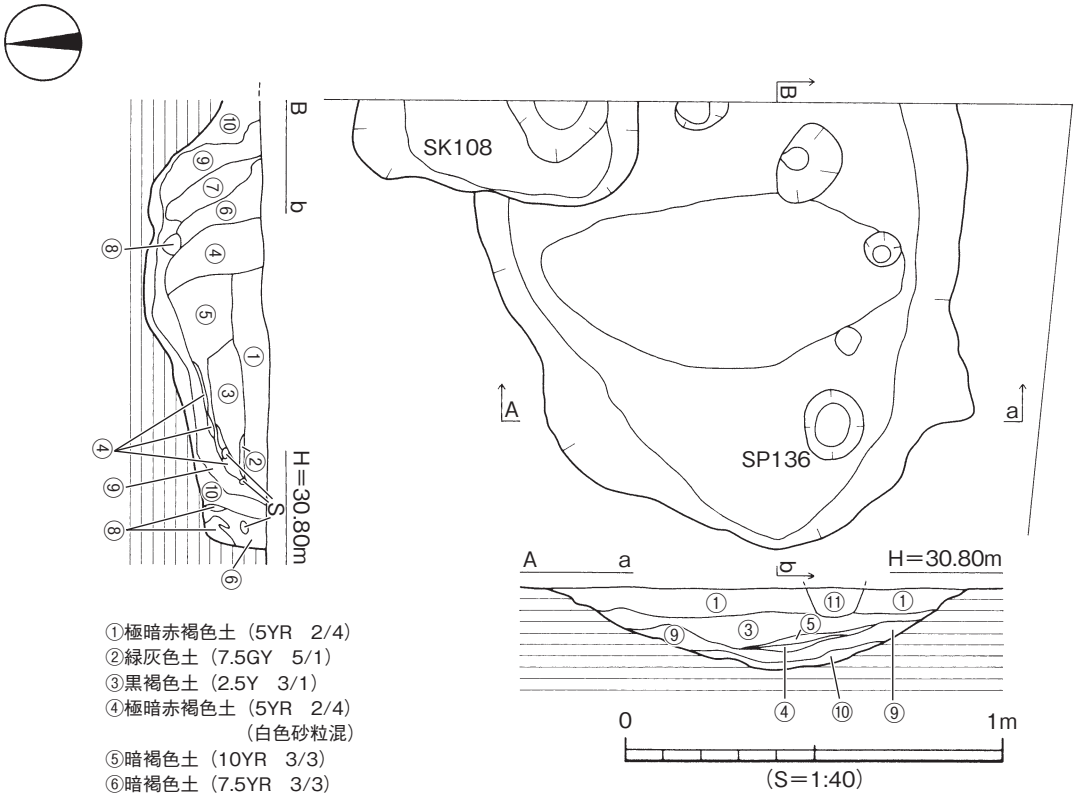
〔3〕掘立

掘立101（第130図、図版40-1）　南北4間、東西2間以上の掘立柱建物址である。検出規模は桁行7.05m、梁行2.65mである。柱穴は直径18.0㎝～24.0㎝、深さ5.0㎝～38.0㎝を測る。遺物は、柱穴内から土師質土器の坏小片1点が出土した。時期は出土遺物より中世と考える。

掘立102（第131図、図版40-1）　南北5間、東西3間以上の掘立柱建物址である。検出規模は桁行6.5m、梁行1.95mである。柱穴は直径12.0㎝～28.0㎝、深さ5.0㎝～38.0㎝を測る。遺物は、柱穴内から土師質土器（504・505）が出土した。時期は出土遺物より中世後半と考える。



第135図　1区 出土遺物実測図(3)



①極暗赤褐色土（5YR　2/4）
②緑灰色土（7.5GY　5/1）
③黒褐色土（2.5Y　3/1）
④極暗赤褐色土（5YR　2/4）
（白色砂粒混）
⑤暗褐色土（10YR　3/3）
⑥暗褐色土（7.5YR　3/3）
（白色砂粒混）
⑦褐色土（7.5YR　4/4）
（淡黄色混）
⑧黄色シルト（2.5Y　8/8）
⑨褐色シルト（7.5YR　4/6）
⑩オリーブ黄色シルト（5Y　6/3）
⑪黒色土（7.5YR　2/1）

第 136 図　倒木 101 測量図

〔4〕SK

SK102（第 133 図、図版 40-2）　調査区の南東側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸 120 ㎝、短軸 55 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。埋土は暗灰黄色土である。遺物は土師器、瓦器が出土しているが細片のため図示するものはない。時期は出土遺物より 14 世紀以降と考える。

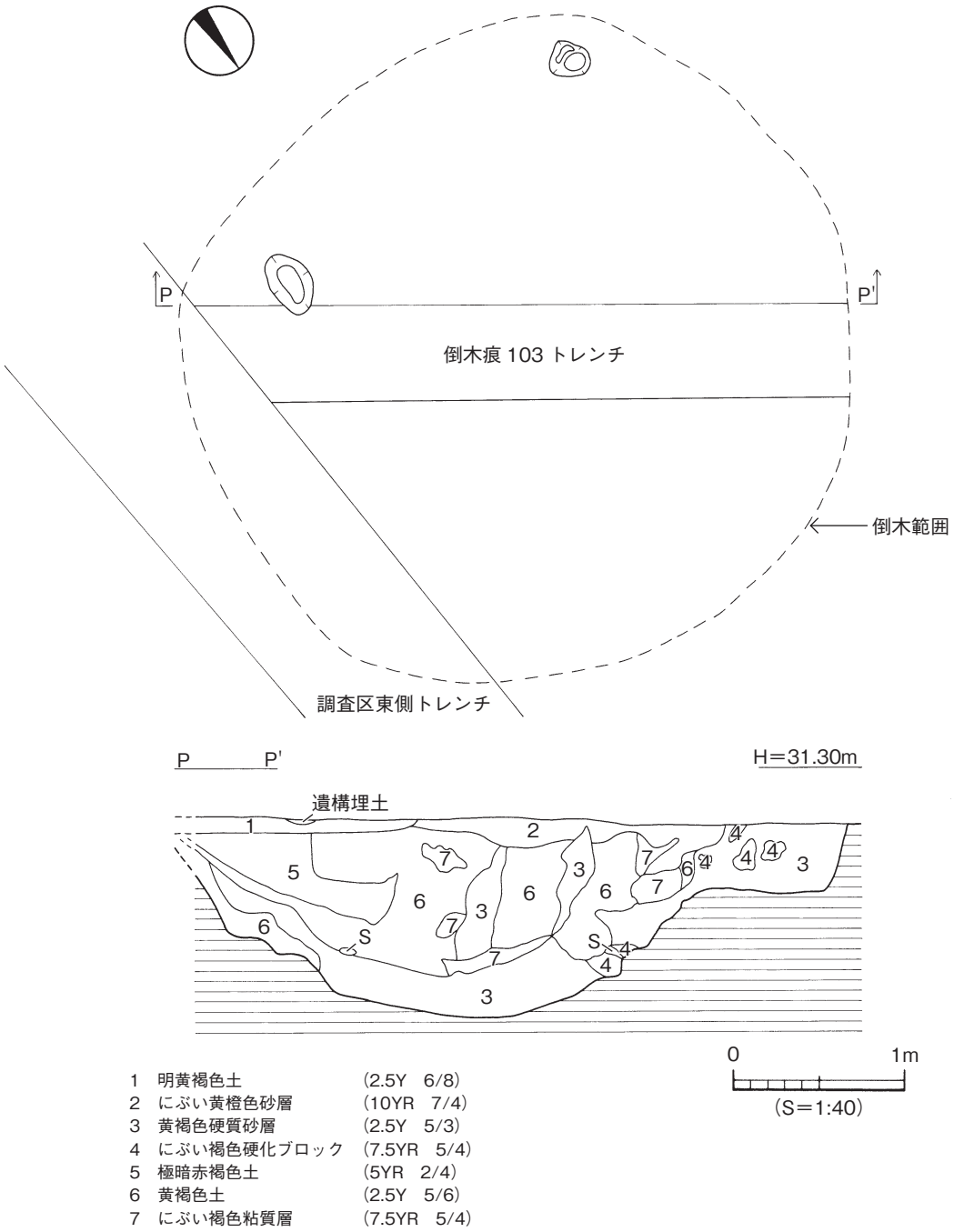
SK106（第 134 図）　調査区中央で検出した。平面形は楕円形を呈する。検出規模は長軸 92 ㎝、短軸 60 ㎝、深さ 20 ㎝を測る。埋土は暗赤褐色土である。遺物は土師器の細片が出土している。時期は出土遺物より 14 世紀以降と考える。

SK104（第 134 図）　調査区中央で検出した。SK106 に先行する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸 120 ㎝、短軸 98 ㎝、深さ 16 ㎝を測る。埋土はオリーブ黒色土である。遺物は土師器の細片が出土している。時期は出土遺物より 14 世紀以降と考える。

SK107（第 134 図）　調査区中央で検出した。平面形は不整方形を呈し、検出規模は 160 ㎝× 170 ㎝、深さ 33 ㎝を測る。埋土はオリーブ黒色土である。遺物は土師器の細片が出土している。時期は出土遺物より 14 世紀以降と考える。

〔5〕遺構内・グリッド出土遺物（第 135 図、図版 48-2）

506 は SK108 内から出土した土師質土器の坏。強い撫でにより体部中位で僅かに屈曲する。507 はグリッド C3 から出土した東播系捏鉢の口縁端部片。外面には自然釉を看取。



第 137 図　倒木 103 測量図

〔6〕倒木痕

倒木痕 101（第 136 図）　平面形は半楕円形を呈する。東側は調査区東壁である。検出規模は長軸 2.36m、短軸 2.6m である。土層から倒壊方向は東から西と思われる。SK108 に先行する。

倒木痕 103（第 137 図、図版 41-3）　平面形は円形を呈する。検出規模は径 3.9m を測る。

4. 小結

1 区の調査では、中世以降と考えられる掘立柱建物跡や土坑、水田跡を確認した。2 棟の掘立柱建

物跡は検出規模から住居用ではなく、農場付近に建てられた簡易な倉庫の可能性を考える。

遺物観察表　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。
遺物観察表は武正良浩、佐伯利枝、戸川安子が作成した。

(2) 遺物観察表の各掲載について
法　量　欄　(　)：推定復元値。
調　整　欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部
胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3 ㎜の石英・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表61　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法　量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
491	挙先	完存	鉄	33.7	20.3	1.0	720	鋳造品	48

表62　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
492	皿	口径 (7.8) 残高 1.3	内外面に煤付着。口縁端部はやや細い仕上げ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1～2) ◎	煤付着	
493	皿	底径(15.5) 残高 1.55	外面に粗い刷毛目調整痕が残る。口縁端部は上向きの丸い仕上げ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰黄色	微砂 ◎		
494	坏	底径 (6.2) 残高 1.6	口縁端部と底部を欠く、体部片。横撫でにより、内外面に段をなす。	ヨコナデ [底]不明	ヨコナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	微砂 ◎		
495	坏	底径 (7.0) 残高 0.8	底部に回転糸切り後の板状圧痕を看取。	ナデ [底]回転糸切り痕	マメツ	灰黄褐色 褐灰色	石・長(1) ◎		
496	皿	底径 (6.4) 残高 0.9	底部切り離しは回転ヘラ切りによるものか。底部内面、粘土充填痕あり。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		
497	坏	口径(16.0) 残高 2.2	口縁端部を僅かに肥厚させて丸く収める。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂 ◎		
498	土釜	残高 3.0	瓦質土器。口縁外側に断面三角形の鍔が貼り付けられる。	ナデ	ナデ	暗灰色 灰色	石・長(1) ◎		
499	土釜	残高 3.0	土師質土器。僅かに内傾する口縁端部下に断面三角形の鍔を貼付。	ナデ	ナデ	暗灰・灰色 オリーブ灰色	石・長(1～2) ◎		
500	土釜 脚部	残高 4.9	土師質土器。三足付土釜の脚部中位。	ナデ	—	にぶい橙色	石・長(1～2) ◎		
501	土釜 脚部	残高 4.4	土師質土器。三足付土釜の脚部下位。	ナデ	—	にぶい黄橙色	石・長(～1) ◎		
502	碗	口径(17.8) 残高 3.0	青磁碗の口縁端部。外面に幅広の鎬蓮弁文が彫られる。	施釉の為不明	施釉の為不明	オリーブ灰色 オリーブ灰色	微砂 ◎	施釉	48
503	碗	底径 (5.8) 残高 3.3	陶器碗の底部。肥前系。	施釉の為不明	施釉の為不明	明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	微砂 ◎	施釉	48
504	皿	底径 (5.2) 残高 0.9	土師質土器小片。底面に回転糸切り痕跡が僅かに残る。	ナデ [底]回転糸切り痕	ナデ	褐灰色 灰白色	石(1) ◎		
505	坏	底径 (8.0) 残高 0.8	土師質土器小片。器面の摩滅が顕著。	マメツ	回転ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長(1) ◎		
506	坏	口径(14.1) 残高 2.2	体部中位で僅かに屈曲する。端部は丸く仕上げられる。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ◎		
507	捏鉢	口径(20.0) 残高 2.0	端部内面直下に回転ナデによる稜線を看取。端部外面に自然釉。	回転ナデ	回転ナデ	灰・灰白色 灰白色	微砂 ◎	自然釉	48

第11章　枝松遺跡9次－2区の調査－

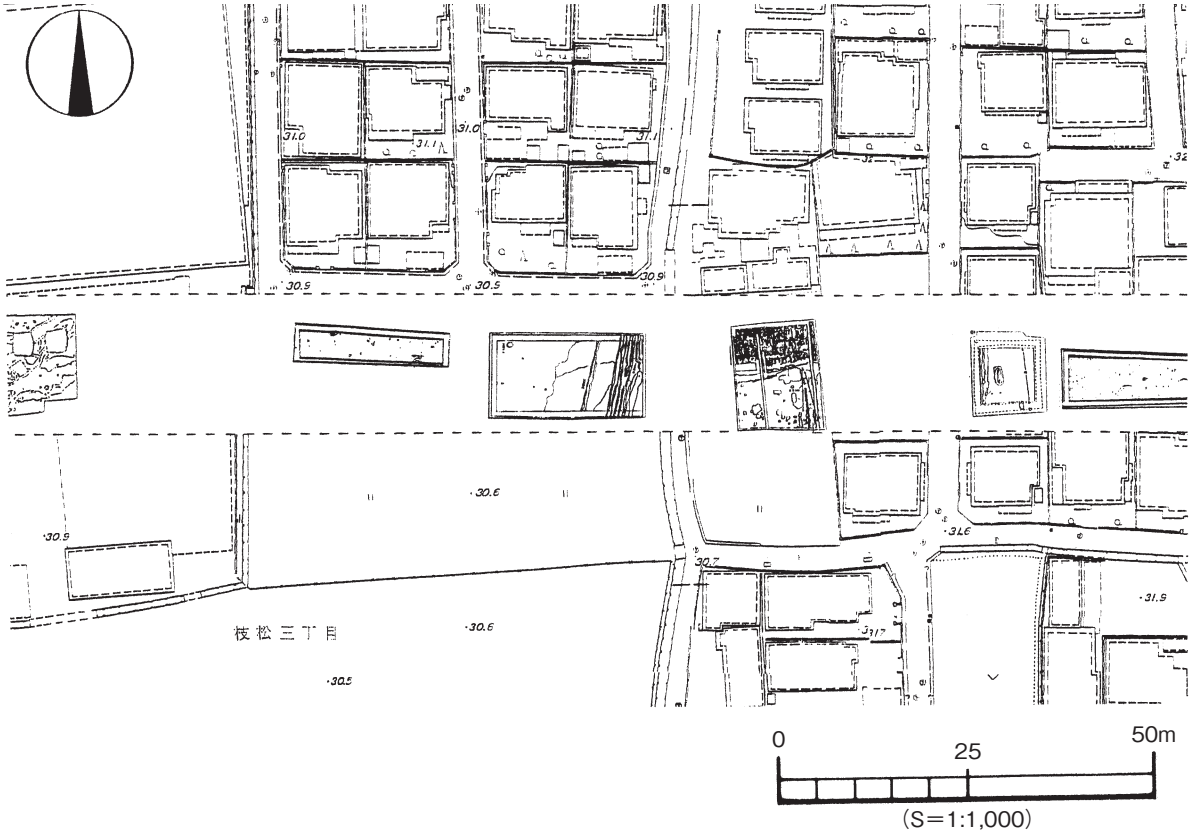
1. 調査の経緯

本調査地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地（松山地区）「№83　枝松遺物包含地」と「№110　釜ノ口遺跡」に挟まれた指定外区域に位置する。調査にあたっては、掘削した土砂・排土置き場を得るために調査区を3つに分割し、順次作業を行った。2区は調査対象地の中央に設定した。調査前は宅地である。東側に市道桑原98号線が南北方向に延びる。2区の調査面積は230㎡である。

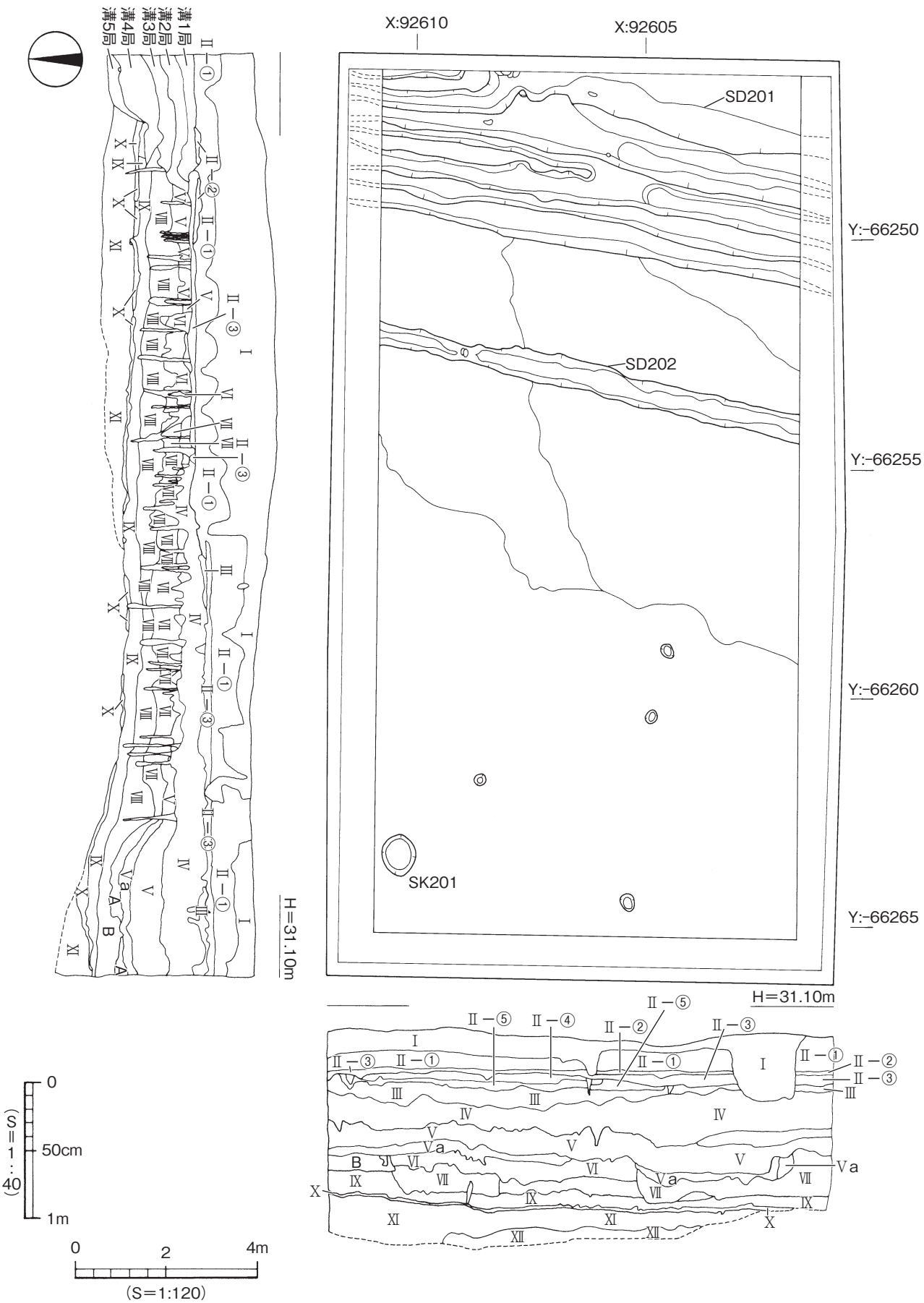
2. 層位

調査地周辺は、約25,000年～22,000年前に噴出・降下した姶良・丹沢火山灰（以下、AT火山灰）と約6,300年前に噴出・降下した鬼界アカホヤ火山灰が顕著に確認されている地域である。

2区の層序は上から第Ⅰ層：明褐色砂質土（7.5YR 5/6）、第Ⅱ①層：暗青灰色砂質土（10BG 4/1）、第Ⅱ②層：にぶい褐色土（7.5YR 5/4）、第Ⅱ③層：赤褐色土（5YR 4/6）、第Ⅱ④層：暗赤褐色土（5YR 3/6）、第Ⅱ⑤層：黄灰色土（2.5Y 4/1）、第Ⅲ層：黒色土（7.5Y 2/1）、第Ⅳ層：暗褐色土（7.5YR 3/4）、第Ⅴ層：明黄褐色砂礫層（2.5Y 6/8）、第Ⅴａ層：にぶい褐色砂礫層（7.5YR 5/4）、第Ⅵ層：明黄褐色層（2.5Y 6/8）、第Ⅶ層：明黄褐色微砂質層（2.5Y 6/8）、第Ⅷ層：にぶい黄橙色細粒土（10YR



第138図　調査区位置図



第 139 図　2 区遺構配置図、北壁・西壁土層図

6/4)、第Ⅸ層：褐色粗粒火山灰層（7.5YR 4/3)、第Ⅹ層：黄橙色細粒火山灰層、第Ⅺ層：にぶい褐色砂質土（7.5YR 5/4)、第Ⅻ層：灰褐色砂質土（5YR 5/2)、第ⅩⅢ層：褐色粗砂層（7.5YR 4/4)、第ⅩⅣ層：黒褐色粗砂層（7.5YR 3/2)、第ⅩⅤ層：灰色粗砂層（10Y 5/1)、第ⅩⅥ層：黄色砂層（5Y 7/6)、第ⅩⅦ層：灰オリーブ色砂層（5Y 6/2)、間層Ａ：橙色粗粒砂層（7.5YR 6/6)、間層Ｂ：明褐色微砂層（7.5YR 5/6)、間層Ｃ：黄褐色土（2.5Y 5/4）である。第Ⅰ層は造成土である。真砂土が大半を占め、部分的にグリ石・コンクリート片等が含まれる。第Ⅱ層の上層（Ⅱ①～Ⅱ②）は現代の耕作土と床土（水田耕作に伴う客土）であり、下層（Ⅱ③･Ⅱ④）は中世代の水田層である。第Ⅳ層は調査区全域でみられ、土壌化が顕著に進行する。遺物の検出はない。1～3㎜大の砂の粒子が混入する。第Ⅴ層は調査区全域でみられ、直上層の染み込みや植物根の生育等の影響を受け、土壌化が顕著に進行している。本層以下から遺物の検出はない。第Ⅵ・Ⅶ層はＡＴ火山灰の2次堆積層である。第Ⅷ層～第Ⅹ層はＡＴ火山灰の1次堆積層で、第Ⅹ層は成層である。遺構の検出は、第Ⅳ層上面で行った。

3. 遺構と遺物

遺構は溝（SD）2条、土坑（SK）1基、柱穴（SP）4基を検出した。遺物は土師質土器、須恵器、陶磁器が出土した。以下、主な遺構について記述する。

SD201（第139図、図版44-1・2、48-2） SD201は、調査区の東壁沿いに南北方向に延びる。北北東から南南西へ緩やかな傾斜をなす。検出規模は長さ10.85m、幅4.56m、深さ1.0mを測る。埋土は上から第1層：灰黄褐色砂質土（10YR 6/2)、第2層：にぶい黄橙色砂質土（10YR 6/3)、第3層：黄褐色砂質土（2.5Y 5/3)、第4層：灰オリーブ色砂層（5Y 5/2)、第5層：灰色粗砂層（7.5Y 5/1）である。出土遺物は土師質土器、中世須恵器、陶磁器が出土した。

出土遺物（第140図） 508～519は土師質土器である。508～510、512・513は坏である。508・509の体部は底部から「く」字状に直線的に立ち上がる。514は椀の底部。515～518は土釜である。519は土鍋の口縁部片。520は東播系須恵器の甕。521～523は白磁。523の口縁端部は玉縁状を呈する。時期は出土遺物より12世紀後半～13世紀と考える。

SD202（第139図、図版44-2、48-2） SD202はSD201の西側に併行して流れる。検出規模は長さ9.4m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は灰オリーブ色砂層（5Y 5/2）である。

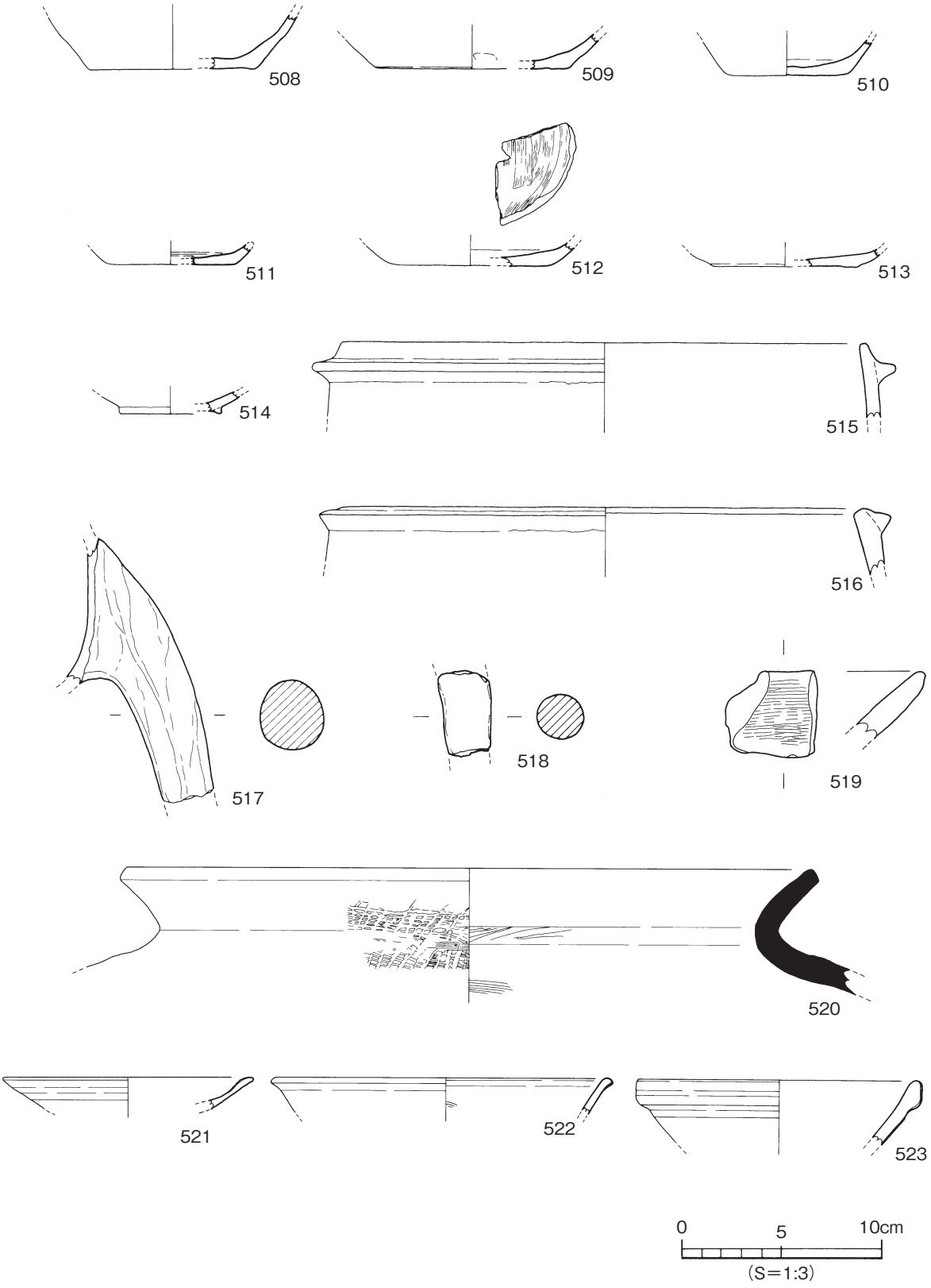
出土遺物（第141図） 524は青磁皿。525は青磁碗の底部。

SK201（第142図､図版43-2･3） SK201は調査区の北西隅にて検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ92㎝、幅74㎝、深さ28㎝を測る。埋土は暗オリーブ褐色土（2.5Y 3/3）である。遺物の検出はない。

2区表採･その他の出土遺物 （第143図、図版48-2） 526は東播系須恵器の捏鉢。口縁部を肥厚し、下方へ僅かに拡張する。527は灰釉陶器碗の体部片。

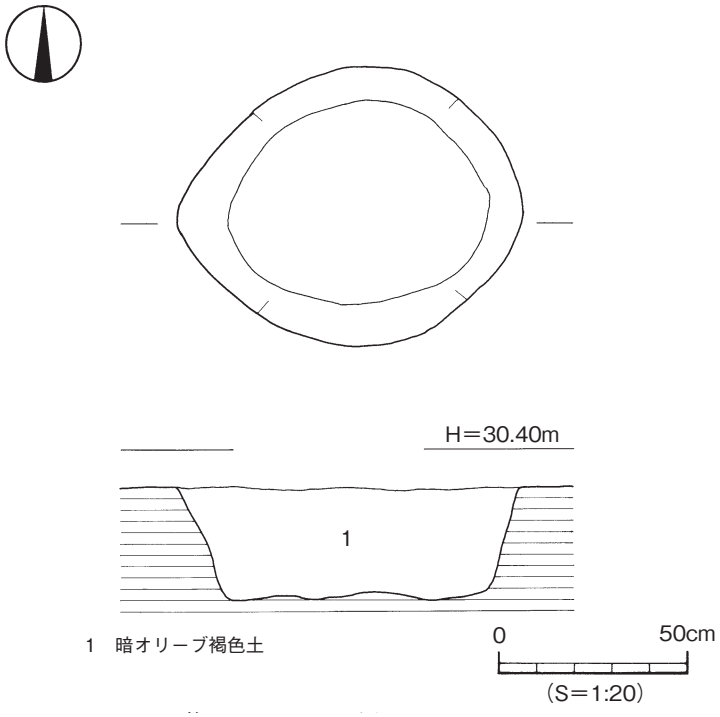
4. 小結

SD201・202は、共に北北東から南南西へ流れる溝である。溝の幅、深さ等の検出規模に差異があるものの埋土及び出土遺物に共通性があることより、同時期に存在したものと考える。

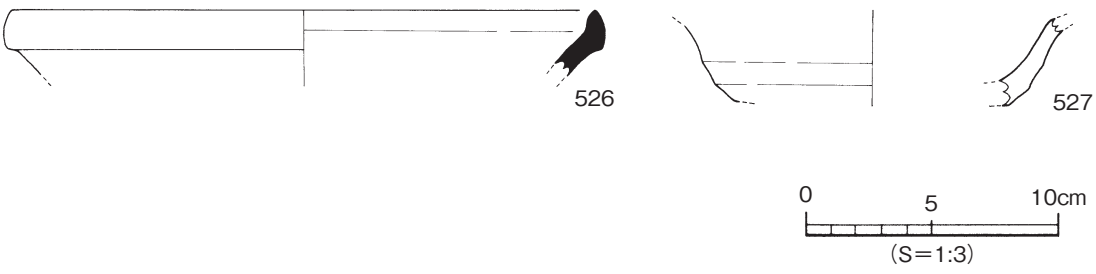


第 140 図　SD201 出土遺物実測図

第141図　SD202出土遺物実測図



第142図　SK201測量図



第143図　2区出土遺物実測図

遺物観察表　－凡例－

(1) 遺物観察表は武正良浩、佐伯利枝、戸川安子が作成した。

(2) 遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　(　)：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。(　) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3 ㎜の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表63　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
508	坏	底径 (8.2) 残高 2.7	焼成状態は非常に良好。底部に板状工具痕を看取。	マメツ [底]回転糸切り痕	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂 ◎		
509	坏	底径 (9.8) 残高 1.7	底部から「く」の字状に直線的に立ち上がる体部片。焼成良好。	ナデ [底]回転糸切り痕	ナデ(指頭痕あり)	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂 ◎		
510	坏	底径 (5.9) 残高 1.8	底面に回転糸切 り痕が僅かに残る。	マメツ [底]回転糸切り痕	マメツ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		
511	皿	口径 (8.0) 底径 (6.4) 残高 1.0	底部内側に回転ヨコナデによる段が残る。	マメツ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		
512	坏	底径 (8.2) 残高 1.2	内面はハケ状工具による丁寧な仕上げ。	ナデ [底]回転糸切り痕	ハケ(7本/cm)	淡黄色 淡黄色	微砂 ◎		
513	坏	底径 (7.1) 残高 0.9	底部切り離し後、手持ちによる内部ナデ調整。	ナデ [底]回転糸切り痕	ナデ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		
514	椀	底径 (5.0) 残高 1.1	輪高台付土師器椀。内外面共に器面の調整不明。	マメツ	マメツ	明黄褐色 明黄褐色	微砂 ○		
515	土釜	口径(26.2) 残高 3.7	僅かに内湾する口縁部片。外面に断面三角形状の鍔を貼付。	[口上]ヨコナデ [口下]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎	煤付着	48
516	土釜	口径(26.0) 残高 3.3	僅かに内湾する口縁部片。外面直下に断面三角形状の鍔を貼付。	[口][タガ上]ナデ [タガ下]ヨコナデ	ナデ	暗褐・黒色 にぶい黄褐色	石・長(1～5) ○	煤付着	48
517	土釜 脚部	残高 13.2	土師質土器。三足付土釜の脚部上位。接続部外面に焦げが付着。	ナデ	—	明オリーブ灰 ・浅黄橙色	石・長(1～2) ◎	煤付着	48
518	土釜 脚部	残高 4.3	土師質土器。三足付土釜の脚部中位。	マメツ	—	明黄褐色	石・長(1～3) ○		
519	土鍋	残高 4.25	内面に板状工具による明瞭なハケ目が残る。	マメツ [口端]ナデ	ハケ(6本/cm)	橙色 灰褐色	石・長(1～4) ◎	煤付着	
520	甕	口径(34.0) 残高 6.2	東播系須恵器。頸部外面に格子目叩き成形痕を看取。	タタキ	[口]ヨコナデ [頸]タタキ [肩]ナデ・タタキ	灰色 灰色	石・長(1～6) ◎		48
521	皿	口径(12.4) 残高 2.2	白磁の皿。外面は体部上位から中位まで釉がかかる。	[口]施釉の為不明 回転ナデ	施釉の為不明	明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	微砂 ◎	施釉	48
522	碗	口径(17.0) 残高 1.8	白磁。口縁端面を水平に削り、平坦面を有する。	施釉の為不明	施釉の為不明	明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	微砂 ◎	施釉	48
523	碗 or 鉢	口径(14.2) 残高 3.2	白磁の碗 or 鉢。口縁端部は玉縁状を呈する。	施釉の為不明	施釉の為不明	明緑灰色 明緑灰色	微砂 ◎	施釉	48
524	皿	底径 (4.6) 残高 0.95	青磁。外面は見込みから体部が屈曲して立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ→施釉	灰色 灰色	微砂 密 ◎	施釉	48
525	碗	底径 (5.4) 残高 1.75	青磁碗の底部。外面の釉は畳付付近までかかる。	[高台外]回転ナデ →施釉 [高台内]回転ナデ	回転ナデ→施釉	灰オリーブ色 灰オリーブ色	微砂 ◎	施釉	48
526	捏鉢	口径(23.0) 残高 2.6	東播系須恵器。口縁部を肥厚し、下方へ若干拡張する。	回転ナデ	回転ナデ	灰・暗灰色 灰色	石・長(1～2) ◎		48
527	碗	残高 3.4	灰釉陶器碗の体部片。外面は強い回転ナデにより段をなす。	回転ナデ (一部ナデ)	回転ナデ→施釉	灰白・ 灰オリーブ色 灰白色	微砂 密 ◎	施釉	48

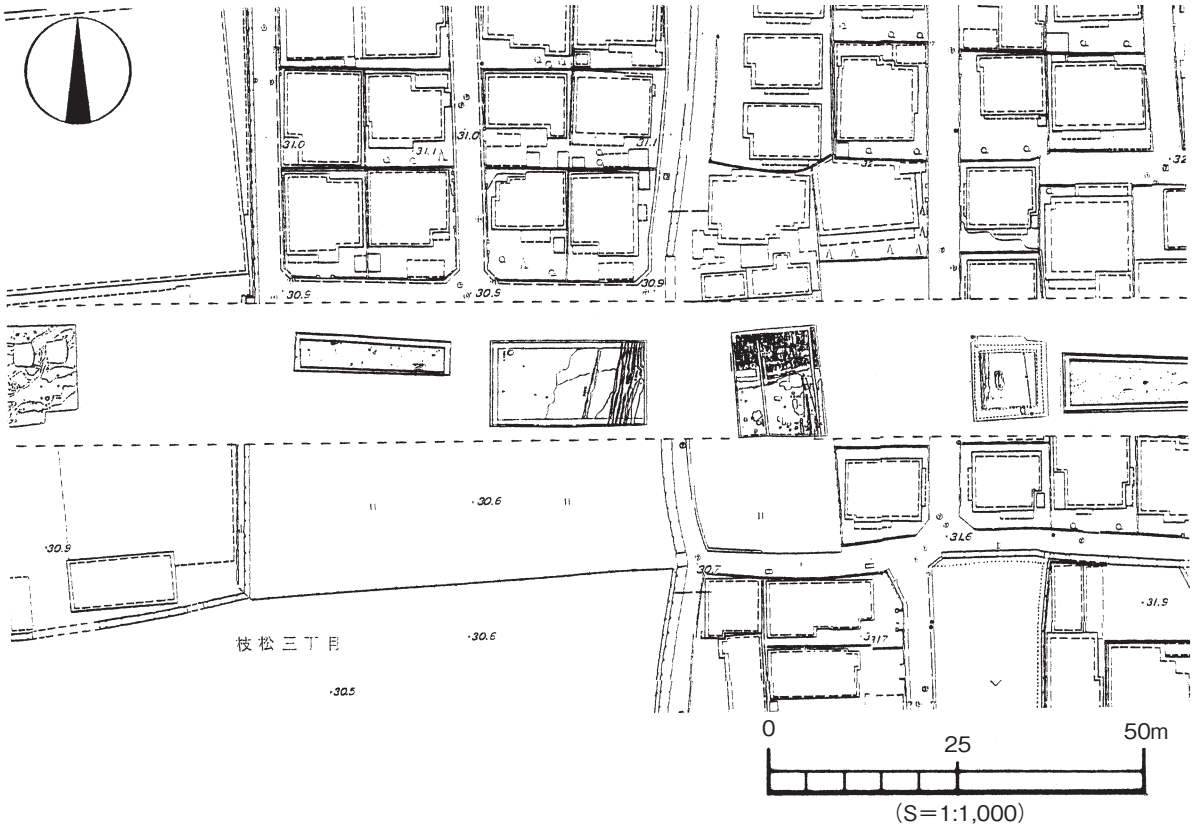
第12章　枝松遺跡9次－3区の調査－

1. 調査の経緯

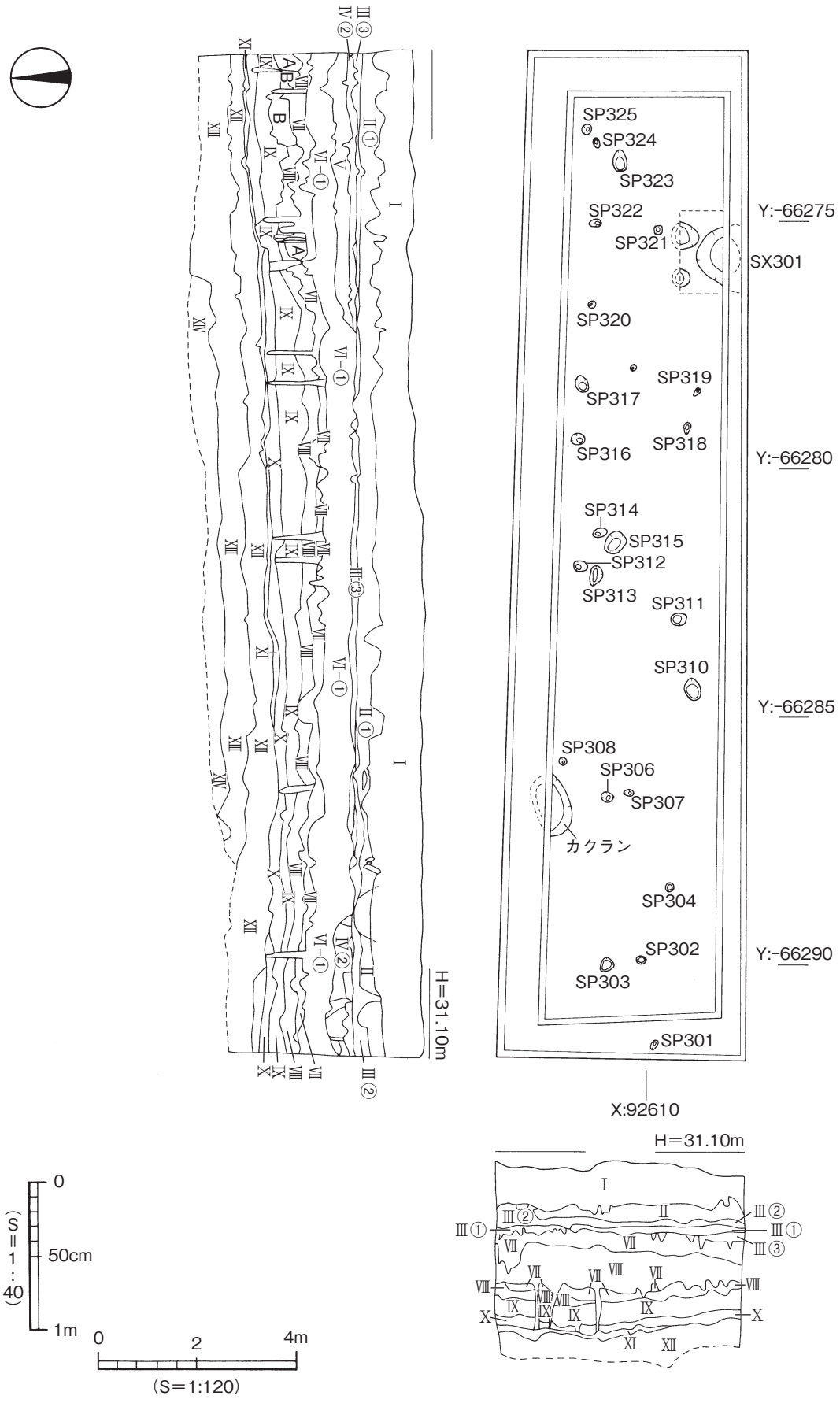
本調査地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地（松山地区）「No.83　枝松遺物包含地」と「No.110　釜ノ口遺跡」に挟まれた指定外区域に位置する。西側は枝松遺跡7次調査地である。北側には閑静な住宅街が広がる。調査にあたっては、掘削した土砂・排土置き場を得るために調査区を3つに分割し、順次作業を行った。3区は調査対象地の西側に設定した。調査前は宅地である。3区の調査面積は100㎡である。

以下、調査工程を略記する。

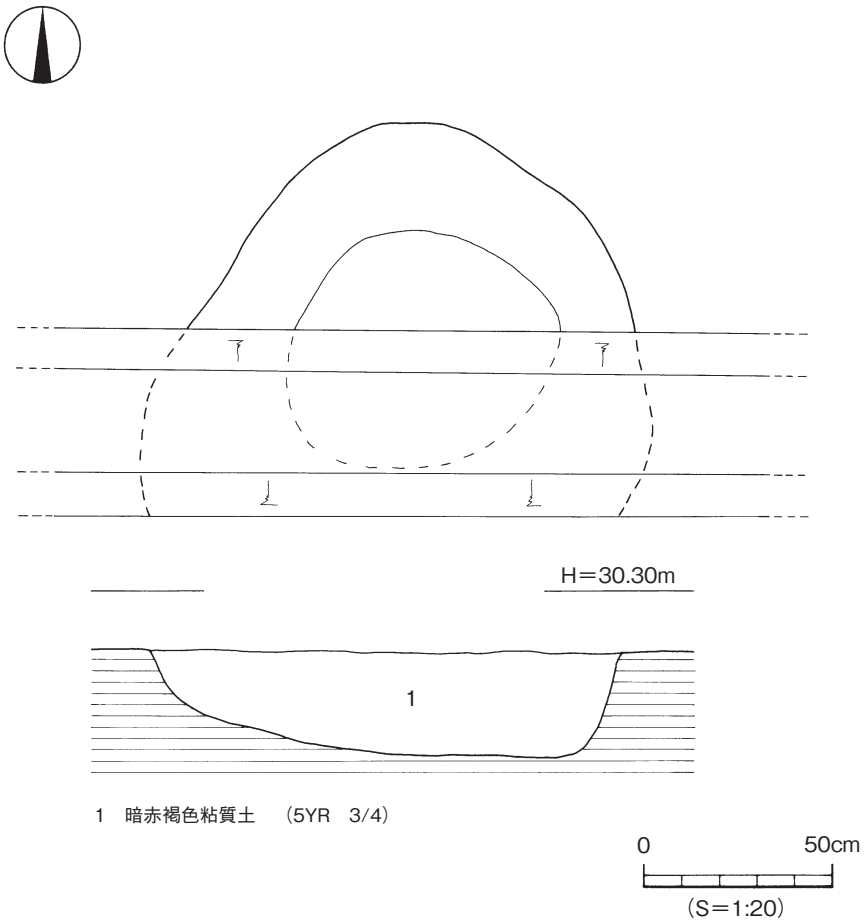
8月24日　3区の発掘作業を開始する。重機を使用して土砂（近現代の耕作土を含む）の掘削・運搬を行う。
8月30日　台風17号接近の為、現場作業中止。
9月 7 日　台風18号接近の為、現場作業中止。
9月28日　高所作業車による3区の完掘写真撮影。重機による埋め戻しを開始。
9月29日　台風21号接近。
9月30日　重機による埋め戻し作業を完了し、野外調査を終了する。



第144図　調査区位置図



第 145 図　３区遺構配置図、北壁・西壁土層図



第 146 図　SX301 測量図

2. 層位

調査地周辺は、約 25,000 年～ 22,000 年前に噴出・降下した姶良・丹沢火山灰（以下、AT 火山灰）と約 6,300 年前に噴出・降下した鬼界アカホヤ火山灰が顕著に確認されている地域である。本調査においては、AT 火山灰が検出された。

3 区の層序は上から第Ⅰ層：明褐色砂質土（7.5YR 5/6）、第Ⅱ①層：暗青灰色砂質土（10BG 4/1）、第Ⅱ②層：青灰色土（5B 5/1）、第Ⅲ①層：浅黄色土（2.5Y 7/4）、第Ⅲ②層：灰黄色土（2.5Y 6/2）、第Ⅲ③層：にぶい黄色土（2.5Y 6/4）、第Ⅳ①層：黒褐色土（1 ～ 3 ㎜大の白色角礫が多数含有される 10YR 3/2）、第Ⅳ②層：黒褐色粘質土（黒色、或いは暗赤褐色を呈する粒状が多数含まれる 10YR 3/2）、第Ⅴ層：灰黄褐色土（10YR 4/2）、第Ⅵ層：暗赤褐色粘質土（5YR 3/4）、第Ⅶ層：明黄褐色土（2.5Y 6/6）、第Ⅷ層：明黄褐色砂質層（2.5Y 6/6）、第Ⅸ層：明黄褐色微砂質層（2.5Y 6/6）、第Ⅹ層：褐色粗粒火山灰層（10YR 4/4）、第Ⅺ層：黄橙色細粒火山灰層（10YR 7/8）、第Ⅻ層：にぶい黄褐色硬砂質土（10YR 5/3）、第ⅩⅢ層：にぶい黄褐色砂質土（10YR 5/3）、第ⅩⅣ層：灰褐色砂礫層（7.5YR

5/2)、間層 A 層 : 明黄褐色硬砂層（2.5Y 6/8)、間層 B 層 : にぶい褐色軟粘質層（7.5YR 5/4）である。第Ⅰ層は造成土である。真砂土が大半を占め、部分的にグリ石・コンクリート片等が含まれる。第Ⅱ層は現代の耕作土と床土（水田耕作に伴う客土）である。第Ⅲ層は中世代の水田層である。第Ⅳ層は調査区全域でみられ、土壌化が顕著に進行する。本層中から遺物は検出されなかった。第Ⅴ層は調査区全域でみられ､1 ～ 3㎜大の砂の粒子が混入する｡直上層の染み込みや植物根の生育等の影響を受け、土壌化が顕著に進行している。本層以下から遺物の検出はない。第Ⅶ～Ⅸ層は AT 火山灰の 2 次堆積層である。第Ⅹ層～第Ⅺ層は AT 火山灰の 1 次堆積層で、第Ⅺ層は成層である。遺構の検出は、第Ⅳ①層上面で行った。

3. 遺構と遺物

検出した主な遺構は土坑（SK）1 基、柱穴（SP）25 基、性格不明遺構（SX）1 基である。
出土遺物は遺構内より土師器小片が出土している。

SX301（第 146 図、図版 47-2） SX301 は調査区南東で検出された。一部は調査区南壁にかかる。平面形は楕円形を呈するものと考える。規模は長さ 104 ㎝、幅 136 ㎝、深さ 28 ㎝を測る。埋土は暗赤褐色粘質土（5YR 3/4）である。遺物の検出はない。

4. 小結

3 区の調査では、中世の土坑や柱穴を検出した。SX301 は南壁トレンチ東側で検出され、土坑状を呈するものである。しかしながら出土遺物はなく、形状及び埋土に人為的な要素が看取できないことから、自然的な落ち込みの可能性がある

第13章　枝松遺跡10次－1区の調査－

1. 調査の経緯

本調査地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地（松山地区）「№110　釜ノ口遺跡」の東方、「№113　枝松五丁目遺物包含地」の北方、「№83　枝松遺物包含地」の西方に接する指定外区域に位置する。調査にあたっては、掘削した土砂・排土置き場を得るために調査区を3つに分割し、順次作業を行った。1区は調査対象地の西側に設定した。調査前は宅地である。1区の調査面積は70㎡である。

なお、作業は天候不順による遅延の為、2区とほぼ同時進行で行った。

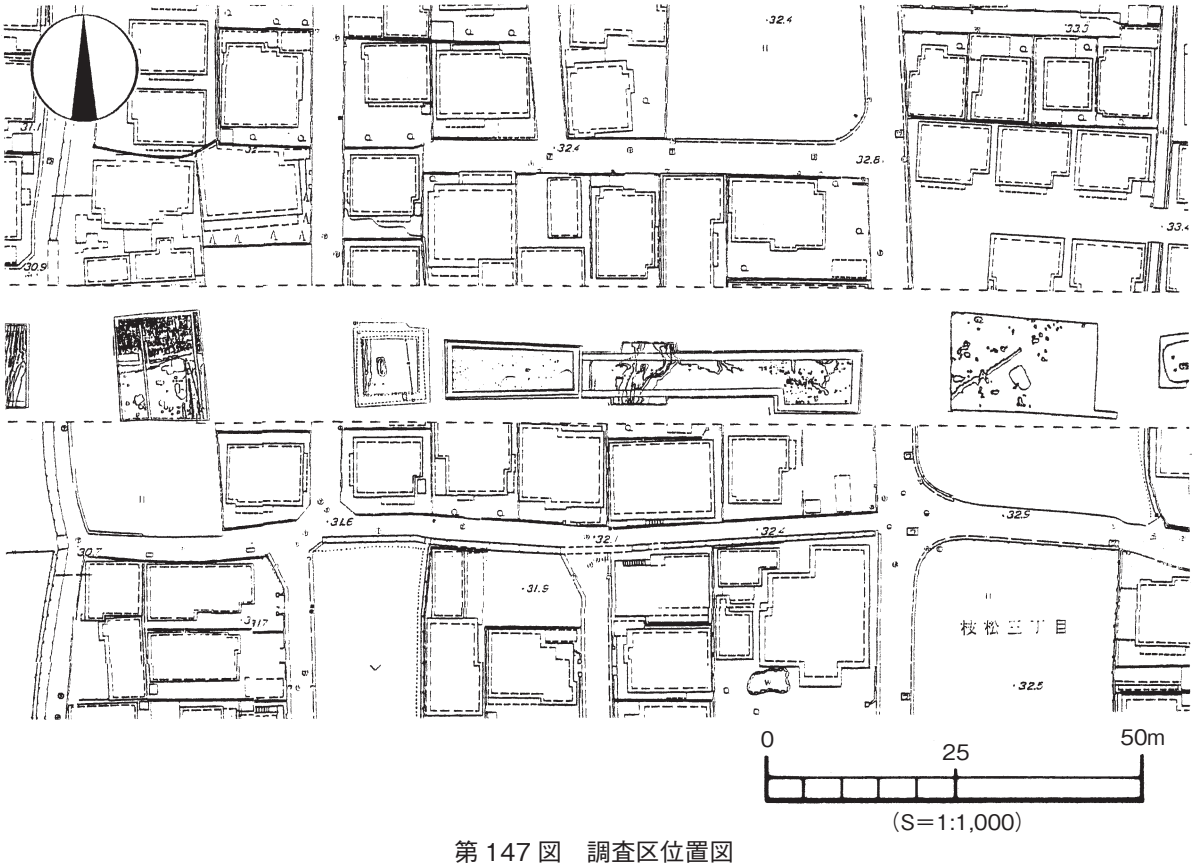
以下、調査工程を略記する。

平成16年8月2・3日　発掘用具・機材の準備を行う。また安全対策として調査掘削エリアに杭を打設し、安全ロープを用いて縄張りを行う。併せて危険防止のための看板も設置する。

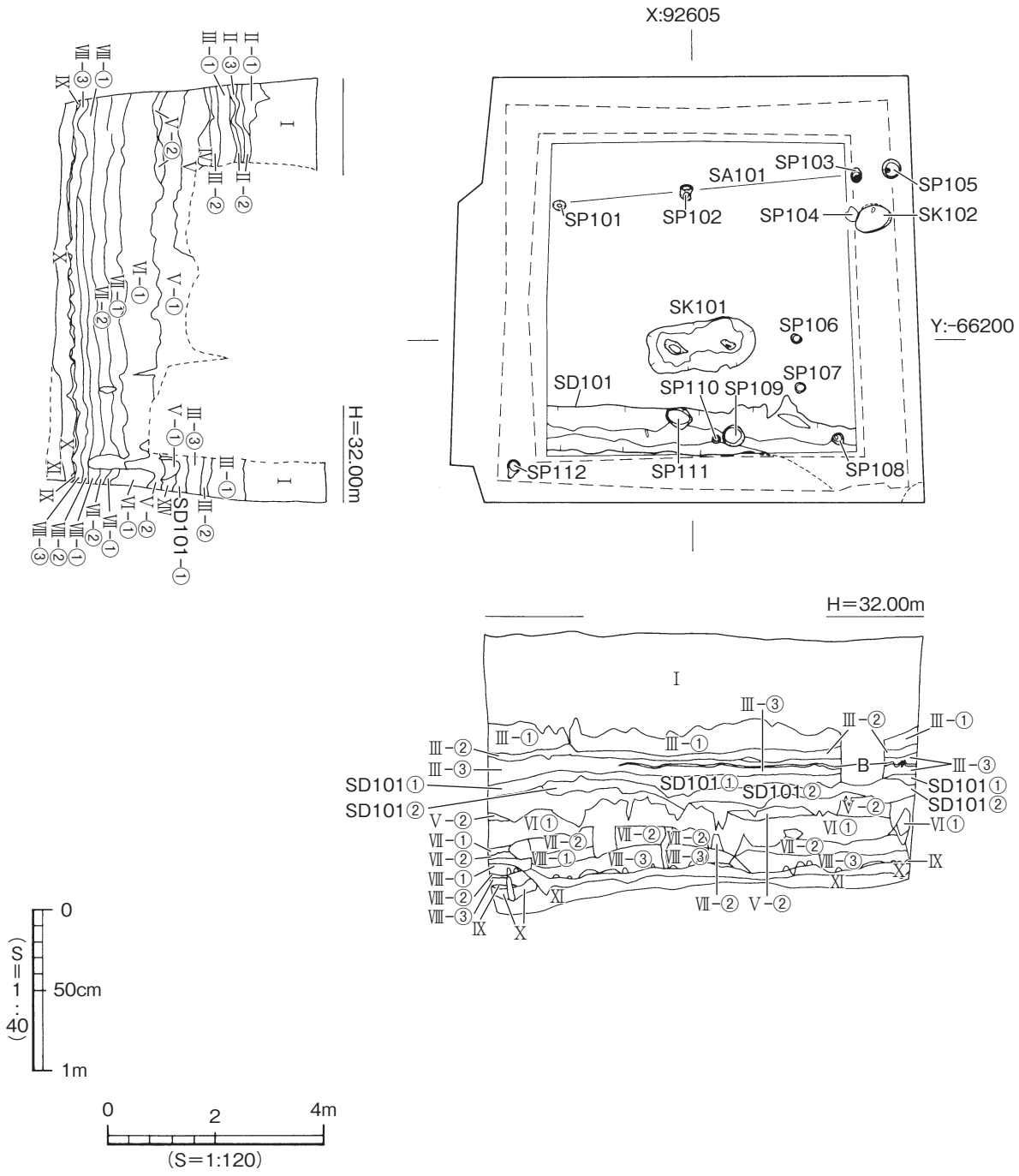
8月2日　調査区防砂ネットを設置する。

8月4日　作業員及び重機を投入し、1区の発掘作業を開始する。重機による土砂（近現代の耕作土を含む）の掘削・運搬は10日まで行う。なお作業開始に先立ち、調査地の近接住民に遺跡発掘調査のお知らせをし、ご理解・ご協力をお願いする。

8月13日～16日　現場：お盆休み。



第147図　調査区位置図



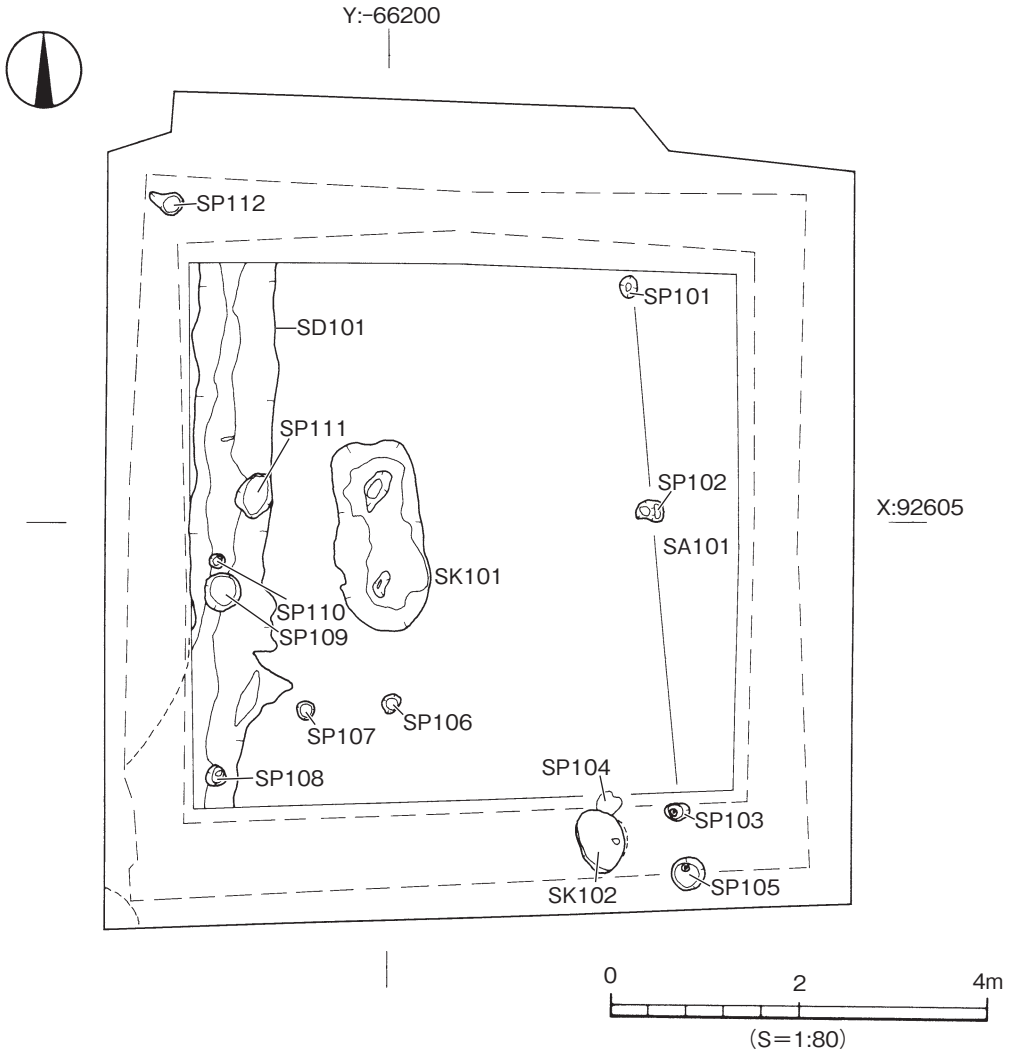
第 148 図　1 区遺構配置図、北壁・西壁土層図

8月17日　1区遺構検出作業。
8月19日　台風15号接近。強風の為、防護ネットを降ろす。
8月27日　調査区北壁、西壁際の土層確認用トレンチ掘削作業。
8月30日　台風16号・17号接近の為、現場作業中止。
9月 7日　台風18号接近の為、現場作業中止。
9月29日　台風21号接近。
10月20日　台風23号接近の為、現場作業中止。
10月28日　高所作業車による1区の写真撮影（遺構検出状況）。
11月12日　基準点測量施工
11月16日　高所作業車による1区の写真撮影（遺構完掘状況）。
11月29日　重機を使用して1区の埋め戻し作業開始。

2. 層位

調査地周辺は、約25,000年～22,000年前に噴出・降下した姶良・丹沢火山灰（以下、AT火山灰）と約6,300年前に噴出・降下した鬼界アカホヤ火山灰が顕著に確認されている地域である。本調査においては、AT火山灰が検出された。

1区の層序は上から第Ⅰ層:明褐色粗砂層(7.5YR 5/8)、第Ⅱ①層:暗緑灰色土(7.5GY 4/1)、第Ⅱ②層:暗緑灰色粘質土（10GY 4/1)、第Ⅱ③層：灰オリーブ色砂層（5Y 5/3)、第Ⅲ①層：暗オリーブ灰色土（5GY 4/1)、第Ⅲ②層:灰オリーブ粘質土（7.5Y 4/2)、第Ⅳ層:黒褐色粘質土（10YR 3/1)、第Ⅴ層:黒褐色粘質土（10YR 2/2)、第Ⅵ層：灰褐色粘質土（7.5YR 4/2)、第Ⅵ①層：暗褐色粘質土（7.5YR 3/4)、第Ⅵ②層：暗褐色粘質土（乳白色角礫混、7.5YR 3/4)、第Ⅶ①層：明黄褐色土（乳白色角礫多量混、2.5Y 6/8)、第Ⅶ②層：明黄褐色土（乳白色角礫少量混、2.5Y 6/8)、第Ⅷ①層：黄橙色粘性土（乳白色角礫少量混、7.5YR 7/8)、第Ⅷ②層：黄橙色粘性土（7.5YR 7/8)、第Ⅸ①層：にぶい黄褐色微砂層（10YR 5/4)、第Ⅸ②層：明黄褐色粘性層（10YR 6/6)、第Ⅸ③層：にぶい褐色微砂層（7.5YR 5/4)、第Ⅹ層：にぶい橙色粘性層（7.5YR 7/4)、第Ⅺ層：オリーブ灰色微砂層（10Y 6/2)、第Ⅻ層：オリーブ黄色微砂層（7.5Y 6/3)、第ⅩⅢ層：オリーブ黄色微砂層（1～3㎜大の礫混、7.5Y 6/3)、第ⅩⅣ層：黄褐色粗砂層（2.5Y 5/3)、間Ａ層：極暗赤褐色土（5YR 2/3)、間Ｂ層：オリーブ黄色土（5Y 6/4)、間Ｃ層：黄色微砂質ブロック層（5Y 7/8)、間Ｄ層：黒褐色粘質土（2.5Y 3/1)、間Ｅ層：暗灰黄色粘質土（2.5Y 5/2）である。第Ⅰ層は造成土である。真砂土が大半を占め、部分的にグリ石・コンクリート片等が含まれる。第Ⅱ層は現代の耕作土と床土（水田耕作に伴う客土）である。第Ⅲ層は中世代の水田層である。第Ⅳ層は調査区全域でみられ、土壌化が顕著に進行する。本層中から遺物は検出されなかった。第Ⅴ層は調査区全域でみられる。第Ⅵ層には1～3㎜大の乳白色角礫が混入する。第Ⅵ①・Ⅵ②層は直上層の染み込みや植物根の生育等の影響を受け、土壌化が顕著に進行している。本層以下から遺物の検出はない。第Ⅶ①～Ⅷ②層はAT火山灰の2次堆積層である。第Ⅸ①～Ⅹ層はAT火山灰の1次堆積層である。第Ⅹ層は成層である。遺構の検出は、第Ⅵ②層上面で行った。



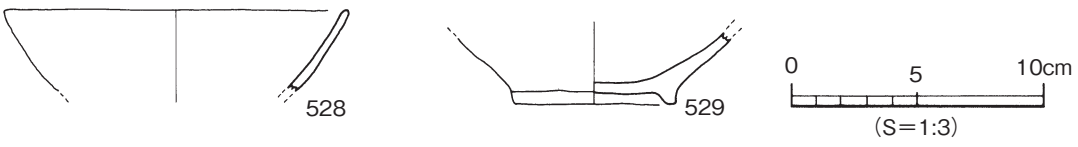
第 149 図　1 区遺構配置図

3. 遺構と遺物

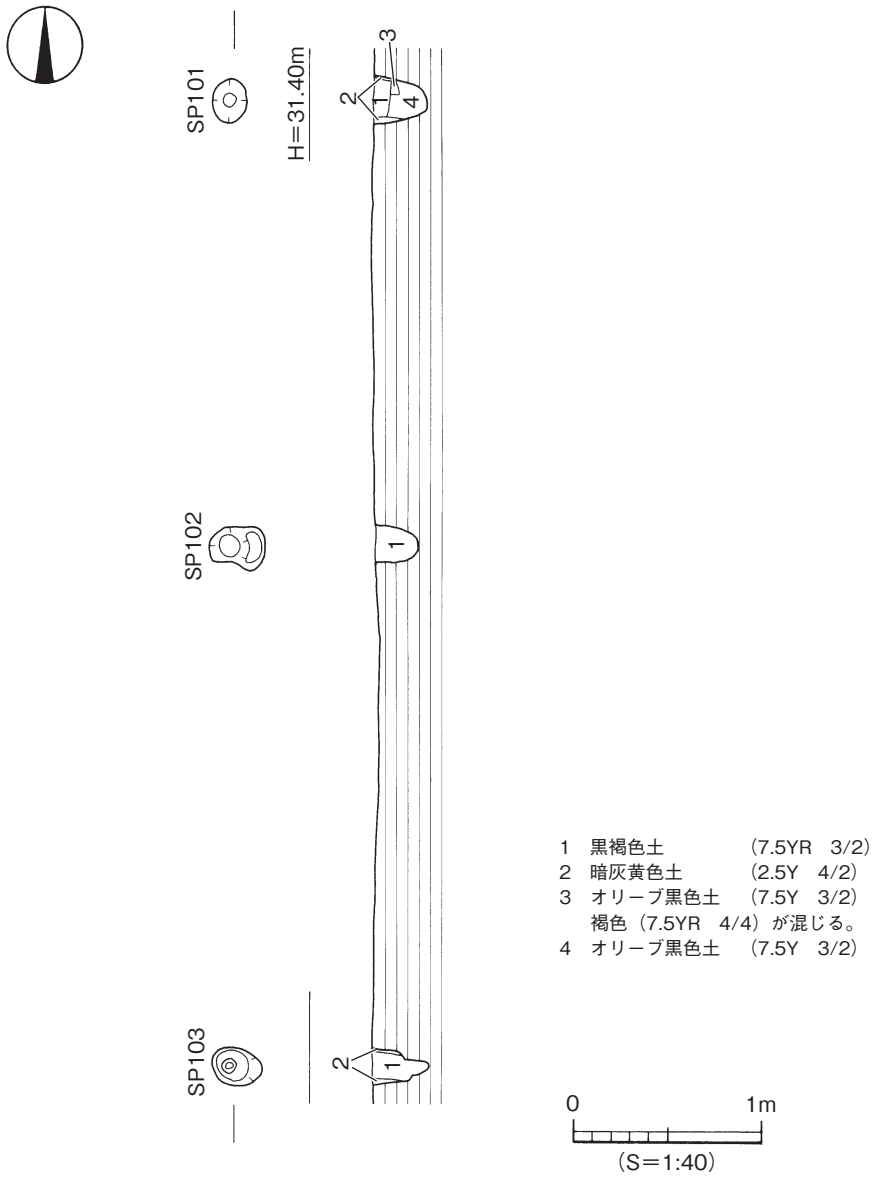
1 区は調査地の西側に位置し、調査は宅地であった。検出した遺構は掘立柱柵列跡（SA）1 条、溝（SD）1 条、土坑（SK）3 基、柱穴（SP）11 基である。出土遺物は土師器片、須恵器片が出土している。以下、主な遺構について記述する。

SD101（第 149 図、図版 50-1）

調査区の北から南へ流れる。東岸を検出した。西岸の一部は調査区外となる。検出規模は南北 5.8m、



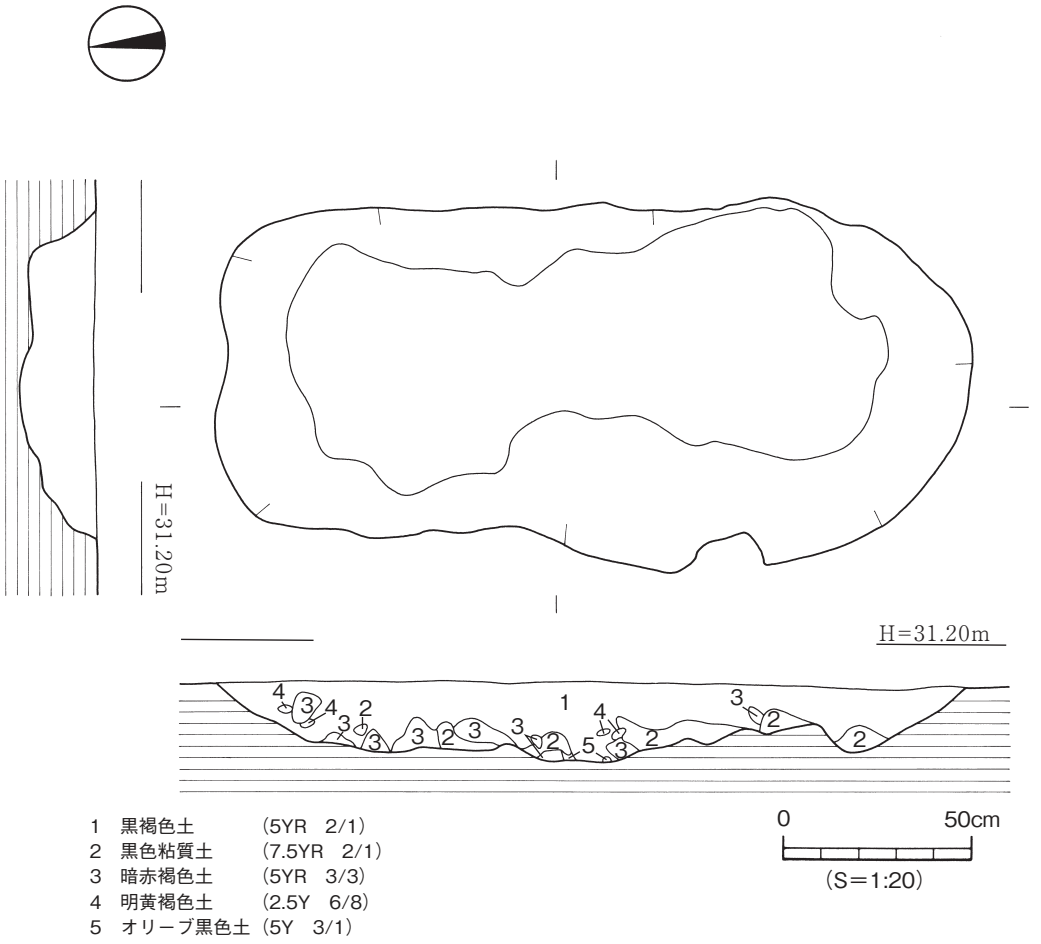
第 150 図　1 区出土遺物実測図



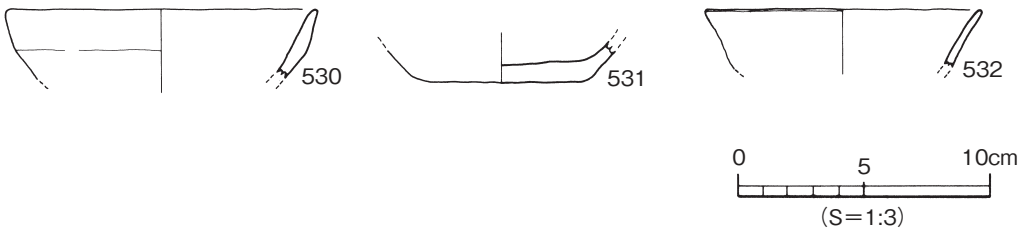
第151図　SA101測量図

東西0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は上から第1層：オリーブ黒色土（7.5Y 3/2)、第2層：オリーブ黒色土（7.5Y 3/1)、第3層：灰色砂質土（7.5Y 5/1）である。遺物は土師質土器、瓦器（528）の小片が出土した。

1区出土遺物（第150図、図版56-1） 528は和泉型瓦器椀。外面は成形時の撫でにより僅かに凹凸が生じる。529は調査区南側トレンチの西端で出土した土師質土器の椀底部。



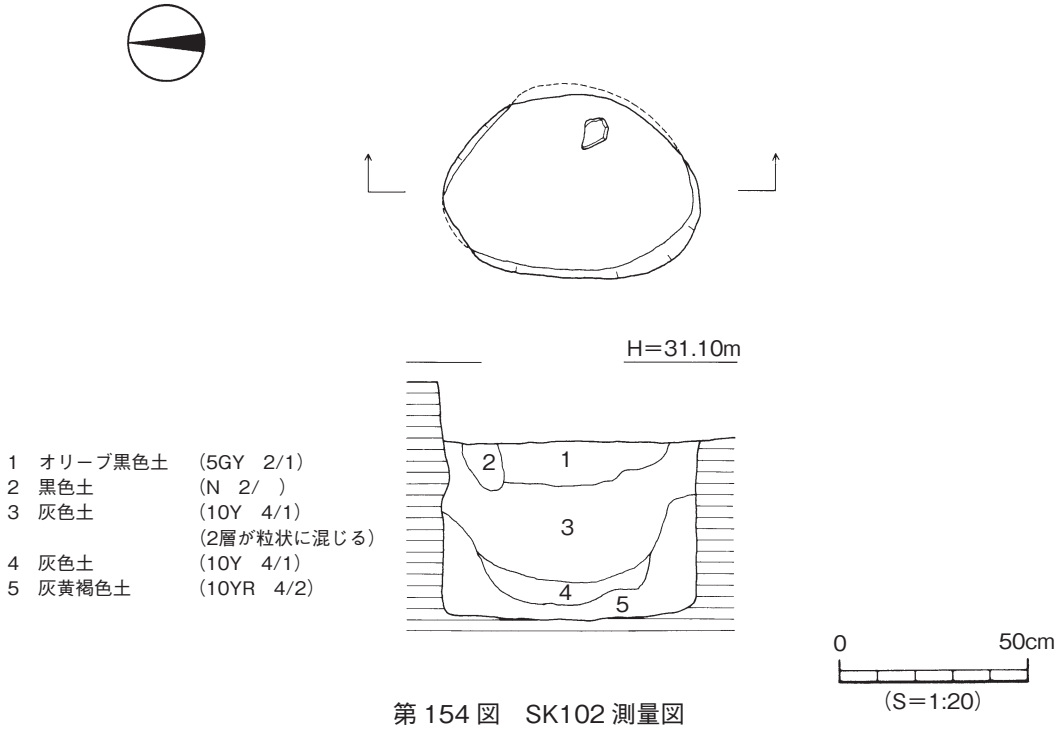
第 152 図　SK101 測量図



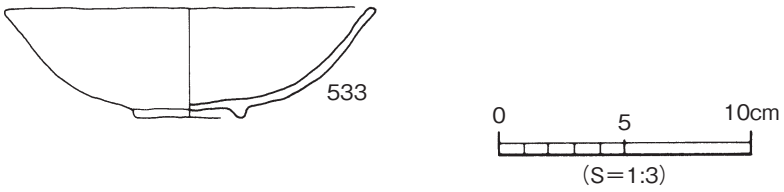
第 153 図　SK101 出土遺物実測図

SA101（第 151 図、図版 49-1）

SA101 は南北 2 間以上の掘立柱柵列跡である。検出規模は長さ 5.1m（2.45m + 2.65m）である。柱穴規模は直径 19.0 ㎝～ 27.0 ㎝、深さ 15.0 ㎝～ 25.0 ㎝を測る。出土遺物は、柱穴内から土師質土器杯の小片 1 点が出土した。時期は出土遺物より中世以降と考える。



第154図　SK102測量図



第155図　SK102出土遺物実測図

SK101（第152図、49-2）

SK101の検出規模は、長軸198㎝、短軸96㎝、深さ22㎝を測る。平面プランは長楕円形を呈する。ベースの埋土は、黒褐色土である。内部から土師質土器杯の小片が数点出土した。時期は出土遺物より中世前半と考える。

SK101出土遺物（第153図）　530～532は土師質土器の杯である。

SK102（第154図、図版50-2）

SK102の検出規模は、長軸68㎝、短軸52㎝、深さ45㎝を測る。平面プランは楕円形を呈する。埋土は5層に分けられる。遺物は土師質土器の小片、瓦器が出土した。

SK102出土遺物（第155図、図版56-1）　533は和泉型瓦器椀である。内湾する体部から、やや外反する口縁部を有する。時期は12世紀頃とする。

4. 小結

1 区の調査では、中世前半と考えられる掘立柱柵列跡や土坑、溝、柱穴等を確認した。検出遺構の多くが南北方向に基軸をとることが分かった。意図的に配置されたことが伺われる。枝松遺跡 9 次調査においても同方向の溝、或いは中世期の水田が検出されていることから、農業経営に関係する遺構の可能性を考える。また、同遺跡 9 次調査に引き続き AT 火山灰層が検出されている。

遺物観察表　－凡例－

⑴以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。

遺物観察表は武正良浩、佐伯利枝、戸川安子が作成した。

⑵遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　　（　）：推定復元値。

調　整　欄　　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3 ㎜の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表64　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
528	椀	口径(13.6) 残高　3.2	和泉型瓦器椀の体･口縁部片。	横ナデ	マメツ(ミガキ?)	黒灰色 黒灰色	微砂 ◎		
529	椀	底径（6.5） 残高　2.8	土師器。底部に断面逆台形状の輪高台が貼り付けられる。	回転ナデ	マメツ	明黄褐色 明黄褐色	石･長(1) ◎		56
530	坏	口径(12.2) 残高　2.8	直線的に立ち上がる体･口縁部片。	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐色 明黄褐色	微砂 ◎		
531	坏	底径（6.8） 残高　1.7	底部片。	マメツ（回転系切り?)	マメツ	灰白色 灰白色	石･長(2) ◎		
532	坏	口径(10.8) 残高　2.3	体･口縁部片。	回転ナデ	マメツ	橙色 橙色	微砂 ◎		
533	椀	口径(14.6) 底径（4.4） 器高　4.3	和泉型の瓦器椀。内湾する体部からやや外反する口縁部をもつ。	口縁部:横ナデ 底･体部:指頭圧痕	マメツ	黒灰色 黒灰色	微砂 ◎		56

第14章　枝松遺跡10次－2区の調査－

1. 調査の経緯

本調査地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地（松山地区）「№110　釜ノ口遺跡」の東方、「№113　枝松五丁目遺物包含地」の北方、「№83　枝松遺物包含地」の西方に接する指定外区域に位置する。調査にあたっては、掘削した土砂・排土置き場を得るために調査区を3つに分割し、順次作業を行った。2区は調査対象地の中央に設定した。調査前は宅地である。2区の調査面積は145㎡である。

なお、作業は天候不順による遅延の為、1区とほぼ同時進行で行った。

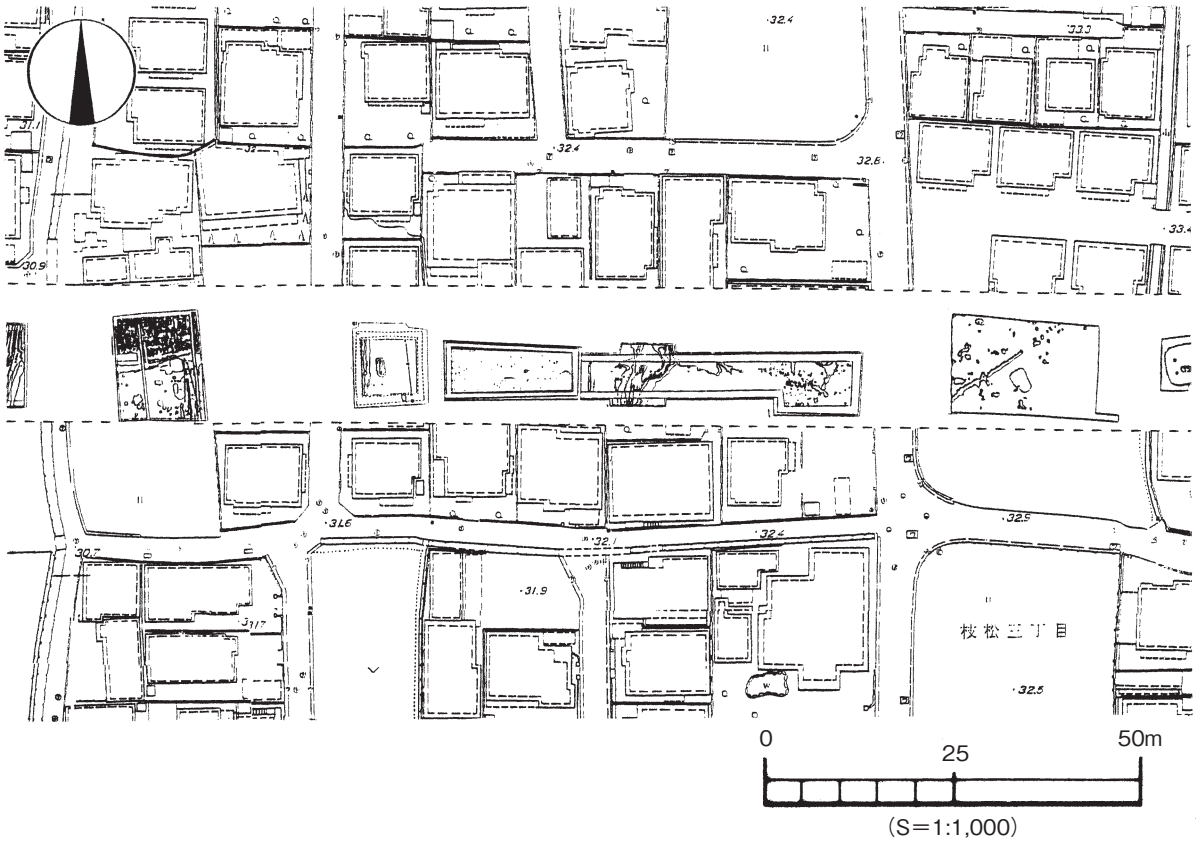
以下、調査工程を略記する。

平成16年8月2・3日　発掘用具・機材の準備を行う。また安全対策として調査掘削エリアに杭を打設し、安全ロープを用いて縄張りを行う。併せて危険防止のための看板も設置する。

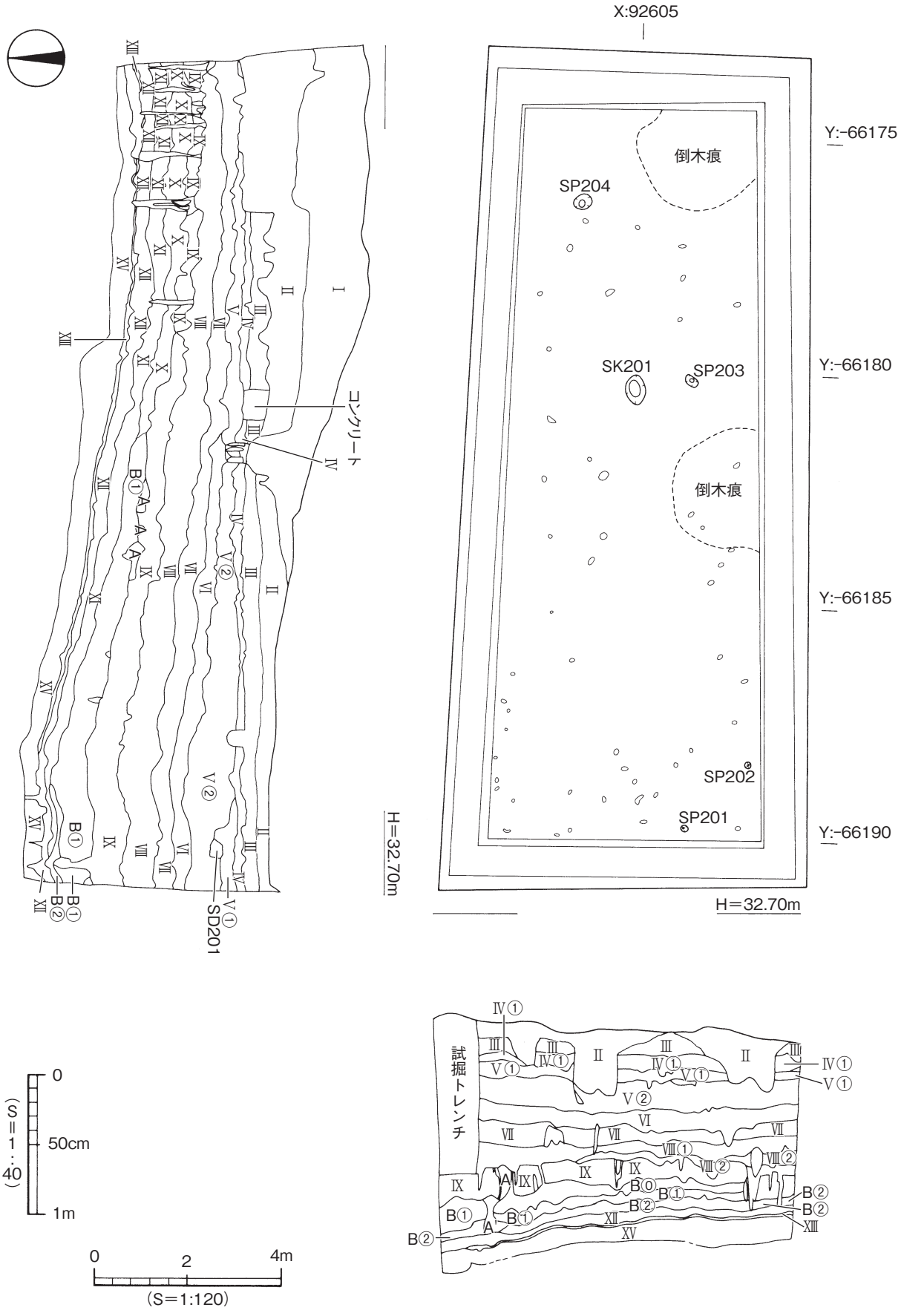
8月2日　調査区防砂ネットを設置する。

8月6日　作業員及び重機を投入し、2区の発掘作業を開始する。重機による土砂（近現代の耕作土を含む）の掘削・運搬は10日まで行う。なお作業開始に先立ち、調査地の近接住民に遺跡発掘調査のお知らせをし、ご理解・ご協力をお願いする。

8月13日～16日　現場：お盆休み



第156図　調査区位置図



第 157 図　2 区遺構配置図、北壁・西壁土層図

8月19日　台風15号接近。強風の為、防護ネットを降ろす。
8月30日　台風16号・17号接近の為、現場作業中止。
9月 7日　台風18号接近の為、現場作業中止。
9月22日　調査区壁精査。
9月29日　台風21号接近。
10月20日　台風23号・24号接近の為、現場作業中止。
10月28日　高所作業車による1区・2区の写真撮影（遺構検出状況）。
11月12日　基準点測量施工
11月25日　高所作業車による2区の写真撮影（遺構完掘状況）。
11月29日　重機を使用して1区・2区の埋め戻し作業開始。

2. 層位

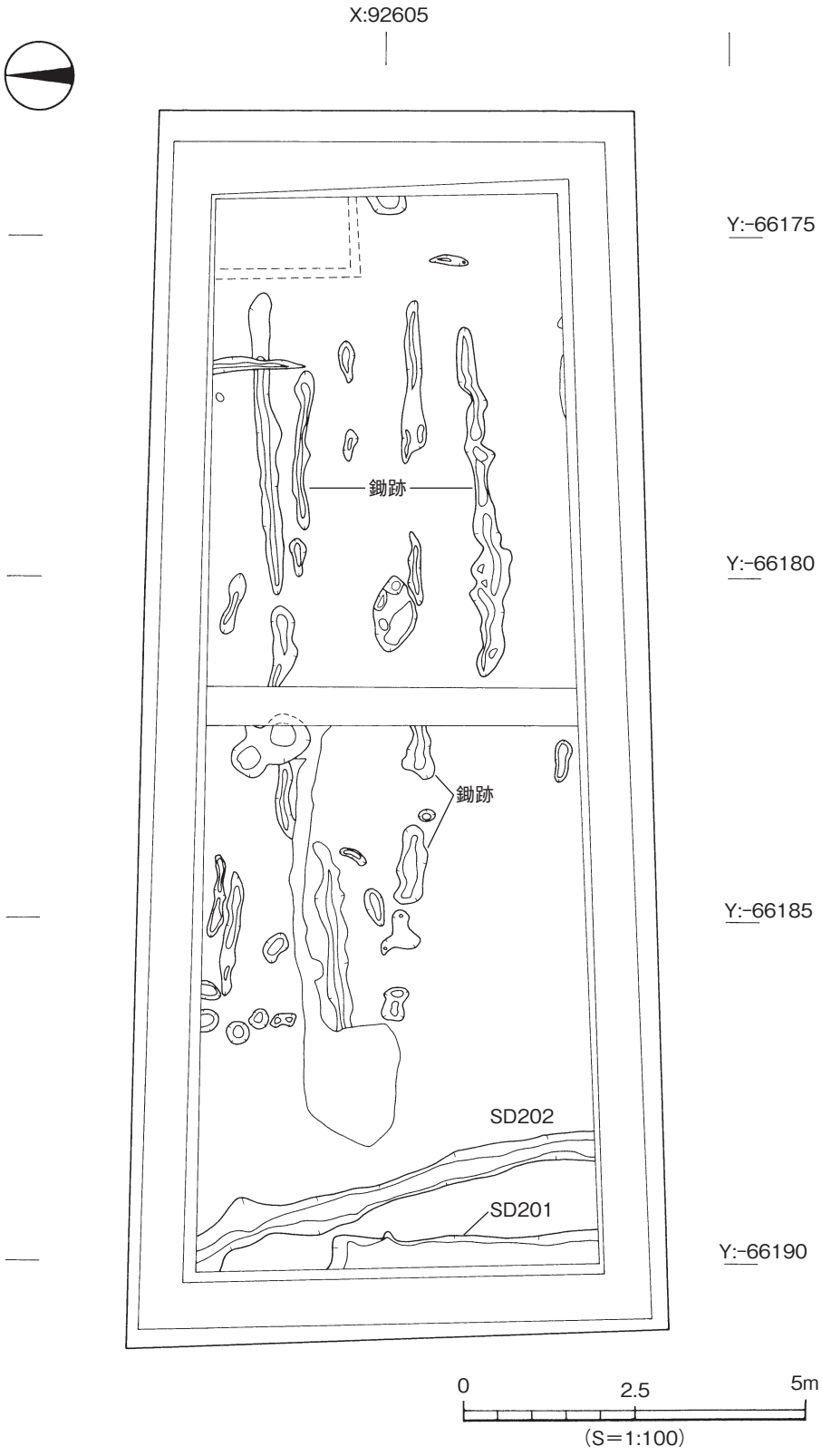
調査地周辺は、約25,000年～22,000年前に噴出・降下した姶良・丹沢火山灰（以下、AT火山灰）と約6,300年前に噴出・降下した鬼界アカホヤ火山灰が顕著に確認されている地域である。本調査においては、AT火山灰が検出された。

2区の層序は上から第Ⅰ層：明黄褐色粗砂（10YR 6/8）、第Ⅱ層：撹乱土、第Ⅲ層：暗オリーブ灰色土（5GY 4/1）、第Ⅳ①層：灰オリーブ色土（5Y 5/3）、第Ⅳ②層：オリーブ黄色土（5Y 6/3）、第Ⅴ①層：灰褐色土（5YR 4/2）、第Ⅴ②層：黒色土（10YR 2/1）、第Ⅵ層：暗赤褐色土（5YR 3/2）、第Ⅶ層：暗赤褐色土（5YR 3/3）、第Ⅷ①層：暗褐色粘質土（7.5YR 3/3）、第Ⅷ②層：暗褐色粘質土（7.5YR 3/4）、第Ⅸ層：明黄褐色土（10YR 6/6）、第Ⅹ層：明黄褐色土（10YR 6/6）、第Ⅺ層：明黄褐色微砂層（10YR 6/6）、第Ⅻ層：褐色微砂層（10YR 4/6）、第ⅩⅢ層：黄橙色粘性層（10YR 7/8）、第ⅩⅣ層：灰褐色粗砂層（7.5YR 4/2）、第ⅩⅤ層：灰黄色粗砂層（2.5Y 6/2）、間層A：明黄褐色微砂層（硬質のブロック状、10YR 6/6）、間層B0：黄褐色粘質層（2.5Y 5/4）、間層B①：黄橙色粘質層（10YR 8/8）、間層B②：黄褐色粘質層（2.5Y 5/4）、間層C：暗赤褐色粘土（5YR 3/5）である。第Ⅰ・Ⅱ層は造成土である。真砂土が大半を占め、部分的にグリ石・コンクリート片等が含まれる。第Ⅲ・Ⅳ層は現代の耕作土と床土（水田耕作に伴う客土）である。第Ⅴ①層は調査区全域でみられ、土壌化が顕著に進行する。本層中から遺物は検出されなかった。1～3㎜大の砂の粒子が混入する。第Ⅴ②層は直上層の染み込みや植物根の生育等の影響を受け、土壌化が顕著に進行している。第Ⅸ～Ⅺ層はAT火山灰の2次堆積層である。第Ⅻ・ⅩⅢ層はAT火山灰の1次堆積層である。第ⅩⅢ層は成層である。遺構の検出は、第Ⅵ層上面で行った。

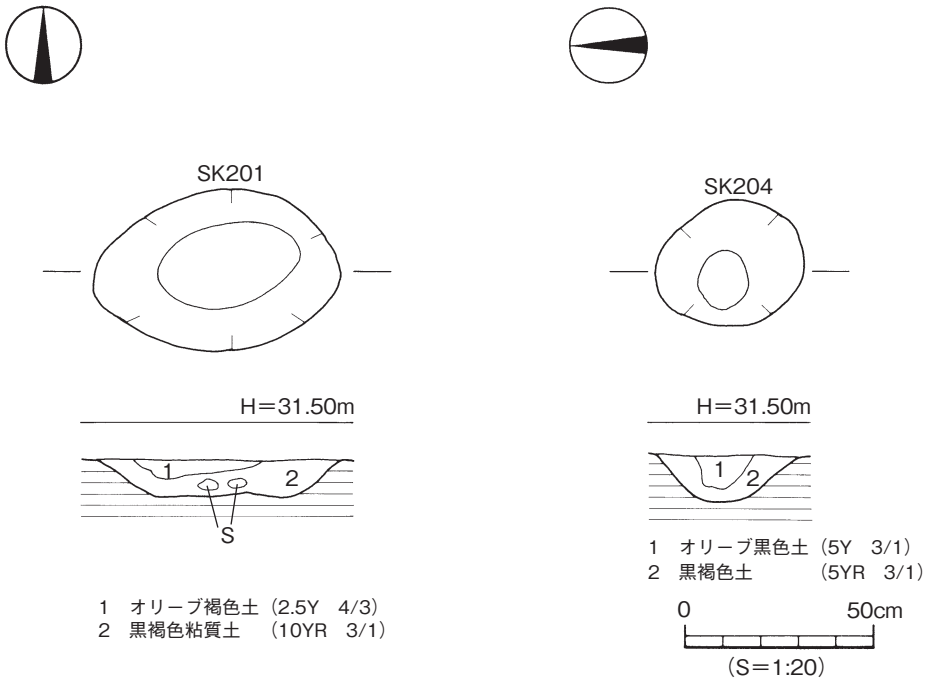
3. 遺構と遺物

検出した主な遺構は溝（SD）1条、土坑（SK）1基、柱穴（SP）4基、倒木痕2カ所、鋤跡痕10条以上である。出土遺物は土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器が出土している。以下、主な遺構について記述する。

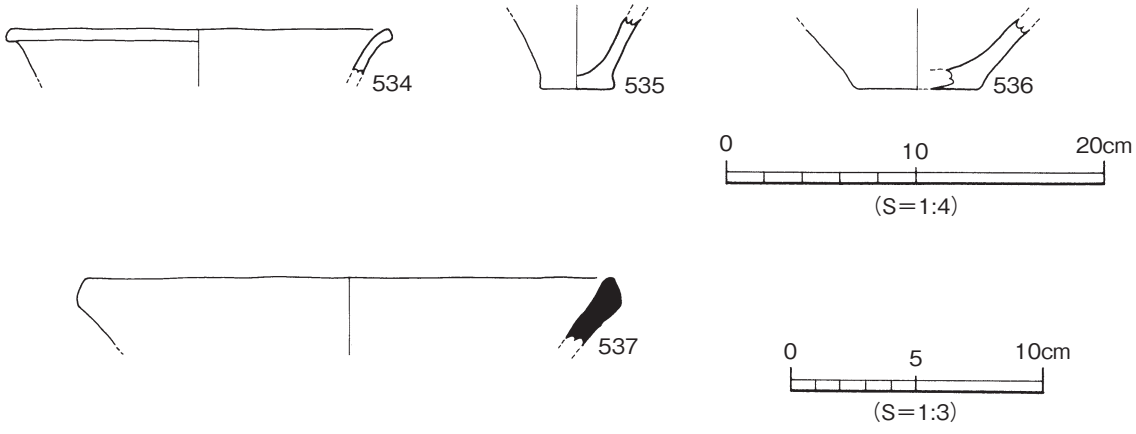
SD201（第158図）SD201は、調査区の西壁沿いに南北方向に延びる。北北西から南南東へ緩やかな傾斜をなす。検出規模は長さ6.05m、幅0.72m、深さ0.05mを測る。埋土は暗灰砂質土である。



第 158 図　2 区遺構配置図（第一遺構図）



第159図　SK201・SK204測量図



第160図　1区出土遺物実測図

遺物は検出されていない。時期は埋土から中世以降と考える。

SK201（第 159 図） SK201 の検出規模は長さ 65 ㎝、幅 42 ㎝、深さ 20 ㎝を測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は検出されていない。時期は埋土から中世以降と考える。

SP204（第 159 図） SP204 の検出規模は長さ 40 ㎝、幅 33 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は検出されていない。時期は埋土から中世以降と考える。

出土地点不明遺物（第 160 図） 534 ～ 536 は弥生土器である。534 は外反する口縁部。端部は下方に僅かに突出する。535 は甕の底部。536 は壺の底部。537 は捏鉢の口縁部。

4. 小結

2 区の調査では、2 つの遺構検出面が確認された。上層では多数の鋤跡痕が検出された。埋土は灰色土である。中からは土師質土器の細片が出土している。埋土及び出土遺物から中近世に位置づけられる。また下層からは中世の溝や土坑、柱穴等を検出した。検出遺構数が周辺地域の遺跡と比較して少ないことから本調査区は中世～近世期において主に農地として利用されていたものと考える。

遺物観察表　－凡例－

⑴以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。

遺物観察表は武正良浩、佐伯利枝が作成した。

⑵遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3 ㎜の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表65　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
534	甕	口径(20.0) 残高 2.5	口縁端部は下方にやや突出する。	横ナデ	横ナデ	灰褐色 褐灰色	石･長(1～3) 金 ◎		
535	甕	底径 (4.0) 残高 3.9	微妙な上げ底を呈する。限りなく平底に近い。	胴下:ミガキ 底:ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石･長(1～4) ◎		
536	壺	底径 (6.8) 残高 3.8	平底の底部から外傾かつ直線的に立ち上がる。	胴下:ミガキ 底:ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 黄橙色	石･長(1～3) ◎		
537	こね鉢	口径(20.6) 残高 2.7	口縁端部片。東播系。	マメツ	マメツ	灰色 灰色	石･長(1～2) ◎		

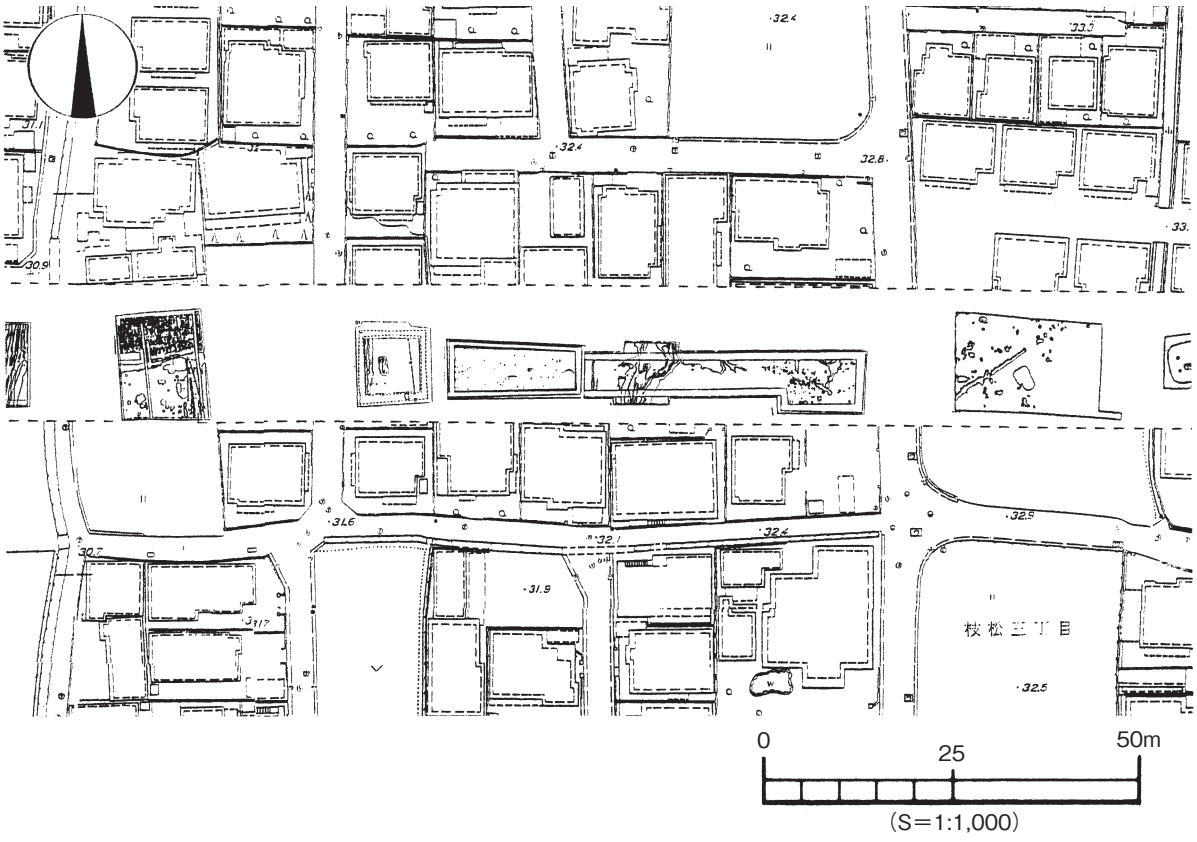
第 15 章　枝松遺跡 10 次－ 3 区の調査－

1. 調査の経緯

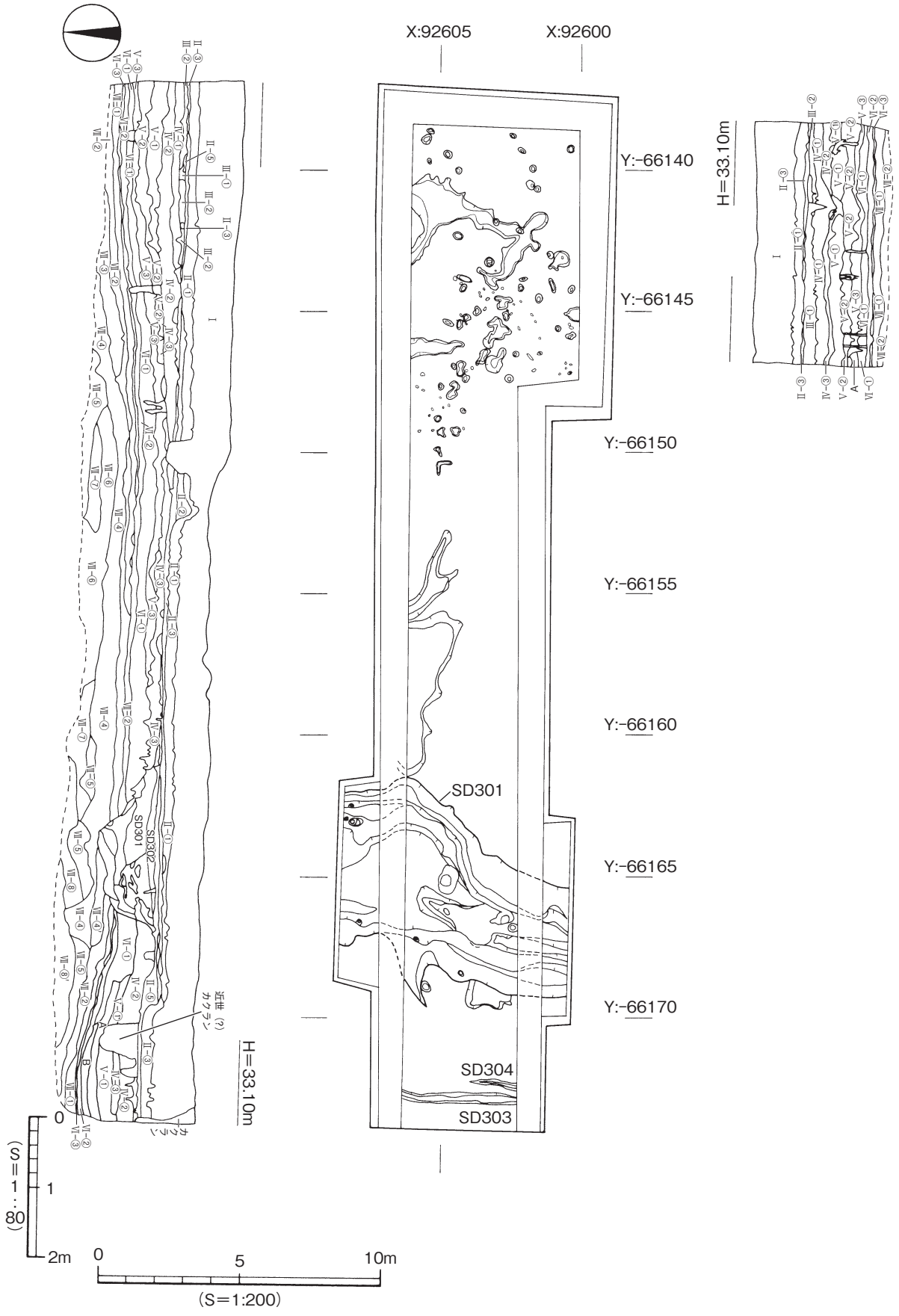
本調査地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地（松山地区）「№ 110　釜ノ口遺跡」の東方、「№ 113　枝松五丁目遺物包含地」の北方、「№ 83　枝松遺物包含地」の西方に接する指定外区域に位置する。調査にあたっては、掘削した土砂・排土置き場を得るために調査区を 3 つに分割し、順次作業を行った。3 区は調査対象地の東側に設定した。調査前は宅地である。3 区の調査面積は 260 ㎡である。

以下、調査工程を略記する。

平成 16 年 8 月 2・3 日　発掘用具・機材の準備を行う。また安全対策として調査掘削エリアに杭を打設し、安全ロープを用いて縄張りを行う。併せて危険防止のための看板も設置する。
8 月 2 日　調査区防砂ネットを設置する。
11 月 30 日　重機を使用して 3 区の排土を 2 区西側へ移動。作業は 12 月 3 日まで続く。
12 月 6 日　遺構検出作業。
12 月 7 日　調査区壁面精査→土層図作成。
12 月 14 日　SD302 の掘り下げ。
12 月 18 日　SD301 の掘り下げ。



第 161 図　調査区位置図



第 162 図　3 区遺構配置図、北壁・西壁土層図

12月21日　高所作業車による3区の完掘写真撮影。
12月27日　重機による埋め戻し作業を完了し、野外調査を終了する。

2. 層位

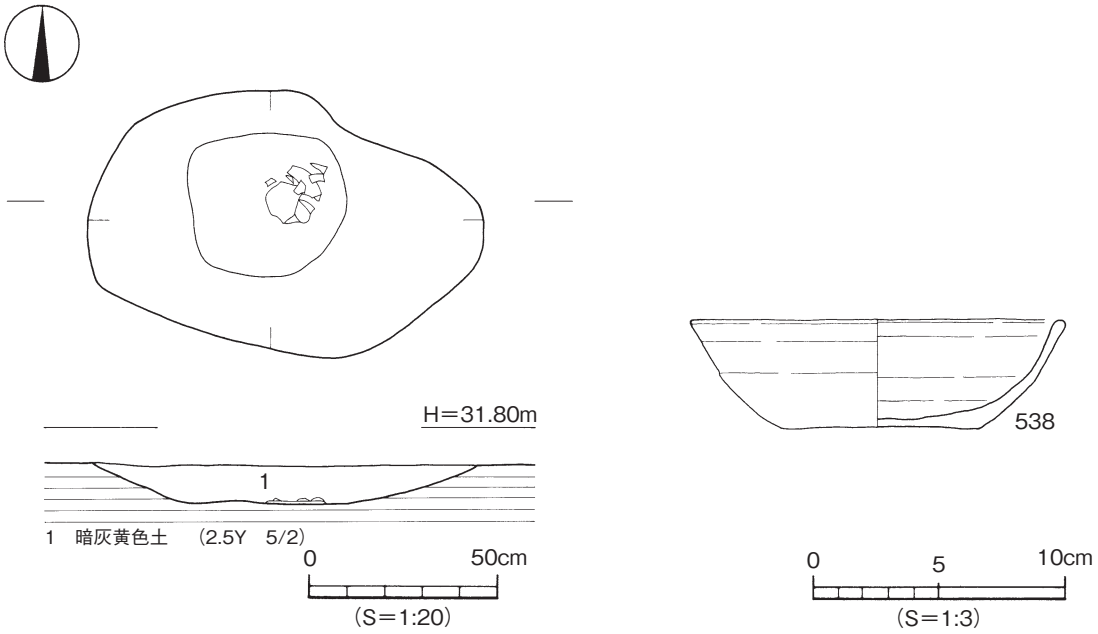
調査地周辺は、約25,000年～22,000年前に噴出・降下した姶良・丹沢火山灰（以下、AT火山灰）と約6,300年前に噴出・降下した鬼界アカホヤ火山灰が顕著に確認されている地域である。本調査においては、AT火山灰が検出された。

3区の層序は上から第Ⅰ層:明黄褐色砂層（2.5Y 7/6)、第Ⅱ①層:暗青灰色土（10BG 4/1)、第Ⅱ②層:暗緑灰色土（10G 4/1)、第Ⅱ③層：灰黄色土（2.5Y 6/2)、第Ⅱ④層：灰黄色土（2.5Y 7/2)、第Ⅱ⑤層：灰色土（7.5Y 6/1)、第Ⅲ①層：黒褐色粘質土（7.5YR 3/2)、第Ⅲ②層：黒褐色粘質土（強粘性、7.5YR 3/2)、第Ⅳ①層：褐色粘質土（7.5YR 4/3)、第Ⅳ②層：暗赤褐色粘質土（乳白色小角礫を多量に含む、5YR 3/2)、第Ⅳ③層：暗赤褐色粘質土（5YR 3/2)、第Ⅴ①層：明黄褐色微砂質層（小角礫を多量に含む、2.5Y 6/6)、第Ⅴ②層:明黄褐色微砂質層（2.5Y 6/6)、第Ⅴ③層:明黄褐色微砂質層（小角礫を僅かに含む、2.5Y 6/6)、第Ⅵ①層：黄色粘微砂層（2.5Y 7/8)、第Ⅵ②層：黄褐色微砂層（2.5Y 5/4)、第Ⅵ③層：黄橙色粘質微砂（7.5YR 7/8)、第Ⅶ①層：灰黄褐色硬質微粒砂層（10YR 5/2)、第Ⅶ②層：灰黄褐色砂層（10YR 5/2)、第Ⅶ③層：灰黄褐色粗砂層（10YR 6/2)、第Ⅶ④層：にぶい黄橙色粗砂層（10YR 6/4)、第Ⅶ⑤層：にぶい黄色粗砂層（2.5Y 6/4)、第Ⅶ⑥層：黄褐色粗砂層（2.5Y 5/4)、第Ⅶ⑦層：褐灰色砂礫層（10YR 6/1)、第Ⅶ⑧層：灰オリーブ硬質微砂層（7.5YR 6/2)、間層A：明黄褐色粘性層（10YR 6/6）である。第Ⅰ層は造成土である。真砂土が大半を占め、部分的にグリ石・コンクリート片等が含まれる。第Ⅱ①～⑤層は現代の耕作土と床土（水田耕作に伴う客土）である。下位層からは中世の土器・陶磁器片が出土した。第Ⅲ①・②層はほぼ全域で見られる。同層からは弥生土器、土師器の小片が僅かに出土した。第Ⅳ①～③層は調査区全域でみられ、土壌化が顕著に進行する。直上層の染み込みや植物根の生育等の影響を受け、土壌化が顕著に進行している。本層中から遺物は検出されなかった。第Ⅴ①～③層はAT火山灰の2次堆積層である。調査区全域でみられ、1～5㎜大の砂の粒子が混入する。本層以下から遺物の検出はない。Ⅵ①～③層はAT火山灰の1次堆積層で、第Ⅵ③層は成層である。遺構の検出は、第Ⅳ①層及び第Ⅳ②層上面で行った。

3. 遺構と遺物

検出した主な遺構は土坑（SK）1基、柱穴（SP）22基、性格不明遺構（SX）2基、溝（SD）2条、自然流路（SR）2条である。出土遺物は遺構内より土師質土器、土師器、弥生土器、石製品、土製品が出土している。

以下、主な遺構について記述する。



第 163 図　SK301 測量図・出土遺物実測図

SK301（第 163 図、図版 53-1、56-2）

SK301 は調査区西側、SD302 上、後出する形で検出した。平面形は不整楕円形、断面は皿状を呈する。検出規模は、長さ 105 ㎝、幅 68 ㎝、深さ 10 ㎝を測る。埋土は暗灰黄色土（2.5Y 5/2）である。土師質土器が検出された。

出土遺物（図版 56-2）

538 は坏で完形品。底部切り離し技法は、回転糸切りである。体部は底部からやや内湾気味に立ち上がり、中位で僅かに屈曲し口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げられる。

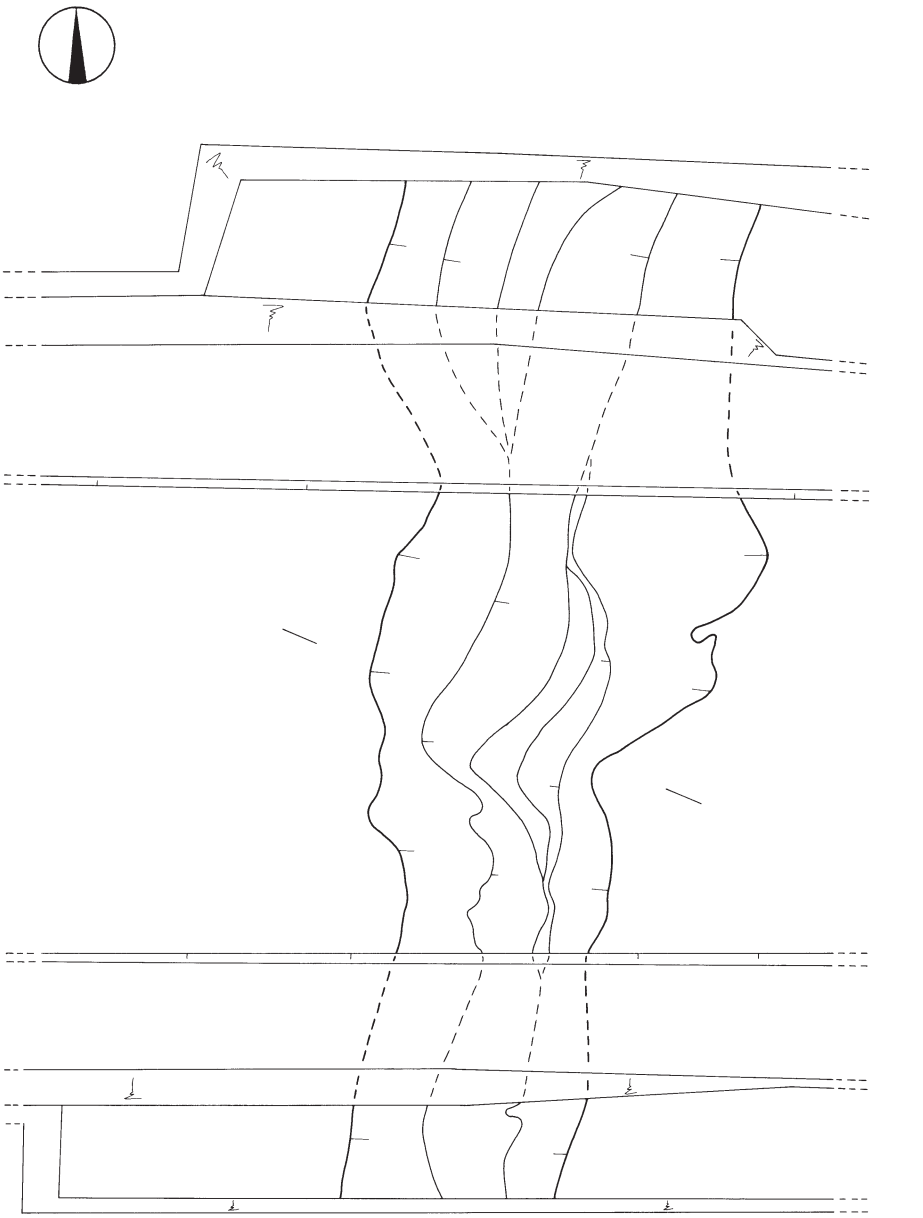
SD302（第 164 図、図版 53-2、54-1）

SD302 は調査区西側、SD301 上、後出する形で検出した。検出規模は最大値で長さ 8.15m、幅 2.95m、0.45m を測る。埋土は 4 つに分層され、上から第 1 層：黒褐色土（10YR 3/2）、第 2 層：黒褐色粘質微粒層（7.5YR 2/2）、第 3 層：灰褐色砂層（7.5YR 5/2）、第 4 層：灰色粗砂層（5Y 5/1）である。

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、鉄製品が出土している。

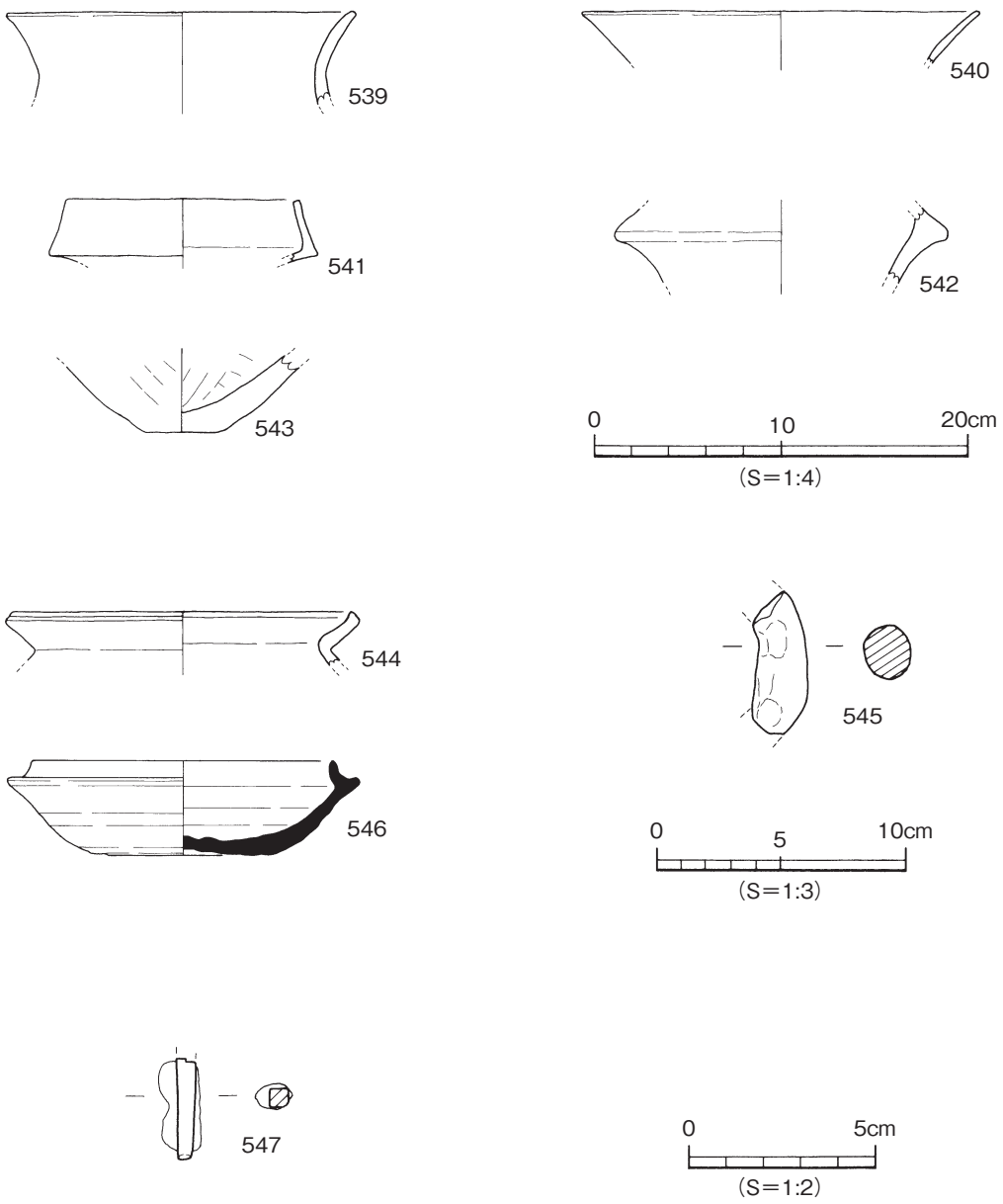
出土遺物（第 165 図、図版 56-3）

539 ～ 543 は弥生土器である。539 は緩やかに外反する壺の口縁部。胎土中の石英や長石が露出するほど内外面共に摩滅が顕著である。540 は高坏の坏部片。体部は外反し、端部は丸細く仕上げられる。541 は小型複合口縁壺の拡張部片。接合部は「く」字状、端部は「コ」字状を呈する。542 は「く」字状を呈する複合口縁壺の拡張部片。胎土中の石英や長石が露出するほど内外面共に摩滅が顕著である。



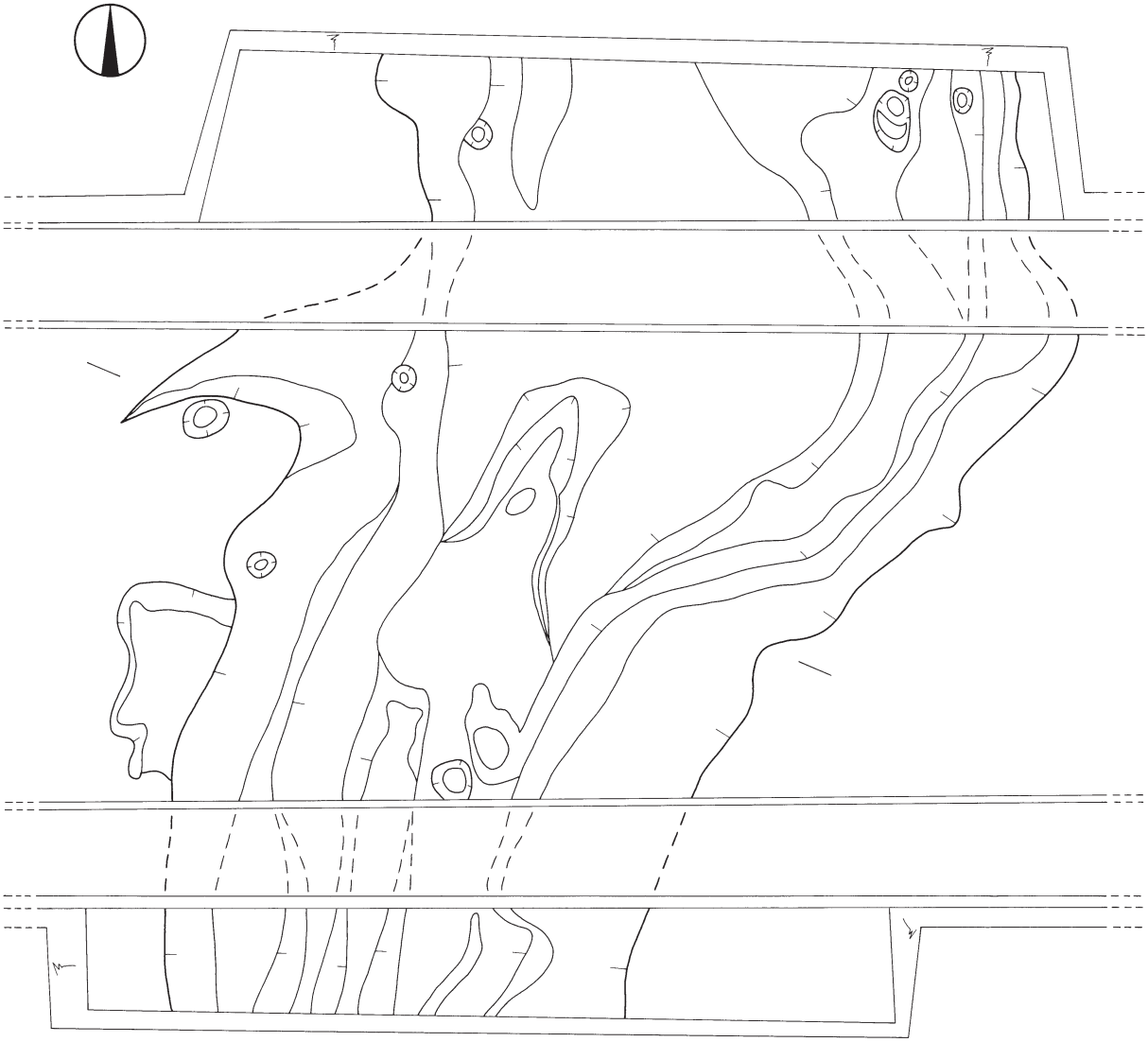
1　黒褐色土　(10YR　3/2)
2　黒褐色粒質微粒層　(7.5YR　2/2)
3　灰褐色砂層　(7.5YR　5/2)
4　灰色粗砂層　(5Y　5/1)

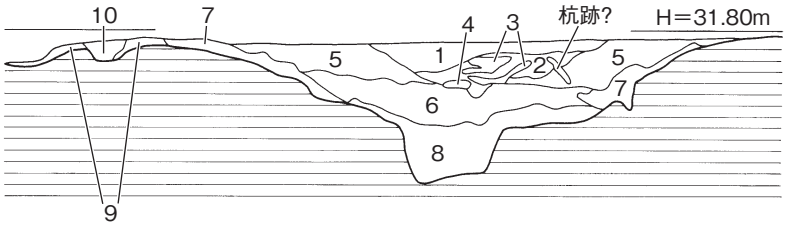
第 164 図　SD302 測量図



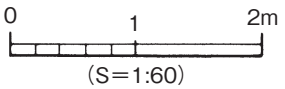
第 165 図　SD302 出土遺物実測図

543 は壺の底部。平底を呈する。544 は土師器で甕の口縁部片。やや摩滅はあるものの内外面共に撫で調整が看取できる。端部内側に段を有する。545 は弥生土器でジョッキ形土器の把手。中位付近と思われる。546 は須恵器の坏身。約 1/2 の残存片である。受部は短く水平に伸びる。立ち上がりは外反気味に短く内傾する。547 は鉄鏃の茎である。

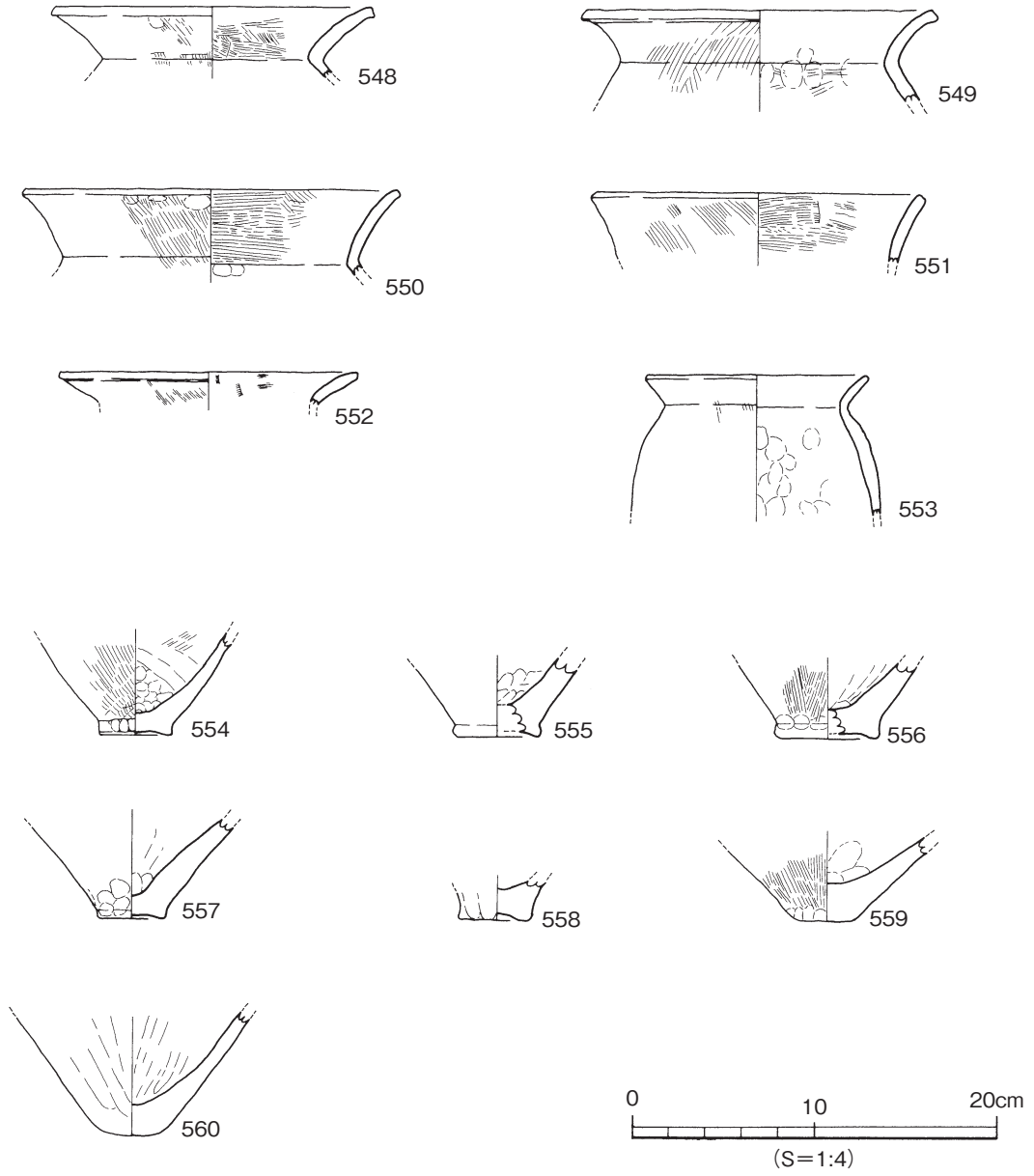




1	黒褐色土	(10YR 3/2)	SD302埋土
2	黒褐色粘質微粒層	(7.5YR 2/2)	
3	灰褐色砂層	(7.5YR 5/2)	
4	灰色粗砂層	(5Y 5/1)	
5	黒色粘質土	(5YR 1.7/1)	
6	褐灰粘質土	(5YR 4/1)	
7	黒褐色粘質土	(5YR 3/1)	
8	褐灰色粗砂層	(7.5YR 5/1)	
9	暗赤褐色粘質土	(2.5YR 2/2)	
10	黒色粘質土	(5YR 1.7/1)	(SP埋土)



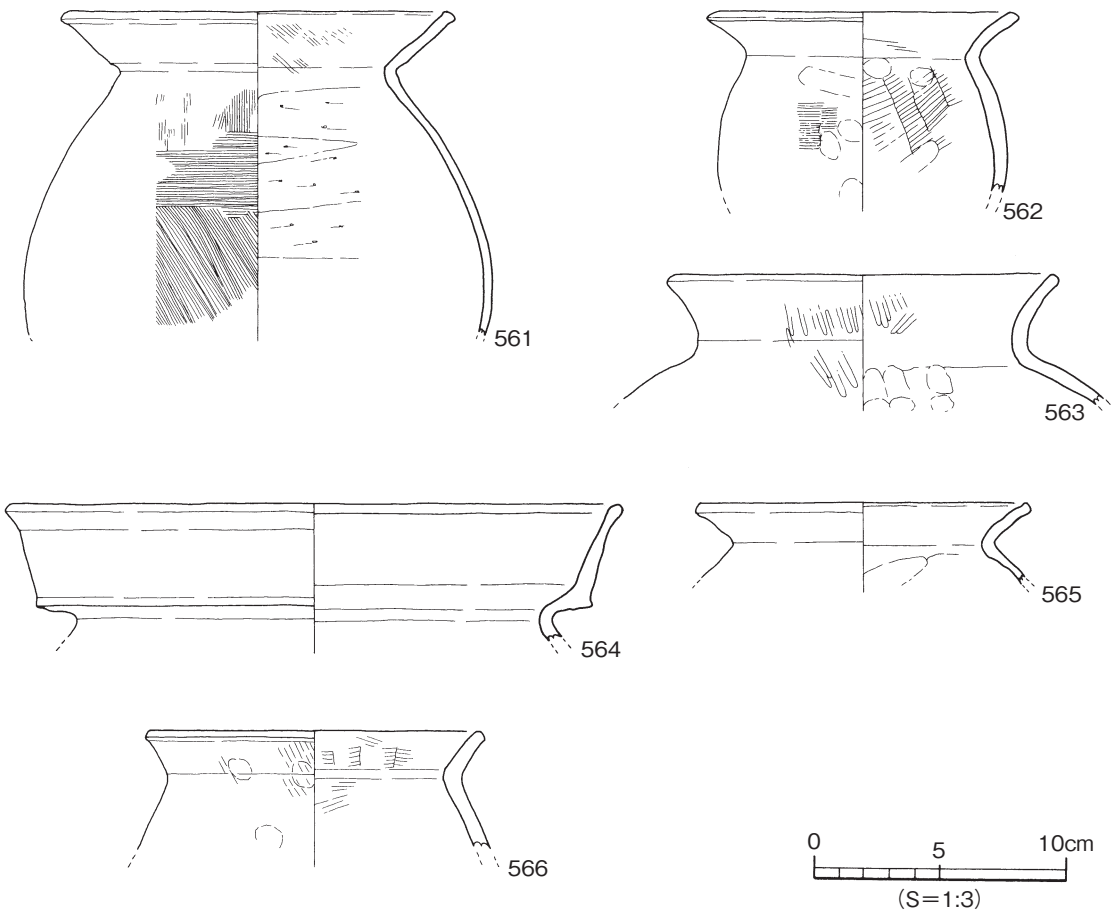
第166図　SD301 測量図



第 167 図　SD301 出土遺物実測図(1)

SD301（第 166 図、図版 53-2、54-1）

SD301 は、調査区西側の北壁から南壁にかけて SD302 に先行する形で検出された。北北東から南南西へ緩やかな傾斜をなす。検出規模は長さ 8.50m、幅 5.70m、深さ 0.90m を測る。SD301 の埋土は 5 つに分層された。上から第 5 層：黒色粘質土（5YR 1.7/1）、第 6 層：褐灰色粘質土（5YR 4/1）、第 7 層：黒褐色粘質土（5YR 3/1）、第 8 層：褐灰色粗砂層（7.5YR 5/1）、第 9 層：暗赤褐色粘質土（2.5YR 2/2）である。なお、第 1 ～ 4 層は SD302 の埋土、第 10 層：黒色粘質土（5YR 1.7/1）は SP 埋土である。遺物は弥生土器、土師器、石包丁、土製品が出土している。遺物の取り上げは上層、中層、下層に分



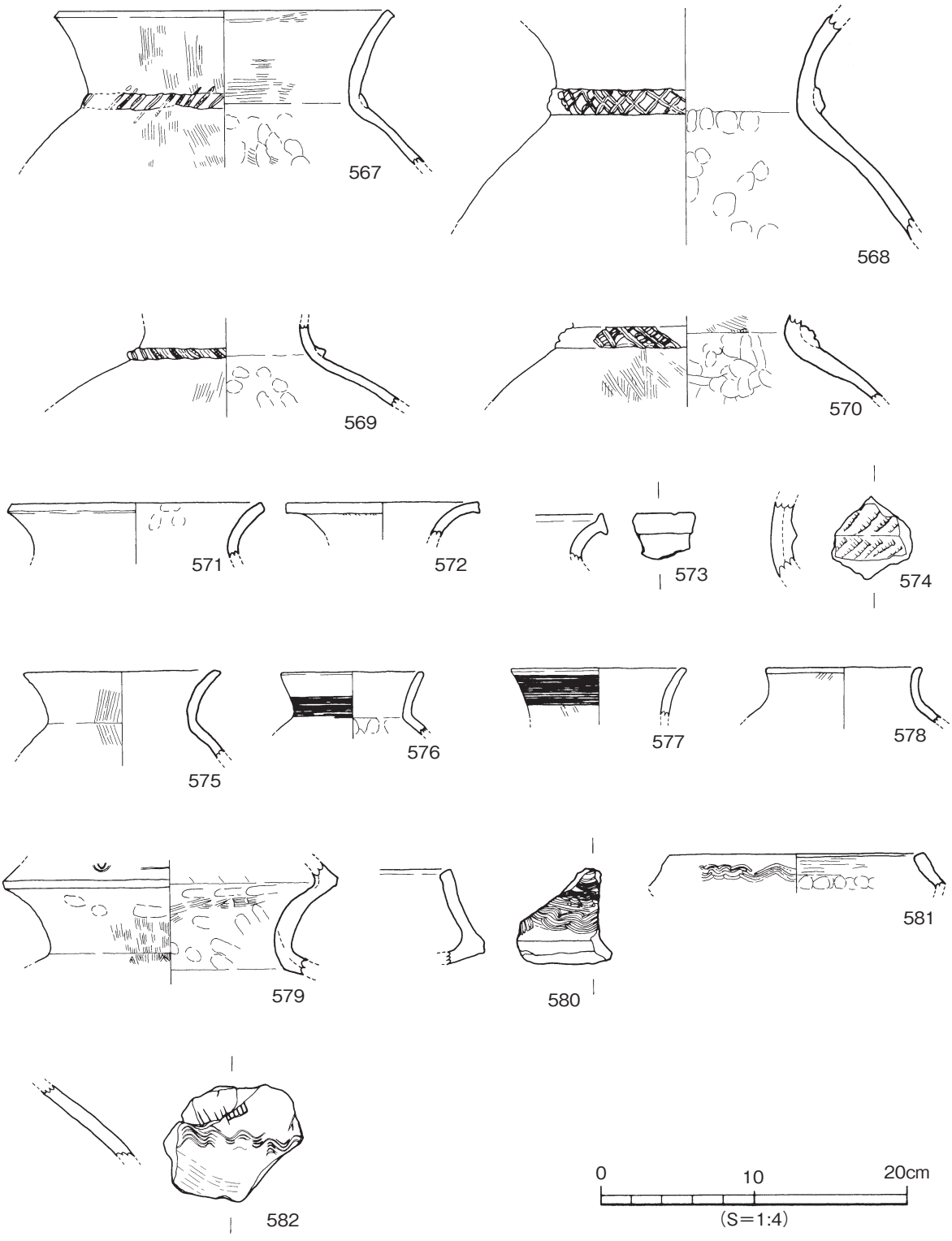
第 168 図　SD301 出土遺物実測図(2)

けて行った。上層は第 5 層、中層は第 6 層、下層は第 7 層、第 8 層である。

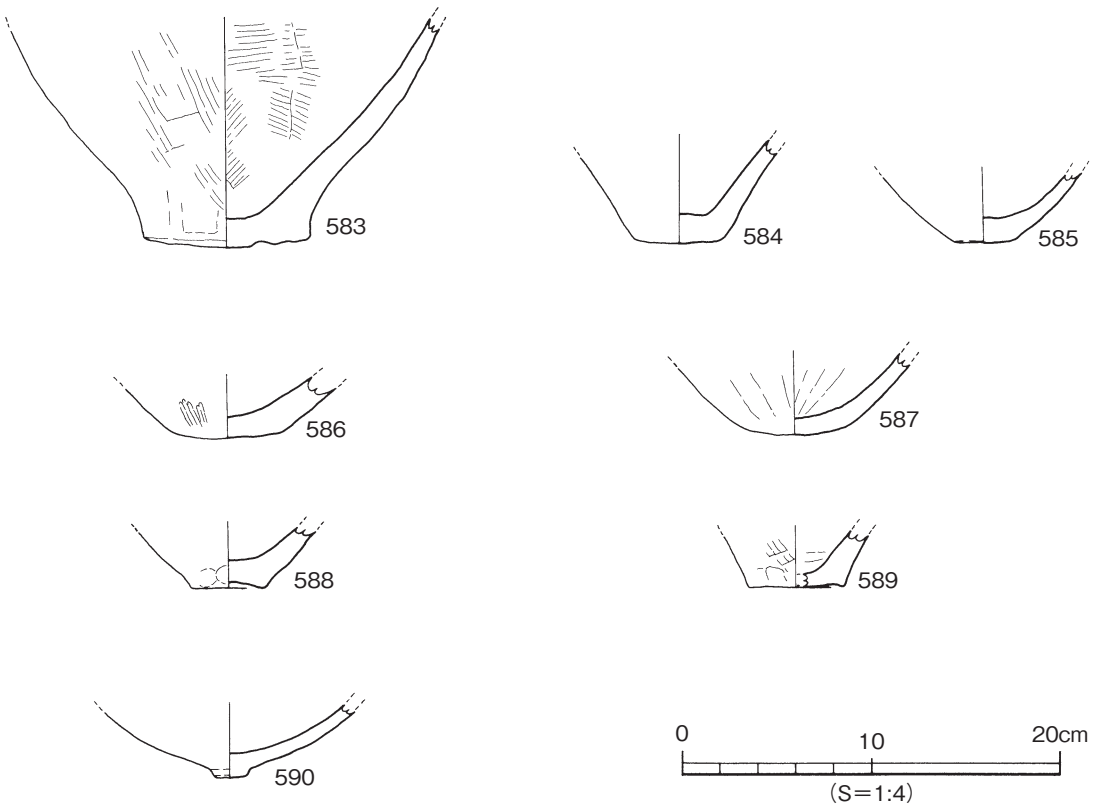
上層出土遺物（第 167 ～ 172 図、図版 56-4 ～ 57-4）

548 ～ 560 は弥生土器である。548 は甕の口頸部。内側には刷毛目調整痕が顕著に残る。外面は撫で調整痕を看取。端部は下方へ横撫でにより僅かに肥厚される。頸部外面には刷毛状工具による押し当て痕を看取。549 は甕の口頸部。口縁端部は面を持ち、下方にやや拡張される。550 は甕の口頸部。内外面共に状態の良い刷毛目痕が残る。551 は甕。緩やかに外反する口縁部片。552 は甕の口縁部。僅かに外反し、大きく開く。553 は小型の甕。胎土中の石英や長石が露出するほど内外面共に摩滅が顕著であるが、内面に指頭圧痕が辛うじて残る。554 は甕の底部。摘み上げにより僅かにくびれの上げ底を呈する。胴部外面には刷毛目、内側には指頭圧痕が顕著に残る。555 は甕の底部。摘み上げにより僅かにくびれの上げ底を呈する。外面は胎土中の石英や長石が露出するほど摩滅が顕著である。556 ～ 558 は甕の底部で、浅いくびれの上げ底を呈する。559 は壺の底部。平底を呈する。560 は甕の底部。平底を呈し、外面には黒斑が残る。

561 は土師器の甕である。口縁部は外傾して立ち上がる。端部は上下にやや肥厚される。562 は弥生土器の甕である。口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。563 は弥生土器の甕である。口縁部は緩



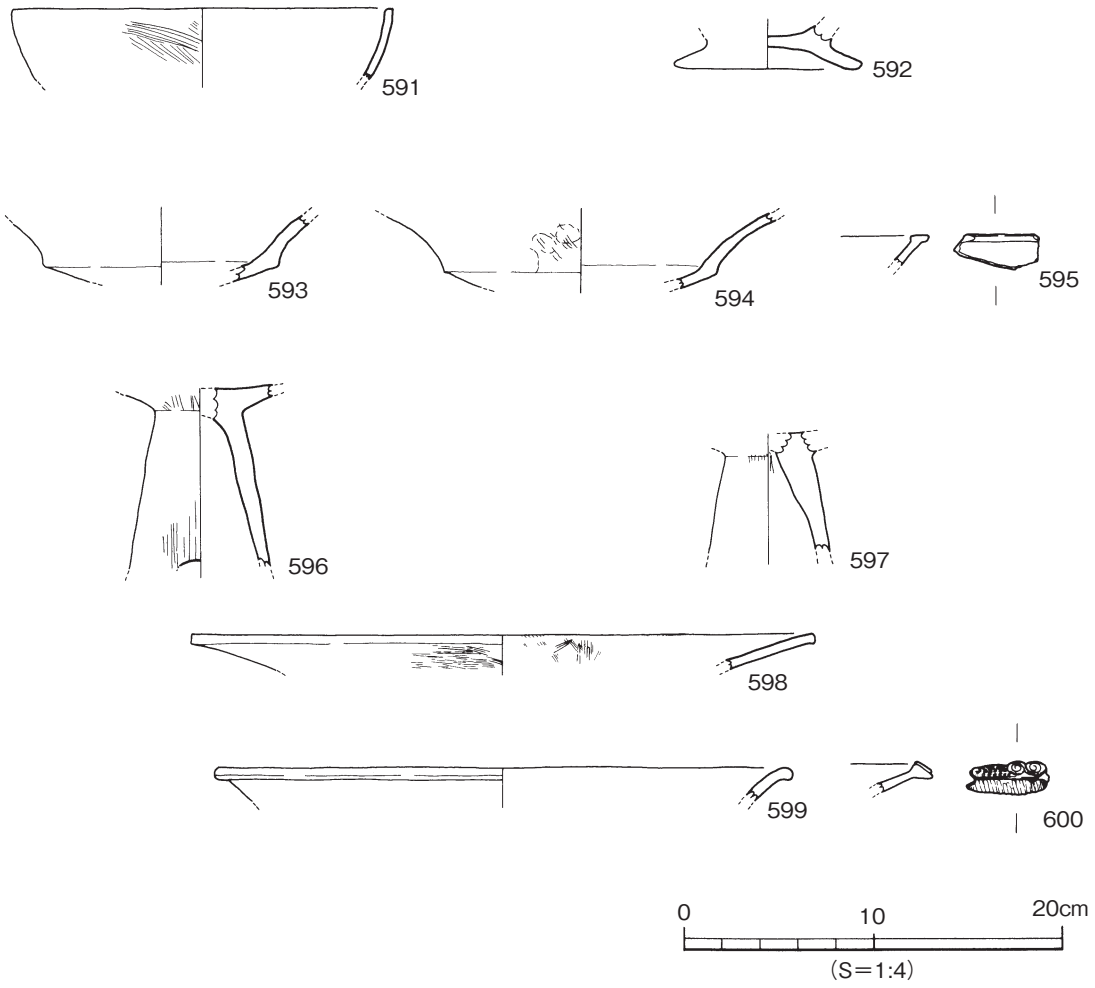
第 169 図　SD301 出土遺物実測図(3)



第 170 図　SD301 出土遺物実測図(4)

やかに外反して立ち上がる。頸部はやや厚くなる。564 は土師器の甕である。二重口縁を呈する。山陰系の搬入品。565・566 は土師器の甕である。「く」字状を呈する口縁部片。

567 ～ 590 は弥生土器の壺である。567 の口縁部は外反して立ち上がり、端部は「コ」字状に仕上げられる。頸部外面に「ノ」字状の刻目凸帯が貼り付けられる。568 は頸部外面に格子状の刻目凸帯が貼り付けられる。胎土中の石英や長石が露出するほど内外面共に摩滅が顕著である。569 は頸部外面に篦状工具で押圧された凸帯が貼り付けられる。570 は頸部外面に格子状の刻目凸帯が貼り付けられる。内面に指頭圧痕を看取。571 は緩やかに外反する口縁部。572 は大きく外反する口縁部。端部は横撫でにより面をなす。573 は大きく外反する口縁部。端部は横撫でにより上下に肥厚される。574 は頸部付近の破片か。貝殻による刻目文が施される。575 は緩やかに外反する口縁部。576 は頸部上位に精緻な沈線を看取。577 は口縁部外面に精緻な沈線が施される。沈線施工後の絵画或いは記号か、小さな線刻を看取。578 は内から外へ緩やかに開く口縁部。579 は複合口縁壺の口頸部。拡張部に波状文の一部を看取。580 は複合口縁壺の口縁接合部片。拡張部外面に精緻な波状文を看取。581 は複合口縁壺の口縁拡張部片。外面に波状文を看取。582 は胴部片。櫛描波状文の上部に記号或いは絵画と思われる線刻を看取。583 は底部から胴部へやや内湾して立ち上がる。底面はラフな仕上げとなり、

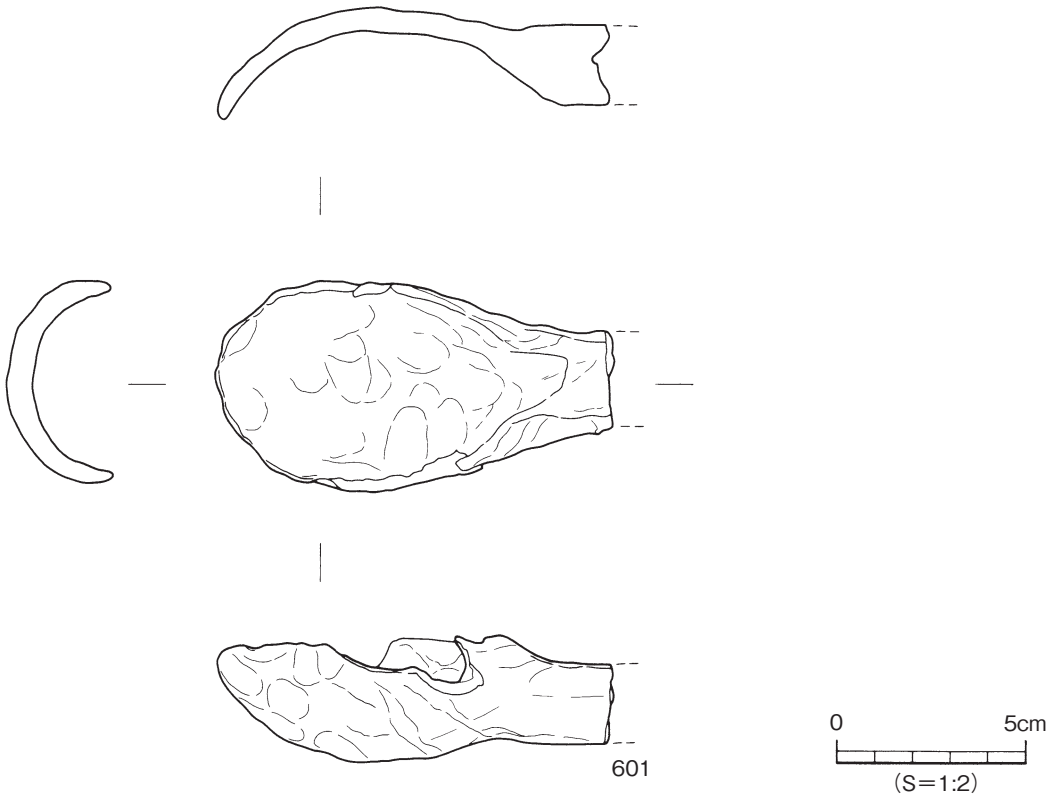


第 171 図　SD301 出土遺物実測図(5)

屈曲部付近には工具による叩き締め痕跡が残る。584 は平底を呈する。胴部への立ち上がりはやや外反する。585 は平底から内湾気味に立ち上がる胴部を持つ。586 は平底から外傾して立ち上がる胴部を持つ。587 の胴部は平底から内湾気味に立ち上がる。588 は僅かに上げ底を呈する。胴部は小さくくびれて立ち上がる。589 は浅い上げ底から外傾して立ち上がる胴部を持つ。590 はボタン状の小さい平底を有し、胴部は内湾して立ち上がる。

591 ～ 600 は弥生土器である。591 は鉢の口縁部。内湾して立ち上がる。592 は鉢の底部。くびれの上げ底を呈する。593 ～ 597 は高坏。593・594 は有稜の坏部片。大きく外反する口縁部を有する。594 は 593 よりも大型品。595 は坏部小片。端部は内外に拡張され、面をなす。596・597 は脚部片。共に脚柱部は僅かに膨らむ。598 ～ 600 は器台の受部片。598 は精緻な仕上げとなる。599 の端部は下方にやや肥厚され、丸く仕上げられる。600 は端面に円形浮文と 3 段の半載竹管文が施される。

601 は杓子形土製品である。法量は全長 10.5 ㎝、全幅 5.4 ㎝、高さ 3.2 ㎝である。柄部及び受部口



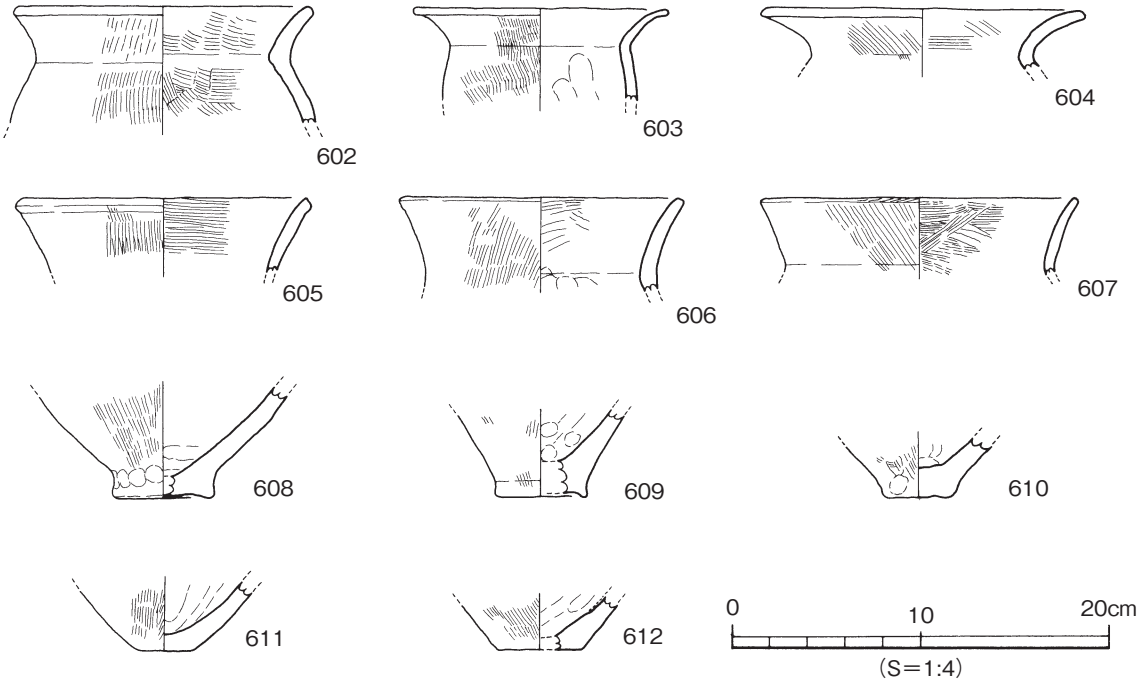
第 172 図　SD301 出土遺物実測図(6)

唇部の一部が欠損している。

中層出土遺物（第 173 ～ 175 図、図版 56-4 ～ 58-3）

602 ～ 612 は弥生土器の甕である。602 は外反する口頸部片。外側は縦方向の刷毛目模様。屈曲部は内側に稜をなす。603 は緩やかに外反する口縁部片。外面に炭化物付着。604 は厚みをもって大きく外反する口縁部片。605 は外傾して立ち上がる口縁部片。端部は撫でに外方に面をなす。606・607 は緩やかに外反して立ち上がる口縁部。外面には縦方向の刷毛目調整痕が残る。608・609 は浅い上げ底を呈する。608 は僅かにくびれ、胴部は緩く内湾して立ち上がる。609・610 は僅かにくびれ、胴部は外傾して立ち上がる。611・612 は平底を呈する。胴部は内湾して立ち上がる。

613 ～ 626 は弥生土器の壺である。613・614 は緩やかに外反する口縁部。613 の端部は撫でにより横向きの面をなす。614 の頸部に 3 つの「ノ」字状刻目を看取。615 は大きく開く口縁部。中位はやや肥厚される。616 の口縁端部は上下に肥厚され、端面には 4 条の凹線文が施される。色調は内外面共に赤に近い明褐色を呈し、他の土器と異なるものである。617 は複合口縁壺の口頸部。「く」字状を呈する。接合部下方に多数の叩き痕を看取。618 は複合口縁壺の口頸部片。接合部は角度が大きい「く」



第 173 図　SD301 出土遺物実測図(7)

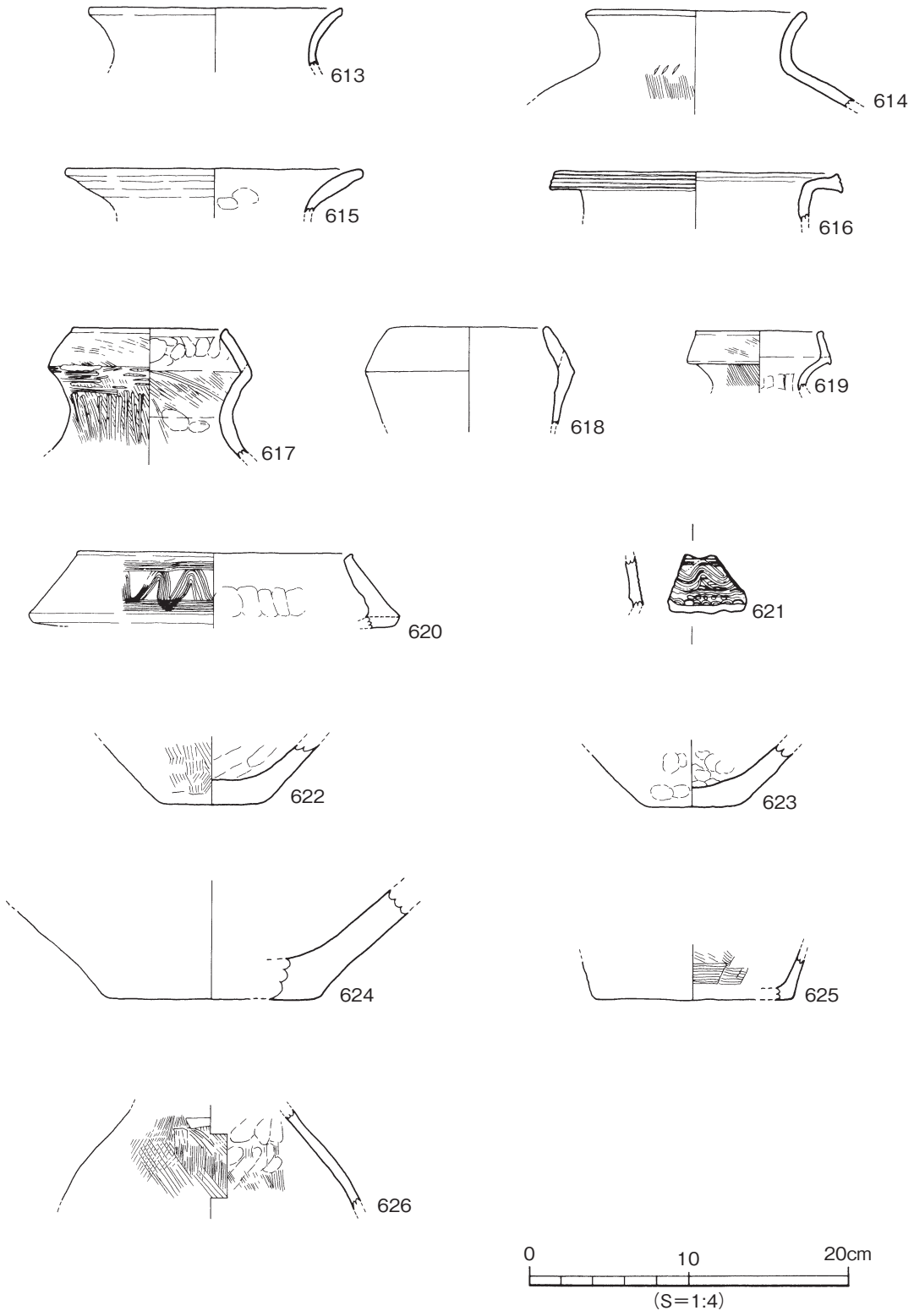
字状を呈する。619 は複合口縁部片。内傾して立ち上がる拡張部端は外側にやや肥厚される。620 は複合口縁壺の拡張部片。外面に櫛描波状文が施される。621 は複合口縁壺拡張部片。外面に櫛描波状文、半載竹管文が施される。622 ～ 625 は底部片。平底を呈する。626 は胴部片。調整後の手元の乱れか。不明の線刻が残る。

627 ～ 630 は弥生土器の高坏。627・628 は有稜の坏部片。大きく外反する口縁部。629 は脚柱部。中位に 3 箇所の円孔（焼成前穿孔）を看取。630 は有段の裾部片。6 箇所に円孔があったと思われる。竹管文を看取。

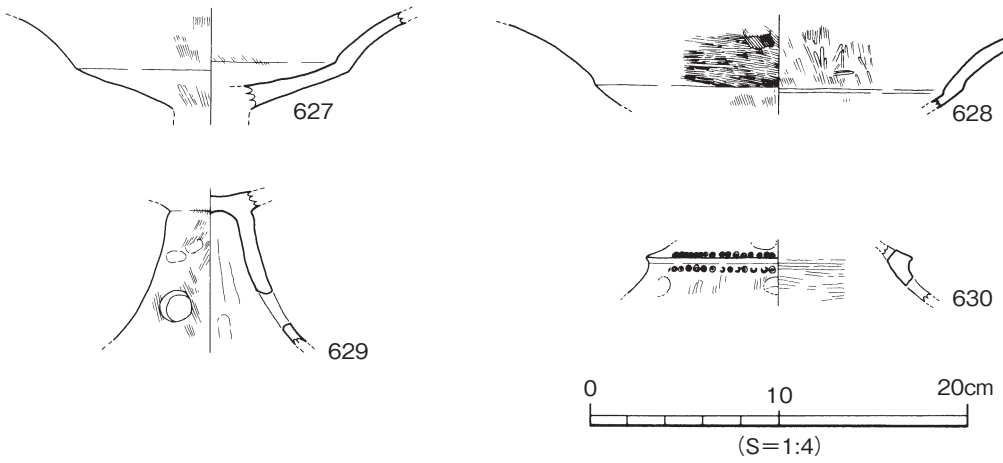
下層出土遺物（第 176 ～ 179 図、図版 56-4 ～ 59-2）

631 ～ 646 は弥生土器の甕。631 ～ 636 は外反する口縁部。631 の外面は強い撫でにより凹凸をなす。635・636 は緩く屈曲して立ち上がる口縁部片。637 ～ 646 は底部。637 ～ 642、645 は平底を呈する。637 ～ 639、641・642 の胴部は内湾気味に立ち上がる。643・644 は上げ底を呈する。僅かにくびれ、胴部は緩く内湾して立ち上がる。645 の底部は円盤状をなす。646 の底部は丸底状を呈する。

647 は～ 659 は弥生土器である。647 は甕或いは鉢と思われる。口縁端部は上下に拡張され、端面に太い沈線文が施される。648 ～ 659 は壺。648 の口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。端部は拡張され、端面には 3 条の沈線文が施される。649 は口縁端部片。端面には棒状浮文、沈線文が施される。650 ～ 653 の口縁部は外反して立ち上がる。654 はやや内湾気味に直立する口頸部片。655 ～ 657 の口縁部は外反し、端部は面をなす。頸部には格子刻目の凸帯が貼り付けられる。658 は複合口縁部。



第174図　SD301出土遺物実測図(8)



第 175 図　SD301 出土遺物実測図(9)

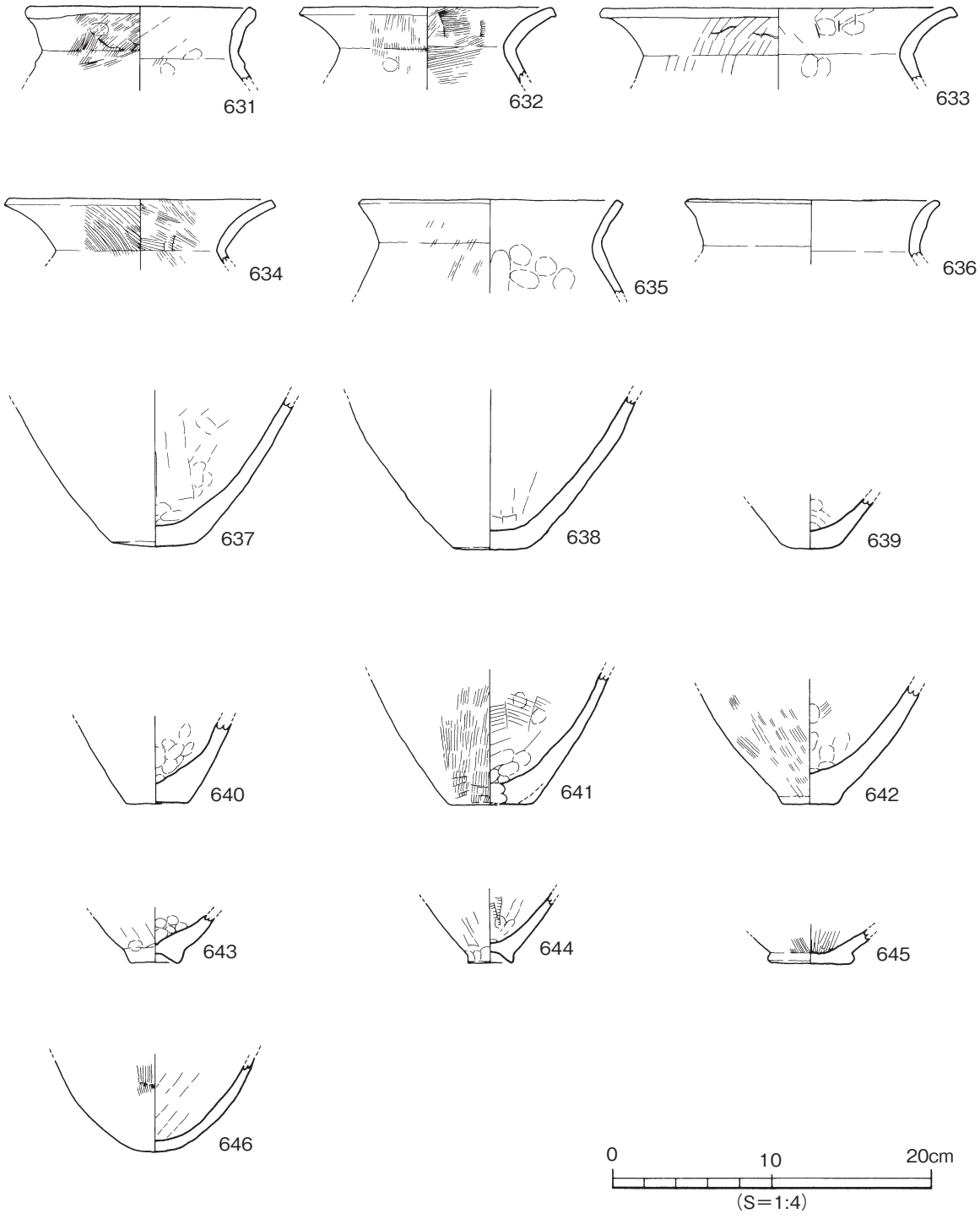
拡張部には波状文が施される。659 複合口縁部。拡張部に波状文、半載竹菅文を看取。接合端部には斜線充填三角文が施される。

660 ～ 676 は弥生土器の壺である。660 ～ 667 は複合口縁の拡張部。660・662 は外面に沈線文、波状文が施される。661 は波状文が施される。663 は小片。残存する外面には施文は見られない。664 の拡張部はやや内湾気味に立ち上がる。端面は面をなす。665 の拡張端部は短く外反する。666 の拡張部は強い横撫でにより稜をなす。667 の拡張部はやや内湾気味に立ち上がる。668 ～ 676 は底部。668・669 は平底を呈する。大型品と思われる。670 の胴部は外傾して立ち上がる。671 ～ 676 は平底を呈する。

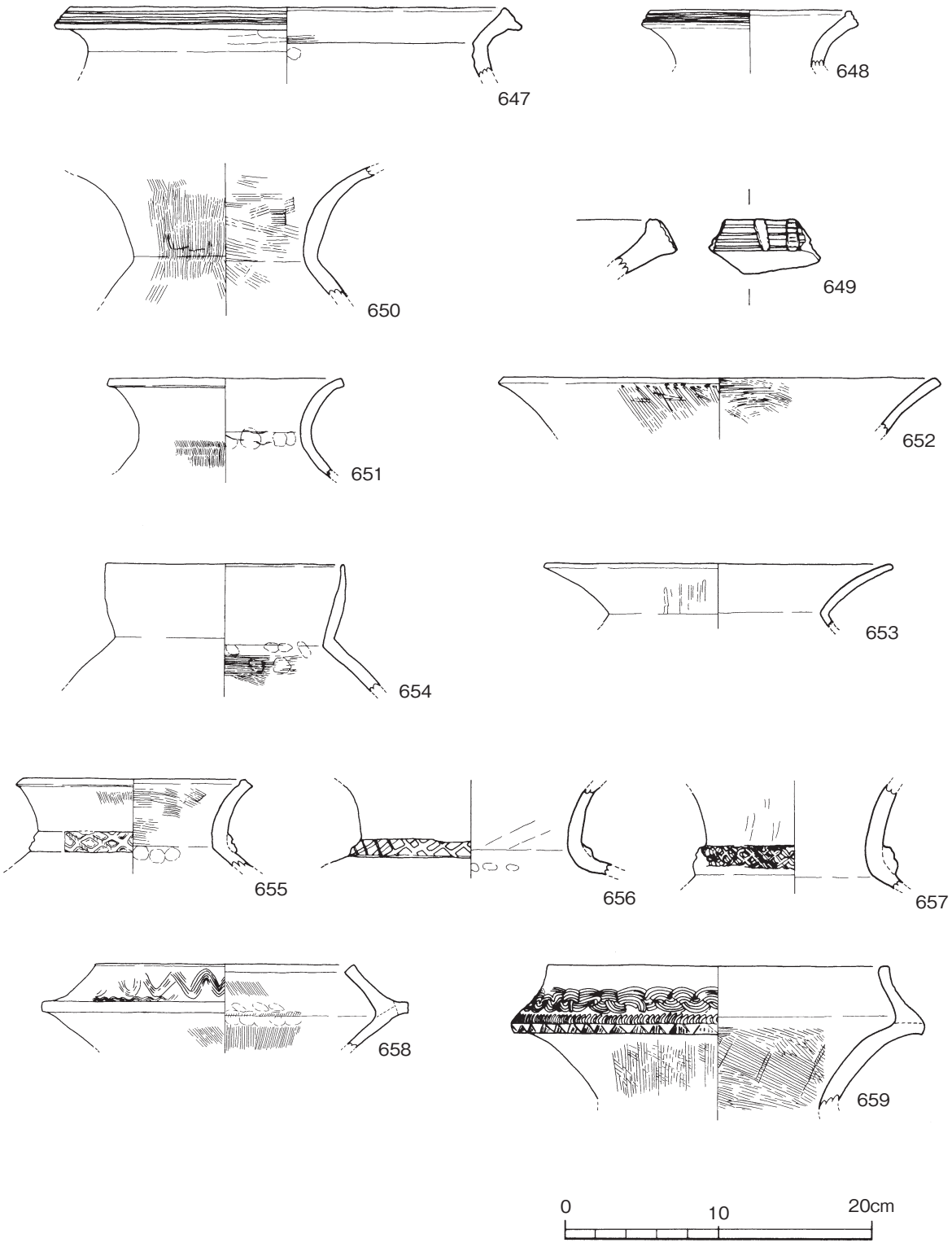
677 ～ 687 は弥生土器。677・678 は鉢。胴部は内湾して立ち上がる。口縁部は短く外反する。679 はボタン状の小さな平底を呈する。680･681 は台付鉢の底部片。上げ底を呈する。682 ～ 687 は高坏。682 は有稜の坏部片。大きく外反する口縁部を有する。683 は坏部小片。端部は内外に拡張され、面をなす。684・685 は底部。684 は焼成前穿孔を 1 つ看取。685 は焼成前穿孔を 2 つ看取。稜の上下には竹管文が施される。686 は僅かに外反する脚部片。687 は脚部中位。焼成前に施された円孔 3 箇所を確認。

SD301 内出土遺物（第 180 ～ 183 図、図版 60-1 ～ 3）

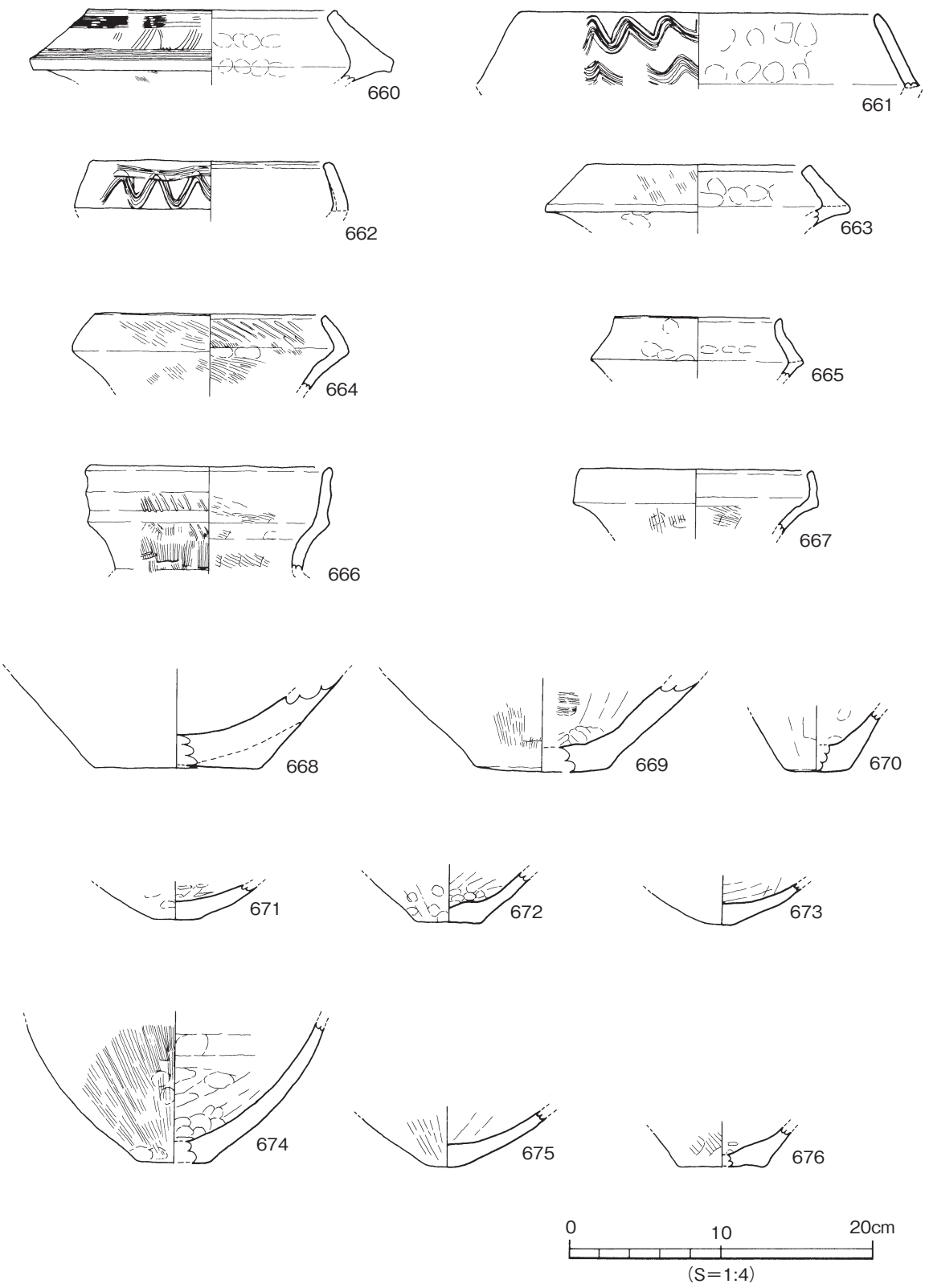
688 ～ 705 は弥生土器。688 は甕で、口縁部は外反して立ち上がる。689 ～ 693 は甕の底部。くびれの上げ底を呈する。694 は甕の底部。胴部は平底から外傾して立ち上がる。695 は壺の口頸部。口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。端部は丸く収められる。696 は壺の頸部片。格子刻目凸帯が貼り付けられる。697 は複合口縁壺。断面「く」字状を呈する。698・699 は複合口縁壺の拡張部片。698 は外面に沈線文と波状文が施される。700 ～ 705 は壺の底部。700 ～ 704 は平底を呈する。700 は底部からの立ち上がりが僅かにくびれ、胴部は外傾して立ち上がる。705 は上げ底を呈する。僅かに



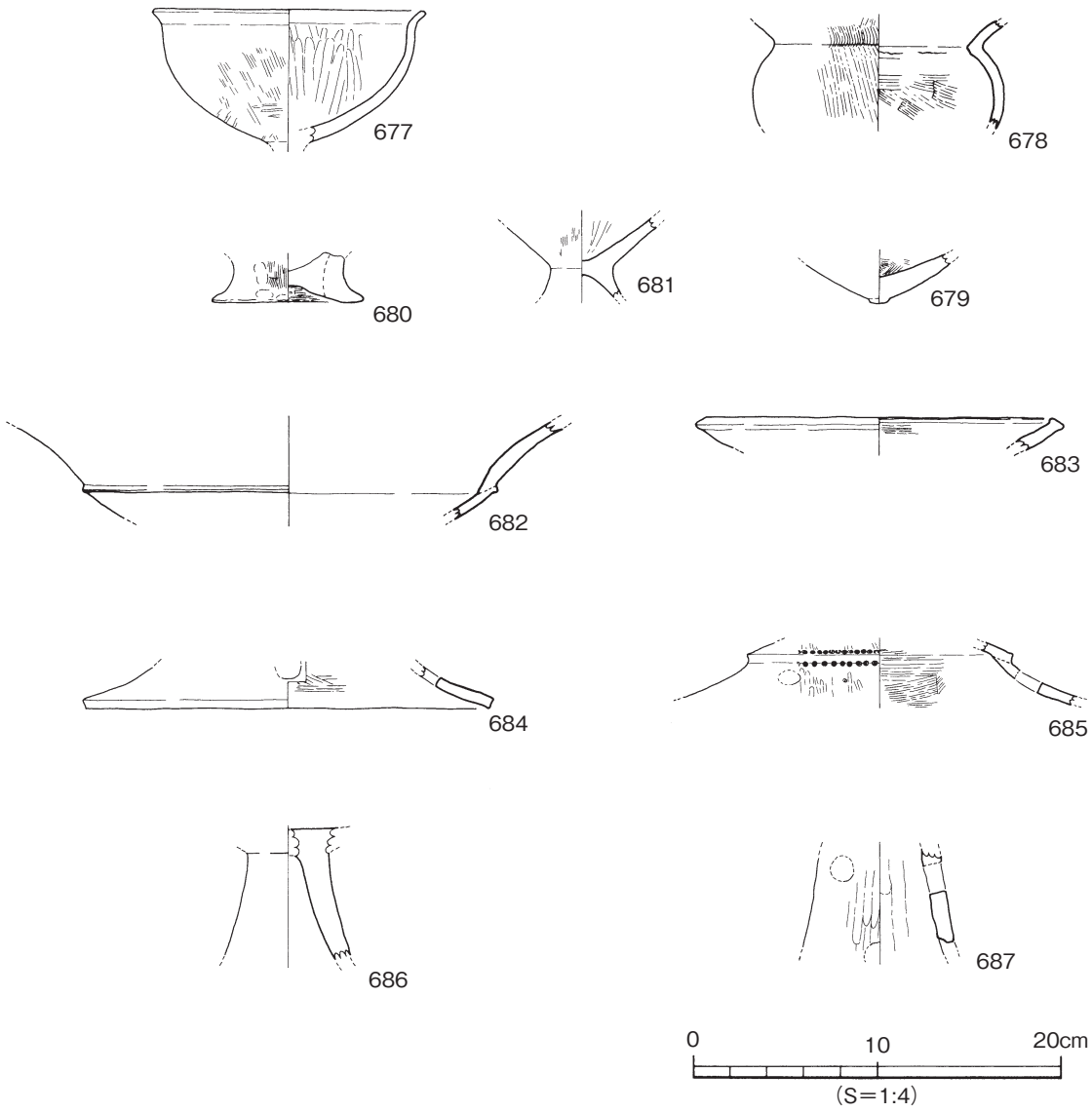
第 176 図　SD301 出土遺物実測図(10)



第 177 図　SD301 出土遺物実測図(11)



第178図　SD301出土遺物実測図(12)

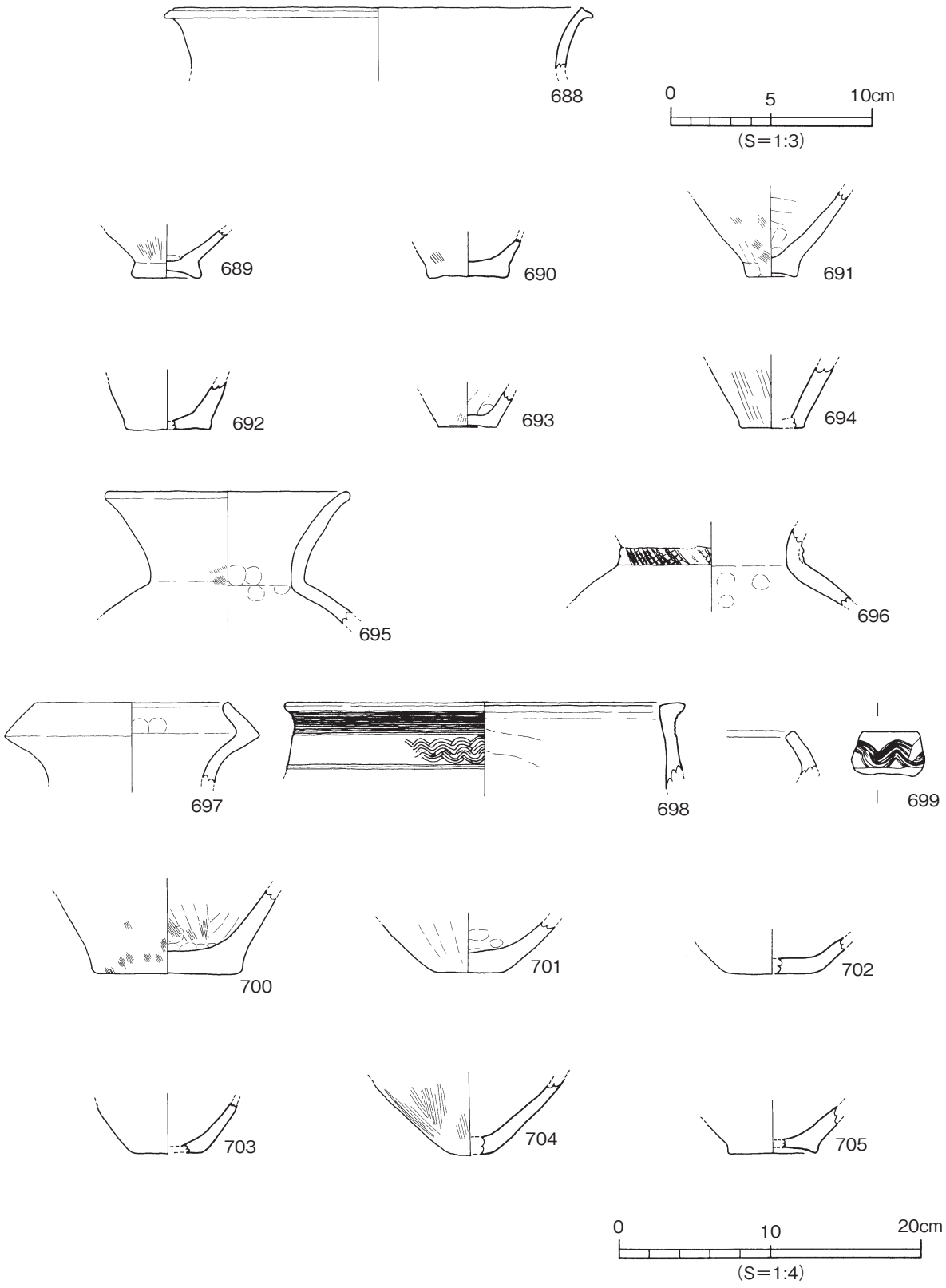


第 179 図　SD301 出土遺物実測図(13)

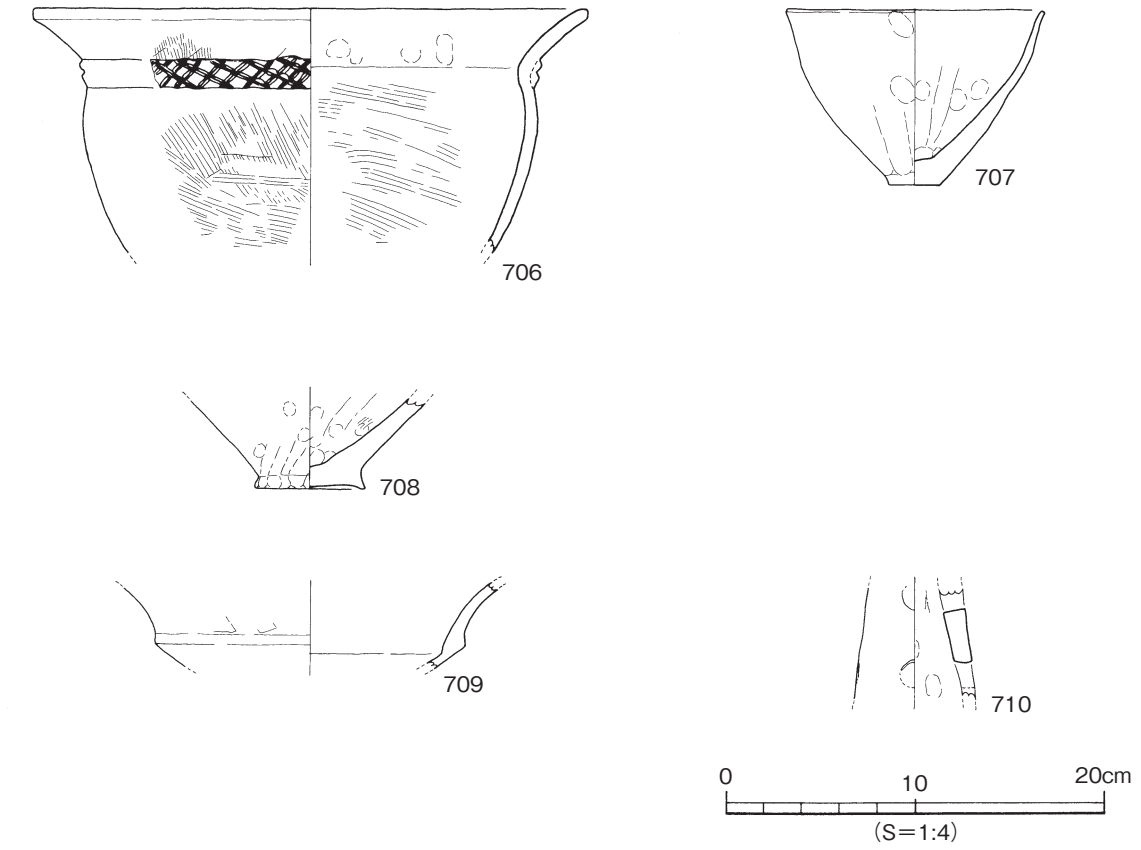
くびれ、胴部は緩く内湾して立ち上がる。

706 ～ 710 は弥生土器である。706・707 は鉢。706 は内湾して立ち上がる体部から短く外反する口縁部を有する。頸部には格子刻目凸帯が貼り付けられる。内外面は刷毛目調整が施される。707 は平底から内湾して立ち上がる体部を有する。端部は細く仕上げられる。708 は壺の底部。僅かに上げ底を呈する。709・710 は高坏。709 は有稜の坏部片。710 は脚部片。2 段 4 孔の焼成前穿孔を看取。

711 ～ 713 は石庖丁である。711 は緑色片岩製磨製石庖丁の成品で、半部を欠く。両面二孔の穿孔となる。712 は緑色片岩製磨製石庖丁で、半部を大きく欠く。両面から施された穿孔一つを確認。713 は結晶片岩製磨製石庖丁の成品。刃部の研磨は両面にわたって丁寧に磨かれ、両端には研磨によ



第 180 図　SD301 出土遺物実測図(14)



第 181 図　SD301 出土遺物実測図(15)

る抉りが施される。表面の刃縁には光沢が看取される。714 は石器素材か。

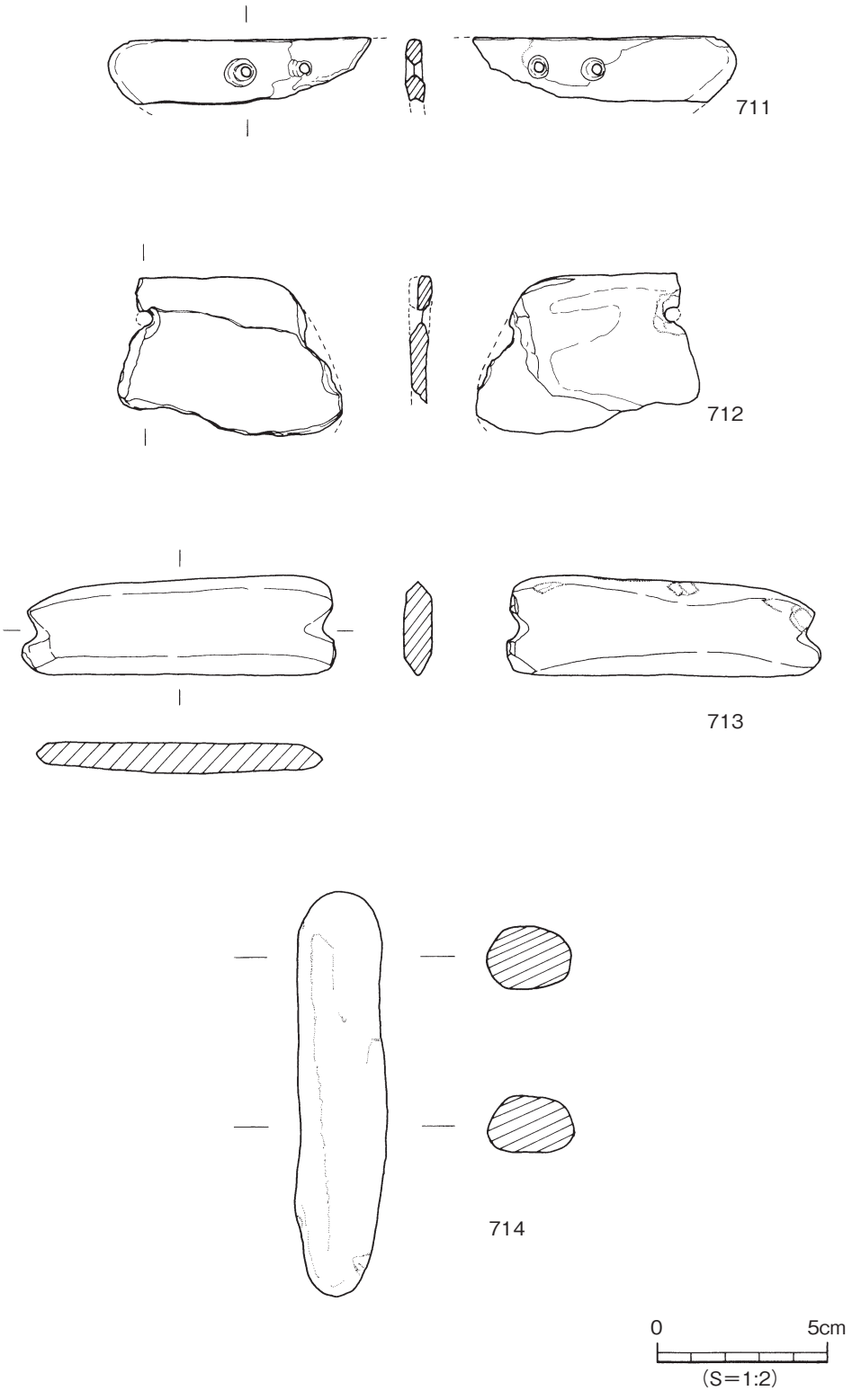
715 ～ 720 は SD301 付近で出土した遺物である。715 ～ 719 は弥生土器である。715・716 は甕で外反する口縁部片。端部は下方へ僅かに肥厚される。717 ～ 719 は壺。平底を呈し、胴部は外傾して立ち上がる。720 は須恵器の坏蓋。口縁部は段をなして垂下する。

4. 小結

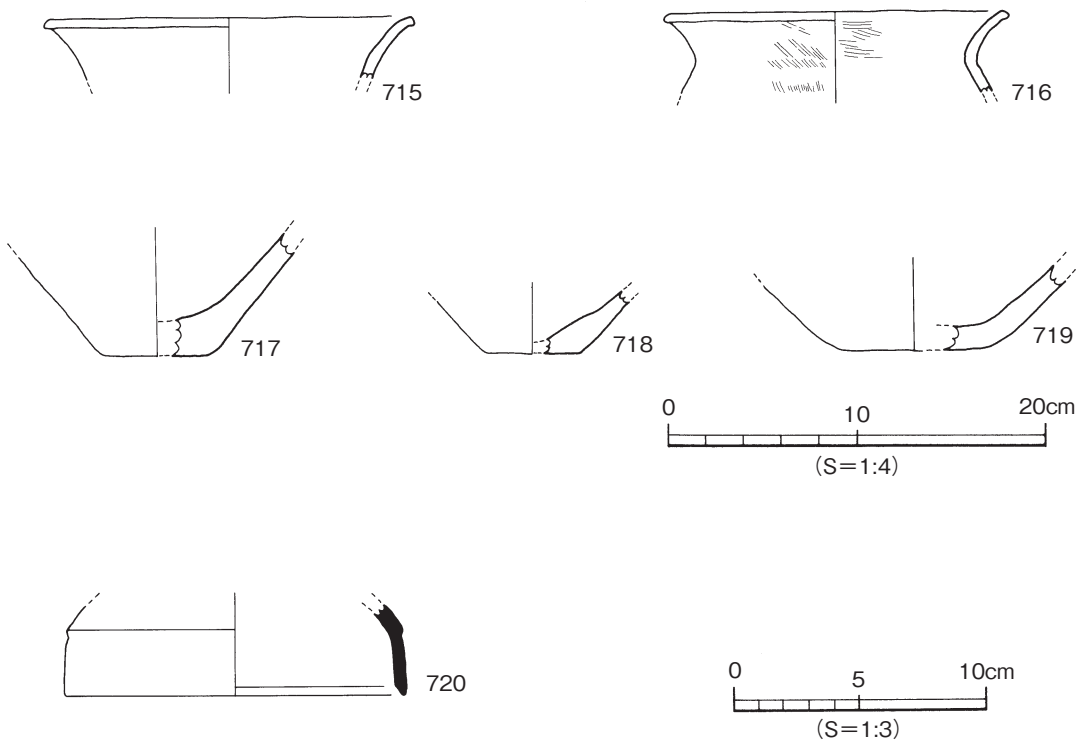
3 区の調査では、土坑や柱穴、溝等を検出した。

SD301 は不規則な平面プラン及び人為的な掘削が伺えないことから自然流路の可能性もある。調査は土層を上層、中層、下層に分けて行った。上層、中層は粘質系の土質が見られ、弥生時代後期前葉～古墳時代中期までの遺物が出土している。下層は砂層の堆積が見られ、弥生時代後期前葉～後期末までの遺物が出土している。

後出の SD302 は、SD301 が埋没した後、同位置に流路幅を狭くして流れている。



第 182 図　SD301 出土遺物実測図⑯



第 183 図　SD301 出土遺物実測図(17)

遺物観察表　－凡例－

(1)以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。

遺物観察表は武正良浩、佐伯利枝、戸川安子が作成した。

(2)遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　　（　）：推定復元値。

調　整　欄　　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3 ㎜の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表66　出土遺物観察表　土製品(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
538	坏	口径 14.6 器高 4.3 底径 7.6	口縁端部はナデ調整が施される。	[坏]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	灰白・灰色 灰白・灰色	砂 ◎		56
539	壺	口径 (18.4) 残高 5.0	緩やかに外反する口縁部。 摩滅が顕著である。	マメツ	マメツ	暗橙色 黄橙色	石・長(1～3) 金 ○		
540	高坏	口径 (21.2) 残高 2.8	坏部片。口縁は外反し、端部は丸く仕上げられる。	マメツ	マメツ	橙色 淡黄色	石・長(1) ○		
541	壺	口径 12.2 残高 3.4	接合部は「く」字状、端部は「コ」字状を呈する。	マメツ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ○		
542	壺	残高 4.1	「く」字状を呈する接合部片。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	石・長(1～3) ◎		
543	壺	底径 (2.8) 残高 4.1	平底。外面に黒班有り。	ナデ	ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
544	甕	口径 13.5 残高 2.2	口縁端部内側に段を有する。	ナデ	ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1) ◎		
545	把手	残高 5.7	ジョッキ形土器の把手の中位。	ナデ(指頭痕あり)	—	黄褐色	石・長(1～5) ◎		
546	坏身	口径 12.0 受部径 14.0 器高 3.8	受部は短く水平に伸びる。立ち上がりは外反気味に短く内傾する。	[体]回転ナデ [底]ケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		56

表67　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
547	鏃	欠損	鉄	2.7	1.1	0.95	3.28		

表68　出土遺物観察表　土製品(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
548	甕	口径 (17.2) 残高 3.8	口縁・頸部片。頸部外面にハケ工具による押し当て痕を看取。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(10本/cm)→ナデ	[口上]ヨコナデ [口下]ハケ(10本/cm) [胴]ケズリ	明黄色 明黄色・暗灰色	石・長(1～3) ◎		56
549	甕	口径 (19.6) 残高 5.0	口縁・頸部片。口縁端部は面を持ち、下方にやや拡張される。	[口端]ヨコナデ [口][胴]ハケ(4本/cm)	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(6本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	橙褐色 橙褐色	石(1～2) ◎		
550	甕	口径 (20.4) 残高 4.7	口縁・頸部片。内外面共に強いハケ目調整が施される。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(6～7本/cm)(指頭痕あり)	[口]ハケ(6～7本/cm) [胴]指頭痕あり	暗茶褐色 淡茶褐色	石(1) ◎		
551	甕	口径 (18.8) 残高 3.7	口縁部片。端部は強い横ナデにより断面「コ」字状の面をなす。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(7～8本/cm)	ハケ(8本/cm)	淡茶褐色	石(1～2)・長(1) 金 ◎		
552	甕	口径 (16.2) 残高 1.7	口縁部は僅かに外反しつつ、大きく開く。	ハケ(11本/cm)→ナデ	ハケ(11本/cm)→ナデ	淡茶褐色 淡茶黒灰色	石・長(1) 金 ◎		
553	甕	口径 (12.0) 残高 7.7	内面に指頭圧痕が微かに看取できる。	マメツ [口]ハケ(6本/cm)→ヨコナデ	マメツ(指頭痕あり)	明橙色 淡橙色・白褐色	石・長(1～4) ○		56
554	甕	底径 (3.9) 残高 5.6	底部片。外面に黒班有り。丁寧な仕上げ。	[胴]ハケ(9本/cm) [底]ナデ(指頭痕あり)	[胴上]ハケ(9本/cm) [胴下]ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	56
555	甕	底径 (4.4) 残高 4.3	やや上げ底を呈する。小さくくびれ、立ち上がる。	マメツ [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	淡桃色 褐色	石・長(1～5) ○		
556	甕	底径 (2.6) 残高 4.1	やや上げ底を呈する。小さくくびれ、立ち上がる。	[胴]ハケ(7本/cm)→ナデ(指頭痕あり) [底]ナデ	指ナデ	淡茶色 黒灰・淡褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
557	甕	底径 (3.2) 残高 5.4	やや上げ底を呈する。内外面共に指頭圧痕が顕著に残る。	マメツ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	明赤褐色 灰黄褐色	石・長(1～3) ◎		56
558	甕	底径 4.0 残高 2.2	やや上げ底を呈する。小さくくびれ、立ち上がる。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
559	甕	底径 2.9 残高 4.6	平底。	[胴]ハケ(10本/cm) [底]ナデ(指頭痕あり)	指ナデ(指頭痕あり)	淡褐色 淡褐色	石(1～2) ◎		
560	甕	底径 (3～4) 残高 6.8	平底を呈する。外面に黒班有り。	[胴](工具による)ナデ [底]ナデ	ナデ	橙色・淡黄色 橙色・淡黄色	石・長(1～5) 金 ◎	黒斑	56
561	甕	口径 (14.8) 残高 12.7	口縁部は外傾して立ち上がる。端部は上下にやや肥厚される。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(10本/cm)	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(10本/cm)→ヨコナデ [胴]ケズリ	暗褐色 暗褐・茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎	煤付着	56
562	甕	口径 (11.5) 残高 7.5	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。	[口～肩]ヨコナデ [胴]ハケ(10本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ	橙色 灰白色	石・長(1～3) ◎		
563	甕	口径 (14.8) 残高 6.5	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。頸部はやや厚くなる。	[口]ナデ [頸][胴]ミガキ	[口]ミガキ [胴]ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
564	甕	口径 (24.0) 残高 5.4	山陰系甕の口縁部片。二重口縁を呈する。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1～5) 金・赤色粒 ◎	黒斑	56
565	甕	口径 (12.8) 残高 3.2	「く」字状を呈する口縁部片。	マメツ	マメツ [胴]指ナデ	暗灰褐色 暗灰褐・暗黄色	石・長(1～2) 金・赤色粒		

表69　出土遺物観察表　土製品(3)

566	甕	口径 (12.8) 残高 4.7	「く」字状を呈する口縁部片。端部は丸く仕上げられる。	ハケ(5本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	ハケ(5～6本/cm)	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
567	壺	口径 (21.4) 残高 10.2	外面に黒班有り。頸部外面に「ノ」字状の刻目凸帯が貼り付けられる。	[口端]ナデ [口]ハケ(11～12本/cm) [胴]ハケ(11～12本/cm)→ナデ	[口]ハケ(11～12本/cm) [胴]ハケ→ナデ(指頭痕あり)	黄橙色 黄橙色	石・長(1～2) ◎	黒斑	57
568	壺	残高 14.8	頸部外面に格子状の刻目凸帯が貼り付けられる。	マメツ	マメツ(指頭痕あり)	明橙色 明橙色	石・長(1～4) △		57
569	壺	残高 5.5	頸部外面にヘラ状工具で押圧された凸帯が貼り付けられる。	マメツ [肩]ミガキ	ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
570	壺	残高 5.7	頸部外面に格子状の刻目凸帯が貼り付けられる。	ハケ(6本/cm)	[頸]ハケ(7本/cm) [胴]指ナデ(指頭痕あり)	淡黄褐色 明褐色	石・長(1～4) 金 ◎		57
571	壺	口径 (16.2) 残高 3.6	緩やかに外反する口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ(指頭痕あり)	暗褐色 暗褐色	石・長(1～5) 金 ◎		
572	壺	口径 (12.4) 残高 2.2	大きく外反する口縁部片。端部は横ナデにより肥厚される。	[口端]ヨコナデ [口上]ハケ(8～9本/cm)→ナデ [口下]ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		
573	壺	残高 3.1	大きく外反する口縁部片。端部は横ナデにより上下に肥厚される。	マメツ	マメツ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～2) 金 △		
574	壺	残高 5.0	頸部付近か。貝殻による刻目文が施される。	施文	マメツ	橙色 黒灰色	石(1) ○		57
575	壺	口径 (12.8) 残高 5.8	緩やかに外反する口縁部片。	ハケ(5～7本/cm)	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
576	壺	口径 (9.0) 残高 4.1	頸部上位に精緻な沈線を看取。	マメツ [頸]8～10条の沈線	マメツ(指頭痕あり)	褐色 暗褐色	石・長(1～2) ◎		57
577	壺	口径 (11.2) 残高 4.2	沈線施工後の絵画?、記号?、工具(手元)の乱れ?有り。	ミガキ [口縁]16条の沈線	マメツ	明橙色 橙色・灰白色	石・長(1～2) ○		
578	壺	口径 (10.2) 残高 3.6	緩やかに外反する口縁部片。	マメツ(一部ハケ(6本/cm))	マメツ	黄橙色 灰白色	石・長(1～3) ◎		
579	壺	残高 7.3	複合口縁壺の口頸部片。	[拡]施文 [口上]ナデ [口下]ハケ(10本/cm)→ナデ	[拡][頸]ナデ(指頭痕あり) [口]ハケ(8～10本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～5) ◎		
580	壺	残高 6.2	複合口縁壺の口縁接合部片。	[拡]施文 [口]ヨコナデ(一部ハケ)	ヨコナデ	褐色 暗褐色	密・金 ◎		
581	壺	口径 (16.6) 残高 2.3	複合口縁壺の口縁部片。	マメツ	ハケ(5～6本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	黄橙色 淡黄色	石・長(1～4) 金 ○		
582	壺	残高 7.3	胴部片。櫛描波状文の上部に線刻記号?、絵画?有り。	ハケ(4本/cm)	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎		57
583	壺	底径 8.8 残高 11.2	底部～胴下部片。底面に黒班有り。	ハケ(4本/cm)→ナデ(工具痕あり)	[胴]ハケ(4本/cm) [底]ナデ	淡褐色 淡灰褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	57
584	壺	底径 4.4 残高 5.5	平底。底部～胴下部片。	マメツ 薄くハケメ痕有り	マメツ 底部に指頭圧痕有り	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1～5) 金 ◎		
585	壺	底径 (3.2) 残高 3.6	平底。外面に黒班有り。	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	灰白色 黒褐色	砂・金 ◎	黒斑	
586	壺	底径 5.4 残高 3.2	平底。外面に黒班有り。	ミガキ	マメツ	黒色・浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
587	壺	底径 2.2 残高 4.2	平底。外面に黒班有り。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
588	壺	底径 (3.8) 残高 3.2	やや上げ底を呈する。小さくくびれ、立ち上がる。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
589	壺	底径 (5.0) 残高 2.9	やや上げ底を呈する。外傾して立ち上がる。	[胴]ハケ(4本/cm) [底]ナデ(指頭痕あり)	ナデ	淡褐色 暗灰褐色	石・長(1) ◎		
590	壺	底径 1.9 残高 3.9	ボタン状の小さい平底を呈する。	[胴]マメツ [底]ナデ	ナデ	淡橙色 淡橙色	石・長(1～2) ◎		57
591	鉢	口径 (20.2) 残高 3.8	内湾して立ち上がる口縁部片。	[口端]マメツ [胴]ハケ(9本/cm)	マメツ	橙色 暗橙色	長(1～4) ○		
592	鉢	底径 (10.0) 残高 2.3	底部片。くびれの上げ底を呈する。	[底]指頭圧痕	[底]指頭圧痕	灰褐色 明褐灰色	石・長(1～4) ◎		
593	高坏	残高 3.5	有稜の坏部片。大きく外反する口縁部を有する。	マメツ	マメツ	橙褐色 橙褐色	石(1) ◎		
594	高坏	残高 4.0	有稜の坏部片。大きく外反する口縁部を有する。	[坏]ハケ→ナデ(指頭痕あり) [坏底]ナデ	ナデ	淡褐色 黒褐色	石・長(1) 金 ◎		
595	高坏	残高 1.7	坏部小片。端部は内外に拡張され、面をなす。	マメツ	マメツ	橙色 灰橙色	長(1) 金 ○		
596	高坏	残高 9.7	やや膨らむ脚部片。	ハケ(3～4本/cm)→ナデ	[坏底][脚]ナデ	黄橙色 淡褐色	石・長(1～3) ◎		
597	高坏	残高 6.4	やや膨らむ脚部片。	ハケ(6本/cm)→ナデ	ナデ [脚]しぼり痕あり	淡褐色 淡褐色	石・長(1～2) ◎		

表70　出土遺物観察表　土製品(4)

598	器台	口径 (33.0) 残高 1.9	精緻な仕上げ。外・内面に黒班有り。	[口端]ナデ [口]ヨコナデ	ハケ→ミガキ	淡褐色 淡橙色	密・砂 ◎	黒斑	
599	器台	残高 1.7	端部は下方にやや肥厚され、丸く仕上げられる。	マメツ [口端]ヨコナデ	マメツ	白褐色 暗灰色	石・長(1) ◎		
600	器台	残高 2.0	精緻な仕上げ。端面に円形浮文・3段の半截竹管文が施される。	[口端]ヨコナデ [口]ミガキ	[口端]ヨコナデ [口]ミガキ	暗褐色 淡褐色	密 ◎		57
601	土製品	長さ 10.5 幅 5.5 高さ 3.3	杓子状形土製品。柄部一部欠損。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色・黒 にぶい黄橙色 褐灰	石・長(1～3) ◎		57
602	甕	口径 (15.0) 残高 6.3	内側に稜をなし、外反する口縁部。	[口端][頸]ナデ [口]ハケ(5本/cm)→ナデ [胴]ハケ(5～7本/cm)	[口][胴]ハケ(5～8本/cm) [頸]ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1～2) ◎		58
603	甕	口径 13.2 残高 4.9	緩やかに外反する口縁部。外面に炭化物付着。	[口端]ナデ [口][胴]ハ ケ(8本/cm)	マメツ [胴]ナデ	淡黄色 灰白色	石・長(1) ◎	煤付着	
604	甕	口径 (17.0) 残高 3.2	大きく外反する口縁部。	ハケ(5～7本/cm)	マメツ(一部ハケ)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎		58
605	甕	口径 (15.0) 残高 4.0	外傾して立ち上がる口縁部片。端部はナデにより面をなす。	[口端]ナデ [口]ハケ(5本/cm)	ハケ(6本/cm)	橙色 橙色	石(1) 金 ◎		58
606	甕	口径 (14.4) 残高 5.0	緩やかに外反する口縁部。端部はナデにより面をなす。	ハケ(6本/cm)	ハケ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石(1) 金 ◎		58
607	甕	口径 (16.2) 残高 4.1	緩やかに外反する口縁部。端部はナデにより面をなす。	ハケ(4本/cm)	ハケ(10本/cm)	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
608	甕	底径 5.2 残高 5.8	やや上げ底を呈する。僅かにくびれ、胴部は緩く内湾して立ち上がる。	[胴]ハケ(7本/cm)→ナデ [底]ナデ(指頭痕あり)	ナデ	褐色 橙色	石・長(1～2) 金 ◎		58
609	甕	底径 4.8 残高 4.6	やや上げ底を呈する。僅かにくびれ、胴部は外傾して立ち上がる。	マメツ [胴下]ハケ→ナデ [底]ナデ	ナデ	桃色 黒色	石・長(1～4) ◎		
610	甕	底径 (3.8) 残高 3.1	やや上げ底を呈する。胴部は外傾して立ち上がる。	[胴]ハケ(指頭痕あり) [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	淡茶褐色・ 暗灰色 暗灰色	石・長(1) 金 ◎		
611	甕	底径 (2.8) 残高 3.8	平底。胴部は内湾して立ち上がる。	[胴]ハケ(7本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ	淡橙色 黒褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
612	甕	底径 (4.4) 残高 2.8	平底。胴部は内湾して立ち上がる。	[胴]ハケ(6～8本/cm) [底]ナデ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～3) ◎		
613	壺	口径 (15.8) 残高 3.6	緩やかに外反する口縁部。端部はナデにより面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1) ◎		
614	壺	口径 (13.8) 残高 5.8	緩やかに外反する口縁部。頸部に3つの刻目を看取。	マメツ [胴]ハケ(10本/cm)	マメツ	橙色 浅黄橙色	石・長(1～5) ◎		58
615	壺	口径 (18.4) 残高 2.7	緩やかに外反する口縁部。中位はやや肥厚される。	マメツ	マメツ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石(1～2) ◎		
616	壺	口径 (18.2) 残高 3.0	口縁端部に4条の凹線文が施される。	[口端部]4条の凹線文 ヨコナデ	ヨコナデ	明褐色 明褐色	石・長(1) ◎		58
617	壺	口径 9.6 残高 8.0	複合口縁壺の口頸部。「く」字状を呈する接合部下方に多数のタタキ痕。	[拡]ハケ→ナデ [口][胴]ハケ(6本/cm)→タタキ・ミガキ	[口端]ナデ ハケ(7～8本/cm)(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1) 金 ◎		58
618	壺	口径 (10.0) 残高 6.1	複合口縁壺の口頸部片。「く」字状を呈する。	マメツ(一部ナデ)	マメツ	にぶい褐色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) ◎		
619	壺	口径 (8.0) 残高 3.7	複合口縁。内傾して立ち上がる口縁端部は外側に僅かに肥厚される。	[拡]ハケ→ヨコナデ [口]ハケ(8本/cm)	[口端]ヨコナデ [口]ナデ(工具痕あり)	橙色・灰褐色 橙色・灰褐色	石(1～2) ◎		58
620	壺	口径 (17.0) 残高 4.6	複合口縁拡張部に櫛描波状文等が施される。	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	淡褐色 淡褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
621	壺	残高 3.6	複合口縁拡張部に櫛描波状文、半截竹管文等が施される。	施文	ナデ	褐色 褐色・橙色	石・長(1～3) 密 ◎		58
622	壺	底径 (6.4) 残高 3.8	平底。外面に黒班有り。	[胴]ハケ(7本/cm) [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	淡黄色 淡黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
623	壺	底径 (6.8) 残高 3.9	平底。外面に黒班有り。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	黒灰色・淡褐色 黒灰色	石・長(1) ◎	黒斑	
624	壺	底径 (13.6) 残高 6.9	大型壺の底部片。平底。	ミガキ	マメツ	にぶい黄橙色 黒色	石・長(1～3) ◎		
625	壺	残高 3.3	平底。精緻な仕上げがなされる。	[胴]ハケ→ミガキ [底]ナデ	ハケ(7本/cm)	橙色 黒褐色	石・長(1～3) ◎		
626	壺	残高 6.2	調整後の工具(手元)の乱れ?記号?絵画?有り。	ハケ(5・11本/cm)	ハケ(8本/cm)(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		58
627	高坏	残高 5.2	有稜の坏部片。大きく外反する口縁部を有する。	[坏]マメツ(一部ハケ) [坏底]ミガキ	[坏]ハケ→ミガキ [坏底]ミガキ?	明橙色 明橙色	石・長(1～2) 金 ○		
628	高坏	残高 4.6	有稜の坏部片。大きく外反する口縁部を有する。精緻な仕上げ。	[坏]ハ ケ(10本/cm)(指頭痕あり) [坏底]ヨコナデ・ハケ(10本/cm)	ハケ→ミガキ	茶褐色 明褐色	石・長(1～3) 密 ◎		58
629	高坏	残高 8.1	脚部。中位に円孔(焼成前穿孔)を3箇所確認。	ハケ(10本/cm)→ナデ	[坏底]ハケ? [脚]ナデ	暗褐色 坏内・橙色 脚内・褐色	石・長(1～2) 金 ◎		58

表71　出土遺物観察表　土製品(5)

630	高坏	残高　(2.5)	高坏の有段裾部片。6箇所に円孔があったと思われる。竹管文。	ミガキ→施文・穿孔	ハケ(6本/cm)	黄褐色 褐色	砂 金 ◎		58
631	甕	口径　13.6 残高　4.6	緩やかに外反する口縁部。外面は強いナデ→ハケメ調整が施される。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(10本/cm)(指頭痕あり)	[口]ナデ [胴]ハケ→ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～3) ◎		
632	甕	口径　(15.6) 残高　4.8	緩やかに外反する口縁部。端部はナデにより面をなす。	[口端]ナデ [口][胴]ハケ(7本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	[口]ハケ(7本/cm)→ナデ [胴]ハケ(7本/cm)	黄褐色 淡黄色・暗灰色	石(1) ◎		
633	甕	口径　21.8 残高　4.6	大きく外反する口縁部。端部はナデにより下方へ僅かに肥厚される。	[口端]ヨコナデ [口][胴](工具による)ナデ	(工具による)ナデ(指頭痕あり)	茶褐色 茶褐色	石(1～3)・長(1) 金 ◎		59
634	甕	口径　(16.4) 残高　4.1	大きく外反する口縁部。端部はナデにより面をなす。	[口端]ナデ [口上]ハケ(4～5本/cm) [口下]ハケ(7本/cm)	ハケ(7本/cm)	淡褐色 淡褐色	石・長(1～3) ◎		
635	甕	口径　(16.0) 残高　5.8	口縁部は「く」字状を呈する。	[口端]ヨコナデ [口][胴]マメツ	マメツ(指頭痕あり)	橙褐色 橙褐色	石(1～2) ◎		
636	甕	口径　15.2 残高　3.5	緩やかに外反する口縁部。端部はナデにより面をなす。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
637	壺	底径　5.0 残高　9.3	平底。外面に黒班有り。	[胴](工具による)ナデ [底]ナデ	(工具による)ナデ(指頭痕あり)	淡褐色 明褐色	石・長(1～2) 金 ◎	黒斑	59
638	甕	底径　(4.8) 残高　9.7	平底の底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。外面に黒班有り。	[胴](工具による)ナデ [底]ナデ	(工具による)ナデ	暗褐色 明褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
639	甕	底径　(3.2) 残高　3.2	平底の底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	淡黄色 淡黄色	石・長(1～5) 金 ◎		
640	甕	底径　3.9 残高　5.0	平底の底部から胴部は外傾して立ち上がる。	マメツ	マメツ(指頭痕あり)	黄橙色 明橙色	石・長(1～3) 金 ○		
641	甕	底径　(5.0) 残高　8.0	平底の底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。内側に黒斑有り。	[胴]ハケ(7本/cm) [底]ナデ	[胴上]ハケ [胴下]ナデ(指頭痕あり)	淡黄色 淡黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
642	甕	底径　(3.6) 残高　7.4	平底を呈する。僅かにくびれ、胴部は緩く内湾して立ち上がる。	ハケ	ハケ→ナデ(指頭痕あり)	暗褐色 黒灰色	石(1～2) ◎		
643	甕	底径　3.0 残高　3.0	上げ底を呈する。僅かにくびれ、胴部は緩く内湾して立ち上がる。	ナデ(指頭痕・工具痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	淡黄・褐色 橙色	石・長(1～2) ◎		59
644	甕	底径　2.7 残高　4.4	上げ底を呈する。僅かにくびれ、胴部は緩く内湾して立ち上がる。	[胴](工具による)ナデ [底]ナデ(指頭痕あり)	ハケ(8本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	赤褐色 黒褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	59
645	甕	底径　(5.4) 残高　2.2	平底。底部は円盤状をなす。	[胴]ハケ(10本/cm) [底]ナデ	ハケ(5本/cm)	暗灰色 暗灰色	砂 ◎		59
646	甕	残高　5.9	丸底を呈する。	[胴上]ハケ(10本/cm)→ナデ [胴下～底]ナデ	ナデ	赤褐色・黒色 茶褐色	石・長(1～2) ◎		
647	甕	口径　28.0 残高　4.5	口縁端部が上下に拡張され、端面に太い沈線文が施される。	[口端]ナデ→施文 [口][頸]ナデ	[口上]ナデ [口下]ハケ→ナデ [頸]ナデ(指頭痕あり)	橙色・褐色 褐色	石・長(1～2) ◎		
648	壺	口径　(13.0) 残高　3.6	緩やかに外反する口縁部。端部は上下に拡張される。	[端部]3条の沈線文 マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石(1～3) ◎		
649	壺	残高　3.5	口縁端部は上下に拡張される。端面には棒状浮文、沈線文が施される。	マメツ	マメツ	橙色 黄橙色	石(1～2) ○		59
650	壺	残高　8.0	大きく開く口頸部片。	ハケ(8本/cm)	ハケ(8本/cm)	橙色 橙色	◎		
651	壺	口径　(15.0) 残高　6.5	大きく開く口頸部片。端部はナデにより面をなす。	[口端]ヨコナデ [口]ヨコナデ [肩](10本/cm)	ナデ(指頭痕あり)	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		
652	壺	口径　(28.8) 残高　3.6	大きく開く口縁部片。端部はナデにより面をなす。	ハケ(7本/cm)	ハケ(7本/cm)	茶褐色 茶褐色	石(1) ◎		
653	壺	口径　(22.5) 残高　4.1	大きく開く口縁部片。精緻な仕上げ。内外面に黒斑有り。	[口]ミガキ [肩]ナデ	ナデ	白褐色 白褐色	密・砂 ◎	黒斑	
654	壺	口径　(15.4) 残高　8.1	やや内湾気味に直立する口頸部片。	マメツ	マメツ [胴]ハケ(10本/cm)(指頭痕あり)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～2) ◎		
655	壺	口径　(14.4) 残高　6.1	口縁部は外反し、端部は面をなす。頸部には格子刻目の凸帯が付く。	マメツ [口端]ナデ [口]一部ハケ	[口端][肩]ナデ(指頭痕あり) [口]ハケ(7本/cm)	橙色 茶褐色	石・長(1～3) ◎		
656	壺	残高　5.8	口縁部は外反し、端部は欠損。頸部には格子刻目の凸帯が付く。	ナデ	[口]ハケ→ナデ [肩]ナデ(指頭痕あり)	黄褐色 黄褐色	石・長(1～5) ◎		
657	壺	残高　(7.2)	口縁部は外反し、端部は欠損。頸部には格子刻目の凸帯が付く。	ミガキ	ナデ	褐色 黒褐色	石(1～4) ◎		
658	壺	口径　(16.8) 残高　(5.4)	複合口縁部。拡張部には波状文が施される。	[拡]ヨコナデ [口上]ナデ [口下]ハケ(8本/cm)	[拡端]ヨコナデ [拡][口]ハケ(8～9本/cm) [拡～口]ナデ(指頭痕あり)	茶褐色・黒灰色 茶褐色	石・長(1) ◎		
659	壺	口径　(22.2) 残高　9.3	複合口縁。拡張部に波状文、半裁竹管文。端部に斜線充填三角文。	[拡]ヨコナデ [口下]ハケ(7本/cm)→ナデ	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(7本/cm)	橙褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	59
660	壺	口径　(16.0) 残高　4.6	複合口縁拡張部。沈線文、波状文が施される。	[拡]ヨコナデ [口]ハケ	ヨコナデ(指頭痕あり)	淡茶褐色 淡茶褐色	石(1～3)長(1) ◎		
661	壺	口径　(23.6) 残高　4.8	複合口縁拡張部。波状文が施される。外面に黒斑有り。	ヨコナデ→施文	ナデ(指頭痕あり)	黄褐色 淡橙色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	59

表72　出土遺物観察表　土製品(6)

662	壺	口径　15.0 残高　3.2	複合口縁拡張部。波状文、沈線文が施される。	ナデ→施文	ナデ	淡黄色・灰色 橙色	微粒長 ◎		59
663	壺	口径　(14.6) 残高　4.1	複合口縁部。外面に黒班有り。	[拡]ハケ(6本/cm)→ナデ [口]ナデ(指頭痕あり)	[口端]ヨコナデ [拡]ナデ(指頭痕あり)	淡褐色 暗茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
664	壺	口径　(15.2) 残高　4.8	複合口縁部。拡張部はやや内湾気味となる。端面は面をなす。	ハケ(6～8本/cm)	[拡端]ヨコナデ ミガキ・ハケ(7本/cm) [拡～口]指頭痕あり	茶色 茶色	石(1～3)長(1) ◎		59
665	壺	口径　(12.0) 残高　3.9	複合口縁部。拡張部はやや外反気味となる。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
666	壺	口径　(15.8) 残高　6.9	複合口縁部。拡張部は強い横ナデにより稜をなす。	[拡端]ヨコナデ [拡]ハケ・ヨコナデ [口]ハケ(10本/cm)	[拡～口]ハケ→ナデ(指頭痕あり) [口]ハケ(5本/cm)	淡黄色 黄橙色	石・長(1～3) ◎		59
667	壺	口径　(15.2) 残高　4.2	複合口縁部。拡張部はやや内湾気味となる。	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(5本/cm)(指頭痕あり)	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(7本/cm)	褐色 黒褐色	石・長(1～3) ◎		
668	壺	底径　(10.8) 残高　6.2	平底。大型品。外面に黒班有り。	マメツ	マメツ	暗橙色 暗橙色	石・長(1～4) ○	黒斑	
669	壺	底径　(8.6) 残高　6.1	平底。大型品。外面に黒班有り。	[胴]ハケ(7本/cm)→ナデ [底]ナデ	ハケ(9本/cm)・ナデ(指頭痕あり)	茶褐色 暗灰褐色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
670	甕	底径　(4.2) 残高　4.0	平底。	ナデ [胴]工具痕あり	ナデ(指頭痕あり)	赤褐色・灰褐色 黒褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
671	壺	底径　3.2 残高　2.2	平底から内湾気味に立ち上がる。外面に黒班有り。	マメツ	ナデ(指頭痕あり)	淡黄色 暗灰褐色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
672	壺	底径　(4.2) 残高　3.4	平底から内湾気味に立ち上がる。外面に黒班有り。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	橙色 淡黄色	石・長(1～5) 金 ◎	黒斑	
673	壺	底径　1.4 残高　2.8	狭小な平底から内湾気味に立ち上がる。外面に黒班有り。	ナデ	ナデ(工具痕あり)	淡黄色 淡黄色	石・長(1) 金 ◎	黒斑	
674	壺	底径　(5.0) 残高　9.4	平底から内湾して立ち上がる。	[胴]ハケ(5・10本/cm) [底]ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	暗灰色・茶褐色 暗灰色・茶褐色	石・長(1～2) ◎		
675	壺	底径　2.2 残高　3.7	狭小な平底から内湾気味に立ち上がる。外面に黒班有り。	ハケ	ナデ	橙色・淡黄色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
676	壺	底径　(5.8) 残高　2.6	平底から内湾して立ち上がる。	[胴]ハケ(4本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	暗褐色 灰褐色	石(1～2) 金 ◎		
677	鉢	口径　(14.5) 残高　7.2	口縁部は短く外反する。	[口端]ヨコナデ [胴]ハケ(6～7本/cm)	ミガキ	赤橙色・黄橙色 赤橙色・黄橙色	石・長(1～2) ◎		
678	小壺	残高　5.8	外面はほぼ全面ハケメ痕。	[口]ハケ(7本/cm) [胴]ハケ(5本/cm)	[口]ナデ [胴上]ハケ→ナデ [胴下]ハケ(6～7本/cm)	橙色 淡橙色	長(1) ◎		
679	鉢	底径　9.0 残高　2.7	ボタン状の小さい平底を呈する。	マメツ	ハケ(6本/cm)	黄橙色 橙色	石・長(1～3) ○		59
680	鉢	底径　(8.2) 残高　2.3	台付鉢の底部片。上げ底を呈する。	ハケ(8～9本/cm)・ナデ(指頭痕あり)	破損面	明褐色 明褐色	石・長(1～4) ◎		
681	鉢	残高　4.4	台付鉢の底部片。上げ底を呈する。	ハケ(10～11本/cm)→ナデ	ナデ	明黄色 明黄色	石・長(1～4) 金 ◎		59
682	高坏	残高　5.3	有稜の坏部片。大きく外反する口縁部を有する。	マメツ	マメツ	淡褐色・橙色 淡橙色・灰色	石・長(1～3) ○		59
683	高坏	口径　(18.6) 残高　1.7	坏部小片。端部は内外に拡張され、面をなす。	ヨコナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石(1) ◎		
684	高坏	底径　(21.8) 残高　2.3	底部片。焼成前穿孔を1つ看取。	ミガキ→ナデ?又はナデ? [脚端]ヨコナデ	ハケ(6本/cm)	黄褐色 黄褐色	石・長(1～2) ◎		
685	高坏	残高　3.4	底部片。焼成前穿孔を2つ看取。稜の上下に竹管文が施される。	ミガキ	ハケ(6本/cm)	黄橙色 黄橙色	砂・金 ◎		59
686	高坏	残高　7.2	僅かに外反する脚部片。	ナデ	ナデ	暗褐色 淡褐色	石・長(1～2) ◎		
687	高坏	残高　5.8	脚部。中位に円孔(焼成前穿孔)を3箇所確認。	ミガキ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) 密 ◎		
688	甕	口径　20.0 残高　4.1	外反する口縁部片。端部はナデにより上下に拡張される。	ハケ(6本/cm)	ハケ(6本/cm)	淡黄色 淡黄色	石・長(1～3) ◎		
689	甕	底径　(4.0) 残高　3.2	くびれの上げ底を呈する。	[胴]ハケ(6～7本/cm) [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
690	甕	底径　5.2 残高　2.5	底面は指頭圧痕により僅かな上げ底を呈する。	[胴]ハケ(5本/cm)→ナデ [底]ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	にぶい褐色 黒色	石・長(1～5) ◎		
691	甕	底径　3.4 残高　5.6	上げ底を呈する。僅かにくびれ、胴部は緩く内湾して立ち上がる。	[胴]ハケ(8本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙色 黒褐色	石・長(1～3) ◎		
692	甕	底径　(5.6) 残高　3.2	僅かに上げ底を呈する。胴部は緩く内湾して立ち上がる。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 褐灰色	石(1～2) 長(1～3) ◎		
693	甕	底径　(3.8) 残高　2.4	僅かに上げ底を呈する。胴部は緩く内湾して立ち上がる。	ナデ [胴]一部ハケ(8本/cm)→ナデ	ナデ(指頭痕あり)	茶褐色 淡褐色	石・長(1～3) ◎		

表73　出土遺物観察表　土製品(7)

694	甕	底径　(4.4) 残高　4.2	平底から外傾して立ち上がる。	[胴]マメツ(一部ハケ(4本/cm)) [底]ハケ→ミガキ	マメツ	にぶい赤褐色 褐灰色	石・長(1～3) ◎		
695	壺	口径 (15.8) 残高　8.8	口頸部片。口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。	マメツ (一部ハケ(10本/cm))	マメツ(指頭痕あり)	橙色 暗灰色・橙色	石(1～2) 金 ◎		
696	壺	残高　5.2	頸部片。格子刻目凸帯が貼り付けられる。	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	褐色 褐色	石・長(1～4) ◎		
697	壺	口径 (12.6) 残高　5.3	断面「く」字状を呈する口縁部片。	マメツ	マメツ(指頭痕あり)	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		60
698	壺	口径 (26.0) 残高　5.5	複合口縁の拡張部片。	施文	[口端]ヨコナデ [口]ナデ	橙色 橙色	石(1～2) ◎		60
699	壺	残高　2.9	複合口縁の拡張部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～4) ◎		
700	壺	底径　(9.8) 残高　5.6	平底を呈する。僅かにくびれ、胴部は外傾して立ち上がる。	[胴]ハケ→ナデ [底]ナデ	ハケ(8～9本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	暗橙色・黒灰色 灰色	石・長(1～2) ◎		60
701	壺	底径　(4.0) 残高　3.4	平底。外面に黒班有り。	ナデ	ナデ(指頭圧痕あり)	淡黄色 淡黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
702	壺	底径　(6.0) 残高　2.4	平底を呈する。胴部は外傾して立ち上がる。	マメツ	ナデ(指頭圧痕あり)	黒褐色 黄褐色	石・長(1～5) ◎		
703	壺	底径　(5.0) 残高　3.4	平底から内湾気味に立ち上がる。	ミガキ	ハケ→ナデ(指頭痕あり)	にぶい赤褐色 橙色	石(1~3)長(1~5) 金 ◎		
704	壺	底径　(3.0) 残高　5.0	平底から内湾気味に立ち上がる。	[胴]ハケ(6～8本/cm) [底]ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	黒色・黄褐色 にぶい褐色	石(1～2) 長(1～3) ◎		
705	壺	底径　(5.8) 残高　3.1	上げ底を呈する。僅かにくびれ、胴部は緩く内湾して立ち上がる。	マメツ	ナデ(指頭痕あり)	にぶい赤褐色 黒色	長(1～4) ◎		
706	鉢	口径 (29.0) 残高 12.9	外反する口縁部。頸部には格子刻目凸帯が貼り付けられる。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ→ナデ [胴]ハケ(6本/cm)or(板状工具による)ナデ	[口]ヨコナデ(指頭痕あり) [胴]ハケ(8本/cm)or(板状工具による)ナデ	橙色 橙色・灰褐色	石・長(1～3) ◎		60
707	鉢	底径　2.5 残高　9.3 口径 13.5	平底から内湾して立ち上がる体部。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	淡黄色 褐色	石・長(1～3) ◎		60
708	壺	底径　5.8	外面に黒班有り。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)(一部ハケ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
709	高坏	残高　4.6	有稜の坏部片。	(工具による)ナデ	(工具による)ナデ	淡褐色 黒色	石・長(1～2) ◎		
710	高坏	残高　5.8	脚部片。2段4孔の焼成前穿孔を看取。	マメツ	マメツ(指頭痕・しぼり痕あり)	淡橙色・灰白色 黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		

表74　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
711	石包丁	2／3	結晶片岩	7.8	1.9	0.53	12.1		60
712	石包丁	1／2	結晶片岩	6.6	4.7	0.53	26.31		60
713	石包丁	ほぼ完形	結晶片岩	9.3	3.0	0.88	44.06		60
714	石器素材	ほぼ完形	不明	11.9	2.6	1.85	91.05		60

表75　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
715	甕	口径 (19.6) 残高　3.3	外反する口縁部片。端部は下方へ肥厚される。	マメツ	マメツ	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1～5) ◎		
716	甕	口径 (18.2) 残高　4.4	外反する口縁部片。端部は下方へ僅かに肥厚される。	マメツ(一部ハケ(6～7本/cm))	ハケ(5本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		
717	壺	底径　(5.8) 残高　6.5	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1～3) 多 ◎		
718	壺	底径　(5.0) 残高　3.4	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) 金・多 ◎		
719	壺	底径　(8.0) 残高　4.5	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	マメツ	指頭圧痕	橙色 黄灰色	石・長(1～3) ◎		
720	坏蓋	口径 (13.4) 残高　3.6	口縁部は段をなして垂下する。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 オリーブ灰色	石・長(1～2) 密 ◎		60

第 16 章　自然科学分析

株式会社古環境研究所

枝松遺跡 9 次調査の火山灰分析

1. はじめに

四国地方西部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、姶良、鬼界、九重など九州地方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる。さらに中期更新世に遡れば、中部地方の火山に由来するテフラなども検出されている。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで松山市枝松遺跡 9 次調査においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象として火山ガラス比分析と屈折率測定を行い、指標テフラの検出同定を試みることになった。試料採取が行われた地点は、1 区西壁、2 区西壁、2 区南壁の 3 地点である。

2. 土層の層序

(1) 1 区西壁

1 区西壁では、下位より灰褐色砂質土（層厚 10 ㎝以上）、若干色調が暗い褐色土（層厚 11 ㎝）、暗褐色土（層厚 9 ㎝）、成層したテフラ層（層厚 38 ㎝）、礫混じり黄色細粒火山灰層（層厚 8 ㎝，礫の最大径 4 ㎜，Ⅵ層）、暗褐色粘質土（層厚 15 ㎝，Ⅴ層）、若干青みを帯びた灰色土（層厚 18 ㎝）が認められる（第 184 図）。これらのうち成層したテフラ層は、下位より黄白色細粒火山灰層（層厚 2 ㎝，Ⅹ層）、褐色粗粒火山灰層（層厚 7 ㎝，Ⅳ層）、黄色砂質細粒火山灰層（層厚 9 ㎝）、黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚 7 ㎝，以上Ⅷ層）、黄色細粒火山灰層（層厚 13 ㎝，Ⅶ層）からなる。この成層したテフラ層は、最下部のフォールユニットを除けば、全体として下位ほど粒径が大きい正の級化構造をもって堆積しているようにみえる。

(2) 2 区西壁

2 区西壁では、下位より褐色砂層（層厚 10 ㎝以上，Ⅻ層）、灰色砂質土（層厚 14 ㎝，Ⅺ層）、成層したテフラ層（層厚 38 ㎝）、礫層（層厚 4 ㎝，礫の最大径 8 ㎜）、礫混じり黄色砂層（層厚 14 ㎝，礫の最大径 5 ㎜，以上Ⅵ層）、暗褐色粘質土（層厚 12 ㎝，Ⅴ層）、灰色粘質土（層厚 19 ㎝，Ⅳ層）、暗灰褐色土（層厚 7 ㎝）、黒色土（層厚 4 ㎝，以上Ⅲ層）、黄灰色土（層厚 8 ㎝，Ⅱ層）、青みがかった灰色土（層厚 10 ㎝）、黄色がかった灰色土（層厚 6 ㎝）、若干色調が暗い褐色土（層厚 3 ㎝，以上Ⅰ層）が認められる（第 185 図）。これらのうち成層したテフラ層は、下位より黄色細粒火山灰層（層厚 2 ㎝，Ⅹ層）、暗褐色粗粒火山灰層（層厚 2 ㎝）、灰色粗粒火山灰層（層厚 9 ㎝，以上Ⅳ層）、黄色砂質細粒火山灰層（層厚 12 ㎝，Ⅷ層）、黄色細粒火山灰層（層厚 15 ㎝，Ⅶ層）からなる。この成層したテフラ層は、最下部のフォールユニットを除けば、全体として下位ほど粒径が大きい正の級化構造をもって堆積しているようにみえる。

(3) 2 区南壁

2 区南壁では、下位より灰色砂層（層厚 9 ㎝以上）、黄灰色砂層（層厚 11 ㎝）、礫混じり灰褐色土（層

厚 20 ㎝，礫の最大径 32 ㎜)、礫混じり黒灰色土（層厚 21 ㎝，礫の最大径 14 ㎜)、礫混じり暗灰褐色土（層厚 17 ㎝，礫の最大径 13 ㎜)、灰褐色砂質土（層厚 17 ㎝)、わずかに灰色がかった暗褐色砂質土（層厚 9 ㎝)、成層したテフラ層（層厚 15 ㎝以上）が認められる（第 186 図)。これらのうち成層したテフラ層は、少なくとも下位より黄色細粒火山灰層（層厚 2 ㎝，X層)、灰褐色粗粒火山灰層（層厚 4 ㎝，Ⅳ層)、黄色砂質細粒火山灰層（層厚 9 ㎝以上，Ⅷ層）からなる。

3. 火山ガラス比分析

(1)分析の手順

2 区西壁および 2 区南壁において、基本的に 5 ㎝ごとに設定採取された 26 点の試料を対象に火山ガラス比分析を行い、試料に含まれる火山ガラスの特徴や量の層位的変化を把握した。分析の手順は次の通りである。

1）試料 12g を秤量。

2）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）分析篩により 1/4-1/8 ㎜の粒子を篩別。

5）偏光顕微鏡下で 250 粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別組成傾向を求める。

(2)分析結果

2 区西壁および 2 区南壁における火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして第 187 図と第 188 図に、その内訳を表 76 に示す。2 区西壁では、試料 26 より上位で火山ガラスが検出される。野外において認められたテフラ層には、とくに多くの火山ガラスが含まれており、その主体部（試料 24、試料 22、試料 20、試料 18）には、とくに多くの無色透明のバブル型が認められる。これらの試料には、ほかに繊維束状に発泡した軽石型や分厚い中間型ガラスが含まれている。それらより上位では、礫層を除いて、上方に向かって火山ガラスの比率が減少する傾向にあるが、試料 8 より試料 6 にかけて、再び火山ガラスの比率が高くなり、試料 6 に多くの火山ガラスが認められる。この試料 6 には、無色透明のバブル型ガラスのほか、淡褐色や褐色のバブル型、さらに中間型、繊維束状やスポンジ状に発泡した軽石型ガラスなどが含まれている。

2 区南壁では、試料 3 にとくに多くの火山ガラスが含まれている。ここでは量が多い順に、無色透明のバブル型ガラス、繊維束状に発泡した軽石型ガラス、中間型ガラス、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスが認められる。試料 7 や試料 3 にも、層位や形態さらに色調などから、試料 3 が採取されたテフラ層に由来すると考えられる火山ガラスが含まれている。それより下位では、試料 13 および試料 11 にわずかながら火山ガラスが認められる。これらの試料には、無色透明のバブル型、中間型、繊維束状に発泡した軽石型などの火山ガラスが含まれている。

4. 屈折率測定

(1)測定試料と測定方法

現段階における火山灰編年学における指標テフラとの同定には、一般に小規模な噴火に由来するスコリアや岩片に富むテフラを除くテフラについては、テフラ粒子の屈折率測定が必須になっている。そこで、火山ガラスが確認された 2 区南壁の試料 13 について、温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）により、火山ガラスの屈折率測定を試みた。

(2)測定結果

2 区南壁の試料 13 に含まれる火山ガラスついて、屈折率（n）の測定を行った結果、1.498-1.500 の値が得られた。

5. 考察

土層の観察により認められた成層したテフラ層のうち、少なくともⅦ～Ⅳ層は、その層相や火山ガラスの形態および色調、さらに屈折率などから、約 2.4 ～ 2.5 万年前 *1 に姶良カルデラから噴出した姶良 Tn 火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，村山ほか，1993，池田ほか，1995）に同定される。なお、その最下部のテフラ層（X層）については、層位や層相さらに火山ガラスの特徴などから、AT を噴出した入戸火砕流の一連の噴火の最初の段階に姶良カルデラから噴出した姶良大隅軽石（A-Os，町田・新井，1976，1992）に対比される可能性が高い。

試料 6（Ⅲ層）に多く含まれる火山ガラスについては、AT に由来する火山ガラスも二次的に含まれているとは思われるものの、その多くは火山ガラスの形態や色調などから、約 6,300 年前 *1 に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に由来すると考えられる。

2 区南壁の成層したテフラ層についても、層相や火山ガラスの形態および色調などから AT（最下部はおそらく A-Os）に同定される。それより下位にある土層のうち、試料 13 や試料 11 に含まれるテフラについては、AT より下位の色調が暗い土層中に層位があること、火山ガラスの形態や色調などから、約 3 万年前 *1 に姶良カルデラから噴出した姶良大塚テフラ（A-Ot，長岡，1984，長岡ほか，1997）や約 2.65 万年前 *1 に姶良カルデラから噴出した姶良深港テフラ（A-Fm，Nagaoka，1988，長岡ほか，1997）に由来する可能性がもっとも高いように思われる。このことから、本遺跡において AT の下位にある土層については、日本各地で認められるいわゆる AT 下位の暗色帯に相当する可能性がある。

なお、上記のテフラ以外にも、愛媛県域周辺では、高知県域土佐湾南西岸の中位海成段丘堆積物中に約 9.5 万年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界葛原テフラ（K-Tz，Nagaoka，1988，町田ほか，1983，太田・小田切，1994，町田・新井，2003）が認められている。また高知県宿毛市域では、約 5 万年前に九重火山から噴出した九重第 1 テフラ（Kj-P1，町田，1980，奥野ほか，1998）が近年発見された（熊原・長岡，2002）*2。さらに、約 2.7 万年前 *1 に阿蘇カルデラ中央火口丘から噴出した阿蘇草千里浜テフラ（Aso-K，小野・渡辺，1985，高田，1989 など）が検出される可能性もある。

詳細な編年研究の基礎として、松山市域とその周辺の土層の堆積状況の良い地点においては、詳細な分析を行って、指標テフラに関する情報を収集しておく必要がある。

6. まとめ

枝松 9 次遺跡調査区において地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、姶良 Tn 火山灰（AT，約 2.4 ～ 2.5 万年前 *1）の一次堆積層と、その上位の覆土中に混在する鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約 6,300 年前 *1）に由来する可能性の高い火山ガラスを検出することができた。さらに AT より下位の姶良カルデラに由来する可能性のある火山ガラスも検出することができた。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代．暦年較正年代については、AT が約 2.6 ～ 2.9 万年前、K-Ah が約 7,300 年前と考えられている（町田・新井，2003）。

*2　熊原・長岡（2002）では、鎌田ほか（1998）の FT 年代をもとに、Kj-P1 の年代を 7 ～ 8 万年前と推定している。

文献

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による ^{14}C 年代．第四紀研究，34，P.377-379.

鎌田弘毅・檀原　徹・伊藤順一・星住英夫・川辺禎久（1998）九重火山起源の宮城・下坂田・飯田火砕流堆積物のジルコンのフィッション・トラック年代．火山，43，P.69-73.

熊原康博･長岡信治（2002）四国南西部における九重第一テフラの対比と低位段丘の年代．第四紀研究, 41, P.213-219.

町田　洋（1980）岩戸遺跡のテフラ（火山灰）．坂田邦洋編「大分県清川村岩戸における後期旧石器文化の研究」，広雅堂書店，P.443-454.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義．科学，46，P.339-347.

町田　洋･新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究, 17, P.143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276P.

町田　洋・新井房夫・長岡信治（1983）広域テフラによる南関東と南九州の後期更新世海成段丘の対比．日本第四紀学会講演要旨集，no. 13，P.45-46.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良 Tn 火山灰（AT）の ^{14}C 年代．第四紀研究，26，P.79-83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の ^{14}C 年代．地質雑，99，P.787-798.

長岡信治（1984）大隅半島北部から宮崎平野に分布する後期更新世テフラ．地学雑，93，P.347-370.

Nagaoka, S.（1988）The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. Geogr. Rept Tokyo Metropol. Univ., 23, P.49-122.

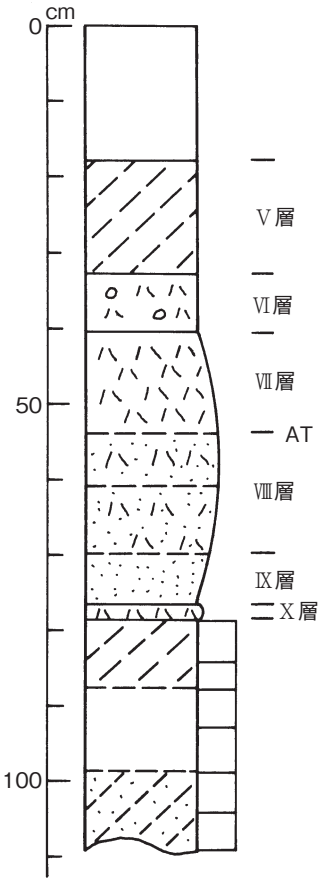
長岡信治・奥野　充・鳥井真之（1997）2 万 5 千年前以前の姶良カルデラ火山の噴火史．月刊地球，19，P.257-262.

奥野　充・中村俊夫・鎌田弘毅・小野晃司・星住英夫（1998）九重火山，飯田火砕流堆積物の加速器 14C 年代．火山，43，P.75-79.

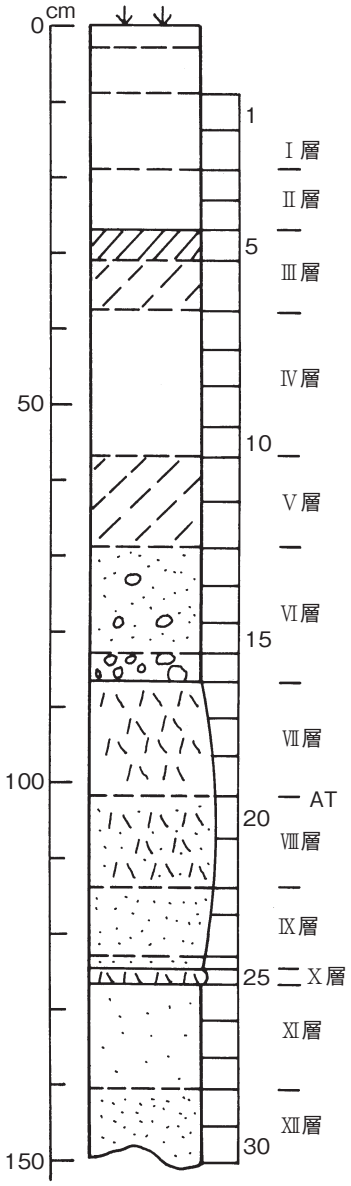
小野晃司・渡辺一徳（1985）阿蘇火山地質図（5 万分の 1）および説明書．火山地質図 4，地質調査所.

太田陽子・小田切聡子（1994）土佐湾南西岸の海成段丘と第四紀後期の地殻変動．地学雑，103，P.243-267.

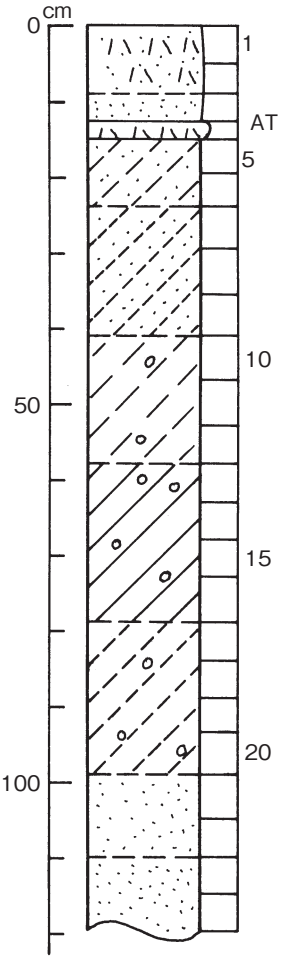
高田英樹（1989）阿蘇火山中央火口丘群のテフラ概報．熊本地学会誌，90，P.8-11.



第 184 図　1 区西壁土層柱状図

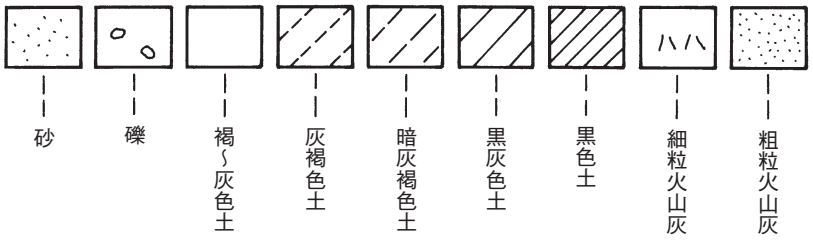


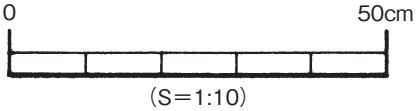
第 185 図　2 区西壁土層柱状図



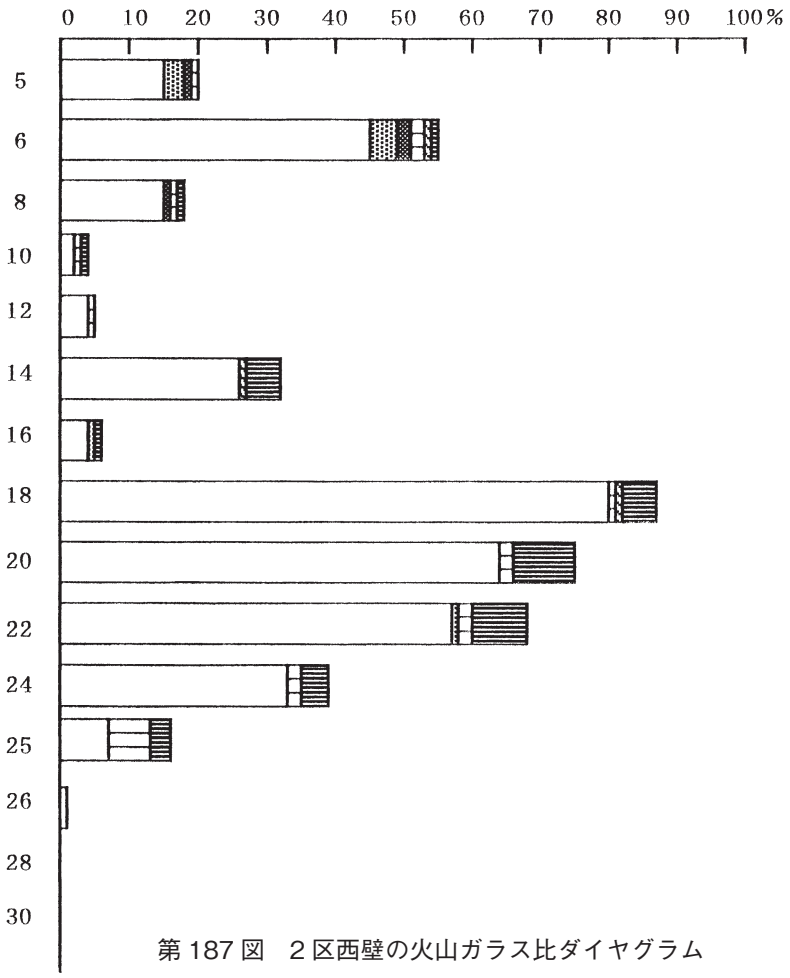
第 186 図　2 区南壁土層柱状図

※数字はテフラ分析の試料番号

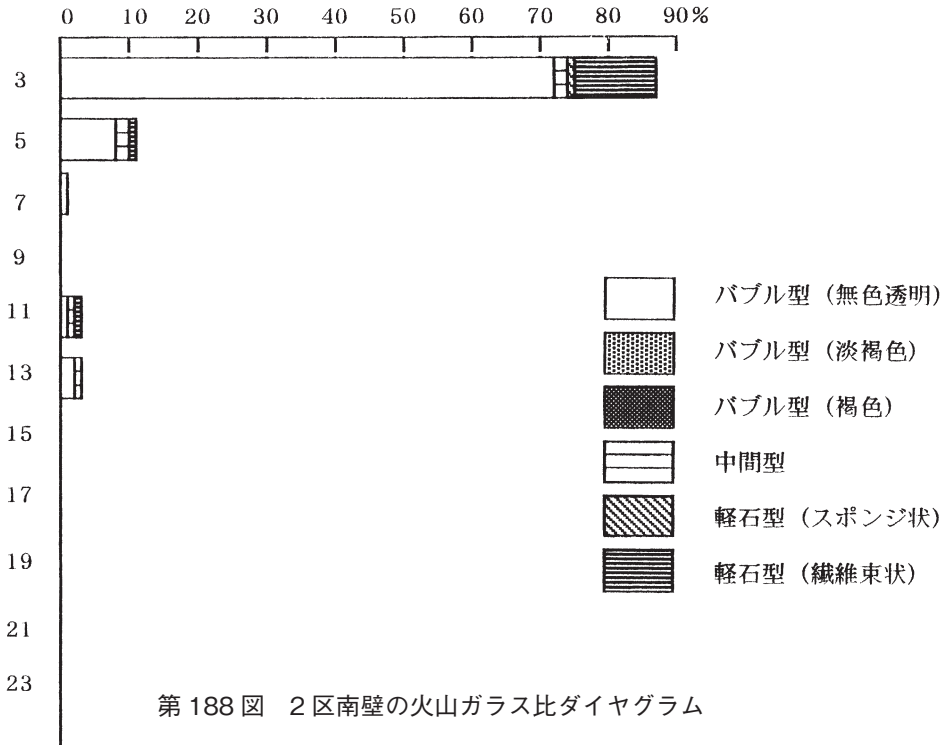




(S＝1:10)



第 187 図　２区西壁の火山ガラス比ダイヤグラム



第 188 図　２区南壁の火山ガラス比ダイヤグラム

表 76 火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	sc	その他	合計
2 区西壁	5	38	8	1	1	0	0	0	202	250
	6	113	9	3	4	1	2	0	118	250
	8	38	0	2	1	0	2	0	207	250
	10	5	0	0	1	0	1	0	243	250
	12	9	0	0	2	0	0	0	239	250
	14	64	0	0	0	1	12	0	173	250
	16	8	1	0	0	0	1	0	240	250
	18	195	0	0	1	1	10	0	43	250
	20	161	0	0	4	0	22	0	63	250
	22	142	1	0	4	0	20	0	83	250
	24	82	0	0	4	0	10	0	154	250
	25	17	0	0	14	0	6	0	213	250
	26	1	0	0	0	0	0	0	249	250
	28	0	0	0	0	0	0	0	250	250
	30	0	0	0	0	0	0	0	250	250
2 区南壁	3	179	0	0	5	2	30	0	34	250
	5	21	0	0	3	0	1	0	225	250
	7	1	0	0	0	0	0	0	249	250
	9	0	0	0	0	0	0	0	250	250
	11	2	0	0	2	0	1	0	245	250
	13	3	0	0	2	0	0	0	245	250
	15	0	0	0	0	0	0	0	250	250
	17	0	0	0	0	0	0	0	250	250
	19	0	0	0	0	0	0	0	250	250
	21	0	0	0	0	0	0	0	250	250
	23	0	0	0	0	0	0	0	250	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，pb：淡褐色，br：褐色，
sp：スポンジ状，fb：繊維束状，sc：スコリア．

第17章　まとめ

今回の調査では弥生時代、古墳時代～古代、中世～近世の遺構・遺物を検出した。

(1) AT 火山灰

調査地一帯は、AT 火山灰が広範に確認されている地域である。これらの火山灰は、平成５年に調査された束本遺跡４次調査において詳しく分析され、AT 火山灰層が１次堆積層と２次堆積層からなる事が報告されている。この調査結果をもとに、本調査においても、これらの火山灰の検出に努めた。その結果、枝松遺跡７次調査３区と同遺跡８次調査３区を除く全ての調査区域で AT 火山灰層が検出され、分布域が西方に広がることが確認された。

(2)暗色帯

第 16 章における２区南壁の層序は次のようになると思われる。下位よりの灰色砂層（層厚９㎝以上）は第 189 図の第Ⅻ層、黄灰色砂層（層厚 11 ㎝）は同図の第Ⅺ層、礫混じり灰褐色土（層厚 20 ㎝、礫の最大径 32 ㎜）は同図の第Ⅹ層、礫混じり黒灰色土（層厚 21 ㎝、礫の最大径 14 ㎜）は同図の第Ⅸ層、礫混じり暗灰褐色土（層厚 17 ㎝、礫の最大径 13 ㎜）は同図の第Ⅷ層、灰褐色砂質土（層厚 17 ㎝）は同図の第Ⅶ層、わずかに灰色がかった暗褐色砂質土（層厚９㎝）は同図の第Ⅵ層、成層したテフラ層（層厚 15 ㎝以上）は同図の第Ⅸ・Ⅶ層が相当すると思われる。分析の結果、AT よりも下位の土層は暗色帯に相当する可能性が得られており、今後、周辺の土層堆積状況を把握し、古環境を考察する上で貴重な資料となるものである。

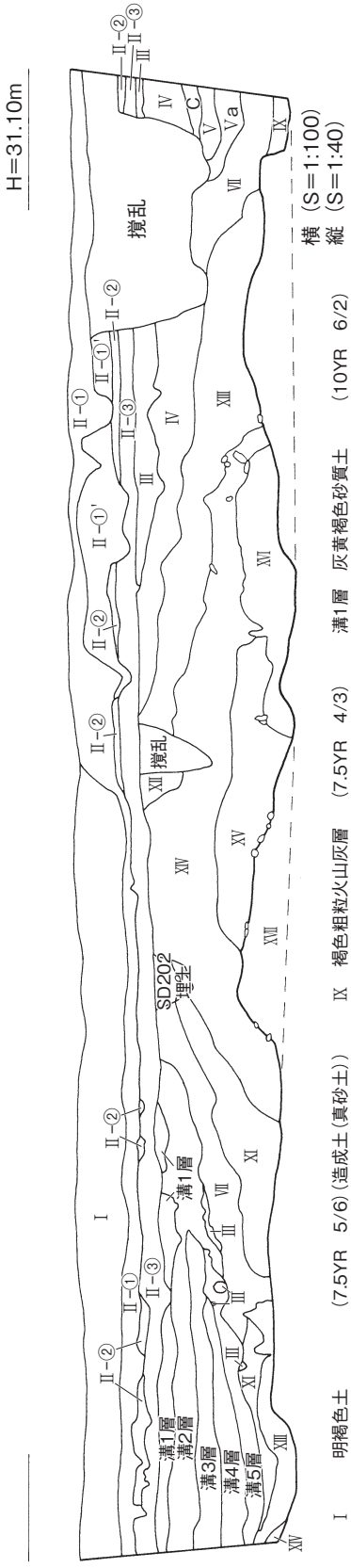
(3)弥生時代

枝松遺跡７次調査１区では、弥生時代中期後半に比定される土坑 SK111 が検出された。同時期の遺構として西方約 500m に位置する小坂七ノ坪遺跡２次調査の SD2 が挙げられる。溝の中からは弥生時代中期後半～後期初頭に比定される土器が出土している。周辺地における弥生時代中期後半の遺構・遺物の検出は少なく、集落の広がりを解明する上で貴重なデータとなるものである。

枝松遺跡８次調査１区では、弥生時代後期後半～末に比定される溝２条（SD101・102）が検出された。溝底に砂層の堆積がみられることから流水作用は明確である。

枝松遺跡８次調査２区では、弥生時代後期後葉に比定される竪穴住居址２棟（SB201・202）が検出された。二つの住居址には幾つかの共通点と相違点が見受けられる。共通点としては主に時期、基本的な建物構造、配置等である。相違点としては主に内部施設、出土遺物、遺物の出土状況である。内部施設の差異として SB201 には張り出し部、貼り床等のアメニティー的施設が設けられるのに対し、SB202 では簡素化されているかのようである。これらの状況から居住スペースと作業場というセット関係が連想される。

次に廃絶時の行為に着目する。SB201 内には多量の土器が集中するのに対し、SB202 内には多量の礫が集中する。共通点は皮袋形土製品の出土である。西方の中村松田遺跡から検出された SB4 内から同様の土製品が出土している。時期、遺物出土状況等 SB201 と共通点が多いことが注目される。



第189図　枝松遺跡9次調査2区南壁土層

枝松遺跡10次調査3区では、弥生時代後期前葉～後期末に比定されるSD301が検出された。溝底に砂層の堆積がみられる。出土遺物は完形品はなく、小片が多いことから廃棄或いは流れ込みのものと考えられる。

(4)古墳時代

枝松遺跡7次調査1区から古墳時代初頭には埋没し、その機能は失われていたと考えられるSD103が検出されている。また、同時代前期に比定されるSK107・104からは坑内に据え置かれた状態で甕が出土している。

枝松遺跡7次調査2区からは古墳時代後期に比定されるSD201が検出され、6世紀後半の遺物が出土している。

(5)中世～近世

この時期の遺構には掘立柱建物址、土坑、柱穴、溝などがある。調査で検出した掘立柱建物は、何れも柱間と柱穴規模は小さい事から小規模な建物である。

枝松遺跡7次調査2区では、13世紀後半に比定される掘立201が検出され、掘立柱建物を構成する柱穴内から完形の土師器坏が出土している。建物廃絶時の祭祀が行われたものと考えられる。

枝松遺跡9次調査2区では、13世紀代に埋没している可能性があるSD201・202が検出されている。なお、この時期の掘立柱構造物跡は枝松遺跡9次1区と同遺跡10次1区付近から検出されている。

なお、農耕関連の遺構・遺物として枝松遺跡9次調査1区から細かく分層される水田跡と人・牛の足跡が検出されている。水田跡からは中近世～近代に至る陶磁器（染付）や鉄製品（犂先）が出土している。

(6)調査の成果と課題

今回の調査は、枝松遺跡８次調査以外全て松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地（松山地区）の指定外区域で行われた。結果、多少の“濃い”、“薄い”はあるものの全域で埋蔵文化財の遺存が明らかとなった。この濃度の差異は、大きく時代時期の土地利用（環境）と後世の開発・削平に分けられるのではないだろうか。以下、時代別に結果を記す。

弥生時代：今回の調査で最も東側に位置する枝松遺跡８次調査１区のSD101（102）と10次調査３区のSD301の間（約120m）から竪穴住居（建物）址２棟が検出された。この数値は８次調査１区東方に隣接する束本遺跡４次調査地、同遺跡６次調査地のデータと比較して明らかに少ない。また、西方に至っては集落的様相が伺える枝松遺跡７次調査１区まで直線距離で約280mである。

古墳時代：全体的に希薄と言わざるを得ない。しかしながら西方に位置する枝松遺跡７次調査１区・２区から前期と後期の資料が確認されていることから周辺に集落が展開する様相がある。

古　代：全体的に希薄と言わざるを得ない。

中　世：枝松遺跡９次調査１区及び同遺跡10次１区から小規模な掘立柱建物跡、柵列等が検出されている。また、水田層や同時期の溝等も確認されている。なお若干希薄となるものの隣接する９次調査２区、10次調査２区から同時期の遺構・遺物が検出されている。以上のことから９次調査２区～10次調査２区にかけては農耕（水田）集落的な土地利用が伺われる。

本報告の中で注目されるのは、枝松遺跡８次調査２区で検出された２棟の竪穴住居址及び周辺環境である。何故ならば東方約130mに位置する束本遺跡６次調査１区で検出された２棟の竪穴住居址（SB101・102）及び周辺環境に類似点があるからである。第１に比定される時期がほぼ同一である。第２にSB101は住居址、SB102は工房址（鉄器）であるとされている。第３にSB102の東方10mに自然流路SR201があり、その東側では竪穴住居址は確認されていない。当然ながら各々の平面プラン或いは枝松遺跡８次調査２区SB202そのものが工房址であるとの断定がなされていない等の差異も認められる。今後、発掘調査データの精査を行い、これまで住居用の施設と考えられていた竪穴住居址が果たしてそうなのかどうかを踏まえて検討していかなければならないと思われる。

【参考文献】

田﨑博之編　『樽味遺跡Ⅱ－樽味遺跡２次調査報告－』愛媛大学埋蔵文化財調査室　1993

髙尾和長編　『束本遺跡４次調査・枝松遺跡４次調査』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団　埋蔵文化財センター　1996

梅木謙一　『中村松田遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団　埋蔵文化財センター　1997

村上恭通　『倭人と鉄の考古学』青木書店　1998

吉岡和哉編　『桑原遺跡５次調査地』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター　2004

相原浩二編　『－松山市道中村桑原線関連遺跡－束本遺跡６次調査地・桑原遺跡２次調査地・桑原遺跡４次調査地』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団　埋蔵文化財センター　2005

梅木謙一編　『中村地区の遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター　2007

写　真　図　版

枝松遺跡7次調査地

写真図版例言

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

   使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン　90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニュー FM2		ズームニッコール　28～85㎜他
フィルム	白　黒　プラスXパン・ネオパンSS・アクロス		
	カラー　RDPⅢ		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。

   使用機材：

カメラ	トヨビュー 45G
レンズ	ジンマーS　240㎜　F5.6他
ストロボ	コメット／CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白　黒　ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

   使用機材：

引伸機	ラッキー 450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜　F5.6A・50㎜　F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ　RCペーパー

4. 製　版　　写真図版175線
   印　刷　　オフセット印刷
   用　紙　　マットコート110kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～18『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

1．1 区遺構検出状況（西より）

図版2

1. 1区南壁土層（北西より）

2. SK111 遺物出土状況（西より）

3. SD103 遺物出土状況（南より）

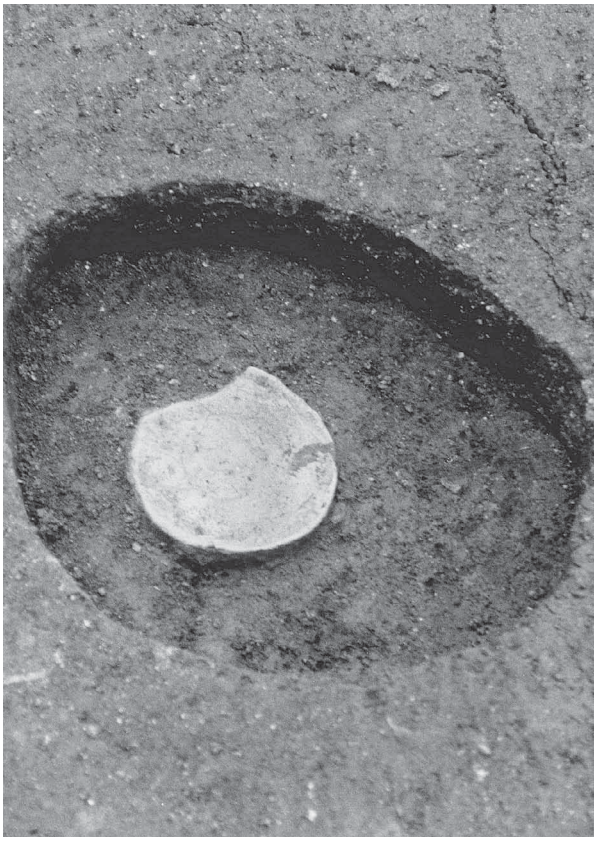
1.　SD103 ベルト土層（南より）

2.　SD103 完掘状況（南より）

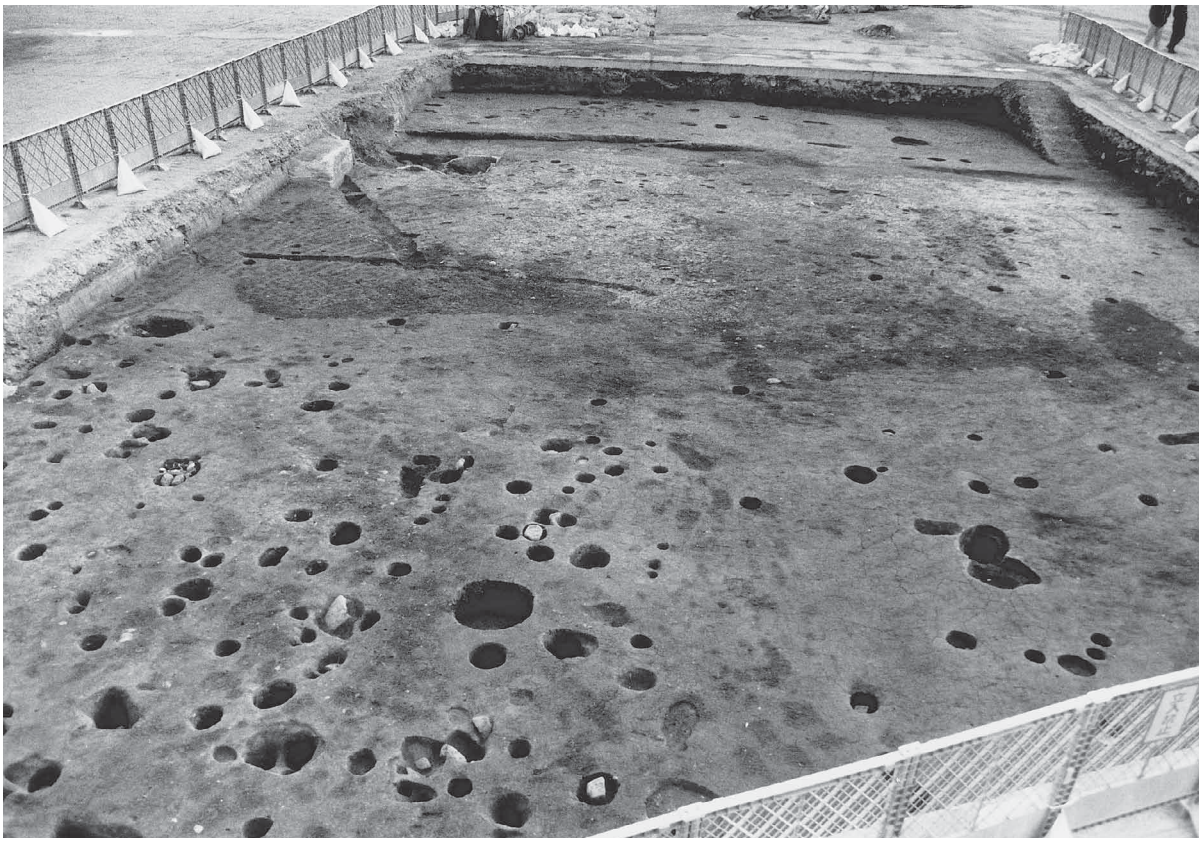
1. SK104 遺物出土状況（南より）

2. SK107 遺物出土状況（南より）

1.　SK103 遺物出土状況（東より）



2.　SP1079 遺物出土状況（南より）



3.　1 区中世遺構完掘状況（西より）

1．1区完掘状況（西より）

1. ２区遺構検出状況（西より）

1.　掘立 201 遺構検出状況（東より）

2.　SD201.202 完掘状況（南西より）

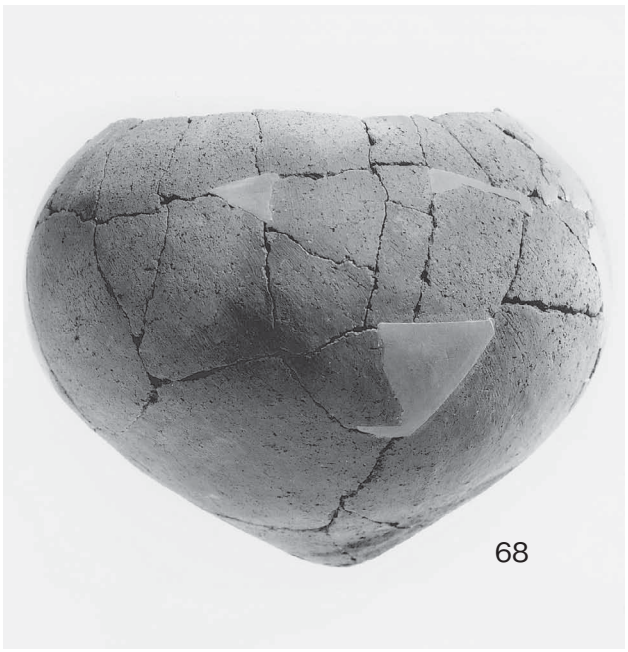
1.　SD204 完掘状況（南より）

2.　2 区完掘状況（西より）

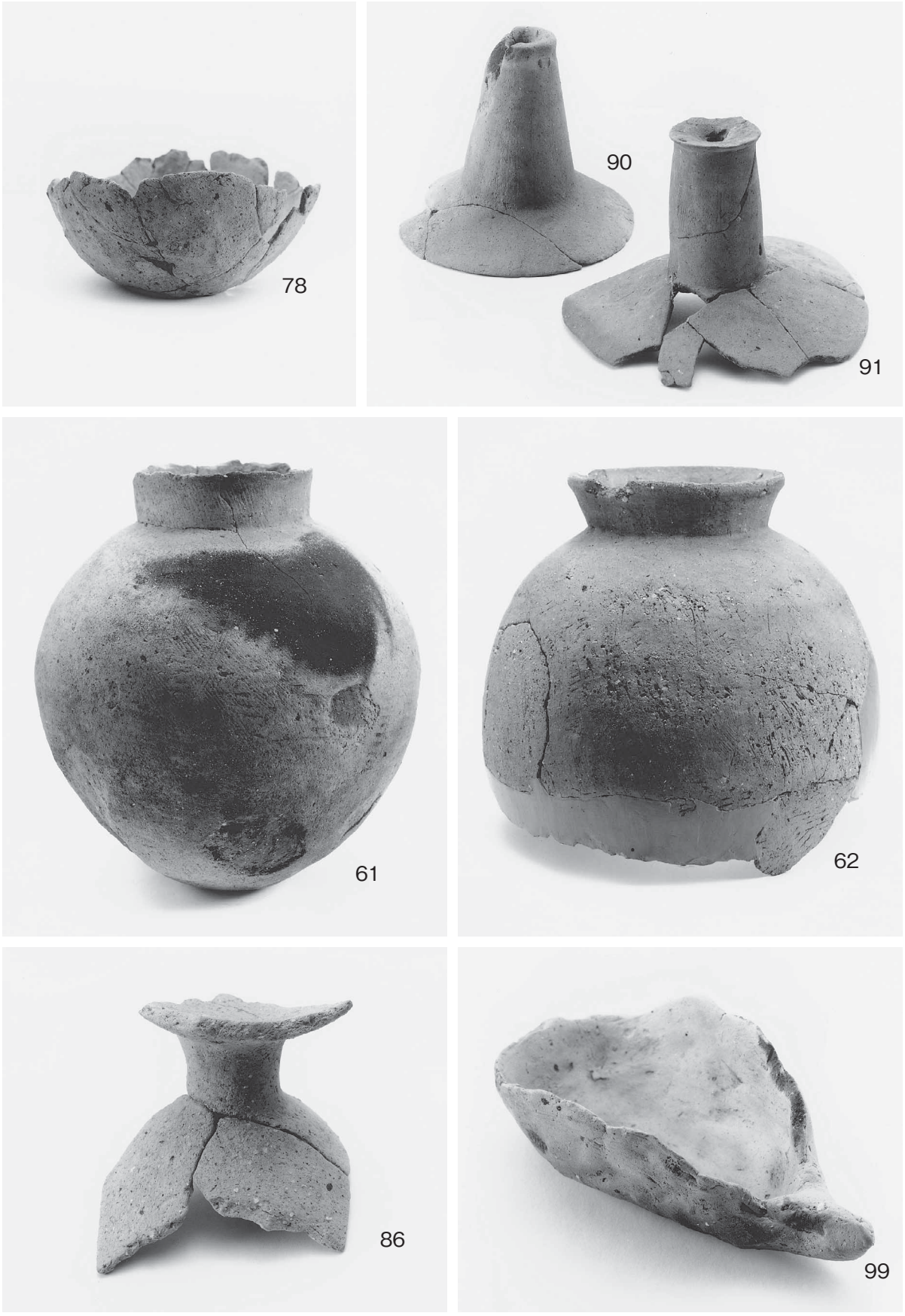
1. ３南区遺構検出状況（東より）

2. ３南区遺構完掘状況（東より）

1.　SD103 出土遺物 ①

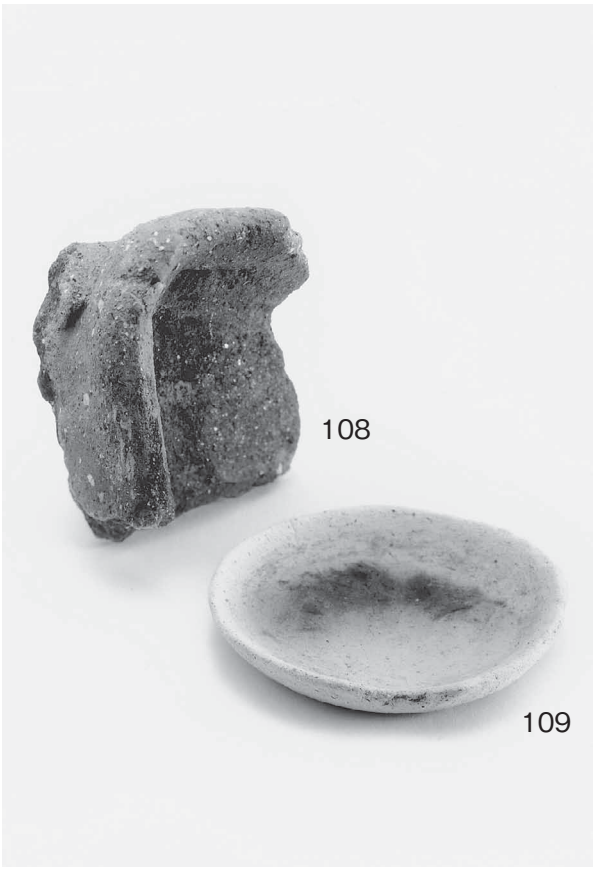


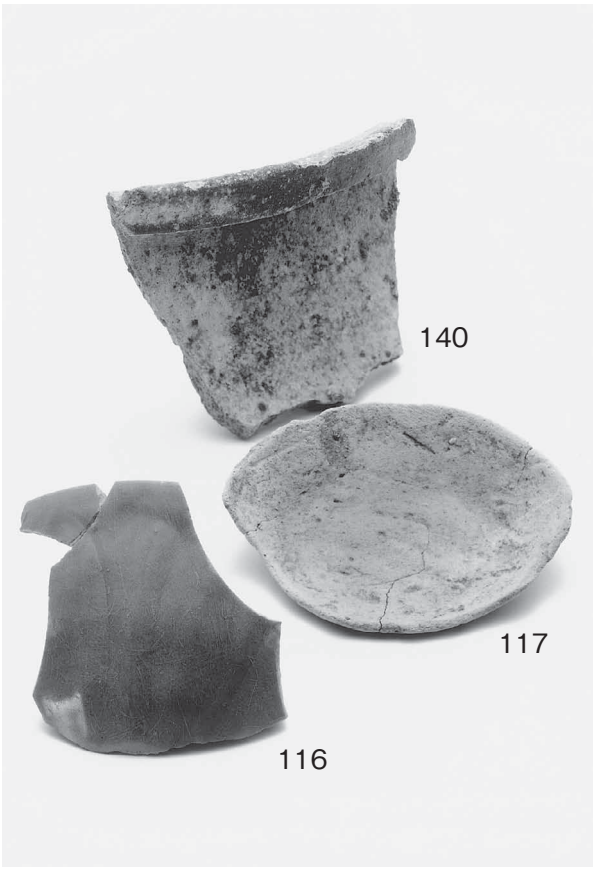
1. SD103 出土遺物 ②



1. SD103 出土遺物 ③

図版14

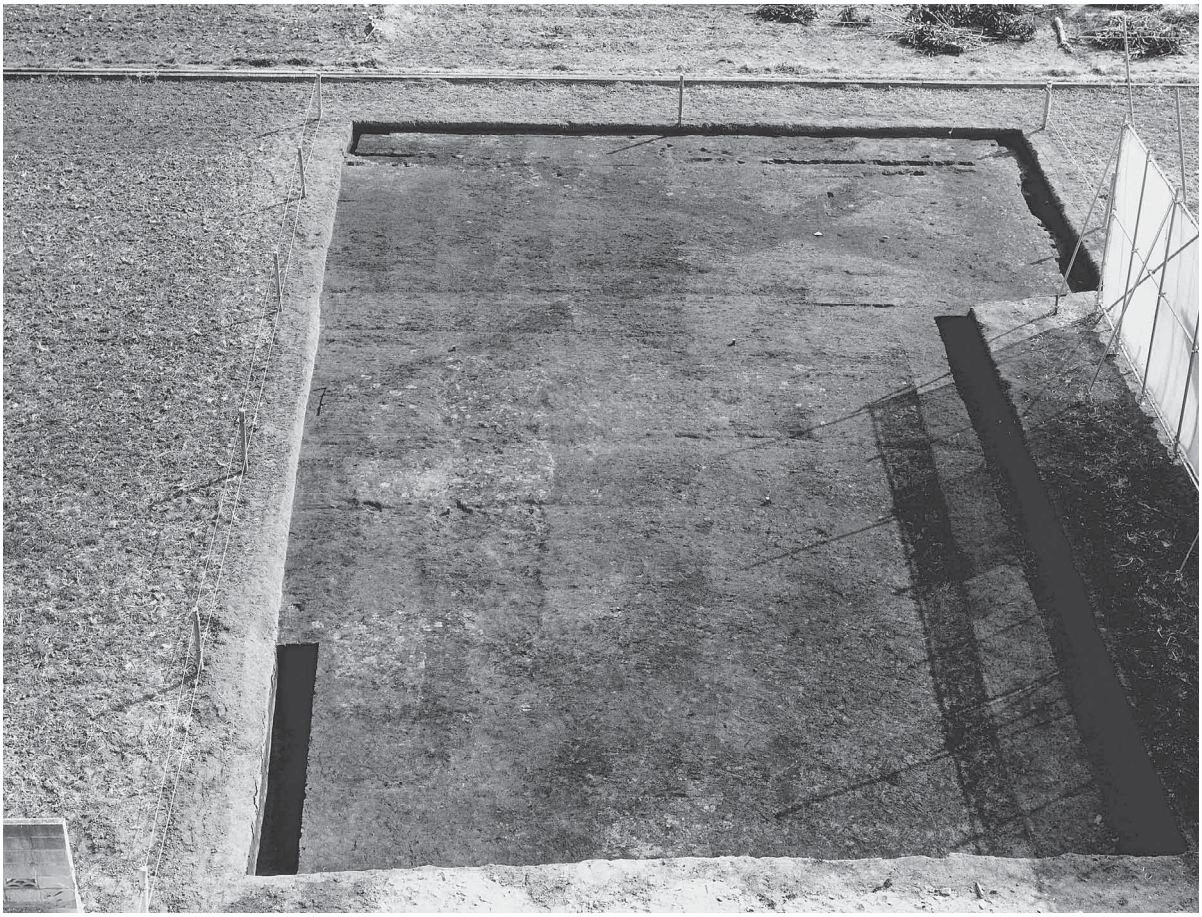




1. SK104 出土遺物（102.103）　SK107 出土遺物（106）　SK103 出土遺物（108.109）
SP1073 出土遺物（116）　SP1079 出土遺物（117）　SD204 出土遺物（140）

写　真　図　版

枝松遺跡8次調査地



1. 1区遺構検出状況（西より）

2. 1区南壁土層（北より）

1.　SD101 遺物出土状況（南より）

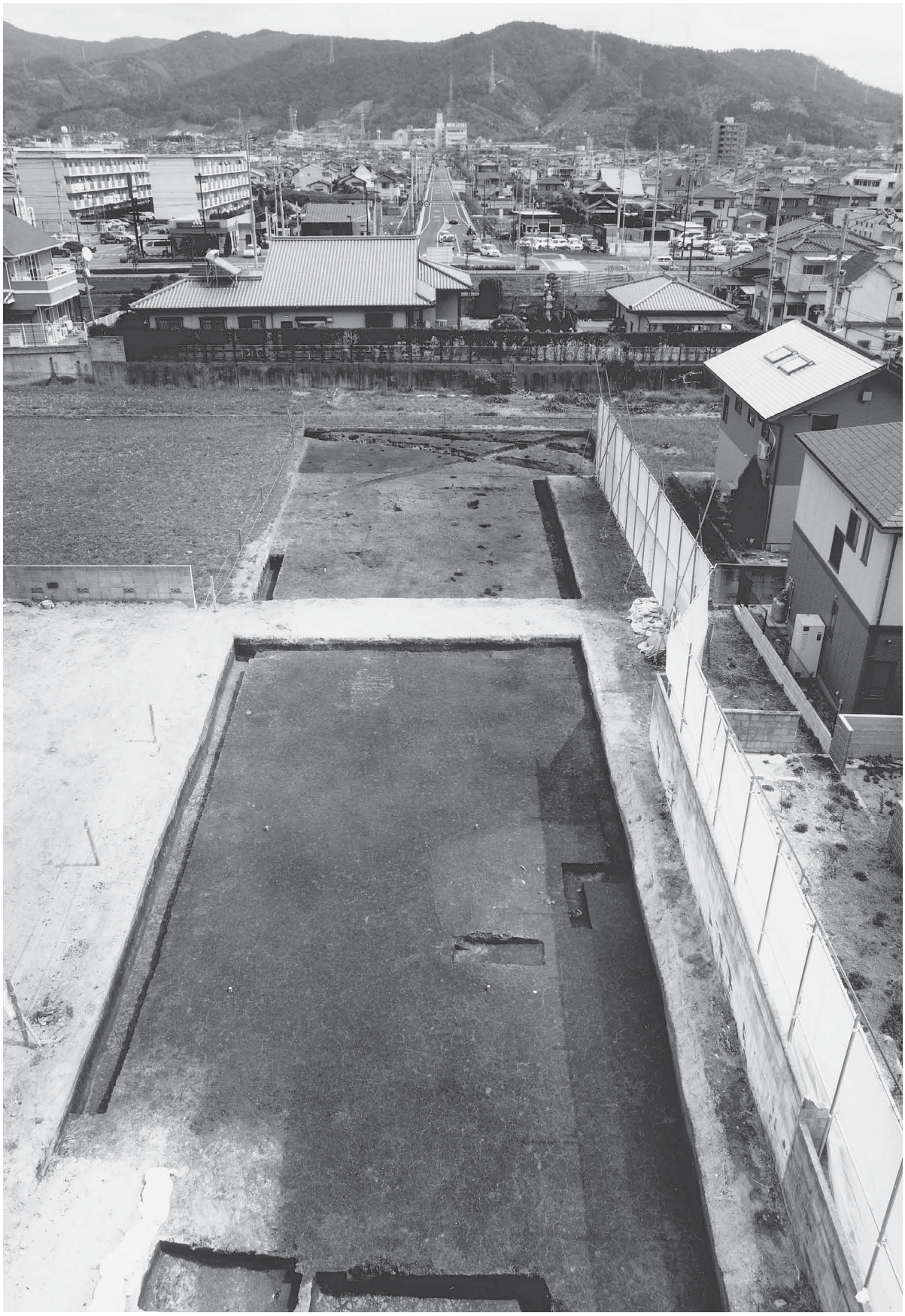
2.　SD102 遺物出土状況（南より）

3.　SD102 ベルト土層（南より）

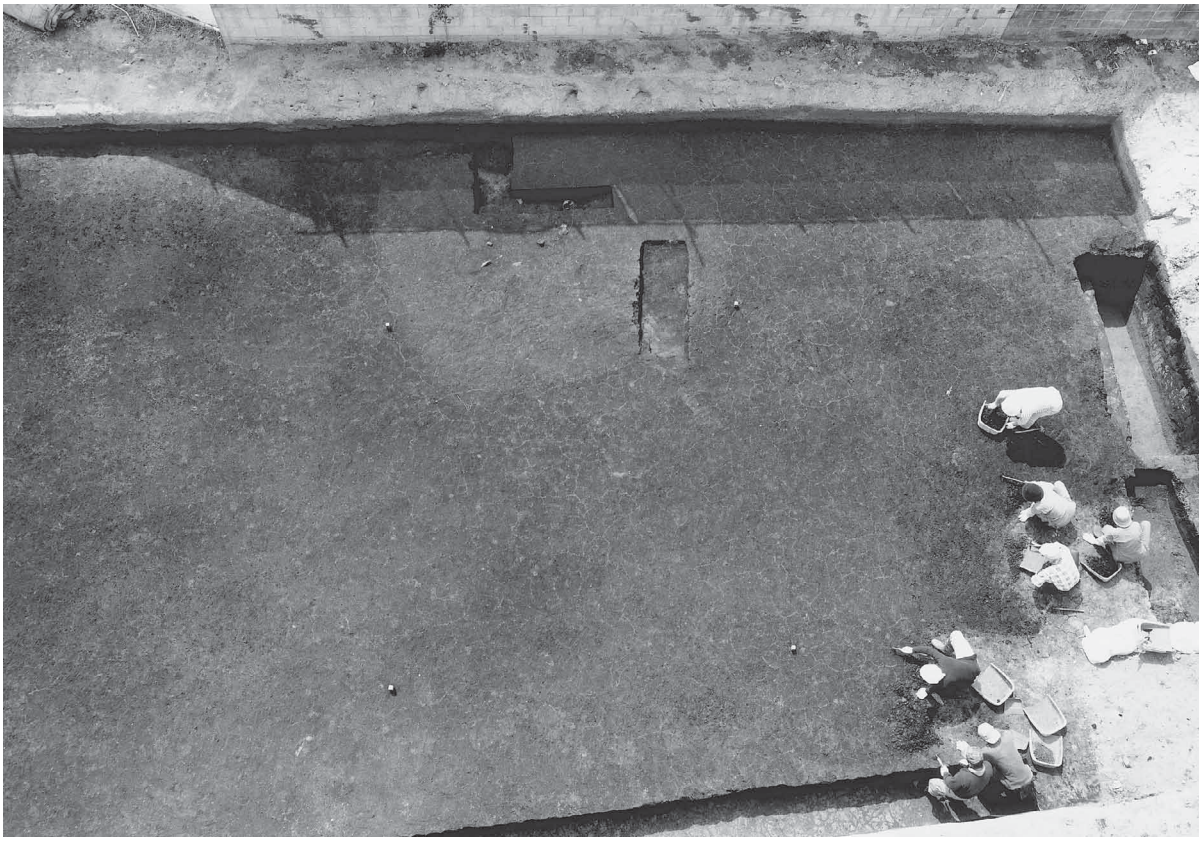
1.　SD101 完掘状況（南より）

2.　SD102 完掘状況（南より）

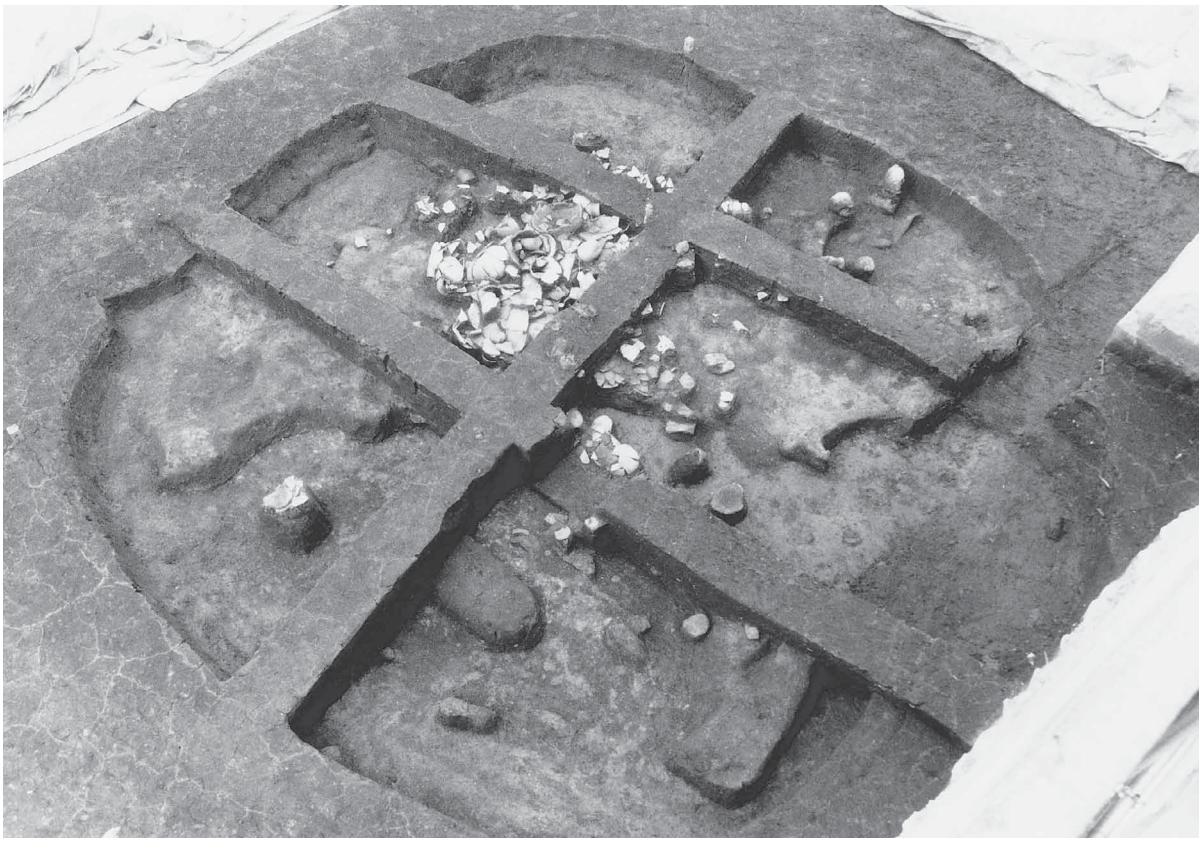
3.　1 区完掘状況（北西より）



1．２区遺構検出状況（西より）

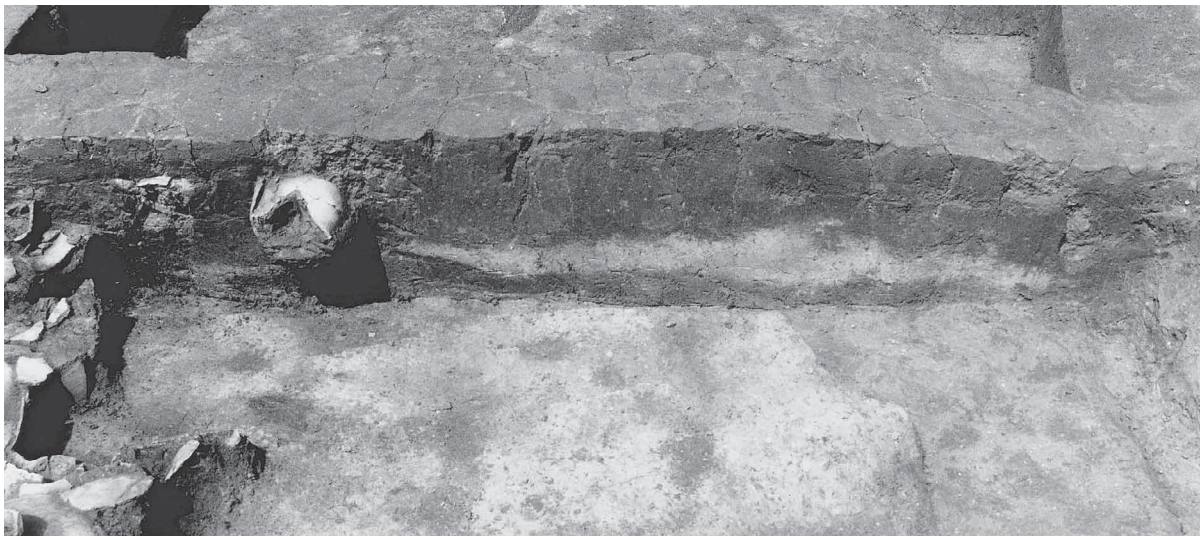


1.　SB201 遺構検出状況（北上より）



2.　SB201 遺物出土状況（南西より）

1. SB201 遺物出土状況（北より）

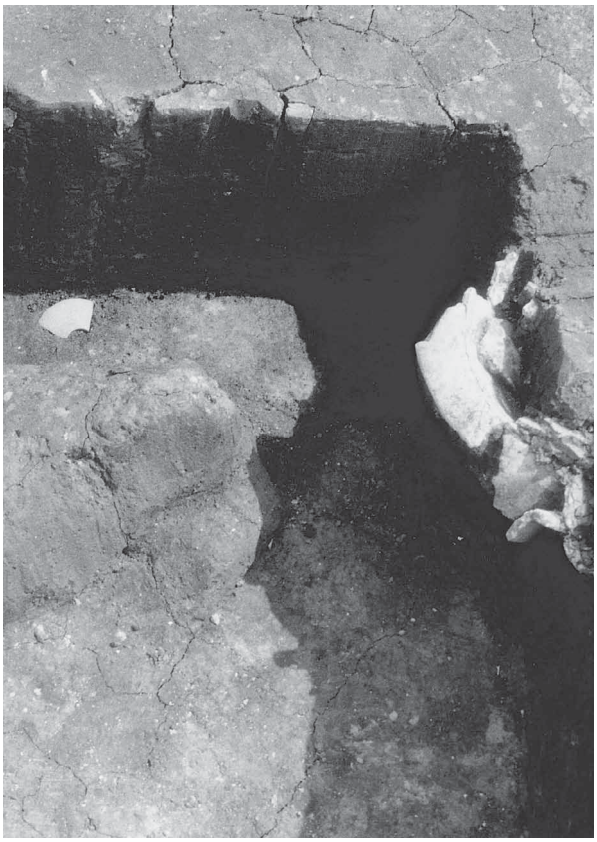


2. SB201 ベルト土層（東より）

3. SB201 ベルト土層（東より）

1.　SB201 焼土検出状況（西より）

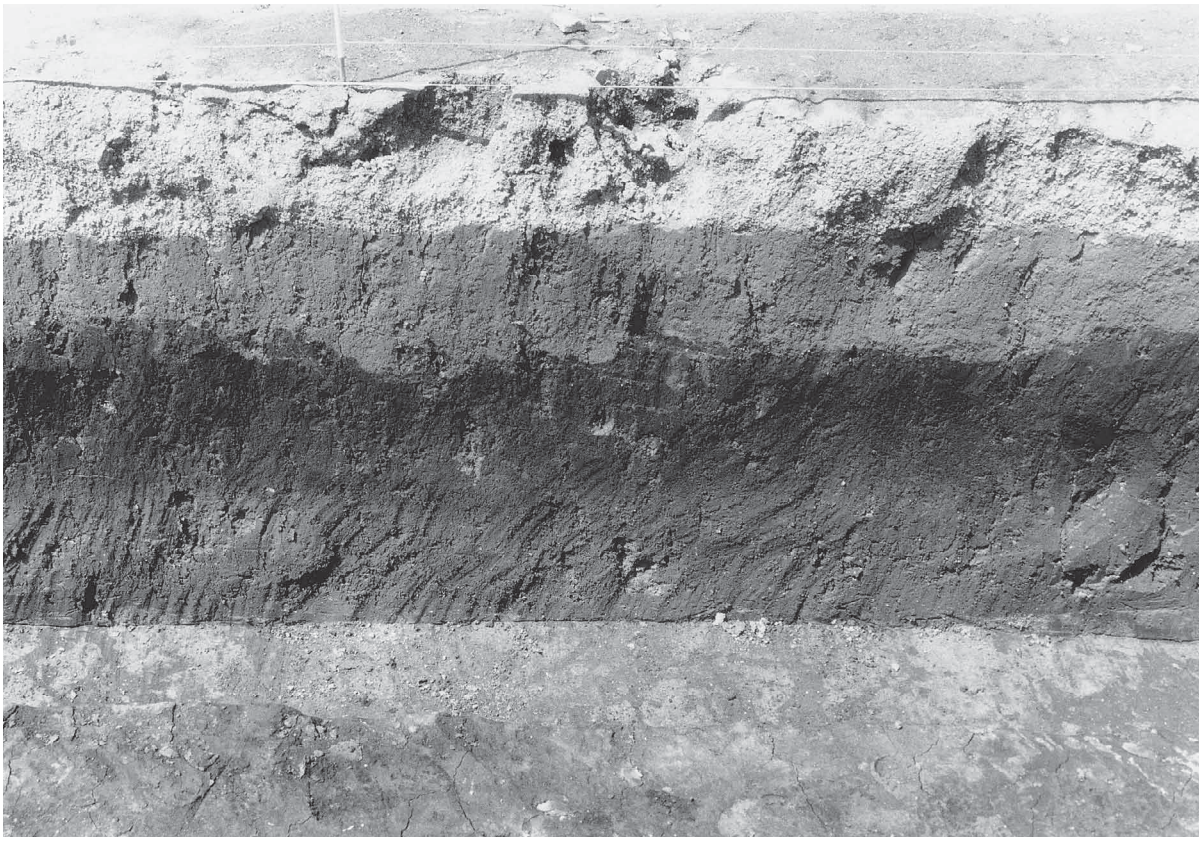
2.　皮袋形土製品出土状況（北より）



3.　環状石斧出土状況（北より）

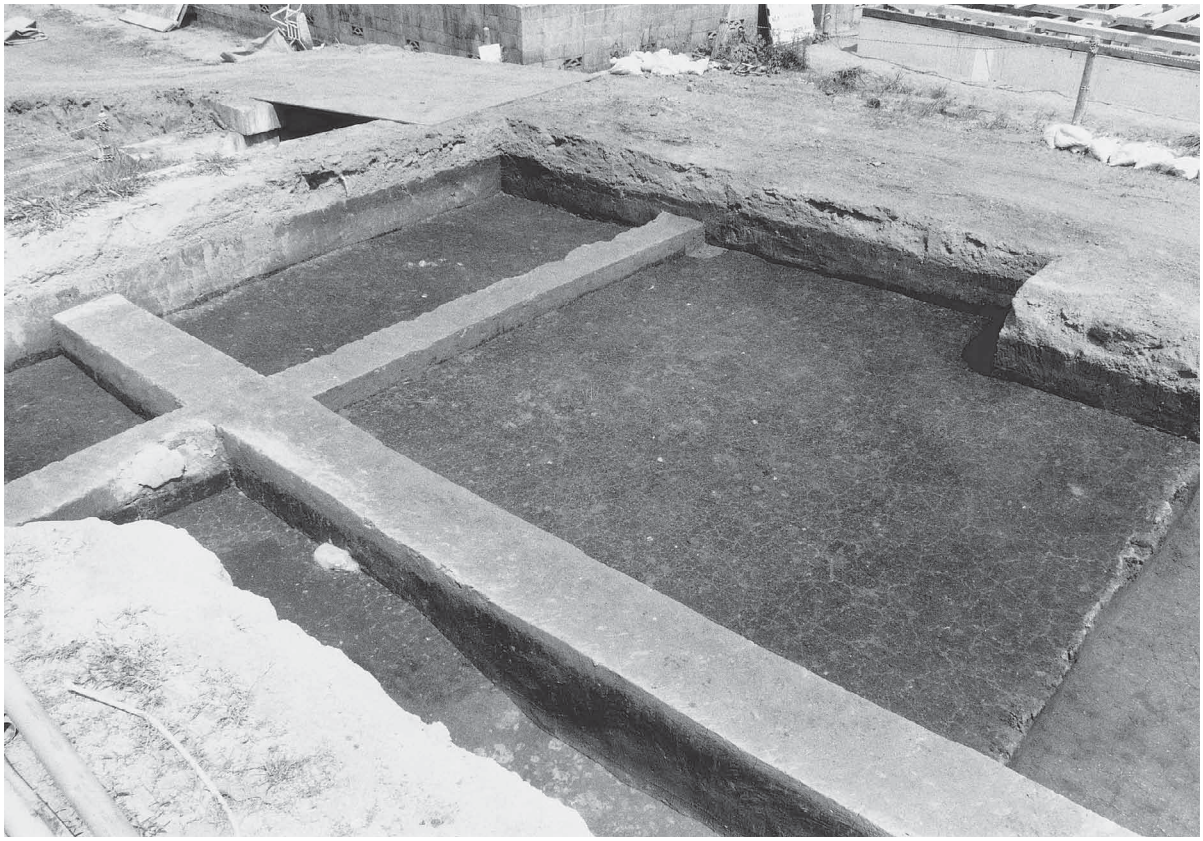
1. SB201 ベルト撤去後の遺物出土状況（北より）

2. SB201 完掘状況（北西より）



1. ２区北壁土層（南より）

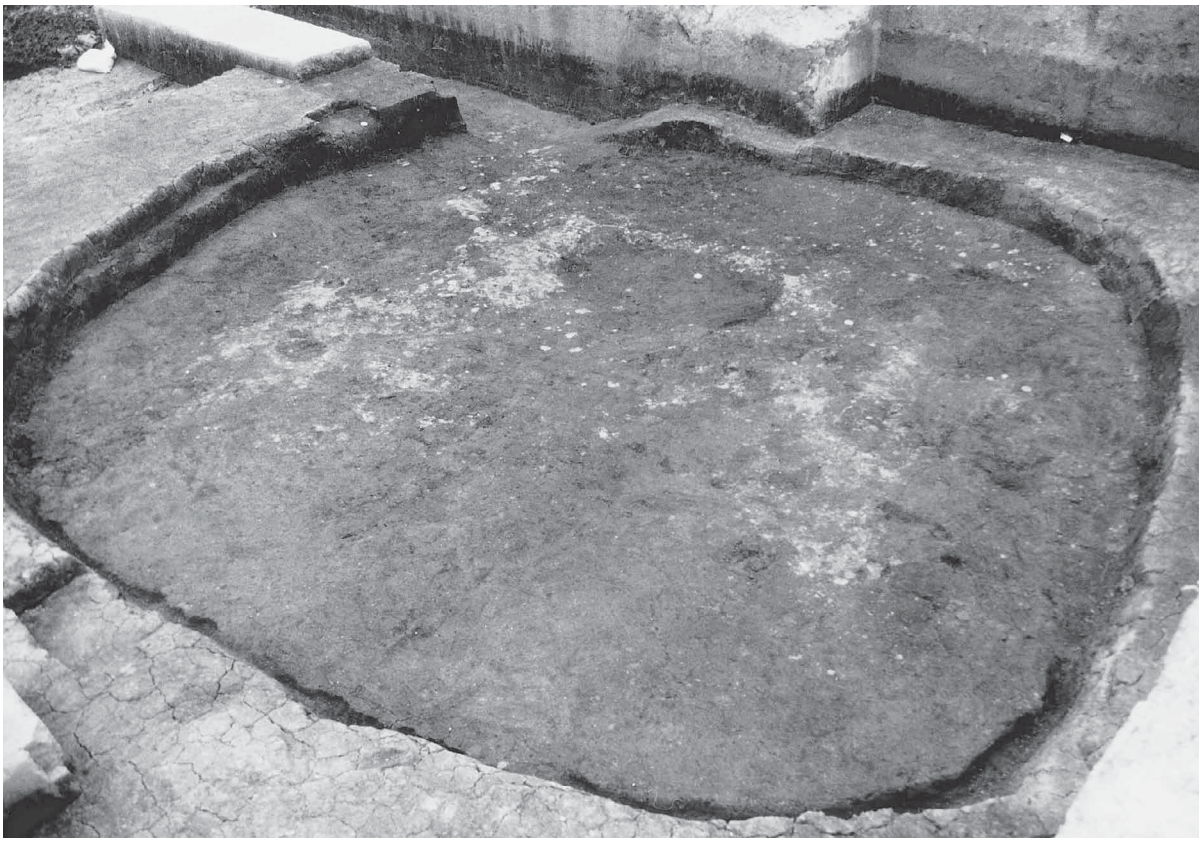
2. ２区北壁土層（南より）



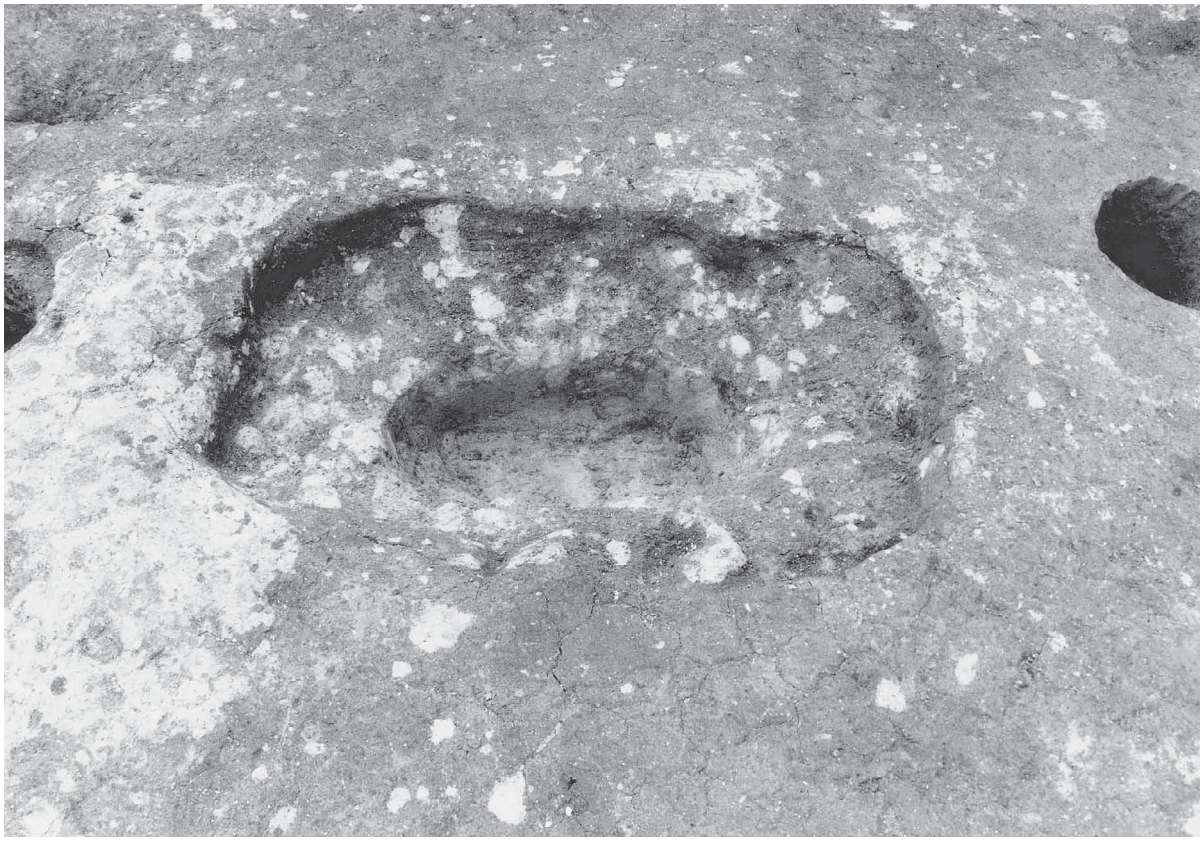
1. SB202 検出状況（南東より）

2. SB202 遺物出土状況（北より）

1. SB202 遺物出土状況（北より）



2. SB202 炉検出状況（北西より）

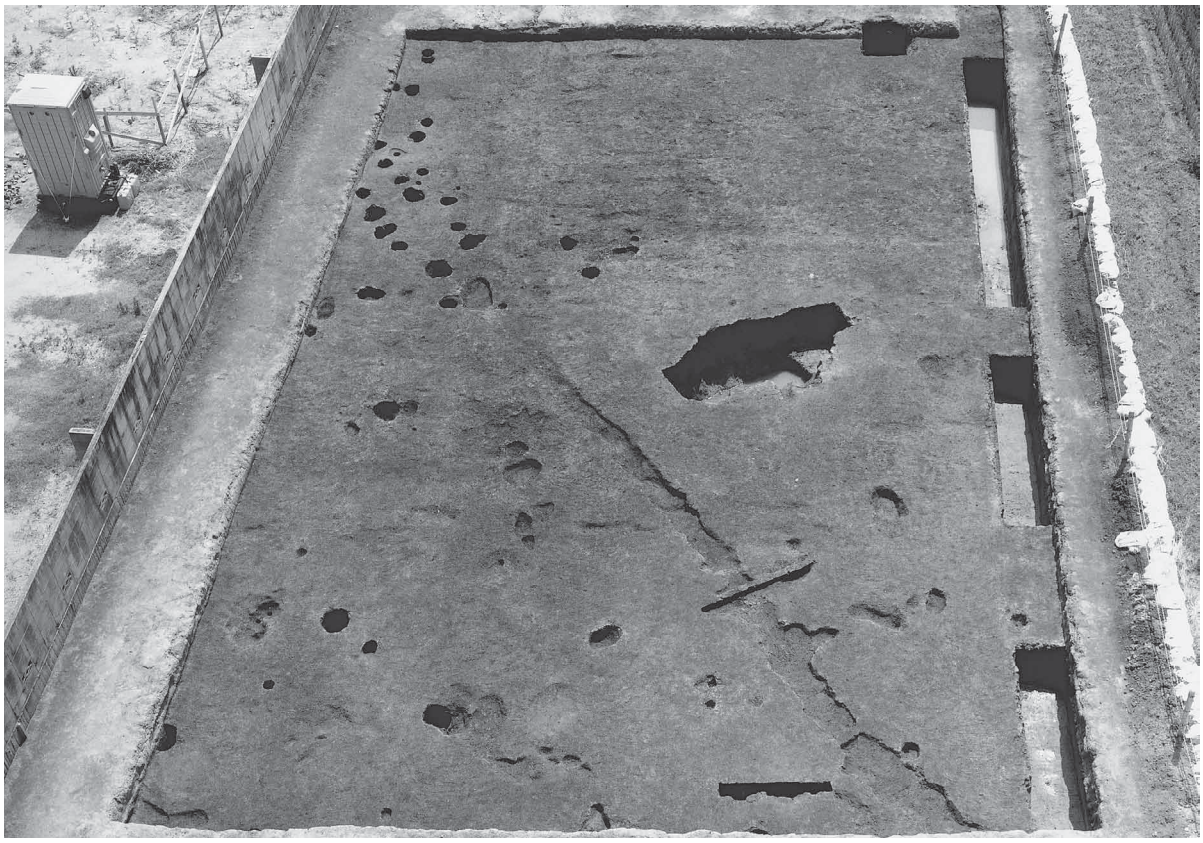


1. SB202 炉完掘状況（北より）

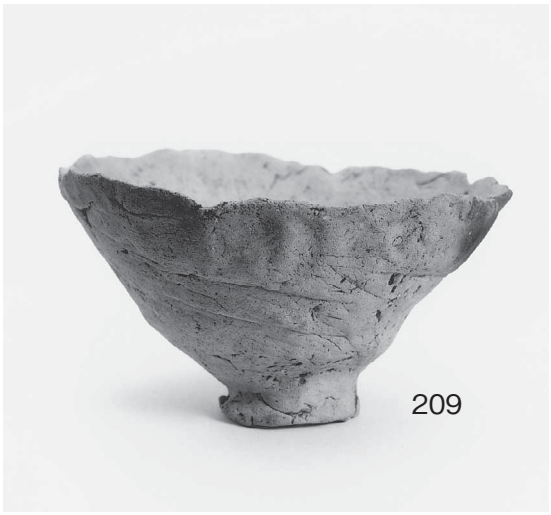
2. SB202 完掘状況（北より）

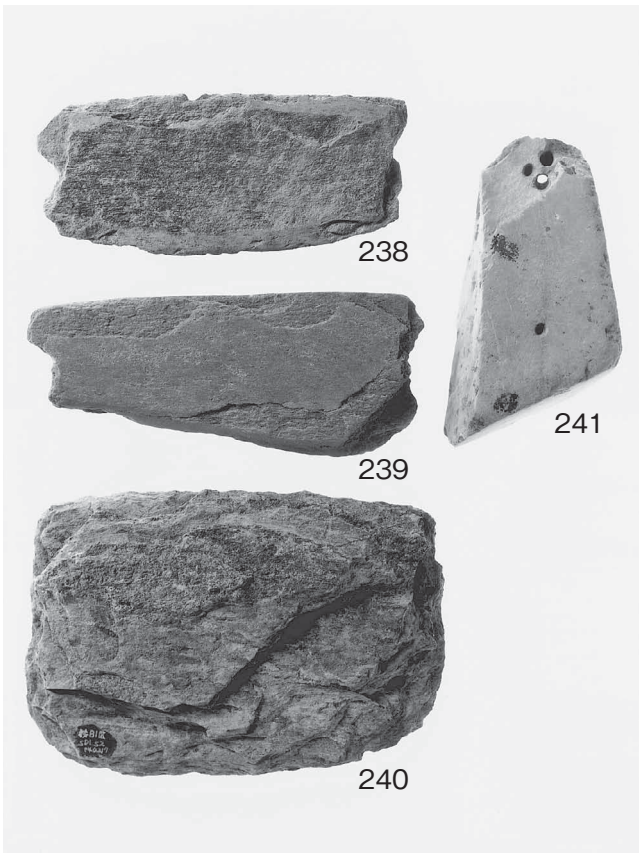
1. ３区遺構検出状況（東より）

1. ３区南壁土層（北東より）



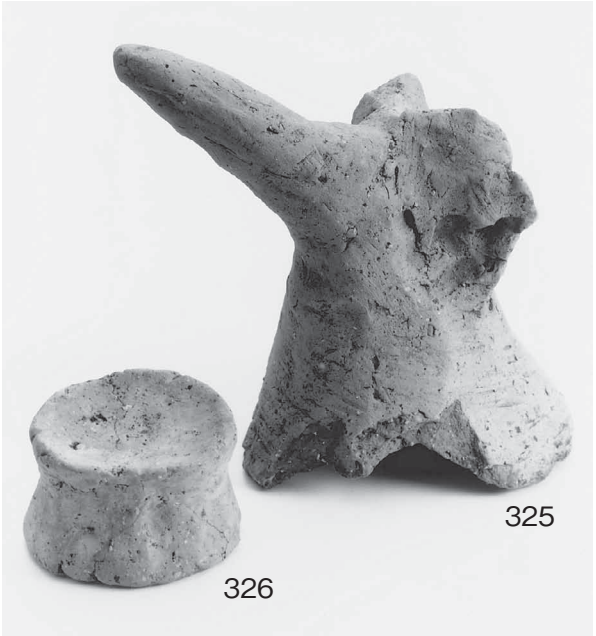
2. ３区完掘状況（西より）





1. SD101 出土遺物

図版30



1. SD102 出土遺物

353

354

356

359

1. SB201 出土遺物 ①

1. SB201 出土遺物 ②

1. SB201 出土遺物 ③

図版34

384

385

386

387

1. SB201 出土遺物 ④

388

395

396

389

397

393

400

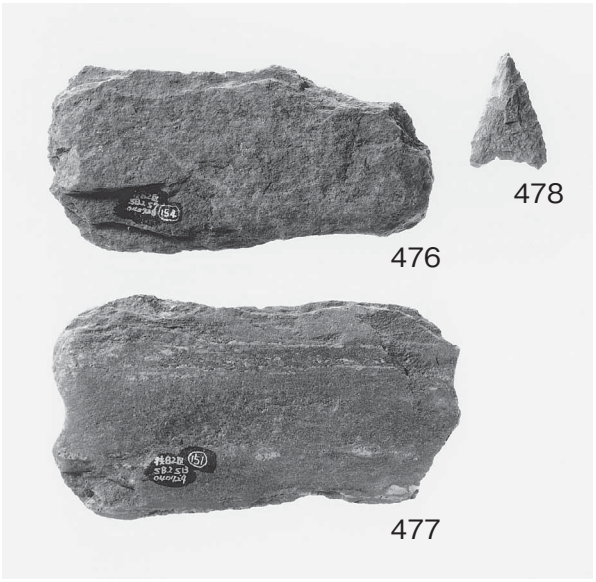
1. SB201 出土遺物 ⑤

1. SB201 出土遺物 ⑥

1.　SB201 出土遺物 ⑦

図版38

1. SB201 出土遺物 ⑧



2. SB202 出土遺物

写　真　図　版

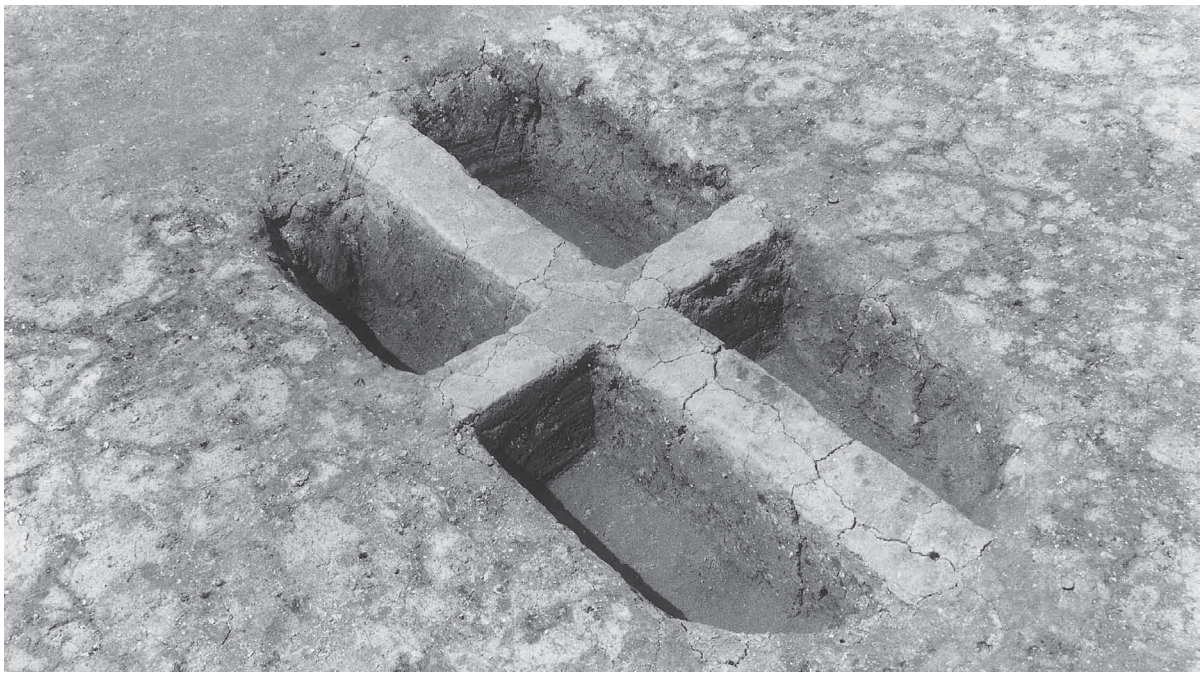
枝松遺跡9次調査地

1.　1 区第一遺構面検出状況（東より）

2.　犂先出土状況（南東より）

3.　牛足跡（南西より）

1.　掘立 101・102 完掘状況
（北西より）

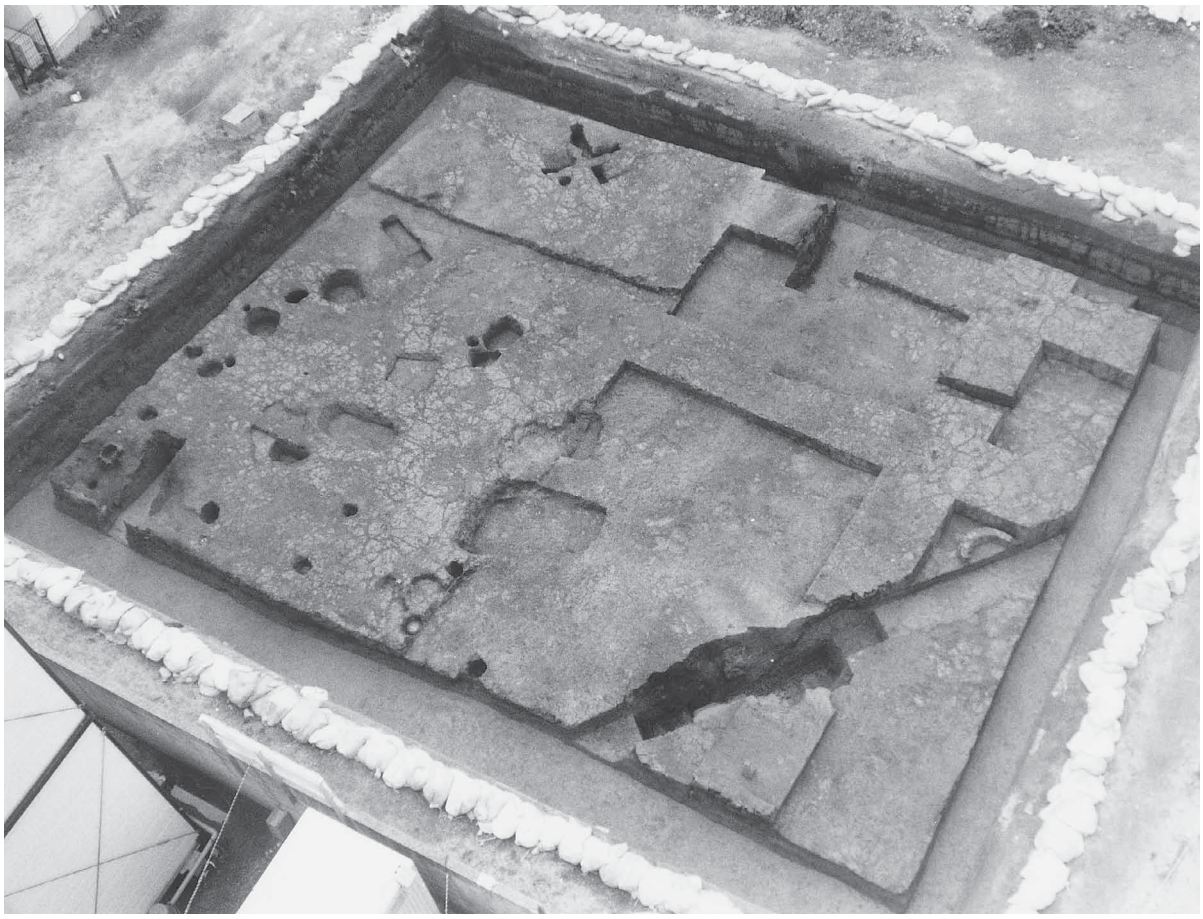


2.　SK102 完掘状況（北東より）

1. SK105 完掘状況（南より）
2. SK108 完掘状況（西より）
3. 倒木 103 検出状況（東より）

図版42

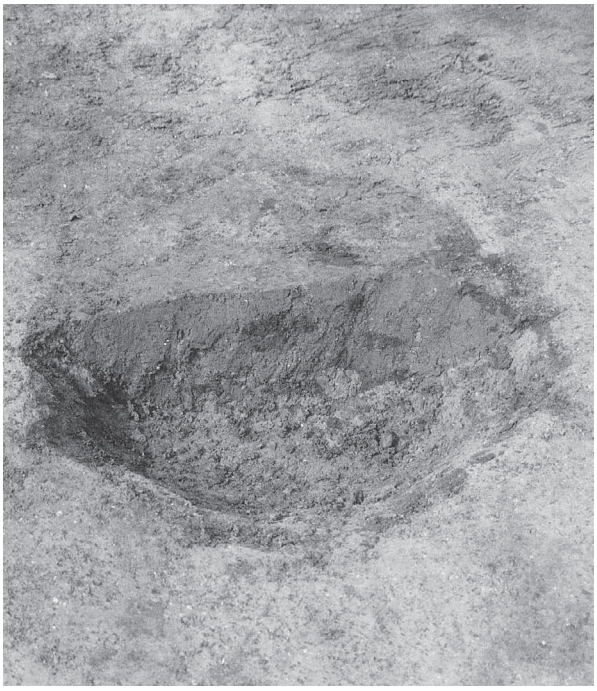
1. 1区北壁土層（南西より）



2. 1区完掘（北東より）

1. 2区遺構検出状況
（西より）

2. SK201 検出状況（東より）



3. SK201 土層（東より）

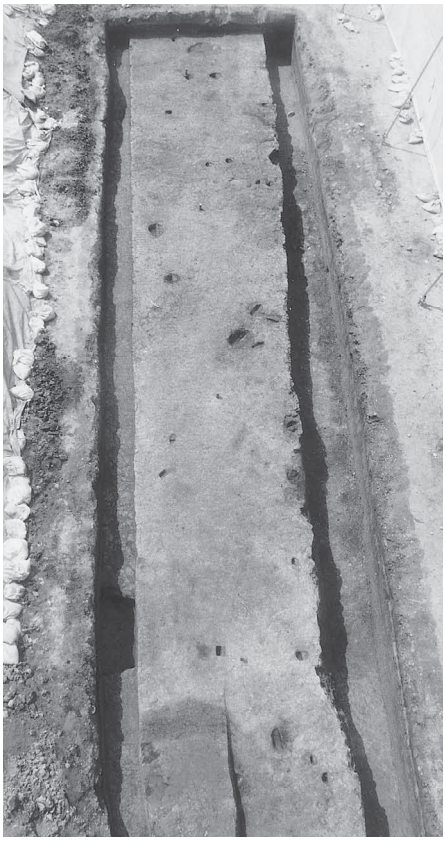
1.　SD201 遺物出土状況（南西より）

2.　SD201.202 完掘状況（北西より）

1. ２区北壁土層（南西より）

2. ２区西壁土層（南東より）

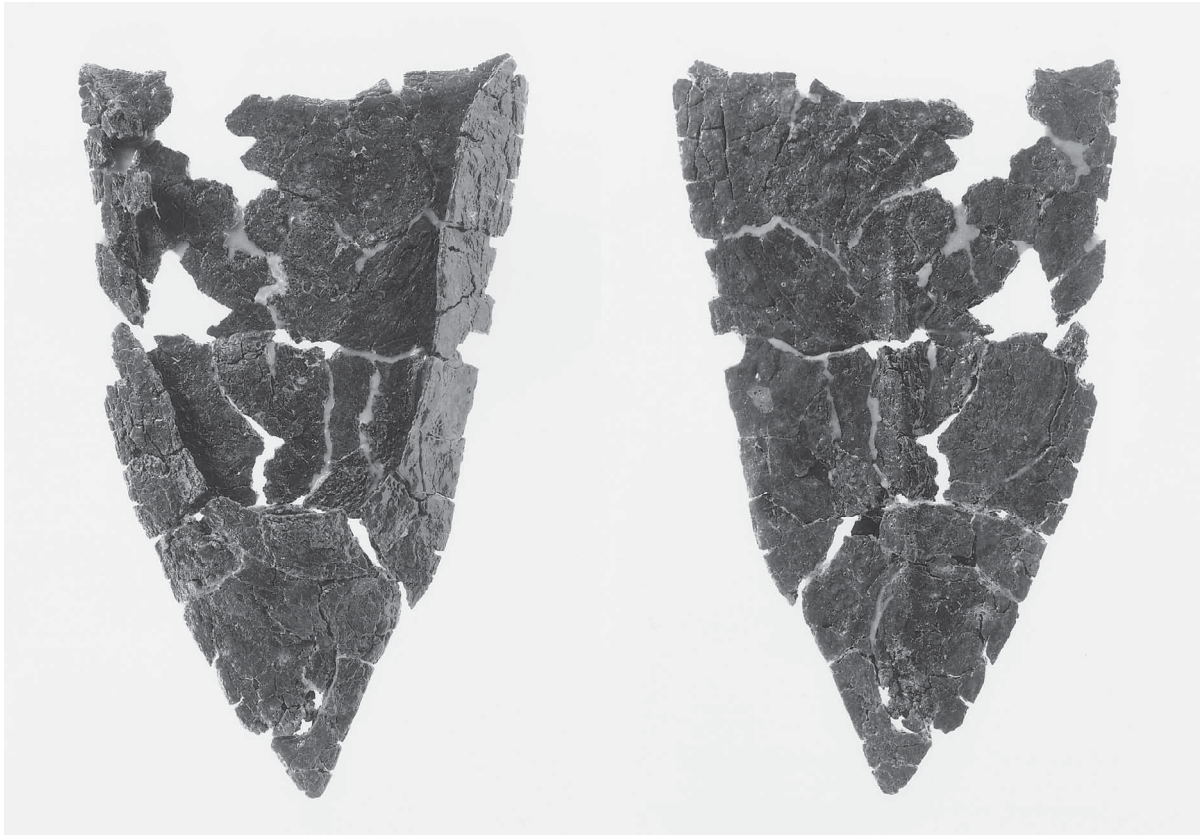
1．２区完掘状況（北西より）



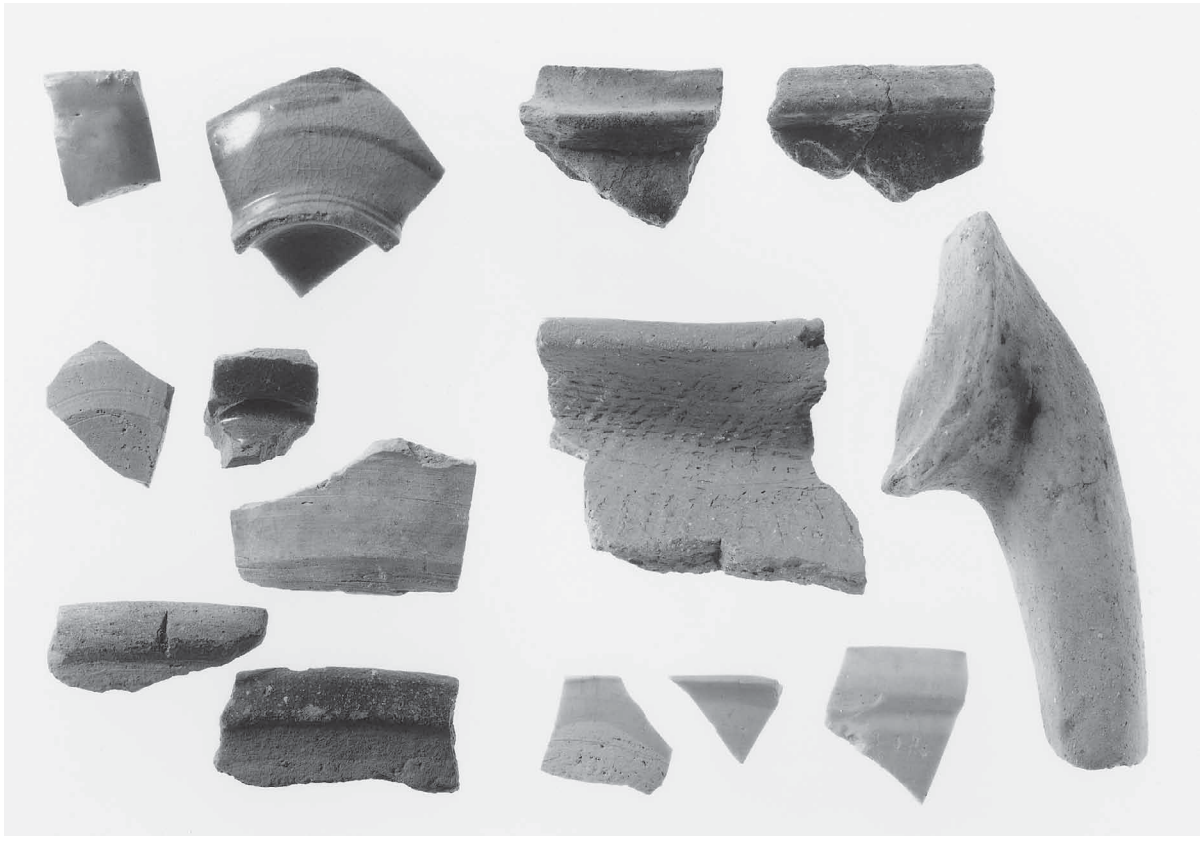
1. ３区完掘状況（東より）

2. SX301 検出状況（南東より）

3. ３区北壁土層（南東より）



1.　1 区出土遺物（犁先）

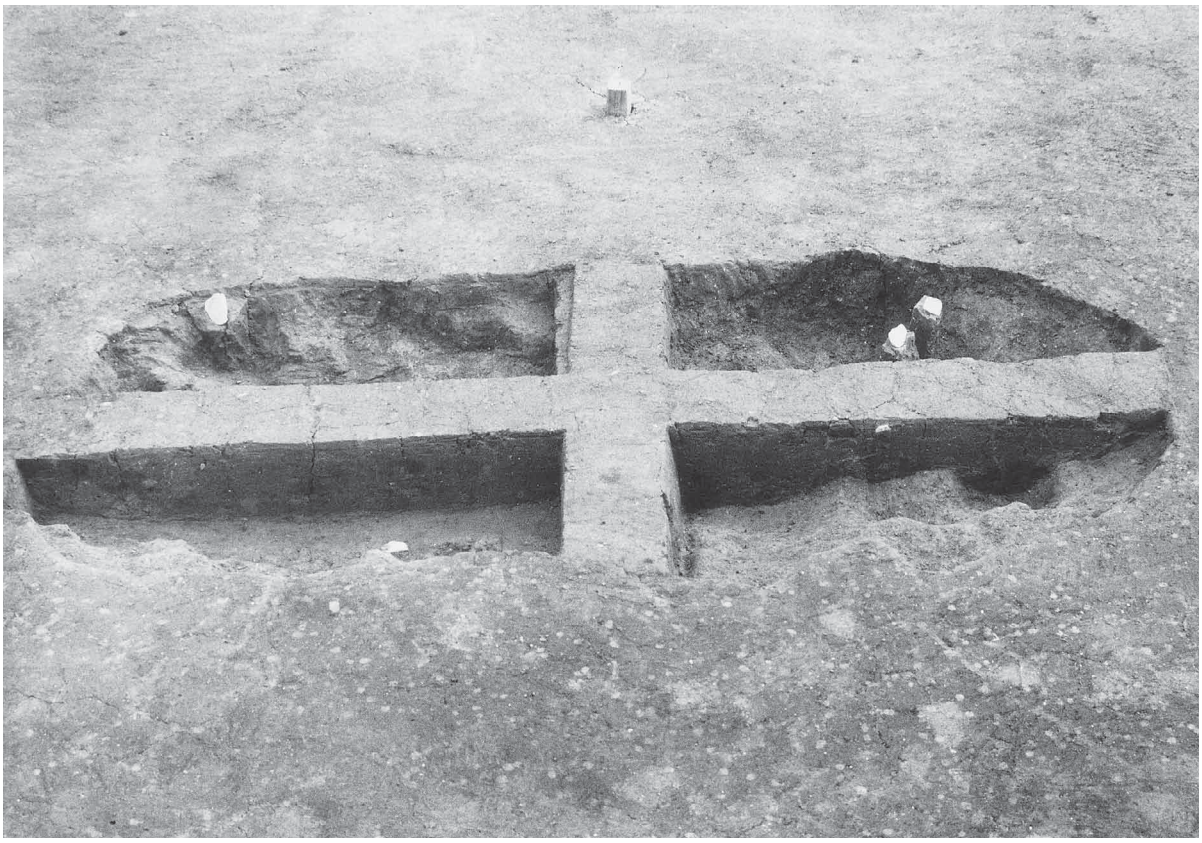


2.　2 区 SD201 出土遺物

写　真　図　版

枝松遺跡10次調査地

1.　SA101 検出状況（南西より）

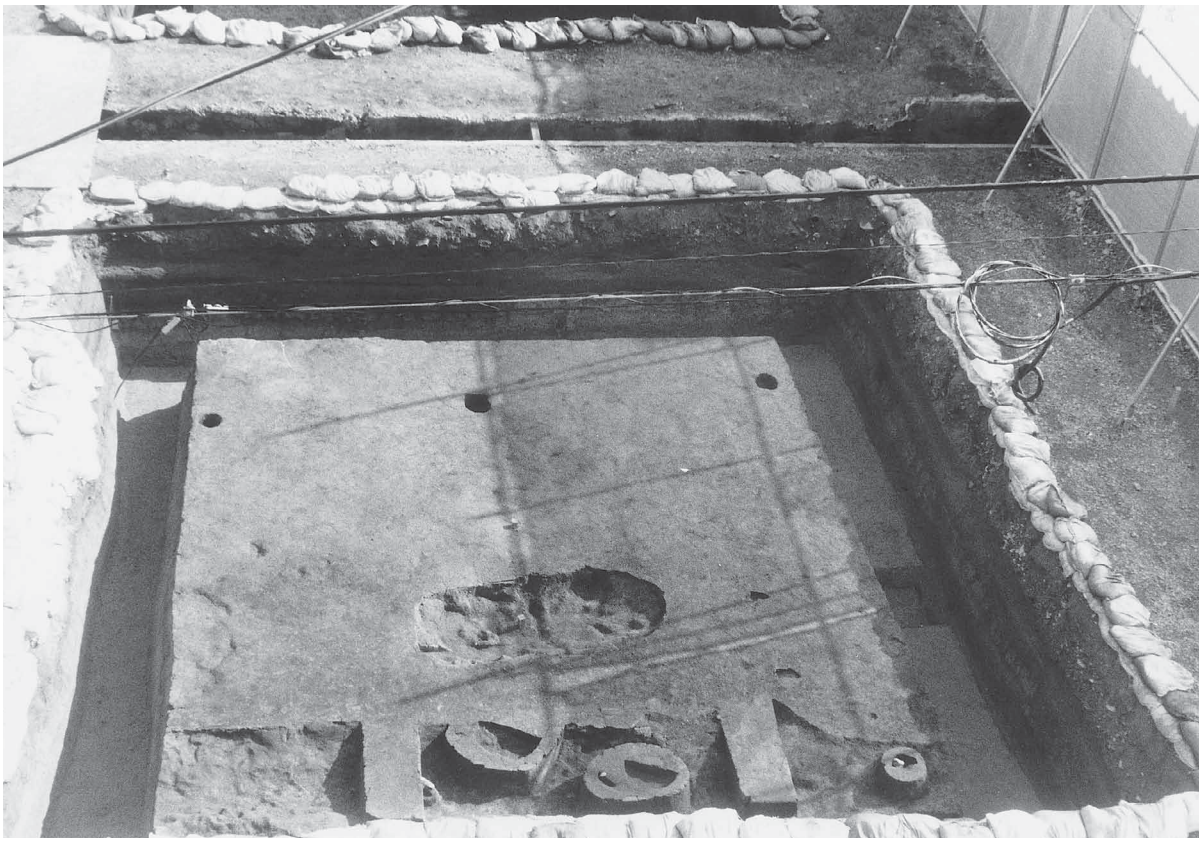


2.　SK101 遺物出土状況（西より）

1. SD101・SK101 完堀状況（南西より）

2. SK102 断面土層（西より）

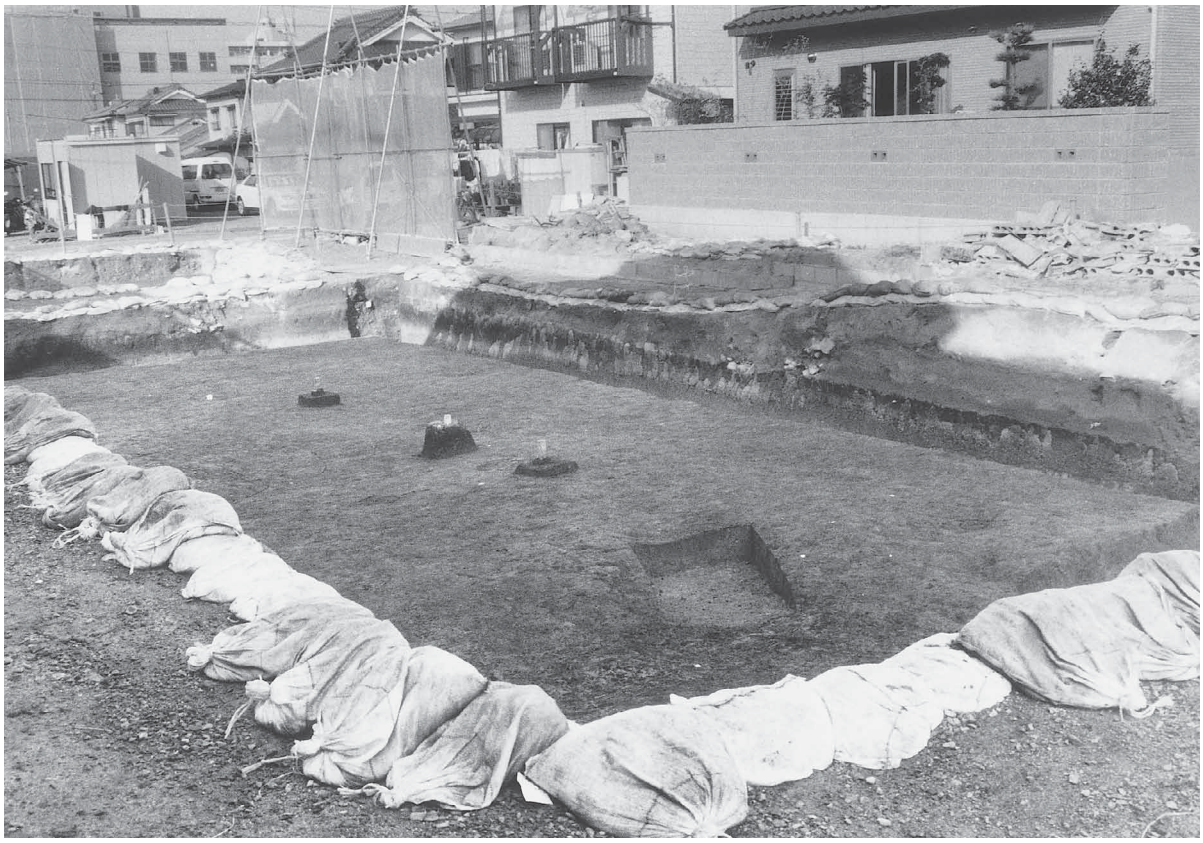
1. 1区北壁土層（東より）



2. 1区完掘状況（西より）

1. ２区倒木痕 201（南東より）

2. ２区西壁土層（南東より）

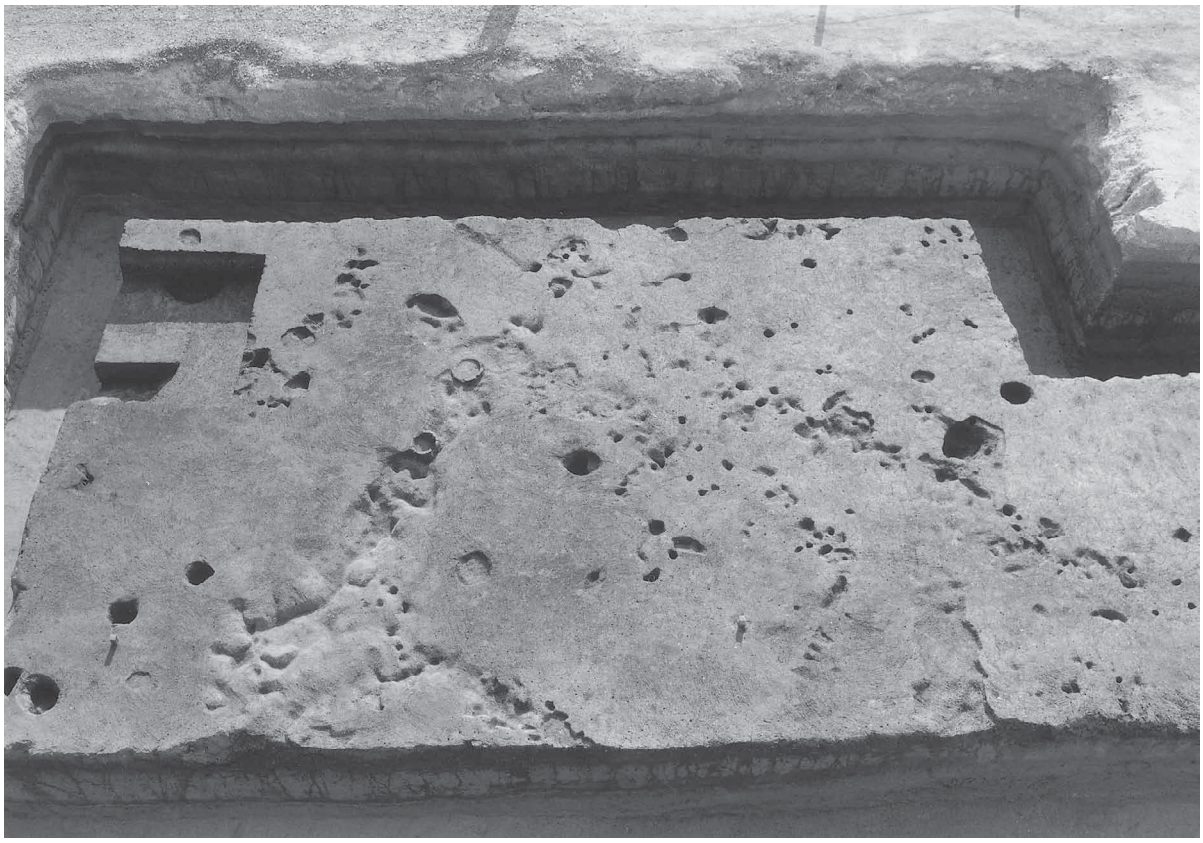


3. ２区完掘状況（南東より）

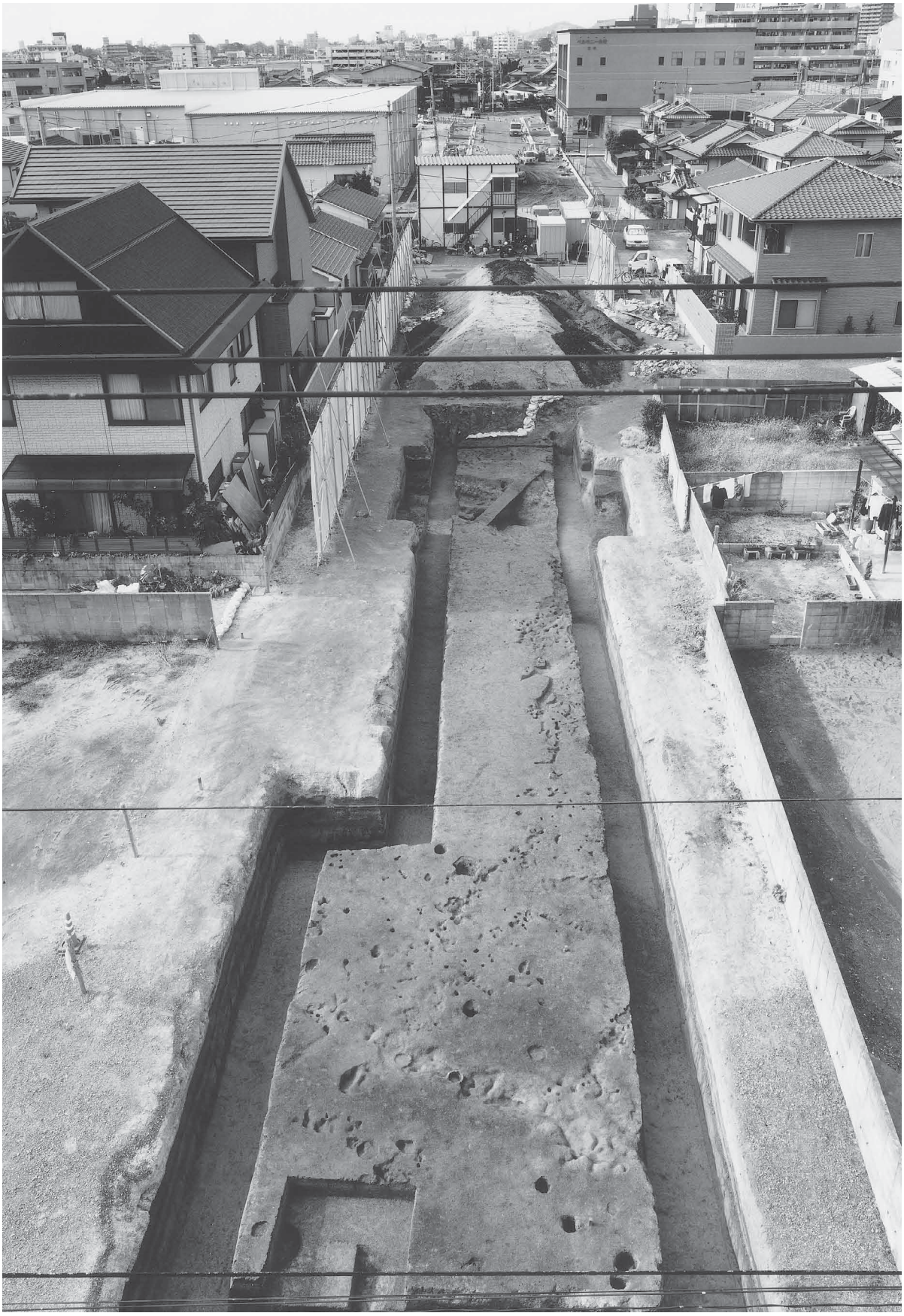
1.　SK301 遺物出土状況（北より）

2.　SD301・302 完掘状況（北東より）

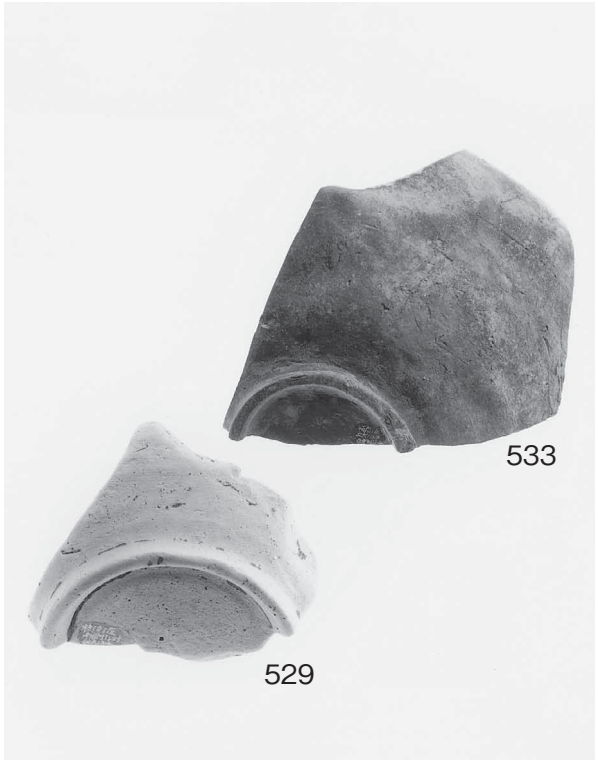
1. SD301・302 完掘状況（南東より）



2. 3 区東側完掘状況（北より）

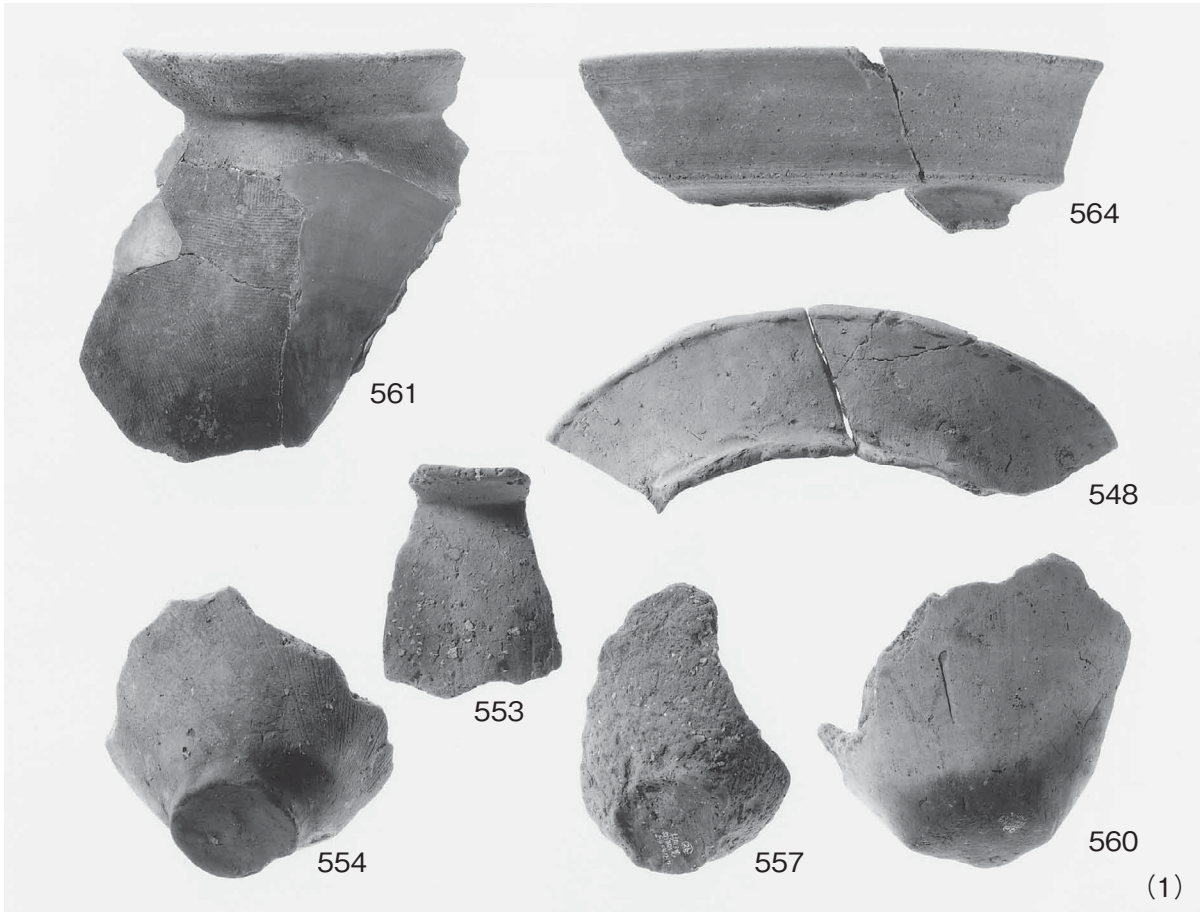


1. ３区完掘状況（東より）

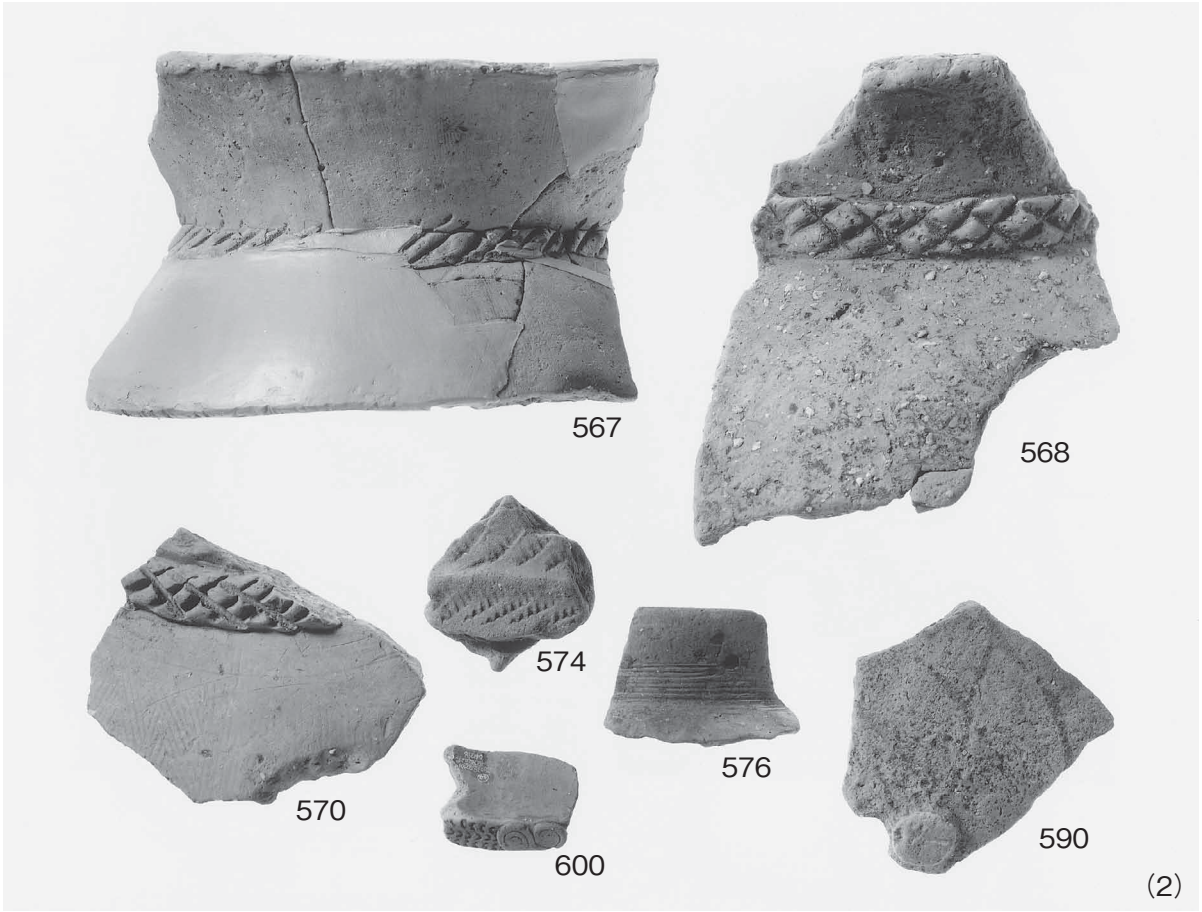


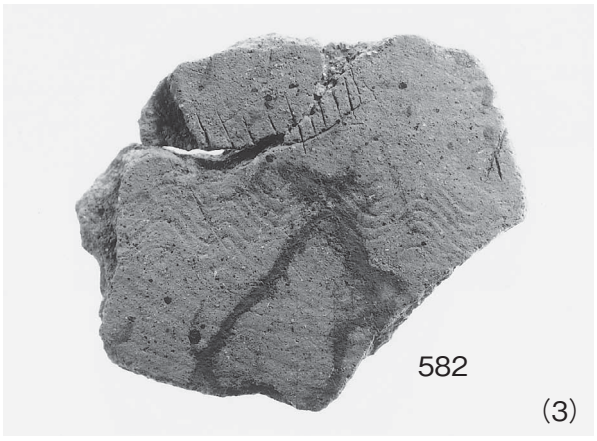
1. 1区出土遺物

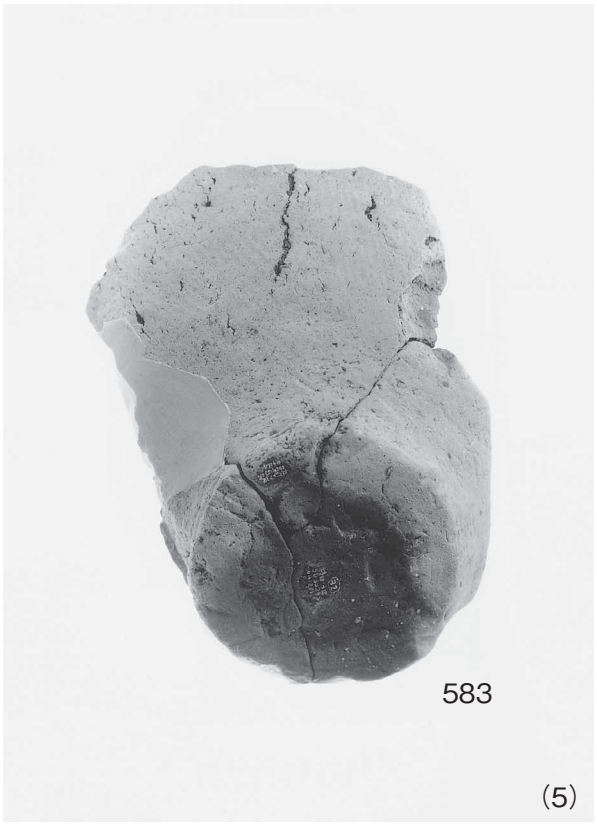
2. 3区出土遺物（SK301）（538）
3. 3区出土遺物（SD302）（546）



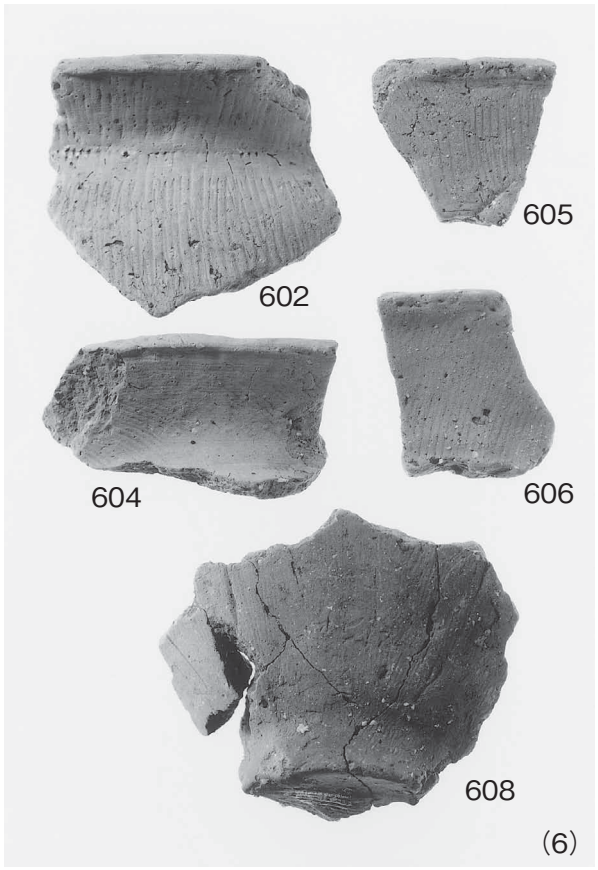
4. 3区出土遺物（SD301）（1）

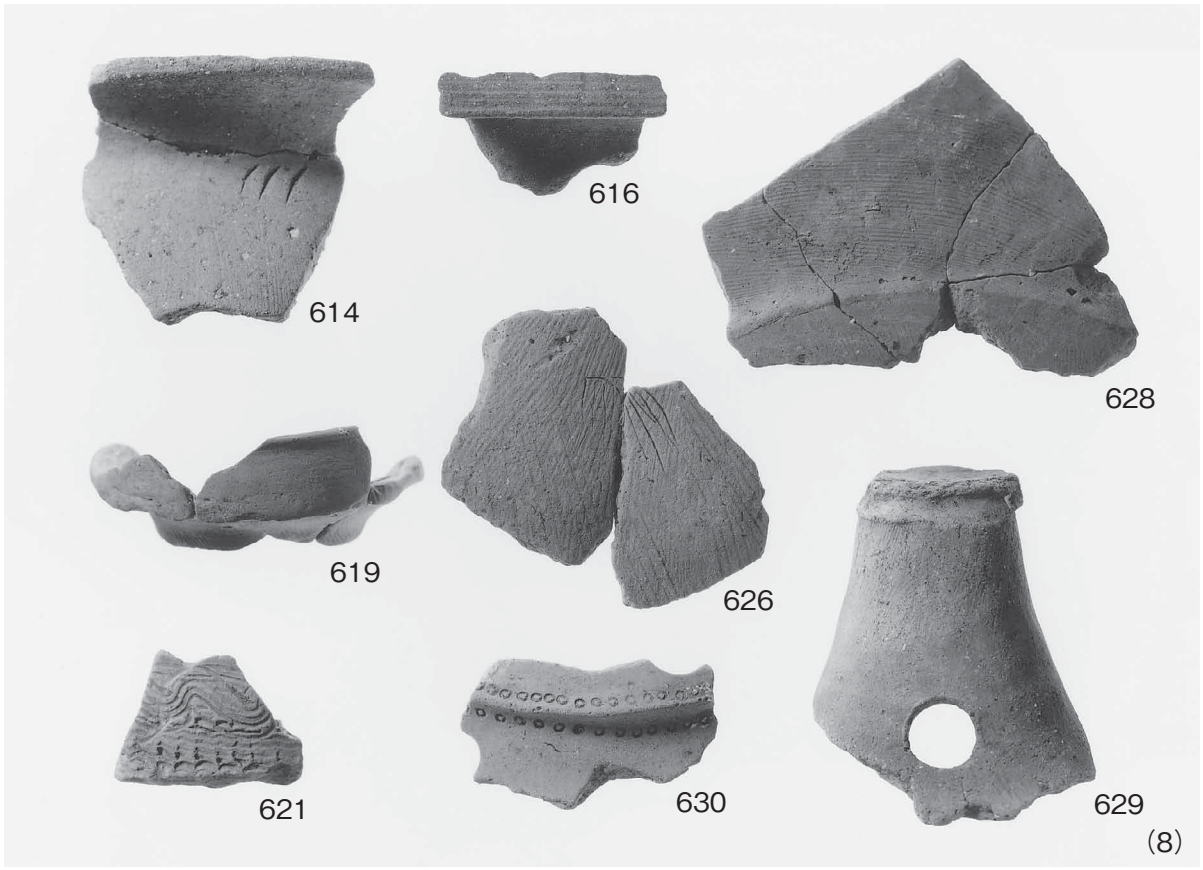




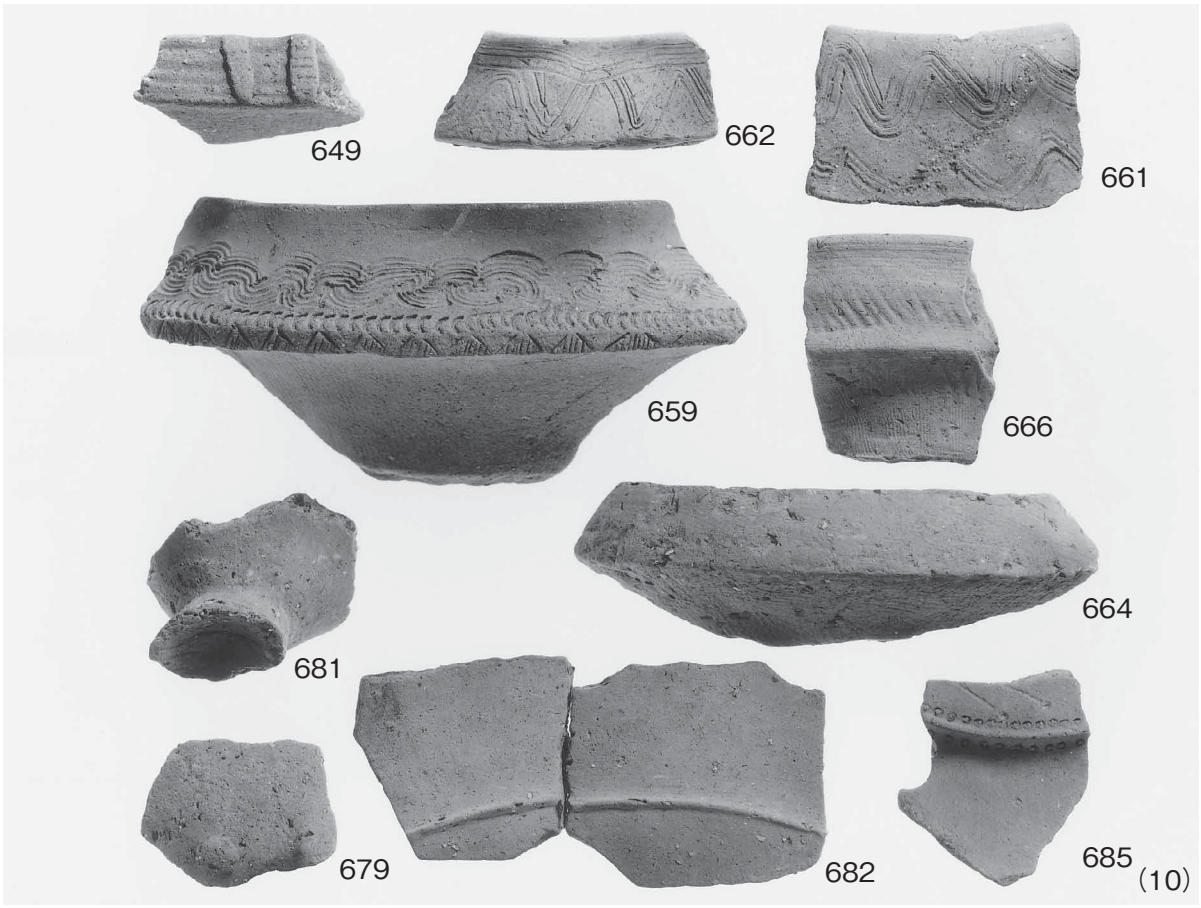


1. 3区出土遺物（SD301）(2)
2. 3区出土遺物（SD301）(3)
3. 3区出土遺物（SD301）(4)
4. 3区出土遺物（SD301）(5)

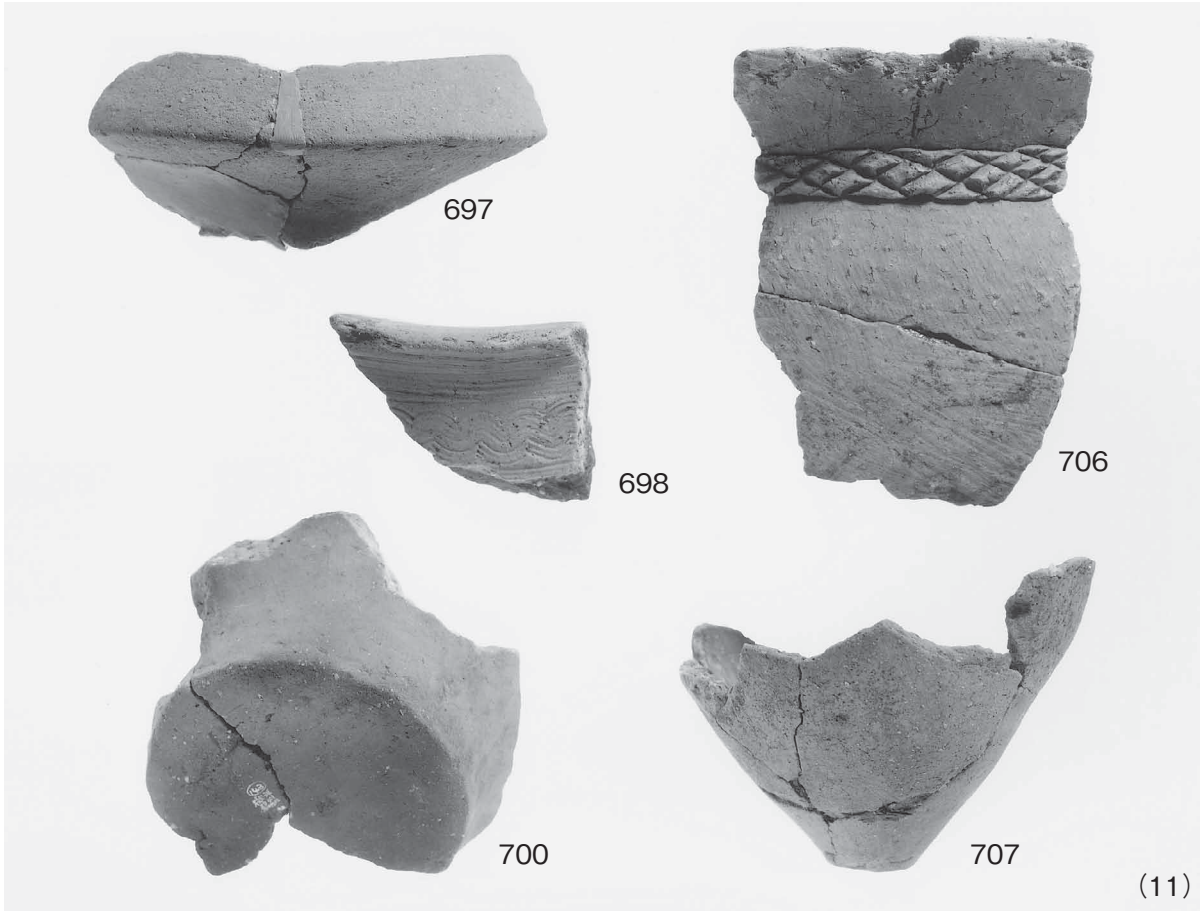




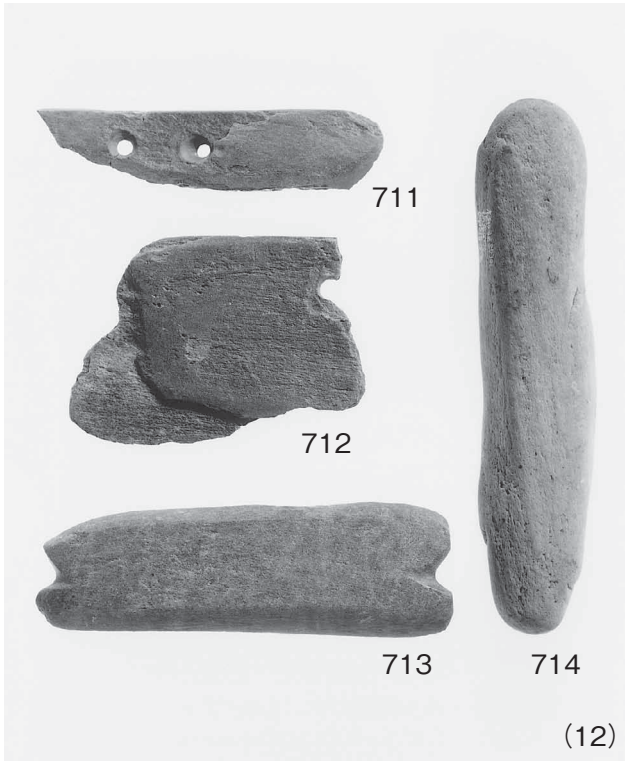
1. 3区出土遺物（SD301）(6)　　2. 3区出土遺物（SD301）(7)
3. 3区出土遺物（SD301）(8)



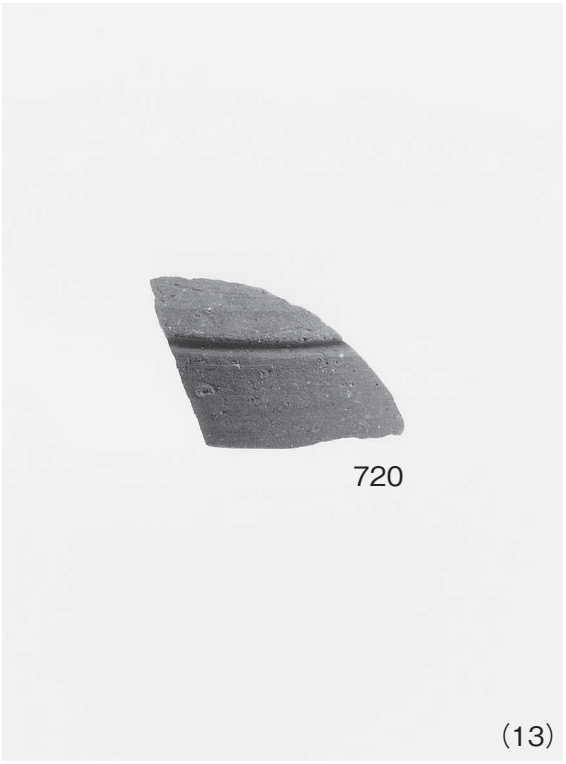
1. 3区出土遺物（SD301）(9)　　2. 3区出土遺物（SD301）(10)



1. 3区出土遺物（SD301）（11）



2. 3区出土遺物（SD301）（12）



3. 3区出土遺物（SD301）（13）

報　告　書　抄　録

ふりがな	えだまついせき
書名	枝松遺跡－７次・８次・９次・10次調査－
副書名	市道中村桑原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第125号
編著者名	相原浩二・大西朋子・武正良浩
編集機関	財団法人　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032　愛媛県松山市南斎院町乙67-6　℡089-923-6363
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
枝松遺跡 ７次調査	愛媛県松山市	38201		33° 49′ 47″	132° 47′ 07″	20021101 ～ 20030330	830㎡	道路建設
枝松遺跡 ８次調査	愛媛県松山市	38201		33° 49′ 47″	132° 47′ 20″	20040202 ～ 20040812	870㎡	道路建設
枝松遺跡 ９次調査	愛媛県松山市	38201		33° 49′ 47″	132° 47′ 12″	20040322 ～ 20040930	490㎡	道路建設
枝松遺跡 10次調査	愛媛県松山市	38201		33° 49′ 47″	132° 47′ 16″	20040802 ～ 20041227	475㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
枝松遺跡 ７次調査	集落	弥生	竪穴住居址	弥生土器	
枝松遺跡 ８次調査	集落	弥生	竪穴住居址	弥生土器	
枝松遺跡 ９次調査	集落	近世～中世 中世 中世	掘立柱建物跡 溝 柱穴	鉄製犂先、土師器 土師器、須恵器	
枝松遺跡 10次調査	集落	中世 中世 弥生	掘立柱建物跡 溝 溝	土師器 土師器 弥生土器、石庖丁	

要約

調査区ほぼ全域でＡＴ火山灰が検出された。桑原地区で行われる発掘調査では検出例は多く、層序及び諸編年資料の基準となるものである。

８次調査で検出された弥生時代後期後半に比定される竪穴住居址SB201と202は構造と遺物出土状況において共通点と相違点が見出され、周囲の遺跡データと併せ今後注目されると思われる。

松山市文化財調査報告書　　第125集

市道中村桑原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

枝　松　遺　跡

－７・８・９・10次調査－

平成20年3月31日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町６丁目6-1
TEL（089）948-6605

財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67-6
TEL（089）923-6363

印刷　岡田印刷株式会社
〒790-0012　松山市湊町７丁目1-8
TEL（089）941-9111